生蕃伝説集

佐山融吉・大西吉寿著

生蕃伝説集

佐山融吉・大西吉寿著

生蕃伝説集

佐山融吉
大西吉寿 著

佐山融吉・大西吉寿著

生蕃伝説集

南天書局発行

生蕃傳說集

佐山融吉
大西吉壽

序

理蕃三十年、初め征御を以てし今は撫育に進む。撫育には各族各社に就て歴史風俗習慣を詳にするの要あり。

新著生蕃傳説集成る。之を閲するに如上の要求は間接に充されんとするものあり。其の

上に全編お伽噺的叙述なるを以てより以上に民族性を發見するを得んか。

我國民性乃至は文明を彼民族に移植するの可能、不可能、及幾許の共通點を有する哉は撫育上、教育上、先づ研究すべき問題たらすはあらず。

今や理蕃窮極の目的に近かんとして努力するの際に在り。彼の研究材料を豐富に寄與するの本書は、余之を推奬するに吝ならざるなり。

大正十二年十月

竹内友治郎識

はしがき

昨年八九月の交です。北部蕃界の旅を終へた私は狭苦しい城南の假寓で同僚の佐山君と話してゐました。蕃界は何うでした。臺灣で蕃界ほど愉快な處はない、蕃人ほど可愛いゝ人々はないと思ひます。かうした事から面白い蕃界の話は綿々として盡きないのでした。そして到頭何か蕃人の事を書かうではないかといふことにまで進んだのです。佐山君は蕃族調査に十年の日子を費し、足跡蕃界に洽く幾度か死生の境に彷徨うて尨大な報告書を成した人じすし、私もやはり蕃人については相當興味を持つてゐるものですから、よろしいそれではやりませうとて餘暇を盜み〳〵倉卒筆を馳せたのが此の書です。

今春畏くも　攝政宮殿下の行啓を仰ぎ、我が臺灣は各方面から餘程内地の人々に紹介されました。蕃人についても「高砂族」と呼びなしてはなどゝいふ位ですから、生蕃を視る眼も大分違つて來たし、蕃人に對する考が餘程變つて來た事と信じます。併し

從來は決してさうではありませんでした。臺灣といへば大抵の內地人士の眼には實に領臺當時のまゝで映りはしなかつたでせうか。殊に生蕃などといふと直ぐ人の首を覘ふ恐ろしい民族であると響きはしなかつたでせうか。しかも歳月は容赦なく過ぎ去り凡ては過去の夢となつてしまひました。

生蕃は決して恐ろしい民族ではなく、寧ろ可愛いゝ同胞なのです。彼等は日本人とは嘗て同祖から出た、そして遠い昔に弓を表物として別れたとさへいつてゐます。彼等は僻陬の孤島に在つて文化に後れた爲に凶蕃となり終つたのですが、敎導さへよろしければ、やはり忠實な弟たりうる事は我が理蕃政策の示す所です。武勇を尙ぶ事、義を重んずる事の穿き違ひさへ匡してやればそれでよいのです。さうです彼の源平時代の我等の先祖、彼等勇敢なる志士は生蕃の馘首と何れだけの違つた事をしたでせう。近ごろ蕃族の慣習や、蕃語の系統、その他蕃人に關する硏究調査が次第に發表されて行くに從ひ、彼等はやがては正しい批判と理解を享ける事が出來ませう。私どもの小さな努力もつまりそれなのです。

生蕃の傳說を通觀しますと、實にプリミテイヴなとでもいひますか、ナイイヴなとでもいひますか、兎に角野趣津々としていひ知れぬ懷しさを感じるのです。併し同じく生蕃といつても南蕃と北蕃とにより、又は土人文化に接する程度の如何によつて多少趣を異にしてゐます。例へばタイヤルやサゼクのものに萬葉の直截雄勁な趣があるとすると、パイワンやアミには新古今の華麗巧緻な風があり、ツォやブヌンのものには古今の優雅平明の調があるのです。八族それ〴〵繚亂たる說話の花を咲かせ宛然として生蕃文化の花園にあるの觀があります。そこに遊ぶ私共は花の美しいのや香の高いのを悉く集めようとしました。併し中には凋れたものや蕾のまゝで摘み取つたものも可なり多い事と思ひます。假令そこには幾多の杜撰があらうとも集め成した花筐は何人かの觀賞に價するものがあるかも知れません。

私は生蕃の傳說は實に世界のどの國の神話傳說よりも面白いと思ひます。それは悉く天眞爛漫なそして一點斧鑿の跡がないからです。無邪氣な彼等は時に思ひ切つて露骨な表現をしました。が併しそれは彼等の伴らない眞情の發露であるだけ眞劍な響を

立て丶ゐるのです。そして我等はそこに單に蕃人としてばかりでなく廣く人間性の何物かを摑む事が出來る。つまり「人」といふものを十分深く考察する事が出來ると思ふのです。しかし私共は此の小著を以て人類學や民族學などに大いに功献しようなど丶大それた望は毛頭持つてゐない。が何れかの方面に多少なりと役立てたいといふ事は寸刻も念頭を離れない考であります。

生蕃の傳説を取扱つたものは從前全くないではありませんが、或は一般的でなく、或は餘り抄錄されてゐたりするのが遺憾なので、本書ではそれ等の缺をも補ひたいと思ふのです。もとより淺學短才な私が遽しく筆を驅つたものですから遺漏や杜撰は決して少くはありません。體裁から云つても文學的でもなく、學術的でもなく、いはゞその中間を夢中に走つたやうなもので自分でさへ慊らない所が多々あるのです。勿論それ等は十分先輩知己の是正を乞はねばならぬこと丶思つてゐます。

しかも無名の著者に對して竹內警務局長閣下、相賀內務局長閣下は特に御多忙中懇篤な序文又は御敎示を賜り、理蕃課長田端幸三郎氏、保安課長能澤外茂吉氏からは

多大の御援助を頂きました。その他博物館の森丑之助氏は有力なる蕃族研究家として深甚な同情を寄せられ、友人鹽月桃甫君は裝幀に挿繪に、蕃界旅行に成る貴き收穫をお分ち下さつた。それから辛島勝一氏、古藤誠助氏、渡邊榮次郎氏、篠原正國氏、中島與一氏、松長精一氏などにはいろ〳〵の御力添を添うしました。何れも著者にとつて身に餘る光榮であります。私は心から御禮を申します。

大正十二年十月

大西吉壽識す

凡例

一、本書は主として生蕃の說話を蒐め、それに平埔蕃及び南洋諸島の傳說を加へたものである。

一、生蕃說話の大部は佐山融吉蕃族調査報告書に是を採り、別に二三の類書を參考した。平埔蕃の資料は殆ど皆舊民政部囑託伊能嘉矩氏の報告に據り、南洋類話は Scott, "Indo-chinese mythology" (The mythology of all races. Vol XII.) 及び Dixon, "Oceanic mythology" (同 Vol, IX)を抄譯した。

一、分類には嚴密な一定の標準がない。例へば神婚傳說を怪異奇蹟の部に入れながら怪婚傳說を情事情話の中に入れたり、樹木傳說や動物傳說が、洪水傳說や化生傳說などと倂しく天然傳說に一括したり、或は同一說話が一二乃至二三箇所に出たり殆ど一定しない。又蕃社口碑の如き一概に云へば悉く蕃社の口碑ならぬはないが、この項には主として蕃社の起原沿革を擧げたもので、いはゞ生蕃の遷徙推移を考竅す

べき資料である。其他猕始原由でも勇力才藝でも神話傳説的考察からいへば慥に分類の適否はある。併し其等は悉く著者の便宜に從つたものである。

一、話者の名は創世神話と蕃社口碑にばかり擧げ他には略した。それは此の二項の中に悉く網羅されてゐるからである。本書は此等多數の頭目有力者の天眞流露な誦述の結晶である。族によつて説話の前後から、或は同一蕃社でも話者によつて多少色彩を異にするものさへ、成るべく多く採錄したのは、やはり話者の熱心に酬いる事もあるが、大體は讀者の比較考察に便にしたつもりである。煩雜だといはれゝばそれまでだが、著者の意のある所は忠實に多くを紹介する事なのである。此の意味に於て「註」の條下を利用しておいた。

一、蕃語は族によつて餘程の變化差異があるし、同族でも社により多少轉訛があるから到底一定する事が出來ない。だから所々に引用した蕃語はやはり一々其社の發音に從つた。必要なものには譯語を附けたが、餘り必要でもなく意味の把捉しうるものには省いた。或は不明であつたり又は他の理由から故意に附けなかつたものもあ

る。それから假字の上に加へた符號は左の發音に該當する。

サ……「ツア」の拗(Tsa)

ソ……「ツオ」の拗(Tso)

チ……「チイ」と「テイ」の中間音(Ti)

一、生蕃は普通七族(タイヤル、ブヌン、ツオ、パイワン、サイセット、アミ、ヤミ)に分けてゐるが、本書ではタイヤルからサゼクを分けて一族とした。實はパイワンからピユーマをも分けたかつたが、それはそのまゝにしておいた。そしてサリセン族といはれたものも皆パイワンに一括しておいたから此の族は餘程廣いものとなつた。平埔蕃もいろ〳〵分類されたが本書では單に東西南北にわけておいた。何しろ平埔蕃の調査が完了してゐないだけ資料の乏しいのが遺憾である。

一、地圖は最初各蕃社名などの入つた詳密なものにする心算だつたが、いろんな故障や事情からそれを止めて餘程簡略なものにした。それも著者自らの作製だから極めて不完全なものたるを免れない。併しこれでも大體の參考になる事と信じる。

一、書名についても臺灣蕃族口碑集とか、蕃族の傳說、生蕃說話、生蕃傳說集二つの太陽、などゝいろ／＼考へて見たが、結局一見して明確にその内容がわかるやうにとて此の名を選んだ。

尤も生蕃といふ語はある意味から云へば慥に穩當ではない。「蕃」は辭書に草茂也とか、與藩通とかいひ、繁衍衆多又は藩屏、藩垣の義とすれば賴もしいわけだが、南夷の稱であり、勇力粗暴の謂なる「蠻」に誤り或はそれに近似して始めて不快なのである。だから蕃屏たる邊境化外の異民族といふ意味に於て何等不都合がない。唯生熟の「生」に至つては問題である。王化の及ぶ所綏服撫化の程度如何によるのだが、四月攝政宮殿下行啓に際しての御優諚や、今秋帝都の大震災に對する蕃人の道義的行動から見ても、彼等は既に所謂生蕃ではない。況や普通行政地に入れるものさへあるのだから、今や生熟の差別も或は不要である。併し名稱は兎に角我等の彼等に對する感情や、彼等自身の文化が改まらねば、折角名稱や文字を改めても僞である。著者は生蕃といふ文字を何等輕蔑の意味に使つてゐない、否寧ろ云ひ慣れ

たこの語から、天眞爛漫な率直無邪氣な人々を聯想する事に一種の懷しみをさへ感じる。のみならず何よりも生蕃とか蕃人とかいはれた人々が、此の如き立派な神話傳說を持つてゐる事を誇るために、云ひならされた此の語に多少の執着までも覺えるのである。これ直ちに「高砂族」とまでいひ換へる勇氣に缺けたわけである。そして平地の蕃族に對してのみ特に熟蕃といはずして廣い意味で平埔蕃といつておいた。

併し生蕃といふのは綜合的には決してよくはないし、彼等蕃人も此の名稱を面白く思はないのは事實である。此の意味に於てやはり蕃人とか蕃族とかに改めた方がよいと、警務局長を初め理蕃關係の方々や、その他一二の人々から注意を頂いた事を感謝します。幸に改版の運びにでもなればいづれ何とか適當な名に改めたいと思ふ。

生蕃傳說集

目次

第一　創世神話

アミ族…………一
ヤミ族…………一八
パイワン族…………一九
サイセット族…………二一
ツオ族…………二三
ブヌン族…………二五
サゼク族…………二七
タイヤル族…………三〇
平埔蕃…………三二
ハモ神…………三四

第二　蕃社口碑

タイヤル族…………三六
大料崁蕃…………三六
合歡蕃…………四〇
マリコワン蕃…………四七
北勢蕃…………四七
南勢蕃…………五〇
ハック蕃…………五一
シカヤウ蕃…………五二
サラマオ蕃…………五三
萬大蕃…………五四
メパラ蕃…………五六
南澳蕃…………五七
溪頭蕃…………五八
カラパイ蕃…………六一
パスコワラン蕃…………六三
シヤカラウ蕃…………六四
ロクヂヤウ蕃…………六六
汶水蕃…………六八
太湖蕃…………六九
屈尺蕃…………七〇

キナジー蕃……七一
サゼク族……七四
霧社蕃……七四
タウダア蕃……七五
トロック蕃……七七
內太魯閣蕃……七九
外太魯閣蕃……八一
タウサイ蕃……八二
パトラン蕃……八三
木瓜蕃……八四
ブヌン族……八五
巒蕃……八五
タケバカ蕃……九〇
丹蕃……九四
郡蕃……九七
干卓萬蕃……一〇〇
卓社蕃……一〇三
ツオ族……一〇四
阿里山蕃……一〇四
カナブ蕃……一一三

四社蕃……一一八
パイワン族……一二四
卑南蕃……一三四
太麻里蕃……一四一
巴塱衛蕃……一四三
ルカイ蕃……一四四
フチョル蕃……一五四
潮州蕃……一六四
枋寮蕃……一六六
スポン蕃……一六七
オポオポヤン蕃……一六八
サプデック蕃……一七一
パリヤリヤオ蕃……一七三
サイセット族……一七九
アミ族……一八一
里漏社の船……二三三
ヤミ族……二三五
平埔蕃……二三九
北部平埔蕃……二四〇
西部平埔蕃……二三九

東部平埔蕃……二四一
南部平埔蕃……二四五

第三　擲始原由

祭祀……二五〇
厭勝……二五三
チカワサイの祖……二五四
火の起原……二五六
燧石……二六〇
馘首……二六二
馘首の禁……二七四
刺墨……二七五
狩獵……二七七
女子出獵の禁忌……二七八
獸の始……二七九
穀物の由來……二八三
粟酒……二九〇
ワリシパット……二九一
煙草……二九一
交易……二九六
武器……二九六

……二九七
鍛冶……二九八
鞣法……三〇〇
製鹽……三〇二
土器……三〇三
籠造り……三〇四
舟筏……三〇五
機織……三〇六
蛇模樣の話……三〇六
麻絲の傳來……三〇七
鳥追ひ……三〇八
壽命の話……三〇八
便所の事……三一五
血族相婚の禁……三一六
交道……三一三

第四　天然傳說

自然現象……三二六
洪水……三二六
地震……三三四
山崩……三三五

豪雨……三三六
虹……三三六
風……三三八
風雨雪……三三八
雪……三三九
雷電……三四〇
日月……三五〇
月中の黒影……三五二
星辰……三五五
七星……三六六
明星……三六八
夫婦星……三六九
卑南渓……三七〇
大武山と霧頭山……三七二
山……三七三
平地……三七四

植物に關するもの

霊樹……三七四
木精……三七六
茄苳の血……三七七
榕樹の根……三七七
大樹……三七八
檳榔とピラ……三七九
榛椰子……三八一
松……三八二
山芭蕉……三八三
甘諸……三八四
カツメ草……三八五
栗の王将……三八六
栗……三八七

動物に關するもの

シレク……三八九
カイツピチ鳥……三九三
トウトゥノ鳥……三九四
ピヂツ……三九五
ラリヤパン鳥……三九七
青鳩……三九八
プガチ鳥……四〇〇
オワァオ鳥……四〇二
コワオ鳥とタンキロツ鳥……四〇二

鳥……四〇三
ブンナイ鳥……四〇五
鷲……四〇五
鷹……四〇八
鳶……四一〇
イシココ鳥……四一三
パットス鳥……四一二
トルフイとガガイ……四一四
鷄……四一六
リナス鳥……四一六
ルルピン鳥……四一七
キキリン鳥……四一八
テクヲシ鳥……四一八
カカガン鳥……四一九
比翼鳥……四一九
鳥の羽毛……四二〇
猿……四二一
猿飼ひ……四三二
犬……四三三
犬の助言……四三四
犬の舌……四三五
猿と穿山甲……四三七
山猫と穿山甲……四四七
兎と穿山甲……四四八
猪……四四九
猪と豚……四五二
猪の腸……四五三
鹿……四五三
兎と鹿……四五五
羌仔と鹿……四五六
鹿の毟毛……四五六
花鹿……四五七
山羊……四五八
豹……四五八
豹と熊……四五九
熊の骨……四六六
鼠……四六七
鼴鼠……四七〇
蛇……四七一
大蛇……四七二

青蛇……四七二
蛇占……四七四
螢……四七五
蟬……四七六
蜂……四七六
蜜蜂……四七七
蚤……四七八
虱……四七九
虱買ひ……四七九
蚤の殺人……四八一
南京虫……四八一
南京虫造り……四八四
穿山甲……四八五
ゲヂヂョ……四八五
蚯蚓の糞……四八六
蜥蜴と蟹……四八六
蜥蜴と蝦……四八七
蟹……四八八
龜……四九〇

第五　勇力才藝

太陽征伐……四九二
月輪征伐……五一五
アヤタメの話……五二〇
イルルン社の英傑……五二七
カラペアトの遠征……五三四
アケエヤムウムア……五三九
蛇の子……五四二
山幸……五四四
ソオエイの話……五四五
アウイランゲ……五四六
ロブゴツの話……五四九
大凧……五四九
大南社の勢威……五五一

第六　怪異奇蹟

雷神キワイ……五五二
ポトンリナマイ神……五五四
イドク神……五五七
イロク神……五六一
チアウダイ……五六四
リワイナピラ……五六八

芭蕉になつた嫁……五七〇
天少女……五七二
龍女……五七三
不思議な棒……五七五
タプタベラスの祖先……五七六
二神の奇遇……五七七
エゴフツ神……五七八
昇天……五八〇
尾ある人……五八一
地中交通……五八二
ラウリヤンの話……五八四
鯨に呑まれた男……五八八
イツの話……五八九
女護島……五九一
湯氣の國……五九五
女人社……六〇〇
イミンマツカツの話……六〇六
マツクイの話……六〇九
妖怪の手……六一〇
生首……六一〇
焼芋の行方……六一一
獸の怪……六一二
鹿の骨……六一四
サリクの話……六一五
怪物一束……六一六
怪力……六二一
塔山の白石……六二二
妖怪の求婚……六二三
亡者の話……六二四
靈火……六二六
怨靈……六二八
親子の爭鬪……六三一
タナオホノク……六三三
カイシナピラ……六三四
鉢卷の怪……六三五
天を射た話……六三六
熊に攫はる……六三八
ササウジヤジヨイ……六三九
ヤロポンゴロス……六四〇
サウリバンアポラル……六四一

靈蛇……六四三
蛇食ひの話……六四四
蛇に呑まれた少女……六四六
蛇の子物語……六四七
サゴアナの話……六四九
大潭……六五一
靈池……六五二
蕃王……六五三
田螺の美人……六五四
ルパへの話……六五六
或少女の話……六五八
天助……六六〇
小人の話……六六二
巨人傳說……六六六
ピツワカの話……六七〇
天地の交戰……六七〇
風婆……六七一
猿の箕……六七三
歩くタウカン……六七四
神通の世……六七六
木材の憤怒……六七八
人食ふ犬……六七八
寢臺の杙……六七九
河狩の怪……六七九
首男……六八一
骨人……六八二
畸形……六八二
サルムッツの話……六八三
蘇生……六八四
ピナナゼパン……六八四
姙婦と韮……六八五
奇人……六八五
不思議なオクラオ……六八六
糞喰ひ小僧……六八七

第七　情事情話

兄妹相婚……六八八
イワタンの話……六九〇
妻覓ぎ……六九二
樫の木と榛の木……六九三
老翁の戀……六九四

比翼池……六九五
サウラルヤンの話……六九七
嫉妬……六九九
大陽物……七〇二
小陰部……七〇六
恐ろしいピッピ……七〇七
陰部の位置……七〇九
プラス交換……七一〇
ダングルの話……七一一
珍らしい禁令……七一二
涙川……七一三
粟播祭哀話……七一四
男孕む……七一五
猿の情人……七一六
犬と契る……七一七
豚と交情……七一八
猪と淫婦……七一九
熊に戯る……七二〇
鹿の情婦……七二二
鼠と契る……七二三
鳩を愛する男……七二四
鮒の色男……七二五
蛇性の淫……七二六
蛙の化身……七三〇
蜂の求婚……七三一
蚯蚓と娘……七三三
惱める女……七三四
薯を弄ぶ娘……七三五
芭蕉の幹……七三六

第八　南洋類話

ポリネシア……七三八
創世神話……七三八
太陽と月……七三九
天地の交會……七四〇
太陽征伐……七四一
火の話……七四二
ヒクとカウエル……七四二
ミクロネシア……七四四
開闢……七四四
火の話……七四五

メラネシア……七四五
世界の始……七四五
月の模樣……七四八
日月の話……七四九
火の話……七四九
若返り法……七五〇
食人鬼の話……七五〇
羽衣傳說……七五一
女護島……七五二
鼠と水雞……七五四
タガロとメラグプト……七五四
オーストラリア……七五五
人類の始祖……七五五
太陽の話……七五六
月の話……七五六
火の話……七五七
死の話……七五七
七少女……七五八
熊の孤兒……七五八
食人鬼……七六〇

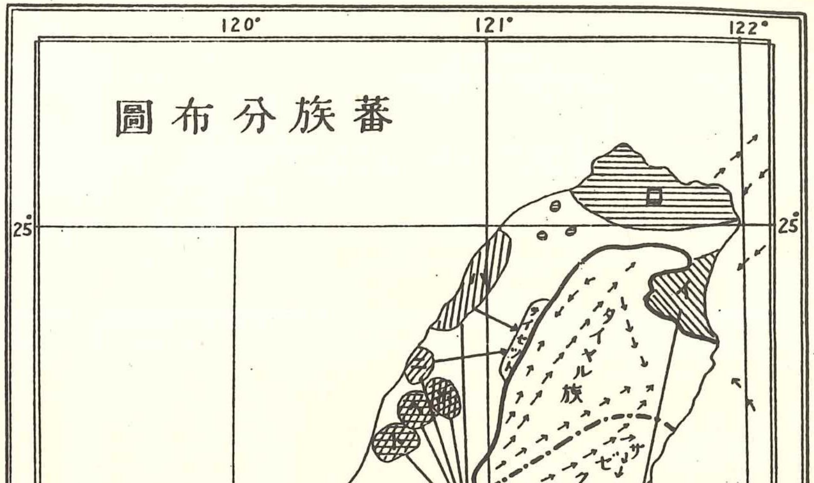
インドネシア……七六一
創世話……七六一
月中の黑影……七六六
洪水の話……七六七
火の話……七六八
猿と鱶……七六九
猿と青鷺……七七〇
猿と龜……七七〇
首狩の話……七七三
蟹の話……七七四
天女……七七四
猪と契る……七七五
地中の王……七七五
蜂の美女……七七六
食人鬼……七七七
孤兒の話……七七八
印度支那
壽命の話……七七九
龍女傳說……七八〇
蛇の卵……七八一

挿畫目次

太陽征伐（六度摺）……口繪
蕃族移動分布圖……口繪
スラとナカヲ……二
霧社の靈樹……七四
蛇と太陽……一六〇
馘首の由來……二六四
白鹿を追うた話……三〇四
榕樹の根……三七八
テボラン夫婦……四二〇
女護の島……五九二
妹と兄の話……六八八
鹿の情婦……七二二
大洋洲諸種族分布圖……七三八

2

裝幀並に挿畫……鹽月桃甫



蕃族分布圖
120°
121°
122°
25°
24°
23°
22°
ロ
タイヤル族
ブヌン族
アミ族
パイワン族
ヤミ族
熟蕃族名
(イ) クヴァラワン
(ロ) ケタガナン
(ハ) タオカス
(ニ) パゼッヘ
(ホ) ヴゥプラン
(ヘ) アリクン
(ト) ポァヴォサァ
(チ) ロッア
(リ) シラィヤ
(ヌ) マカタッオ

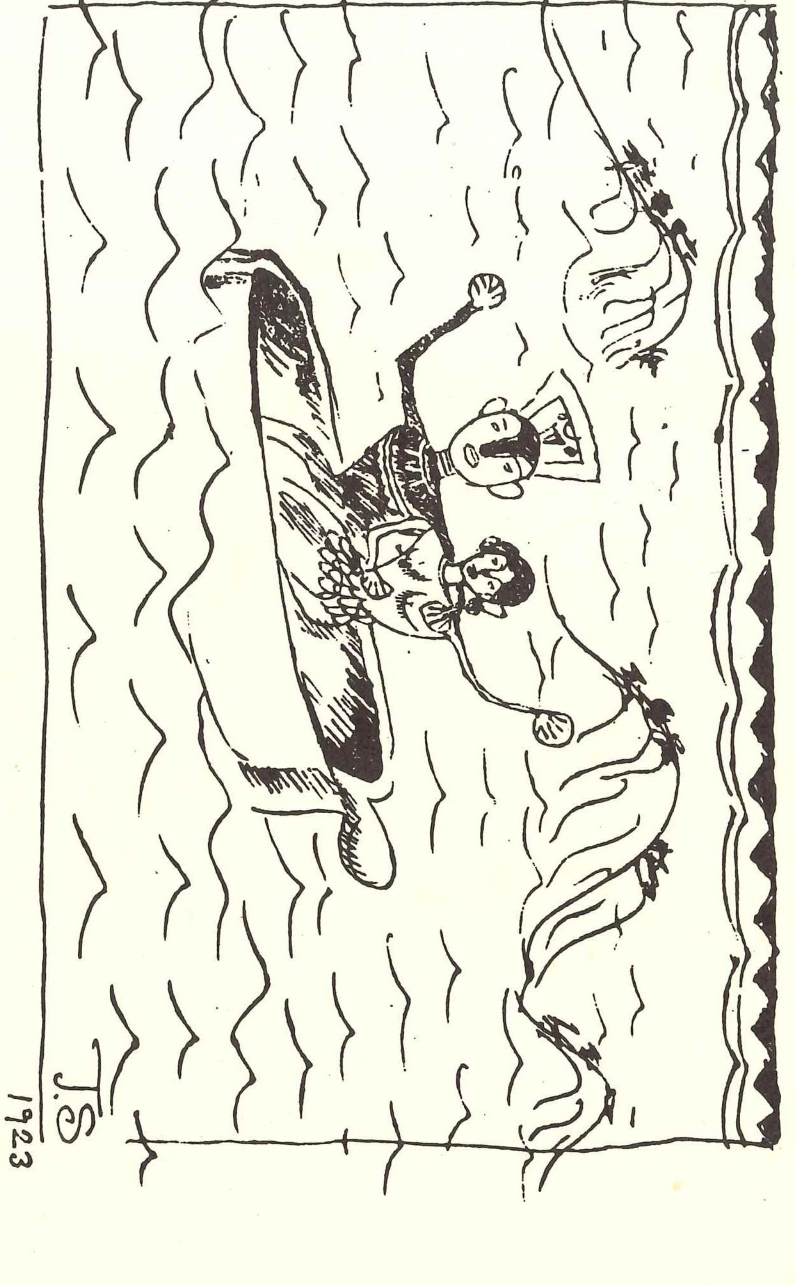
生蕃傳說集

佐山融吉
大西吉壽　共著

第一　創世神話

アミ族

太古天地が未だ混沌として溟涬(くゝも)つてゐた頃、カクモダンサパトロク、ブダイハブといふ妹脊二柱の神がおはしたが、或時スラ(男神)ナカヲ(女神)のみ子を牽ゐ「タウラヤン」(タッカイの西タピラ溪の上流地)といふ所に降臨し給うた。そして二神は携へて來られた豚と鷄とを大事に飼養して居られた。所へ偶々カビト、アカといふ二神が何處からか現れて「タウラヤン」の邊に鹿を狩りつゝカクモダンサパトロク神の住居を過ぎられたが、ふと豚



と雞が飼ひ馴らされてゐるのを見て大いに喜び、どうかして讓り受けんものと直ぐに進み入つていろ〳〵懇願せられた。然しながら之を失くしては他に代るべきものもないので、男女二神は堅く拒んで與へられなかつた。そこですげなく拒はられた二神はどうかして腹癒せをしたいものだと、早速大聲をあげて海の神マハハン、マリヤリ、マリモカン、コソマトラの四神を呼びサパトロク神を亡きものにしたいと賴まれた。海神たちは武勇の勝れた二神の依賴なので、快く承諾していはれるやう、「今日から五日の後、月がまん圓くなつた日に、海は屹度『カグン、カグン』と鳴るでせう。その時汝(いまし)二神は逸速く星のある山を目がけてお逃げなさい、よろしいか」と。二神は大喜びで海神たちの言葉に從ふ事になつた。

五日目の事である。彼のカビト、アカ、の二神はまだ潮鳴りのせないうちに、星の輝いてゐる山をさして逃れ漸く山頂につかれた頃、果して海は俄かに鳴り始め巨濤見る〳〵高まつてサパトロク神の住居は忽ち水底に沒し去つた。餘りに不意であつたから、サパトロク、ブダイハブの二神は梯子によつて辛うじて昇天せられたが、咄嗟の場合と

て二子を伴ふ暇もなかつた。危難を逃れられた後、み子達の見えないのを心配せられ、天地に轟く大音聲で呼び探されたが、一向應へるものもないので心ならずもその儘に過された。

カビト、アカの二神は海神を頼み折角海嘯を起したが其效なく、四神は何所ともなく逃げ去られたので、遺恨やる方なく其の跡を追はせようとて、水を四方に流しやられたが、如何した事か水は北方にばかり傾き、一時にどつと流れ落ちたので、山も林も悉く倒れ伏し一面の平野となつた。今の花蓮港の平野は此の時に出來たのである。

一方み子神スラ、ナカヲは俄かの洪水に親神たちを見失ひ、庭にあつた「ドウダン」(臼)に乘つて渺漫とした濁水を切りぬけ漸う「ラガサン」といふ山に漂著せられた。數日の後さしもの大水も退いたから、親神を慕ひ元の「タウラヤン」に歸られたが、あたりは一面の荒野原となり二神の影さへ見えないので、泣く泣く「ラガサン」に歸りこゝに新しい住居を營まれたのである。

「ラガサン」には神といふ神もなく、只兄妹の二神ばかりであつたから、遂に禁を破

り「ミトノマグハヒ」して夫婦となられた。それでも猶ほ神罰を怖れて胸や腹を直接に觸れるやうな事はなく古い蓆に孔を穿つたものをお互の隔てとして居られた。これが人類の祖である。かくてナカヲは人間として始めての子を孕んだから、身體を大切にしてゐたが、何うした事か顏が一面に腫れ上り痒さに堪へられない。わけて耳の中が餘りに痒いので、或日爪で掻くと中から丸い小粒のものが現はれた。不思議に思つて地上に投げ棄てると、忽ち芽が出て間もなく美しい實が結んだ。其れが人類の食物―粟―であつた。それから暫くして男子が產れ、タパンマスラと名づけられた。かくて長女タハツル、次男トマイマスラ、三男サラパナハイ、二女ナカワルンの子女が次ぎ〱に生れたのである。

或時家族打ち集ひ、熟した粟を煮て見ようとて、一粒を釜に入れて炊いたが粟が餘りに膨れて釜を破つてしまつた。そこで一粒を二分して煮ると、粘りのある甘い粟飯が出來て家族一日の食に足りた。ナカヲとスラはかうして安樂に生を繫ぐことが出來たが、まだ祭祀の儀式を知らないので、何時か粟も絕えるに違ひない、今の中に祭の

式を敎はり、穀神に感謝せねばならぬと考へたから、直ぐにタパンマスラ、トマイマスラの二子に命じて、梯子を造り天に昇り、祖神の敎を受けしめた。

天に在した祖父母の神は、下界から昇つて來た二人の若者が、「ラガサン」に移つた愛子の子供たちである事を知つて、流石に恩愛の淚に咽ばれたが、來意を聞いて大いに喜び、詳しく大御手振りを傳へられた。

粟播祭（マサウマノリシン）

初日　パコ
二日　ミサリシンタロアン
三日　パララン
四日　ミサアラピ
五日　パブルン
六日　ミトルドイ
七日　パカラン

八日
九日 パカチダル
十日

サパラサン

下界では敎へられた順序によつて粟播祭を行うたから非常な豐穰であつた。そこで再び粟刈祭の儀式をうけさせた。

粟刈祭(ミハバイノリシン)

初日 ミパコリシン
二日 ミカラホク
三日 ミダサ
四日 ミロエ
五日 ミサブラチ
六日 ミトウガダイ

七日 ミハバエ
ミナアン
コムリツシ

兄弟は其後「イリシン」の行事を聴くために三度昇天した。

正月祭(イリシン)

初日 ミサモ
二日 パダツプ
三日 ミサロコ
四日 タラバヲル
五日 パコモダン
六日 ミアドツプ
七日 ミタブシ
八日 パカラン

以上は三大祭だが尚一年中には次の祭も必要だからとて授けられた。

ミササバク
初日　ミサブダワン
二日｝バコモド
三日
四日　ミトノ
五日　バカラン
ミサバラサン
初日　ミサモ
二日　ミヤドップ
三日　バカラン
ミサリボン

かくてスラ、ナカヲの子孫は年と共に繁殖したが、或日數人の孫たちが嬉々として

庭で遊んでゐたのに、俄かに皆死亡したから、兩親等は嘆き悲んでその原因を占ふと、天が餘りに近いからだと判つた。そこで大急ぎで鳥類を呼び集め、天を上げようと計つた。その時「テクラッ」(竹雞)が高慢な口ぶりで、「見よ、今すぐ天をあげて、御身等の望を果そう」といつて、翼を廣げ地上から飛び上つたが、天は依然として人の頭を壓するやうであつた。次に「リドウプ」(鳶)が試みたが亦果さなかつた。三番目には鳥が來たが、前者の失敗を見て唯「アクアク」と啼いたばかりである。最後に「タタチユ」といふ鳥が、翼と尾とを活潑に動かし、「タッチユ、タッチユ」と渾身に力を籠めて鳴いたから、天は次第〳〵に高く〳〵上つて行つた。人々は大いに「タタチユ」の功を賞めた。それから「タタチユ」は勢力を得、鳥類の王となつたのである。今に此の鳥の聲を聞く時は他の鳥が懐ひ戰くといはれる。それ以來は實に平穩無事で、人口の増殖が益々盛であつた。

奇密社　タアエ・カヅウ

古昔マダピラ、その妹リスンといふ二柱の神が在したが、南の國原に聳えてゐる「アラバナバナイ」山に天降られ、男神ラキヲロ、タデアボ、アボトク、ララカン、女神ロチエ、テヤマ「サンと六柱の御子神を產まれた。ところが母神が弟媛テヤマ「サンを懷姙せられた時、腹中に光るものがあつて體內も透き徹つて見えたが、生れ出られると天地に輝く麗しい女神であつた。

或日姫神が一人で清水を汲みに行かれると、途中でブララカスといふ神に遭つた。彼の神は、「自分は海神の使であつて、汝を妃に迎へようとて來たのです。今から五日後に再び來ますから、其時に愈々海神の宮にお伴しませう」といつて何處ともなく飛び去られた。これを聞いた姫神は驚き歸つて其の旨を談られた。すると親神だちは大變に心を惱まされ、堅固な箱を造づて姫神を入れられたが、靈光が箱を透き通した。そこで三重四重に包んで見たが、やはり燦爛とした光が眩ゆい位、そこで遂に地を深く掘つて埋められた、併し晃々と光り輝く靈光は隱さん術もなかつた。

その中ブララカスの來る日となつた。親神の心配は一通りではなかつたが、夕方まで

は何事もなかつたから稍々安心せられたらしく、ロチエ、ララカン、の兄妹の神は庭で粟つきを始められた。噫！、併し臼に觸れる杵の音が四方に響くと、一天俄に曇り疾風が吹起つて樹梢が騷ぎ出した。と轟々と物凄い音を立て丶山のやうな大波が南方から寄せて來る。そして見る〳〵凡てのものを押し流してしまつた。幸に親子五柱の神だけは山上に逃れられたが、遂にロチエ、ララカンのみ子たちが見えないし、地に隱した弟媛は如何せられたかと見渡されると、たつた今テヤマ「サンが海神に伴はれて波の上を行かれるのである。神々は流石に泣き悲しまれるのを、姫神は慰めて、「此の上は共に棲む事は思ひも寄りませんから、せめてこれを形見に參らせませう」とて、片腕を切つて海中に投げられると、忽ち化して「ルノン」といふ魚となつた。次に米の糠を散らされると忽ち「ブダウ」といふ魚となつた。更に言葉を續けて「天に電光の見える時は、妾が米を搗いてゐるのだと思つて下さい。そして雷鳴は杵の音ですから」と言はれると見る〳〵輝いた姿は遙か彼方に隔つてしまつた。

それでも水は退かないばかりか、益々增えるばかりで世界は一面の泥海となりはし

ないかと思はれる位であつた。神々は山又山と別け入られたが、先づラキヲロが疲れて一歩も進めぬと腰を下される。仕方がないのでそこに止めて更に北進し「タキデッシ」に行かれると、又殘る御子たちも疲勞せられたからそこに止められた。それでも親神ばかりは心細い旅を續けて北へ北へと進まれたが、その頃漸く海嘯もやんだから山を下り低地に出られた。すると今迄の疲れが一時に出て來たので、暫しそこに佇んであの恨めしい海水を眺めて居られると、その儘アロガイ（鵠）となつて九天高く翔つて行かれた。鵠は二神の化身で今でも二羽で舞ふのである。そして彼のラキヲロはブヌン族の祖となられた。「タキデッキ」に止まられた二神の事は傳らない。

さて又ラランカンとロチエは洪水の時、ドダン（臼）に乘つて「ラガサン」といふ山に漂着し、そこに住居を定め人間の創造に力められた。最初に生れ出たのは蛇であつたから驚いて叢に捨てた。次に生れたのは四足で飛び跳ねる蛙であつた。これも駄目だと家の側に捨てた。二人は落膽して居られると、此時「チユチユホチダル（太陽神）」が下界を見下して、「異樣な臭がするのは何か變つた事があるに違ひない、人間でも居るのではない

か、汝見て參れ」とて、御子タタクサンフチダルといふ神を遣はされた。俄かに天降つた神を見て、兄妹二人は罪を懼れて逃げようとする。それを制めて神は、「吾は母神（太陽）の命によつて汝等を見に來たのだ、懼れる事はない、名は何といふか」と問はれた。「神マダピラの子、名はラランカン、妹ロチエ」と答へた。神は又「子供は」と尋ねられたから、ラランカンは「人間を産まうとして能はず、蛇と蛙を生んだ」とて蛙を示した。

タタクサンフチダルは天に還り、詳細を母神に告げられると、太陽は不憫に思召し再び御子神を遣し、兄妹を慰め更に守護神を下す事を約せられた。かくてサヲリカヲホチダル、サラランツアランチダルの二神を遣はされた。二神は一節の竹を携へて天降り、兄妹を召して來意を告げ行事を習はせられた。卽ち天上より將來された竹を二つに割ると、中から赤ちやけた白豚が出た。その豚を屠つて肉を三分し、一を神に捧げ、一を夫婦に與へ、一を天上に持ち歸る事と定め、歌へよ舞へよとて神人融合の大舞踏を行はれた。踊り終つてから神が告げていはれるやう、「今度こそ人間が産れるだらう。最初は女である、其子をチエチエホチダルと名付けよ。次に產れる子が若し女

ならばラリカヤンチダル、男子ならばタダフチダルと名づけよ」と。果して次々に人間が生れた。次子は男であつたから命のまにまにタダフチダルといひ、三子は女であつたからラリカヤンチダルと呼んだのである。

程へて太陽のみ子タタクサン神が降つて來られ、「子が産れたか」と問はれた。二人は三子をあげて、名は皆神の御告の通りにしたが、其後は絶えて子が産れない事を答へた。神は滿足げに聞いて居られたが「最初蛇や蛙を生んだ穢れで、最早子は生れないだらう。併しこれから子孫繁殖するだらうから、次には種々の物を傳へよう」とて昇天された。それから「ウワデハウエノチダル」(芭蕉)、「ウクラウノチダル」(蕹)、「ウルパイアウノチダル」(大竹)(茅)、「ウカライカイノチダル」(籐)、「ウハラウハウノチダル」(竹)、「ウチリビダウノチダル」(女竹)、「トミツミツノチダル」(茅)、「ウサロワセノチダル」(生薑)等を授け、耕作法、粟播の順序、厭勝の術まで敎へられたのである。

太巴塱社 頭目 ラタパベ
副頭目 カテタボン
老蕃 ロークリユー

太古アボクラヤンといふ神が、本島の東海に在つた「ボトル」こいふ一孤島に降臨せられた。ところが一條の細流を挾んで、同じく天降つた女神があつた。御名をタリブラヤンと申した。二神互に言葉を交し心に適つたので同棲せられた。

ある時不圖籐を樹の枝にかけて引つぱられると火が燃えて幹を燒いたから、それを枯枝に移し取られた。これが火の始めである。かくて二神は薯を燒かうとして、火の側に蹲踞(うづくま)られると男神の下腹から長く突き出たものがあるのに氣づかれた。それで女神の方はと見ると凹んだ所を持つて居られる。不思議に思つて居られるところへ「ホワツク」(鶺鴒)鳥が二羽飛んで來て尾を振つたから、二神は初めて遘合の道を知られた。

それから間もなく多くの子孫を得られたが、一孤島「ボトル」ではいろんな不便があつた。或日「アボクラヤン」の山中を歩いてゐられると、大木があつたから、これを船

馬於文社頭目 マヤウロー
沙荖社頭目 サフツクワル

として海を渡らうと思はれた。そこで女神タリブラヤン、御子テポスラヤン、媛神バサウラヤンを伴つて船出せられた。

船は西に進んで「カワサン」といふ所に著いた。上陸せられると、そこは荒ぶる神達が占據してゐたから、更に北方に船出して「タラロマ」（花蓮港附近）につかれたが、此處もよろしくないとて、又船を進めて「タキリス」（宜蘭の南方）といふ所に上陸せられ、そこに住まれる事となり、持つて來られた薯を栽培せられた。するとその邊に「パナイ」（米）や、「ハバイ」（粟）が野生してゐたから、その穗を摘んで味はゝれると、大變美味だつたので、竹と木で鍬を造り、土地を耕してその種を植ゑつけられると、年々增えて今日の米や粟となつた。

これ等の諸神から次第に子孫が繁殖して行つた。そして海岸一帶に分布するやうになつたのである。

海岸蕃　姑仔律社（くらる）　アサ

諸神系圖

○チラル／プラツル ― カペ（男）／ドギ（女） ― アヤラウ／アナボヤウ ― デチル／チバエチハエ ― チヤカ／トラハラ ―

ボテリ／タルガラヲ ― ビワサヲ／ロシシダヲ ― ［サ］［サ］ラバン／ルナアワイ ― アタラアイ／ロ［サ］カサヲ ― オレケ／リナマヤヲ ―

マヤウカカラワン／ウナクカカラワン ― ララダイ／リガバダウ ― タトホマスラ／タパンマスラ ― マスラボイス／シリンマカワス ―

マカワス／［サ］ラヲバガバガヲ ― マヤヲバカバガヲ／コガラ ― ルゴスアウリン／ポガルハルカン ―

テアマサン（女）／ピリカラヲ（男）／マロキロク（女）（以上諸神カラヲにあり、紙曰 此の時大洪水、二神「ドゥラン」に乗り ［サ］ツラアン山に逃る、後タコモに移る） ― トロブ（男）／マライコラツ（女）（馬太鞍に移る）

ホナホンサパトロク／チガチガヲサパトロク ― カロモダヌチラル／アダワンチラル（シカワサイの祖） ― タタコサン／ラパチゴチエ（人代の始）

ツボル／オドホツル（シカロサイの儀式制定） ― アガハダ／カワハアダラ ― ドコイソロル／ネイ ―

ウドホツロル／バラバワン ― タイモアポロツル／ボサイアボロツル ― ナカヲスガツト／ブサイスガツト ― アガホソロル／バラハンボダイ ―

リマン
ヲロ　｝頭目の名稱起ろ、以下略

ヤミ族

馬太鞍社　タガドウカロ

上古國土の稚い頃の事、「パプツト」といふ山（現今のイマツルツル社東南に在り）ばかりが一きは目立つて高かつた。此の山の中に素晴しい大きな巖があつたが、或日天地も覆るばかりの大音響が轟き渡ると、さしもの巨巖がまつ二つに裂けて、中から一人の神人が現はれた。それから間もなく大海嘯が起り怒濤天に冲してゐるうち、一つの大波がルルサツク（イマウルツル社西南）といふ海岸に蔚々と茂つてゐた竹藪に打ち寄せるよと思ふと、忽ち大竹が割れて又一人の神人が出て來た。共に獨生の男神であつて、迯に親しく往來してをられた。ところが或日何氣なく枕を竝べて臥してをられる時、二神の膝頭が相擦れた。すると不思議な事には、一人は右膝から男を生み、一人は左の膝から女を生んだ。この男女が人類の遠祖である。

イマウルツル社　頭目

パイワン族

昔「パナパナヤン」といふ所にヌヌラオといふ女神が出現せられて、其の右手には石を持ち、左手には一本の竹を持つて居られた。女神はやがてその石を投げられると、石が割れて中から一人の神人が現れた。これが後に馬蘭（はらん）社の祖となられたのである。次に竹を地に樹てられると、上つ節からはパコシセルといふ女神、下つ節からはパコマライといふ男神が現はれた。この二神が卑南（ぴゆうま）社の祖神なのである。二神の間にパロガオ（彦）パカスカス（姫）の二神が生れ、その裔にラオラオイス（男）、ソラガオ（女）といふ神があつた。此の二神のみ子に又パロガオ、パカスカス、パコラシ、パラピの男女四柱の神があつた。そしてパラピ（男神）がパコラシと婚して生まれた神々は、從前

の諸神とは稍々趣を異にしてゐた。そして容貌も人間らしくなつたから、これからが普通人代といふのである。

卑南社　ピゴル

太古「チヨカボロガン」といふ高山の頂に、太陽が降つて來て紅白二つの卵を生んだが、「ブロン」といふ靈蛇が熱心に孵化してゐると男女の二神となつて現れ出た。男神をボアボーラン、女神をヂヤルムジユルといふ。此の神の裔が頭目家となつたのである。そして蕃丁等は「リライ」といふ青蛇の卵から出たものである。

上古は天地の距離が非常に近かつたが、或時太陽が下界に降りて來て、今の「ロバニヤウ」家の軒下に當る所へ二個の卵を產んだ。その卵が孵化してナマダウといふ男神と、ナウマテといふ女神になつた。男神が女神に向つて、人を作るやうにといはれると人が出來、犬をと望まれると犬が現れた。かくて萬物は悉く此の二神によつて造られたのである。

チヨアチヨコ社　レマシヤン
オアルス社　頭目
チヤヂヤプス社　頭目

昔「ピナバオカサン」といふ所に一本の竹があつた。其の竹の中から靈蛇が現はれ、間もなく化して二人の男女となつた。此の蛇神がサマバリ、ササブヂヤウの二子を產んだ。これが人間の始めなのである。此の頃神通力をもつた海老がゐて急に洪水を起して攻めて來たから、一時は苦境に陷つたが、やがて神助があつて退水し世界も平穩になり、萬物も次第に創造せられ、人類は益々繁殖して行つた。

アツダス社　オリウルブサマン

サイセツト族

太古神によつて創造せられた人間が、まだその最初の土地にさゝやかな聚落をつくつてゐた頃、俄かに大洪水が起つて人々が四方に離散してしまひ生死の程も判らなか

つた。此の時一人の男が機胴に乘つて漸く「シルビヤ」山に漂著した。危い生命を拾つて喜んでゐると、その山にオッポエホボンといふ神があつて忽ち彼を捕へた。神は大洪水のために人類が絶滅しはしまいかと懼れてゐた所なので、早速此の唯一の生存者を打ち殺しその肉を細斷し、口に呪文を唱へつゝこれを海に投ずると悉く人間となつた。これが我等の祖先で神はそれを「サイセット」と名付けられた。次にその腸を截つて投げると同じく人間となつた。これ即ち臺灣人の祖先で彼等の長命で人數の多いのは腸の化成だからである。次ぎに骨を投ずると又人間となつた。頑强無比のタイヤル族の祖先がこれである。次に膽を投げた時に成り出でたものもあつたが、その名は記憶しない。そして我々の姓はこのオッポエホボン神の授けられたものだと傳へられる。（蕃社の口碑參照）

ガラワン社　風姓イバンソタン

註「パーガサン」社の傳へでは、男の漂着したのはパッパク(大覇尖)山であつて、神の名は「タブハカリ」となつてゐる。李棟(オボナブロン)山に遁れたブロンオポイ兄妹の話を傳へた「シヤイヤホル」社の口碑も殆ど同樣であるがこの方は便宜上蕃社の口碑に入れる事とした。

ソオ族

太古ニブヌといふ女神が新高山(はつとうんこあ)に降臨せられ、始めて人間を造られた。凡ての生けるものゝ中で、神の恩寵の最も深かつた當時の人間は、殆ど不老不死といふ程の長壽で、丁度阿里山に千古の翠緑を見せて生ひ茂つてゐる檜のやうに、常に瑞々しく健やかなものであつた。假令過つて死ぬやうな事があつてもニブヌが神術を施すと蘇生したものである。かくて五回の起死囘生を經た後でなければ眞の死に至らなかつた。

ところが或る時ニブヌ神は、二回目に死んだ者を其の儘床に殘して外出せられたが、そこへソエソハといふ神が來られこの樣を見て大いに悲しみ、内庭に穴を掘り屍を埋め其上に土をかけ側で泣き沈まれた。（今も蕃人は死者に對し此の儀禮をとるのである。）ニブヌが歸つて來られると此の樣なので、しまつたと思はれたが既にソエソハ神の泣いた後なので、ニブヌの神術も及ばずその者は再び蘇生せなかつた。この事があつて以來他の人々も二回目から黄泉の國に赴く事となつた。

ソエソハ神は常にニブヌ神の善業を見ては、これに習はうとするのだが、神術が及ばない爲めに、却つて惡し樣にばかりなつて行くので遂に惡神の名を得たのである。ある時でもニブヌ神が一粒の米を炊ぐと鍋一樣の飯となつたのに、ソエソハが爨かれると、異樣の臭氣が堪へがたいので、蓋をとつて見られると豚や犬の糞がぐつ〳〵煮えくり返つてゐた。ニブヌ神が酒を釀(か)むとて二三粒の米を瓶に入れて置かれると芳烈な美酒が出來た。ところが同樣にせられたソエソハ神の酒瓶からは、豚の糞汁のやうな汚いものしか得られなかつた。それでも神々の通力によつて次第〳〵に萬物が造り出されて行つたから、人々は安らかな世を送り人口も著しく增殖したのである。

阿里山蕃　知母勝(チソラ)社　ベオンシイ、ボユ　アクツヤナ、パスヤ

註　四社蕃雁爾(カルプリ)社、人間は「タピラス」(柿)から生れ出たもので、その頃は草を食べてゐた。そして形も猿のやうであつた。

ブヌン族

太古「ミントンゴン」といふ所に二つの穴があつた。「ハルハツル」(蟲)が糞を丸めて其の穴に入れたが十五日許りたつて、一方の穴から男が現れ、他の穴から女が出でた。二人が成長して夫婦となり、男女四子を產んだが、子供等も互に婚して次第に人間が增えて行つたのである。

干卓萬蕃　バリラス社　パキシヤンカエモツ
オクトー社　バリバヤンマライ
ルルン社　バリバヤンタイモ
クリス社　ダシバルアンウーラン

古昔「ラモガナ」といふ所に一つの瓢簞と一つの土釜があつた。瓢の中から一人の男が生れ出で土釜の中から女が現れた。この二人が人類の祖なのである。

郡　蕃　バハフル社　アンノダケルルン

昔天上から「ビタホル」(夕顔)が落ちて來たが其の中に「ソッカル」とて羽の生えた蟲がゐた。此の蟲化して人間となつたのである。

郡蕃　東埔社　タキシタホワンアリマン

太古「クラット」といふ蟲が、常に仰向きながら匍匐つてゐた。それを氣の毒に思つた「ボクラウ」が餌を與へていふには、「汝のやうにさう常住(いつも)這つてばかりゐては不便だから立つて歩め」と勸められて、「クラット」も成程よい事だと思ひ、如何したなら歩けるかしらなど思案にくれてゐた時、一匹の蚊が飛んで來て脇腹をひどく螫したので、驚いて跳び上る機みに立つ事が出來た。そして大喜びで歩いてゐたが間もなく二子を生んだ。その長子が成長の後、沙連堡や社寮庄のあたりを歩き廻つてゐるうち、巒大山に來たが其所が大變氣に入つて定住した。それが巒蕃の遠祖となつた。弟は北方に別れて行つたが、其後如何なつたか傳はらない。

達啓覓加蕃　タマロワン社　ウランタシカバン

サゼク族

古昔中央山脈の「ブノホン」といふ所に、亭々とした一大樹があつた。其名は今に傳つてゐないが根は底津岩根を穿ち、梢は青雲の中に入つてゐた。そして不思議な事には、其の半面は木質であるのに、半面は岩石になつてゐた。木の精化して神となり、中から男女の二神が出現した。二神婚せられて數多の御子神生れ、子神更に相婚せられて、數世の後には神の子孫で所も狹い位繁榮した。其頃は末だ神通の世であつたから、不思議な事が多く行はれた。神々は皆々沆瀣を飲み雲霧を吸つて居られたが、稍々降つてからはやはり口腹の慾を滿すものが必要となつた。それから粟の耕作などが行はれたが、此の頃でも一粒の粟を數箇に截り、その小粒を煮れば三尺の大鍋に溢れる位の飯になつたものである。だから粟畑でも二寸四方程の地で澤山であつたし、一束の粟が出來れば一年の食糧に足りた。肉が欲しい時には野猪を呼び、その毛を拔き、一本を數箇に切り鍋で煮れば美味しい肉となつたのである。

霧社蕃　イヨン、パワン　パワン、ポホク　ワリス、ラバイ

上古「リギヤカポッポ」といふ所に巨樹があつて、鬱々蒼々とした枝葉が、天地を蔽ひかくしたから、日光爲に遮られて晝尚ほ暗い常闇の世であつた。

或る時、此の木の幹の下から益々として生れ出でた者があつた。四脚で全身に毛皮を纏つてゐる。次に同じやうに下部から生れたものがあつた。頂には一つの瘤を有つてゐて、其狀貌（かたち）は樹木のやうに幹があつて二本の根と二本の枝を具へてゐる。そして二本の根で幹を支へ枝をふりながら動く事が出來た。次ぎに上部から生れたものが二つある。一はその形が長細く、歩く事は出來ぬが巧みに匍匐（はらば）ふのである。今一つは體輕く手が長いので、地上を匍つたり歩いたりせないで、空中を自在に飛翔した。此れ等が獸や、人間や、蛇や、鳥などの先祖であつた。そして上部から生れたものは樹木に登る事が出來るが、下から現れたものは攀ぢのぼる事が出來ない。人や獸が樹上に棲息せないのはこの爲めである。

四種の動物は創造されたが、世は常闇だから同じ靈樹から生れながら。相會ふ折はなかつた。ところが或日偶然一所に出逢つから、先づ人間が聲を出して「我々は萬物を嘗め試みて、若しその口に適する物があつたなら、それを各々の食物としよう」といつた。すると皆贊成したので、それ〲適當な食物を探し求める事となつた。

其後樹の幹から化成した最初の男の體から、更に男女二人の人間が生れた。それが我社の遠祖なのである。

トロツク蕃　リジパワン

大昔の事、何處からか一匹の蠅が飛んで來て卵を産んだが、間もなく孵化して中から男女の二人が現れた。これが人類の始めである。

外タロコ蕃　コロ社　ウミン、ヤツカナ

タイヤル族

太古開闢の初、一柱の男神と二柱の女神が、國の最中(もなか)の一きは高く峙つた大山の絶頂千引岩の上に天降られたが、忽ちその岩が二つに裂けて、自ら八尋殿(やひろどの)となつた。こゝを「ピンシバカン」(祖先の地)と名づけて共に住み給うた。

或日、男神が、女神達を顧みて、「根據(ねじろ)が出來たから子孫を造らう」と仰言ると、女神たちも微笑まれるのであつた。そこで、神々は先づ目と目とを合せられたが心適(ゆ)かず、口と口とを合せられたが、やはり適はなかつた。かくていろ〱と工夫せられる折から、一匹の蠅が飛んで來て女神の隱處に止つた。玆に初めて、神々は、「成り合はない處」と「成り余つた處」があるのを知り、御子(みこ)生みの術を會得せられ、互に夫婦の道を行はれたので、間もなく數子を得られた。これが人類の始祖である。

屈尺蕃　タイモワタン

平埔(へいほ)蕃

昔我が始祖マギヤァワスといふもの天宮から天降り、臺灣の中央の平地に住んで子孫が榮えてゐたが、其後多くの歲月を經て大洪水が起り山川草木悉く水底に沒し、人畜も皆死滅してしまつた。ところが玆にマギヤアワスの直系に一姉一弟の男女があり、姉の名をサボンガカシイと云ひ、弟をヴァナカイシと呼んだ。この二人は幸に難を避けて「ツポヅアラリウツ」といふ山の頂に漂著し辛うじて死を免れた。

かくて六日許りたつてさしもの大水も退いてしまつたから、山を下り山麓の丘地に居を卜し、そこを「パラダン」と名づけ後更に平地に出でて部落を建て、そこを「ヴァヴァオ、ワ、ルツル」(上の村の義)と呼んだ。そして姉弟相婚して二子を生んだが、二人は其の二子の身體を截り數片として、その各片に息を吹きかけると、各々立派な若者と化(な)つた。此れ等の人々を「ヴァヴァオサル」(上邑の人の義)といつたが、後に諸所に分れて同族の祖先となつたのである。

かうして最初に出來た部落は「ラホドプル」、「ダイヤオプル」、「ラルサイ」、「アオラン」の四社であつてこれ等を「ルヴルヴアダツハ」（下邑の義）と呼んでゐた。それから子孫次弟に繁殖して、十六部落に分れ今の臺中平原一帶に分布したのである。

パゼツヘ族

註「ツポツアラリツツ」山は漢族の所謂觀音山（臺中州豐原街東方）であつて、山麓の小丘陵地を「パラダン」といひ、最近までは千古の神秘を藏するやうな蔚林があつたさうだ。隋書琉球傳に見える地名波羅檀と一致する事が首肯される。それが漢人渡來後此の遺蹟の附近に起つた部邑の名に呼ばれ、更に文字を葫蘆墩と書き改められたのだらう。葫蘆墩街は今の豐原である事はいふまでもない。

我が族の始祖はもと「サナサイ」といふ地に住んでゐたが、偶々その地に「サンシャオ」と呼ぶ妖怪が現はれて、いろ〳〵災殃を逞うしたから、遂に筏に乘り海に浮びやがて一島に漂著した。そしてそこで新地に定住する事となつた。

それから間もなく子孫が繁殖して土地が狹くなつたから、或る時野草の莖を取り長短の籤を造つて抽籤を行ひその長短によつて二大部に分つ事とした。平埔蕃は長籤を抽いたものの子孫で、山蕃は短籤を得たものゝ後である。

かくて茫々とした曠野に、我が平埔蕃は次第に繁殖して行つたが、狹隘な山谷に入つた山蕃と更に境界を爭ふやうになつてからは兩族は深怨を結び仇敵となつたのである。

ケタガナン族

註「サナサイ」といふ地名は何處をいふのか不明であるが、アミ族やヤミ族などでは火燒島をさしてゐる。平埔蕃は漢人との交涉があつてからは著しく支那化してしまつて、口碑傳說なども余程支那式の色彩を帶びてゐるのを認める。この「サナサイ」も支那の山西省だなどいふ人もあるがそれは不明である。但しサンシヤオは山𤢖に關係あるらしい。

ハモ神

世の創めは天が非常に低くて、月は太陽よりも光熱が烈しかつた。だから晝夜の區別もなく照りつけられ人類は安い思ひもせなかつた。外出の如きも、比較的光熱の弱い日の出てゐる時にするのだが、それも薄板を脊にせねば堪へられなかつた。況してそれよりも烈しい月の出る時は屋內深く隱れてゐるより仕方がないのであつた。夫婦間の「ボエヒエ」などゝも思ふにまかせないから、人類もやがて滅びさうに見えた。

これを見られたハモ神は大さう不愍に思召されて、或日兩手で天を支へエィと力を籠めて押し上げられると、今のやうに高くなつた。余り俄な變動なので月は影を失ひ、日も亦其の道を變へ、東から出ては東に入つた。而も暫く出たかと思ふと直ぐかくれて闇黑の世界となるので、人々は山々の樹木を伐り採つて薪とし、果ては有りと有ゆるものを焚きつくして、住むに家なく寢るに床もない有樣なので、偏へにハモ神を念じたから太陽は日一日と高く昇り、やがて中天に懸るやうになつた。その次の日は頭上から少し西に傾いたかと思ふと急に落ちて西に入つた。そして其の夜始めて天に鎌形の物が現はれた。これこそ三日月であつた。それ以來日が沒すると、月が必ず出で、今日のやうになつたといふ。

ツォ族 阿里山蕃

註 太古天が低くて人類は實に悲慘な樣であつたが、「タタチユ」鳥が元氣よく「タッチユカ、タッチユカ、ササ、タッチ・ユカ」と啼くと天地爲めに鳴動して、天は見る〱高く上つて行つた。（アミ族奇密社、海岸蕃、南勢蕃）

天が低くて暑くてたまらなかつたから、或日庭で粟搗きをしてゐた女が杵で天を衝き上げた。（パイワン族カテボル社、マシリジ社）

或日一人の女が粟を炊いてゐたが、粟が俄に沸騰した勢で、頭を壓へるやに低かつた天が、今のやうに上昇した。月の隈は其時の火傷の跡である。それからは星が下りて來て粟飯を喫れなどゝいはないやうになつた。（パイワン族、チャザャアブス社、大南社）

第二　蕃社口碑

タイヤル族

大嵙崁番

中央山脈の北部には、海拔一萬三千尺の「シルビヤ」を盟主として一萬尺以上の高峯が十座ばかりもあるが、その最北の大覇尖山は、逆鉾を立てたやうな山容が如何にも神々しい。この山が北部蕃人發祥の靈山となつてゐるのである。

太古、「パツパクマーヤン」と呼ばれてゐた處に、苔蒸した一大巨巖があつた。或る時その岩が自然と二つに割れてマブタ(男)、マーヤン(男)、ルツクルサーボ(女)といふ三人の男女が現れ、そこを住居として長らく同棲してゐる間に四子をあげた。

或日、マブタ、マーヤンが山に狩獵に出た後で、愛子の一人が毒蛇に咬まれて遂に死んだので、兩人は驚き怖れて、「これは我等がまだ神靈を祀らないためだらう」といつて、玆に祭場を築き、豚一頭を屠つて、大いに祖靈を慰め子孫の繁榮を祈つた。蕃人の祭祀は此時に起原してゐる。其後殘る三子も次第に成長して二十名の孫を得たので、各々竈を分ち互に婚を通じたから、マブタ、マーヤンの子孫は「パツパクマーヤン」に充ち溢れた。然し此の頃でも兄妹の相婚は堅く禁じられてゐた。

平和は永く續かなかつた　それは臺灣人の祖ウロツホといふものが何處からともなく現はれて來た事で、才氣から膽略から、一時は頭目と仰がねばならなかつた。ところが暫くして族長マブタは彼に勸めて云ふやう、「社衆を二つに分けて、その一を與へるから、山を降つて平地に赴け」と。ウロツホも何の異議もなく同意して、部下を集めて降り行かうとするとき、マブタは又、「互に雄叫びして人員の多寡を判じよう、過不足あつては後日の爲めではない」といつた。そこで先づマブタの部衆が鬨の聲をあげたが、その聲は僅かに木精に響いたばかりであつた。然るにウロツホ方が喊聲をあげると、山川ために震動し、草木の葉が悉く飛散した。ウロツホは得意げに、「我が部衆は多數だから前山に美地を求めよう、汝等はやはり此處に止まるやう」といつたの

で、マブタこれに應へて、「我が部下は數こそ少いが後日爭議が起つたならば、汝等の首を馘つて輸贏を決しよう」といふと、ウロッホも流石頭首である、「諾」と答へて快く別れて行つた。

「パッパクマーヤン」に殘つた族衆にも爭ひがあつた。それはマーヤンがマブタの子を一人盜んだ事から盜否の大爭議が起つた事である。暫くは互に口角泡を飛し爭つてゐたが、結局馘首によつて神意を伺ふ事となつた。これは神占、盟神探湯、などと同樣で、疑議を正す唯一の方法として後世まで盛んに行はれたものであつた。無論馘首の原因は他にもあるが—。兩人は等しく出草したが、マブタは馘首し、マーヤンは遂げなかつた。正否は明かになつたから、マーヤンは珠裙(しゆくん)一枚—獸骨製の蕃人貨幣—を出して謝罪したので、マブタはそれを豚に換へて祝宴を張つた　出草及び馘首祭の起原が知られる。

かうしたうちに「パッパクマーヤン」も人口が增殖して如何にも狹隘なので、族長マブタは勇壯の若者、チブラ、バイソ（チンブラ、ヤグイブナとも）の二人を遣して前山

に移住せしめた。二人は命のまゝに今の「ガオガン」に出でた。其時巨酋ウロッホは部衆を率ゐ、險要「ギヘン」に據つてチブラ軍の侵略を禦いた。今其所を「テレッカン」といふのは古戰場の意である。兩軍は長く苦戰したが、遂にウロッホは敗れ退いて「ハブン」を壘守する事となつた。併し對陣二箇月、一回の快戰もなかつたので兩軍共に倦み疲れた。

そこでチブラは一計を案じ、媾和しようと申し送つて、チブラ、バイソは打ち連れてウロッホの陣に行つた。ウロッホは欺かれるとは知らず、美酒佳肴を出して饗(もてな)したので互に歡をつくし平和に餘念もない樣であつた。酒愈々酣になり、ウロッホの部衆は前後不覺に醉ひ伏した。時分は好いと、バイソ等はウロッホの將士の長く垂れた頭髮を互に結び合せ、竊かに叢中に忍ばせてあつた伏兵を呼び起した。ウロッホ等は周章狼狽して、敵よ、敵よと獲物も取り敢へず右往左往したが、頭髮が結び合せてあるので、身體は少しも利かないで、チブラ、バイソの部衆に斬り立てられ、さしもの大衆も殆ど全滅し、屍山血河を現出した。そして僅かに生き殘つたものは「サンソ」庄さし

て逃げ延びた。今の角板山以東の蕃地となつたのは此の時からである。そして刺墨といふものを發明して、敗殘した土人と區別することゝなつた。

合歡蕃

大嵙崁蕃 イバンプロナー セツプロナー

太古「ピンサバカン」の東方、海中に突出した一巨巖があつて、其の中から最初の二人が現れた。最初一人の頭髪が浮草のやうに波に漂つてゐたが、「ピショヤック」といふ鳥が飛んで來て、その頭髪を啄んだ。すると次第に頭が出で、肩が出で、遂に全身が現はれたのである。最初に生れ出でたのが男で、次に生れたのが女であつた。

二人は其處に住まつてゐたが、或日何氣なく互に見合すと、耳、目、鼻、口がある。目に見、耳に聽く、皆神の恩頼である。然し外にも何か利用の道がないものか、ふと見ると男の下腹に、よにも不思議な長いものが垂れてある。驚いて女を見るとやはり玄妙なものを具へてゐる。所へ蠅が飛んで來て面白い所作をしたので、二人は初めて和

合の法を知つた。かうして數箇月經つたが、もとより裸體だから寒さを感じるので「ボーリヤック」(楮)の皮を剝ぎつぎ合せて衣服を作つた。

間もなく二人の間に子が產れた。母は其の子を抱いてゐたが、赤兒は母の胸に頭をつけて泣き止まないから、どうしたものかと搖りすかしてゐる中に、ふと乳房に吸ひついたので、乳で子を養ふ事がわかつた。今まで泣いてばかりゐた子供は、すく〳〵成長するし、軈ては笑ひ初め言葉さへ出すやうになつた。かうして十數年の間に七人の子女をあげた。

併しまだ人口も少い時だから、彼等が成長するとお互に婚を通じては子を產んだから、子孫繁殖して「ピンサバカン」も狹くなつたので、美地を求めては分離せなければならなかつた。丁度その頃社內に二人の白痴が產れ、逞しい若者となつても屎糞などを身體に塗つては步き廻つた。餘りの事に社人も惘れ果て、海に連れて行つて不淨を洗ひ去り、淸々しくしてやつた所へ、折惡しく怒濤が押し寄せて二人を攫つてしまつた。不具者は聲はりあげて、今我等を救ひ出して吳れるならば、汝等の壽命は百日紅

のやうに長いが、見す〳〵溺死さすやうならば露草のやうに短かからうといつた。人々は何うかして助けようとしたが、早潮に引かれ行く二人は、見る〳〵波間に沒して後には岸打つ波浪の音ばかりが高かつた。この時から爭闘と不安とが多く、人の命も短かくなつてしまつた。

「ピンサバカン」を去つて山地に移つたものゝ中、病死する者が日に〳〵多くなる。如何したものか理由ははつきりわからなかつたが、兄妹相婚の者の死亡率が大變に多かつた。老人達もこゝに氣付く所もあり、又今のやうに人口が增殖したからには以前のやうな必要もないので、協議の結果、初めて規則を作つて嚴しく血族相婚を禁ずることゝした。

ところが「ピンサバカン」では人口が益々殖えるばかりで喧嘩の絶間がなかつた。そこでマーヤン、ヤボフ、ムブタの三人は相談して、海岸に移住するものと、山に止るものと二つに分けた。行くもの止まるもの相等しき筈だつたが、山に殘つた三人が部衆を集めた結果は、恐ろしい少數になつてゐた。そこで彼等は平地に降つたものに欺かれたのだとて、此れを惡む事甚しく、いつか必ず馘首して其數を減じやらんものと敦圉いた。今我等が平地に行つたものを「カマユン」といふのは、大勢の意である。

「カマユン」は何處に去つたか暫くは不明だつたが、或時「ピンサバカン」のものが、「ルゲヤカスカボ」といふ所の「リギヤラクミビラック」といふ丘から四方を見渡すと、前方の谷から山にかけて、煙が揚つてゐるので、「カマユン」が來たのではないかと、急いで社に歸り、壯丁を集めて出發した。かくて「キナジー」から溪を下つて「ハブンケアイ」まで進んだ時に、壯丁の一人が俄に死んだので、一時「ピンサバカン」に引き返した。

そこで再び兵站を整へて進發したが、まだ敵にも會はぬ途上で頭目マウラオが死亡した。現時の「マラワン」といふのはその名を採つたのである。併し今度は歸社する事もなく、益々進んで、今の「ハブンシミヤク」に來た時に、又、勇士シミヤクが死んだから、同じく其名を取つて地名とした。それにも屈せず軍衆は進みに進んで「ゴホーシンガン」といふ處に來た時始めて「カマユン」と戰を交へた。此時味方には一人の負

傷もなかつたが、敵は多數の死者を出して退いた。次いで、「リジユンリナホイ」を攻めた時、不幸にも老頭目ムブタが死亡した。壯丁等も止むを得ず和を結んで境界を定めた。「ハプンキヨパン」(又はテレツカン)を境とし、その下方を「カマユン」に讓り、埋石の誓を立てゝ一同「ピンサバカン」に凱旋した。

媾和の時「ピンサバカン」の傷者を「バルン」といふ地に殘して置いたが、「カマユン」は竊にそれを殺してしまつて地中に埋めた。後から使者が來て負傷者を連れて歸らうとしたが一人も居らぬ。「カマユン」は死亡したのだと騙らうとしたが、使者は屹度殺害されたに違ひないと思つたから地中を掘つて屍を調べたが、何れも皆頭に負傷してゐる。使者は悲憤の涙を呑んで立ち歸つた。

「ピンサバカン」の人々は大いに怒り直ぐさま出陣して「カマユン」を全滅せねば措くまいと誓つた。そこで先づ斥候を出して敵情を偵察せしめると、「カマユン」は心驕りの酒宴を開いて居たから、今夜彼等の醉ひ痴れた所を襲撃しようと待ち構へた。其頃「カマユン」には奇習があつて、それがやがて身を亡すもとゝなつた。それは眠につく

時、孔を穿つた枕を用ひ、長く垂れた頭髮をその孔から通して寢臺の下に垂れ、先端を水に浸して寢る事である。「ピンサバカン」の部衆は深夜竊かに入つてその頭髮を悉く結びつけてしまつた。しかも此の「バルン」といふ所は懸崖の上にあるから、崖を下つて遁げようとするものを、下から射殺さうとして、山羊の皮で作つた雨具を崖上に列べ草で蔽ひかくしておいた。時分はよいと、「ピンサバカン」の軍衆は鬨をつくつた。「カマユン」はすはこそ敵よと、夜具はねのけ飛び起きようと周章てふためいたが、頭髮が固く結ばれてゐるので、見る〳〵大半は殺されてしまつた。辛うじて其場を逃れたものは、九死に一生を期して崖上に飛び出ると、乾き切つた山羊の皮は人を乘せたまゝ矢を射るやうに辷り落ちた。崖下の軍衆は得たりとばかり一人も逃さず屠り悉した。かうして今の「ガオガン」地方から「カマユン」の跡を全く絕つてしまつたのである。

勝ち誇つた「ピンサバカン」の軍衆は、更に進んで今の內灣方面に出で、「ルギヤヤクテンタナ」山に登つて東方を見渡すと、又煙が濛々と立騰つてゐる　彼處にもまだ「カマユン」の徒がゐる。進めや進めと、頭目の一令に、槍を列ね、矛を振つて勇み立ち、

先きに移住した「マリコワン」、「キナジー」蕃の部衆も力を協せたので、忽ち「カマユン」を一掃してしまつた。そこで「リシユンナホイ」に集つて、各蕃衆の戰功を比較したのに、今度の「マリコワン」で馘つた首は溪の兩岸に陳べてまだ餘りあり、先きに「バルン」卽ち今の「ガオガン」地方で獲た首は兩岸に三列してもまだ列べ切れなかつた。餘りに多い首で悉く「ピンサバカン」に運べないから、その中でも敲いて音のよいものばかりを取り、響のわるいものは打ち棄てて凱旋した。

此の遠征の後に、ヤオイポツトといふもの十四人の同志を率ゐて、征服地「ガオガン」に移住したので其の後を追つて此處に移るものが多く、又バンカエ、バイシヨ、カボレの三人は溪頭を下り「ジクバロン」、「カラホ」の道から「ガオガン」に出た。其他「エヘン」、「ブヘン」などにも移住するものもあり、遂に現今の各社を組織するやうになつた。

ギヘン社	ワタンアモイ
ピヤサン社	ワタンシヤツ
テイリク社	ユーミンロツク
ブトノカン社	パオトラオ

マリコワン蕃

昔「カオラン」の附近に「ピンサバカン」といふ處があつた。其處にあつた一巨石が自然に割れて、二男一女が現れた。或日金蠅の所作に敎へられ、訝りながらも三人で交互に遘(あ)つてみたのに、間もなく女が孕んで一子を擧げた。それから次第に子孫も繁衍したので、「ウラウ」溪の合流點の「ハブンビラツク」といふ所に移住したが、こゝも狹くなつたので、メボツリヨンガイ、パヤスプンガオ、メヤボフ、マバイバツト、ブナトーライの五人、更に美地を求めて此處に遷り、各々規則(かゞ)を作つて「マリコワン」蕃の祖となつた。我が蕃社は今でも此の五系統からなつてゐる。

リポ社	タイモノラフ
パツトル社	ユカンノミン

北勢蕃

太古「パツパクワア」(大覇尖山)の巨石が自然と割れて中から現はれた二人の男女が

あつた。これ卽ち我社の始祖である。或日二人は一種の好奇心から、相擁して目、鼻、口など、合せてゐた時に、金蠅が飛んで來て如何にも面白い行ひをするので、不思議に思つて見交してゐたが、ふと一人の股間を見ると隱れた一穴がある。試みに〇〇で探つて見ると如何にも〇〇〇。これはと他の一人を見れば、又異樣なものがあつたので、二人はやがて遂〇の法を知り四子を得た。子等も成長の後相婚しては子を生んだので子孫次第に增殖した。

偶々大洪水があつて、野も山も一面の海となつてしまひ、今は「パッパクワア」の頂ばかりが殘つたので、一同協議して、海水が俄かに溢れ出したのは、屹度社內に禁忌を犯したものがあるに違いない、それで神が罰を下されたのだ、早く謝罪せねばならぬ、と一決した。そこで先づ犬を犧牲として海中に投げ入れたが、水量は增すばかり、次に老人を流したが猶ほ水が退かない。これは犯則者が他にあるだらうと、嚴しく社內を檢べた所が、今になつてもまだ兄妹で密通してゐるもの丶ある事が露はれたので、早速その兩人を海に投げ込むと水は忽ち退いた。その時兄は大安溪に流れ、妹は北港溪

に流されてしまつた。今見る萬丈の峻峯も千仭の溪谷も皆此の時に形成されたものである。

其後人口增殖の結果、「パッパクワア」が狹くなつたので各々好む處に移住しようとて、今の北港溪の上流地に出た時、山地に止まるものと、更に進んで平地に向ふものとの二隊に分れた。其頃はまだ數の觀念がなかつたので、喊聲の强弱によつて多寡を判じ、人數を平分して後日の紛擾のないやうにした。所が平地に向はうとする頭目は頗る機智に富み、半數を岩蔭に隱して鬨をつくつたので、其聲が甚だ弱かつた。山の頭目は欺かれるとは知らず、更にその半數を送り、再び喊聲を合せたが、平地方の喊聲の意外にも强く山谷に響き渡り、樹木の枝も折れんばかりであつた。山の頭目は眦も裂けよと怒つたが最早致し方もなかつた。それ以來平地に降つた大衆を不倶戴天の仇とし、其隊の者とさへ見れば馘首して報復する事となつた。平地に降つたものは今の臺灣人（又一部のものは日本人とも）の祖となつた。

山に殘つた一隊は、一時今の北港溪の上流白狗（はくつ）の奥なる「マカナジー」に住んでゐた

が、トウブランといふもの初めて「クラス」に植民してから漸次山や谷を越えて、東勢角の邊りから大安溪を溯り、我が社の祖となつたものもあれば、北港大甲二溪の間に散在して「メバラ」、「クシャ」、「ローブゴー」、「マラバン」等の諸社を拵めたものもある。確かには傳はらないが今の北勢蕃も南勢蕃も元はやはり同一の祖先から出たものである。

ローブゴー社	シユツチモー、ボーナエターパス
ブヨン社	ワタンモツト
マビルハオ社	バイシヨオーサオ、タークンカイノ ユーラオタークン、ヤンガハボーヘル

南勢蕃

昔、東方の高山の大石の中から、男女二人が出現した。女はユーマといつたが、男の名は詳でない。間もなく男女二子をあげたが、次第に子孫繁榮したので各々美地を求めて別れて行つた。我社の祖先は「シキリチ」(稍來溪附近)に來たが、磽确であつたから其後又全社擧げて「リラン」溪の滸に移つた。今の稍來社及白毛社は、そこから更に分離したのである。尚進んで平地に赴いたものが臺灣人となつた。

白毛社	ビーハウブタ

ハツク蕃

太古、「ピンスブカン」といふ所の巨石中から出た男女から子孫繁殖したので、各々別れて今の合歡、南澳、溪頭方面まで廣つて行つたのである。「ピンスブカン」とは人類の創生地の意で、即ち我が白狗社の事である。現社の西南稍々平坦な所に、二つに割れた大石がある。それが祖先發祥の靈跡である。古く我社を「ピンスブカンシバジヤン」といつたのを、土人と接觸した時、平地より物品を運びやらうといつたことから、「マクツ」(運ぶ)と呼び後訛つて「ハツク」となり、更に轉訛して「ハツク」と呼びなされたのである。

マシトバオン社	ワリスアーライ、ワリスタイモ タイモアーライ

カムジヤウ社　ユーガンヤユフ
ムカブーブ社　ヤウイノーミン

シカヤウ蕃

昔「チンシブッカ」（裂けたといふ意味で、白狗蕃下方、無名溪の右岸の平地を指していふ）の石中から二人の男女現れ夫婦となつたが、その子孫が年と共に繁榮した。そこで一部の者は故山を後にして遙々南湖太山さして遠征の途に上つた。山頂はそれと見えながら行けども〳〵達しない。さすがに血氣の若者まで、旅の疲れに堪へかねて、暫し木陰に交睫んだ時、數人の惡戯者が、眠れるものゝ髮を結び合せ、素知らぬ顏して臥してゐた。一同目醒めた時、よにも可笑しげな狀で啀み合つたが、餘りの惡戯に腹を立て、「憎き奴等だ 以後は絶縁だぞ」と、少數者を山に殘し平地をさして降つて行つた。其時彼等は「汝等が除名された怨を晴さうとならば馘首せよ」といひ捨て天地に轟く鬨の聲をあげて去つたのである。是れ今の臺灣人の祖先なので、實に此時永久に解け難い怨恨を結んでしまつた。そして我

等は臺灣人と見れば馘首せねば措かないやうになつたのは、我が祖先の遺言に外ならないのである。

かくて山に殘つた者は、更に所々に別れ、各々好む所に定住して、各社の始祖となり、子孫繁衍した。卽ちリモヤボは北方に下り溪頭及南澳蕃の祖となり、ブータは遙か西方に下つて「ガオガン」蕃の祖となり、スクラマンとムラーヤンとは南麓に降つて「シカヤウ」蕃及「サラマオ」蕃の祖となつた。そして「マシトバオン」、「サラマウ」を經て「シカヤウ」に來たサラーマンこそ實に我社の始祖である。同時にユーカンサバクが「タボク」社の祖となつたのである

シカヤウ社　タイモロツクル

サラマオ蕃

太古ハック蕃の「チンスバカン」といふ巨岩から現はれた男女は間もなく數子を得た。所が或時其子等の請ふに委せて、何氣なく顏を洗つてやつたが、不思議にも皆聾

尿の溜りに飛び込んで死亡してしまひ後には僅かなものしか殘らなかつた。それでも漸次蕃殖して所も狹くなつて來たので、若者の一人は平地に出で、耕作する爲め社衆の半數を分ち與へよといふと、老人も頼もしく思ひ、早速喊聲の强弱により社衆を平分して其一を與へた。所が若者は我等は廣大な平地に出て耕作するのだから、尙半分をと迫つたが、老人等も一理ある事と思ひいふがまゝにしてやつた。此れで彼等も滿足するだらうと思つたのに、更に又殘りの半數を求め、而も揚言して云ふやう、山に殘る者が今日の怨を晴さんとならば、何時でも我地に來つて馘首せよといひ捨て、山谷に轟く鬨をつくつて降つて行つた。老人等は心憎しとは思つたが詮方なく他日の報復を期した。その後我等は刺墨によつて平地の者と區別し、必ずこれを馘首する事となつた。

萬（ばん）大（だい）蕃

ユーミンワタン

昔鳥（ておん）と「チッピチッピ」といふ鳥とが游んでゐたが、やがて互に首を埀れて水を涉り初めた。ところが間もなく鳥は水に流されて溺死したから、「チッピ」一羽で涉つて行つた。すると「チッピ」の形が見る〳〵變化してそこに二人の男女が現れた。彼等は夫婦となつて睦じく暮してゐる中に子女をあげ數十年も經たぬ中に所も狹い位增殖した。そこで「ババハロン」と云ふ所で社衆を二分し一隊を「シブナワン」といひ、他を「ブレガワン」といつた。「シブナワン」は中央山脈に向つたが、我等を欺いて社衆の大多數を連れて行つたから、「シブナワン」と見れば、馘首してその數を減じやるのである。「ブレガワン」はその後濁水溪を下り、「シマイガハラ」に出でた時、その附近に止りて「ブキツタル」社を建てたものがある。今の「ロードフ」社は其の一部である。又南山溪の邊りに一社を建てたものは後の「チャラゲー」社となつた。「ツゲウス」社はこの「チヤラゲー」社と「ブキツタル」社の一部の合同したものである。そして今の「プレガワン」は更に又この「ツゲウス」社と「シメウル」社と併合したものである。「シメウル」社は元「ビリフル」に在つたものが、後に今の「シメウル」に移つたのである。支那人及臺灣

人は我社を指して「プレガワン」といつたが、日本人が來てから萬大社と呼ぶやうになつた。

メバラ蕃

昔「マシトバオン」社の下方に「シバヤン」といふ所があつた。そこから二人の男女が現はれ、人口も次第に增殖したので、社衆を平分して一は山に止り、他は平地に赴かうと約した。其の時平地に赴くもの、人數を僞り隱して多數の人員を盜み、若しも恨みと思へば我等を馘首せよと云つたので、互に敵視する事となつた。彼等をさして「ペルモカン」と呼び、彼等は又我等を生蕃といふのである。

サツポールルン
テモルボイ
セツノカン
プユンナウイ
ユーカンペホ
ラワナウエ

南澳蕃

太古南湖大山(又、ヤフメーベヤンともいふ)の「ハブンコーロ」といふ所に巨石があつた。鳥がその石を動かさうと焦つたがびくともせない。所へ「シーレー」鳥(又はシレク)が飛んで來て、容易く之を水中に轉がし落したが、石が割れて中から、初めに現はれたのが男となり、次に出たのが女となつた。(或說には四人の男女ともいふ)是れが我等の先祖となつたので、今に「シーレー」を靈鳥として崇ぶ所以である。二人は夫婦となつて住んでゐる間に、女の腹部が次第に膨れ、今は滿月のやうになり、かくては裂けもしようと憂慮してゐたが、或日陣痛頻りに起り、苦し〳〵と喚くうち生れ落ちたものがある。見れば小さいながら人間である。彼等はかうして出産といふものを初めて經驗した。其後子に子が生れたから諸處に移住を行ひ南湖大山の後の「ドロワン」に定住したものもあれば、今の「キンヤン」社の上方「ハブンターセ」に住み後「コーコツ」に移つたものもあり、大覇尖山(パツパクワカ)邊に行つたものや、更に溪頭に出で平地に降つた大衆もある。平地に移住したものには僞りがあつたので、我等は意趣返しに馘首を創め其の數を減

らす事となつた。或時も祖先等は「アンモー」といふ黍粟に甘藷を混ぜたものを兵糧として今の蘇澳に出で敵に遇つたから、戰ふ事數刻、多數の首を獲て凱旋した話が傳はつてゐる。

ピヤハン社	タナイフモナ
	ユーカンソイロ
クバポー社	アバオパーヤン
	ヤウイトラス
コーゴツ社	ホールイナベス
	パワンペーホー

溪頭蕃

大覇尖、南湖大山、シルビヤの三山に介在する一帶の高地は「シカヤウ」の地である。そして峯から峯への中間で、山勢の緩かになつた所を「シカヤウ」鞍部といつてゐる。

昔、この邊りを「ピンシブカン」（ピンシバツカン）といつてゐたが、其處に在つた石中から現はれた男女は、僅か二三尺四方の地を耕し、粟を播いて生活してゐた。その頃は今のやうに多くの粟を炊ぐ必要はなく、只一小穗で足りた。獸類も呼べばすぐ來ては其の毛を與へる。これを茅の上に載せて置くと、肉と化するといふやうに少しの勞もなかつた。ところが、或日俄かに洪水があつて、地上は一面の大海となつた。どうしたものかと四方を見渡すと、「バツパクワカ」の頂ばかりが海中に突出してゐるので、二人は其所を目あてに遁れた。それから協力して水を押しやつたが、間もなく退水した。其の時の水勢が餘り急激だつたので、地を掘り、岩を削つて、今日の山谷を造つたのである。「ピンシバツカン」でも人口が増えたから、やがて「ガオガン」、溪頭南澳の諸地方に移住して現今諸社の基礎を立てた。

移住の一插話としてこんな事も傳つてゐる。それは、北港溪の上流地、「キナハツクル」と「トロツコ」蕃との間に「トーメク」といふ所がある。祖先等はこゝで「マリコワン」、「キナジー」等と別れた。此時一人のものが山を越え「ガオガン」に出で屈尺に進み、迂回して「シカヤウ」鞍部を通つて歸つた。この探險によつて「シキクン」の地が膏沃なのを知つたから、一計を案じ、或る若者の目を蔽ひ連れて來て、此處に殘し去つ

た。若者は地を拓き、橋を架けて待つてゐたが、やがて大勢のものが移住して來た。今の「シキクン」社はかうして出來たのである。その頃同時に、「ピヤナン」、「マナウヤン」地方にも移住した。そして今の熟蕃とは南湖大山の「マビヤン」といふ所で別れたが「キビヤン」の欺瞞から馘首の風が起つたのである。

一說には「ピンシバツカン」の石中からはマツクイ、ムビンマブツ、ミヤボフ、モアシ、マーヤン、ハールスの六人現はれ、ムビンマブツだけが、こゝに殘り、他の五人は各々別れて、マツクイは「タウサイ」蕃の祖となり、ミヤボフ、は「カライサン」の祖となり、モアシとハールス、とは「ミネボ」の祖、マーヤンは「ガオガン」の祖となつた。そして蕃社創建の時、各々朱欒を植ゑて標としその出自を明かにした。これ等の始祖の中でもムビンマブツとモアシとは規則を制め、マツクイは茨をもつて禁厭の法を敎へ、ミヤボフは異族との結婚を勸めたと言はれてゐる。

ボンボン社　ロシンノーカン
ブユンナアイ
シキクン社　スーヤンメラ

カラパイ蕃

パヌン社　ユーミンクスン

太古「パツパクワカ」に巨樹があつた。其根が二股に分れ、中央に石を挾んでゐたが偶々其の石が割れて二人の男女が現れた。間もなく一匹の鼠が來て何かしら小さなものを殘して行つたから、取りあげて見ると今の粟であつた。二人は一粒の粟を兩分して、その一つを煮て食べると實にうまい。そこで殘る半分を石の前に播いた。すると多くの粟が出來たので、耕作の法も工夫する事となり、收穫も次第に增したのであつた。

二人は夫婦になり、子を生まうとしたが、其術を知らなかつた。此時蝿が飛んで來て女の下腹に止つたのを見て漸く悟り、やがて一男一女をあげた。二子の成長した頃には、既に兩親は死亡してゐた。兄妹は年久しく同棲してゐたが、兩親の嚴戒があつたから、流石に相犯しはしなかつた。それでもお互に青春の情をもらす異性の相手がゐないのを苦しんだばかりか人類の繁殖といふ事からも考へなければならなかつた。

早熟な妹は遂に堪へかねたので、或日漂然と出て行つた。兄は俄に妹の姿が見えなくなつたから、一種の思慕と寂寥の念にたへなかつた。折から顔を黑くした人間が訪ねて來たので、驚きながらよく見ると顔こそ異様だが妹に似た女性である。併し女は、妾は久しく此山の彼方に住んでゐたのですが、まだ孤獨なのでよき夫もがなと此所に來たのですといつた。二人は遂に夫婦となつて多くの子孫を生んだ。そして次第に繁殖したので「バツパクワカ」から西に進み、今の太湖方面に降り、更に北進した一隊が我社の祖となつたのである。

一說に、

昔「インカホラン」(元の處の義)といふ所にあつた巨石が割れて一女子が現れた。或時山に登り疲れたので石に腰を下してゐると。涼風が吹いて來て胯間に入つた。すると女は姙んで男子を產んだ。それから次第に人口が增殖したので、これを二分して、一を山に止め、他を平地に赴かしめた。其時平地に行くものは多數だつたから、山に殘るものに、「今後何か事件が起つて疑議を判じようとならば鳥の吉聲を聞いて出草せよ、我等は少しも怨む事はない」といつたのが馘首の起りとなつた。

山に殘つたものも年とともに蕃殖したので、更に又南と北とに別れ、猪を獵りつゝ各々美地を求めて進んだ。その時マブタといふものが「カラパイ」に來り、土酋のムボヨクに殺されたが、その部下マバジク、マハクツの兩人よくムボヨクを逐ひ、其他に占據して社を建て、「カラパイ」蕃の祖となつた。

ソニ社　アオナハナイバン
ジヘン社　ウマオタイモ

パスコワラン蕃

太古「バツパクワカ」(大覇尖山)に、「ピンシブカン」といふ巨石があつた。その中より現はれた男女は、種々苦心の結果、生殖の法を發見し人口增殖したので、二つに分れ、一は「タイヤル」となり、一は「ペルモカン」となつたが、兩隊互に爭ひ馘首の風が起つた。其頃の行軍には粟を耳飾に入れて携帶したが一粒の粟でよく一日を支へえた

ものである。我社の祖先の此處に定住したのは、何時頃だか不明だが「シャカラウ」から移住して來たやうである。

一説には、

昔「ピンサバカン」といふ所に斷崖があつたが、俄かに二個の穴が出來て男女が生れ出た。二人は金蠅から生殖の法を習つて、子孫が榮えたが、或年天地鳴動して。大洪水があつたので人々は「パツパク」に避難した。減水の後、故土「ピンサバカン」に歸たものが今の「サイセツ」族の祖で「パツパク」に殘つたものが「タイヤル」族の祖となつた。そして、「タイヤル」も各地に分散したが「ハブントーナン」に來たものが、卽ち當社の祖で、そこから「パスコワラン」に移つたのは約百年前の事となつてゐる。

パスコワラン社　ピリンテラオ、イバンテラオ

シャカラウ蕃

太古「パツパクワカ」にあつた一巨石が俄かに割れて水と共に二人の男女が出現した。二人はやがて生殖の道を發見して、數多の子孫を得た。まだ人口の極く少ない時代では親子兄妹の相婚は已むをえない事であつたが、漸く其の弊を知り之を嚴禁したので人の定命も長く子孫の繁殖も一層盛になつた。

そこで彼等は喊聲によつて人數を平分して、一隊を山に止め、一隊を平地に降す事とした。平地方の者はその半數を隱し、詐つて大多數を奪つたので、山地のものは返せ返せと迫つたが、應じないばかりか、「左程人が欲しくば我等を馘首せよ、併し若し汝等が正しくなかつたならば、却つて自分の命を斷つばかりだ」、といひすてゝ去つた。これ今の「バルモカン」の祖先である。

其後、山では數年の凶作が續いて、又食を失つたから「バルモカン」の部落に行つて、懇ろに粟を乞ふたが、彼等は貪欲で少量の食物さへ與へなかつた。そこで抑へ難い忿怒の念と、祖先の遺言とから遂に馘首して報復する事となつた。そして我等は「バルモカン」と見れば馘首して、功績を子孫に傳へるために、刺墨する風が今に絕えないのである。

我社の祖先は其後「バツパクワカ」から「ハブントーナン」に出で、暫く其處に棲んでゐたが、「シャカロー」は獸類が多いからといふので現所に移住したのである。

因に「バルモカン」とは刺墨せぬものの稱で、「マユブユ」卽ち「サイセット」族などを指したのだが、後には臺灣人をもいふやうになつた。「タイヤル」といふ語は「パルモカン」と別れる時に、初めて唱へたものであるが、やがては部族の總稱となつた。

パイショワタン
サビラリン

ロクヂヤウ蕃

昔、大覇尖山の頂にあつた巨石から生れた男女二人が、偶然な事から生殖の法を發見したので、間もなく所も狹い位繁殖した。そこで二隊に分れて、一は山に止り、一は平地に降る事となつた。此の時人員分配の爭ひから、遂に馘首の風が起つた。「ペルモカン」といふのは、平地に降つたものの子孫である。其後我等の祖先も麓に降らうと

したが、丁度その時大洪水があつて進む事が出來ないので、老人を犧牲として水中に投じ減水を祈つたが効はなかつた。そこで美女を投げ込むと、さしもの大水も見る〳〵退いたから、各々思ひ〳〵に分散して諸蕃社の基礎をつくつた。そのうちでも、「バスコワラン」の下方の「カラパ」に降つたもの、大湖蕃「マイリラ」に出たもの、「サイマ」（今のマナパン）に進んだもの等は大部隊であつた。

我社の祖先は、「カラパ」から「シバジー」に出で、更に進んで今の樹杞林に進んだ時「マイパライ」社の者が海を渡つて來たので、不愍だとて仲間に入れてやりそこに住んだ。此の頃臺灣人に近接して鍬、銃、鹽などを得た。所が年年歲々彼等の數が夥しく增して來るので、我等はこゝを去つて再び「シバジー」の大隘社の所に移り、更に舊の「バスコワラン」に歸つた。其頃「シーガオ」社は太湖方面から、「シャカロー」社も現在の地に移つて來たから、更に又「チユーブス」に移つたのである。「チユーブス」とは古名であるが、我等は此地を「パンノフ」といつてゐる。

タイモ　パーイ
ユーケ　タイモ

汶水蕃

太古「パーパックワーアー」といふ所に、二孔のある一大巨石があつた。一孔から男が生れ他の一孔からは女が現はれた。併し二人は各々自分一人ばかりだと思つてゐたので、別れ〳〵に食を求めて山中を彷徨ひ歩いてゐた。或日二人は偶然相會し、不思議に思つて見合つてゐたが、同じく人間である事に氣付いた。やがて男は、「何處から」、と尋ねたので、「石の中から生れた」と女が答へた。そこで二人は其所にさゝやかな家を造つて同棲し、日々「ポアワイ」といふ紫の色も美しい藤豆を食つてゐた。そのうち二人の愛情は次第に濃やかになつていつて、相抱いては戀の陶醉にひたつてゐた。或時男は女の股間に凹所のあるのを見付けると、女は驚いてこれは石を出る時に出來た傷だから決して觸れるな、怖しといふ。しかしその傷口は幾日經つても癒えなかつたから不思議だと思つてゐるうち、遂に交〇の法を知つたのである。その後子孫が繁殖したから各々溪流に沿うて四方に移住して行つた。

其頃は今のやうに晝夜の別なく、人々は終日働いて斃れるものも尠くなかつたので「パシバーユフ」といふ事を發明して交代に仕事をした。そして時の長さは火繩の長さで定めたのである。けれども光熱が甚しいために草木も枯れ果てゝ食物も盡きようとしたので、一人の老人が二人の若者を連れて太陽征伐に赴いた。三人は「パーパック」に向つたが、老人は途中で死亡し、若者は頂上に達する事が出來た。そこで太陽の昇るのを見定め、一人が先づ弓を引きしぼつて放つたが射損じたので、他の若者代つて射たが狙ひ違はず命中した。すると俄かに暗黑となり夜を生じた。彼等二人は喜び勇んで歸社した時は既に白髮の老人となつて八束髯が胸先に垂れてゐた。

（太陽征伐參照）
トウライカイヌ
パインプヨン

太湖蕃

昔「パッパクワア」の巨岩の中から二人の男女が現れ、次第に人口增殖したので、

人數を二分し一は山を降つて「ペルモカン」となり、他は山に殘つて「タイヤル」となつた。その時「ペルモカン」に僞りがあつたので馘首の風が起つたのである。

ユーパシユライ
ハイフイユーガオ

屈尺蕃

昔、マツヤル、ブタといふ二人の男が多數の部下を率ゐて、「マネボー」の南、「タタユフロバツラオ」といふ地から「ガオガン」に出た。そこで更に「キナジー」、「マリコワシ」角板山方面に分れて進んだうち、ヤウエブナといふもの六十人許りを率ゐ「ララ」山に登つて四方を見渡すと東北に沃饒の地があることを知り、先づ「ハブンテユ」に居を定めて、「タラナン」社を建て、我社の基をなした。其後「ハブントモトン」に分れ、尚北進して「ハブンシナツク」に行つたものもある。

タイモワタン

キナジー蕃

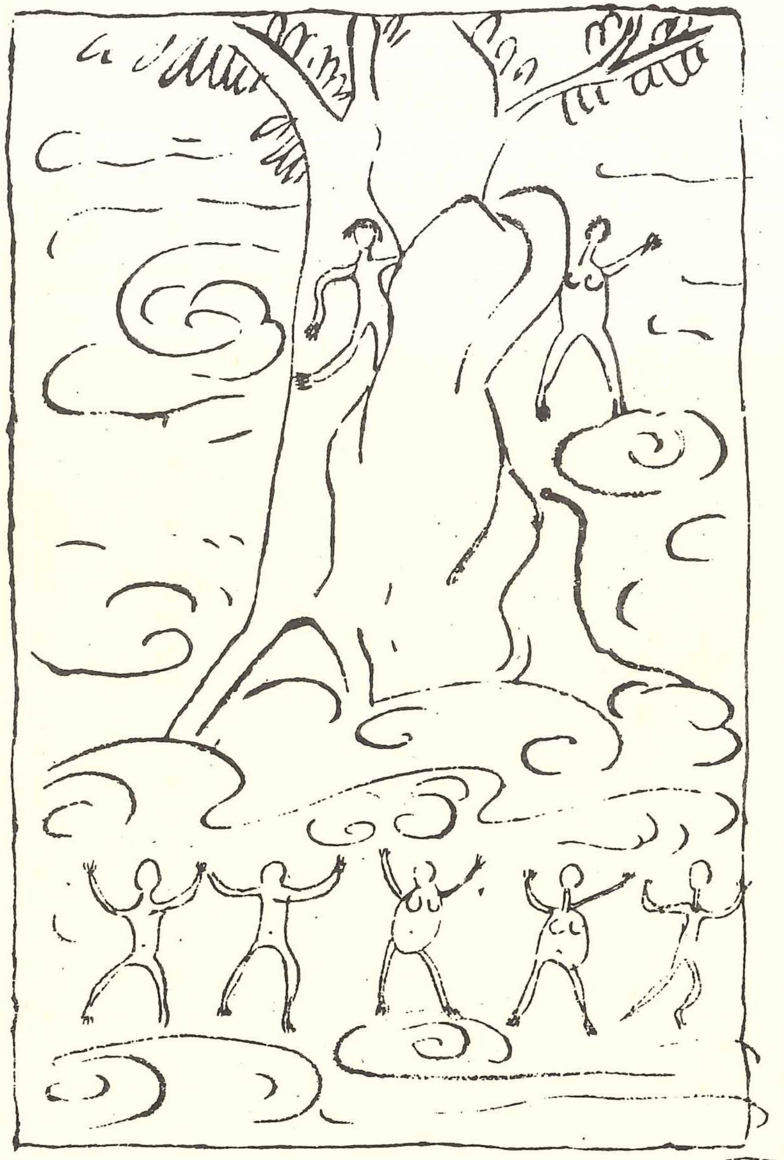
太古「ピンサバカンナバキス」といふ所にあつた巨石中から二人の男女が現れた。男の名はマブタといつた。二人は「イギリ(蠅)」から和合の法を學び、生殖に力めたので、間もなく子孫繁殖して、互に殺害するものさへあつた。マブタは人口の過剰なのを知つたから、マブイブタ●ウツロブタ●パヤンブタ●セツブタ●マーヤンブタ●マキレツプタ等の六子を率ゐ「キナジー」に降つて見たが、茫漠とした一面の大平原で方角も定かでなかつた。併し水さへあると永住の地としてもよいとて、諸所を探したが見當らない。そこで行き行いて遂に「バツパク」(大覇尖山)の麓に到つた時、岩の間から清澄な水が流れ出てゐた。マブタは思はず、美しい水よと、槍の穗先で岩を衝いた。すると岩は二つに割れ、清水一時にどつと湧き出でて滾々として盡きず、深く地を掘つて流れた。今も「キナジー」に二つと、新竹と南投境に二つ殘つてゐる峽谷がそれである。

そこでマブタは一度「ピンサバカン」に歸り、更に多數の人を伴つて「キナジー」に降

り若者を分ち潰して、各社の基を開かしめた。即ちサイホブタ●ハジュンサイホ●イバンサイホ●ブユンサイホ等を「チンシボ」社に、ワタンブタ●ムチャンガワタンを「タケジン」社に、ビジコ●オツヘビジコ●ハツクツビジコの三人を「タイヤカン」社に、マバオジヤス●ミツセッツを「サカヤチン」社に、ミッチャンガワタン●ワタンブンガを「タバホ」社といふ風だつた。かくてマブタは一人「ピンサバカン」に歸り、蕃刀(てきし)、斧(はかろう)などを子孫に授けて、假令自分の死後でも、互に爭ふことなく耕作に勵めよと敎へた。かうして大植民の結末がついたのである。

話は前に溯るが、祖先等が美地を求めて探し歩いた頃、不圖臺灣人に遇つたので、我等も平地に出でようといふと、汝等は少數だから山地に止りて棲息せよと答へた。祖先等は何によりて我等を少數だといふかと詰ると、臺灣人はそれでは喊聲をあげて見よ、我等に及ばないだらうとて、双方聲を發して强弱を比較したが、蕃人は彼等の半數にも及ばなかつたので、遂に平地に出る事を斷念した。けれどもその腹癒せの爲めに馘首の風が起つたのである。其後間もなくパヤンブタが鹽を得んものと新竹海岸に出た時、一人の婦女に遇ひ、妻にもと寄り傍ひながら山に行かないかと手を取つたが、土人の爲めに不意に後から斬りつけられて斃れた。それ以來兩族間の不和は一層酷しく、折もあらば復讐しようと敦圉いてゐた。

すると間もなく多くの臺灣人がテンタナ溪を渡り蕃地に入らうとするのを探知したから、マブタ等は橋下に隱れ、彼等のなかば渡らうとするところを橋を斷つて落し至滅せしめた。併し追擊を惧れたので急ぎに急ぎ逃れて、漸く六日の後に歸社する事が出來た。その時は流石のマブタも氣息が奄々として水も咽喉に通らない位だつたので、子等は口々に水を哺んで吹き込んだと傳へられてゐる。併しこれ位ではまだ恨みが晴れないので、今度は大擧してパヤンブタの遭難地に赴いた。そして夜に入つて偵察せしめると、恰も好し臺灣人は皆枕の孔から頭髮を垂れて熟睡してゐる。そこで勇士五六人が竊かに室內に入つて悉く頭髮を結びつけた所へ、一時にどつと鬨をつくつて攻め入つたので、忽ち數百人を馘首する事が出來たので、首は皆「タウカン」(網袋)に入れて勇しく凱旋した。すると婦女子等の喜びはいはん方なく、不倶戴天の仇をよくもかく



まで慫して呉れたと、手を執り踊り廻り、酒を供へて祭つた。これが後世の首祭の始めとなつた。

註　「パツパクワカ」は蕃社によつてはいろ〳〵訛つてゐるが、「耳ヶ峯（ブタナオイ）」の義で山容から來た名、卽ちそこに巨巖があつたからである。今の大霸尖山（一一七九二尺）をいふので、一部のものがシルビヤ山（一二九七二尺）とするのは誤である。

「ピンサバカン」も同樣で發音その他少しづつ異つてはゐるが要するに、一、岩石の裂けたる、二、その場所、三、祖先發祥の靈地、四、女陰などと解せられる。

サゼク族

霧社蕃

昔「ブノホン」といふ所に珍らしい靈樹があつたが、木精化して男女二神が現はれ人類の始祖となられた。その頃は粟でも肉でも自由に得られたのに、人口が次第に殖え

てからは、終歳耕作に勞れても食に飽く事なく、一生涯營々として休むことさへ出來なくなつたので、各々美地を求めて移住した。これ等の祖先の中には「シブナワン」(花蓮港)に移つたものもあれば、西方に進んで熟蕃となつたものもある。その中一部の者は現今の「タロワン」の地に止まつた。「タロワン」に棲んでゐたものが我等の祖先なのである。そして霧社十二社のうち、「タウダア」蕃から移住して來た「ブカサン」、「ボアルン」の二社を除いた他の十社は、大凡四五十年前に現所に分離したものである。

霧社蕃　イヨンパワン
　　　　パワンポホク
　　　　ワリスラパイ

タウダア蕃

古昔何所からか一人の婦人が漂然とやつて來た。あまりつれ〴〵だつたので、そこにゐた豚と戯れてゐたが、間もなく姙んで男兒を産んだ。此子長じて青年となつたが、

もとより遂古無人の時代だから適當な配遇者を得られない。それにまだ衰へ切らぬ母親は意馬の狂ふに耐へかねたのか、一策を案じたので、或日山奥深くわけ入り木の液をとつて顏を染め、素知らぬ顏して我が家の前に立つた。そして青年と妹脊の契を結んで間もなく女兒をあげたが、日數經るに從ひ染めた色が褪せると元の母となつた。若者は大いに驚き悔み、きつと神罰があるだらうと怖れたから、さすがに母も恥しくて其の儘何處かへ立ち去つてしまつた。

後に殘つた若者も親子同志の抱擁が、こんなに遂い時代では必ずしも不義ではない、又人類の存續といふ上から見ても却つて望ましい事だと考へるやうになつた。そして已れの娘と契つて子孫が次第に繁殖したのである。それから母は母でこゝを去つて後、又犬を夫として數多の子を生んだ。その子孫も追々增えて到る所に社を建てたさうである。「タウダア」蕃と、「トロック」蕃とは此の犬と豚との子孫である。

ワタン、ワツサオ
タイモ、チーライ

トロック蕃

上古「リギヤカボツポ」といふ所にあつた巨樹から、鳥獸や蛇と共に生れ出た人間の體から男女二人の子が生れた。この二子長じて夫婦となつたが、未だその術を知らない。そこで獸類に習つて「カントホチ」しようとしたが、失敗に終つた。そこで遂に「サリシユーライ」を試みたが、女はひどく苦しんだ。かくて漸う〳〵の事で「ピピ」を〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇境に入つたのである。そのうち一子が生れ樂しく暮してゐたが、ふとした事からさしも太く逞しかつた夫が黄泉の客となつた。女の悲嘆はいふまでもなく、かくては今に人の種も絕えて、世は鳥獸や蛇類のものとなるだらうと思ひ煩つてゐたが、或日子を諭していふやう、「萬物は皆繁殖の道を知つてゐる。我等人類もやはり其れを知らぬやうでは、鳥や蛇に亡されてしまう。お前も早や青年だから娶らねばならぬ、どれよい嫁御を探して來よう」と、或日山に入つたが、もとより他に女のある筈もないから、自ら木の液を取り顏に塗り相を變じて歸つて來た。「お前はどうした女か」、青年が問ふた。「今朝ほど御身の母が來られて、是非

伜の嫁にと望まれ、一足先きに行けよといはれたのです。妾は許された御身の妻なのです」と答へるので、その儘偕老の契を結んだ。

それから子孫も追々繁殖して、數世ならぬうちに土地の狹隘を感ずるやうになつたから、「オビン」といふ所に移つたが、此處もやがて狹くなつたとて、移住を望むものが多くなつた。そこで平地に出る者と山に止るものと二隊に別れることとした。此の時人數に過不足あつては後日の爲によくないから平分しようとて、二隊各々聲を揚げて强弱を計つたが、一方の隊が弱かつたから他方より人員を分ち與へた。そして山を降つた一隊が麓についた時、再び鬨の聲をあげたが、平地方は恐ろしい强い聲であつた。山に殘つたものは始めて謀られた事を知り、「よくも我等を欺いた、さうだ我等にも所存がある、今に見よ馘首して數を減らしてやるから」と憤つてゐた。そこで社衆に刺墨して平地の者と區別し、一社協力して平地人と見れば馘首したのである。「トロック」蕃は山に殘つたものの子孫で長く今の「タロワン」社の地に住んでゐたが、人口增殖の結果更に別れて現今の各社となつたのである。

トロック蕃 ソツパワン

内太魯閣(ないたろこ)蕃

昔「ピヌソワカヌ」といふ所に一巨石があつたが、或日其の石裂けて中から男女の二人が現れた。二人は何事もなく數日を過したが、或日頻りに體内に温氣を感じ、一種の衝動に堪へかねたから二人は思はず緊く抱擁した。そして耳目鼻口を合せ、手足を絡んで見たが滿々たる鬱氣は晴らされなかつた。丁度この時二匹の蠅が飛んで來て〇〇り合つたから、二人はこれに倣ふと、鬱血忽ち散じ心氣爽快を覺えた。二人は大いに喜んで「ロアヌサイギリアヌ」—金蠅の如く巧みに—といつた。かうして陰陽相和するの道を知つたから、間もなく二人の子女を儲けるやうになつた。かくて生れた兄妹も漸く長じたが嫁娶の相手がなかつたので、妹は兄に向ひ「我等の代になつて子孫を絕やすやうでは、兩親の志を無にするといふものです。私はあなたのために良媒となりませう」といつて出て行つた。そして山麓の巨石の所で顔に煤烟を塗り容貌を變へ

て待つてゐた。約束の日になつたので、兄は麓に下つて人やあると探したが、敎へられた通り果して一巨石があつて、そこには既に一婦人が待つてゐる。「そなたは誰？」青年は近づくとすぐ尋ねた。「妾は御身の妹御の賴みで、今此所に來たところです、どうか末永く劬つて下さるやう」といはれ、兄は欺かれるとは露知らず結んだ妹脊の契りの絕える事なく、子孫數多く產れて、やがて土地も狹くなつたから、老人相謀り社人を分けて二とし一を此所に止め、他は適當な所を求めて移住する事とした。其時喊聲によつて人數を平分したが、一方に智者があつて最初半數を岩陰に隱し置き、大多數を奪ひ取つたから、次には百雷一時に鳴り響くやうな鬨をつくつて揚々と下つて行つた。欺かれた方は「己れ待て、憎い奴等だ」、「人を返せ〳〵」と追つかけたが應ずる色もなく、「それ程人數が欲しければ、力づくで取返せ」、「神は正しいものに味方する筈だ、我等を馘首しても決して苦しうない」「爭議が起つて曲直が判らぬ時は、我社に來て首でも馘れ、痴者（おろか）」などと口々に罵つて行つてしまつた。此れが平地蕃の祖である。山に殘つたものは刺墨して彼等と區別して報復に力めた。今に榮えてゐる太魯

閣蕃は其の子孫である。

外太魯閣（ぐわいたろこ）蕃

シヤチタツパス

太古蠅の卵から出た男女があつた。やがて美しい青年となつたが、或日何心なく見合すと、互に同じやうなものを具へてゐる。どうしてかうなのかしらと、一種の好奇心から耳目鼻口と次〳〵に合せて行つたが、下腹に行くと各々異樣のものがある。不思議に思つて兩人は相擁しながらその〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。そして初めて快感を覺えた二人は、これこそ「オツトフ（神）」の授け給うたものだと歡び一層の親愛を增すやうになつた。かうして一女二男が生まれたが、子女互に婚（あ）ひ十子を擧げた。やがて人間の數も漸く增えて來たから玆に始めて同腹の子の相婚を禁じた。それ以來子孫の繁殖著しく土地の狹隘を告げたので、社衆を二分し「タロワン」（南投の附近）のあたりから七脚川に出たものと「ワヘ

ル」に赴いた部隊とに別れたのである。

「ワヘル」に移つたものが更に「イボ」、「シラガン」を經て現在の各社となつたのである。即ち「ワヘル」から「ブチガン」、「コロ」、「タツキリ溪」、「三棧溪」、「バトラン」に分住し、「ブチガン」のものが又「グーグツ」に移つた。そして內太魯閣とは今の三角錐山を界とし、その東が外太魯閣の地、以西が內太魯閣と定めたのである。

コロ社　ウミンヤツカチ

タウサイ蕃

往古我等の祖先は「ブンシヤカン」といふ所にゐたが、其後「ハブンボーロツク」に到り、そこで「カーシ」（土人）と分れた。喊聲の强弱で人數を平分しようとした時「カーシ」に欺かれて多くの人員を奪はれてしまつた。その時から土人と區別するため刺墨といふものを發明し、額に入墨した。―今は狩獵の獲物の多い事を望んでするのだが

し。そして土人さへ見れば馘首して鬱憤を晴す事となつたのである。「カーシ」は平地に出たが、我等の先祖はやはり山に止まつてゐた。そして次第に各々好む所を選んで移住した。中にもマボ、ボタの二人は、「ハブンボロツク」から「タロワン」に移り其所に子孫繁榮したが、再び移動を始め、今の「サラマオ」、「シカヤウ」の地を經て中央尖山を越え、尚東進して今の「ロードフ」に社を建てた。「ロードフ」から分れたのが現今の各社である。

ロードフ社　頭目

バトラン蕃

昔祖先の南投廳下（今臺中州南投郡）に在つた頃、バーラシラゲといふ男があつた。或時中央山脈を越えて東に出で、霧社蕃の狩獵地である今の「タロコ」新城「バトラン」方面を探險したが、土地が膏沃であるから子孫の長く繁榮する所だとて社人の移住を勸めた。

此の時霧社に脛の長さ四尺を越える巨人があつたが、己が狩獵地に移住するものがあ

るのを怒り跡を追つて來た。そして今の北埔の西方半里の要害に逐ひつめ戰を挑んだが、パーラシラグは勇戰して、遂に巨人を斃し首をあげたから、何人も妨げるものはなくなつた、これが我社の祖である。

ウミンワタン
パヤンポヘン

木瓜蕃

昔祖先等は霧社蕃と同棲してゐたのであるが、其後次第に東進して遂に木瓜溪の沿岸に占居したのである。それから幾十百年經つたか傳聞せないが、今から凡そ十七八年前人字山の東麓に移住して現今の基礎をなした。

タオン　ナウエ
アウイ　ラパイ
アウイ　タワ

註　話者曰く、當蕃は大討伐(明治四十一年)をうけて、老蕃、有力者を失つたので、古傳說を知る者がなく、祭事その他の事でも皆傳を失つてしまつた。昔から蕃社では丁度語部のやうに傳說を諳習してゐたのだがこんな事も次第に廢れて來て次第に古傳を失はうとしてゐるのは遺憾である。

ブヌン族

巒蕃

太古「ラモガン」といふ所に一人の男と一人の女があつた。或夜男は、蛇の拔殼で女の脊を三度打つと姙娠するだらうと夢みたから、翌日早速蛇の拔殼を探し出して、夢の通りにすると果して孕んだ。そして間もなく男子を生んだが、かうして遂に四男三女をあげた。子等成長の後互に夫婦となり子孫大いに繁殖した。丁度その頃「イロッカアン」に大蛇現はれ、濁水溪の水を堰き止めて大洪水を起したから、人々は驚いて高山を目がけて逃れた。何しろ俄かの事だから各々思ふ方角に進み、新高山に逃れたものや、卓社大山や東巒大山などに別れて行つたものもあつた。此の時余りに周章てゝ火を失つてしまつたので、不便此の上もなく、鳥獸の肉も生で食つたものである。併

し一度火食を知つた祖先等は其の美味を忘れ兼ねて、日毎に四方を眺めては火の在處（ありか）を探してゐた。所へ或夜新高山の頂上に火が見えるので、大喜びで誰か行つて火を求めて來いと叫んだが、水上十數里の隔りには誰とて行かうとはいはぬ。如何したものかと案じてゐると、一匹の蛙が、「それでは私が火を持つて來よう」とて水中に潜り泳いで行つた。行きは行つたが、時々水に潜るので折角の火も消えてしまふのであつた。そこで空飛ぶ鳥ならばきつと目的を達するだらうとて「カイピシ」鳥を呼んで言ひつけると、「カイピシ」は翼を廣げ羽ばたきするよと見るうちに、一直線に新高さして飛んで行つたが、やがて火を口に含んで首尾よく使命を全うした。それからといふものは祖先等は「カイピシ」と蛙とを德として決して殺さない。若しかそれを犯しでもすると忽ち衣服を燒かれるといはれてゐる。かうした所へ一匹の蟹が出て來て、蛇の横腹を二度まで鋏（はさ）み切つたので、流石の大蛇も痛さに堪へかねて逃げたから、さしも漫々としてゐた大水も見る／＼退いてしまひ元の陸地が現はれたから、今の巒大本社の「タンシンモク」に降つて家を建てた。今もある古びた家がそれだといはれてゐ

る。

初め祖先が東巒大山に逃れた時族長カルペスペスの外に五名の男と一人の女とがゐた。所が女は男の一人と竊かに「マグハヒ」したが、思はず歡聲を發したので、何事かと覗いて見ると二人が抱擁してゐる。忌々しくてたまらないから無理無體に、其の女を共有の妻とした。かくて六名の子を産んだが、又女子は一人きりであつた。そこでまた一女が五男に配して子を産んだが、次の代からは一男一女の好合を得た。それからは互の子を娶りあつて夫婦としたので、暫くの間に子孫が著しく繁殖した。そこであるものは「フナン」に移住して「タケフナン」姓の祖となつた。同時にワタンといふ者が出獵して今の丹大社の邊に來たが、犬糞の中から瑞々しい黍が生えてゐるのを見て地味の良い事を知り、妻子を連れて移り住み丹蕃の祖となつたのである。それから「イクモ」や「ショーレー」を經て現今の各社になつたのである。

我が社も四代前には巒大本社に居つたが、その次の代にはもう「ショーレー」にゐた。そして今から五十年許り前に、初めて父が此の「カドグラン」に移り社を建てたのであ

る。

附。

タナピマ家系圖

○カルペスペス（洪水の頃）——ロペ・（巒大本社にて生る）——バヤン
—ピヤン—テヤン—ビリヤン—トッパス—ロペ—バヤン
—テヤン（大正三年死）——バヤン（話者、現頭目、六十歲以上）——テヤン（長子）

昔カルペスペスが東巒大山を降つて、今の巒大本社の邊に來た時、そこに一つの奥深い洞穴があつて、中から白煙が縷々として立騰つてゐたので、若しか人でも居るのではないかと、松明を點して中に入ると、道は迂餘曲折して赤螺（あかにし）の殼のやうである。それでも次第に奥へ進むと突き當つた所が大きな室になつてゐる。其の室の中に臼があつて二三尺位の小人が腰かけてゐる。煙はこゝから出てゐたのである。

カルペスペスは「今日は小人さん」といふと、小人は「お這入り」といつて招くのであ

つた。そこで彼はいはれるまゝに近寄つて、「空腹だから何か食べさしてお呉れ」と賴むと、快く承知して奥の方から澤山の物を運んで來て前に陳べた。見ると「ライアン」（小豆）と米、粟など曾て見た事もない珍らしいものばかりで、食べると實に美味くて飢餓も一時に醫（なほ）つてしまつた。彼はこれは重寶な物だと思つたので、是非わけて欲しいといふと、小人は首を振つて、「汝等が來て食べるのは宜しいが、種は與へられない」と云ふ。カルペスペスは致し方がないので、點頭きながらふと傍を見ると「プンヌ」といつて金屬製の鉾がある。「それでは此の鉾を讓つて呉れないか」と手に取ると、「それも寶物だからやられない」と拒んだ。重ね〴〵の拒絶に多少苛立つた彼は、普通の手段ではいけないと思つたから、隙を窺つて先づ「ライアン」を足の下に落し、次第に股間を傳らせて行つて、遂に「プタシ」の包皮の中に隱し、素知らぬ顏して別を告げ、歸りにはわざと松明を消して、暗がりを幸に「プンヌ」を盜み取り元來た道を大急ぎで逃げ延びた。そして早速「ライアン」を栽培したが、年每に殖えて我等の食糧となつた。「プンヌ」は寶物として子孫に傳つたが、今から七十年程前にトッパスの家から、巫者として名高か

つた「ピシテボアン」社のエクナアル家に讓つてしまつた。

註　エクナアル家にあつた「プンヌ」は大正四年二月南投廳警務課長巡視の折、持ち歸つたといふ。恐らく現今石印化蕃にて結婚の結納品として缺く事の出來ない鉢の類だらう。

カトグラン社　パヤンタナピマ

タケバカ蕃

太古「エメバル」山の項上に在つた巨石が割れて、中から數多の人間が出たが、そのうちタケトル、タケバカの二人が我社の祖となつた。その頃洪水があつて地上一面の海となり殘つたのは新高、巒大、郡大、シルビヤの諸山と、卓社大山の頂ばかりとなつた。人々は幸に新高山の頂上に避難する事を得たが、粟を失つてしまつたので食べるものもなく困り果ててゐた。偶々獸類も山頂さして避れて來たので、それを捕へては生のまゝ食つて露命を繋いでゐたが、火がないのが何より不便なので四方を見渡してみると、卓社大山に火光が見えた。そこで或鳥に命をふくめて貰はせたが、途中で

失つてしまつた。次に尾長鳥を遣したが亦溺死してしまつた。そこで「カイピシ」鳥を遣した。すると「カイピシ」は搏き勇ましく飛び去つたが、やがて首尾よく火を持つて歸つたのである。

所がこの時大蛇と蟹との戰爭が始まつて、蟹が大蛇を追ひつめその胴を鋏み切つたから、大蛇は痛みに堪へかねて、西方さして逃げ延びた。すると其の逃げ道が一條の溪となり、さしも漫々とした大水を切つて落したから、再び元の陸地を見るやうになつた。人々は喜んで山を降り、美地を求めて離散し、今日の各社の基をなした。

タマロワン社　ワランタシカバン

太古、或る所に人の形をした骨のないものが二つあつて、いつも匍匐つてゐた。或時蟻、蚊、蛆などが澤山集つて來て包圍たから、驚いて立上り遂に歩くやうになつた。それが最初の男女である。かくて二人は溪底を徘徊うてゐたが、可なり疲れたので、そこに蹲踞つて休息した。所へ二羽の小鳥が飛んで來て、もつれつ離れつしてゐるう

ち遂に交つた。そこで彼等は始めて和合の道を知つたのである。それから子孫次第に繁殖したから、兄妹相婚を禁じ、血縁の疎遠なものが互に娶りあひつゝ分離する事となつた。我社の祖はバカといふ者で元蠻蕃だつたが、出獵して此の地に來ると、如何にも地味が肥沃である。そこで多數の同志を募り、道の中央に大きな岩を立てて、其れを飛び越えた者ばかりを連れて來て蕃社を建てたのである。

其頃は土地も廣く人も少なかつたから、肥沃でさへあれば平野は勿論海岸にまで移住したもので、土人とも兄弟のやうに睦じくしてゐた。雞を屠つたといつては互に饗し、餅を搗いたといつては分ちあつた。山野の開墾なども協力してやつたものである。所が或る新らしい開墾地に、一本の茄苳（かたん）の樹があつて幹太く枝葉茂り、地面を蔽ふこと數十坪なので、これを伐らねば折角の畠を失ふ事とて、土人蕃人協議の上、愈々明日は伐採することゝ定めた。うつかり決議したが、丁度その日は蕃人の祭だつたので、止むなく老人一人を殘したまゝ、悉く歸社したから、老人は暫くその木の下で休んでゐたが、見る〳〵幹の所が開いて、する〳〵と引かれるやうに中に入つてしまつた。

そして幹はもとの通りに閉されたのである。

翌くる朝、約束に違はず土人等が集つて來た。そして蕃人の來ないのは蕃社の祭の爲めであると知つたから、彼等ばかりで仕事を始めた。併し巨木のことゝて中々捗らない。其日は一先づ家に歸り、次の日早く來て見ると、不思議や巨木は元の姿になつて一刀も加へた氣色もない。併し其日は殆ど伐り倒す位捗つたが又々暮れたので、各々明日を約して歸つて行つた。三日目の朝來て見ると、木は依然として、刀痕一つさへない。餘り怪しいから、其夜は家に歸らずに、樹を取り卷いて眠つた。すると或者が鋸でなら、容易く截る事が出來ると夢見たから、早速鋸を取り寄せて懸命に引いたので、さしもの大木もその日の中に伐り倒す事が出來た。

こんな騒ぎをしてゐる間に、蕃社では首尾よく祭を終へたものだから、若者どもは急いで茄苳の所に驅けつけると、殘しておいた老人の姿が見えないが、木は見事に伐られてゐる。よくも伐つたと近寄ると、彼の老人の首が轉がつてをるし、身體は幹の中に挾つてゐる。きつと土人が我等の違約を怒つて、老人を殺したに違ひないとて待

つてゐると、數名の土人が來たから忽ち躍り出て馘首した。それからは何回となく土人さへ見れば斬り殺したが、彼等の數は非常に多く、殺しても〳〵も後からいくらでも現はれ、宛然韮の芽を摘むやうなので到底叶はないとて、遂に祖先等は平地を思ひ切つて山に遁れ入つたのである。

丹蕃　卡社　テャンマトラヤン

昔ミノオンネ、ミノオンネポーといふ兄弟があつた。或時弟ミノオンネポーは兄に向つて、「私はぢつとして斯んな所に棲んでゐるのが嫌になつた」といふので、兄は「それではお前は薪採りにでも行つて來い、氣も晴れるだらうから」と云ひつけた。弟は薪を採つて歸る途中、ふと本島人と行き逅ひ少しの酒を貰つて飲んだが、その儘連れられて彼の土人の家に行き、一年間といふものは其所に熟睡してゐた。「良い氣持だつた」と目醒めた時、主人が傍に寄つて來て、「醉ざめにはこれが藥だ」とて野菜を勸

めた。取つて食べると心氣爽快で凛とした青年に復つた。それを見て喜んだ主人は「お前の家へ行かう、一體何處かね」といふのでミノオンネポーは立ち上り「それでは一緒に行かう」とて出發した。そして以前の山に出たが、彼のいつかの薪は既に朽ち果てゝ用をなさないから其のまゝに棄てゝしまつた。

兄の家に著くとそこには何人もゐない。いくら探しても兄の姿は見當らないから、兩人で暫くそこに住んでゐるうちに、本島人から文字や耕作法を學び、牛などの家畜を授けられた。かくて弟は遂に臺灣人となつてしまつたのである。

一方兄ミノオンネは諸所方々を尋ね廻つて今の社仔(ヒノクン社)に來た時弟に逅つたが、弟は餘程の物知りになつてゐて、到底二人の一致共存は望むべくもなかつた。兄は弟以外に人間といふものは殆ど知らなかつたが、この「ヒノクン」社に一人の女がゐたので、その婦女に餘程好奇の眼を瞠つてゐた。その中だん〳〵懷しみを覺えるやうになり、遂に夫婦の交りを結んで、次第に子孫が繁殖する事となつた。

或時ミノオンネは妻の産んだ一人の子供を屋內に置いて耕作してゐると、太陽のた

めに殺されて數多の蜴蜥(とかげ)となつた。ミノオンネは大いに怒つて、粟五本づゝを耳朶に挿し、蜜柑を家の前に植ゑ準備滯りなく揃つたから、早速太陽征伐に赴く事となつた。かくて千辛萬苦の後漸く太陽に近づいたから、茅で家を造り太陽を待つてゐたが、光熱のために茅が枯れてしまひ、屋根に隙間が出來て直く見付けられるから、中々目的が達せられない。次に他の草で葺いて見ても同じく枯れて太陽を逃してしまつた。そこで「アヒキ」といふ草で葺いて、今度こそはと隱れてゐたが、矢張り枯れてしまつて駄目である。これでは果しがないので、太陽を目がけて射る事とした。そして翌日太陽が近づいて來るのを待ち構へ、狙ひ定めて射るとうまくその目に當つた。太陽は大いに怒つてミノオンネを追ひかけ手を伸して摑まうとしたが、彼は素早く指の間から遁れてしまつた。「失策つた」と、太陽は指に唾をつけ蚤か何どのやうに彼を取つて押へた。ミノオンネは今は絕體絕命なので聲を絞つて、「汝は我子を燒き殺したからその怨みで射たまでである、つまり曲は汝にあるのだ、命だけは許せ」といふ。太陽はから〳〵と笑つて「汝のいふ事は皆間違つてゐる。子供の死んだのは汝等の不注意である。汝等の日々愉快に生活する事が出來るのは皆太陽の御陰ではないか。このやうな大恩をうけながら、まだ一度も報恩の祭さへした事がない。今後豚を屠り酒を造り我を祀るならば人の死ぬ事はあるまい」とて祭の方法まで敎へて吳れたから、ミノオンネも其の非を曉り、早速家に歸り社衆に告げて報恩祭を行つたので、五穀も豐熟し子孫の橫死するものもなくなり、人口は益々增え榮えて、數十年の後には丹蕃、卡社蕃、巒蕃はもとより、花蓮港の阿眉蕃の祖などが出來たのである。

丹大社　ラオンカルムタン

郡(ぐん)蕃

昔「ラモガン」といふ所に二人の兄弟があつた。兄をブツクン、弟をタツパンと云つた。ところが間もなく「プン」といふ者數名やつて來て兄弟を苦めたから、二人は山をさして遁れて行つた。丁度その時一匹の蟹が出て來て、彼等を新高山に導いて行つた。兄弟は其所で弓を造り、鳥獸を獲て餘命を保つてゐたが、何時まで山上にも居ら

れないとて、「アサンライガ」(本社)に降つた。今の「イバホ」社から「モスタルン」社に行く途中の右方に當り谷を越えた所がそれである。其後兄弟不和となり、弟のタツパンは西方に進み、ヌ族達邦社の祖となつたといはれてゐる。

兄はそれから日々獸を追うて、山を跋み河を渉り、何所を目當てとなく進む中 或日海岸に出た。そこで初めて粟を得たから、良いものが手に入つた、と喜び勇み大切にして再び山に歸り、地を拓いて栽培したが、一本の種粟から數百本の粟穗が出來た。それから蕃社到る所に粟が栽培せらるるやうになつた。かうしてブツクンによつて今の各蕃社が開かれたのである。

イバホ社　アリマンタケシタラン
タケシテパナン

昔天上から落ちて來た「ビタホル」(夕顔)の中から出た虫があつた。「ソツカル」とて美しい羽の生えた小さな虫だつた。その虫が俄かに變形して人間となり、子孫が增殖するに

從つて四方に移住したが、南投方面に向つたものが我等の祖先なのである。其後一時は「ハタラン」に棲息してゐたが、タキシタホワンとか、ライシエなどいふ者が東埔(とんぽ)方面に移住し、今から凡そ三代以前には既に此所に移つてゐた。

郡蕃を總稱して「イシブクン」と呼ぶのは、頻りに四方に移り住んだ時代に、今の「イバツコ」の南の「イシブクネ」といふ所に住んでゐた事があるからである。

東埔社　タキシタホワンアリマン

昔「ラモガナ」にあつた瓢簞と土釜の中から現はれた男女から澤山の子孫が出來たので、進取的な若者どもは、そこを去つて「アサンライガル」に移つた。或者は更に又そこを立つて、今の「カトグラン」の附近の「ウシャバン」に分離し、或者は尙ほ進んで「イバホ」の下にある「ウシャスルン」に移住した。

「ウシャスルン」に移つた者の中にビリャンといふ者があつたが、そこも數年ならぬに人口の增殖が著しいのを見て、遂に東埔に下りそれから此處に來たので、彼れこそ

我社の開祖である。

干卓萬蕃

パハフル社　アンノタケルルン

昔「ミントンゴル」といふ所にあつた二つの洞穴から產れ出た男女があつた。二人は成長の後夫婦の契を結んで睦じく暮してゐたが、何時とはなしに妻の腹が膨れて來て今にも裂けんばかりの有樣に心を痛めた。ところが或日妻は腰部の疼痛を訴へ、呼吸も絕え〳〵になつたから、夫は周章狼狽するばかりで、如何ともする事が出來なかつた。その中一しきり叫くとみると、少時して不思議な小さなものが轉り出た。かうして蠢動くものが四つまで產れた。それが男女二人づゝの小さな人間であつたから、二人は喜んで育てあげた。それ等の子女が又互に婚しては子を產んだので、數十年の間に附近の木の實草の實も食ひ盡したから、次第に各地に分れ住む事となつた。或者は今の集々街方面の「シリムツカン」といふ所に移つたが、其後何處に進んだかわからない。

我社の祖先は可なり長く「ミントンゴル」に殘つてゐたが、やがて「ビンタガン」に別れ、それから「タウビンコアン」を經て「バニトウラン」に移つた。

「バニトウラン」は祖先等が上陸して、足跡の第一歩を印した所である。其初め故土を離れ海に浮んで本島に近づいた時、岸に澤山の「バニトル」(木槲)があつたから其の名を採つたのである。そこに幾年か住んでゐる中、草も食ひ盡し、木の實も取り盡したから、「シヤボン」に移つた。そこで初めて「チエーク」(瓢)の美味を知り栽培するやうになつたが、或年收穫した瓢の中から多くの粟が出た。不思議なものだと手で揉み柔らげ、それを月桃草の濶葉に包んで燒け石の上に載せて置き、暫くしてから食べてみると實に甘い。人々は大いに喜び、我も我もと其の種を貰ひ受けて栽培したから、粟の收穫は忽ち增えて行つた。併し人口の增殖は益々著しく「シヤボン」も狹くなつたので、「シンタラアツカン」に移り、更に「チワツロ」に轉じ、そこで巒大及び丹大の諸蕃と別れて「カネトワン」に赴いた。

其後卡社を經て卓社の「アサントーロ」に暫し止まつてゐたが、又別れて此の地に移り干卓萬を建てたのである。そして干卓萬といふのは始祖タクタバンの名を傳へたものである。

タクタバン家系圖

○タクタバン─┬─アベシタシバラン─┬─ボンカウーシャボン─┬─シャツカ
　　　　　　└─ロツペ　　　　　└─アラン　　　　　├─マーライ
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　└─カンヅアン
├─ハツコ
└─ソリバーボツコツーシャリランーウラン（現頭目約六十歳）

バクラス社　バキシヤンカエモツ
オクトー社、バリバヤンヤライ
ルルン社　バリバヤンタイモ
タクス社　ダシバルアンウーラン

卓社蕃

祖先はもと「カネトアン」に居たが、其後「ラフラン」に移り更に「ハルボアン」、「カリモアン」、「アサンライガ」、「アサントロ」、の諸地を經て遂に「シャバカン」に來た。そして此處に移つたのは六家族だけであつた。蕃社名は「シャバカン」の地名に起つたのである。

マクラバン社　バリバヤンマナマ
シユーラウ社　バリバヤンマナマ

祖先等が昔「ラモガン」にゐた頃には我等にも文字があつた。嘗て臺灣人と境界の爭があつた時、石に彫り刻んで界標とした事がある。其時臺灣人は「我等の首は韮のやうなもので、いくら馘つても盡きる事はない」と傲語して別れて行つた。それ以來兩族の間に深怨が結ばれたのである。「ラモガン」では人口漸く增殖したから、我社の先祖は「タケトロ」に移り、更に別れて今の社地に基礎を起したのである。

過坑社　アベシタマラシヤン

ツオ族

阿里山蕃

太古ハモといふ神が天上から新高山に降られて人間を造り給うた。年を經て繁殖した人間の子孫は各々美地を選んで離散したが、やがて大洪水が起つて見る〳〵大海と變じたから、四方に散在した人々も再び新高山に避難した。數多の動物も亦同じく山頂に集つて來た。其頃はまだ穀類がなかつたので、鳥獸を屠つて食としたのである。或時犬を食べようとして之を屠り、戯れに其の首を斬り竹竿の先に突き刺し地上に立てたが、一種の快感を覺えた。猿ならば尙愉快に違ひないとて、猿の首を梟けてみると如何にも面白い。かくて人間の首だと如何かしらなど考へ、遂に社内の惡戯な子供を殺して、竿頭に梟首したが一段の面白さであつた。その中次第に水も退いて、元の

世界になつたから、峯傳ひに麓の方さして別れて行つた。此の時あの子供を梟した事の愉快を想ひ起し、人々が諸所に別れて行くのを幸に、他社のものを襲つては馘首した。馘首といふものはこんな事から起つたのである。そして元來我社は一つの姓よりなかつたが、他社の者を殺してその名を採つて姓とするものが出で、今では十一姓となつてゐる。

洪水の後で我社の祖先は、新高の頂から先づ「イシキャナ」に社を建てたが、間もなく三つに分れ「イムツ」、「トイギャナ」の二社が新に起つた。「トイギャナ」社のあつた所は今の嘉義の附近であつた。當時嘉義地方一面に「ソー」といふ樹木が生え茂つてゐた。そのあたりで「マーヤ」（日本人をいふ）と別れたのである。「マーヤ」は「トイギャナ」の社人の大數を引き連れて北進した。取り殘された社人は一度「タービエャナ」に移つたが、後又達邦知母勝ブラの三社に分れた。達邦といふのは此の社を組織した頃、最初に「ブヌン」蕃の首を馘つて來た勇士の名である。其始め「マーヤ」が多數の社人を連れて行つてしまつたから、後には極く少數しか殘つてゐない。そこで「イシキャナ」の本

社から先づニアウヨガナ、ノアサチヤナ、及びトスクの三姓が來たが、まだ餘程人數が少ない。そこで四方に散在してゐる各社に人を遣はし呼び招いた。すると「トシキヤナ」社からヤシユグ、ウチナの兩姓が來り、「イムツ」からタパンが移つて來た。かうして漸く現社の基が出來たのである。

昔別れた「マーヤ」と今の日本人とは、服裝が全く異つてゐるので、或は他國人ではないかと疑つたが、容貌から體格から我等と少しも變らないので、眞の「マーヤ」である事を知つて懷舊の情に堪へない。

達邦社（たはん）

タパン、アパイ
ヤスユグ、モナ
ノアサチヤナ、ウチグ

古昔女神ニプヌが新高山に降臨して人間を創造せられたが、幾年かの後には餘程繁殖して四方に散らばつて聚落をつくつてゐた。その頃俄かに大洪水があつて、平地は

勿論丘陵も皆水中に沈んでしまつた。そこで各社の人々は周章狼狽して、再び新高山頂に集つて來た。ところが今日のやうに穀類がない事とて、大抵獸類を屠つて食つたのである。或日一人の壯丁が犬を食べようとして棒で撲ち殺し、面白半分にその首を棒の尖に刺通し振り廻しながら毎日無聊に苦しんでゐる人々を嬉しがらせた。次で猿を殺した時も同じく、首を竹竿に刺し通して喝采を博した。かうした惡戲が高じて人の首ならば如何だらうかと、一種の好奇心から社人に害を與へてばかりゐた惡童を殺し、竿につき刺して高く揭げ、非常な愉快さへ感ずるやうになつた。やがて水が退いて山谷が現はれたので、各自隊を組んで山を下る事となつた。此の時壯丁等は武器を持つて、他社の隊を襲つて首狩を勵めたのである。

我社の大部隊は頂から現社地に降つたが、一夜吉夢を得たから永住の地と定め「トフヤ」と命名した。そしてその時以來子孫連綿としてこゝに定住してゐるのである。同時にニヤホサといふ者は、當社の南方の峰を渡つて此の地に來て、我社に合した。ヤタウユガナといふ者も、同じく峯を下り我が社の對崖に住む事となり、ペオンシイ

は「テーバ」といふ所に、ヤイシガナは「マガアナ」といふ所に行つた。又トスクは「ニヤクバ」に出たが後「イシキャナ」に移り、タバンプジョクは「ヤユガナ」に行つて社を建てた。併し間もなく我社のニャホサがヤタウユガナやビオンシイなどいふ者を迎へて來たのを初めとし、他社から移り住むものが多く我社の勢力日に盛になつた。

其他洪水の頃にヤシユグ、ウチナといふものがあつたが、新高山から峯傳ひに進み、濁水溪を下つて西に出て、今の嘉義街の邊「トイギアナ」に着いて社を建てた。其頃の嘉義地方は今見るやうな平坦ではなく、山又山と連り、雜草生え茂つて野獸多く、獲物も常に多かつた。

此所で初めて「マーヤ」（日本人）に會ひ何年か一緒に住んでゐたが、或日「マーヤ」は「我等は他に行かうと思ふ、伴するものは來よ」といひ、ヤシユグ等の勇士を率ゐ何處ともなく去つた。そして別れる時「マーヤ」は弓を取り出し、「我等はいよ〳〵遠征に上らうと思ふ。何時再會が出來るかわからないが、又の會ふ日の印としてこれを渡しておかう」といつて、其の弓を中程から折り、自分は本の方を取り、末の半分をヤシユグの

子孫に與へたのである。

今から十數年前に日本人が再び來たといふ事を聞いて昔話を思ひ出し、「マーヤ〳〵」と喜んだものである。それに實際會つて見ると昔の姿とは全く變つてゐるので、外國人かしらと一度は驚いたが、容貌はいふまでもなく、第一體毛がないのと、皮膚の色が我等と少しも異ならないので、眞の「マーヤ」だと知つて大いに喜んだのである。

かくて「トイギアナ」社の重立つたものは、「マーヤ」に連れられて行つたから、ヤシユグ及ウチナの子孫の大部分は當社に來たが、プラニイといふ者は衆に別れ數人と共に「プラ」社を組織した。それから附近にあつた數多い小社は、合併せられて、達邦、知母勝、「プラ」の三社となつた。そしてヤシユグ、ウチナの子孫は三社に入つて今にその裔を絕たないのである。

知母勝社　ペオンシイ、ポユ
アクワヤナ、パスヤ

我社の祖先も他社と同じく新高山にゐたが、後に別れて今の和（ほ）社の邊に移り、それ

から知母勝（てぶら）に來り、暫しこゝにゐたがトウトウサナ、ペオンシイ、ニヤホサといふ三人が相前後して「ヤヤツ」といふ所に移つたが、俄かに天然痘が流行して全社殆ど絶滅しようとしたので、止むなくそこを棄てゝ「チュフマナ」に暫く棲む事となつた。所が此處は山の麓の溪流に沿つた崖地なので、一度大雨が降ると忽ち怖ろしい音を立てゝ山崩れがして、落付いて居られないので遂に、「メヲゴ」といふ所に移り、それから更に今の「プグウ」に來た。

だから番人は皆「プグウ」社といふのだが、最初の移住地の「ヤヤツ」に漢字をあてゝ「ララチ」と土人がいつたから、今では社名を「ララチ」といふやうになつたのである。

流々柴社（ららち）　老蕃

新高山にゐた我等の祖先が竹頭崎の南の「ロクマサン」といふ所に社を建てたが、清國人に壓迫せられて遂に現今の地に移つた。その頃天然痘の流行猖獗を極め、一社殆ど全滅する位だつた。「イムツ」といふのは人名を採つて名付けたのである。

全仔社（いむつ）　タパン、ウオング　ウンフオヂヤナ、ラパスロング

何時の事か詳かではないが、祖先は「マアヤ」（又はマアヲともいひ大體熟蕃をさすのだが、日本人ともいふ）及び「ブクン」蕃と共に新高山の頂に住んでゐたが、土地狹く人多く鳥獸や魚族も殆んど食ひ盡してしまひ、今は飢餓と戰はねばならなくなつたので、各々美地を求めて移るより手段もないとて、協議の結果一張の弓を取り出し其れを三分して、上部を「マアヤ」取り、中部は「ブクン」蕃の祖先がとり、下部を弦のついたまゝ我社の祖先が取つた。そして他日會（いつか）はん日の符契（しるし）としたのである。かくて「ブクン」蕃は新高山の右方に別れ行き、我社の祖先と「マアヤ」とは打連れて今の知母勝の地に社を建てたが、「マアヤ」はそこにも長く止まらないで、多數の人衆を率ゐて北方さして行つた。「マアヤ」は鳥獸の住まぬ所に行つたから、衣食に追はれて種々のものを發明し、身には綿布を纏ふやう

になつたのである。

「マアヤ」に別れた祖先等は、暫しそこに居住したが、漢族の來住するやうになつてから、今のやうに次第に東方の山中に壓迫されたのである。

和社 老蕃

昔我が祖先等は新高山の頂に住んでゐた。其頃はまだ人口も少なく、唯一軒の家ばかりであつたが、次第に子孫が繁殖したから、或者は分れて知母勝に行つた。古老の傳へによると此の時更に日本の國に行つたものがあるが、別れに臨み竹製の弓を眞中から二つに斫り、後日再會の時の證據にとてその一片を携へ、他の一片を社に殘して行つたといはれてゐる。

知母勝から更に達邦に分れて達邦社の基礎を起したものもある。我社の祖は達邦社の社人でルルといつた。ルルは今の和社溪と陳有欄溪との合流點の「マタバラナ」といふ所に來り家を建て、開墾に從事した。そこに妻子を呼び數年の間住んでゐたが、間もなく「バンタガナ」といふ所に移り、又「フオフオボ」に轉じ、更に「シピリアナヲワフグ」に移住した。其の頃は人口も増殖して社を組織するやうになつたから「和社」と名付けた。「大社」といふ意である。其後リルナといふ者が狩獵に出て、四方を跋渉する中に「ナマハバナ」が平坦で膏沃な地であるからとて此所に移つたが、次第に社衆が集り今のやうな大社となつたのである。

ナマカバン社 ウサイ アナテプスグ
イピアナアイチヤル
テテアナサルング

カナブ蕃

古昔美瓏、排剪、雁爾、塔蠟袷、達邦の各社の者は皆「ナツガ」といふ所に棲んでゐたもので我等の祖先とは同胞であつた。恰度その頃我社にナヲガリ、ナニラヌといふ夫婦があつたが、或日妻のナニラヌはナヲガリに向つて、「咽喉が渇いてたまらないから、畑に行つて蜜柑をとつて來て下さい」と願つた。夫は快く一つの熟した蜜柑を取

つて來て妻に與へた。妻は甘さうに食つてしまつて、「今一つ」とねがつたから、又一つ取つて來て與へると、それも直ぐ食つてしまつて、「どうぞも一つ」といふ。ナヲガリも流石に腹立しく、「何故お前は今日に限つてそんなに我を弄るのか、さほど蜜柑が食ひたいならば、一緒に行つて思ふ存分挽ぐがよからう」とて夫婦連れ立つて畑に行つた。所が妻の様子が平常に異り、どうも他所〱しいので、憤怒の念がむら〱と起つて來て、「この呆者め、ようも俺を奴隷にしたな。後世の見せしめだ、思ひ知れ」とて心強くも妻を蜜柑の木に縛りつけながら、「それ程蜜柑が好きならかうしてをれ、夫婦の契もこれまでだ」と言ひ棄てゝ夫は其場を立去つた。

其時ナニラヌは懐妊して而も產月であつた。余りにつれない夫の仕打に嘆き悲んでゐると遽に產氣づいて、ナビアラギといふ男の子を生んだ。併し縛られてゐるので其子に乳を飲ます事もならず、觀念の眼を閉ぢうち低頭れて歔欷いてゐた。所が小兒は獨りで草の葉に溜る露を飲み、木の芽草の芽などを食べて成長した。かうして物心のついた頃には母の身體は腐つてしまつて骨となつてゐたから、子供は悲しげに、此は

母様の骨だと撫で擦つてゐた。すると不思議にも朽ち果てた骨が動き出し、自づと骨格も組織された。ナビアラギはこれに勇氣を得て、尙も擦ると肉を生じ皮膚を張つた。次には頭なり目出で遂に呼吸し出した。そして最後の擦りで唸り出すよと見ると全く元の形になつた。母は恰も長夜の夢から覺めたやうで、四邊を見廻すと、傍に我子が丸々と太つて賢しげな小供となつてゐる。余りの嬉しさに母子は抱き合つて暫らくは言葉も出なかつた。

やがて母は夫の無情を語り聞かせ、「これからは二人で安樂に世を送らう、お前が何よりの賴りだ」といふのである。ナビアラギは子供ながら母を慰めて「今後は決して御心配に及びません。私のする事を見て下さい」とて立ち上り、赤い葉のついた「シエウル」(茄苳)の樹を蹴ると、葉はすつかり落ちて重なり合ひ、見る間に立派な家となつた。次に又他の「シエウル」を蹴ると、落ち散つた葉は盡く人間となり其數幾百といふ事を知らない。ナビアラギは其酋長となり、日毎部下を率ゐて狩に出たが獲物はいつも山のやうで、肉類の絕える事なく社人は皆美味に飽いてゐた。

或日ナビアラギは平常の如く衆を連れて出獵したが、途中に一つの洞窟があつてその入口に白い小粒の物があつた。何かしらと思つてその一粒を嚙んで見ると甚だうまい。別に人氣がないので、幸に携へて來た粟があつたから勝手に取り替へて持つて歸り、炊いて見ると粟よりは數等美味かつた。それが今の米であつた。そこでもつと澤山交換したいと、十分の粟を用意して同じ洞窟に行くと、入口に一人の偉丈夫が立つてゐる。誰かと尋ねると、我はナヲガリだと答へた。ナビアラギは、「これが我母を殺した父なのか、仕返すべき時は今だ」と思つたが、素知らぬ顏して、「私はあなたの留守中に白い小粒のものと粟を交換した。そのお禮に一献差上げたい、さあ、お出でなさい」。と誘つたから、ナヲガリは子とも知らずに、「それではお邪魔しよう」とてついて行つた。家につくと、ナビアラギは先づ豚を屠らうとて牽いて來て父の前に置き、弓引き絞つて射ると矢は豚を射貫き、勢余つてナヲガリまで刺し透した。併し現在子として父を射たのだから流石に怖ろしく、急ぎ遁れて洞穴深く隱れてしまつた。ナヲガリは射られはしたが、淺手で歩くには差支へなかつたから、直ぐ跡を追つたが旣に洞穴に隱れてしまつたのだから、その儘打ち捨てて置いた。かくて父子の爭は終つたのである。

其後幾年經つたのか詳かではないが、或時ナパアガナといふ者が犬を伴れて狩に出で「ナタナサ」といふ所に行つたが、そこで犬が子を產んだから仔犬をつれで「ナッガ」に歸つた。所が彼の愛犬は仔犬をつれて再び「ナタナサ」に行つてしまつた。再び「ナタナサ」から連れ歸つても、少しも落付かずに又々飛び出してしまふので、彼も仕方なく愛犬に引かれて遂に「ナタナサ」に移つた。これを見たナマイタナ、ルクアナの二人もナパアガナの後から移つて來た。併し男ばかりで不便なので、三人は「ナッガ」から女を連れて來て初めて社を建設したのである。

その頃「ナタナサ」の邊は小川ばかりで處々に瀑布があつたので　魚類は一匹も上らなかつた。だから漁撈といふやうな事はなかつたが、ある時女共が川下に行つた時二匹の魚を捕へて來て放つたから、次第に繁殖して今のやうに瀑の上にも魚を見る事となつた。すると「ナッガ」からも多くの人々が移つて來て「ナタナサ」は次第に大社になりそろ〳〵狹隘を告げる位となつた。此の時偶々土人の襲擊をうけて三十人許りも殺さ

れたから「ラムウムル」に移つたが、やはり狹いので、更に「タワラナ」(三石際)に移つた。所が此所では惡疫が流行して死者が非常に多かつたものだから、「タヌウ」に移つたが、又もや土人に討たれて遂に「ナヲワラ」に移つた。その時日本人が始めて駐在所を建てたのである。

併しナヲワナは耕地が少く社人の食物さへ得られないので、更に「アンハナ」や、「タナウチ」に移つたものがあつた。その後更に數回離合の結果、遂に現今の「タックラ」、「ランツルガ」の二社となつた。そして「カナブ」(簡仔霧)といふのは此の邊の山の名であつて「ナッガ」から直に此所に來た者を「カナガナブ」といつた。簡仔霧に住む者の意である。今我等は「カナブ」にゐるのだから皆「カナガナブ」なのである。

アンアイ、亞ブ

四社蕃(ししゃばん)

太古大洪水があつた時、人類は勿論鳥や獸も皆新高山に逃れた。だから我等の祖先を初め達邦社のものも、簡仔霧の者も、長い間頂上で住んでゐたが次第に水が退いたから、人々は再び平地を求めて降り、阿里港や六龜里の方面まで弘がつたのだが、淸國人が來た爲めに壓迫せられて、再びもとの如く山に棲まねばならなくなつた。我社は六龜里方面から溪をつたひながら上流に溯つたのだし、雁爾(かるぶが)、塔蠟給(たとが)、排剪(はいちやな)の三社は甲仙埔方面から入つたのである。併し元來同族だから言語風習悉く同じであるし、その後も互に緣を結んでゐるから、殆ど渾然として一大社のやうな觀をなすやうになつた。

ビラガン社　チツマタイマイ
ウリガナ

大昔は今のやうに一個所に集り、整然とした社を組織したものではない。南に東に、北に西にと思ふ所に散居點在して各々小聚落をなしたものである。

然しながら、一度大洪水があつた時、四方八方からそれ等の人々が申し合はせたや

うに「タムスルサクラバ（新高山）」と「リスエヒツ」といふ山に集つた。事が余りに急だつたので、此時火を失つてしまつたから、どうかして火を得たいものだとより〳〵協議してゐた所へ、誰かが大聲で、「リスエヒツ」の山上に火が見える。と騒ぎ出した。人々は喜んで遙か遠方を凝視すると、成程火が見える。恰度暗夜の星のやうに煌々と輝いてゐる。「誰か火を求めて來ないか」といふ言葉が口々に叫ばれたが、誰一人行かうといふ者はない。すると一匹の山羊が出て來て、「それでに私がリスエヒツに行きませう」とて勇ましく水を渡つて行つた。暫くすると、山羊は首尾よく火繩を角に結びつけて游ぎ歸つて來た。人々は水邊に立ち手に汗を握つて待つてゐたが、あはれ火繩は刻々に燃え落ちて、今にも角を燒かうとする。然し山羊は疲れ切つて居るので、中々捗らないで、折角の希望も空しくならうとする。人々は氣が氣でない。「山羊を救へ〳〵」と罵りあつたが、逆卷く怒濤を見ては誰一人飛び込まうとするものがない。その中に弱り果てた山羊は角を燒かれ熱さに耐へ兼ねて遂に水中に沒してしまつたから、光明は再び得るよしもなかつた。人々は一時失望したが、「タヲロン」といふ獸を遣つて火を求めしめた。

「タヲロン」は萬難を排して、遂に火を携へて歸り、漸く目的を達したので、祖先等は大いに喜び、其の功をほめたゝへながら皆その周圍に集り撫で擦つたので、毛皮の光澤はいやが上にも增したが、却つて形は變じて小さくなつてしまつたとか。

かくて火は得たが、水はまだ退かない。人々は山の頂を狩り歩いて、鳥獸を獲ては食糧に充てゝゐたが、それも今に盡きようとするので、何うしたものかと、又々思案にくれた。その時一匹の大猪が健氣にもいふやう「私は今から水を渡り隄を決つてそれを他に流さう。然し或は水に流されてしまうかも知れぬ。若し不幸にして溺れ死んだ時は、我が子を不愍と思つて毎日薯を與へて下さい。何で命が惜しからう」とて漫々とした濁水を泳ぎ切つて遙か彼方に渡つた。暫くして猪の姿が見えなくなつたと思ふと、水は一時に切つて落され、滔々と流れ去り、處々に山頂が見え出した。人々は此の機を失はずに、多くの獸類を使つて河を作らうとて新高の頂を下りた時、彼方から大蛇が現はれ、「御身等の先導をしよう」と幾千丈の長さを蜿蜒らせて降つて行く。土は掘れ岩は摧け忽ちに溪となつた。祖先等はそれ今だと下知すると、數千の禽鳥が

群をなして飛んで來各々嘴に小石を含みながら河に降り敷いて河底を作ると、幾百の獸類は兩岸を踏み堅めるといふやうに、協力事に當つたから瞬時に山河溪谷が出來上つてしまつた。其時鷲ばかりは大空高く翺翔して鳥獸の勤勞を傍觀してゐたから、神罰を蒙つて河水を飲む事が出來なくなつた。今でも鷲は河の水を飲むと死ぬから、唯樹上の溜水を飲むのである。

かうして山谷は作られたが、まだ平地は出來なかつた。ところが恰度其時ヒパララサといふ女神が南方から來られ、山岳を押し潰して忽ち平地とした。かくて女神は南部から西部一帶の地を平らにならしつゝ、今將に中央の山脈をも平げようとせられた時、大熊が現れて大聲はりあげ「我等は山に棲むものである。山を平らして平地にせられては居るに處もない。餘りなさりやうである」とて大いに猛りヒパララサのみ子に咬みつき重傷を負はせた。女神は驚いて子の介抱に從事せられ、暫く圓ならしの手を休められた間に、地は硬くなつてしまひ神力と雖もそれ以上平らげる事が出來なくなつた。中央に高い山岳が殘つたのはその爲めである。

祖先等はそれから「ソアチ」に降り、更に「パエチヤナ」に移つて社を建てた。我が社名はこの地名をつけたのである。

排剪社　アビヤ

昔洪水のあつた時社人は皆「アルパプタコル」と「タムスルサクラブ」（新高山）の兩山に避難した。それから水の退くのを待つて「シサーラ」に降り、次第に平地に移住し一時は、鹽水港方面の海岸の宵里社、茄秡社、頭社、芒仔芒社などいふ所にも棲んだ事もあつて、社運隆盛を極めてゐたが、清國人のために討たれ大いに窘迫した結果、遂に二派に分れ、一は辮髮を貯へ止まつて平埔蕃となり、一は逃れて噍吧哖附近の山麓に移り、轉じて荖濃溪沿岸の排剪社舊跡地附近に優力な一大社を組織する事が出來たが、不幸にも又惡疫流行のため社人の大部を失ひ、又々離散の憂目を見ねばならなくなつた。それから一部のものが更に上流に溯り「カルブカ」に移り住むことゝなつた。今蕃人仲間では萬年松溪の邊にゐるものを「シサーラ」の者といひ、雁爾駐在所附近にをるものを

「カルブカ」の者といふて區別してゐる。併し兩所のものが合同して一社をなすに當り、やはり古く慣用してゐた「カルブカ」を採つて社名とするやうになつた。

そして此の地一圓はもと簡仔霧蕃の所有だつたが、彼等が楠梓仙溪の上流に移住したから、祖先等は荖濃溪や獅頷頭方面から轉住したのである。だから最近までは四社蕃の各社から、毎歲年貢として、各戶五升づゝの陸稻を送るか、又は簡仔霧蕃人を招いて饗應したものである。それも今は兩蕃の協議で止む事となつた。

雁爾社　ウリガナパンレン

パイワン族

卑南蕃

大昔、「パナパナヤン」に天降つた女神ヌヌラオの裔にパラピ、パコラシの二神が居られたが、その間に初めて人間が產れた。それから幾代か經つてスルナツク、ラナヲ

といふ夫婦の時代には可なり人口が殖えたから各地に分れ住む事となつた。

かうした移住が行はれてから、又數代の後にカリカリといふ女があつた。夫に早世せられて獨身の侘住居を託つてゐたが、何時の程にか孕んでルグラヲといふ女兒を產んだ。子供は輝くばかりの美しいものであつたが、父無し兒を產んだといふので、世間を憚つて母は常に籠を冠つて外出した。幸ひ飲用水は家の中に井戶があつたので、それを汲んで不自由なく暮してゐたが、やがて社人の疑惑の種となつてしまつた。或日カリカリの留守中に社人が俄かに侵入して大切な井戶の水を汲み去つたばかりか、折角苦辛の秘密まで見破られてしまつた。立歸つたカリカリは此の始末を知り一時は身を切る思をしたが、有ゆる困難迫害に打ち勝ちもり育てたので、漸く美しい娘となつた。ところが娘ルグラヲは何うした因果か陰部に鋭い齒が生えてゐて、折角迎へた婿がねも一夜の中に不歸の客となつてしまつた。重ね〳〵の不面目に母も今は捨置き難く思つたのか、意を決して朱塗の箱を造り、中には餅と「キドウンク」(樹名)と檳榔の實などを詰め、不意に娘を抱いて箱に入れ、上から堅く封をして社人を傭ひ海に運

んで浪のまに〳〵に流してしまつた。箱は搖られ〳〵て潮路を漂ひ、遂に知本社の海岸に打ち寄せられた。折から漁に出てゐた數名の壯丁は、美麗な箱の流れ寄つたのを見て鉤にかけて引き上げた。すると中から女の聲で「どうぞこの儘海に流し棄てゝ下さい」といつたから、人々は驚いたが、「これは屹度噂に聞いた卑南社の美人だらう」といふや、無理に蓋を開けて娘を引き出した。物好きなイライといふ壯丁が竹を程よく切つて〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇齒痕がついて來た。成程これでは大變だと砥石で磨り減らし犬に〇〇〇〇〇、やはり駄目だつた。まだいけないと再び磨つてから元氣な若者が〇〇たが、今度は異常がなかつたから、頭目シガシカヲが連れて歸つて妻とした。そして間もなくアエボアン(男)ナヲナイ(男)、ラシラス(女)カラル(盲女)の四子を産んだ。

子等が成長すると共に、聞き知つた祖母を慕つて何うしても訪ねたいと、切に願ふので、「それぢやナヲナイとアエボアンの二人でお行き、祖母の家には庭に檳榔樹があるから屹度すぐにわかるでせう。無駄足を踏んではならぬ」と母は細々教へるのであつた。兄弟は大さう喜んで夜半から起き出て卑南社さして出發した。二人は祖母に會へるといふ嬉しさで足の運びも輕々と、まだ夜も明けやらぬ頃ほひに早くも卑南社に著いた。そして曉の靄を透して檳榔のある家を探すと、遙か距つた所に兄弟を迎へるかのやうに二本の檳榔の木が高く見える。勇み立つて其の家に行くと白髮の老婆が一人悄然としてゐる。齡はどう見ても七十は越えてゐるが、此の人があの懷しい祖母なのかと近寄ると、目鼻立から態度から確かに母の面影が見られる。「私共はルグラヲの子です、お母さまの命で匙を貰ひに來ました。そしてあなたも母の居られる知本社に來て下さい。お供しますから」。祖母は漫ろ昔が偲ばれたが、海に流した娘の生き存(ながら)へようとは思はれないので、「娘は疾うに亡くなつた筈だ、汝等は孫などと妾を騙しに來たのだらう」と聲荒らげ追出さうとしたが、兄弟は無理に家の中に侵入して匙を探し出し、更に檳榔の實をもぎ取つて逃げ去つた。祖母は一時は怒つたが、ひよつとするとほんとの孫ではないかしらと思ひ惱みつゝ、大事な匙ではあつたがそのまゝに捨てておいた。

兄弟は家に歸つて匙と檳榔の實を母に渡すと母は喜んだが、間もなく死出の旅に赴いた。アエボアン等は母の訃を祖母に告げようと思つて卑南社に出かけたが、祖母の姿は見られなかつた。社人の誰彼に聞くと、いつか二人の若者がやつて來て大切な匙と檳榔の實を取つて逃げた事があつた。それから病みついて遂にみまかつたのだと敎へたから、折角尋ねて來たのにと落膽して知本社に歸つた。

それから暫くたつて或る日の朝、妹のラシラスが程近い小川に行つて、水に映る雲の影に餘念もなく見とれながら洗濯してゐると、何處からか一匹の大蛇が現れて、一口にラシラスを呑み込んでしまつた。晝頃になつても一向妹が歸つて來ないので兄弟は大さう心配して連れ立つて川の邊に行つて見ると、石の上に着物は載せてあるが妹の姿は見えない。不圖叢の中に蛇の匍つた跡があるのに氣付いたから、その跡をつけて行くと「ムラナヲナン」といふ所に大きな穴があつた。そこで急ぎ歸つて刀を砥ぎ切れ味を試みたが、三度目には能く石をも斷つやうになつたから、アエボアン、ナヲナイの二人は勇みに勇んで彼の洞穴に辿りつき、弟が先づ棒で穴を突くと、蛇は怒つて

爛々とした眼を輝かし、火を吐くやうな口を開いて飛びかゝつて來た。兄弟は物ともせず研ぎすました刀を振りあげ頭を目がけて斫りつけたから、さしもの大蛇も眞づ二つに斷り割かれた。それから口、腹、尾とずた〳〵に切り裂くと、かちりと音がして堅いものを取り出した。それは妹のつけてゐた腕輪だつた、二人は亡妹の形見にとて腕輪と大蛇の頭とを携へ歸り「プルトルトガン」といふ所に置いた。

ところがその附近の草木一時に枯れてしまひ食を得る術もなくなつたから、遂に思ひ切つてアミ族の甘蔗畑に行つて、其の莖を盜み取つた。社中のものは其の音を聞いて「山猫だらうか」など獨語するものがあつたが、三晩も續いたから、屹度盜賊に違ひないとて、四日目には一面に灰を撒いておいた。そして五日目の朝になつて檢べてみると、人の足跡が歴然と印されてあつた。そこで社人は其の夜刀鎗を持ち盜人が來たなら、搦め捕つてやらうと敦圍いた。兄弟はそんな事とは露知らず、又も夜に乘じて盜みに來ると、一人の壯丁が見つけて、竹鼓を鳴らして警告した、音を聞きつけた社人は彼方此方の叢から跳り出て取り圍んだ。こりや失策つたと兄は幸す早く逃げたが、

弟は不幸にも多數の人々に取抑へられ縲紲の苦を甞めた。そして日々蛇や毛蟲を食はせ屎尿を飮ませられたから見る影もなく憔悴した。ところが或日空高く唸りながら飛んで來るものがある。社人は未だ見た事もない不思議なものなので、口々に虫か、鳥か、鳥にしては奇妙であるし、虫にしては餘り大きい、一體何だらうと大騒ぎをしてゐるので、ナヲナイは「俺はよくその怪物を知つてゐる。暫く出して見せて呉れ」といつた。社人は承知して出してやつた。見るとこれは兄が「ブラブラック」といふ所から揚げた松で作つた大凧であつた。占めたと思つてゐる中に凧は次第に降りて來て手の届く位になつたから、弟は其の尾を摑んで天空を翔(かけ)つて行つた。そして其の高く昇つた時、凧の尾に繋いてあつた刀の紐を切ると、勢強く落ちて來たから、丁度下で綿を探つてゐた妊婦に當り、女は悲慘な最期を遂げた。かうして無事「ブラブラック」に著いたから兄アエボアンは大さう喜び「ルデアン」に連れて行き、そこで弟の食つた穢物を吐かせ新に食事させなど勧つたので、間もなくすつかり恢復した。

そこで兄弟は蛇を殺した時の厭勝を聞かうとて社中を廻つたが、誰一人敎へて呉れ

るものがなく、仕方がないので「タコバン」を拵へて棲んだ。或日兄弟の父であるシガシガヲが暢氣さうに銅の帽子を冠つて歩いて來るのを見た。二人は思ふやう、妹が蛇に呑まれたのを知りながら其の蛇を殺さうともせず、又我等がこのやうに苦勞してゐるのを知りながら探さうともせないのは、餘りに親らしくない振舞である。こんな父を殺してもよもや天罰を蒙る事はあるまいとて、兄弟は叢に隠れて父の近よるのを窺つてゐた。父はかうとは知らないで、鼻唄歌ひながら近づいた。そこで兄は躍り出て刀を振りあげて斬りつけようとする。父は驚いて、子として親を殺すやうな不孝者があるかと叱つたから、兄は怖れて進めない。それを見た弟は、後から父を目がけて棍棒をうち下したから、流石の父も一聲叫んで仆れた。一時の怒から斯うはしたもの丶、やはり心の苛責に堪へられないし、蛇を殺した厭勝も出來てゐないから、今は社に歸る事もならず、どうしたものかと思案にくれてゐた。すると遠方から百舌鳥の鳴き聲が聞えて來た。併しあまり遠くて吉聲かどうか判斷がつかないで躊躇してゐると、「タツクイ」鳥が啼きながら飛び去つた。その聲で「天に昇つたならばよい」と占(うらな)つたから、

兄弟揃つて昇天してしまつた。それから間もなく雷と地震とがあつてアミ族では被害が著しく一家全部石になつたものさへある。これは二人を苦しめたからで、今にその家が殘つてゐるさうである。數年前まで我社では馘首や戰爭に出る時には厭勝人が「地震ふれよ、雷鳴れよ」と祈つた。そして地震があつたり、雷鳴のする時には屹度成功すると信じてゐた。それは祖先等がアエボアンが雷に、ナヲナイは地震になつたものとしてゐるからである。

兩親や兄弟に別れ唯一人殘つてゐた盲女カラルは社內のある男に嫁した。夫は盲目のカラルを勞つてやつた。カラルはどうかして一目でも夫の顏を見たいと願つたがそれは如何ともする事が出來なかつたが、夫は優しく「お前は男子に遇つたならばその胸を探(さぐ)つて見よ。胸飾りのあるものがお前の夫だから」などと云つてゐた。その中カラペツといふ子供が產れた。ところがカラペツが長じてから、或日「パヤヤ」といふ所に行つたが、そこで太陽の油斷を見澄し太陽の眼球を盜んで食つてしまつた。それから厠に上る每に、糞便の中からその眼球を探し出し水洗しては又嚥み下してゐた。そ

れを聞いた本島人が、それは不都合だとてカラペツを呼び出したが、どうしても來ないので、それでは縛り捕らうとて數人の者がカラペツの家にやつて來た。カラペツは急ぎ逃れ水を渡り「クラルツ」といふ所についた。そこでラボツトといふ女と夫婦になつてゐた。或日カラペツが髮を洗はうとすると妻は「その間妾に飾りをお貸しなさい、水に落ちてはいけないから」といつて飾りを受取り、何處へか行つてしまつた。いくら待つても歸つて來ないので、カラペツも止むなくもとの卑南社に戾つて來た。其後卑南も人口が繁殖して現今のやうな大社となつたのである。

卑南社　ピゴル

太古の事、「ルボアン」一名「アラワヤン」といふ所に一つの巨石があつたが、その石が二つに割れて中から一人の不思議な女が現はれた。名は傳らない。然し彼女の兩眼は膝の上についてゐて、間もなくその踵からラリヘンといふ女の子を生んだといはれてゐる。ラリヘンが長じた頃、偶々(たまたま)大南社からバサカラといふ男が訪ねて來たが、俄

かに恐ろしい洪水が起つて、萬物悉く流れてしまふといふ心細い事が續いたので、二人は何とかして安らかな世を送りたいものだとて遂に夫婦の契を結んだ。かくてルビルビル、タタといふ可愛い、二人の女子が產れたが、間もなく父のバサカラが死亡してしまひ母さへ續いて空しくなつたので、二人は遂に孤兒となつた。そこで意地の惡い人々は之に乘じて二子を侮り詈り種々の惡戯さへ敢てした。二人は悲憤の淚にくれながら、どうかしてこれを防がうとて、家の入口に「ダルマス」といふ蟲と毒蛇や蟹を置き、穀物倉には鷄を置いて守らせた。そして忠實な蟹が地を掘ると淸水滾々と湧き出でるし、溫順しい鷄が羽搏きすると、塵は四方に飛散して屋内は常に淸潔を保たれ、聲高く啼くと如何なるものも心の欲するまゝに出て來ない事はなかつた。それに勇敢な「ダルマス」と毒蛇はよく外敵に當つたから、孤兒ではあつたが、何不足なく健かに成長したのである。

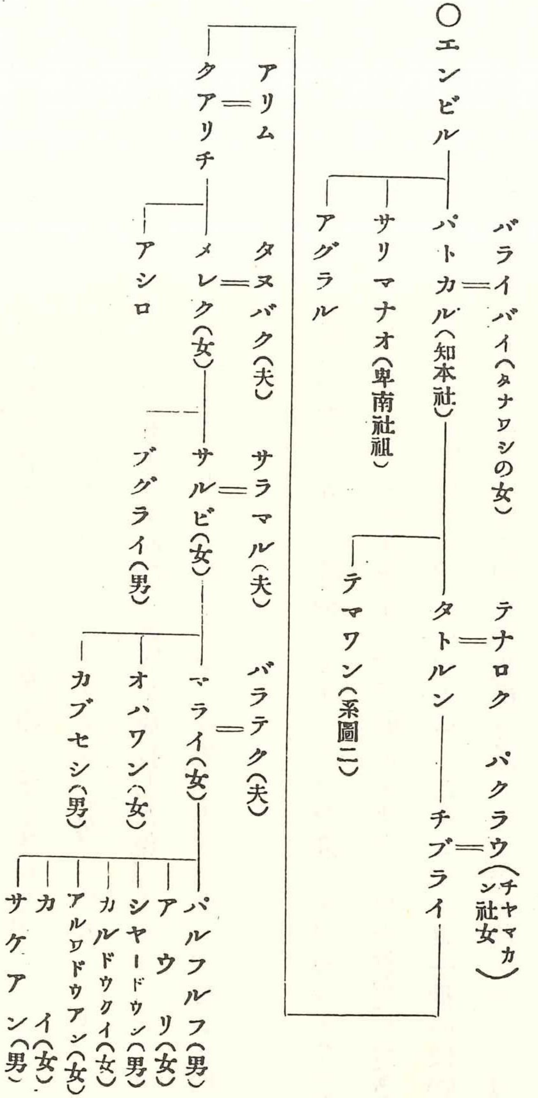
丁度その時シハシハウといふ美丈夫がやつて來て、ルビルビルの婿となつた。男は何處のものともわからなかつたが、まだ人口の少ない兄妹相婚などの行はれた時代だ

から、恐らく同一血族中のものであつただらう。かうして同棲してゐる中にルビルビルはカラグラアン(男)、パグリヤン(男)、ラシラス(女)の三子を生んだ。長子カリグラアンはカリルクルといふ女と婚し、テヌブガン(男)を生み、次子パグリヤンは或女を娶つてクグといふ女子を生んだ。彼等が成長した後、テヌブガン、クグの二人を夫婦としたが、彼等はガラナウ、タナワシ、ムアカイ、ウサウ、といふ四女を生んだ。

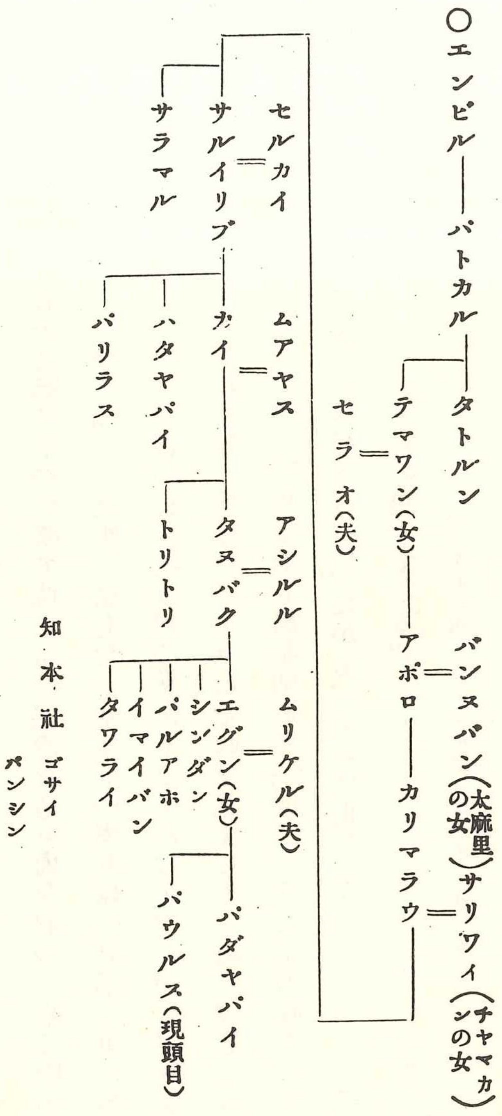
長女のラナウ、が長じて後、「チャマカン」社からカリマラウを迎へて、カラル(女)を生んだ。カラルはエンビルとタナワシ兄妹を生んだ。妹のタナワシは太麻里に赴き大南社のウムナイといふものと夫婦になつた。カラルの生んだエンビルは一世の傑物であつて、荒ぶる四隣の强敵を征服し、爰に初めて租稅を徵した。その後エンビルは卑南社に行つたが、ルガガンといふ美女を娶り遂に其處に止まり、パトカル(男)、サリマナオ(男)、アグラル(女)の三子を擧げ、長子パトカルがもとの知本社に歸り、先きに太麻里に行つた「タナワシ」の女である從妹バライバイを娶つた。そしてエンビルの

娘アグラルは「ピナシキ」に赴き、次男のサリマナオが卑南社に止まる事となつた。知本社に歸つたパトカルからは次のやうに繼承されて行つた。

系圖一



系圖二



昔知本社の者が里壠方面に出獵した事がある。その時シナイハン、モアカイ、ラブトール、プルガンの四名が一行にはぐれ、今の「リカブン」の地で彼等の歸るのを待つてゐた。其時不圖携へて來た粟、甘藷などを植ゑつけたが發育盛なので「ムカボカボン」だ

と喜び、シナイハンは其處に移住した。呂家社の起りである。

昔シハシハウといふものの兄弟にトコといふ男があつた。或日「カブルガン」山に行き火を焚いたが一面の檜林とて、忽ち檜に燃え移り全山を燒き盡した。トコは驚いて一息に「トアブダシ」山に逃げ延びた。それから「カアロアン」、「トアブト」、「ルメガン」などの地を經て「ルバルバガン」に行つた。

丁度その時知本社の者が其處にやつて來て彼に向ひ、「酒を造り肉を取つて來て待つてをれ、我等は後から來るから」。トコは快く諾した。知本社の者共は一旦歸り更に多人數でやつて來た。ところがトコは約束に違ひ何の準備もしてゐなかつたから、知本社の衆は怒つて悉くトコの作物を切り捨てた。トコはそれを見てこんな處には居られないとて「カルカラン」に行つたが、社衆は猶も怒を納めず、「汝のやうな不所存ものは此處に來るな、コテプラ(傍)に行け」。と言つたから、トコは止むなく「コテプラ」に行つて社を建てた。今のカテボル社の起りである。

パイワン族　カテボル社　ゴサイ　パンシン

太古「パナパナヤン」といふ所に巨石があつた。我等の祖先は其の石の中から出たのである。そして呂家社の地はもと卑南社の領地だつたから、祖先等は卑南社の許しを得てこゝに定住するやうになつた。

呂家社　ラポラポ　シヤガ　ソアナ

古昔巨石の中から生れ出たマリケシ、マウラスの姉妹は、暫くの間「ピキピキ」鳥ばかりを取つて生活してゐた。その頃大南社の「キントボル」といふ所から「ニネク」に移り住んでゐたタイルといふものがあつた。或日出獵の途中彼等姉妹に遇つた。二人は裸體のまゝで頭髮を股間に挿んで戯れてゐたので、タイルは目前にうよ〳〵と蠢く異様なものに打ち驚きつゝ近よつて槍を構へると、多くの蜂が飛んで來て彼等を守るのであつた。これは不思議だとよく〳〵見ると二人の若い女である。そこで喜んで二人を伴ひ歸り、夫婦の契を結んで「ラパラパ」社の基礎を定めた。其の時又「パナパナヤン」

といふ所の竹の中から産れたスルトク、モラノク、モアリプの三名は「テキテキル」に住んでゐたが、此の時同じく「ラパラパ」に移つて來たので急に賑しくなつた。そこで最も人望のあつたモアリプを頭に戴き社事を總べしめ、他は其の部下となり、狩獵の度毎に肉を贈つたり、一年一回の粟刈の時には、その幾分を納めて勞を謝した。其後サマルの代に至り人口増殖したから、「ラパラパ」をすて、「ブリブリボツク」に移つた。かくて此處に居る事數年、社運も次第に盛であつたが、或時社内の若者が打連れて内文鹿方面に行つた時、その社の女を犯した事から殺害せられたのを不吉として、社人の大部は「トカイシン」に移り、更に其より「ピナリキ」に轉じて社を建てた。

かうした中にも人口の繁殖は年毎に著しく、各々次第に別れて、「イナバラ」、「ダナダナウ」、「スモニ」、「プヌ」、「パハリワン」、「ピナタライ」、「アリアリアイ」、「ワカワカイ」、などの諸社が出來たのである。そして「パンキウ」はやはり卑南族ではあるが、昔から獨立した社で、祖先も我等とは異つてゐる。

パシカウ社　リハラン　アダナオ

太麻里蕃

太古「パナパナヤン」といふ所に巨石があつた。その中から一人の女子が出現した。その名はラリギムといはれた。ラリギムは石から滴り落ちる汗を飲んで生活してゐた。丁度その頃大南社にパサカランといふ男があつたが、ラリギムは此の男と夫婦となつて、ルベルベ、ササの二女を産んだ。ルベルベ長じて、同じく大南社のアリマラオを迎へチヤチヤを産み、チヤチヤは西洋人ボクソーを夫としてカグサイを生んだ。カグサイ成長の後母のチヤチヤを連れて大南社に行つたが、風采の異つたカグサイは直ぐ大南社の捕虜となつてしまつた。そこで父ボクソーは大いに憤り大南社に戰を挑んだが不幸にも敗死した。

ルベルベ、アリマラウ夫婦の間にはチヤチヤの外にパノノカン、ケワツソ、パトリアンの子女があつた。兄のパノノカンは、妹パトリアンと婚うて子を産んだが、生兒は悉く鼻、耳のない不具者ばかりであつた。そこで妹は五日間山に入り、身を淨め祈誓を凝し、六日目に歸つて再び夫婦となつたので、初めて美しい男女を生む事が出來

た。シガシガオ、トコといふのはその愛子であつた。

其れから數代の後にラナオといふものがあつたが、アリモを娶りラユオを生み、ラユオはアラルラカンと婚してラナオ、タナバスの二子を擧げ、タナバスはキムナイを迎へてトコ、ブナリユー、バライバイの一男二女を産んだ。ブナリユーは卑南社に婿として迎へられ、バライバイは知本社に嫁し、長女トコ[1]が太麻里社に止まつて私生子パカルンを産んだ。此のパカルンは後に「ウラルツ」社のサウラルイと夫婦となりトコ[2]、ルマンの二子を生む。トコは卑南社からマルガナを迎へアリマラオを生み、アリマラオはラルイラン[イ]を娶りトコ[3]を生む。トコはムナルンを迎へドマラサオを生み、ドマラサオは大南社のリガンを娶りタヌバを生む。タヌバ、ラルイラン[ロ]を娶りテウヨンを産んだ。テウヨンは現頭目である。

太麻里社	アダギヤン	テウヨン
弟		ケープル
チヨアチヨコ社	レマシヤン	

註　父祖の名を代々襲ふ事を注意したい。それから呂家社では昔竹紙の袋を作り、其の中に風を入れて海に流すと間もなく西洋人が現れたといつてゐる。

巴塱衞蕃

「チヨカボロガン」といふのは高峻な山である。昔此の山の頂に紅白二箇の卵があつたが、その中から二人の男女が現はれた。男をルモチ、女をゲリンといつた。ルモチはゲリンに婚つて數多の子女を産んだが、大抵は不具者であつて、僅に二人だけが完全な形を具へてゐた。兄をブラリヤン、弟をパランといつて大切に育てあげた。兄は「チヨカボロガン」に止まつたが、弟は犬を連れ美地を求めようとて處々方々を廻り歩いたが、丁度「クチヨリン」に來た時、犬はどうしても動かない。そこで或は此處に止まれとの意だらうかと思つたから、其の地に社を建てモアカエといふ女を娶つて妻とした。それから早速兄の許に行き仔細を告げたから、兄も喜んで粟や甘藷の種を與へた。かうしてパランは新地を開拓したが、間もなく子孫繁殖したから、更にカヂヤビツに分社せしめた。そしてチヨカボロガンでも人口が次第に殖えたから、同じく分社せしめた。「タリリキ」、「パラン」、「ツヅイ」、「バビカル」の諸社がそれである。

ルカイ蕃

カヂヤヒツ社　パツカ
クチヨリン社　パラン

太古「カリアラン」山の絕頂に一大巖石があつたが、ある時巨巖が二つに割れて、中から一人の男が現れ出でた。ホマリリといふのは彼の名であつた。ホマリリは食を求めて諸所を彷徨つてゐるうち、不圖「サルキリキ」といふ所に來た時、異樣なものが動いてゐるので、驚きながら近寄つて見ると、己れと同じ人のやうなので聲をかけた。先方も訝つてゐたが、話しかけられて同じ仲間である事がわかり、安神して、「妾はホモリヌ、そしてこれはムラカルといふ母娘である」と應へた。男は大いに喜び「御身たちは我が家に行つて一緒に棲まないか。我一人では何事も不便だから――」、といふと、彼等も喜んで「あなたの力を得るなら何程か心强い事だらう、どうか幾久しく見捨て給うな」といそ〳〵として連立つて「カリアラン」に歸つて行つた。そしてホモリヌの携へて來た粟を播いて栽培したから、年々收穫を增して、今はホマリリも食物に事缺くこともなく、至極安樂に其日〳〵を暮すことが出來た。

かくて間もなくムグラウ、アトリン、ラルガンの三子をあげたから、ムグラウを連子ムラカルに娶はせて社に止め、アトリンを臺南方面に遣はし、ラルガンを阿緱方面に分居せしめた。ムグラウ夫婦の間にムトクトク（女）、ラリユー（男）の二子が出來た。此の子等の成長した時、私共は「ウラウガル」に移住したいのです、とて父母の許を離れた。一二年の間は何事もなくそこに住んでゐたが、丁度三年目の粟刈祭の折に、酒を造らうとして粟を蒸すと、俄かに地中から溫氣が立騰り、不思議よと思ふ間もなく、轟然とした音響に山崩れ水湧き、天さへ曇つて四邊暗晦となつた。二人は急いで松明を點け「ケントポル」指して逃げ出した。ところが風雨烈しく松明は今にも消えようとする事が屢々である。その度每に豚の脂を取り出し松明に塗つて漸く目的地に著く事が出來た。併し此の時旣に松明は燃えつくして、二人は再び闇黑世界の人となつた。詮方なくて手探りで諸所を步いてゐたが、偶々羗仔に出遇つたから、彼等は羗仔を捕へ其の體を擦りながら、「我等の爲めに火を探して來て吳れないか。褒美は思ふやうに

得させるぞよ」と言つた。羌仔はその意をうけて一旦は水中に飛び込んだもの丶怒濤のすさまじさに避易し、「とても泳げませんから」と拒つた。

二人は致し方がないのでいろ〳〵工夫の結果、「テラル(石)」と鐵とを打ち合せ發火せしめ「カライライ(木葉)」にうつして火の種を作る事が出來たから、再び松明を點して見ると、こはそも如何に、蒼海渺漫として足許に迫つてゐるではないか。二人は驚き急いで高所をさして走り登つた。すると叢から大蛇が現はれて二人を見るや、常にない優しい聲で「汝等が今後我を見る時は決して怖る丶事なく必ず顔を見せねばならぬ、さうでないと咬み殺すから」、といつた。二人は「諾」と答へながら矢張り恐ろしいので、其處を去つて進んで行くと、一羽の鳥に出遇つた。するとその鳥は親切に彼等に敎へていふには、「汝等は今後家を出ようとする時には、必ず先づ我が聲を聞き吉聲の時にばかり出發せよ。さうすると決して途中で災害に遇ふやうな事はなからうから」とて、好意を謝する二人に吉聲を殘して飛んで行つた。それから尚も登つて行くと、熊と豹がゐる。氣附かれては面倒だから樹蔭に隱れて窺ふと、彼等は何か相談をしてゐる樣子で

ある。やがて豹はごろりと地上に横たはつたが、熊は手に墨を取つて豹の毛皮を染め初めた。熊はせつせと手を働かせる。豹の白い體は次第に染められて行く。そして間もなく美事な斑紋で蔽はれてしまつた。やつと染色が終つたから豹は起き上つて、己が體を見上げ見下してゐたが、美しい斑紋が至極氣に入つたやうである。次に熊が又横はると豹は同じく墨をもつて染め出した。最初咽喉を染めて一寸手を止めると、熊は頭を垂れて染められた所を見、喜悦の色を浮べ再び地上に轉がつた。暫くすると熊は鼾しながら快く眠つたから、豹は墨を握つた手のま丶熊の體を擦りつ丶搖り起したので、熊の毛皮は一面眞黑に染り上つた。やがて熊は目を覺して見ると五體は唯黑々と染つてゐるから、大いに怒つて兩手をあげ、恐ろしい勢で豹に飛びか丶つた。流石の豹も怖れて逃げ出し、稍々距つた時、「どうも濟まなかつた。決して惡氣があつたのではない。全く不注意からだつた。今後鹿を獲ると急度汝に半分やるから、今日の事は水に流して呉れ。」と詫び入るので、熊も今更詮方なくて怒りを丶さめ心を和らげ互に和睦したのである。

二人は面白い事を見たものだと喜びつゝ、其日は適宜な所を選び小屋をかけて寢についた。所が犇々と迫りくる寂寥に未だ曾てないやるせなさを覺え遂に兄妹相契るやうになつた。そして間もなく子供が相次いで三人まで生れたが、一人は跛者で一人は盲目であつたばかりか、普通に生れついた末子は夭死してしまつた。これを見た妹は非常に心を惱め窓の下で泣き悲しんでゐた。すると突然窓から檳榔子と石灰が飛び入つて來た。其の頃はまだ天が低くて人の頭も突き當る位だつたから、「恐らく太陽が授けて下さつたのだらう」、と恭しく其を受取つて噛んだ。すると間もなく妹が孕んでシマラライといふ男兒を産んだ。兩親は太陽の子だからとて大切に育てゝゐたが、時々衣類や其の他の物が窓から飛び込んで來るのであつた。今でも社に傳はつてゐる蛇の形のついた甕はその時太陽から授かつた寶器なのである。

かうしてシマラライは何不足なく育てられ、健やかに成人したが、或時庭に出で石を割つて家を建てなどして遊んでゐると、不意に天から、眞鍮で拵へた鍋と臼と杵とが降つて來たものだから、驚いた子供は色を變へて驅け込み、母にかうと告げた。母

は喜んで諭していふやう、「汝は太陽の子なのだから、屹度いろんな物を授けて下さつたに違ひない。天から降りたものは有難くお受けなさい。」といふと、父も側から聲を添へて、「お前も見る通り天がこのやうに低くて不便である。お前の事なら太陽も聞いて呉れるだらうから、太陽に願つて天を高くあげよ」と云ひきかせた。シマラライは成程と點頭いて外に出で、太陽の恩賚を謝してから「どうか天よ高く騰つて呉れ」といひながら、彼の杵で天を衝くと、天は次第〳〵に高くなつた。所がそれと同時に今までの暗黑世界が俄かに光明の天地となり、眩くて何物も見る事が出來ない位である。見ると空には二つの太陽が麗り、一つが西に傾くと、一つが東から出る。そして酷しく照りつけるから、下界では晝夜の差別もなく、草木も枯れようとする有樣なので、父のアラリユーは或日矢を番へ、一つの太陽を射たが誤たず命中したから、忽ち光熱を失ひ月となつた。そして太陽の照す間を晝と名づけ、月の出る間を夜といつた。かくて晝夜が出來たから、晝を働く時とし、夜を休息の時に充て、何の不自由もなく暮してゐたが、次第に殖える子孫の數々を養ふ所もなくなつたから、太陽の子シマララ

イは妻のガヤガイと二人海岸に立ち呪文を唱へて海水を押しやると、海は見る〳〵退いて廣々とした土地が現れた。そこでシマラライ夫婦は其子ピナリ、ピハン、バトガヤ(女)の二男一女を父母の許に殘し置き、末子カリマラオ、バサカランの二人を連れて「キントポル」を降り「マテヤサン」といふ地に行つた。蚯蚓の糞が堆くなつてゐるのを見ても此處は屹度地味が良いに違ひないとて住む事とした。其頃一人の若者が尋ねて來て入社したいと乞ふので、一體何處から來たのかといふと、「我はキントポルの者で、アラリューの孫ラルガである」と答へたから、「ああさうか我等もアラリューの子孫である」とて睦じく暮した。

併し其處も數年の後には耕作する餘地がなくなつたから、更に「コテレン」といふ所に移り、尚も進んで「サカリマラオ」に行つた。こゝでバサカラン、カリマラオの二人は父に別れて「ルボオハ」(一名バナバナヤン)に行く事となつた。兩人は首尾よく「バナバナヤン」に著いて暫く石に腰うちかけ、疲れを休めてゐたが、やがてバサカランは携へて來た竹を地に衝き立て、それを力として延び上り來し方を眺めると彼の懷し

い「キントポル」は夕靄の中に微かに見える。懷鄕の情は切々と迫つて來て、最早あてどもない旅を續ける事は出來なくなつたので、二人はそこに竹を衝き立てたまゝ急いで祖父の土地「キントポル」に引返した。

それから後でバサカランが一人で再び「バナバナヤン」に行つて見ると、先きに腰を掛けた石の邊に一人の美女が立つてゐる。近よつて見ると頭髮を長く垂れ、その端で股のあたりを蔽つてゐる。「貴女は何處の人ですか、」バサカランは不思議に思つて尋ねた。「妾はこの石の中から生れたビヒンと申すものです」と淑やかに答へるのである。「貴女には夫があるか」、といつてみると、「いゝえ」と答へたから、バサカランは大いに喜んで、「それでは我が妻に迎へたいから」とて、急ぎ歸り兄に仔細を語つた。兄は怪しみながらついて來ると果して美女がゐる。それに又先きに立てゝ置いた竹の中からも一人の男が生れ出てゐた。それをアルカルマといつて後に卑南社の祖となつた。バサカランは兄の同意を得てビヒンを迎へて妻としそこに止る事となつた。そしてラナウといふ女子を生んだ。其後バサカラン夫婦はラナウを連れて「カルカラン」に移り

更に「カドゥプトパン」、「キヌプタン」と移り歩いて「カタラウ」に來た時、再び兄弟に遇つたから、やはり一緒に住まうとて「パシカウ」の山に移り家を建てる事とした。或日兄弟打揃ひ山に入り柱をとつて歸つたが、途中で河を渡らねばならぬ。しかもその川は水深く川幅も廣いから、巨木を擔いては渡れないので、それを三つに分けて運んだ。所が上部を持つたものは社に歸らずに北に進んでアミ族となり、中部を運んだ者はそのまゝ山に入つてブヌン族となり、下部を運んだ者ばかりがもとの所に歸り我社の祖先となつたのである。ピナリピハン、バトガヤ、タナパン、カリマラオの四人がそれである。此等の先祖はそれから「ピリピリ」に移り、間もなく「アダダイ」に轉じ、そこで各自が別れ進んで好きな所に社を建てる事となつた。

卽ちバトガヤは「マテヤサン」に赴き、ルムルマといふ女を娶りホマホネといふ男兒を産み、ピナリピハンは「カックラ」に遷りシムルサイを婦としてトコといふ女兒をあげた。トコ長じて從兄ホマホネを迎へ男兒アントルを産む。アントルはラナオを娶り、イトコ(女)、クルクル(女)、カコー(男)スモルサイ(男)の四子を生む。カコーは社人

アスルブルブを妻として「アスクラ」といふ所に社を建て、アスルブルブの弟ホマリワルは其後「バラダン」、「モパンダピナサラウ」と次第に美地を求めて行きシナヤハンといふ美女を娶り呂家社の基を奠め、始祖と仰がれる事となつた。

「アスクラ」に移つたカコー夫婦の間に、ルマギラウ(男)、テピテブ(女)、オルロガ(男)、パクラル(女)の四子が產れた。長男のルマギラウが成長してから「ピキピキオ」といふ所に行つた時、不思議な人々に遇つた。その人たちは「ピキピキ」鳥ばかりを食つて生活してゐるので、その鳥の羽毛は庭に山のやうに積まれてゐた。「汝等はどうした人か」と若者が尋ねると、「我等はもとキントポルから移住したもので、ラリブラオといふのが私で、これが妻バクライ、そして子ダエルである」と答へた。ルマギラウは「アスクラ」に歸り妻のモアカイに此の事を話した。モアカイは大變同情して「それでは藷を與へたら如何でせう」といふので、ルマギラウは藷を澤山脊負つて、再びピキピキオに行きラリブラオ一家に與へた。所が彼等は耕作法を知らないので、やはり絲瓜のやうに棚を作つて藷を植ゑたから、ルマギラウは不愍に思ひ藷には棚などは

いらない、蔓は地面を匍はせればよいと敎へてやつた。それから後で又ラッブラォの子孫と逷つたが、その時卑南社からソルヒヤンといふ男が尋ねて來て、臼に腰うちかけながら話してゐる中に臼の中に脫糞して、頻りとルマギラォを呼びその上に坐らさうとする。そこでルマギラォは大いに腹を立て、不意に杵で打たうとしたから、ソルヒヤンは周章てゝ外に逃げ出した。ルマギラォは眞赤になつて其の跡を追つて「バテバテハン」まで行つたが捕へる事が出來なかつた。ふと見るとそこに豚小屋があつたから、腹癒せにもとその小屋を燒き、携へ持つた杖を地に立てゝ引き返した。其の杖はやがて根を張り葉をつけ竹となつて今に殘つてゐる。此の地を「テキテキル」と呼んでゐる。

其頃蕃社があちこちに建てられた。卽ちダルダン、リデウの二人は「タパラカウ」社を、ヘンベルは知本社から分れて「ピナシキ」社を、ハブハブとブナベルンの二人は「カスクラ」から分れて「アリパイ」社を建てた。此れと相前後してリカル、スルフの二人は父と共に「シヤマカン」から「パルル」に移り更に「コラエカン」に移つた時、初めて「バリユウス」、「ドウマラニス」、「ピナリキ」、「サギラダン」の四家が起つた。所が間もなく「バリユウス」家のマルス、ルルの兄弟は又新地を求めて「ルラン」といふ所に移住しようとしたが、「ルラン」は水源も遠く不便なればとて、父母のリポン、ルブアイが贊成せないので、それでは「タルマハ」（大南社）にしようとてこゝに移る事とした。マルス、ルルは「アブルガン」「パカルコ」二家の祖となつた。かうして大南社（たるまは）には今に「バリユウス」、「ドウマラニス」、「アブルガン」「サギラダン」、「ピナリキ」、「パカルコ」の六頭目家が連綿として續いてゐるのである。

又

「カックラ」のカリマラォと「パナパナヤン」のソラガルの二人が、「ピノリパダン」といふ所で逷つた時、互に昔話をすると、同じ先祖から出てゐるのを知つたから、三日後に再會を約して別れた。カリマラォは約束の通り三日目に、「ピノリパタン」に行つて見たが、未だソラガルが來てゐないので、ソラガルの足跡を辿つて「リタリタ」に著いた。そこで漸くソラガルに會つたから破約を責めると「まあ〳〵許して吳れ。我社が

もう近くだから兎に角我が社まで來れ」とて「パナパナヤン」に連れて來た。ところが社内に輝くやうな美女がゐる。カリマラオは心大いに動き、どうかしてその美人を娶らんものとソラガルに謀つた。するとソラガルは「あれは自分の許嫁だから」と素氣なく拒つたが、カリマラオはさすがに其處を去りがたく遂に三日間滯在した。そして悶々の情に堪へられないで、三日目に弟の助力を得ようとて漂然と「パナパナヤン」を立ち去つた。

丁度幸にも途中で弟のブナイに遇つたから、仔細を語つて一臂の力を添へよと頼んだ。弟もそれではとて連立つて「パナパナヤン」に行つた。社人は大いに喜んで懇ろに待遇した。其の時美人タナワシはブナイを頼もしい若者と思つたから、檳榔子を咬んで與へ、カリマラオには嚙まぬものを手渡した。哀れな兄は嫌はれたのを知つたから、打萎れつゝ急ぎ歸つて行つた。弟は遂に其處に止まりタナワシと婚した。併し兄やソラガルの事を思ふと氣の毒でもあつた。それから間もなくブナイが出獵した時、「リタリタ」が美地だといふ事を妻に話すと、タナワシは「それぢや其處の土を持つて歸つ

て下さい」といふので、土を取つて來て見せた。「成程沃土だ」と相談が一決したから、早速「リタリタ」に移つた。即ち今の太麻里社の地である。やがて夫婦の間に男の子が生れた。丁度暴風の吹きあれてゐた時に産れたからビナリユと名づけた。ビナリユが成長の後卑南社に行きバリバリと婚してクラサイ又の名マルカナを生んだ。マルカナは太麻里に歸りトコと婚してカリマラウを産んだ。カリマラウは「ラウラン」に行きラルラ女と婚してトコを生む。トコはアクルラスと婚してアポロを産み、アポロはパハリラスと婚してシルカイ、サラマル、クラサイ、トコの四子をあげた。其の時呂家の人クルルといふものが來りてトコと婚し、リヒヤン、ギリュの二子を産んだ。リヒヤンは太麻里に止まり現頭目家の祖となり。次子ギリュは大南社に來り永住した。

大南(たんま)社　ラスン　キラギラオ　ルアリン
オンサイ　ラプラス　リガル

フチヨル蕃

昔「パタイン」社に七人の兄弟があつた。ザキヌ、プラルガン、プフルヤエンの三人

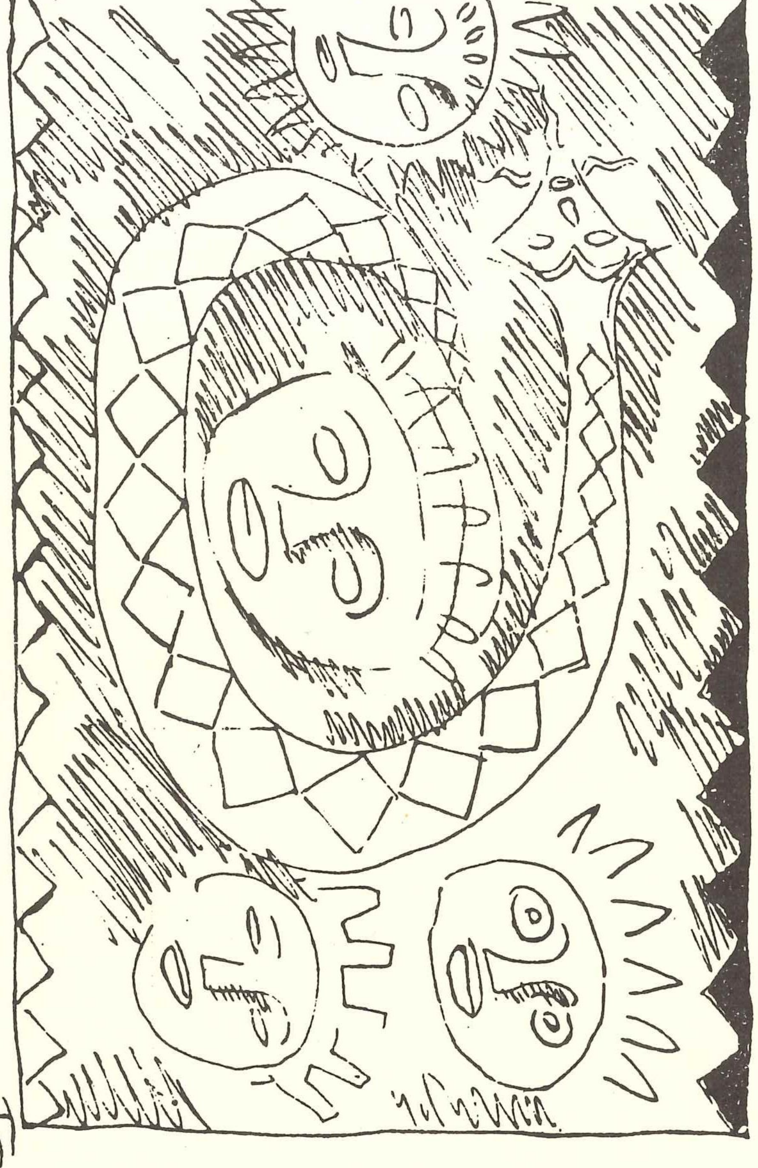
が男で、モカイ、ラムルガン、カルイ、サラバンの四人が女であつた。或日ブラルヤエンが兄妹等に向つて「私は今から海神の所に行かうと思ふ。若しも歸つて來ない時には五年毎に一頭の豚を屠つて供へて呉れ。」といつて其の儘家を出てしまつたが、到頭歸つて來なかつた。後に殘つた兄妹は其の言を守つて永く絶ゆる事なく肉を供へて靈を祭つた。これが五年祭の起りである。それから暫くしてブラルガンは大武山に登つて歸らないで遂に雷神となつてしまつた。

そこでモカイとサラバンとは大變心を惱まし、どうかして人間を創造して其の缺を補はうと工夫しながら二人は毎日薄暗い所に閉籠つて出なかつた。餘りに不思議なので、次女のラムルガンが一體何事が起つてゐるのだらうと、或日そつと隙間から覗いて見た。するとモカイの腹が恐ろしく膨れてゐてつく息さへ苦しげであつた。所が折角苦心して創造した人間も人に覗かれた爲めに其のまゝ死亡してしまつた。二人の嘆きは見る目も氣の毒であつた。張りつめた氣も弛み、精根も盡き果てゝ、唯涙にくれてゐたのであつた。此れを見た猿は哀れに思つて二人の子を授けて行つたので二人は自

分の子として育てた。それからはこんな苦心もなく次第〳〵に人口も蕃殖したから、モカイは人々を連れて阿里港の「タバサン」社に降り、サキヌは今の「チャリン」社の上方の凡そ三町許りの地に社を建てた。其處を「サキヌ」といふのは彼の名を採つたのである。そこで四女サラバンも心動き遂に「スパイワン」に移つた。其處は殊の外地味膏沃で五穀も豐穰であつたから人口の増殖著しく、次第に他社を壓して隆盛を極めた。今の「ピユーマ」、「タラバコン」、「マカザヤザヤ」、「パイルス」、「サンサン」、「カサギサン」、「ラツタ」、「パヤヤ」の諸社は皆その分社である。

又

今は昔「バブルガン」家に一箇の壺があつた。或日太陽が其の中に卵を生んで行つた。所が何所からか一匹の大蛇が現れて其の卵を呑んでしまつた。社人等は大いに怒り、如何かして蛇を捕へ懲してやらうと敦圉いたが、なか〳〵手剛くて誰一人取おさへる事が出來ない。丁度その時「マシリジ」社の女タリバタンカエといふものが、「サンテイモン」社のパトウルラトアリアンと、「バブショ」社のタキトピカルライとの三人で蛇征



伐に行く事となつた。ところが蛇はタリバタンカエの美貌を見ると、眷戀の情に堪へず舌を吐いたまゝ動かなくなつたので、彼等は首尾よく捕へる事が出來た。其時カエは「妾は暑いから暫く此處で休んで行きます」といつて聽かなかつたので、其地を「スムクフチャナン」と名づけて彼女に與へる事とした。後にそこを「ラカラカヤン」ともいふのは彼女が鞦韆を造つて乘つてゐたからである。

それから蛇はすつかり人に馴れてしまつて日々カエの許に訪れて來た。或日彼の二人の男はカエを脊負つて、蛇を「エラウラウサン」に送りかへすこととした。道々蛇が云つた。「我は實はクレレといつてエラウラウサンの大頭目である。それに「バブルガン」家に太陽が來て卵を產んだと聞いたので、頭目でもない家に太陽の來るのは許しいと思ひながら、來て見るとほんとに卵があつたから嚥んだのだ」と。間もなく「エラウラウサン」に著いたからトアリャンは直ぐ歸つたが、カルライは尙進んで彼の家を確めようと思つて跟いて行つた。蛇の云つたやうに實に立派な家で全部眞鍮造りである。蛇はカエを連れて屋内に入つたが、カルライの入るのを拒み屋外に待たせた。

暫くしてカエが出て來た「カリパ」をカルライに與へながら、「飯をあげようと思つたが、飯は汝等のパリシだから上げない事にしました。然し歸途「パルムクに」行くとそこに辨當の用意が出來てゐるから、其れをお食べなさい」といつて中に入つた。カルライは歸途を急いで「パルムク」に來ると一匹の豚がゐる。毛の色は丁度鴾(つき)の羽毛のやうにうす紅をおびた白色で、いかにも美しい。これはカエの云つた辨當に違ひないとて、其の豚を脊負つて「タタアン」に赴き屠つて食つた。彼は後に其處に住む事とした。併しカルライはカエから渡された「カリパ」を携へて一先づ社に歸り、これをカエの父に贈つたから、カエの父は大いに喜び其の功を賞し、今後紅白の豚を得た時は屹度汝の家に納めようと約束した。それ以來狩しても普通の猪は「バブルガン」家で取るが、紅白の猪はカリライの血をひいた「タキトビ」家でとる事となつた。「バブルガン」家はそれから連綿として今に續き遂にカエの領地までも併有するやうになつた。

又

太古石の中から生れ出た偉人があつた。彼は神通力を具へたもので、「人よ集れ」と

いふと何處からともなく多數の人が集つて來たから遂にその頭目となつた。これが「モレ」社なのである。

其頃は「モレ」社ばかりで他に聚落といふものはなかつたから、天產は豐かであり爭鬪はなし、社の戶口は次第に增し實に數千を越えた位である。所がある時青年等が集會所に集つて唄ひ戲れてゐた所へ、俄かに落雷して若者の多くを失つた。此の不祥があつてから社人は爭つてカラパオ(平地)をさして移住するやうになつた。當時は臺灣人の勢力はまだ微々たるもので、淡水溪以東に來るやうな事はなく、今の高雄附近に居住してゐたばかりであつた。

此の移住の始まる頃「マカザヤザヤ」社の「バブルガン」家が其の跡に移り今の道路から上方一帶を占領し、「タラバサル」社の「タクダバイ」家がその下方全部を占領した。所が數年ならぬ中に附近一帶に「バブグツ」といふ害蟲が繁殖して穀物を害したので、これ他人の地を橫領したからだとて「マカザヤザヤ」の頭目等は我が祖を元の地に呼び戾した。そこで祖先等は「カラパイ」から再び此處に歸つて「モレ」社を組織し「トダリマオ」家を起した。此の時各頭目が集り火を焚いて運勢を卜したが「タラバサル」の頭目の焚いた火の煙は「サンテモン」の上に靡き、「トダリマオ」家の煙は「マシリツジ」を蔽ひ、「マカザヤザヤ」の頭目の焚いた煙は天に騰つた。そこで彼等は各々煙のたなびいた土地を取つて領土としたが、「マカザヤザヤ」の頭目はその煙天に立騰つたのだから、天の覆ふ所悉くを領有せよとの神託だらうとて殘る地の全部を領地とした。

マシリジ社　ラウシロム　ランパウ
カチダス　トプ

昔「パイルス」社の上方に「マカラウラウジ」といふ所があつた。太陽が毎日其處に來て二箇づゝ卵を產んだが、何處からか一匹の大蛇が現れてその卵を後から〳〵呑み悉してしまうのであつた。それを見たカジキチ、カロライ、カイといふ三人の女は如何かしてこの憎い蛇を除きたいものだと、或日力を協せて蛇を捕へ「ペノチクジャン」といふ深淵に沈めてしまつた。そのあくる日も太陽はいつものやうに卵を產んで行つた。

今度は蛇の害を受ける事なく首尾よく孵化して中から二人の男女が現れた。「パイルス」社と「マカザヤザヤ」社との頭目の祖先がこれである。

マカザヤザヤ社 ラウリヤンテポロアン

我社の祖先は太陽の產んだ卵から出たものである。もと「パイワナン」といふ所に居たのが、此處に移つたので、社名は原住地を記念するためにその名を採つたのである。

スパイワン社 チヤマダンン

潮州蕃

昔太陽が降つて來て「ロパニャウ」家の軒下に二箇の卵を產んだが、やがてその卵が孵化して男女二人が生れ出た。男をボアボーラン、女をヂャルムジュルといつた。二人の間にヂャサバン男、アヂャヨップ(男)ガリヂキチ(女)、カリルル(女)の數子が生れたが、目は皆足の拇指の端についた畸形兒ばかりであつた。これは兄妹相婚の爲

めだと悟つたから、次に從兄弟を婚せると、目が膝の上につくやうになつた そこで更に再從兄弟同志結婚せしめると、漸く目が顏面に現はれ普通の容貌を具へる事となつた。

それからは年々歳々人口が增殖したから、狹隘な山地を降り山麓の平地に移る事となつた。其所は現在の我社から西方大凡二里許り隔つたライ社溪左岸の「ヂャチョロッタン」(ヂャジュルッタン)といふ廣い地であつたが、偶々海老が攻めて來て洪水を起したから防ぐ事が出來ないで、餉潭庄とか「タナシュー」社とか「コボッ」(オブ)などに逃れた。その後「コボッ」に移住した者が或日獵に出でたが今の「ヂカル」(ライ社の地)に行くと、犬が止まつて動かない。仕方がないので人々はそこに社を建てる事とした。これチャヂャアプス社の起りである。併しまだ頭目がなく社人は常に喧嘩ばかりしてゐたが太陽の卵を生んだ「ロバニヤウツムダス」家のものが頭目となつてから社內が平穩となつた。

チャヂャアプス社 頭目

枋寮蕃

太古洪水があつて有ゆる生物は皆水底に沈められて、只幸福な二人の兄妹ばかりが生き殘つた。彼等は暫く「カブルガン」山の「ブテ」といふ所に住んでゐた。人類としては此の二人ぎりなので、如何かして生殖の法を講せねばならぬ事となり、或日妹が自身で顏に刺墨して佯つて兄と婚した。併し產れるものも產れるものも皆不具者ばかりでどうする事も出來なかつた。それから暫くして二人は「パカロカロ」(臺東方面)と「パイラン」(平地)とに分れた。そして子供等は更に四方に分れて行つたのである。當社に來たのも此の二人の子のカザギランといふものである。カザギランには數子あつたが、その中の一人が「カブルガン」山に歸つたが、他の兄弟は悉く美地を求めて別れてしまつた。

その頃の話だが二人の男が犬を連れて、あちこち彷徨うて、偶々「グルン」の地に來ると一面に大樹が繁茂してゐたから、屹度地味がよいに違ひないとて、犬に尋ねて見ると犬は今の「ヂャコヂャコワヲコ」家の所をさして其處に家を建てよと敎へたから住

居を定める事とした。

やがてその附近の「ポチャチュバン」といふ所に一人の女がゐるのを聞き招いて二人の妻とした。そしてこれ等の人の間にカザギチャンポヂャヂャン、ヂャロアンチョコ、カカテアンシムギョオ、ブヂンジャナオ、カドドヂャンコヂュヂュ、ヂャロガンチュジの數子を產んだ。今の頭目等は彼等の子孫なのである。そして此等の祖先は大さう小柄で臼の高さにも及ばなかつたといはれてゐる。

ラルクルク社　カザギザンアブアブ

スボン蕃

祖先はもと今の潮州郡の管內の「カペヤガン」社に住んでゐたが、クジン、カボロンといふ二名の者頭目と意が合はないものだから、遂に出奔して「チョラカオ」に來た。するとそこに淸水が滾々として湧き出でる所があるので暫し休息してゐた。所が連れてゐた犬が水中に入つたまゝ、どうしても動かうとしないものだから、仕方がないので

そのまゝうち棄てゝ尚も美地を探し歩いた。然しこれといふよい土地もないので再び「チョラカオ」に戻つて來てこゝに住む事とした。其時は最早愛犬は斃れてしまひ、その屍體が水を堰き止めて洌しい水が一面に溢れてゐたから、そこを「カスポカン」と名づけた、蕃語で「スボン」といふのは水の溢るゝ事なので、後に此邊一帶を「スボン」といふやうになつたのである。

カスボガン社　カルボチヨコ
　　　　　　　パジヨバクル

オボオボヂャン蕃

昔「ピナブカサン」といふ所に一本の竹があつた。そして見る〳〵高くのびて行つたが、中に水が溜つて遂にその大竹を割つた、すると中から四個の不思議な卵が轉げ落ちた。晝太陽の光線の當る間は夫れぞれ離れてゐたが、夜になると密着して一つになつてゐた。かうして五六日經つたがその中から蛇の形をした男女が現れ出た。最初二人

は交道を知らなかつた。ところが或日男の陽物が何となく〇〇して來たから放尿しようと思つて外に出かけると、女は押し止めて此處に放つてみよとて股間を示した。男は面白く思つたので、さうすると一種の快味を覺えたから、毎日そこに放尿してゐると間もなく子供が產れた。所が哀れな不具者であつて飯を食べる事が出來ないから、柔かな草を食べさして養育した。次に產れた子は容貌の勝れた立派な子供であつた。生れる時に脊に「アンポチュ」といふ箱を負つてゐたから不思議だと思つてゐると、成長して「プリガオ」（厭勝人）となつた。此の子が種々の祈禱を行ふと粟や薯の類は勿論、數多の人さへ湧いて出たものである。かうして人口は次第に增殖したから、各々好む所に美地を求めて移住するやうになつた。

これ等移住者の中に二人兄弟で子供を連れた十人許りの一隊があつた。「チャヂャラピ」といふ所に先づさゝやかな社を建てたが、こゝも宜しくないといふので、更に「パチモチモ」に移つた。所が弟は更に又「パラバラバル」に分れて獨立し、後「チヨアボロガン」に移り、又進んで「チョジャヤボス」に轉じ、そこで始めて五年祭を定めた。其

後彼は不圖「チョブシアダン」に狩したが、內文社の地が如何にも廣いのを見て此處に定住しようと思ひ連れてゐた末子をそこに止めておき、自分は一旦「チョヂャボス」に歸り、直ぐ社人を集め協議の結果全社をあげて新地に移住する事となつた。かうして轉々した弟も漸く永住の美地を得たのである。其子供の中で、サアアッ（ルバニアウ家の祖）、アヂス（チョロン家の祖）、チャガロ（パサラブ家の祖）の三人はこの內文社に止まつたが、四男のパヂャヂャンは內獅頭に、五男のトゥウヂャイは外獅頭に移る事となつた。かうして各々領所が定まつたから、パヂャヂャンは臺東方面に赴いて妻を覓ぎ一時其處に留まつたが、子が生れるのを見て再び內獅頭に歸つた。トゥウヂャイも亦妻を娶つて子孫を得たので「オアジュジュ」に移轉した。そして其處で長子を「パララヂャン」とし、次子を「パラアヂャイ」とした。そこで二人は山に登り「ルバニアウ」家領と、「チョロン」家の領地の境界を定め、各々獨立して祭を行ふやうになつた。現今の祭祀はその時に定めたものである。

又

アッダス社　オリツルプサマン

昔「プナバブカッサン」（潮州郡）にサジムジ、アジュグワンといふ兄妹があつた、二人の間に數多の子供が產れたが皆不具者であつた。それから血緣が次第に遠ざかるに從ひ完全な子孫を得るやうになつた。そして數代の後には人口が大いに增殖したのでサラアツ、アジソ、ルジャイ、チャカロ、パジャジムの五人は「プナバブカッサン」から「アビャガン」に移り、其れから內文社に轉じ、アジソは二股、サラアツは大股といつて頭目となつた。其時ルジャイは「イゴロワン」（恒春方面）に移つたが間もなく外獅頭に轉じて頭目となつた。チャカロは一時內文社の頭目となつてゐたが間もなく死し、パジャジムは一時「カロ」（恒春方面）に行つて社を建てたが地味が宜しくないので內獅頭に移り社を建てた、

サブデック蕃

太古祖先等は「カビャガン」（大武山）にゐたが、其後四方に土地を求め𢌞り〳〵つて遂に「パ

ソマク」に來た。それは丁度洪水の後なので茅につかまつて助かつた二人の男女である。幸ひ二人は命は全うしたが、洪水のために萬物凡て流れ去り、殊に火の種を失つて不便この上もなかつた。すると「チャモデク」といふ鳥が「バボガリド」から火を携へて來て二人に與へた。そこで木の腐つたものなどを煮て食べて生を續けてゐた。かうした生活をしてゐる中にも二人は生殖といふ事を考へないではなかつた。或時「チチウ」鳥が兩人の前に來て頻りと尾を動かし不思議な所作を示すのを見てゐると、思はず性慾をそそられ堪へがたくなつたので遂に妹を招いて契つた。それから子孫が次第に繁殖したのである。

かうして增殖した祖先等は豹と共に美地を探し步いたが、「ガジャパス」に行くと豹は頻りに地を掘つたから、人々は屹度此處がよいのだらうとて居を定めようとすると、間もなく豹はそこを去つて「ポヌコ」に行き又地を掘つた。祖先等はその後を追つて「ポヌコ」に著くと、豹は又其處をすてゝ「サプラカン」に進みそこに又地を掘つて止まつた。そこで人々は其處に社を建てる事とした。この時「カプカプ」といふもの推されて

頭目となつた。ところが其の後兄のウシュムはこゝから分れて「シャカロ」に移り頭目となつた。今でも五年每に當社から「シャカロ」社の租を納めるのは兄の社だからである。

チヨロパタパタジ社　頭目

パリチャリチャオ蕃

「ピューマ」社の「ピナバオカサン」といふ所に一本の竹があつた。昔その竹の中から一匹の靈蛇が現はれ、間もなく化身して男女となり、二人の子を產んだ。サマバリ、ササブチャブといふ男女であつた。彼等は成長して「ガリュゴガン」に行き、暫くして「ポゴダン」に移つた。それまでは火といふものがなかつたが、此處で初めて「ヂャムテ」鳥から火を貰つた。其後「カナリナリバン」、「マルリュナイ」、「チャコラバオ」、「チヨカミカミ」、「チャルバガバガン」、「チヨリナカ」など、轉々と移り步いたが、「チヨリナカ」で五年祭を刱めた時、神が降臨して爾後他に移轉する事なく此處に定住せよと告げ

られた。然し人口が大いに增殖して土地が次第に狹隘になるのでやはり其後も諸所に轉住する事が止まなかつた。

シンパウザヤン社　パスザヤムルグル

昔サリムズとサルマイの男女が竹の中から生れた。それが我社の祖先である。併し二人の間に生れる子供は皆不具者だつたが、孫の代になつて漸く完全な人が生れるやうになつた。

スクスクス社　パリプリチヤオ　パリツト
ザヤロツズ　サゴツプ

太古祖先が「タバラン」にゐた時、太陽の光線が細くなつて「カトモアン」山に當つた。不思議だからその山に行つて見ると一つの壺があつたので携へ歸つて「タリマラオ」家に置いた。すると間もなくその壺が破れて中から一人の男兒が産れ出た。それ

で「タキバリチ」「マダラツップ」の兩家で乳を飲まして育てあげた。後に「マカザヤザヤ」社の「バブルガン」家の祖となつたのはこの者である。そして今でも「タリマラオ」家は「ラバル」の大頭目で「バブルガン」家は「ブツル」の大頭目である。

トクブル社　パツクルモリノ

「カトモアン」山に「イナラン」といふ所があつた。昔ある者がそこに行くと、一箇の珍らしい壺があつたから、蕃布に包んで持つて歸ると、途中で落ちた。併し割れもしないので拾ひあげて運んで行くと又落ちた。餘り不思議だからそのまゝにして社に歸り兄弟に話すと兄弟は面白い事だとて一緒に行つてみた。すると話の通りの壺があるので大事に布に包んで「タバラン」家に運んだ。偶々家人は窓を閉ぢて互に虱の取りあひをしてゐたが、日光が壁を通してその壺に射してゐた。暫くするとその壺が突然破れて二人の子供が匐ひ廻つた。驚いた家人は瓢で水をかけようとすると子供はこれを蹶かへしたから、破れた壺で水を注ぎかけると漸く小兒は靜止した。そこで乳の出る

女を求めて哺育すると立派に成人した。一人は女子で一人は男であつた。その中女の方は「パバグラン」といふ所に移つたが、そこに無法な男があつて髪を捕へて挑むのが慊なので逃れて平地に赴いた。所が何時の間にか孕んでゐたので、煩悶の餘り「アムホン」(和蘭人)の所に行つて相談すると、蘭人は「文字を學びなさい、文字さへ識つたなら作物も自然に出來て、食物に不自由するやうな等は決してない」と敎へたから、暫く「アムホン」の所に止つてゐたが多くの子女を産んだ。それから兄のピナライはその儘山地に止まつて我社の祖となつた。

又

太古石から産れたタムルガンといふものが「カトモアン」山に登つた時、「デロン」といふ小さな壺が天から降つて來た。そして太陽が晃々と照りつけると思ふと、間もなく壺の中から二人の小兒が現れた。不思議な光景を見た彼は屹度太陽の子に違ひないと思つたから、二子を連れ歸り養育し一人をタイルと名づけ、他をトクトといつた。所が二人は長じて異彩があつたから、社人は心服して頭目の位置に据ゑた。「ラバル」

蕃「ラウツウ」家の祖先と仰がれるのは彼等である。其後洪水が起つて、漸く水の退いた後は、陸といふ陸がすつかり磊々した岩石ばかりとなり人々が非常に苦しんだから、タイル、トクトの二人は澤山の蚯蚓を飼つてそれを四方に放ち、其の糞で沃土を造つた。それからといふものは「ラバル」の地が悉く「ラウツウ」家の領土となりその支配を仰ぐやうになつたのである。

パリラヤン社　ピカルカラギヤン
テブラガン　パリブルン

昔「マテヤサン」といふ所に一巨巖があつて、その岩の中から二人の男女が現れた。彼等は神から交合の道を學んで夫婦となり三子を擧げた。そして長子は頭目となり、次子は副頭目、三子は女であつたが蕃丁（社人）と定められた。長子は「キヌラン」社のカラバヤンを娶り、次子は妹と婚して各々子孫を儲けた。我社の祖先は此の長子であつて、極めて長大な陽物を持つてゐたから、常に「ダーデル」にゐながら、「キヌラン」

のカラパヤンとなる事が出來た。夫婦の間には又偉丈夫が產れた。そして長ずるに從つて益々異常な所が見えた。彼は「ダルパリン」山のパウルスといふ女に「キソジュ」してゐたが、他の人が見ると蛇に見え、パウルスには美しい若者に見えたといはれる不思議な男であつた。パウルスは二子を生んで間もなく「ダルパリン」山中の池に身を沈めた。其の時壺と「アタ」(首飾)とを岸に殘して置いたさうだが、今社に傳る壺はそれである。そして又殘された二人の子供から次第に人口が增殖して、「ダーデル」に住めなくなつたので「タラマカウ」に移住し現社を組織するやうになつた。

タラマカウ社　ラプラスロロアン
アマロ、パリユース

昔一匹の犬が溪に下りて水を飲み盡すと、突然溪底から煙が立騰り、暫くしてそこから男女が現れ出た。女の名は不明だが男はリサンといつた。これが我社の祖先である。

サイセツト族

ダルルカン社　レレバンギラル　バグリアンシヤ
タプラタカナオ　タクタバイルグイ

太古大洪水があつて平地は一面の蒼海と變じたから朱姓ブロンオポイ、マヤオプの兄妹二人が機胴に乘つて李頭山に遁れ漸く生命を全うした。所が間もなく妹が死亡したから、兄のブロンオポイの悲歎は譬へるにものもない位であつた。暫く妹の屍を抱いて涙にくれてゐたブロンオポイは、やがて山麓の清澄な池の畔に行き、その屍をずた〳〵に切つて小片とし、それを一々丁寧に「リツカル」樹の葉に包み、「妹よ、この寂しい兄を慰めようとならば、肉化して人となれ」と呪りながら、その一片を機胴に入れて水中に沈めると、忽ち人と化つた。喜んだブロンオポイは早速陸上に引きあげてタウナイと名づけ豆姓を名乘らせた。それから同じやうにして肉を沈めると又人間が出來た。それにはタロラホライと名づけて日姓を名乘らせた。かくてアロカリ(風姓)、テ

アオリン（種姓）、タマオウシャ（士姓）、タエンバヤイ（蟹姓）、ロキロク（錢姓）、タエンバヤエン（夏姓）の九名を得た。そして其れ以上は失敗に終つたのである。それから暫く後の事、ブロンオポイが森林をあちこち徘徊うてゐた時に、里芋の皮が散らばつてゐたから、きつと人間がゐるに違ひないとて、所々方々を探して一人の男を見つけたので、連れ歸り狐姓を名乘らして同棲せしめた。かうして我社の基礎が建てられたのである。

シヤイヤホル社　豆姓　タロヨマオ
朱姓　タベカレ

太古洪水があつた後で、或神が人を殺して肉を切り海に投げ入れると、其の肉が悉く化して人間となつたと傳へられてゐるが、その後の事は詳かでない。我等はもと後壠にゐたが數十年前にこゝに移住し初めて潘姓を名乘つたのである。

カレハパスン社　潘姓　タウスイタラウ

祖先等はもと「パッバクワカ」にゐたが、それから「ヴラヴル」山を越え、「カラバイ」溪に沿うて下り、「バスコワラン」に移住した。併し間もなく又移動を初め、更に下流の上坪に移り、尙下つて二重埔に行つたが漢人の壓迫に遭つて引返し、二派に分れ一は「シパジー」に、一は「ピーライ」に定住する事となつた。

シパジー社　豆姓　ユーパイオマオ

アミ族

昔「ラガサン」に在つた神の子スラ、ナカヲの子孫は年々歲々繁殖して行き、食物の缺乏さへ感ずるやうになつたから、スラ、ナカヲは長男のタパンマスラと三人で天上して祖神カクモダンサパトロクの許に行つて、「農具を造つて下さるやう」とお願したので、神は愛子愛孫のために、「さうか、それぢや造つてやらう」とて鐵で農具や錨を鍛へて授けられ、天つ鍛冶リルンの子漢人ククイタタ、バトゥココマイマスリン、チダウバウキッル（女）の三人を添へて「ラガサン」に降らしめられた。その時スラ、クク

イタタなどの男子は梯子で降つたが、ナカヲやチダウバウキッルの二人は女だから梯子は危險だといふので、祖神は凧を造つて乘せられたといはれてゐる。そして此の時貰つて歸つた錨は寶物として今尙ほ我社に傳へられてゐる。

彼等は首尾よく「ラガサン」に歸り著いたから、鍛冶屋は早速竈を開き、鍋釜類を鑄ては社人に分ち、又かつて神から授けられた壺や茶碗まで與へたりしたから、社內の人望を博し、別に耕作などはせずとも、三度の食料は社の者が交代して饋つてゐた。ところが或日黍の飯を贈つたものがあつたからチダウバウキッルは大さう怒つて、「我等に黍飯のやうなものを與へるとは何だ」と言つて地を踏んだ機みに、彼女の五體は俄かに輕くなり、飃々として昇天した。社內の人々は非常に後悔して、どうかして再び呼び戻さうと焦慮(あせ)つたがその甲斐がなかつた。ところが五六日して彼女は狂氣となつて降り、諸所を踊り廻り不思議な手眞似をしてゐた。後世の「チカワサイ」(厭勝人)は彼女から始まつたのだといはれてゐる。(蕃人は臺灣土人からチカワサイの術を學んだといつてゐる)。他の三人も亦大さう腹を立て、吾等は毎日せつせと働き鍬を造つてゐるに拘らず、

粗食さすなど心外千萬であるとて、早速鍛冶の道具を取り纏め何處ともなく逃げ失せた。

社人は大いに驚き其の跡を追はせた。丁度南方「サワ」といつて今の巴塱衞(ばろゑ)方面に行つたが、船舶の材料にするやうな大木があつたから、此の邊に屹度漢人がゐるだらうとて探し廻つてゐると遙か向ふに煙が立ち騰つてゐたから、それを目當てに進んで行くと、岩の下に三人の男がゐた。これ紛れもなく尋ね求めたクイタタ、バトッコ、コマイマスリンの三人であつたから、雀躍して走せ寄り、「我等は遙々「ラガサン」から御身たちの跡を追つて來たものである。一體どんな不平があつて一言の挨拶もなく不意に社を出發せられたのか。我等に多少の粗忽はあつたにせよ餘りの事である。兎に角我等に免じて再び社に歸つて下さい。」と慇ろに願つたところが彼等は口を揃へて、「大體汝等は人を遇する事を知らない。あれ程骨を折つて働いた我等に粗食せしめたではないか。我等は居るに堪へないから逃げたのだ。我等は神通自在の力を持つてゐる。飢ゑると鳥に命じて食を求めしめるのだ。そして特に美味が欲しい時は、一寸注意を

與へさへすればよいのだ。渇したならば水は得られるし、飢ゑれば食を得られるから、少しも他人の力を借りる必要はない。不惑ではあるが汝等は早く社に歸つて此の事を傳へよ」と言ひ了つて何處ともなく其影を隱してしまつた。使者は惘然として見送つてゐたが仕方がないので、元來た道を辿り十數日の後に漸く「ラガサン」に歸り著いた。かくて三人の漢人はゐなくなつたが其子孫はやはり社に止まつて今に嗣を斷たないとか。

「ラガサン」では人口が次第に增えて來たが、カロガガハエといふ男が、兩親の留守中に、嘗て昇天の時使つた梯子を盜んで北方に逃れ太巴塱社の祖となつた。そして鍛冶に使つた粘土まで持つて來て土器を造る事を發明した。今でも太巴塱で土器を造るものは其の子孫である。

この事があつてから人心に動搖を來し、「ラガサン」を出でゝ各地に移住を企てるものが餘程多くなつた。それ等の中でカロコロは馬太鞍に行つて一社を建て、ルンガイサスルランは「ダブダブ」に移り、「サラヲパナハイは「サラツラン」に移り後「ダハタル」に

轉じ、タパンマスラは「カロパロパン」に赴き後「チーチパイ」（今の木村金山の附近）に移り、トマイマスラは「オーラヲ」に移つて「オーラヲ」社の祖となつた。かうして五六年のうちに「ラガサン」のものは悉く他に移つてしまひ、其れからは誰一人「ラガサン」に登るものもなく、茫々とした雜草が生ひ茂るばかりとなつた。

「ラガサン」は遂に亡んだが、最初スラ、ナカヲの漂着した時、同じく流れついた家具などは、今でも蛇となつてそこに殘つてゐる。あの兩頭の蛇は「サチプス」（籐で作つた鍋つかみ）の變じたものだし、人間の腹ほども太い大蛇は籐の蓆の卷いたまゝ蛇になつたのだし、澤山の小蛇は全部箸の變化である。それから今でもこの山の麓に行くと一種の異臭が鼻を衝くのは、當時の穢物の臭が殘つてゐるからである。

タパンマスラの子孫にツユウダデン、サラデフ、マタウ、バタカ、といふ四人があつた。「チーチパイ」で毎日怠らず耕作しても結實が常に惡かつたから、何處か美地はないものかと尋ねながら、連れ立つて海岸を廻り卑南附近の「バラガヲ」に著いた。併し此處も思はしくないので、更に北進して「タッカイ」を通り、「バラチン」、「マタン」

などを過ぎて「ダハタル」に出た。偶々觀音山の邊「マクダ」川の上流地でマカリタン、マアダハウといふ烏漏(おーらう)社の者と遭つた。百歩を隔てゝ手招き、十歩を隔てゝ問うた。「汝等は何所の者か」。「我等は今烏漏には住んでゐるがもとはタパンマスラの血統をうけた者である」。聞いた四人は思はず大聲をあげて泣いた。そして懷しい昔語りに時の經つのを忘れるばかりであつた。此の時彼等の腰をかけた臺が今に石となつて殘つてゐる。四人は彼等に名殘を惜しみつゝ別れを告げ「タツカイ」に戻つた。丁度その時は晝頃だつたから、各々辨當を使はうとしたが、一人が過つて「マリライ」(穀物の名)を覆すと、その「マリライ」から根が生え、芽を出した。現在でも蕃人の首飾に用ふる豆はこれである。

其頃秀姑巒(しうこらん)溪は細流であつたが、或日大きな鰻が來てぐる／＼廻つて尾や鰭で押したから、河幅が俄に擴つて大河となつたのである。丁度その時「サラヲパナハイの後裔のカラワン、アブイツといふ二人が河岸で見てゐたが、その鰻を槍で突いたから、さしもの鰻も弱つて河を流れ下り、「チーチパイ」で、タパンマスラの子孫の沈めておい

た筌にかゝつた。そこでその大鰻はカラワン、アブイフツと「チーチパイ」社の者の獲物となつたから、彼等は等分しようとした。ところが或者が發議して、「こゝで皆で食へばよいぢやないか、」といつたので皆々贊成した。それでは料理しようとてアブイフツ、カラワンの二人が刀を執つて先づ頭を截り、手を止めてあたりを見廻すと、社人は雜談に耽つてゐるので、二人は幸先よしとその鰻の頭を持つて逃げ去つた。それと氣付いた「チーチパイ」社の者共は、烈火のやうに怒つて追跡し、遂に二人の首を斬つて歸つて來た。それから社人は鰻を肴とし、酒宴を張り舌うち鳴して美味を賞した。ところが一方「チーチパイ」社では婦女子等が夕飯を炊かうとして粟を煮たが、一寸も增えない。以前は爪で粟を料り一爪の分量で五六人の家族を養ふに十分であつたが、其日に限り、唯湯ばかりが沸騰して、粟は何處に行つたか形さへ見えない有樣だから、皆々不思議に思ひ老蕃等に告げに行かうとしてゐる所へ、河狩に行つた壯丁等が酒氣を帶び心地よげに歸つて來た。そして悄然と佇んでゐた婦女子等が、留守中の出來事を早口に告げたから、折角の醉も醒め、顏色が忽ち蒼白になつた「カワス(神)」と高く叫び、

これはきつと神のやうな鰻を食つた爲だらうと後悔した。併し今更如何ともする事が出來なかつた。粟は其日から殖える事なく、年々凶作うち續いて餓死する者が多かつた。それ以來番社では鰻と鼈とを食べなくなつたのである。

ツェウダデン、サラデフ、マタウ、バタカの四人はそれから「サテポカン」に移つたが、此所も同じく地味が惡く穀物が發生せないので「ケアリン」山(卑南社の附近)に移り、更に又「カララ」に來た。ところが彼等も旣に寄る年波に寂しさを感ずる事深く、どうかして社衆を殖したいといふので、サラリプ、マタウ、パダカ、ラリンの子等を「ダハタル」にやつてサラヲバナハイの子孫を招かした。ところが「ダハタル」の人々は「我社は年々の豊作で穀物家に滿ち、子孫繁榮して何不足なく暮してゐる。だから此社を去つて他社に移る必要もない。好意は有り難く思ふが、どうか移住ばかりは許されたい。只祖先を同じうするものが近くに住んでゐる事を聞いて我等は大いに喜んでゐる」。と傳へられよとて、使者を手厚く饗して還した。四人は歸社して父に顚末を告げたが父たちは非常に遺憾に思ひ、再び彼の四人を遣し云はしめた。「我社は貴社より尙

穀類に富み、一本の木蔭で粟の百束二百束を得るに骨が折れない。その上ダハタルは高地だから雲も多く作物の發生が十分ではないでせう。兎に角貴社の移住を切望します」。すると「ダハタル」の方では、「我が社でも貴社同樣穀類充滿して、食つても盡きる事はない。それに肉が欲しくなると山へさへ行けば若々しい鹿や猪があり、鳥類も豊かなら、麓の河へ行くと鮮しい魚は數知れぬ程捕る事が出來て、何不自由がないといふ事を詳しく語られよ」。とて承知しない。ところが「カララ」の父どもはまだ斷念する事が出來ないで、子等の諫めもきかずに三度使を出した。「我社ではいろんな便利があるし、鳥獸のやうなものでも大袈裟な事をせないで一寸小便に立ち出でゝも若い鹿の一頭位は手捕りにする事が出來る。魚は又一度捕ると全社で食べ切れぬ位澤山ある。まあ余り頑固な事を言はずに我等の希望を容れてほしい」。といふのが使の口上であつた。そこで漸く「ダハタル」の人々を動かす事が出來た。何といつても一社擧つての移動だから途中の道なども相當開いておいて欲しいといつて使者を歸した。四人は雀躍してかくと告げた。「カララ」では社衆分擔して道を開き家を建て準備略ぼ整つたから、全社

の壯丁美裝してサラヲパナハイの子孫の人々を迎へるために出發した。ところがその途中南方に煙が上るので行つて見ると、さゝやかな蕃社があつてランプルチ、ナワチといふ二人の盲人がゐた。「老人たちは誰ですか」。若者が尋ねると「我等はタパンマスラの後裔である。我等がもと勢力のあつた頃は近隣の各社は勿論、遠方の諸社まで威服して獲物のある時には屹度その幾分を献じた。ところが不幸にも二人とも眼疾に罹り盲目になつてからは、今迄服從した諸社は皆叛いて貢献を絶ち、我が社人まで一人減り二人減り今は見る影もない二人ばかりとなつた。ところが或日の事附近の社人が澤山やつて來て鹿を捕へたから献上しよう。然し大頭目は孰れも盲目で折角の獸も見る事が出來ないから、我等が鹿を手で打つ數で頭數を知られよといふものだから近頃にない親切だと喜んだ。そしてその音に耳を澄してゐたが、丁度百になつた時、此處に百匹の獸を置いたから納めなさいといつてそこ〳〵に立ち去つた。そこで庭に下り匍匐つて獸を探したが百頭は愚か一匹もゐない。漸く鹿の股一本が置かれてゐた。このやうな嘲弄の中に無念の日を送つてゐるのである」と話すので哀れに思ひ、急ぎ

社に報らすと、改めてサラリプ、コタウ等四人が使者となり、ランプルチ、ナワチ二老人を社に迎へ世話をする事となつた。

この日はその儘歸社してあくる日又勢揃ひして出發すると、又々、途中で煙の立ち上るのを見た。好奇心から近づいて見ると「サリヲッ」といふ小社であつた。此の社衆もカララに招く事とし、漸く次の日になつて「ダハタル」のサラヲパナハイの子孫等を迎へたのである。

かくて諸所の蕃社を「カララ」に集めたから「カララ」は俄かに大きな社となつた。そこでランプルチ、ナワチを世話してゐたクモンバリキロが頭目に推され、サラヲパナハイの後裔は鹿狩の職を掌る事となつた。それから間もなく附近の「タルキドック」、「タムトス」、「チリガサイ」、「マボリボロ」、「マカド」、「サラウソツ」、「タマダカラ」、の七社と「カララ」社とが合併で鹿狩を行ふ事となり、六日間「サリシン」(祭)を行ひ、籾殼を山に播き鹿の逃げ道を塞ぎ、七日目の未明から狩獵場「タウラエン」を包圍し、我れ先きにと勇み登つた。山には幾百とも知れぬ鹿がゐるのでクモンバリキロは他社の者

がそつと盗みはすまいかと思つたから始終山を巡視してゐた。すると果して大鹿を脊負つて走つて行くものがあるので頭目はその若者を殺して、鹿を上に乘せかけて置いた。かうして三人まで殺したから、七社の者共は怒髪天を衝き、一時に、クモンバリキロを殺さうとしたが、却つて七社のものは散々に痛められ、到底クモンバリキロの武勇には敵する事が出來なかつた。そこでお互和睦するのが得策だと知つたから、日を定めて其の式を擧げようと約した。それから六日目に七社では「サリシン」を行ひ、酒肉、餅を整へてバロンバラカシ、ムルクボハツル、オースルオーラの三人を「カララ」に遣した。ところがどうした手違ひか此の日は「カララ」の社衆が全部獵に出てしまつて、あたりは闃然としてゐるので、三人は薄氣味惡くて早速歸社して、此の事を老蕃に告げた。そこで七社の者共は怖ぢ恐れて夜に乘じ竊に卑南社方面に逃げ去つた。

かうと知つた「カララ」社は、これは我等の失策だから是非七社のものを止めなければならぬとて屈竟の若者三人を走らせて其の跡を追はせた。丁度「パダカ」といふ所で追つ付いたから、其次第を詳しく述べたが、七社のものは容易に納得する色もない。

どうしても卑南社に行かうとて南方に急ぐので、「カララ」社からは犬一頭を彼等に贈り、彼の三人のものをつけて共に卑南社に赴かした。

卑南社では總社の頭目が寄集つて密談した。「我等七社のものが卑南に來たのはカララ社に報復したいからだ。そして七社を亡ぼさうとしたカララ社を攻め亡す血祭として先づ三使を殺さうではないか」などといふ言葉がちら／＼聞える。三人は氣が氣でなかつた。その中馘首祭に用ひる「ウダウ」(酒)を「ドド」(竹筒)に入れて持つて來た。酒宴は始まつた。三人は「かうして醉はされて殺されるのだ、逃げようとて逃げられない」。と觀念の眼を瞑つてゐた。すると「カララ」社から連れて來た犬と卑南社の犬とが啀み合つて飛び跳ね不意に「ウダウ」の竹筒を蹴飛したので、卑南社はこれを不吉の兆として今迄の企を止め、其の頭目が三人の使者の前に來て「末永く當社と和睦しよう」と云つた。そして厚く贈物をして歸した。三人は九死に一生を得て「卑南社の好意を有難く思ふ。今後當社の者が我社に來る事があつたなら、金や瑪瑙のやうな珍らしい飾物を贈らう」と約して去つた。

かうして彼等は危い命を免れ三日の後には「カララ」社に歸着したが、元來瑪瑙や金は「カララ」社にはないものだから、今更困つて花蓮港あたりまで探した。併しどの蕃社でも見當らなかつた。約束を破つては報復が恐ろしいから、遂に頭目に謀つた。すると頭目は「それぢや仕方がない。一社擧つて姿を隱さう」といつたから社衆も同意して、各々家に歸り粟を束ね家具を纒めて、今の「シャデブ」社の上方に隱れた。

それから二三箇月經つてから卑南社の者が「カララ」社を訪ねたが、社は何處に行つたか草茫々と生えて足の踏む所もない荒れやうである。怪しみながら諸所方々を探し步いて河原に出た。すると五六人の小童が嬉々として遊んでゐたから「カララ」社はと尋ねると後の繁山をさして其の邊だらうと敎へた。併しそこには尋ねて行かうとはせずに、そのまゝ子供を相手に遊び戯れ、競走などさせた。「サラウミ」といふ子供が一番敏速で何時も先頭だつたから、これがよいといつて其の子を攫つて卑南社に連れて行つた。老蕃壯丁などは山狩から歸つて此の事を聞いたが、如何ともする事が出來なかつた。

「カララ」社の勢力も昔のやうではない。社名でも更へてはといふので、「チナサアン」と呼ぶ事となつた。或時「チナサアン」社では全部擧つて狩獵に出た。その留守の事、社に殘つた老人が社内に事のないやうにと見廻つてゐると跛者の卑南社人を見つけたから「おのれ！」といひさま後から槍を投げたが、跛者は素早く傍の繁みに隱れた。茅や「コアチン」や、蓪草などが丈よりも高く密生してゐる中では到底老人の力におへない。曲者はとう〳〵逃してしまつた。

かくて其の年も半過ぎ粟の收穫時となつたが、恐ろしい不作で社人の食料には到底足らない。その時悧發な一人が「何とかして不足を補はずばなるまい、一つ粟を買つて來よう」、とて大きな瓢の中に澤山の熊峰を入れ、「これも窮餘の一策だ」と元氣よく五六人連で出て行つた。そして海岸の「マブク」といふ社に着き、「我等は貴社の粟を買ひに來たのだ。此の瓢には澤山の瑪瑙が入つてゐるから、これと粟とを交換して貰ひたい」。「マブク」社では承知した。そこで更に語を續けて、「併し瑪瑙はもと我等の寶物だから、人手に渡すのは非常につらい。だからかうして瓢のまゝ讓るのだ。若しも汝等

が目の前で瑪瑙を弄ぶのを見ると取返したくなるに違ひない。後生だから我等が可なり遠く離れるまで開けて呉れるな」と堅く約束して立去つた。「マブタ」社の者共は暫くしてから、もうよからうとて瑪瑙を取り出さうとすると、飢ゑきつた蜂が飛んで出て、顏や手足の容赦なく螫し廻つた。僞かれた社衆は大いに立腹し數十人の勇士が武裝して追跡したが、遂に「ホシカウ」(璞石閣)の邊で追つついたから悉く惡徒の首を刎ねた。「チナサアン」社では此の事を不吉として其後又「チーチバイ」に移住した。今でも璞石閣の南方一里許り、秀姑巒溪の河中に孔の多い大石が橫はつてゐるのは其の時棄てた粟の化石である。

卑南社に奪はれた少年「サラウミ」は殺されもせず、却つて大事に育てられ成長して「カパ」(壯丁)となつた。そして妻を娶り一家をなしたが、故鄕の父母を慕ひ、或日狩獵にこと寄せて「チーチバイ」に歸り獲物を父に捧げた。兩親は拐かされた子供が立派な若者となつて戾つて來たので、嬉しくて言葉も出ない。弟等は早速その肉を料理して父母にも薦め、自分等も飽くまで食つた。ところが其の夕方から子供等は俄かに腹痛して

數日の中に悉く死んでしまつた。それぱかりか頭目の子までも獸の夢からうなされ發熱して、間もなく死亡してしまつた。そこで頭目は不吉な事が此の通り重なるのは「サラウミ」が卑南社の地で獵つた獸を我社の者に食はした爲だらうと思つて、獨斷で「チーチバイ」社の領地のうちで卑南社に接近した地を割いて卑南社に割讓した。これを聞いた靑年等は大いに不平なので、頭目には計らずに卑南社に行つて其の地を取り還さうとした。ところが不思議な事には卑南社に近づくと道を失ひ、何處を見ても新しい足跡ばかりで、どうしても舊道が見當らない。仕方がないから心當に進んで行つて、辛うじて卑南社につき數回の談判で漸く取戾す事が出來た。此の時「チーチバイ」社では「パイシン」頭が大さう心配して「卑南社の老若男女悉く盲目となれ」と呪つてゐた。この厭勝の効によつて成功したのである。それからも土地については屢々戰爭したが、いつも「パイシン」頭の呪ひで武器がすつかり飴のやうになつて使はれなくなるので、遂に卑南社が歸服するやうになつたといはれてゐる。

今の奇密社のある所は、その項は絕好の狩獵地で、いつも鹿の獲物多く、美しい泉が

あり、生活に便利な所だといふので移住する事になつた。そして奇密といふのは此の邊一面に「キビ」草（蔓草で葉の形が鳥の足のやうである）が繁茂してゐたから社名となつたのである。

然もあの盛大を極めた「カララ」時代は夢のやうに過ぎ去つて、今のやうな各社に分れてしまつた。そして今でも加納納峠の上には年經りた石柱（高一丈二尺、幅五尺許）が昔を語り顔に立つてゐるのである。

奇密社　タアエ　カヂウ

太古「アラパナパナイ」山に降臨せられたマダピラ、リスン二神の姫神を海神が望んだ事から大海嘯が起つたが、其の時「ラガサン」に漂着したララカン、ロチエが神の告げによつて産れた三子を育てゝゐた頃コアライ、インコウといふ二人の漢人がやつて來て刀や鍬を與へた事がある。

それから暫くして次子のタダフチダルが狩に出て「シサクサカイ」といふ所が沃土である事を告げたので、それでは其處に移住しようと決したが、末女のラリカヤンチダルだけは他に行きたいといつて一同に別れた。奇密社の祖となつたのはラリカヤンチダルなのである。「ラガサン」から「シサクサカイ」に移つて建てた社を「スボロン」にいつたが、後に訛つて「タバロン」社といふやうになつた。「スボロン」とは「山を降る」といふ義である。此の時又先きのコアライ、インコウの二人が來て鐵の種や鎌などを授けた。そこでこの種を「サピリタ」（今の沙荖社の北）に植ゑ、日夜大事に監視してゐると、種は次第に殖えて大きな塊となつたから、それを取つて刀や鍬や鎌や、水汲道具まで造る事が出來た。ところが或日「ラブネ」（粟の一種）の辨當を持つて行つたものがあつたが、其日から鐵は泥土のやうに軟くなり、何も造れなくなつて、今では殆ど鐵器を失ふやうになつた。

「シサクサカイ」に移つてから暫くして、スラといふものがやつて來て養子とならうと乞ふたので長女チエチエホチダルの婿としたが、やがてラルンマセラ（女）タパンプマ

セラ（男）、ルナアワウ（女）の三子が生れた。タダフチダルにも三子があつた。長男スクイタタルは「パチダル」社の祖となり、猫公社の西に住んだ。後に至つて「パチダル」社が亡び猫公社となり、その附近に新たに「テガラウ」社が起つた。そして次男のオハルタタルは卑南社の祖となり、長女ラヤタタルは歸化社の祖となたつのである。

「タバロン」社は永らくシサクサカイ（今の太巴塱社から北方大凡三十町）に住んでゐたが、テサワルといふものが、川を隔てゝ南方に美地があるのを知り、其所に移住しようと勸めたから社衆悉く同意した。此の時テサワルは祖先傳來の金の梯子を取り出したが、天俄かに掻き曇つて暴風雨が起り、河水が氾濫して渡る事が出來なくなつた。併し一旦取り出したのだから、無理に梯子を抱いておし渡つたが、遂に激浪に攫はれてその梯子を失つた。此の梯子はタ、クサン、サララッヌルといふ二神が天降られた時用ひられたもので、ララカン、ロチエに傳へ家寶として子々孫々に傳へて來たものである。今當社に傳つてゐるのはテサワルが木で模造したものである。

註　老蕃ロークリユー（大正二年七月死亡）はテサワルの末裔であつてその梯子を家の爐上に吊して保管してゐた。彼は語るやう、テサワル以後は詳かでないが。我社はテサワルが移住してからは此處に定住して動かなかつた。そして祖先も僅か八代前までしか知らない。テサワルから大分缺けてゐるらしいと次の系圖をあげた。

○テサワル……畧……ペハラウ——ロホパサ
　┣アナアリモロ——アナムヨウ——マランニエク
　┗ウド——トエドムヨウ——アロペプイ——ロークリユー（話者）

そしてシサクサカイに在つた家は今皆石となつてしまつたさて、ロークリユーの導くまゝに「チノラヤン」山の南方、「サトウボ」河と「カソリ」谷の間にある稍々小高き丘に行つて見ると、數本の石柱が建て、あつた。アミ族には石柱傳說が可なり多いが、馬蘭社舊跡地、（卑南社を去る北方一里半）、「カララ」社舊蹟地（加納納社見張所から東方約十町）のものでも、この「シサクサカイ」の遺蹟のものでも相當の人工が加へてあつて古色掬すべきものがある。そして孔を穿つには慥かに鐵器を用ひた形跡を認められる。奇密社では今でも穀物倉は石の基礎の上に建てられてゐるのは、何かの暗合があるやうに思はれる。

又

漢人が「タバロン」社に來て鍛冶に從事する者が絕えなかつた。我社が今の地に移住して來た頃又タンシヤ、コウシヤの二人が來て、刀劔、鐵砲、鍬、鎌のやうなものを造り、社人アランの娘ヨンアランを娶り社內に住んだ。ヨンアランの兄をタリアランといつ

た。或時タンャは父に向ひ義兄タリアランに修業させたいから、暫く私と支那に行かしめよとて連れて行き、一年半ばかりで歸つて來た。その時船に大砲を積んで大港口に上陸し「ツポー」社に滯在したがタリアランは青年等と游泳に行つて溺死してしまつたからタンャ、コウシャの二人は力を落し急いで太巴塱社に歸つて來た。そして大砲はそのまゝ大港口に殘して置つたが、どうなつたのかわからない。

今社内に「コシアン」といふ地名の殘つてゐるのはタンャ、コウシャの住んだ遺跡だといはれてゐる。そしてコァライ、インコウの二人と併せて神として社人に崇敬せられる。漢人の子孫はその時から連綿として續いて來た。今の甲長何正安はタンャから二十七代に當るのである。そして戸數も近頃では十數軒になつてゐる。

太巴塱社（たばろん） ラタバベ
カテタポン
ロークリユー

タダフチダルの子孫にタマランアロ、トマイコールといふ兄弟があつた。或日狩獵の

ために馬里吻溪の方面に出かけたが、糯米の籾殼が流れて來たから、不思議に思つて溯つて行くと一少女が河岸で洗濯してゐた。二人は近寄らうとすると、それと氣付いた彼の娘は飛鳥のやうに逃げ去らうとする。兄は周章てゝ呼び止め、「我等は怪しいものではない。我名はタマンアロとて太巴塱社の者だ一體お前は誰か」と尋ねたから、娘も漸く安心して、「妾はブサイといひます」と答へた。「夫はあるのか」。「いゝえ」それでは我が妻にならないか」、「愛して下さるならば」と要領を得たから、兄は娘の家を尋ねなどして三日を期して別れた。娘は「サツラアン」山の上に住んでゐるアポロールといふ女の愛娘であつた。それから三日目に兄弟が再びこの前の河原に來ると娘は約束の通り待つてゐたから、うち連れて「サツラアン」山に登り母親をも伴つて太巴塱社に歸つた。

その頃今の馬太鞍社の地は兄弟の父のカロコールの畑で、その周圍に「マタアン」といふ木豆を澤山植ゑつけてあつた。それでタマランアロの夫婦は毎日河を渡つて此の畑に通はなければならなかつた。それに降雨の時は河は一時に氾濫して渡る事が出來

ない。父は心配の余り彼等夫婦に畑に小屋を建てゝ住ませ、鹿や山豚を獲た時は其の頭骨を持つて來させる事とした。それ以來タマランアロは畑に移つて、耕作の余暇に獲物でもあると河を渡つて蛇度父に奉じたものだが、年老い體力が衰へてからは其事が止んだ。カロコールは獸の頭骨で神を祭るべき事を敎へ神像を與へて全く分家せしめた。それから次第に人々がこゝに移住して馬太鞍社が出來たので、社名は「マタアン」（木豆）から起つたのである。父に授けられた神像といふのは今でも馬太鞍社の路傍に立つてゐる木像がそれだが、全く土人の製作らしい。

馬太鞍社　タガドウカロ

昔トマイコールといふ者があつた。ある時狩獵に行つて六階鼻の「パラハン」山の頂に休んでゐた。そして何氣なく咳をすると、向ふで同じやうに咳くものがある。これは訝しいと思つて四方を見廻したが、更に人影がない。「どうも訝しい」と叫ぶと、又同じやうに叫ぶものがある。愈々怪しからぬと聲を便りに進んで行くと百日紅の木があつた。「若しか此のこの木が眞似るのではないか」といふと、「若しかこの木が」と紛れる事もなく聞えたから、トマイコールは烈火のやうに憤り、「不都合な木だといひさま刀を拔いて斬らうとすると、中から、「木を切つても姿を斬つてはなりませぬ」といふ聲がする。そこで初めて木の中に人のゐる事が判り、幹の下の方を伐つて倒すと一人の美しい女が現れ出た。トマイは氣味惡く思つたが、やがて「お前は何者か、どうして木の中にゐたのか」といふと、「私はアバンである。最初から木の中にゐたので、今日まで出る事が出來なかつたのを、あなたが出して呉れたのです。」と答へた。トマイコールは「お前は「マラリダッ」から出たのだからアバンフマラリダッと呼ぶ事としよう」とて夫婦となつた。それから木を集め小屋を建て二三日同棲してゐるうちに、持つて來た米が盡きたから妻をそこに殘して家に歸つた。父はトマイに「鹿は捕れたか」と尋ねたから、「いゝえ一匹も見付からないから又行つて探して來ます」と答へて置いて鍋と澤山の米とを脊負つて出かけた。そして山に歸ると畑を作りそつと鍋に入れて來た籾種を播いた。五六日の後何物も携へないで父母の家に歸つた。そして又米と

鍋とを持ち出さうとする。余りの事に母も怪しと思つたから、家族の一人をやつて追跡せしめた。すると山上に小奇麗な小屋があつて、一人の美人が數箇の鍋で、飯や菜を煮てゐたから思はず失笑した。聞き咎めて出て來た彼女に隱れて家に歸り、かうと告げたから、父母も何の事だと腹を抱へて笑つた。太巴塱社と水璉社との間にある溪川を「ルブラン」溪といふのは、この夫婦が澤山の鍋を割つたからついた名だといはれる。彼等はそれから山上生活にも飽き、「ルブラン」溪を下り北進して、平坦な美地を見付けてそこを「チャキデアン」と名付けて住む事とした。水璉社はトマイコールの子孫で出來た蕃社である。

水璉社　頭目

昔トウパルルワンといふ者がルナアワウといふ娘の家にやつて來て、婿にならうといつてまめ〳〵しく働いたから、ルナアワウも憎からず思つて夫婦となつた。そして間もなくマヤウカカラワン、ウナックカカラワンの二男子を生んだ。ところが或時兄

弟は父と共に山に出て、家の柱にすべき大木を削つてゐた。すると父は非常に渴を覺えたから、二人に命じて水を汲ませた。河に下りると河水が濁つて飲めさうにないから、空しく引かへすと、父はもう澄んでゐようから、汲んで來いといふ。行つて見るとまだ濁つてゐる。仕方がないので、又空しく歸つて來た。三度目に父は屹度上流で濁す奴がゐるに違ひない、その者の首を馘つて來いと命じた。そこで溯つて行くと果して石や木の根を投げてゐるものがある。憎い奴だと拔き打に斬りつけると、意外にもそれは父であつた。しまつたと思つたが、も早取返しがつかない。そこで怒り悲しむ母を和め事情を詳しく語り餅や酒や豚などを供へて「ミサリシン」を行つた。

併し母は毎日亡父の事を繰り返しては泣き悲しむので、兄弟はもと〳〵過失でした事だが、見るに堪へれないで心を痛めてゐたが、良策もないので遂に或日兄は美裝をこらし刀を帶びて昇天してしまつた。その夜から東天に一つの星が現れた。その形が丁度刀を帶びてゐるやうに見える。これは我社の祖先マヤウカカラワンの靈なのである。

彼等父子の柱を削つた所は今の「マイボン」社の突出してゐる鼻であつて、そこに小

川がある。父を誤殺したのは其の傍の井の邊である。水を濁す事を「ミイボル」といふから、今此處にある社を「マイボン」といふのは「ミイボル」を訛つたのである。

マオブン社　マヤウロー

昔洪水があつて、山野悉く水底に沒したが、その上熱湯まで噴出して全社殆ど絕滅の有樣であつた。此の時或る家に二人の兄妹があつて粟を搗いてゐたが、俄かに水が押し寄せて來たから、臼に乘つて急遽逃げ出し遂に或る高山の頂に漂著した。それから後漸く大水も退いたから、二人は山を下り南方に向つて進んだ。ところが花蓮港の川を渡る事が出來ないし、東側は石原で步く事も出來ないから、道を西南に轉じて「ナルマアン」といふ所に著いた。此所で兄妹遂に夫婦の語らひをして、又二人の男女をあげた。子等も亦互に夫婦となつて澤山の子女を生み次第に人口が增えて行つた。此の頃は籐と木とを摩擦して火を作つてゐたが、甚だ煩はしかつたので、或日「タタチュ」鳥が來たのを見て、「御苦勞だが何處かで火を貰つて來て呉れ」と賴んだ。「タタチュ」は東天遙かに飛び去り、やがて火を持つて來たが、海岸に着いた時不幸にもその火を海に落してしまつた。それから間もなく蛆が來たから、又火を賴んだが、蛆は首尾よく火を持つて來た。けれど間もなく消え失せたから、兄妹は止むを得ないで、白い堅い石を打ち合はせると、火が出たから、それを乾いた草に移し、朽木を拾ひ集めて焚いた。それからは火を失ふやうな事はなく子孫に傳へる事が出來た。

そのうちにそろ〳〵移住するものがあつた。ある若ものは南方に移り薄々社の祖先となり、或者は「タオル」の木が生えてゐる地に行かうとて荳蘭社の祖となつた。七脚川社の祖先は薪の多い所、即ち「チカスイ」に行つて社を開いた。此の社を、土人等は「チカソアン」社といふのである。

その頃七脚川社に元氣な若者があつた。或時アログダスといふ大蛇と競走しようとて、駈け出したが、中途で疲れ果て氣息も絕え〳〵となり、唯「ハ、ハ、ハング」と喘いてゐた。若者は蛇に負けたから、一人で「チクロアン」といふ所に行つた。しかしその地名が氣に入らぬとて「サキラヤ」と改稱してそこに住む事とした。そして相當榮え

たが不圖した事から土人と爭ひ壓迫をうけたから「タコバン」に移つた。そこでも又淸國人と衝突し、附近の加禮宛社と協力してこれに當つたが、遂に叶はないで社衆は離散するやうになつた。それ等の中で「サコル」といふ木の多い地方に逃れたものが集つて。更に「サコル」社を建てたのである。

七脚川社　林早流

太古紅頭嶼に大きな巖があつたが、その巖が裂けて中から人が生れ出た。それが有ゆる人類の始祖であつて、日本人となつたものも土人となつたものも總てその子孫なのである。併し我等の祖先ばかりは其の島に永く止まつてゐた。ところが或日海岸に出て四方を眺めると一つの橋があつたので、それを渡つて行くと火燒島に着いた。暫くそこに住んでゐたが小さくて不便だとて、又橋を渡つて本島に來た。最初に着いたのは今の加路蘭社の東である。そこの海岸には今でも祖先の踏んだ足跡が殘つてゐる。加路蘭のあたりから、更に南方「アラパナイ」に進み、今の呂家社附近に暫く止まつてゐ

たが、それから各々好む所に別れて行つた。これ等の中でも璞石閣方面に向つたものは花蓮港邊にまで進んだが、再び海に出たから驚いて南轉し、所謂臺東アミ族の祖となつた。海岸を傳つてその邊一帶に繁殖したのが我社の祖先である。今の都歷社も同じ徑路を辿つて來たのである。

海岸蕃五社

昔或島にチウサアブとチアレク、チブクロとウサイ、パラワイとチソウマといふ三夫婦があつた。或時籐で結んだ板の小船に乘つて海に漕ぎ出たが、漸く本島の「カワサン」といふ所に上陸した。其の時男共は「パサツイ」と名付ける褌を結び、女等は「タレプ」といふ腰卷を纏ひ、各々「チロガイ」といふ上衣をつけてゐた。「カワサン」に住む事數年の後、納々社や北頭溪社にも移住した。そして長い年代の中に子孫がいよ〳〵繁殖したから、膏沃な土地を求めて、次第に新社、加路蘭社方面にまで蔓つて行き、更に南下して現今のやうな諸社となつた。

それから以前の事、芝路古㕧に古い船があつて、毎年八月頃になると附近から蔴荖漏社や、施龜彌映社や跋便社などが集つて來て、共同で其の船を祭つた事がある。それは祖先が猿仔山から納々社に來る時乘つたものだが、そのまゝに打ち棄てゝあつたのを、後に至つてアガイ、スラカ、サウ、マヤウの四人がこれを發見し、加路蘭社から蔴荖漏を經て、芝路古㕧に移る時、其の船に乘つたのである。此等各社の人々が此の船を神聖なものとし祭るのは祖先等が、二度までもこれに乘つて移住したからである。そしてアガイの子孫の船主や親戚の者でなくては、手を觸れる事さへ出來なかつた。若しか過つて手を觸れたり穢したりすると、覿面に病氣が起つた。それから附近の諸社で不意に發熱したりするものがあると、わざ〳〵芝路古㕧社に來て、「チカワサイ」に賴み、この船の中で祈禱して貰ふと立ろに靈驗があつたといはれてゐる。併しその船もいつか燒け失せてしまつた。傳へによると長さ三間餘りもあり、幅三尺許りで五六人は樂に乘られたさうである。

チラルコハイ社　老蕃

古昔「マルスルン」（大洪水）があつて生物殆ど種を絶たうとした事があつた。この時幸福な二人の兄妹があつて「パポクポクポカン」（臼）に乘つて、「タテゾラサン」といふ高山に遁れた。そして二人は遂に妹脊の契りを結んで一子をあげた。或日二人はかうして長らくこんな高山にゐても、何の樂もないし、食を求めるにしても困難だから、何處かよい所に移らうといつて、山を下り「タケレ」（一名バルト）川に沿つて下り海岸に出で、南に進み遂に花蓮溪口に達した。併し水が深くて渡る事が出來なかつたから、西方に折れると石が磊々としてゐて歩けさうにもなかつた。そこで勇を鼓して西北に向つて進むと、坦々とした原野で自然と足が運ばれて、遂に「マガル」（荳蘭の北）といふ所に著いた。ところがそこに猪があつて頻りと鼻頭で地を掘つてゐるから、屹度肥沃なのだらうとて、臼の隅から探し求めた粟の種を播いた。するとタタハチラヅといふ神が現はれて、拜神の行事を敎へた。かうして數十年の後には人口增加して「マガル」の地に溢れる位になつた。

そこでチトワオはチロマといふ婦人を携へて東方に移住した。その地は丘陵に圍ま

れた盆地であつたから、「ポクポク」（薄々）といつた。「バポクポクポカン」のやうな地といふ意味である。

するとツブタイカソイといふ者は、「タオル」の木の實は味が甘美で子供等が喜ぶから、その木の多い所に移らうとて荳蘭に移つた。荳蘭社の祖である。又カルリツといふ者は「マガル」を出て荳蘭の附近（今の荳蘭停車場の東）に移つて里漏社の祖となつた。

かうして寒い冬の夜がつらいからとて、薪の多い所（シカスヤイ）に行かうとして移つたのが七脚川社となり、茄苳樹の繁茂した所（シサコライ）に移つたものが「サコル」社の起りであつた。「サコル」社は光緒四年清國政府の討伐をうけた結果歸化社と改められた。そして又飽干（はおかん）社は歸化社から分れたもので、元は「バリク」山（米崙山）の北端に住んでゐた。屘々社も亦歸化社から分離したのだが、今では自社の「パイシン」（祭祀）を捨て、里漏社の「パイシン」を採用してゐる。

又こんな事も傳つてゐる。南勢七社は初め米崙山の北にゐたが、人口次第に繁殖し

て耕すべき畑がなくなつたので、里漏、七脚川、荳蘭、薄々、テモル（南部の蕃人）、ツガウ（高山蕃）といふやうに各地に分れた。此の時高山蕃は今後汝等と逢ふ時は「マノマノ」といふから、汝等は「ハイハイ」と答へて呉れ、さうするとお互に都合がよいからといつて分れて行つた。歸化社の人は丁度各々美地を求めて今や去らうとする時に歸つて來たから、この約束は知らなかつた。高山蕃の問に對しても唯「フングフング」と答へるばかりであつたさうだ。今でも高山蕃が「マノマノ」といふ言を多く用ひ、歸化社の者が「フングフング」といひ、薄々（はくはく）、荳蘭（とらん）、里漏（りらお）の人々が「ハイハイ」といふ返事をするのである。

それから又何時の頃か土人と共に棲んでゐた事があるが、土人は竹に字を書き水中に投じ、蕃人は石に字を書いて投げ込んだ、竹は水上に浮んだが、石は水底に沒してしまつたので、蕃人には文字が傳はらなくなつた。

薄々社　頭目　サヤナパ
里漏社　頭目　ラホクブタル

鮑干社　頭目　パリパラス
歸化社　頭目　コパツエ

太古我が祖先は花蓮港の近くの「チラガサン」といふ山の邊にゐたが、其の頃はまだ天が低くて日月の運行も見ず、世は暗默として、一寸先きも判らない位であつた。こんな世界が續いて一體どうなるのだらうと、或日山上に集つた人々は、「誰かこの暗黒の世を變じて、光明の世界として呉れるものがあるなら、此の餅を奉らう」といつて笊（ざる）に山のやうに積んだ餅を供へた。其の時チマロバロ（又の名ダヴァルン）、タブナといふ男女が現れて、「それでは御身等の望にまかせて光明世界を現出するから安神せられよ」とて、二人は暫く相談し、やがて「天上で再會しよう」といひながら昇天した。そしてチマロバロは太陽となり、タブナは月となつて下界を照す事となつた。ところが如何したことか、月が出ると太陽が入り太陽が現れると月が隱れるといふやうになつて、今に再會の機がないのである。タブナは天に昇る時人々に敎へて置いたのは、

「粟播きには屹度先づ月の形を見て播かねば、折角播いた粟が腐る事がある」といふのである。蕃社の粟播に月の盈虧が關係するのはこれによるのである

それから後の事、俄かに天地鳴動して、山は崩れ、地は裂け、地中からは熱湯が噴出して、地上一面熱河と變じてしまつたから、溺れ死ぬもの限りなく、有ゆる生物が殆ど絶滅しようとした。ところが此の時にタバタブ（女）タラガトガウ（男）ユガソク（女）といふ三人兄弟があつて、臼（かるがん）に乘り海岸に沿つて南方に逃れ、遂に「ララウラン」といふ所に上陸した。そこで近くにあつた「カブルガン」山に登つて四方を見渡し、手わけして地味のよい所を探したが豊饒な土地がなかつたから、もとの「ララウラン」に歸つて來た。西も南も駄目だつたから、今度は他の方を探さねばならぬとて、再び「カブルガン」山に登つて國見をしようとした。ところが姉のタバタブは綿のやうに疲れて一歩も進む事が出來なくなつたから、止むなく中腹に止めて兄妹は先づ山頂に著いた。待てどくらせど一向姉が來ないから、氣がゝりになつてもと來た道を下ると、こは如何に、姉は既に石となつてしまつて山腹に仁王立してゐる。二人は驚き悲しんだが如何

ともする事が出來ぬ。そこで又「ララウラン」に下り、祖先の地へ歸らうと臼に近より動かすと、早や朽ちて用に堪へない。それからといふものは四方に漂浪せねばならなくなつた。或日「トリトリ」河の許に行くと沸々と湯氣が上つてゐるので、又熱湯が噴き出るのではないかしらと逃れようとしたが、妹ユガソクは連日の旅に草臥れて身動きも出來なくなつてゐる。仕方がないからそこに暫く落ちつく事とした。ところが數日暮しても別に熱湯の溢れ出る樣子もないので兄妹は安神して溫泉の近くに住居を定めた。併し此の邊一帶には人家とてなく全く兄妹二人の世界であつた。それに二人は最早年頃でもあり別に嫁娶の法もないから、兄妹夫婦となつて人種の生存を計らねばならなかつた。それで翌日太陽の赫焉として今や海上に出ようとする時、聲張りあげて可否を問うた。すると太陽は可と答へたから、二人は安心して夫婦となつた。數月たつた頃妹は孕んだ樣だから、二人は喜んで麻を練り絲をつくり、それを織つて綺麗な麻布を得たから、それで衣服を造り樂んで待つてゐた。ところが月滿ちて產れ落ちたのは、男でもないし女でもない、不思議な二個の怪物であつた。二人は氣も弛み惘れ

果て、折角の產衣をずた／＼に引き裂き胎兒と共に川に流した。すると一つは横に泳ぎ、他は眞直に泳ぎ去つた。これこそ今の魚類と蟹との祖先である。

そこで人間の腹から魚や蟹の產れるのはどうした事かと、その翌日月の出た時に尋ねると、「元來汝等は兄妹である。兄妹の結婚は嚴禁せられてゐるではないか。若しも他に嫁娶が出來ぬとならば蓆を二人の間に挿み、穴を穿つて交るがよい」と敎へたから、二人は雀躍して月の敎に從つた。ところが次に生れたのは一塊の白い石であつた。二人は再び驚いて、「月も惡戯をするものだ、白い石がどうして人間になるだらう」とて河に棄てようとした。すると月はこれを聞いて、「假令石だからとて捨てゝはならぬ、大切にして置け、屹度思ひ當る事があるから」と敎へたから、二人は怪しみながらその白石を大切にしてゐた。

或日兄妹は「サラマヤイ」山に登つて此の近くに美地はないかと見渡すと、前方に「アラパナイ」といふ廣々とした平地があり、草が生ひ茂つて地味よろしく見えたから、二人は「アラパナイ」に下り、此處は我等夫婦の棲むべき所だと地に杖を立てゝ天に

告げた。ところが其の杖は見る〳〵竹となり、根つき芽生えて天地にわたる大竹となつた。今でも蕃社では下向きに芽の出る竹があるのは杖の立て方からさうなつたのだといはれてゐる。

それから間もなく夫タラガトガウが死んでしまつて、ユガソク唯一人となつた。せめてこれだけでも形見なのだと、彼の白石を懷いて寂寥を紛らしてゐた。月は哀れと思ひ、「寂しくとも暫く待つがよい。今によいやうにして上げるから」など慰めた。すると五日程たつて白い石が一時に大きくなり、其の中から四人の子供が生れ出た。二人は跣足で二人は靴を穿いてゐた。ユガソクは自分の風俗に近い二人を養育して、兄の方をトコル、妹をテナイと名付けて鍾愛した。靴をつけたのは多分臺灣人の先祖となつたのだらう。

トコル、テナイが夫婦となつてから、次第に人口が殖えて來たから、花蓮港方面や、南方さして移住するものが出來た。馬蘭社の祖先のサラガリガヲ、シャシャヲ夫婦は今の知本社の地に移つたが、そこもよろしくないといふので、呂家社の所に移り、更に

卑南社の西「バラボク」に移り、再び卑南社の所に歸つた。併しやはりそこも適せないので間もなく「カワサン」に移住し、「サマワラン」に移つた時、始めて鐵を得て除草器を造つた。

それから數世の後にパナサ、サラウガといふ夫婦があつて、タナワラヤンといふ悧發な子供を持つてゐた。或る日子供が兩親に向つて、「五日間だけお暇を下さい」といつて、屋根の上に登つたが、何時の間にか見えなくなつてゐた。五日めに「太陽から厭勝の術を習つて來た」とて勇しく歸つて來たから、早速餅を搗き、豚を竹に縛つて屠り、其の肉を供へて太陽を祭つた。その時竹の根から筍が生え、見る〳〵大きくなり、その中から卑南社蕃人の祖先が生れたさうだ。

其後祖先等は更に「ルモ」に移り、「リャボ」に轉じたが「バラガラ」山麓に美地があるのを知り、そこに移つた。そして「バラガラ（馬蘭）」社といつて。それから我等自らアミ族といふのは、もと北方から來たので、「アミス」即ち北方のものの意である。

馬蘭社　ロベツ、ラツイ、

サウマ、パラツ、
クモン、

里漏社の船

太古リナウといふ婦人が息子のチポツと二人で侘住居をしてゐた。或日チポツは薪を拾ふために海岸に出た時、サイニンといふ神が小舟に乘つて來て頻りに呼ぶので、行かうとしては海水に隔てられて躊躇つた。サイニンは「汝の持つてゐる木に腹を乘せ手足を動かしたなら來られる」と敎へた。チポツは初めて泳ぎを知り漸く船につく事が出來た。そこでサイニンは非常に喜んで「これから友達とならう、時々話しに來てくれ」といふから、チポツは「誠に有りがたい仰せですが、海上が危險だから余り度々は參れません」といふのを哀れに思ひ、「五日後に鷄一羽餠一籠を携へて訪へ、造船の術を敎へよう」と別れた。チポツは約束の如く鷄や餠や蒸した糯粟まで籠に入れて神を訪ねた。サイニンは自分の乘つてゐる船に倣ひ木を刳り凹めて水面に浮べる事を敎へ、「これさへあれば海上何處に行つても安全である。それから船が出來上つたなら

ば舟祭をせよ」とて儀式や歌謠までを敎へてやつた。

やがて船は出來た。チポツは社人を集めて仔細を語ると、彼等は神命を畏み酒一ポドク、糯粟二籠、檳榔一房を以て舟を祭り、船歌を謠つた、

エーヤーエーヤ、ハハーエーハ、ハエーラパレトモ（色々御馳走して、お迎へに行かう）ハーエーハーエーハー、マタールングルング、ニカベトー、ハーエーハーエーハー、
（お忙しいのに此所へ來て下さるとは有り難い）
サパレターモー、チサイニガンハーエーハ、アダルングルングニカベート、ハーエーハー、ハーエーナヲマアンサコーラーハーエーハー、
（此の御馳走は神を迎へに行く爲めです、サイニンと、友達となる事が嬉しいから、かうするのだ）
タヲシパードア、サーハーエーハ、ニカベータトグルン、ハーエーハー、（友達になる事は嬉しい）
ツコルンーカーメー、マカバーウエラー、ハーエーフン、トラカターノカパーハー

エー、フンー（海上に遊びに行つた時は、よく守つて下さい）

ハーオーホー、ハハーエ、ハーエーフン、（神も喜び我等も嬉しい）

ニパレータア、モケーネー、ハーエーフンー、（皆受取つて歸つて下さい）

オレートー、サーエーニー、ハーエーフンー、（歸るなら、お歸り下さい、サイニンよ）

サエーニンー、アチカペドゥー、ハーエーフーン、（サイニンよ、アチカペド〔海神〕よ）

アマブルチトー、カモーハーエーフン、（お疲れでせう、お歸り下さい）

ニパシマールキーニ、ノーネーフンー、ハーエーフン、（サアサお土産を一つ、又はマアマサ一杯）

オレートーレー、ハーエーフンーター、（よい〳〵）

社人は歡呼して神德を稱へた。

最初チポツの造つた舟は二艘で海岸に置いてあつたが、今は三艘になつて現在の所に淨籬を繞らして安置してゐる。長い間に修繕したり改造したりして來たものだらう。

そして今でも新階級が出來た時（大體は八年目に一回）には四日間に亘つて嚴肅古雅な舟祭（みきりしんるなん）を行はれるが祭主はやはりチポツの裔のエビルマ卅とテポスマムンの二家から出るのである。

註　舟については異說が一二傳へられてゐるが今は著者の調査したものに從つておく。階級も年齡によつて定るのである。要するに老蕃が尊敬せられるのだが詳しい事は畧する。

ヤミ族

南勢蕃　里漏社

昔シットリヤといふ神が「リパフトク」といふ山の上に降つて、其の邊を徘徊ひ歩かれた時、ふと大きな石に觸れられると、中からパラエチパトアクといふ男が現はれた。神は次に竹に觸れられると竹の中からイワエノカンカンといふ男が出た。神は二人をそこに殘して天に昇られた。

二人は山の上でその日〳〵を暮してゐたが、退屈で仕方がないので或日石の中から

出た男が先づ蹲踞まつて己の腘（ひかがみ）の間に陽物の頭を入れて摩擦すると、右のひかゞみから男が生れ、左の腘から女が生れた。それを見たイワエノカンカンは自分も一つやつて見ようとて、同じく腘にそれを挿んだ。すると又右の方から男、左の方から女が生れた。その子等成長してからイワエノカンカンの子は子同志、パラエチバトァクの子は子で夫婦となつた。ところが兄妹互に體を觸れようとすると目が眩んで見えなくなるので不思議に思つてゐたが、相方の妹が腹痛に罹つて、苦悶に堪へかねたから、刀のやうに鋭く削つた篠の尖（さき）で腹を切ると、中から各々男の子が生れた。それをタウ（人の意）と名づけた。それから七日目に又男の子が双方の妹の腹から生れたが間もなく死に、十日目に盲目の女の子が生れた。もう生れないだらうと思つてゐるとそれから又六日目に女の子が双方の腹から生れたが、その時母子共死んだ。そこで石の方にも竹の方にも男女の子供が二人づゝ殘つてゐる譯である。さて盲目の子が生れたり、死んだりするのは、屹度兄妹結婚の結果だらうと考へつき、それからは相方の親達がお互に子供を交換して夫婦にした。

或時石から出た者の子が、不圖山羊にかゝる神さまを見た。すると山羊は孕んで間もなく二匹の子を産んだ。ところが山羊は別に腹を裂かなくとも産む事が出來るのを見て、人間もかうすればよいのだといふ事が判つた。

交換結婚を行つてから次ぎには立派な男子を産んだ。それからは一人も死ぬものはなく、人間は次第に殖えて狹隘を感ずる位になつたから、パラエチバトックの子孫は「ジチャカワラナン」、「イマシック」、「ミナシロン」、「ボスボワン」、「イラタイ」、「イカバトアン」、「イワタシ」、「ヤユ」の諸所に分れ、竹から生れたイワエノカンカンの子孫は「タウシャコブン」、「ヂビナバリクッル」、「イワリヌ」、「ルラクラガン」、「イラヌミノク」、「リビナバヌワ」、「イタワン」「イナイリイ」、「イララライ」、などへ別れて行つた。

ところが此等の人々は朝から晩まで、食べて食べて、食べてばかりゐたから、食物が足りなくなり、神樣に捧げるものさへなくなつた、そこで神は俄かに洪水を起して人々を殺した。この時幸に遁れたものは、

「ジチヤカワラナン」……四人
「イマシック」……四人
「ミナシロン」……三人
「ボスボワン」……三人
「イラタイ」……四人
「イカバトアン」……二人
「イワタシ」……二人
「ヤユ」……四人
「イララライ」……三人
「イラヌミリク」……二人
「イワリヌ」……二人

の人々であつた。そしてパラエチパトツク系のもののものは「ギヤコイモロレ」山に逃れ、イワエノカンカン系は「リペガグン」山に漂着したのである。

その後も亦大雨が降り續き、山崩れのためにこれ等の生存者も命を隕すものが多かつた。そこで「イマシック」に居たものは平地に降り「イモロル」(イマウルツル)といふ所に社を建てるやうになつた。それからは他社のものも平地に降つて社を建てたのである。そして今紅頭嶼に殘つてゐるのは「ヤユ」、「イワタシ」「イラタイ」、「イモロル」、「イワリヌ」、「イラヌミリツク」、「イララライ」の七社で、他は大抵洪水と山崩れで絶滅したのである。洪水や山崩れの天災は、神を祭らない爲めだと知つて、彼等は平地に降りると粟や豚や山羊などの供物を横山のやうに滿て足らはして、神々を祀り、五穀の豐穰と魚鳥の豐漁を祈るやうになつた。

註　イモロル社　シヤツプンカラワ

イモロツド(イマウルツル)社の祖先はミクツグツムといつてもとイクバラツト島の人だつたが、或日海上に漁つてゐた時、不幸にも颶風に遭つて此の嶼へ漂流したのである。その頃は「イモロツド」社はなく隣社の「イラタイ」社から妻を娶り子孫繁榮して次第に各社をなした。(イラタイ、イワリヌ、ヤユ各社)

平埔蕃(へいほばん)

北部平埔蕃

北投社(ほくたお)、我が平埔蕃の始祖はもとサナサイといふ地に住んでゐたが、偶々山魈(さんしやお)といふ妖怪が現れて、人々の寢靜まる頃になると、被衾を剝ぎ取りなど隨分ひどい惡戲をする。驚いて眼を覺すと影も形も見えない。それで人々は夜となく日となく相警めて、寢につく事もなかつたが、連日連夜の事ではあり、妖怪はいかに日月を經過しても消え失せさうでもないので、遂に斷然地を轉じて災害を避けようと相談が一決した。そこで互に竹木を伐り取つて大きな筏を造り擧族これに乘つて海上に浮んだ。併し何處といふ目當もない事だから、只風のまに〳〵漂つてゐたが、そこばくの日を過して漸く一つの陸地を見出した。そこで皆々悅んで上陸して其の地に部落を定めた。そこは卽ち臺灣の北部の鞍番港(今の深澳)であつた。

其後一族漸次繁殖增加したから、或る時其の地に生えてゐる一草の莖を取り集めて籤とし、若し長い籤を抽いたものは永く平地曠野の裡に住み、短い籤を抽いたものは深山狹谷の間に住まう。そして例へ如何なる籤を抽いても必ず悔い恨む事のないやうにと、各石塊を地下に埋めて約束に違はない事を誓つた。そこで籤をひいた結果短籤を得たものが深山に入り山蕃(生蕃をさす)となり、長籤を抽いたものが平地に住んで平埔蕃となつた。それからも人口は次第に增殖して北投附近には二千人の平埔蕃があり、我社ばかりでも二百餘人を算する位であつた。

かくて平埔蕃は尙も山地を領有しようと企てたから、山蕃は深く恨み、既に平地を得ながらこれにも飽き足らないで山地まで侵さうとは甚だ理不盡だとて、彼等は平埔蕃を見る每にこれを殺すやうになつた。こんな爭ひを續けてゐる間に、今の臺灣人が支那內地(閩粵地方)から移住して來て、次第に我等を壓迫したから、勢遂に叶はないで淸國政府に歸順したのである。

淸國政府は地方廳を今の新竹に置き淡水廳といつた時、新竹以北の歸化蕃を二大部に分け、最北部を十九社とし武勝灣(ぶらわん)社に總管せしめ、中北部を十二社として蔴薯(もあらい)社をして總管せしめ、これを總稱して淡北蕃社と呼んだ。同治十三年(明治七年)中壢以北の地を分けて淡水縣とした時、最北部の十九蕃社はやはりその治下に屬してゐたから淡

水縣十九社とも呼ばれてゐた。そして依然武勝灣社がこれを總管してゐたのである。十九社の名を擧げてみると次のやうである。

武勝灣社、　搭々攸社、　小雞籠社
擺接社、　里族社、　圭北屯社
雷朗社、　錫口社、　金包裡社
龜崙社、　峰仔峙社、　大雞籠社
南嵌社、　毛少翁社、　三貂社
穵仔社、　北投社、
圭泵社、　八里坌社、

潘有秘

註　北部平埔蕃の歸順は康熙の末年である。そして北投社や毛少翁社などの蕃人の獰猛だつた事は、淡水廳志や、稗海紀游(康熙三十六年、浙江の郁永河著)などにも見えてゐる。

山魈は正しく書くと山臊である。神異經に據ると、西方の深山に居る身長一丈計りもある一本足の怪物で、いつも眞ッ裸で蝦や蟹を捕へてゐるのださうだ。そしてこれに犯されると寒熱を病むといはれてゐる。昔李畋といふ人が山近く住んでゐたが、山臊が種々樣々な祟りをするので、一つ青竹を火に投じて爆音を

立てたなら驚いて逃げはしないかと考へたから、その通りにすると果して効果があつたといはれてゐる。爆竹はかうした起原なのだとか。今も支那や臺灣で年末から正月にかけて絶えず爆竹の響を聞くのは、歲時記などにいふ、「正月一日雞鳴に起き庭前に爆竹をならし山臊惡鬼を辟く」との思想なのである、山𤢖、山蕭、山魅など書くのも同一で恐らく魑魅の類をいふのだらう。

埋石の誓は平埔蕃にも生蕃にもある慣習であつて、此の石の地下にあらん限りは底津岩根の搖ぎなく決して誓約に違ふ事のない意味なのである。清朝の理蕃の事蹟を調べると「因蕃俗、埋石設誓約」、「埋石於地中爲誓約」など見えてゐる。併しいくら埋石の誓を結んでも中々油斷の出來なかつた事は我が理蕃史に見るも明かである。

毛少翁社　昔臺灣の北部一帶の地には東洋(日本人)が占據して、今の臺北平野は殆ど皆その領有であつたが、その後現在の臺灣人が大陸地方から潮のやうに移住して來たので、東洋は海に泛び或は山に退いた。山に入つたものは蕃と雜居して自然とこれに摸化してしまつた。我が社は實にその東洋の子孫なのである。

翁文卿

註　北部臺灣に日本人の足跡を印した事は歷史的に事實である。此の社が起原を我が國人に關係づけてゐるのは面白い。東洋といふ名稱も何ものかを語つてゐるやうだ。そして最初東洋の「ベキ、トノナン」といふものの子「キパオ」が海に航し臺灣に漂着したのだといづ

てゐる。

八里坌社(はりふん)　北投社の西方二里許、關渡山の丘陵を隔て淡水河の北岸に沿つた地に一平埔蕃社がある。昔唐山（臺灣人は無論支那を指すのであるが、時には單に外國といふ位の意にも用ひる）の或る天子の女婿になつてゐた男があつた。ところが容貌が極めて醜かつたから、公主は嫌ひに嫌つてどうかしてこれを遠ざけようとした。天子も仕方がないから、駙馬(むこ)に因果をふくめ澤山の銀や米を與へ、船に乘つて何處ともなく立ち去らしめた。駙馬(むこ)は止むなく兄弟七人と小さな船を艤し、波のまに／＼漂つてゐたが、程なく或る島に著いた。それが今の臺灣の北岸なのであつた。そこで七人は上陸して共に平地を求めて住んでゐたが、やがて地を分けて住まうとて、互に約束するには、「今この地に生えてゐる菅尾草(すすきね)を抽き、若し根から血の流れるものは山に入り、血の流れないものは平地に居る事としよう」と相談が纒つた。すると兄弟の中で平常から豪傑肌な三人の抽いた草からは血が滴らなかつたが、愚昧な四人の抽いた根からは多くの血が流れおちた。そこで約束の如く四人は山に入つて生蕃となり、三人は平地に止つて平埔蕃となつた。その頃は平地は一望の荒原であつたが、それを拓いて五穀を植ゑたのは、實に我が八里坌社の始祖なのであつた。

註　サンサイを山西に附會したのは勿論、全體としてもこの口碑は余程支那思想の影響がある。

三貂社、我が平埔族の祖はもとサンサイといふ所に住んでゐた。或る日漁業の爲めに船に乘つて海に出でたが偶々颶風にあつて漂流し、その中二隻が臺灣の海岸（洩底灣）に著いたから上陸してそこに住む事となつた。當時男女二十餘人あつたが「ウケといふもの頭目となり三貂社の基を定めた。これは幾百年前の事か判らぬが實に我が平埔の開祖である。その後子孫繁殖して次第に分離し一は宜蘭の平埔蕃となり、一は雞籠（基隆）地方に移つたのである。

擺接社(はいてい)、我が一族の開祖はサイテンといふ人で、幾百年といふ大昔に擺接社を建設した。丁度今の板橋街（臺北より一里許）の邊に在る平埔蕃社がそれである。今でも此の

社では年に二回全社が集つて開祖の祭祀を行ふ例である。清政府に歸順したのは乾隆の初年の事で、その頃はまだ祖先等は弓矢を用ひて麋鹿を獵る丶事を重な生業としてゐたのだが、歸順の後漸く耕作の法に熟し、言語風習も大いに支那化したのである。今社に傳つてゐる大きな貝殼の容器は往時祖先の飲酒に用ひたものなのである。

雷里(雷朗)社、昔我が祖先は海外の或る地方に住んでゐたが、その故地に恐ろしい危難が起つたから急いで船を艤し海に浮んで避難した。ところが不幸にも颶風に遇つて漂流してゐるうち、臺灣の北部の海岸に著いた。それから川を溯り臺北平野の奧深く定住する事となつたのである。清朝に歸化したのは康熙の末年である。そして次第に清の俗を移し髮を辮にし、衣褲を用ふるやうになつたから、清官は我等に潘、陳、李、王、蠻などの姓を與へた。かくて今では全く土人に融化してしまつたのである。

空仔社、我社の祖先は何處の人だつたか不明である。それは數百年も昔の話だが或時不圖した事情から船に乘つて海を航したところ、颶風にあひ波のまに〳〵漂ひ遂に一の島に着いた。それが今の臺灣の北海岸だつたのである。その後クンハオといふ人の時に海岸から次第に內地に進み入り、今の地に初めて空仔社を建てた。當時は狩獵を主な生業とし農耕を副業的に行つてゐたが、鳥獸が深く山地に隱れたから獲物が少くなつたのと、一方膏沃な美田が次第に拓かれて行つたので、今では專ら農耕に從事するやうになつた。清朝に歸順したのは百數十年前だといはれてゐる。そして今では衣食から家屋に至るまで盡く土人に摸する事となつた。

キヴァノワン社、我が一族はもと「サナサイ」といふ所に住んでゐた。「サナサイ」といふのは何處であるかは判明せないが、兎に角海を隔てた外島であつた。或る時漁業の目的で小船に乘つて海上に出ると、俄かに時化に遭つて狂瀾怒濤の間を漂つてゐる中に二隻だけが臺灣の北方の海岸(今の金包里邊)に著いたから、上陸して土地の狀況を見ると、荒蕪で生活に適しさうにもなかつたので更に今の基隆の地に來たが、此處も良水に乏しく不便であつた。それで再び船に乘り此の地の海岸(深澳)に著き始めて双溪河口の邊に定住した。當時同船乘組の男女二十餘人あつたがキシナサイといふ者が頭人となり一部落を建て「キヴァノワン」社と呼んだ。これ實に我社の祖先である。

かくて子孫も次第に繁殖するやうになつたから、更に今の遠望坑、福隆庄、南仔寮の諸地方に三箇の分社を建てたのである。此の頃はまだ「プサラム」（タイヤル族を指す）といふ異族が南方の山地から今の頂双溪、下双溪あたりに蕃衍してゐたから我等は海幸の魚類を彼等に、彼等は山幸の鳥獸を我等に贈つて、互に和親往來してゐたのである。

それからも人口は益々増殖したので、一部は今の基隆の地に「キシカヴカン」社を建て、更に北進したものは金包里地方に分住して「キシヴィンガワン」社を建てた。そして山を越え南進したものは今の宜蘭平野に入り所謂宜蘭の平埔蕃となつたのである。

蜂仔峙社、三貂山脈の西麓には淡水河の一支流の基隆溪が帶のやうに流れてゐる。この低窪な地は悉く我が平埔蕃の占據地であつた。

昔我社の始祖は「サンサイ」といふ地に住んでゐたが、或時六人（男五人女一人）で漁業に出たところ、暴風雨のため漂はされて遂に臺灣の北岸に到着した。それから基隆溪に沿つて臺北平野に入り、次第に勢力を布植して行つたが、子孫の繁殖が著しくな

つてから、蜂仔峙、里族、搭々攸、錫口の各社に分れた。其後清人の蚕食併谷にあひ、遂に拮抗する事の不可能なるを知つたので、頭目根仔老等が熟議の結果歸順する事となつた。それは今から凡そ二百年前康熙帝の末年であつた。

六祖の名は毎年二期（夏冬）に行ふ祖靈祭の祭神によつて、一目其阮掄、二目其貓豚禮、三目其地列、四目其宮老、五目其呢字、六目其眉閔の六人である事がわかる。そして毎冬には前の三人を、毎夏には後の三人を祭り古式を存してゐたが、歸順後は殆ど支那化してしまひ　祭日も支那暦正月二日を冬祭、六月十七日を夏祭の日と定め今に繼續してはゐるが、昔のやうな盛典は到底見られなくなつた。

註　目其は祖先の意だといふ。そして此れ等固有の名詞に漢音を充てるやうになつたのは無論歸化後の事である

西部平埔蕃

バゼツヘ族、我が祖先は何時頃此の地に來たのか不明であるが、凡そ五六十年以前

までは中部の平原卽ち大甲溪を中心として北は大安溪の南岸から、南は大肚溪の北岸に至る廣々とした地を占めてゐた。東方は又今の東勢角や水底寮地方の中央山脈に近い界隈まで及んでゐたといふ事である。其後漢人の移住が著しくなるにつれて、漸次其の故地を侵略せられ、今は葫蘆墩街(豊原)の西方一里許りの地に、支族の宗社である岸裡社の一部落が僅かに餘喘を保ち、他は悉く流離して埔里社の平原に大部分を、大安溪流域の鯉魚潭附近に小部分を移轉するやうになつた。

註 道光年中平埔蕃大移動の一つで、當時漢人の侵畧がこの先住土蕃に對し如何に惡辣殘忍を極めたかは蓋し想像の外だらう。

アリクン族、我等の始祖は何處の人かは詳かでないが、兎に角二三百年前には彰化地方を中心としてその邊一體に分布してゐた有力な先住土着の蕃であつたが、康熙以來清朝の勢力が臺西平野に洽くなつてからその治下に歸順し、南投社などいはれ熟蕃とせられてゐたが、その後淸人の壓迫侵掠にあひ次第に勢力を失つたが、道光の初年には遂に全く故土を奪はれ、殆ど飢寒に迫つたから附近の「パゼッヘ」、「ポアヴォサア」、「ヴ

ウブラン」、「アリクン」、「タオカス」、の諸族などと共に大移動を始め、山巒四周の埔里社盆地に移住するの已むなきに至つた。そして現に、十一份庄、水頭庄、鹽土庄、中心仔庄、批把城庄、白葉坑庄、牛洞庄、九欉楓庄などの諸庄に住む事となつた。

そして淸國の羈絆をうけた事が、久しいだけ土俗言語まで全く支那化してしまつたが、祖先祭や新年祭の儀式には依然として舊態を存してゐるのである。

十一份庄

東部平埔蕃

東部平埔蕃はもと臺南府鳳山縣の赤沙萬金庄附近に住んでゐたが、次第に東方に移住を始め、先づ賓桑卽ち今の卑南(臺東)に足を留め、更に二派に分れて一隊は大庄に赴き一隊は卑南溪を渡つて東海岸に行つた。當時此の邊一帶には生蕃卽ちアミ族が棲息してゐたが、彼等を殺し家を燒き遂に勢力を布植する事が出來たのである。大庄に行つたものは觀音山、媽里隆埔、麟埔となり、更に別れて公埔、頭人埔、新開園、石

牌、陳仔寮、菅頂 大坡等の諸社となり、海岸に進んだ一隊は彭仔佇庄、大萠、大掃別、加走灣、城仔埔、統鼻、三塊厝、施武丁等の各社となり、かくて東部臺灣には平埔の大聚落を見るやうになつた。そして各社の基礎の出來たのは今から凡そ六七十年前の事である。

此等平埔は云ふまでもなく清國政府の羈絆をうけ、風俗習慣言語まで全く支那的色彩を帶びるやうにはなつたが、女子の頭髮の結び方とか、家屋の入口に獸類の頭骨を掛け陳(つら)ねるなど、固有の風習を窺ふに足るものもある。

彭仔佇庄

加禮宛蕃、䓫萊平原を本據地とする平埔蕃で北は新城(支那人部落)に接し、南はアミ族南勢七社に隣してゐる。加禮宛蕃のこの平野に移住したのは比較的近世の事で、その原住地は宜蘭であつた。そして移住の初めは加禮宛。三仙河、武暖、竹仔林 遙高等の各社であつたが、次第にその勢力を擴張し䓫萊平原に止まらず、海岸に延び新社から更に南進して石梯庄、蔡扇埔庄、水母丁庄、小通鼻庄、大通鼻庄、城仔埔庄、加走灣、活仔寮庄、不達埔、烏石鼻小社などの各社を作り成廣澳に至つて跡を絶つてゐるのである。

要するに加禮宛蕃は噶瑪蘭(宜蘭)廳志に「加禮遠社距城十六里、通事一、土目一」とある宜蘭加禮宛社の延長なのである。

宜蘭平埔蕃 我が祖先はアバンといつたがマリリヤンといふ地から船出して臺灣の北部の地(今の滬尾即ち淡水港)に上陸し、海岸に沿つて東進し三貂角を迂回して此の地に來り、その地を蛤仔難(かばなん)と名づけた。其の頃はまだ支那人の來住するものはなかつたが、今の山蕃が平地一帶に先住してゐた。そこで我が一族は僅かに海岸の瘠地に住まねばならなかつた。そして時々我が祖先等は此の先住の蕃族と爭鬪を開いたが、遂に先住の蕃族を遠く山中に逐ひ、遂に宜蘭平野を占領するやうになつた。そして我等自身を平野の人類といふ意味から「クバラワム」といひ、先住の蕃族を山の人類といふ意味で「ブソラム」と呼んだのである。これは大凡今から數百年以前の事である。

抵美社 振金聲

註　マリリヤンといふのは東方海外の地で琉球の事だとせられてゐる。祖先の名も打馬烟社（宜蘭郡頭圍街の東南方一里許、烏石港の附近にある平埔蕃社）などではマレリヤンとなつてゐるが、アバンといふ名が今でも頭目の名として多く用ひられてゐる所から考へてもマレリヤンは原住地名としておきたい。
宜蘭荒原開拓の祖といはれる漳民吳沙は乾隆年間本國の漳、泉、粤、地方の無頼の徒數千を集め、三貂社を根據地として開拓に從事した頃から、此等平埔蕃は次第に壓迫をうけ、嘉慶の頃には既に歸化してゐたのである。

東部平埔、先祖はもと「カラバル」といふ所の土人であつたが、ある時白人の大船に傭はれて水夫となり、長い航海に出た。そして臺灣の東岸に難波し、乗組水夫の大部分は虐殺せられた。ところがカラバルから來た兄弟の水夫の悲鳴を耳にした酋長は、此の二人は我等と同人種だといふ事から、死を赦してやつた。併し故國に歸る事は出來ないから、そのまゝこゝに土着し土人を娶つて平埔蕃となつた。そして本島の東部一帶に繁殖したのである。

註　カラバルは英領西アフリカの小國―椰子油を產する―の名に類似してゐる。そして新古兩國はあるが、共に同名の河口附近にある。住民はエフイツク種族に屬する黑人で、未だ半未開の狀態にある。併し此の古カラバルに何等かの緣由があるかは俄かに斷ずるわけにはいかぬ。

南部平埔蕃

四社熟蕃、我が族が足跡を本島に印したのは實に悠遠な時代であつて、何處如何なる地方から來たかは不明であるが、兎に角大凡三百年の昔には既に今の烏山々脈の西麓一帶の沃土に分布して「タバカン」、「ボンガボン」、「カポア」、「シアウリイ」、の四社を建ててゐた。

ところが當時明末の亂を避けて多數の漢人が臺灣に移住する事となり、殊に鄭氏が領有してからは屯田兵の制を平埔蕃地にも及したから、次第に壓迫驅逐せられ、漢人或は他の平埔種族のため全く故地を奪はれてしまつた。そこで我等は同族の住地であつた楠梓仙流域に移動を企て、彼等を更に山地に驅逐し、之れに代つて楠梓仙溪沿岸の地を占めたのである。

やがて清朝が鄭氏に代るやうになつて、漢人の移住するもの益々多く、再び我が移住地に侵入し來り、或は婚を通じ、或は佃耕を共にするなどと次第に同化せられ、乾隆の初年頃には熟蕃として官府に歸附し、漢俗漢語に改良せられた。そして四箇の蕃社

は分散して現在の二十九庄となり漢人と雜居する事となつてしまつた。

二十九庄とは卽ち、

タバカン社――五庄
- 溪東
- 阿里關
- 羌黃埔
- 甲仙埔
- 四社寮

カポア社――七庄
- 頂公舘
- 蜈蜞潭
- 紅毛山
- 匏仔寮
- 大邱園
- 八張犁
- 芎蕉脚

シアウリイ社――五庄
- 茄苳湖
- 白水漈
- 山杉林
- 山杉林角
- 木櫸寮

ポンガボン社――十二庄、である。
- 吶竹
- 頂荖濃、
- 下荖濃
- 大苦苳
- 紅水坑
- 枋寮
- 水冬瓜
- 獅頭額
- 六龜里
- 舊庄
- 狗寮
- 二坡仔

註 曹族(ツオオ)の四社(美壠(ビラゲン)、排剪(パイチヤナ)、塔蠟袷(マトゲ)、雁爾(カルブガ))は現に荖濃溪の上流山地に住んでゐる。四社熟蕃と曹族の四社蕃とは、過去に於て全く同一であつた事を認められる。四社熟蕃は比較的平坦な美地に占據してゐた爲めに早く漢人の文明に接し、既に三百年來婚を通じたから固有の言語風俗などを失つたが、傳說や體貌から及僅かに殘つてゐる一種の儀式などからも十分確める事が出來るのである。

恒春熟蕃、恒春の平原には恒春城外、西方一里許の地の山脚庄、射馬里庄、及び溫泉地四重溪庄の三所、卽ち四重溪流域の山懷に二十戶許りの蕃屋が散在してゐる。恒春の熟蕃といはれるのはこれである。併し此れ等の蕃人も彼の淸史平埔蕃の大移動の際に南下したものである。

我が族の始祖については何等知る所もないが、もと鳳山地方の萬丹溪地域の蕃名「ヴァヴァカワキン」といふ平地に占居してゐたのであるが、大凡百年前漢人のため固有土着の地を侵略されたので、一時頑强な抵抗はしたが、結局敵する事が出來なくて、それぞれ新地を求めて移動を始めた。その中シャルといふ者の率ゐる一隊が、南進して今の恒春の市街地に到着した。常時此の地はパイワン族の「シュリンダン」社の領域

であつたから、先づ生蕃と和親の約を結び、水牛若干頭を與へて土地と交換し、漸く玆に居所を得たのである。その頃我等の一族は非常な富裕で、水牛だけでも約二千頭許りも所有してゐた。そこで此れを使用して開墾耕作に從事したが、水利の便がなかつたので好果を收める事が出來なかつた。

その中少數の同族は分れて四重溪の峽谷に入り、又射馬利の丘地に移つた。射馬利は生蕃サバリ社(パイワン族)の住地であつたから、移住者はサバリ社蕃と和し互に婚を通じ雜居したのである。明治七年(同治十三年)日本軍が牡丹社を征討した頃にはまだ恒春城地に住んでゐたがその翌年(光緒元年)淸國が城郭を營む事となつたから、我等は今の山脚庄内に移住したのである。そして漢人と雜居同化してからは、年々の誅求に遭ひ一族衰微して現狀のやうな悲慘なものとなつてしまつた。

陳阿三(たぬあさむ)

註 平埔蕃の歸順後の慘狀は、彰化縣志にいふ「歸化熟蕃所居、或漢人雜處、或遷徙而墟其他」の如く殆ど跡を滅する事となつた。かゝる侵掠は凡ての平埔蕃や山蕃に行はれたことであらう。先年石門より四重溪を經て統埔、保力二庄を過ぎ山脚に入つた時、庄人莊天保を介して平埔蕃を見たが、言語服裝まで全く支那化してゐて土人と何等區別を認めなかつた。併し生產的には實に悲慘なものであつた。

第三　淑始原由

祭　祀

太古カクモダンサパトロクといふ神が此地に降臨せられた。その頃海神が大海嘯を起したから、親神は再び昇天せられたが、御子スラ姫神ナカヲは「ドウダン」（臼）に乘つて「ラガサン」に逃れ此處に定住して遂に夫婦となられた。兄妹相婚は神の禁せらるゝ事だから、神罰を怖れて餘程愼んでをられたのと、已むを得ざる場合だつたので、格別の咎めもなかつた。その中粟が偶然發見されるし、五人の子女をあげて幸福な團欒をつくつてをられたが、スラ、ナカヲはかく安樂に生を繋ぐことの出來るは祖神（おやがみ）の御蔭である。それに祭の儀式さへ知らないでは遂に粟も絶えるに違ひない、といふので、トマイマスラ、タパンマスラの二子を祖神の許に遣し、大御手振（おほみてぶり）を習はせられた。二子昇天して各種の行事をうけて來た。大體は穀神　日月（ちだるぶらる）)祖神（まとあさゝのかわす）に關するものであつた。

註　太陽は女神で、月は男神だと彼等はいつてゐる。

（創世神話參照）アミ族　奇密社

B10

昔「パッパクマーヤン」にあつた一巨石からマブタ、マーヤン、及ルックルサーポ（女）の三人が生れ、年久しく同棲してゐるうちに四子をあげた。ところが或日マブタ、マーヤンガ山に行つた留守中にその一子が蛇に咬まれて死んだから、彼等は非常に驚き怖れ、「こんな事の出來たのは、我等がまだ祭を行ひ報賽の誠を表さないからだ」とて、直ちに豚一頭を屠り犧牲を捧げて祭を行つた。蕃社の祭は此の時に起原してゐる。

タイヤル族　大嵙崁蕃

大昔は祭祀といふ事がなく人々勝手氣儘な事ばかりやつてゐたから、猿となつたり猪となつたり、「ダングル」（陰核）となるものさへあつた。ところが其後太陽を祭る事を知つ

てからこのやうな事はなくなつた。

ブヌン族　丹大社

昔我が社にイルックといふ男があつた。或日全社擧つて漁に出たのに イルックだけは大きな籠を脊負つて山に行き、社のものが伐つて置いた木屑の散ばつてあつたのを拾ひ集めて歸つて來た。そして此れを煮ると魚となり、炙ると又魚となつた。ところが、漁り(すなどり)に出たものは案外澤山の魚が取れたから、喜びながら夕餉(ゆふげ)の膳に上さうとて炙ると、奇怪にも魚は悉く木片となつてしまつた。呆氣に取られた人々は言葉さへ出ない。するとイルックの家では木片が皆魚に變つた事が判つたので、彼は神にちがひないとて崇め尊ぶやうになつた。社人は「魚が木屑にならぬやうにしたい」と願ふので、イルックは「今後一人一個づゝの餅を我れに捧げるならば、きつとそのやうな事はない」と敎へた。それからは出漁の時に必ず先づイルックの家に餅を供へる事となつた。そして今でもやはり其の風習が絶えないといふ。

（怪異奇譚參照）

アミ族　謝得武社

厭勝

昔我等の祖先が「ラガサン」に棲んでゐた時、太陽神のみ子タタクサンフチダルといふ神が降臨せられて、種々の物種(ものだね)を授け給うた上に、粟播の順序や厭勝の術まで敎へて下さつた。

病氣などに罹つた場合に厭勝しようとすると、先づ「コワチン」を厭勝人(しかわさい)の兩手を擴げた長さに切り其の一端に口をあてゝ神に祈ると、神は直ちに其の病源を告げるのであつた。

トふには上つ節(よ)を切り取り、下つ節をつけた長さ一尺許りの竹を、幅七分位に裂き、それを木に掛け引き切つて其の切口を見るのである。そして若し神の怒りに觸れてゐる事がわかると、豚一頭を屠り其の右前肢と膽嚢及心臟をとつて犧牲とし新しい袋には餅と强飯を盛り、野のもの「ウサドワセノチダル(生薑)」、「ウカライカイ(篠)」、「ウワデハ(芭

蕉ウエ」の三品を六個に切り「チダル(日)」「ブラル(月)」「リラマイ(星辰)」「サヲリガウノチダル」「サラサウンノチダル」、「タタクサンノチダル」、の六神に配し、祭主は鈴のついた赤くて長い衣裳を纏ひ、打ち振り〳〵天つ神を呼び、社外に出で丶再び呼び、式場に着いて三度呼び、「我れ祖先の言を守らざりしを悔ゆ、願はくは其罪を許し給へ」と祈れ、病痾も立どころに治癒すべし」と敎へられたのである。かうして厭勝祈禱といふ事が始まつた。

アミ族　太巴塱社

註　現今も病人ある時は「シカワサイ」を呼んで厭勝させる。「シカレサイ」は「コアチン」（厭勝の木）に口を當て丶種々樣々の事を述べて其の「コワチン」を擦るのである　若しいつた事のうちに病源となつたものがあると「コソチン」が延びるといふ。

占ふには大抵今は六分四角ほどの木を六七寸位に切り其の一端に窪みをつけ、其の凹所に「ダオ」（竹）を插しその上を引き切り切口によつて吉凶を卜するのである。

チカワサイの祖

昔或所にカサウタモといふものがあつた。長い間身體の自由を失ひ今にも死にさう

になつてゐた。或日父に向つて「私は到底病蓐から出で丶父母に事へる事が出來ない、併し一つ心に期してゐる事がある。若しも私が呼吸(いき)絶え體温が去つても、右の拇指(おやゆび)が動くやうなれば假死だし動かない時は眞に死したのだと知つて下さい。」といひつ丶、次第に呼吸迫つて眼閉ぢ體硬く、遂に絶息した。しかし其の言の如く右の拇指が動いたから、父はまだ死んだのではないとて毎日介抱してゐたが、日一日と拇指の動きが鈍(にぶ)つて行くので、家人も今に全く動かなくなりやしないかと心配してゐた。すると丁度三日目の午後から少しく動きを早め、四日五日と經(た)つ中に次第に強くなり、その日の黃昏近い頃微かに呼吸し始め二時間許りで全く蘇生した。そして徐ろに父母兄弟に話し出した。

「最初呼吸が絶えた時丁度天から神が降つて來てしきりに自分の名を呼んでをられた。そこで神に手を取られ昇天すると、見も知らぬ珍らしいもの許りで目も眩む位、善美を盡した神衣を着けた諸神の中で、殊に威容正しい大神が私を呼びよせ、お前を人間界の「チカワサイ(厭勝人)」とするといはれ、いろ〳〵の奇術を授けられた。かくて天國の

奇觀を見殘して歸ると思ふと眼が覺めたのだ」と。皆々怪しい事と思つたが神術ときいては有難く施術を望むと、カヰウは重ねていふやう、「何事もない時は神術も施しやうがない。併しこれは人間界に起る有ゆる現象を豫知し得る妙術なのである。禍福吉凶を豫知したり、出獵の時の獲物の有無多少、年の豐凶、失踪者の所在、旅行者の前途などは立どころに判る」とて判斷を下すに、一として的中せないものはなかつたと云はれる。

註　靈界交通の事は後項にも出てゐる。

アミ族　奇密分社

火の起原

昔人類は火を、知らなかつたから、飲食物は凡て生（なま）のまゝであつたし、暗夜でも燈火を點すことがなく實に不便至極であつた。そこで重立つた人々はどうかして此の不便から免れたいとより〳〵工夫を凝してゐたが、別に名案も浮ばなかつた。此の時「ケウイシ」といふ鳥が大空高く飛び去るよと見ると、やがてケイシポフプトといふ神から火を貰つて來た。そして悠々と舞ひながら下りようとすると、折角持つて來た火を失つてしまつた。そこで「ウフゴ」といふ鳥が再び同神の許に行き、首尾よく火を貰ひ歸つた。その功によつて「ウフゴ」は今も畑の眞中で食をあさつても許されてゐるが「ケウイシ」は畑の中に入る事が出來ない。我等の平素用ひてゐる火はこの鳥から得たものである。併し祭日に用ふる火は別にエヤファヘヲイといふ軍神から授けられたものである。

今でも畑の邊で食を求めてゐる二鳥の嘴が尖らないのは火の爲めに燒かれたからだといはれる。

ツォ族　阿里山蕃

太古蕃人の祖先等は火がない爲めに非常な不便を感じたから、若しか何處かに火種が有りやしないかと、全社擧つて手わけをし思ひ〳〵に深山幽谷に分け入つた。かく

て數日を經た後或る高い山の頂に露營したが、遙か沖合の一島にちら〳〵と散點する火影が見えたから、一行思はず雀躍(こをどり)して喜んだ。併し遠い海中の一孤島だから如何ともする事が出來ない。そこで鳥獸を使ふより仕方がないとて、熊や豹を遣したが風浪の荒い爲めに、或は溺死し或は中途から引き返して、何れも使命を全うする事が出來なかつた。ところが最後に只一匹殘された羌仔があつた。弱々しいものだから選に洩れたのを遺憾に思ひうち萎れてゐた。併し別に外に遣すべきものがないから遂に彼に命を傳へた。すると羌仔は今迄の耻辱を雪ぐは此の時と、勇んで怒濤の中に飛び込み首尾よく火種を取つて來た。それを見た人々は狂氣のやうに悦び、彼を撫であげ擧め稱へたから其毛は滑かになり光澤を生じつや〳〵となつたさうだ。

アミ族　奇密社

註　海岸蕃ではアポクラヤンといふ神が「ボトル」島で樹を篠蔓で摩擦して得られた事となつてゐる。（創世神話參照）

昔々大洪水があつた時土人は新高山に遁れた。蕃人は卓社大山に遁れた。ところがあまり

俄の事とて蕃人は火を持つて來るのを忘れたから、どうかして新高山から貰ひうけたいものだと考へたが、何しろ漫々たる蒼海だから誰一人泳ぎ渡るものがない。いろ〳〵思ひ迷つたが、不圖空飛ぶ鳥に賴まうと氣附いたから、早速「ラヽリガン」鳥を呼び命を含めて遣した。ところが折角取つて來た火を途中で落してしまつた。そこで「タンブガー」鳥を遣したが、此の鳥も火を持つて飛び廻つてゐるうちにすぐ消してしまつた。次に「サリヌタン」鳥を遣ると火は取つたが尾が長いために水に浸り、重さに堪へかねて火を水中に入れた。更に「リナス」鳥を遣したが同じく目的を達せなかつた。次に「タンパワ」鳥は飛び方が荒くて、持つた火で自分の羽毛を燒き水中に沈んでしまつた。

そこで最後に「カイピス」鳥を遣ると首尾よく嘴に火を含んで歸つて來たから、人々の悅びは實に非常なもので、始めて蘇生の思ひをしたのである。そして其の時の恩義を忘れず今に「カイピス」鳥を射殺す事はない。「カイピス」の嘴の赤いのは此の時火に燒けたからである。そして若しか鳴き聲を眞似たりすると衣類を燒かれるとさへいはれてゐる。

ブヌン族　タケバカ蕃

昔「シシリ」、「チャチャス」、「ターォイ」の三鳥が雪山溪の上流で遊んでゐたが、「チャチャス」は何處からか火を携へて來て祖先等に授けた。その時羽毛を焦したから、此の鳥の事を「チョレチョーレン」ともいふのである。我等は今に「チャチャス」を靈鳥として決して射殺さないのである。

タイヤル族　汶水蕃

昔サリムヅとサルマイといふ二人のものが「チャチェー」鳥から火を得て、それを朽木に移して保存した。これが火の始めである。

パイワン族　スクスクス社

燧石

上古大覇尖山に棲んでゐた人々には「ピコ」といふ木と「シンコラホン」といふ堅い木を摩擦しあつて火を得ることが知られてゐた。その後土人が流木によつて川上に人の

ある事を知り、溯つて來た時に燧石といふものを傳へた。そして祖先等は初めて燧石と鐵とを打つて發火する法を敎へられた。其の頃は「ガミンナカバロン」(松の根)を火口としたのである。場所は「マリビヤン」といふ所だといつてゐる。

タイヤル族　北勢蕃、カラバイ蕃、

今は昔プルルガンとアヂャヂュといふ夫婦の間にウデデといふ子供があつた。ところが早く兩親が死に果てウデデは憐れな孤兒となつた。そこで社人は兩親の亡いのを幸に、其の財產を橫領し思ひ〳〵に分配して、ウデデには何一つ與へないばかりか火さへ借さなかつたから、ウデデは致し方なく畑に逃れた。すると遠くの方で火の光を見たから喜んでそこに尋ねて行つた。ところがその火は亡父が海中で燧石と鐵とを打つて造つた火であつた。すると間もなく父が現れて來てこれをウデデに授け、名殘惜しさうに去つた。ウデデはその火と火打道具とを携へて社に歸つたが、社人等はそれを見ていかにも便利だからそれを借らうと思ひ集つて來たが、ウデデは以前の恨みもあ

る事だから固く拒んで貸さなかつた。そこで社人等も前非を悔いウデデと和解した。蕃社に燧石の傳つたのはこれが初めてである。

馘首

パイワン族　チャヂャアプス社

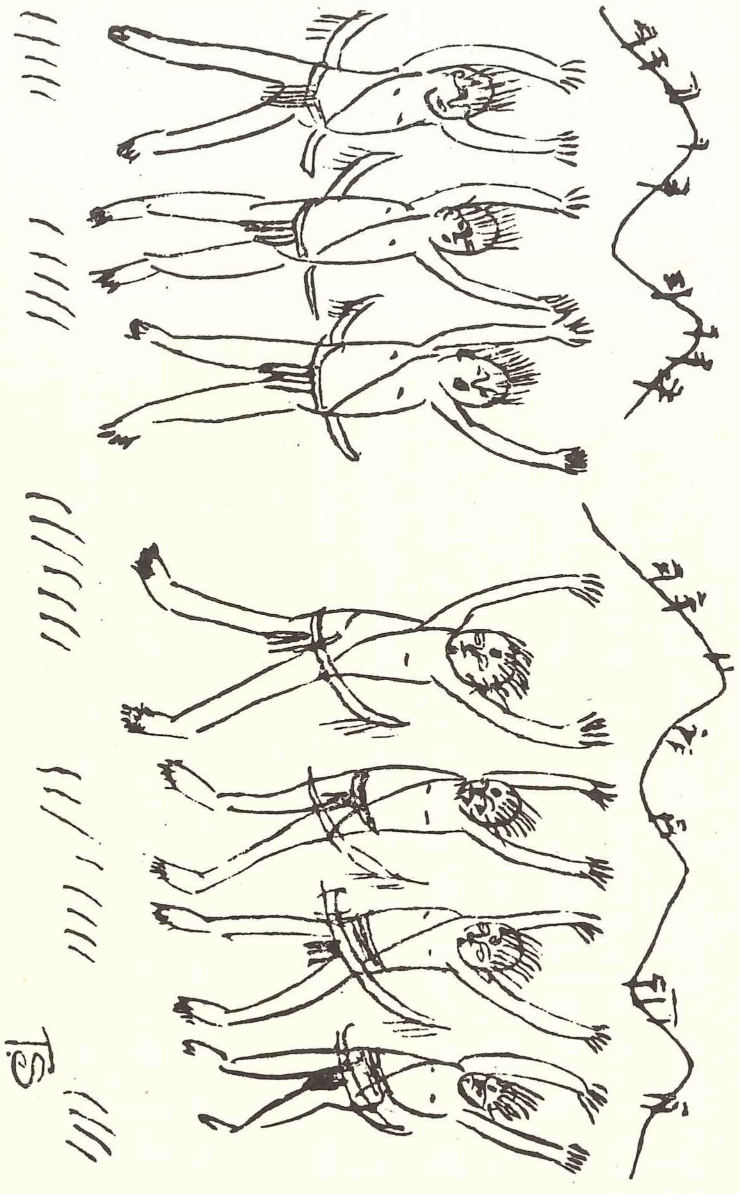
先祖のマブタ・マーャンは、
こんなにいつも言つてゐた。
若しも仲間(なかま)に爭ひや、
よからぬことの出來たとき、
「スピルカイ」して、首狩(くびかり)すると、
よいもわるいもすぐわかる。
サアサ若者の歌へや歌へ、
神は僞りいはぬもの。

わるい心で首狩しても、
神は願ひを叶(かな)やせぬ。
それに我らは僻事(ひがこと)を、
さら〲せねば神様も、
きつと守つてよい首を、
澤山(たんと)さづけて呉れるぞよ。
サアサ若もの奮へや奮へ、
神は僞りいはぬもの。

（大嵙崁蕃、馘首の歌）

註　「スピルカイ」は　一、祖先の遺言　二、遺言を守り團結事に當る　三、馘首、等と譯される。
ここでは第二の意である。

族長(かしら)の音頭に一同この歌を唄ふと、勇みに勇んで、も早血を見ねばやまなくなる。彼等は吉夢と、鳥の吉聲を得ると、「ラッタン」(短衣)輕く裝ひ銃槍を携へ出草するので



ある。かうして首尾よく馘首すると渓に赴き首級の咽喉から木の枝を入れ、腦漿を引き出し清洗する。それを、「タウカン」（袋）に入れ少年に負はせ、族長の音頭に和しながら引上げる。そして社の近くの小高い所で合圖をすると、家族等は皆出迎へ、やがて婦女子を先頭として歸社するのである。

かくて一社の老若男女が盛裝して集ると、馘首者の屋內の梁に籐蔓で吊した首の口を開け、その家の老人が酒を注ぎ食物を入れ、次の出草の時は汝の兄弟も兩親をも馘首せしめよと呪る。そして圓陣をつくり、族長の音頭と馘首者の掛聲とで踊るのである。

ローベーローベ、
カヤガナマオワシ、（歌へや謡へ）
ママナシプトアン、（臺灣人のおぢさん）
タイマロハイロネ、（度々ござれ）
ローベーローベ、

（汶水蕃、ローベー歌）

かうした馘首の由來は頗る古いものである。昔は蕃人も土人も同じ所に住んでゐたので、兩族の間も極めて睦じかつた。ところが人口が次第に殖えた結果、ある時南湖大山の頂を目あてに移住したが、餘りに道が遠いので遂に部隊の中に不和を生じたから、何處にでも粟さへ植ゑれば食を缺く事もあるまいと、一隊のものを平地に降らした。これが「パリモーカン」で山に殘つたものは「タイヤル」である。そして我等蕃人は刺墨し、土人は頭髮を長くして區別した。「パリモーカン」には僞りがあつたので、祖先等は報復のために馘首を始めた。(蕃社口碑參照)

馘首はこのやうに祖先の遺言で、少しでも土人の數を減らす事は勿論だが、その外疑議を糺したり、勇氣を示したり、又は良緣を得る手段である。

昔或家の妻が、常に夫の意久地ない事を嘲(あざけ)つてゐた。夫は女の爲に輕蔑せられるのを心外に思ひ時機を待つてゐた。或日彼は祖先の遺言を想ひ出した。そして拳を固め、今に見よ、多くの首を獲て妻の鼻をあかしてやらうと勇み立ち、唯一人で出草したが、思はず多くの首を馘つて歸つたので、日頃小言ばかりの妻も打つて變つて大いに喜び、

餅など搗いて饗したから、社人もこれを見て、馘首さへするとかうまで婦女に好かれるかとて、それからは男は競つて出草し、女も亦馘首せないものには嫁せないやうになつた。

タイヤル族　白狗蕃、汶水蕃

太古大洪水があつて、諸所に棲んでゐた人々が皆或山の頂上に集つて來た。其の時社人のうち有力な人々は、海神に犧牲を捧げてその怒りを靜めようとて、一人の白痴者を海中に投じたが、さしもの怒濤を泳ぎ切つて再びもとの山に登り着いたから、人々は屹度海神の意に叶はないのだらうとて、次に美しい男女を波間に沈めると見る〳〵水が退いて陸地が現れた。そこで皆々大いに喜んで、思ひ〳〵に美地を求めて離散した。此の時平地に赴いた者は山に殘つたものより遙かに多かつたから、少しなりと人數を減らさうといふ事から馘首の風が起つた。そして彼等を平地蕃といふのである。

馘首の歸途歌ふ凱旋歌

ワダコ（我）、ベヒヤ（行つて來た）、
リモイ（皆）、マコバダイ（義理の兄弟）、
タエ（聞け〳〵）、タエ、タエ、ムサ（見よ）、
テゲマフ（混戰）、トーマカラヲハロン（枯れた松の下で）、タラデン（先きに）、
ゲツシユマーダ（持ち來りつゝある）、シ（を）、ナバヲハロン（松の葉）。

聞け〳〵人々、見よ〳〵人々、我等決死の勇士は出草して、あの枯松の下で、松葉の亂れたやうに混戰した。そして今この通り松葉（首級を譬へいふ）を持つて來たのだ。

サゼク族　霧社蕃
タロコ蕃

昔臺灣人が蕃社にやつて來て、我等の祖先が丹精をこらして作つてゐた瓜を盜んだから、大いに怒りこれを捕へて小指を嚙み切つた。そしてこれに懲りずに若しも二度と來るやうならば、首を斬つてやるぞと威(おど)したが、彼はづう〳〵しく、「我等の首はいく

ら斬つても草のやうに芽が出るから、隨分精を出して斬れ」といひ捨てゝ逃げ去つた。餘りいま〳〵しかつたので、それ以來臺灣人と見れば馘首せずには居られなくなつたのである。

ブヌン族　干卓萬蕃

いつの事か不明だが、今から凡そ二三百年以前にバクシャといふ臺灣人があつたが、或時數人の蕃人を連れて集々街に下り、そこで毒酒を飲ませて悉く殺害したから、我等はそれを怨み出草を剏(はじ)めたのである。又蕃人同志ではタイヤル族のスユセンといふものが不意にやつて來て無法にも我社の者を馘首したから、兩族遂に不和となり互に馘首し、花蓮港のアミ族とは古來共に狩獵を行つたりして可なり親交してゐたが、ある時彼等の一人が過つて羂(わな)にかゝつて死んだのを、我等の所爲だといつて不和となつた。そして一時和解はしたが其の後「アミス」に籠作りの術を習ひに行つてゐた我社の若者が故意に馘首せられてからは、遂に深怨を結んでしまつた。つまり此等他族に對

しては報復のために馘首するやうになつたのである。

ブヌン族　巒蕃

今は昔早く兩親に死なれ祖母の手一つで育てあげられた四人の兄弟があつた。或る日彼等はどこからか蜻蛉を捕へて來てその首を斬り石の上に載せ、互に手を連ね其の周圍を歌ひ廻つて興がつた。此の事が面白かつたから其後また「タツパ」の頭を斬り取つて同じやうにして喜んだ。かくて一度より二度、二度より三度と次第に優者の誇りを感じ、愉快はいよ〳〵増して行つた。そして大抵の虫を平げてしまふと更に他の動物の頭が欲しくなり、遂には惡戲が進んで人の首さへ望む事となつた。

ところが人の首はさう容易くは手に入らないから、四人は鳩首して相談した。併し別に良策もないので遂に無慘にも祖母の首をとるがよいと決した。そこで何氣なく臥してゐた祖母の首を刎ね、また石の上に載せこれを見ながら手を連ねて謠ひつ舞ひつ戲れたが、曾てない一種の快感さへ覺えた。四人は人の首だとかうまで面白いものか

しらとうち興じ、今後は人を殺して首を取らうと決心した。

併し興が醒めて見ると、現在の祖母は身首處を異にし血にまみれ、虚空(こくう)を摑(つか)んで死んでゐる有樣に、さすがの兄弟も驚き惘(あき)れ今更ながら迷夢が覺めたので、どうかして元の身體にしようとて、頻りに祈願をこめたから、神も憐み給ひ祖母の體はもとのやうになつた。かくて四人は末永く孝道を盡したが、馘首の趣味を覺えてからは、その風は容易に改まらず、土人とさへ見れば一人も殘さず馘首するのであつた。

ツォ族　四社蕃

昔ナクライパラクといふ男があつた。ある時蠅の頭をとつて板に載せたが面白く見えた。それから猿の頭を斬つて同じやうにすると尚面白い。そこで若し人の首だと一層愉快に違いないと思ふとたまらなくなつた。早速外に出で小兒が無心に遊んでゐるのを不意に殺して其の首を板に載せると、實に氣持がよかつたから時々小兒の首を馘つた。或時又首狩に出かけると庭に鹿の革を敷きその上に「ビアル」といふものを乾してゐる子供がある。これ屈竟と「ビアル」の中に飛び込むと勢餘つて辷り倒れた。丁度そこへ子供の父が出て來てナクライパクラの睪丸を紋めあげたから忽ち卒倒し前後不覺に陷つた。暫くして氣がつくと睪丸が膨れて南瓜のやうになつてゐた。日頃殘忍の報いだといはれてゐる。

（蕃社口碑參照）

ツォ族　簡仔霧蕃

昔「スルド」といふ山にマゥイルと名乘る一人のアミ族が住んでゐた。性甚だ殘虐强暴で毎夜卑南社に來ては小兒の首を馘つた。そこで社人等は捨て置き難いとて或夜全社を廻り見張を嚴にしてゐた。ところが一箇所垣を破つて潛(くゞ)り入つた形跡があつたから、きつと例のマウイルが來てゐるのだらうと其處に罠(わな)をかけて待つてゐた。すると果して彼は馘した首を携へて歸らうと頭を垣に突込むとまんまと罠にかゝつた。そこで皆々槍を揮つて突つかゝつたが、マウイルは豪の者とて脇腹を刺されながら、首尾よく罠を破つて「クバクバイ」に逃げおほせた。そしてそこで水を飲むと疲勞が一時に

出て其場に倒れた。丁度その時漁撈から歸つて來たパナコイが追つて來た社人に力を協せて彼の首を取つた。これが我社の馘首の始めである。そしてマウイルの首は「パガヤン」といふ所に捨てたから、それ以來馘つた首は其處に棄てる事となつた。

パイワン族　大南社

昔「イバカス」といふ社があつた。頭目はプラルヤンといつて勇名四隣に轟いた男であつた。或時彼は「ダムニムニ」草の實を庭石の上に圓形に列べ、その中央に別に一箇の實を置いてみたが見るから美しい。そこで「ダムニムニ」の代りに社人を列べて見たが一段と立派である。若しも中央に人の首を据ゑて、人々が圓陣を作り廻づたなら面白からうと思つたから、或日他社の者の首を馘りとり、そのやうにして見ると殊の外見事であつた。それ以來暇さへあると屹度首狩に出るやうになつた。

パイワン族　マシリジ社

註　「パリラヤン」社では、或者が小さな粒で赤い色をした「ラリチ」草の實を取つて來て、それを鉢卷に飾らうとして先づ圓形に並べたがいかにも見事だつたので、若しも人の首だつたら尙ほ面白いだらうといふので出草が始まつたのだと傳へてゐる。

それから「カテポル」社では、不孝な兄弟がその父を殺した事から馘首が始まつた。そして今でも「タコパコパン」の少年等が猿を捕へて來て、十尺許りの竹に結びつけこれを射るのはその稽古である。「マガヤガヤウ」といふ踊もその時に由來してゐるといつてゐるし、同じ「マシリジ」社でも、或所で實の兄妹が不倫な交りをしたのをその父が發見して大いに怒り一刀の下に兩人の首を刎れた。それからは凡て惡事を行つたものが皆馘首せられるやうになつたのだともいつてゐる。

太古は平埔蕃も山蕃も同一祖先から出たものであるから、同じやうに平地に住んでゐた。ところが次第に人口が增加するから、或る時草の莖で籤をつくり、其の長短によつて二隊に分け短籤（たんせん）を抽いた方が山間の狹谷に移住して山蕃となつた。その時お互に領域を犯さない事を約したのだが、平地では人口が次第に增殖するばかりなので、遂に約に違ひ山蕃の領地を奪はうとしたから、山蕃は大いに怒り、「それほど廣い沃土を得ながら、まだ我等の地まで掠（と）らうとするのか、人數が多いのならからうしてやる」とて、遂に我等を見さへすれば馘首するやうになつた。

それ以來平埔蕃でも此の風を移し、異種族殊に漢人に對しては隨分猛烈に出草を行

つたものである。

平埔蕃　ケタガナン族　北投社

註　北部平埔にかぎらず、今の彰化を中心としてその附近に分布してゐたアリクン族（サヴァヴァ社）などでも、異族を殺すを以て勇武の表徴とし、壯丁の列に入るには缺くべからざる條件であつたことは山蕃に異りはない。

馘首の禁

昔卑南社に二人の兄弟があつたが、或る時「サカル」を造つて首狩に出て行つた。ところが父がその事を知らなかつたので、何氣なく山中に行つた。すると息等は父と知らずに馘首してしまつた。それと知つた兄弟は悔み悲しんだが如何ともする事が出來ない。その中一家悉く病に罹つたから、きつと父を殺した祟に違ないとて、兄弟は祭の方法を知らうとして社内を廻り敎を乞うた。併し誰一人として知るものはなかつた。

この時「キビキビ」と「キチキチ」といふ二羽の鳥が飛んで來て、羌仔を獲つて祀れと

敎へたから、早速羌仔を犧牲として、丁寧に祭を行つた。病は立處に癒つたが、それ以來馘首の風が大いに廢つた。

又ある時マスグスグ、クラサイ、の二人が「タケヤサン」と不和となり、出草したが同族を馘首する事の非理を識り和睦して復出草せなかつた。かくて馘首は同族間では嚴禁されるやうになつたが、異種族に對しても我が種族は餘り行はぬ事となつた。

パイワン族　大南社、大竹高社、

刺墨

昔、多くの婦女子が一時に死亡したので人々は如何したものかと心を惱したが、或夜神が夢枕に立つて、刺墨したならば災難を免れるだらうと敎へられた。併し誰もその方法を知らなかつたが、或る發明好きの男が先づ松明の煤をとつて女の衣の上に模様を描き、かうしたらよいと敎へた。そこで女は細い針で顏を衝き、松明の煤を其上に塗つたが、一度入れた墨は消えなかつた。そして死亡者はなくなつた。それ以來刺

墨は絶えず行はれ、一種の裝飾ともなり、成熟した女子の表章(しるし)ともなつた。

昔、祖先等がその原住地に充ち溢れた時、各々好む所によつて二隊に分れ、喊聲によつて人員の多少を比較したが、平地に降つた土人に欺かれて多くの人數を失つてしまつた。土人は「我等は鍛刀の術を知つてゐるから、多くの人を要するのである。」とて降つて行つた。そこで人數の少い祖先等は、此の上同志討ちでもするといよ〳〵全滅してしまうから刺墨して土人と區別する必要があつた。その上婦女子のやうに長命も出來るし、女子ばかりが立派に刺墨してゐるのに男子のせないのは醜い事であるとて、玆に男子の刺墨の風が起つたのである。

タイヤル族　マリコワン蕃
北勢蕃

註　刺墨して土人と區別し、馘首して宿怨を晴すやうになつたことは蕃社の口碑の條下に明かである。隣接のサイセット族が刺墨をせなかつた爲めに土人と間違へられ、屢々馘首の災にあつた事も思ひ合すべきである。

昔我等の祖先の人々は刺墨せなかつたが、「タイヤル」族の刺墨が如何にも美しく勇

壯であつたから、それを眞似て刺墨することとなつた。

サイセット族　大隘社

註　刺墨の由來としては他の理由もある。それ等は血族結婚の條下に記してある。

狩獵

太古は鹿も猪も羌仔も皆人に馴れて蕃社の近くに住んでゐた。神樣は人々に敎へて言はれるやう、「若しも汝等が猪を欲するならば其名を呼べ、猪は直ぐ來るだらう。鹿を欲すれば鹿が來るだらう。併し決して肉に傷つけてはならぬ、唯毛を拔きそれを箕(るつく)に入れてその上を蔽ひ、暫く後ろ向いてゐると屹度肉に化(な)つてゐるだらう」と、人々は敎へられたやうにして肉を得ては喜んでゐた。

ところが或時一人の馬鹿者が僅かな毛でもかうである、若しか肉ならば屹度素晴しいものを得られるだらうと、隱し持つた刀を揮つて不意に猪の肉を斬り取つた。猪は大に怒つて、「汝等には二度と肉を與へない。そして今後は狩に出なければ一片の肉さ

へ得られないだらう、よし假令獵具を攜へてゐても隙もあらば咬殺(かみころ)してやらう。」と言ひ殘して山に入つた狩獵はかうして起つたが、それも鳥の吉聲を聞いてからでなければ神意に叶はないで獲物はおろか猪に咬み殺されることさへある。これは祖先等が神命に逆いたからなのである。

タイヤル族　大嵙崁蕃、白狗蕃
サラマオ蕃、メバラ蕃

註　蕃社によつては獸が小量の股の肉を與へると、それが鍋の中で增えたのだ。そして惡戯者はハールスといふ大男となつてゐる。

女子出獵の禁忌

昔兄妹があつた。ある時二人で出獵して鹿を見つけたから、兄は先づ四本の矢を射たが一つも中らなかつた。それを見た妹は殘る一矢を取り狙ひを定めて放つと、過たず射あてた。そこで二人はいそ〳〵と獲物を攜へ歸り其の肉を食つたが、兄は翌日急に死亡してしまつた。妹は大いに嘆き悲しみ鹿を射た梅の弓と矢を地に衝き立てゝ斎んだ。すると不思議にも其のまゝ根がついて成長した。今でも我社では女子の獲た肉を喰はず、狩獵にも婦女子を件はないのはこんな不祥事があつたからである。

ブヌン族　巒蕃

獸の始

昔二人の仲のよい兄弟があつた。兄をダムリラルスと呼び、弟をウパイラルスといつた。或日兄弟は海岸に出でて四方を眺めてゐると、ふと一匹の大龜(らるなお)が砂を掘つて卵を產みつけてゐるのを見たから、食用にしようとて早速その卵を取り盡し、尚も產めば取らうとその側に近づくと、大龜は不意に兄の手を銜へて海中に引き入れた。焦慮(あせ)りにあせつた兄はどうかしてふり放さうともがいたが、龜の大力には叶はなかつた。かくて海上を漂ひ行く事暫らくで一つの見知らぬ陸地に著いたが、そこで龜は銜へた手を放しその儘いづくともなく泳ぎ去つてしまつたから、兄ダムリラルスは岸に登り

茫漠とした平原をさまよひながら、一體こゝは何處かしら、若しか人でも住んでゐるのではなからうかと尋ね廻ると、耕作した田圃があり、作物の間には澤山の飯が捨ててあるのを見た。不思議に思ひながらも人の住んでゐることを確めたから勇氣を出して進むと一つの村があつた。此の村に住む人は「タヌヘヌヘ」といつて、いつも飯の湯氣ばかりを吸つて生活してゐるのであつた。そして湯氣を吸ひ盡した飯は悉く田畠に投げ捨てるのだが、それは野猪が出て來て作物を荒さない呪ひにするのだといふ事を知つた。

その中食事が始まつたから、「タヌヘヌヘ」は遠來の珍客とて頻りに食べよと勸めるので、ダムリラルスは馳走になることゝした。ところが彼等は例により飯の湯氣ばかりをさも甘さうに吸つてゐる。併しダムリラルスは恐ろしい空腹なので手掴みで食ひ盡してしまつたから、彼等は大いに驚き「そんなに飯を食ふと腹の中につまつて非常に困るだらう」といつた。ダムリラルスは不思議な事をいふと思ひながら、よく／＼彼等の身體を見ると、彼等の何れも肛門がないのに氣附いたから笑ひながら、「我はこんな

に肛門があるからいくら食べても塞ることはない」、といつて身體をかゞめて見せると、彼等は驚きの眼を瞠つてゐた。

ダムリラルスはこの不思議な村に淹留する間、毎日野に出でゝ鹿を狩り暮す事を唯一の娯樂としてゐた。そしてその皮を剝ぎとり日に乾して貯へてゐた。すると或時一人の老婆が現れて、「早く故郷に歸つたがよい、そして其の時には此の地に住んでゐる多くの獸類を連れて行つたがよからう」。とて、丁寧に呪ひの法を敎へて呉れた。それから、「郷里に還るには廣い海を渡らねばならぬが、それには兼て貯へてゐる鹿の皮を幾枚も重ねて、皮船を造り、それに乘つて行きさへすれば安全である」とて船の造り方まで敎へておいて何れかへ立去つた。

ダムリラルスは此の上もなく喜び、早速皮船を造り授けられた通りの呪法を行ふと、忽ち澤山の獸類が現れ悉く附き隨つた。やがて準備も整つたから愈々出發しようとすると、彼の老嫗が再びやつて來て戒めていふには、「たとへどんな事があつても途中で後を振り向いてはならぬ、若しも後を向くと、折角汝について獸も皆歸り去るだら

う、ゆめ疑つてはならぬ」と。ダムリラルスは一々承知し恩を謝しつゝ彼の皮船に乘り、艫の方には多くの獸類を載せ海に浮び出でた。勿論後は振り向かずに漕いで行つたが、伴れて來た獸共が艫の方で思ひ〳〵に海水を掻くので、潮波高く上り全身濡れそぼち寒さに堪へられぬ位であつた。それでも後を見ないで辛うじて故郷の海岸に著く事が出來たから、第一に躍り上り、さて獸類はいかにと一寸ふり向くと、既に上陸した少數の獸の外は消えるが如く戻り去つた。うつかり戒を破つたのだがもう取返しがつかぬ。失策つたと思つた時は大部分の獸が逃げ去つた後であつた。

そこで止むなく少數の獸類を率ゐ「タランバハ」(今の烏眉港だといはれる)といふ地に到りつき、更に「ダヤホマ」(東の家の義だといふ)といふ地に著いた時、つれて來た獸類の性情によつて、山野それ〴〵の棲處を命じ立ち去らせた。以前は臺灣の山野には全く獸類がなかつたのだが、この時から次第に蕃殖していくら狩つても盡きないやうになつたのである。

曩きに不圖とした事から、兄に別れた弟ウパイラルスは悲嘆の泪にくれ、日毎海岸に出でゝは兄の連れ去られた青海原を眺めて、歸り來る事を萬一に祈つてゐたが、幾年月を經ても音沙汰もないので、今は世に亡いものと思ひ社人と共に嘆き沈んでゐた所へ、ひよつこりその懷しい兄が歸つて來たから云ひ知れぬ喜悅にうたれたのであつた。兄もほんの暫くの出來事と思つてゐたのに、社内の有爲轉變を見て今更ながら少なからぬ年月が經つてゐる事に惘れてゐた。

平埔蕃　パゼッヘ族

註　パゼッヘ族では今でも「デッサダイス」といふ目に見えぬ生物があつて人々の炊く食物の湯氣を吸つて生活してゐるのだと信じてゐる。他の蕃族にもこんな思想の見えるものがある。それ等は怪異奇蹟の條下を參照されたい。

穀物の由來

大昔の事、或日我等の祖先の人々がうち連れて「パッパクワカ」に行つた時、何處からか一人の少年が現れて、さも甘さうに何かしら喰つてゐるので珍らしい事に思ひ、少し所望して味はつてみたが何ともいへぬ美味である。そこで人々は大いに喜んでこ

の少年とその美味なものを携へて歸つた。小さな甘いものは今の粟であつた。不思議な少年は其の外にも黍や稗などの種まで持つて來つたので、稼穡が日に豊かになつたから社人は大いに幸福であつた。少年は社人に愛敬されてゐたが其の後の事は傳はらない。

タイヤル族　白狗蕃

昔人類は穀物を知らなかつたが、天が粟の種を瓢(ひさご)に入れて授けてくれたのである。それから栽培の事なども知つたから、次第に收穫が増して人々の常食となつたものだ。そして彼の瓢は其後化石してしまつた。

ブヌン族　丹大社

昔我が社に一人の男があつた。或日山芋を掘つてゐたが、その穴が次第に大きくなつたから、入つて見ようとて梯子をかけて降つて行くと、立派な家があつて其の內に

タムウナイといふ者が住んでゐた。タムウナイは闖入(ちんにふ)者を見て「汝は如何して此所に來たのか」と咎めたから、男は「自分は『カナブ』の者だが、食べるものがなくて、山芋を掘つてゐると、その穴が次第に大きくなつたから、かうして降つて來たのだ」といふと、「それぢやお入りなさい」とて奥へ連れて行き餅を與へた。男は珍らしいものだといひながらいぢつてゐるので、タムウナイは、「それは餅といふもので粟で拵へてあるのだ、喰べてみよ。」と勸めるから恐る〳〵嚼(か)んでみると譬へやうもなく美味(うま)かつた。そこでどうかその粟を分けて呉れと賴むので、タムウナイは快く「ビナウ」(粟)、「ヌブヌブ」(大角豆)「ナウマイ」(木豆)などの種を授けた。男はそれを地上に傳へた。そして今に粟祭の時にはタムウナイを祭るのである。

ツオ族　カナブ蕃

太古「ルボアン」といふ所に大きな「ワナイ」(榕樹)があつて其の根が紅頭嶼にまで蔓(はびこ)つてゐたから、人々はその根を渡つて彼我互に往來してゐた。或時一人の婦人がやは

りかうして彼の島に來たが、「プシラーク」(粟の一種)といふものを見た。島の人はそれを爨(かし)いて甘さうに食べてゐるのが羨しく、よいものを見たと早速それをとつて陰部に入れて携へ歸つた。ところが途中で放尿した時、折角苦辛して持つて來ながらつひ流してしまつたので、其の事を社人に告げると、或男がそれではと直ちに紅頭嶼に渡り首尾よく粟を盜んだから、同じように陰部に隱して持つて歸つた。それを栽培して今に種を絕たないのである。

パイワン族　カテポル社

昔紅頭嶼には粟といふもの一粒さへなかつたが陸地(臺灣本島)に粟といふ甘い穀物があると傳へ聞き、その種を需(もと)めようとて男女幾人かが陸地に押し渡り、千辛萬苦して漸く粟の種子少しを得て船を返さうとしたが、不幸にも陸地の人に差し押へられ、折角得た種子も悉く取り返されたが、一人機智に富んだ女があつて、かくまで苦辛して手に入れた穀物の一粒さへ殘し得ないのは如何にも本意なく思つたので、思案の果て

遂に陰所に一二粒かくしそしらぬ顏をしてゐたから、陸の人もそれまでは氣がつかないで漸く許し歸した。そこで大切に持つて歸つた種子を播いたが、次第に多く穫(と)れるやうになつた。島に粟のあるのは此の時からである。

ヤミ族　イモロツド社

註　前のパイワン族の說話と主客轉倒してゐる。兎に角兩族傳說が同一根源から出てゐる事が知られる。併しその先後の決定は他日の研究にまつものである。ブヌン族の「ライアン」の話ともよく似てゐる。

昔の人々は木の實草の葉を食つて生活してゐたが、或時一匹の狐が斷崖の下に來て脫糞した。ところが間もなくその中から一本の草が發芽した。祖先等は不思議な事もあるものと思つてゐたが、その中其の草が成長して實を結んだから試みに食べてみると非常な美味であつた。そこで早速携へて歸り社衆に分ち與へ栽培せしめた。これが今の粟であつた。

サイセット族　大隘社

或る男が小鳥の飛んで來るのを見て小石を投げつけると、小鳥は驚いて啄(ついば)んでゐた何物かを落して逃げ去つた。何かしら珍らしい物なので彼の男拾ひ歸り栽培したが、それが美味い粟であつた。そしてその頃は一粒の粟を植ゑると二斗許りの實を得たものである。

今の稻は或時山崩れした跡に生えたものだが、それを種としたのである。

サイセット族　ガラワン社

創世神話に出てゐる通り、「ラガサン」に棲んでゐたナカヲは或日非常に發熱して耳が遠くなり、しかも耳の中が痒(かゆ)くてたまらないので、何氣なくほじくつてみると爪の間に小さな圓い粒が挾まつて出たから、不思議なものがといひながら地に投げ捨てたが、やがて其處から小さい草が生えて數箇月の後には小さな實が澤山なつた。試みに一粒をとつて鍋で煮てみると、余り膨れたので鍋が破れてしまつた。それで今度は一粒を更に數分して煮たところ、甘い飯が出來た。これが卽ち粟であつた。それだから

今でも粟には幾筋も筋がいつてゐるのである。

アミ族　奇密(きび)社

昔テポグサン、テポカナンといふ二人の男が、天上の「チャリババオ」から初めて粟を得て栽培したのが粟の起りである。今でもこれを德とし祭祀の時には、必ず兩人に供物を捧げて報恩の誠を表すのである。

パイワン族　スクスクス社

或時一人の男が歩いてゐると、曾て來た事もない所に出た。其處に一軒の家があつて「ライアン」(小豆)といふものを乾してあるのを見たから、如何にも珍らしいものなので、何とかして手に入れたいものだと思つたが、普通の方法では吳れさうにもないので、早速一計を按じ其の上に腰を下して、そと一粒を陰莖の皮の中に入れてしまつた。立ち去る時樣子が怪しいので、家人が駈けよつてこれを捕へ耳鼻などを探したが、何も

なかつたから許して歸らせた。社内に小豆のあるのは此の時からである。

落花生は昔或時一羽の小鳥があつて、何かしら畑に埋めて飛び去つた。所が暫くして芽が出、豆が出來たから、食べてみるとよい味がする。それから廣く栽(つく)られるやうになつた。

ブヌン族　巒蕃

註　卓社蕃ではこの事は集々街での出來事とし「ライアン」は青豆といはれてゐる。そして豆を移植した男はマトラヤンといふ人となつてゐる。訝しな事だが今でも蕃人は大抵包茎なので隱して來るには便利だつたのだらう。

粟酒

昔糯粟(もちあは)の村と「ポゴ」の村と、山羊の糞の村とがあつた。或日三村の者が集つた時、互にいろんな話をしてゐるうち、やがて酒の話が出たが、一體どんな酒を飲んでゐるのかと尋ねあふと、山羊の村の人は「我等は山羊の糞で造つた酒を飲んでゐる」といふので、「ポゴ」村の人は、我が村では誰でもポゴ酒に醉つてゐるのだといつた。すると糯粟の村の男は「我等はそんな汚(きた)なげなものは飲まない、糯粟で造つた美酒を飲むのである。どんなに精神(こころ)が結ぼれてゐても、粟酒の一杯に陶然としてゐるとすつかり心地よくなつてしまふ。それでわれ等はいつも快活なのだ」といつて粟酒を飲ませてやつた。他の村人は生れて初めての美酒に忽ち陶然となつた。それ以來各村では粟を釀(か)んで酒を造るやうになつた。

サゼク族　霧社蕃

ワリシバット

昔ワリシバットといふ者が、初めて粟を咬み酒母を作る事を發明した。又麻の種を得て栽培を始めたともいはれてゐる。

タイヤル族　南澳蕃

煙草

昔或る所に至つて仲のよい兄妹があつて、殆ど夫婦同樣に暮してゐた。ところが父母は此の事を知り非常に立腹して口汚く罵つたから、二人は面目なく思ひ、數日間食物を取らないで身を輕くし、家の前に二本の矢を立てゝ置き、それから後で屋根を飛び越え自分と其の矢に刺(さし)れて死んでしまつた。

それから五六箇月經つて、男の死んだ跡からは葉に筋のある煙草が生え、女の方からは筋のない圓い葉の煙草が生えた。

アミ族　奇密社

昔一人の少女があつたが、どうした因果か年頃になつても誰一人夫にならうといふものもなく、徒らに年月を嘆き暮してゐた。或日彼女は父に向つて「妾は幸薄(さちうす)い生れなので、とても此の世に長らへる事が出來ないから、どうぞよく妾の顏を見て置いて下さい、併し妾は死後とても毎日の水は必ず汲んでおきます、そして又妾の墓から一種の草が生えたなら、それを他に移して栽培せられよ。」といふので父は緣喜の惡い事をいふものでないと叱つたが、數日後に娘はふとした事から病み臥し遂に歸らぬ旅に上つた。

兩親は嘆き悲しんだが今更歸らぬ事だから、泣く／＼屍を葬つた。ところが翌朝母が起き出でて水瓶を見ると、淸しい水がなみ／＼と入つてゐる。不思議だと早速娘の墓場に行つてみると、果して一つの見も知らぬ草が生えてゐた。兩親は驚きながらも娘の云つて置いた事があるから、それをとつて他に移植したところが、その草は下葉から次第に赤くなつて枯れてしまつた。

父は其の葉をとつて火をつけてみると、ゆかしい薫(かをり)がするから、それを卷いて火をつけ一端を口にして吸ふと何ともいへぬよい味がするので、隣人にも勸めたが忽ち社中に喧傳せられ、葉を求めるものが次第に多くなり、かくて煙草は洽く全社に傳播された。

兩親は煙草が出來たり、毎日／＼水瓶に水が滿ちてゐるのを見ると、或は娘がまだ生きてゐるのではないかと思ひ、人にも賴み、自分でもあちこち搜し廻つたが、何處

にも見出す事は出來なかつた。一そ墓を掘つて屍の有無を檢(しら)べようとて、鍬もて掘り返すと澤山な骨片が出たから、今は疑ふべくもなかつたのでそのまゝ土をかけて遺骨を納めておいた。ところが其後はぱつたりと水が出なくなつたといはれてゐる。

アミ族　南勢蕃

註　馬太鞍社、では男性になつてゐる。卽ち父母の鍾愛をうけてゐた年若い男がふとした事から病死した。其の後一年墓上に煙草が生えた。つまり父母を慰めるためなので、後に出る檳榔の話にも似てゐる。

今は昔マルビテンといふ美しい娘があつた。マルビルクといふ青年の家に通ひ、深く言ひ交し二世を契つた甲斐もなく、マルビルクはかりそめの病から遂に空しくなつてしまつた。娘は身も世もあらぬ愁嘆にくれ、末は夫と賴んだ人に先立たれ、今は此の世に望みもないとて、母の哀しみもよそに自殺した。母は驚き娘の側にかけより、「早まつてくれた」と足摺りして悲しんだが、今更甲斐もないので涙と共に葬つた。娘は死に臨み母に向つて、「不孝の罪はお詫のしようもありませんが、五日後に妾の墓を見て下さい、きつと一種の草が生えましよう、その草を採り日に乾して細かく刻み、徒

然な時に火をつけて喫して御覽なさい。眞に浮世の勞苦を忘れるでせう。」といつて置いたが、五日後には果して不思議な草が生えた。そしてそれを喫すると、いひ知れぬ快感を覺えたのである。煙草といふはこの草であつた。

アミ族　馬蘭社

註　奇密社の傳では先立つた夫が妻を慰めるために煙草となつたといつてゐる。

昔或る山の麓で、岩に腰うちかけて頻りに煙を吐き出す者がある。祖先等は驚いて近づいて見ると、曾て見た事もない人々である。あまり不思議なので、「汝等はどうして口から火を吐くのか。」と尋ねると、彼等は笑ひながら答へた。「これは火ではない、煙草といつて煙を吸つては吐き出すものだ。そして一度喫すると心地よい事限なしだ。ちよつと吸つてみないか。」とて差出した。祖先等は恐る〳〵煙管を受取つて吸つたが何ともいへぬ佳(よ)い味がした。そこで獲物と交換して持つて歸つたのである。

ブヌン族　タケバカ蕃
丹　蕃

註　煙草は大抵子供の時から吸ふ。娘たちは葉卷を作るのが一つの仕事で、念入りに卷いたのは情人に贈るのである。
蕃社に入つた時、頭目がわざ〳〵其娘に見事なものを卷かせ火をつけて差し出させる事がある。これは娘自慢もあるが歡待の意味なのである。

交易

昔祖先等がパナ（高山蕃）と逅つた時、彼等はサイシャツに向ひ、「汝等はいつもどんなものを食つてゐるのか」と聞くから、祖先等は「我等は魚を食つてゐる」とて魚を見せると、パナは「我等は鳥獸を捕つては食べてゐるが、一つ汝等の魚と交換しようぢやないか」といつて鳥獸を與へた。そして魚を貰つて喜んで去つた。兩族間の交易はかうして始まつたのである。

サイセット族　大隘社

武器

太古は重に陷穽を以て羌仔や鹿を捕つてゐたが、其後竹槍を造り鹿や猪を突いた。それから暫くして弓の發明があつて竹槍を矢として射ると立どころに鳥獸を獲る事が出來た。それを戰爭に用ひると强敵を斃すに妙であつた。それから骨鏃を發明したが鐵ならば效力が著しからうとて、鐵鏃の發明となつた。かくて武器は次第に精鋭となつて行つたのである。それから幾年か後に臺灣人から火繩銃を輸入した。

刀劍は昔、三角形の鋩子をもつ鋭い兩刄の劍であつたが、重くて使用に不便であつたし、且つ薯の如きでも剝くに骨が折れて澤山食べる事が出來なかつたから、後には片刄の輕い便利な刀が發明されたので、古劍は行はれなくなつた。

ブヌン族　郡蕃　卓社蕃

楯

昔、白狗蕃の者が眉原の婦人に刺墨を施したが不幸にもその女が死亡したから、こ

れはきつと白狗の者が呪咀したに違ひないとて、兩社の大戰爭となつた。その時ある者が楯を發明したので、人々は身體の前後をその楯板で覆ひ、首ばかり出して戰つたから、矢に當つて仆れるものは少なかつた。

タイヤル族　眉原蕃

鍛冶

古は農具といふものがなかつたから、手で薪を折り、石で土を掘つたものである。ところが或時臺灣人がやつて來て、鍬といふものを示し、「これで耕作せよ容易に土も掘れるし、草の根も起すことが出來る」といふから、祖先等は便利なものだと思ひ袋角（ふくろづの）と交換した。すると彼等は驚いて、「どうして袋角などを獲たのか」と尋ねるので、「ナニ、弓で捕るのさ」と答へると、それではこれが便利だらうとて銃器を傳へて行つた。

ブヌン族　タケバカ蕃

昔我が祖ロチエガ「ラガサン」に棲んでゐた頃、コアライ、インコウといふ二漢人が刀劔と鍬とを傳へ、鐵の種（たね）まで授けて行つたから、これを「サビリヌ」といふ所に植る日夜監視してゐると、種は次第〳〵に殖えて遂に大きな鐵塊となつた。

そこで大喜びで刀劔や鍬、鎌、さては水汲道具まで皆鐵で造つた。併し仕事が中々骨の折れる事なので食物などは營養價の多いものでなければならなかつた。それに或日一人のものが「ラブネ」（粟の一種）の辨當を持つて行つたが、不思議な事には其の日から鐵は軟い泥土のやうになり鍛へても〳〵固まらず、刀も鍬も造れなくなつてしまつた。折角得た鐵器もそれ以來は蕃社に傳はらなくなつた。

アミ族　太巴塱社

昔、祖先等は石を燒いて金とする術を知つてゐたが、かゝる技術者は險阻な山奥が不便だといふので、平地に降つてしまつてからはその術が絕えた。一たい物に蓋したものを「モカン」といつたから、初めて鍋蓋を造つた彼等をもやがて「モカン」と呼びな

したのが、後に轉じて「ペルモカン」となつた。今の臺灣人はその子孫である。
（蕃社口碑參照）

昔「タイヤル」族と「ビイク」族が軋轢（あつれき）して、「ハブンリナフイ」（尖石附近）に數回の大衝突があつたが、「ビイク」族大敗し、鍛冶屋夫婦二人ばかりを殘して全滅した。そして祖先等は餘りに多い首であつたから、棒切で打ち敲き「ボク〳〵」と鳴るものは殘し、「コンコン」と響くものばかりを持ち歸つた。今「ボクボク」を無能、「コンコン」を有爲の意に用ゐるのは、この時の故事である。現今の「ビイク」族は逃げのびた鍛冶屋の子孫なのである。

糅法

タイヤル族　白狗蕃

太古は山の神を祭るやうな事がなかつたから、その頃の獸類は人間に化けたり、いろ〳〵の形になつたりして人々を惱したものだ。或る時も一人の男が獵に出で、水邊に待つてゐると一匹の鹿が來たから、幸先よしと早速矢を番へて射ようとすると、忽ちその鹿が大きくなり、頭は雲にも入るかと思はれ、眼光炯々として睨みつけたから、その男目眩き（くるめき）心避易ぎ（たじろぎ）射放つ勇氣もなくなつた。そのうち鹿は何處かへ遁げ去つてしまつた。ところが他の男も同じ事に出會つたが、益々勇氣を振ひ變幻自在の怪物を射た。すると怪物は忽ち姿を隱したから、其の男は獲物の跡を探さうとて四方を見廻したところ、直ぐ前に布片（ぬのきれ）のやうなものが地上に落ちてゐる。不思議に思ひ見上げると、樹の側に脚を縛つてゐる人が居るので、走り近づくと彼は又逃げ延びた。尙も懲りずに追つかけて行くと、其の者が忽ち後向いて其の男を容易く引捕へながら、樹の幹に摺りつけ殺してしまつた。そして男の死骸をそのまゝ枝にかけて怪物は隱れ去つた。それから後で社の者が何氣なく此の樹の傍を通ると、大の男が皮ばかりとなつて晒されてゐるのをみて、始めて糅法（なめし）を知つたのだといはれてゐる。後に山の神を祭り出してからは獸類も怪異を見せなくなつたし、狩獵の獲物も多くなつたのである。

製鹽

ツオ族 阿里山蕃

昔或者が海邊に出て居た時、ふと海水を掬つて口に入れたが、鹹くて眞水と異ふ事に氣がついた。そこでこの水を煮たら如何かしらとて、破損した土器を拾ひ海水を汲み入れ火を起して煮ると、忽ち泥のやうになり終に白く變化した。嘗めてみるとやはり鹹い。これを持ち歸り菜に混じて煮ると味が甚だよいので、それ以來熱心に製鹽を始める事となつた。

すると薄々社の人はこれを見て大いに怒り「汝等が海水を煮たから、本年は粟が凶作だ。今後決して煮てはならない」と苦情をいふので、それ以來は海岸で製鹽せずに、海水を遙々社に運んで製する事とした。それでも製鹽に從事する里漏の人と共に祭を行ふのは粟作によろしくないとて、又々薄々社は里漏社に命じて、「ミトルプ」祭、及階級祭などの日を變へさせたりした。

アミ族 南勢蕃里漏社

土器

アミ族 薄々社

昔或る者が戯れに泥を丸めて團子を造り、焚火の中に入れて燒いてみると泥が硬くなつた。そこで今度は泥團子を數個つくり中を凹め、水を入れて火中に投ずると、或物は全く破碎したが、中には罅が出來たばかりで潰れなかつたものもある。次第に面白くなつたから次には炭火でやつてみたが、泥團子に砂の入つたものは毀けないで、泥ばかりのものが破れる事がわかつた。

それで今度は泥に砂を混せて試ると一つも碎けなかつたばかりか、水を入れても漏らない。これに勇氣を得て次第に工夫を凝したから、立派な土器が出來るやうになつた。

註 アミ族南勢蕃の各社が土器を製造するのではない。唯薄々社に傳はるばかりである。赤色の素燒で質が甚だ脆い事は内地の瓦器と同じである。泥は同社より數里もある東方の山から採つて來る。製造の法は紅頭嶼ヤミ族などゝ大差がない。要するに余程原始的なものである。

昔タケバタンといふ發明好きな男があつた。初めて土鍋を造りそれを「タバナ」と名

付けた。それにいろ〳〵な工夫を加へて各種の土器を拵へるやうになつた。最初は絲か布で袋を作り其の中に泥を入れて固め、それから内部の泥を剥り出してそのまゝ火で燒いたものである。古い時代の土鍋に布目か網目がついてゐるのはその爲めである。

今は竹箆(たけべら)を用ひて模樣をつけるのである。

ブヌン族　卓社蕃カツト社

籠造り

今から十七八代も前の事であるが、郡大社にタポコルといふ男があつた。或日眞竹を細く割いて笊を編みそれで粟を篩(ふる)つてみた。大變便利なので喜んでゐるとその夜夢に祖靈が現れて女竹で造つた方がよからう。そしてこの技術は汝の子孫にばかり傳へよと啓示(さと)した。それ以來籠類は皆女竹で造り、且タポコルの子孫の事業となつた。現今の「イシババ」姓は其の子孫である。

ブヌン族　郡蕃　イパホ社

舟筏

昔我が祖先にイシナンコワン、パラベ・イシパントシャ、タケシタロマン、タクシャン、の五人があつた、或る時中央山脈に出で、狩獵をしたが、一匹の白鹿が目前を過ぎたから、彼等はその跡を追つて遂に日月潭に到つた。すると鹿は進退窮まり水中に入つて逃げようとする。彼等は弓を揃へて射止めはしたが、水が深くて渡る事が出來ない。偶々鼠が背楠木の切片に乘り尻尾を梶として渡るのを見たから、直ぐに木を刳り船とし、檜を削つて梶を作り、首尾よく湖水を渡り鹿を捕へる事が出來た。其の時の船は湖岸にゐた土人に乞はれて讓つたが、我等はかうして獨木舟を造つたのである。

上古祖先が「ラモガン」(後埔仔)にゐた頃、鼠が笹の葉を佾んで濁水溪を渡るのを見た。それから我等に竹筏を拵へる事が知られた。

ブヌン族 イバホ社

註 「ラモガン」での話の方が古いらしい。併し獨木船は他の蕃族にも早くから用ゐられてゐた。

機織

或る時土人を見たから殺さうとすると、土人は「暫く待てよい事を敎へてやらう」とて機織の術を授けた。それ以來初めて布を織り出したから、今までのやうに草を纏ふ事がいらなくなつた。

ブヌン族　卓社蕃　カツト社

蛇模樣の話

昔卑南社の婦人にコダヤウ、カピヤウの姉妹があつたが初めて機を織つた。

パイワン族　呂家社

大昔の事母子二人が畑に出で、耕作してゐると一匹の美しい蛇が現はれた。いかにも美事なので、其模樣をよく〳〵見て歸りそれを布に織り出した。

或る時かうした蛇模樣を織り出さうとて、或家の娘が數多の小蛇を捕へて籠に入れて置いたが、間もなく親蛇が尋ねて來た。併し娘は拒んで子蛇を返さないで大蛇を打たうとした。すると蛇は大いに怒り忽ち鎌首をあげて娘に飛びつきこれを殺し更に家族全部を殺してしまひ、多くの子蛇を連れて「バケヤラン」に引揚げた。ところが一匹の子蛇が病のために取殘され、遂に「バラバナ」に止まつた。今でも「バラバナ」に蛇の多いのは、この子蛇から殖えたのである。

ブヌン族　丹蕃、タケバカ蕃

麻絲の傳來

太古祖先の人々は草や木の皮を纏うて寒さを防いでゐたが、其の後「ロンガエケーリ」といふ木の皮を晒して絲とし、これを織つて衣服を作る事を知つた。そして其頃では針は竹であり、機も丸木で、凡て簡單なものだつたが、それから暫く經つて埔里社あたりから麻絲を將來する事となり、機織にもいろ〳〵と工夫をこらし、創意を出

すやうになつた。

鳥追ひ

サゼク族 タウダー蕃

昔、粟が人に告げていふやう、「我等の結實する時には、決して蠅を穂先に止めてはならない、なぜといふと、蠅が止れば雀が飛んで來てすつかり粟を食べるからだ」と。それに或日粟番に行つた怠け者が馬鹿遊びをしてゐる暇に、無數の蠅が止つたので、雀も群り飛んで來て悉く粟を食つた。それから味を占めた雀が年々粟を荒すので、竹を割つて「パッパク」を作つて鳥追ひをする事となつた。

タイヤル族 キナジー蕃

壽命の話

太古質朴の世にあつては、人々は皆勤勉で一人として怠けるものもなく、又衣類や

装飾をつけるやうな事はなかつた。そしていろんな規律―例へば出獵の際生肉を食べぬ事とか、粟飯も湯氣の立ち昇つてゐる間は口にせぬ事とか、薪を跨げないとか、外出の時には必ず茅萱(かや)の穂と土人の頭髪とを「タウカン」の紐に結びつけるとかいふこと―をよく守つたから、人の命も長くいつも樹木のやうに若々しかつたが、次第に怠けものが多くなつて半日も寢てゐたり、つまらぬ飾りをつけたり、規律を破つたりしたのを、神が見て大いに怒り壽命を短かくせられたのである。

タイヤル族 大嵙崁蕃 シヤカラウ蕃

昔珍らしい男があつた。祖先等に向つて云ふやう、「私に糞を塗つて呉れないか、若し快く願を容れてくれるならば、汝等は死ぬ事はなく、譬へば蛇の皮が剝げて何時も若いやうに決して老衰する事はなからう」と。社人らは糞を塗る位は易い事だと毎日代る〳〵塗つた。最初は面白半分であつたが、何時しか一人減り二人減り、數月ならぬ

うちに早や約束を破つたから、彼の男は大いに怒つて、意氣地なき等奴よと罵りながら自ら糞溜の中に飛び込んで死んだ。其日から人々の命は縮まつたのである。

タイヤル族　シヤカラウ蕃

昔一人の老婆があつた。全身屎尿にまみれ汚くて近寄る事も出來なかつた。女は頻りに「洗つてくれよ、洗つてくれる者はきつと長命するだらう。」と叫んだが、誰一人洗つてやるものはなかつた。そこで老婆は再び糞溜の中に落ちて死んだ。今の人の短命なのはこの老婆の怨靈の祟りからである。

（蕃社口碑參照）

タイヤル族　南澳蕃、太湖蕃、

古人は老年になると、皆糞溜の中に飛び込んで自分と表皮を剝いたものだから、皺よることもなく何時も若々しかつたが、今の人はそんな汚い事を嫌つて行はなくなつたので、早く老衰するのである。

タイヤル族　白狗蕃

昔神が人類を創造したが、最初は頭ばかりで少しも動かうとしない。そこで神はどうしたわけかと更に大なる神に尋ねられると、それは恐らく足といふものがないからだと敎へられたから、それではと足を造つて頭にくつつけられたので、人は始めて地上を歩くやうになつた。丁度その時別に豚の糞の中から生れ出た人があつた。其のものが神の子に向つていふやう、「どうか我を洗つて下さい、若しもさうして呉れるなら、汝等は長命である。そして又假令病氣に罹つても皮一枚剝ぐ時は必ず全癒するだらう」と。ところが神の子は馬鹿らしいのと汚いのとで聽き入れなかつた。そこで其の男は止むなく再び地中に入つてしまつた。今人間の死亡するのは此の不思議な男を洗つてやらなかつたからである。

サゼク族　木瓜蕃

昔神が人に敎へていふには、「人は常に豚の糞で身體を洗つてゐさへすれば、丁度あの百日紅が夏に皮が剝げ落ちても冬には再び美しい皮が出來るやうに、いつも若々し

く決して死ぬやうな事はないだらう」と。ところが人々は神の誨へを信じないで清水で洗つたから、神意に逆つた罪で今日の如く短命となつたのである。

サゼク族　霧社蕃

註　太魯閣(たろこ)蕃人の傳へでは、最初現れたのは二人の男子だつたが、稍あつてそこゝに散ばつてゐた豚の糞の一塊から又一人の男が生れ出た。その男が前の二人に向つて、毎日豚の糞で身體を洗ふと、いつも百日紅のやうで老衰する事はなからうといつたが二人は聽かないで嘲つた。そこで此の男は「我は死んで神とならう」とて地中に入つた。これが卽ち「ハミチオツトフ」(死神)である。つまり人間の短命なのは此の死神につかれるからだ。それから殘つた一人は他の男を鷄姦した所、間もなく孕んだが分娩する事が出來ずに死に、只一人殘つた男は四方を徘徊して漸く一婦人を得二子をあげたが、間もなく父子三人引續いて世を去り、その寡婦が犬に遇(あ)うて漸く子孫を留めるといふ風に隨分「ハミチオツトフ」に崇られる事になつてゐる。

昔は人々は自分の糞で全身を洗つてゐたから「トルボス(欅)」のやうに壽命も長かつたが、其後臺灣人が入つて來てから、食物を減らしたり、水で身體を洗ふ事を知つてから病氣が起り命も短かくなつたのである。

ブヌン族　巒蕃

註　蕃人は、「昔の人は皆長命で大抵曾孫を見てから世を終つたものである。それに今は余程短命になつたのは祖法を守らなかつたり、都會に出でゝ文明の風に當るからだらう」といつてゐる。

ブヌン族　干卓萬蕃

昔の人は皆長命であつて、此の世には死といふものがなかつた。ところが或時テルムヅといふ老女があつたが、ある日家族に向つて、「妾はこれから地中見物に行かうと思ふが、若し五日して歸らない時は地中に止まるのだと思つて下さい」といつて、そのまゝ五日經(た)つても歸つて來なかつた　それから人々は地中に樂土のある事を知り、これを求めて死亡するものが多くなつた。

パイワン族　マカザヤザヤ社

註　人の名はサラムヂ(スパイワン社)、ミリミリガン(パリラヤン社)ともなつてゐる。

昔一人の老人が屋內に臥(ふせ)つたまゝ唯呼吸するばかりで少しも動かなかつたから、家族はそれを邪魔物に思ひ外に移した。すると間もなく老人は死亡して其の靈が天に昇

つた。それ以來人々は早く死ぬるやうになつた。つまり老人を粗末にした報いである。

パイワン族　牡丹路社

昔は老年になると體軀(からだ)が縮まつて一尺ばかりとなり、常に「ウッウッ」と唸つてゐた。そして少量の豚肉さへ食べさしてゐると決して死ぬものではなかつた。ところが或日の夕方小兒等が畑から歸つて來ると、老人は例の底氣味わるい唸聲(うなりごゑ)を立てゝゐるので、大そう怯(おび)えたから、遂に老人を地中に埋めてしまつた。それからは人々は皆死亡し恐ろしい短命になつてしまつたのである。

そして年中行事を簡略にした事も短命の一原因となつてゐる。

パイワン族　牡丹路社
パリラヤン社

昔の人は老年になると外皮を剝いで再び若くなつたものである。ところが異種族のものがやつて來てそれを笑つたから、「一體皮を剝ぐのと、死ぬのとどちらがよいか。」と尋ねると彼等はすぐ、「見苦しい皮を剝ぐより死ぬ方がいくらよいか知れない」と答へた。それから我等も皮を剝ぐのをやめて死ぬことに定めた。

サイセット族　ガラワン社

附　便所の事

祖先ブタナワイの時代に、糞壺から一人の男が出現して、全身を蔽ふ不淨を取除いて呉れと願つた。ブタナワイはあはれに思つたので、水を注いですつかり糞を洗つてやり、多くの食物さへ與へた。男は喜んでこれを食べ盡したが、間もなく全部それを吐き出し、又もとの糞壺に落ちて死んでしまつた。それ以來我等は便所を廢するやうになつた。

タイヤル族　パスコワラン社

血族相婚の禁

人間がこの世に現はれた最初の時代では、少しでも早く子孫を繁殖させるために、同一血族のものが遠慮なく相遘ふたから、親子兄弟の間でも嫉妬があり不和があつた。それに產れる子供も白痴や尩弱なものが多かつたから、祖先の一人は社人を分けて二社となし、兩社互に婚を通じ堅く自社內の婚姻を禁じた。

ところが或時俄かに洪水が起つて、見る〳〵山野を濁水の底に沒してしまつた。人々は「オワオワ」と叫びながら、唯一つ沈まずに殘つてゐた大覇尖山をさして逃れた。そこで社衆は兎に角不淨を祓ひ、犧牲を捧げて神に謝する事とし、いろ〳〵穿鑿してみると兄妹相犯してゐるものが露れたから、この若い男女を水中に投ずると、水は忽ち退いた。この時水勢が餘り急だつたので山を穿ち地を掘つて今のやうな溪山をつくつたのである。

男は流れ〳〵て大安溪に下つた。それを今、雄川といつてゐる。そして大甲溪を雌川といつてゐるのは女が流れ下つたからである。

やがて洪水は治つたが、萬物皆流れ悉したので、人々は暫くの間草根木皮で露命を繫いでゐた。ところへ鼠が粟の穗を持つて來て吳れたから稼穡の法がついたのである。そこで海神は人々を戒めて、「今後又血族相犯すやうであつたなら、蝗害を下して罰するだらう。疑つてはならぬ」と告げられた。此の時以來血族相婚は嚴禁されたのである。

（蕃社口碑參照）

ところがこんな事があつても、時には禁を犯すものがあつた併しそれ等はきつと何か思はぬ災厄にかゝつたり、非業の最期を遂げたり、稼穡が思はしくなかつたりするのであつた。

昔「ビノサン」社といふ社にカムボガーイといふ頭目があつた。豪傑肌な無頓着な男であつたが、或日社衆を集め、自分の抱負を滔々と述べたあとで、「血族の婚姻は祖先等が嚴禁してゐるが、それぱかり固守してゐては子孫が繁殖しない。今日からその禁を

解かう。」といつて、酒宴を張り大いに祝つた。そこで一時は人の數も增えたが、間なもく、此の酒宴に列したものは悉く死亡してしまつた。

又

或處に異腹の兄妹があつたが、妹は全社に稀な美人だつたので兄が思ふやう、「かゝる美人を人妻にするのは嫉妬に堪へない、一そわがものにしたいものだ」と、或日思ひ切つて言ひ寄つたが、妹は堅く拒んで聽かないから、とかくの思案もなく強いて〇した。ところが相擁いたまゝで如何しても離れることが出來なくなつてしまつた。二人は周章狼狽してゐるうちに、東雲近く日は昇つて、うす暗い蕃屋も隙もる光りに兩親の顏さへあり〳〵と見られるやうになつた。二人は焦慮ればあせるほどいよ〳〵密着して如何ともする事が出來なかつた。その中兩親も目覺めてこの態を見、驚き惘れ早速祈禱などしたが、もとより其效なく二人は遂に其の日の夕方、枕を竝べて夜見の國に旅立つてしまつた。兩親も餘りの怖しさと恥しさに躊躇はしたが、遂に秘すべき事を明らさまにし、社中の若い男女の戒めとした。

タイヤル族　マリコワン蕃
北勢蕃
鹿場蕃
大料崁蕃

人類の起原は詳かではないが、我等の祖先は初め一人の婦人であつた。或日山の頂に跨つて脚を伸べてゐると風が吹いて來て股間に入つたがやがて懷胎して男子を分娩した。その子が健かに育つて年頃となつたから、母は嫁を求めやらうと四方を探したが固より他に人もなかつたから、已むなく自分が子の妻とならうと決心した。或日子供に向つていふには、「お前に立派な妻を探して來てやるから。五六日してから山の麓に來なさい」と約して出て行つた。

子は約束の日が來たのでいそ〳〵と山の麓に下つて行くと、そこには顏に入墨した婦人がゐて慇懃に彼を迎へるのであつた。併し母は元來風を孕んだ事はあるものゝ、全く交道を知らぬもの同志なので、何うしようと思ひ煩つてゐた所へ、蠅が飛んで來

て不思議な行ひをしたのを見て初めて和合の道を知り、次第に子孫が繁殖して行つたのである。併し最初は父子兄弟の差別なく好むがまゝに婚つたから、産れるものも産れるものも不具者ばかりであつた。人々は不思議に思つてゐたが、或夜不具者の多いのは血族結婚に因るのだと夢告があつたから、なるべく遠縁のものが結婚する事とし血族相婚は絶對に禁ぜられた。それから刺墨も最初は顏面全體に施したのだが近來は細くなり、しかも唯頬ばかりにする事となつた。

昔或兄妹が二人でパーガー（櫓）に登つてゐたが、不圖相○した。ところが二人の身體は堅く密着してしまつた。その中夕方になつたので下から母の呼ぶ聲がする。離れようと焦慮ればあせる程いよ／＼堅くなつて更にせん術もなかつた。何だか訝しいと思つた母が登つて來るとこの樣なので、驚き呆れいろ／＼工夫したが力及ばず、致し方がないので蕃刀もて思ひ切つて兄の局所を斬つてしまつたが、斬られた兄はその場を去らず空しくなつた。それ以來兄妹相遘ふ事を嚴しく戒められるやうになつた。

サゼク族　タロコ蕃

上古は婦女が少く男が多かつたから、年若い男は日每女の許に爭ひ集り、耕作なども手につかぬ樣であつた。其の頃は血族でも一向に忌む事なく姉でも妹でも姪でも、凡そ年頃の女でさへあれば誰にでも戲れたものだから、遂に神の祟をうけ、猿にせられたものもあり、鹿になつたもの、「カリンリヒ」や「パパトーシ」のやうな鳥となつたものもある。まだひどいのは「バンセシヤル」、「バシコーラン」のやうな動く事の出來ない樹にせられたりした。併しそれが何の罰なのかさへ判らなかつたが、太陽が射られて地に墜ちた時、人間がいろんな物にせられるのは、全く血族相婚するからだと戒めたから、それ以來祖先等は嚴に一夫一婦の制を採り同姓嫁娶を禁じた。

又

昔兄妹相婚したから日月の怒りをうけ有ゆる災妖があつたので、それ以來嚴禁してゐた。ところが或る時二人の若い兄妹があつて、何氣なく屋内にゐると鶯が飛んで來て、「バフセ、バフセ」と啼いたので、兄妹はいつのまにか其の聲に誘はれて相遘うてゐた。かうとは知らぬ隣のものが入口から火を呉れといひつゝ入つて來たから、兩人

は驚き離れようとしたが、どうしても駄目だつた。そこで餘り恥しくて一刀を拔き放ち我と我が局部を斷り兩人共に自殺した。それからは兄妹相婚は全く絶えたのである。そして此の事があつてから人々は陽物を犬のそれと交換した。（情事情話參照）

ブヌン族 巒蕃
丹蕃

幾千年の昔だつたか、巖の中から生れた男と、竹の中から生れた男とがあつて、互に睦じい交りをしてゐた。或夜二人は枕を竝べて臥し、互の膝頭が觸れるやうだつたが、間もなく一人は右の膝から男の子を、左の膝から女の子を產んだ。すると後の一人も同じやうに男女の子供を產んだ。此の男女成人の後夫婦となり數多の子女をあげたが、石から出た人の子孫は子孫同志、竹の中から生れた人の子孫は子孫同志で、緣組してゐたので、生れるものも生れるものも聾啞や跛者ばかりであつた。それでいろ〳〵原因を調べたが、どうも近親の結婚がわるいのだらうとて、石の子の系統と、竹の子の家系とが嫁娶する事としてからは不具者は生れなくなつた。我等は此の遠祖の慣習に遵つて、今尙同姓相娶ることを嚴に戒めてゐる。

ヤミ族 イモロル社

交道

太古アボクラヤンといふ神が本島の東海中の「ボトル」と呼ぶ一孤島に降臨せられた。此の時一條の流を挾んで降られた女神があり、御名をタリブラヤンと申した。やがて二神相近づき言葉をかけられたところ、全く同じ言語なので懷しく思はれ、それより同棲せられた。

或日籐を樹の枝にかけて強く引かれると、火が燃え出して幹を燒いたから枯枝に移して持つて來られた。かくて火が出來たから二神は薯を燒いて食べようとて、ふと蹲踞まれる拍子に互に見合はされた。すると男神は成り餘れるものを持つて居られるし、

女神は成り合はないものを持つて居られるので、互に不思議に思ひ余念もなく見入つてをられた所へ、「ホワック」(鶺鴒)が二羽飛んで來て尾を振つた。そこで二神は始めて遘合の道を知られたのである。其れから數年もたゝぬうちに子孫繁殖し孤島「ボトル」では狹くなつたから船に乘り本島に渡られた。

アミ族 海岸蕃

昔ピンサバカン(一名サバヤカン)といふ處に一箇の石があつた。周圍に毛のやうな長草が生え、その形さへ女陰に似てゐた。その石の中から二人の男女が現はれ成長して夫婦となつたが、和合の法を知らなかつた。或日男は性慾の衝動から怒○した○物を女の耳に嵌てたが適はない、目を衝いたが効がない、鼻を試みても同樣であつた。丁度その時一匹の金蠅が飛んで來て女の股間に入つたから始めてそこに凹所のあるのを知つたのである。それからは伉儷睦じく子孫繁榮したといふ。

タイヤル族 ガオガン蕃

註 太古人間が未だ和合の術を知らなかつた頃、「セツピリ」といつて趾の赤い虫が人の前に來ていろ〳〵の所作をしたが、何事も敎へる事は出來なかつた。その時金蠅が飛んで來てそれを敎へたのである。

タイヤル族 マリコワン蕃

第四　天然傳說

自然現象

洪水

上古は大地の底に穴があつて、雨が降ると水は皆そこから流れ落ち少しも溜る事がなかつた。ところが或時流木が沈んで其の落口を塞いでしまつたから、—眉原（めはら）蕃では人々が脱けおちた頭髮を流したからだといつてゐるが—見る〳〵大洪水となり、野も山も悉く水底に沒し去つて、今は僅に「パッパク」の頂を殘すばかりとなつた。人々は祈禱や厭勝に力めたが、漫々とした濁水は愈々溢れるばかりであつた。此の時海神が夢占をよくする老人に告げて言ふやう、若しも我に一人の女を捧げるならば直ちに退水せしめようと、併し誰一人として、犧牲にならうとはいはぬ。そこで人選に時を費した後、漸く一人の醜女を納得せしめ、「海中にも立派な家があるからそこで安樂に生

活せよ」、といつて、水に入れたが少しも減水せない。その時、氣の利いた男が不意に一人の美人を抱きあげて海中に投ずると、さしも淼漫たる大水が、一時に巨濤となつて流れ去つた。その時落ちたぎる水のために、今の溪山が造られたのである。かくて各々自社に歸つたが、貯へてゐた粟は悉く流されてしまひ、穀倉には潑溂たる魚が滿ちみちてゐた。

タイヤル族　ガオガン蕃　眉原蕃
南　勢　蕃　南灣蕃
鹿　場　蕃　汶水蕃

註　北勢蕃、昔一人の美女があつた。他人に嫁するも惜しい事だとて兄と結婚したが、祖靈の祟をうけ洪水となつた。人々は「パッパク」に避難し、犬を流して減水の祈願をしたが効がない、更に老人を犧牲とした がやはり駄目である。種々と穿鑿した結果、彼の二人を投じたから忽ち退水したのである。

（蕃社口碑参照）

萬大蕃、昔、洪水のあつた時、人々は眉原（めはら）と眉溪（はいけい）の間にある「ボギラン」といふ檜山に逃れ魚を捕つて生活してゐたが、容易に減水せないので、女の髮を切り刀に括りつけて海に投ずると水が始めて退いた。

屈尺蕃、太古は今の霧北附近まで一帶の山で我々タイヤルの棲居であつたが、異人種が來てから俄かに洪水が起り、山地變じて平地となつたから、我が祖先は深山に逃れたのである。

太古祖先等が南投廳下にあつた頃、俄に洪水があつて一面淼々とした大海となり、只「タロコ」大山の頂を殘すばかりとなつたから、人々は急いで大山の頂に逃げ集つた。其時醜い女を海神の犧牲として退水を祈つたが、彼女は再び泳ぎ歸つて上陸したから、水は少しも退かない。そこで、今度は美女を水中に投ずると、見る／＼減水して陸地が現はれたから、各々元の社に歸つた。見ると粟は皆流れてしまつて、穀倉は魚類で滿たされてゐた。

サゼク族　パトラン蕃

昔大洪水があつて蕃人は皆新高山の頂に避難した。洪水は大蛇が水を塞き止めたから起つたのだが、丁度その時一匹の蟹が這つて來てその蛇を挾み截つたから、そこから水が流れ落ちて再び元の平地を見る事が出來た。

その時水瓶が水上に浮んで流れるのを見て、或男がそれに乘つて平地に出たといはれてゐる。

アヌン族　丹　蕃、干卓萬蕃

昔一匹の大鰻が海から上つて來たと見る間に、四面は際涯もない大水となつた。祖先の人々は「アンハナ」の後にある「ナスラナ」といふ高山に逃れ、四社蕃の者は「タヌウエンッ」といふ山に避難した。かゝる不意の出來事なので、人々は狼狽の餘り大切な火もそのまゝにうち棄てゝ來た。ところが逃れてみると、火のない程不便がないので、どうしたものかと談合してゐた折から、遙か彼方の「タヌウエンッ」(新高)山に火が見える。そこで先づ羌仔を遣して火を貰はせたが、羌仔は首尾よく濁水を泳ぎ切り折角貰つて來た火が燃え下つて熱さに堪へかねたので、思はず角を水につけたから、今一息といふ所で失敗に終つた。

そこで牝の山猪が出て來て、「どうか私を遣つて下さい。するとあの鰻を殺して、御身等の危難の根本を絕たう。然し私には澤山の子供がある。若しか不幸にして溺れ死ぬやうな事もないではないが、その時は親のない子供を宜しく賴む。小さな者共は何の辨へもないのだから、たとへ御身等の作物を食ひ荒すやうな事があつても許してほ

しい。」といふから人々は「よし〳〵山猪に作物を荒されたとて何程の事があらう」とて一々承諾した。

すると山猪はさしもの大水を物ともせずおし渡り、暫く水中に潜ると思ふと忽ち鰻を咬み殺したから、一面に漲つてゐた水が一時にどつと退いて元の山野になつた。併し餘り勢が強かつたものだから、雨滴のやうなものまでもすつかり流れ落ちてしまつて飲み水さへなくなつた。

たつた今まで火がないために苦しんだ人々は、又も飲水に苦しまねばならなかつた。其の時「タブラウ」といふ鳥がゐたが、祖先等は此の鳥に命じて水を汲ませようとすると、「タブラウ」は「水を汲んで來るのは容易な事であるが、我等が粟の穗を啄む事を許して貰ひたい。それを承知してさへ貰へば、たつた今谷を探して良水を汲んで來よう」といふので、祖先等は又、「粟を喰つても瑣細な事だ」と許してやつた。「タブラウ」は喜んで飛び上り早速水を汲んで來た。今でも此の鳥が粟を喰つたり、山猪が時に畑を荒すのは此の時の功績によるもので、人々は少しも咎めない。

そして火は、先きに羌仔がそれを失つた時に、二本の木を摩擦すると火が出るといふ者があつた。その通りにすると果して火が出た。我等はその木を「バウカール」といつてゐる。（火の起原參照）

註　火の起原の條で羌仔か功名をした事になつてゐるが、同じ蕃社でも話者により多少相違もあるし、通譯の傳へやうからも多少の變化は免れない。元來記錄のない事だから、こんな話でも二度とこの通りには聞かれない。まして族や社が違ひ話者を異にすれば殆ど違つた話となる事もないではない。

ツォ族　簡仔霧蕃

阿里山蕃楠仔脚萬社、太古洪水があつて陸地はたゞ新高山の頂を殘すばかりとなつた。其の時「ナノモロイノロゴ」といふ蟹が水中に入つて水を堰き止めてゐる堤を鋏みで切り除つたから、水が退いて山野が現れた。そこで人々は喜びつれて山を下り、先づ甘藷を植ゑつけそれから粟を播いた。

大昔に海水の落ち口が塞がつて大洪水となつた事がある。平地は見渡す限り漫々とした大海となつてしまつて、纔に「カトモアン」山と「タガラウス」山の頂ばかりが殘つてゐたから人々も禽獸も悉く二山に避難した。ところが餘り不意の事で火を携へる事を忘れ不便この上もなかつた。

そこで「タガラウス」山のものはどうかして火を得たいものだと、いろ〳〵工夫してゐた時、丁度蠅が飛んで來て頻りと足を揉んで見せたから、それに眞似て二本の木を擦つて見ると發火した。かくて「タガラウス」山の頂に火が現はれたから、「カトモアン」の者がこれを貰ひうけようとて羌仔を遣し首尾よく目的を達した。

其後間もなく水が退いたが陸地は岩ばかりで耕作する事が出來なかつたから、祖先等は多數の蚯蚓を放つてもとの沃土を得たのである。

パイワン族　タラマカウ社

註　「パリラヤン」社、昔洪水のあつた時、人々は「カトモアン」山と、「パラシダン」山とに逃れた。「カトモアン」に逃れたものを「ラバル」といひ、「パラシダン」に逃れたものを「プツル」といつた。「ラバル」の人は蠅の所作に眞似て二本の木を採み發火せしめた。これ採木法の起りである。その時まだ「プツル」の方には火がなかつたが、「カトモアン」山の頂に煙の昇るのを見、羌仔を遣してそれを貰ひうけた。前話と少し違つてゐる。

マカザヤザヤ社。大洪水の時には「タリモラウ」と「イドレス」の兩山を殘して一面の大海であつた。人々は大急ぎで分れ〳〵に二山に泳ぎついた。「タリモラウ」に逃れた人々は火がないので四方を見渡してゐると、「イドレス」山に火光を認めた。そこで獸類を集めて誰か火を貰つて來ないかといふと、羌仔が現れて使に行かうといふ。そして逆巻く怒濤を泳ぎ切り火繩を角に結びつけて歸つて來た。

其後間もなく水が退いて陸地が現はれたが磊々とした岩石ばかりなので、多數の蚯蚓を放つて沃土を作つた。

マシリジ社。昔大洪水があつたが五日目に水が退いた。其の時水勢が急だつたから今の山谷が出來た。

太古「タウラヤン」といふ所にサパトロクといふ神があつて豚と鷄を飼つてをられた。その頃カピト、アカ、といふ勇猛な二神があつて、或日狩獵に出てサパトロクの家畜を見て欲しがられたが、サパトロクは拒まれた。そこでカピト、アカ二神は海神の力をかり、サパトロク神を亡きものにしようとした。海神は荒神たちの賴みなので快く承諾して、滿月の夜に大海嘯を起し山野を悉く水底に沈めてしまつた。

餘り急だつたので、サパトロク神は女神と昇天せられたが、スラ、ナカヲといふ男女のみ子を此の地に殘された。此の時スラ、ナカヲが臼に乘つて洪水を乘り切り、「ラガサン」に漂着して人類の祖となつた。

數日の後大水が退かうとして北方に傾きどつと流れ落ちたから、山林丘陵悉く流れ去り、跡には坦々とした花蓮港の平野が出來た。（創世神話及蕃社の口碑參照）

アミ族　奇密社

註　太巴塱社。大昔の事、マダピラ、リスンといふ二柱の神が「アラパナパナイ」山に降臨して多くの御子を産まれたうちで、テヤマサンといふ姫神は膚の匂が衣を通すばかりの麗しい方だつたので、海神が懸想して妃に迎へたいと申し込つたが、聽かれないので遂に大海嘯を起したのである。
アミ族南勢蕃社に傳はる話も似よつたものである。それ等は各蕃社の口碑の條にあげてある。
サイセッツ族の洪水傳説では機胴に乘つて逃げた事になつてゐる。それも蕃社の口碑を參照してほしい。

地　震

昔地中にも世界があつて、其の人々が時々地上に來て買物をした。ところが或時地上の人は澤山の蜂を袋に入れて渡した。地中の人はそれを知らずに喜んで家に歸りつくと、朋友親戚などを集めて、「地上からよいものを購つて來た、さあ見せてやらう」と袋の紐を緩めたからたまらない。怒り猛つた蜂が、群れゐる人々の顔といはず、頸といはず螫し廻つた。そこで地下の人々は大いに怒り、皆々柱に手をかけ搖り動かしたから、地上の家屋は悉く倒れ人畜の被害が多かつた。我々の地震といふもの丶起りである。

アミ族　海岸蕃

註　地震
ツォ族阿里山蕃「モトエビ」は「ソツム」といふ牛のやうな獸が地中にあつて體を搖る時に起るのである。
パイワン族、マカザヤザヤ社。昔「パダイン」社に大石があつた。籐を結びつけて其れを引くと必ず地震が起つた。
平埔蕃パゼツヘ族。地震（まらりう）は地下に大きい山猪（はるざく）がゐて時々身軀を動搖する爲めに起るのである。

山　崩

昔からこんな事が傳つてゐる。それは山の頂に登つて地中に鋼鐵を刺し、アケマメヲイといふ神に祈願して其の端を兩手で握り、仰向けさまに後ろに倒れる時は山が自由に崩れるのであると。或時知母勝社と達邦社とが戰端を開いた時、「チモル」社のヤシユクボーユといふ者が其法を行ひ山を崩して敵を惱ました事があつたさうだ。今でも山が時々崩れるのは、昔地主が其の法を行つておいたからである。併しいくら崩れても再び神に祈ると元の形に復するものである

ツォ族　阿里山蕃

豪雨

昔は山地狹く平地が廣つたから、鳥獸の繁殖少く獵場も狹隘で、狩獵に不便が多かつた。それに太陽が照りつけて草木も枯れんばかりなので、或日祖先等は「マストボン」社の下方、北港溪の上流の清淨の地に集り、犧牲をさゝげ神を祀り雨乞をした。すると、一天俄かにかき曇つて篠つく大雨となつた。そして降つて降つて、ふり歇んだ時には、坦々とした平地が一變してしまひ、到る所に谷が穿たれ、山が築かれてゐた。

タイヤル族　白狗蕃

虹

昔、我社の祖先に、ブタナワイといふ偉人があつた。恩威並び行はれたので社人は神のやうに尊敬してゐた。その臨終に際して社人に言ふやう、「俺が死ぬと赤魂となつて天の一方に現はれ汝等を守護しよう」と云ひ終ると間もなく瞑目したが果して大空の彼方に美しいものが橋のやうにかゝつた、それが虹であつた。今我等が虹を吉祥として喜ぶのはかうした事からである。そして虹の現はれる時には必ず一つの音響が聞える、これはブタナワイの歡聲なのである。

タイヤル族　パスコワラン社

註　虹は神橋である。猥りに指示するとき手がおちるとさへいはれてゐる。

昔ネウンといふ娘があつて何處からか赤、黄、紫の絲を盜んで來たから、母はひどく叱りつけた。娘はあまり怖ろしいのでそのまゝ昇天した。すると太陽が、「一體汝は何處から來たか」と尋ねたので、彼女は五本の指を延して、「彼處から」と指すと其場に虹となつて天に懸つた。今でも我等は虹を指示せないのはこんな因由があるからである。

ブヌン族　丹大社

昔ホゾモナといふ女があつて機織が巧みなので、いつも前庭で彩色ある布を織つてゐた。ところが或日急に發病して亡くなつたのでその織布を半途で廢止する事となつ

た。その時偶々雨が降つて來て織り殘しの布を濡したから、彼の女の靈魂がこれを悲しみ、雨が晴れてから之を取り上げ空にかけて乾した。虹は即ち其のぬれた布を乾す樣なので常に雨後に見えるのはこんなわけからである。

パイワン族

風

風は凡て神の所爲(はたらき)である。東風は「バリヒバツ」、西風は「ダルクツヤウ」、南風は「タバカ」、北風は「トエラウ」といふ神々が支配して居られる。

アミ族　海岸蕃

風雨雪

昔ある所で風、雨、雪の三人が集つて力試しをした事がある。其の時風は先づ進んで、「一時に數百の樹木を吹き飛ばすから見てをれ」とて、下腹に力を籠めて吹き出すと天

地は爲めに震動し、石は飛び木は折れ雲は流れ見るも凄まじい有樣であつた。すると次に雨が出て、「自分は風のやうに凄まじくはないが、山をも崩し家をも流すだらう」と俄かに篠つくばかりに降り出したものだから、山は崩れて瀧を懸け、谷は溢れて大河となり洶々滔々と流れるさまは物凄きかぎりであつた。そこで最後に雪が徐ろに進み出で、「成程諸君の腕前は素晴しいものだ、併し我が威力には及ぶまい」といひながら、霏々紛々と降りしきつたので、たつた今まで青々としてゐた草木も悉く枯れ果て、見渡す限り白皚々の銀世界となり、水は氷つて飲む事が出來ず、甘藷も凍(い)て果て食ふべくもない。そして燃える火は忽ち降る雪で消すので、五體凍(こご)えて死ぬものさへある有樣に、さすが傲慢な風雨も雪には一籌を輸さねばならなかつた。

ブヌン族　丹大社

雪

昔我が社にタツシヨカンといふ若者があつた。或時、山に狩獵に行つたが一向に獲

物がなく、がつかりして樹蔭で休息してゐると、春情が頻りに動いたので木で「プーラッ」を摩擦すると精液(くらん)が飛んで大石に當り碎けて白雪となつた。それ以來此の世に雪が降るのである。

（ブヌン族　干卓萬蕃）

雷電

太古祖先が神代を距る事あまり遠くなかつた時代には、火燒島と臺灣との間に橋があつて往來が自由であつた。その頃ロアプイといふ者があつて、或日火燒島から猛犬三匹を連れて來て飼ひ馴らし狩獵に使つたが、獲物が多くて人々が常に羨ましく思つてゐた。中には犬を盜まうなどと企てる者もあつたが、猛々しくて吠え立てられたり、手を咬まれたりして近づく事が出來なかつた。ロアプイも柵を廻らして、犬の出るのを制してゐた。

ところが或日卑南社の人々が捏(こ)ね固めた團子五十個ばかりも竹の皮に包んで携へ、

ロアプイを訪ねて大聲で門を開けよと叫んだ。ロアプイは猛犬に咬まれてはいけないから、用事があるなら外で言はれよといつたが、皆々異口同音に犬が若し咬みつくなら我等は豚小屋の上に逃げよう、ほんの暫くだから門をあけよ。といふので仕方なく門を開いて外に出ると、犬は疾風の如く飛び出し衆に向つて咬みかゝつた。併し彼等は怖れる事なく五十個の團子を雨霰のやうに撒き散した。すると犬は人より團子なので意地穢く食ひつくと粘りついた團子は嚙むに嚙まれず、振り落すにおとされず、口の自由を失つてゐるうちに、トクビシといふ足の捷(はや)いものが、す早く一匹の小犬を褌に包み遂に卑南社に逃げ歸つた。

それから彼は次第に小犬を馴して狩に出た。すると犬は西北に向つて走つて行つたが、暫くして全身づぶ濡れになつて歸つて來た。翌くる日再び出獵すると、又々西北に走り去りやがて濡れしよぼつて歸つて來た。餘り不思議だから三日目には犬に紐をつけ、其の端を持つて山に登り犬について行くと西北に大きな池があつた。そこで急ぎ社に歸り厭勝人ポートツ及びリサの家に行き仔細を話した。

すると翌日二人の厭勝人はトクビシと共にかの大池に赴き、天に向つて咒文を唱へ、堤をトン／＼と踏むと、岸は崩れて水が流れ出した。トクビシは驚いてその水を止めようとしたが、水は非常な勢で溢れてくるので、トクビシは水の前に立つたまゝ一歩一歩退いて行く。水はトクビシの後退りする毎に次第／＼に勢激しく流れ出るので、今は致方がないとてトクビシは水と共に走り、漸く驅けぬけて振りかへると水はちよつと曲つて一方に避けた。トクビシは再び先きになつて駈け出すと、水も亦再び跡を追つて流れて來る。かくて海に近づかうとした所に一婦人が立つてゐる。トクビシは驚いて「早く逃げよ逃げよ」と叫んだが婦人はどうしてよいのか途方にくれてゐるらしい。若し此のまゝ水を流すと婦人は屹度溺れるに違ひない。どうしたものかと思案に餘つたが、早速彼は褌を脱しそれで漸く水を堰き止めたから、水は褌を避けて兩方に分れトクビシと婦人の居た所を島として流れ去つた。

婦人はあゝ嬉しい、危い命が助つたのは全くあなたの咄嗟の氣轉からである。妾の生命はあなたのものだとこゝに二人は夫婦となつた。其後間もなく一人の娘が生れたが、天成の美人だつたので婿にならうとするものが頗る多かつた。その中で娘の意に叶つた若者が選ばれたが哀れ一夜で黄泉に旅立つた。すると今回こそと申し寄る者が更に多いので、母は最も勝れたものを選び出したが、其の婿も亦一夜のうちに不歸の客となつた。母は不思議だと思ひながらも三度目の婿の選擇に氣を揉んでゐた。ところが或日娘は晝寢してタリツプの裾がしどろになつてゐるのを、耻かしとて直さうとすると、白い齒が恐ろしげに玉門の廻りに生え竝んでゐるのを見た。そこで打驚いた母親は日頃の疑問も晴れたが、かゝる娘を持つのは親の耻辱だとて、夫の許を得、娘に因果を含めて、朱塗の箱に入れて海に流した。

娘を入れた箱は浪に漂ひ／＼遂に知本社の海岸に着いた。此の時海岸で薪を拾つてゐた知本社の壯丁二人が見るから美しい箱なので、直ぐ槍でもつて渚に引き上げた。そして早速箱の蓋を開けようとすると、中から女の聲で「此の箱を開けて下さるな、妾は母の憎しみをうけ海に流されたものだから、このまゝで死にたい、どうぞ開けずに又遠い海に流して下さい」といつた。二人はなか／＼許さず早速老蕃等に通知した

から社衆が黒山のやうに集つて來た。何が出るかと手に汗を握つてゐる所へ現はれ出たのは風にも堪へぬ美女だつたから、老蕃等は喜んで携へて來た酒を酌み交し、女にも飮ませた。美人は數日の空腹のところへ強い酒を強ひられたので忽ち前後不覺の眠におちた。すると血氣に逸る壯丁等は物體なしなどいひつゝ老蕃の制止もきかず「タリップ」を〇りあげると、こはいかに白い齒が數本生えてゐた。驚いた老蕃の一人はよい事があるとて砥石を持つて來させ、壯丁に命じて其の齒を磨り減らさせ、茅を取り來りその芯を〇れたが、猶咬み傷があるので、再び磨らせ暫くして又「アバツト」で試みると今は傷の跡もないので、壯丁マリルクといふものに命じて婚はせたが常人と變りない樣子なので頭目クミトキツトといふものが娶つて妻とした。

其後二人の間に三子をあげた。三子の名は傳らないが長男の子、卽ち頭目クミトキットの孫にサロガンといふ者があつた。或日「ブノ」といふ所に遊びカリテンといふ娘を娶り二男一女をあげた。長男はカフラサン、次男をカラブヤイ、娘をモダルといつた。

或日兄弟は妹モダルに命じ洗濯に行かせた。モダルは「ミサラワガイ」といふ所で洗

濯してゐたのだが晝すぎても歸らないので、兄弟が心配してそこに行つてみると、洗濯した衣類ばかりが石の上にあつて妹の姿が見えない。訝しとあたりを尋ねると草叢が薙ぎ倒れてゐるので、それをつけて行くと「カウサン」といふ山の洞穴についた。兄弟は急ぎ家に歸り刀を研ぎすまし、二度三度石を試み石が斫り割かれるやうになつてから彼の山に進んだ。兄カフラサンが先づ棒を取つて洞穴を突くと、恐ろしい大蛇が焔のやうな舌を吐いて二人を飮まうとする。兄弟は物ともせず力を協せて斬り立て／＼遂にずた／＼に斬つて腹部に行くと、かちりと音がした。見れば妹の帶びた腕輪であるから形見にとて袋に納め尚も切つて行くと見る／＼あたりの草木は枯れ果てた。兄弟はかく草木の枯れるのはきつと蛇を殺した天罰に違ひない、今は蕃社にも歸れないとて兄弟は山に入り木の實や草の根を噛んで生活した。

ところが山の上に一蕃社があつて、畑に多くの甘蔗を作つてゐるのを見て、二人は夜に乘じて盜み取らうとて、甘蔗の莖を振ると、「ギユーギユー」と音がする。社人はそれを聞きつけ鼠を追はねばならぬなど獨言してゐた。すると翌日も又同じ音がする

ので、どうも盜賊らしいと氣付いたから、若者達は畑一面に灰を撒いておいた。朝になつてみると明かに人間の足跡が印されてゐるので、今夜こそ盜賊を捕へてやらうと敦圉いてゐた。それとも知らぬ二人は前夜のやうに忍び込むと、若者たちは竹鼓を鳴らして合圖をし、四方から兄弟を取卷いて遂に弟を捕へ直ぐ牢屋に入れた。そして毎日蟲けらや、人糞豚糞などを喰べさせたから弟は見るかげもなく痩せ衰へてゐた。

虎口を脫した兄は捕はれた弟の身を氣遣ひ竹の皮で大凧を造り其の尾に刀をつけ、草の纎維を撚つて凧絲をつくり風のある日に揚げた。山の蕃社の人々は未だ見た事もない怪しいものが飛んで來るので、不思議〳〵と言ひ罵つた。そこで弟はどんなものか自分が見わけるから、暫く牢屋を出して呉れといふから、社人もやつと許してやつた。弟は頻りに凧を見てゐたが、それが次第に下つて手の屆くばかりになつた時、飛び上つて其の尾に縋り天に昇つて行つた。あれよ〳〵と騷いてゐるまに弟は遙かに逃げ去り、落して行つた刀は綿を採つてゐた孕女の腹を刺して殺してしまつた。社衆は地踹踏んで悔しがつたが仕方がなかつた。

弟は首尾よく兄に救はれ手をとつて再會を喜びながら、互に木を伐り枝を集めて小屋を建てゝ暮した。母は兄弟が歸つて來ないので日々山を探し歩いてゐたが、漸く二人が恙く小屋にゐるのを見つけ大喜びでかくと父に告げた。すると父サロガンはそれぢや兄弟を連れて歸らうとて、山の小屋に尋ねて行くと、兄弟は妹が蛇に殺されても一向に氣にも止めず、兄弟が居らなくなつても探さうともせなかた父の冷淡を憎んでゐたところへ、今その父の顏を見ると赫となつて前後の事も覺えず、兄は刀を揮つて斬りつけたから、弟は早速首をあげた。併し落ちついてみると父殺しの大罪を犯した事だから、厭勝をせねば到底天罰を免れないとて、伯父について其の術を聞いたが、其の行爲を憎み敎へようとはせない。そこで二人は止むなく再び山に歸り「カーピン」（木の名）の實を採つて露命を繫いでゐた。ところが偶々其の根を掘ると「カーピン」も枯れ果てたのでいよ〳〵困り「パラコアン」に下り社に出でたが、伯父は勿論何人も厭勝の術を授けて呉れなかつた。そこで二人は身の置き所がないとて、遂に天に昇り兄カフラサンは雷となり、弟カラブヤイは電となつたのである。（蕃社口碑及勇カオ藝參照）

アミ族　馬蘭社

イヌン、イタスといふ兄弟の神は太古から天に在す神である。イヌンの妻をアアルサンといつて天上にも稀な容色なので、獨身の弟イタスはいつしか道ならぬ思ひに焦れ、兄嫁とは知りつゝ時々「タリップ」を引くこともあつたが、兄のイヌンは怒りに堪へかね叱りはするものの、やはり弟の恥辱と思つて今に之を逐はないのである。弟イタスはやはり一旦は斷念しながら、意馬の狂ふに委せて時々狼藉を働き、遂に下界の人にまで耻を曝すやうになつた。我々は「タリップ」からちら〳〵現はれるアアルサンの股を電といひ、その怒聲を雷といふのである。

アミ族　海岸蕃　都歷社

天上に雷神があつて、何か下界によくない事があると、屹度懲しめのために電を遣し、天を割り火を投げて人や家を燒かうとせられる。そしてかの雷鳴は赫怒した雷神の氣

息で稻妻は電の活動である。雷電の余り烈しい時は、犧牲を捧げて祭をするのだが、こんな年は定つたやうに、瓢に龜裂が出來て不作であると祖先から云ひ傳へられてゐる。

タイヤル族　キナジー蕃
シカヤウ蕃

註　雷鳴は天の神が杵で臼を搗くのだともいふ。又雷鳴は天の氣息で地震が地の氣息だともいはれる。

昔或る所に親子三人の家族が棲んでゐた。或る時父子で出獵したが、子は道を失ひ父と離れたから、父はその跡を探し歩いてゐた。ところが子は父より早く家に歸つたから、母は汝一人で歸るとは何事だと嚴しく叱りつけた。子供は悲しげに「いくら父を呼んでも應へがなかつたから」といふと、母は益々怒りどうして父の聲が聞えぬ事があらうかとて、自分で松明を點して外に出で、父を探し出して其の事を告げると、父も非常に立腹し、これでも汝の耳に入らぬかと烈しく怒號した。そして父母は天に昇つて行つて、雷電となつた。稻妻は母の松明であつて、雷鳴は父の聲なのである。

ブヌン族　丹大社

註　パイワン族の卑南社ではアエポアン、ナチナイといふ兄弟があつて、蛇を殺し父を殺し社に歸る事も出來ないので、そのまゝ昇天した。後に兄アエポアンが雷、弟ナチナイが地震となつた。といふので、大體前の馬蘭社の話と似てゐる。（蕃社口碑パイワン族參照）

日月

我が祖先の「チラガサン」といふ山のあたりに住んでゐた頃は、まだ天地が混沌として日月の運行もなかつたので、常闇の世が續いてゐた。人々はこんな恐ろしい世を變じて光明の世界として呉れるものがないかしらと笊に餅などを入れ神に供へては祈願するのであつた。

此の時チマロバロ、タプナといふ男女があつたが、人々の苦惱を見兼ね、我々は天に昇つて此の世を照さうとて、西と東に別れチマロバロは太陽となり、タプナは月となつた。そして日月は最初天上で再會を期してゐたが、太陽が出ると月が隱れ、月が現はれると太陽が沒するといふやうに、今に再會の機會がないのである。

アミ族　馬蘭社

昔日と月とは夫婦であつたが、日は大さう淫奔なので月が嫌つて逃げ去つてしまつた。日は獨寢の寂しさに堪へかねて、「ブロ」といふ細竹がオォと歌ひながら踊る姿が氣が利いてゐるので、夫にしたいものだと降つて行つたが、「ブロ」は如何しても承知しないので詮方なく再び天に歸つた。

月は日と別れてから下界に降り「リダドウ」といつて葉の少い竹と夫婦になつたが、その竹も亦無類の淫婦なので、見るも忌々しく思つたから再び天上に去つた。すると「リダドウ」は月の跡を慕つて天に昇つて行つたが、到頭追つつく事が出來なかつたから、頭を垂れて下界に歸つた。其後月日は二度と會はなかつた。そして哀れな「リダドウ」―又「スイツ」ともいはれる竹―は今でも最初一度は天に向つて伸びてもすぐと頭を垂れてしまふのである。

アミ族　海岸蕃　都歷社

註　日は女性で月が男性となつてゐる。

月中の黑影

遠い昔の事、加禮宛社に一人の美しい娘があつたが、不幸にもいつも繼母に苦しめられて憂き年月を送つてゐた。或日友達と共に貝拾ひに海岸さして出て行つたが、道々何處ともなく臭氣が襲つて來て堪へられないので、誰か放屁したのだらうなど互にいひ罵り、後になり先になりつゝ遂に海岸に着いた。

少女達は嬉々と戲れ貝拾ひに余念もなかつたが、そのうち晝時になつたから、皆々打寄り携へて來た辨當を使はうとした。ところが其の美女の辨當は表面こそ美しい器物だが中には穢(きたな)らしい人糞がうんと入れられてゐたから、先きの臭氣の本源が判り思はずどつと笑つた。併しそれは忽ち憐みの情となり、友人等は大いに憤り「汝の母は何といふ邪見な人なのだらう、屹度我々で復讐しよう。」と敦圉いたが、美女はそれを押し止め「皆樣の御親切は有り難いが、決して妾の母がわるいのではない、皆妾の不肖からである。妾さへ家に居らなければ母も善人となるだらう。妾は今から天に昇つて安樂に暮さうと思ふ、皆さんが五日後に月を見て、若しその中に足を延ばし籠を

傍にして休んでゐるものがあつたなら、それは妾の姿だと思つて下さい」。といふ。友達は「どうしても今一度社に歸つてほしい、よいやうにするから」などいつても娘は一向きかずに、「それは心から嬉しいが、も早決心したから皆さんは妾にかまはず、早く家に歸つて今日の疲れを休めなさい、妾は今宵だけ此の海岸の石の上で休む事とするから、」と早行かうとする。友達も其の情を汲み今は止める術もなく淚にくれつゝ別れ去つた。

この事を聞いた彼女の家族は翌(あ)くる日早々海岸に行つて搜し求めたが、其の影さへ見えないので泣く〳〵家に歸つた。五日目の夜月を望むと果して娘の姿が月中にあり〳〵と見えた。そして今でも社人は月を見ては可憐な少女を偲ぶのである。

アミ族　南勢蕃

昔クヴァラワンの或る者が一人の優しい男子を持つてゐた、殊の外愛撫してゐたが、或る時狩獵のために山に入り不幸にも山蕃(よそらむ)のために殺されてしまつた。父母の悲歎は

實に譬へやうもなかつたが、せめて其の遺骸なりとも永く保存して眺めようとて、之を月中に置いた。今も見る月中の黒影はこれである。

平埔蕃　クヴアラワン族

註　此の話が同族の臺東に移住した「カレオアヌ」の一群により附近の生蕃アミ族に傳へられ、多少筋を變へてゐる。それは、昔「カレオアヌ」に一人の美女があつて、或日のまだうす暗い頃、副食物にする藻を採らうとて溪流に行つたが、山蕃のために殺害せられた。美女に一人の老母があつたが、屍を抱いて悲慟して止まないので、美女の靈魂は「天上に留つて永遠に我が母に對面しよう」とて、鍬や籠の道具を携へたまゝ昇天して月中に入つた。今も月面に見える黒影がそれなので、大きく長いのは彼女が鍬を提げてゐる形、小さいのが其の携へていつた籠である。南勢蕃の繼母の話も大體系統がわかる。

月中の陰影は「パゼツヘ」が犬を伴ひ耕作してゐる有樣である。その小さい方の影はパゼツヘが立つてゐる形で、大きい方の影は大木の下で犬が休みつゝ與へられた食物を喰つてゐる形なのである。

平埔蕃　パゼツヘ族

註　パゼツヘとは今の臺中州豐原、東勢附近にゐた部族の自稱である。

昔から月中に「バチガ」樹があつて二匹の猿が樹上にゐる。サリムヅといふ者がどうかして其の猿を殺さうとて、毎日〳〵斧を揮つて「バチガ」樹を伐つても伐つても、又もとのやうになつて到頭伐り倒す事が出來なかつた。今月中にゐる猿は其の二匹の子孫である。

パイワン族　スクスクス社

星辰

昔イリキッツといふ者の子にウナ　イリキッツ、「サラウイリキッツといふ二人の兄弟があつた。或日父子三人で山に出で木を伐つてゐたが炎熱灼くやうなので、父のイリキッツは大さう咽喉が渇いたからとて二人を河に遣つて水を汲ませた。兄弟は早速溪川に下りたが水が濁つてゐて飲めさうにない。暫く止まつて今に澄むかしらと待つてゐたが、なか〳〵澄まないので、止むを得す空手で立戻つてその旨を告げた。すると父はそれは屹度河上で濁してゐるものがあるに違ひない、疾く行つて見て來いと再び

兄弟を遣つた。二人は河上を隈なく探したが、それらしい影もない、然も依然として濁つてゐるので又々その通りに告げると、父は一向承知せず、いや〳〵きつと誰か河上にゐるに違ひない、若し居つたなら此れで衝き殺せとて槍を渡して三度行かしめた。兄弟は仕方がないので澁々河に出ると、水は以前に增して濁つてゐるので、或は父のいふやうに何者か惡戲をしてゐるのかも知れぬと遽に元氣づき上流に溯ると、果して遙か彼方の叢の蔭から頻りと石を投げ込むものがある。兄弟は怒氣一時に發し早速驅けつけて其の男を殺し、首を携へて元の場所に歸つて見ると父は居らない。或は家にでも歸つたのではなからうかと急いで歸て來た。

子供が不意に首を携へて歸つたので、母は驚いてよく見ると、現在の夫の首なので血相かへて叱責した。兄弟は意外な罪を犯し怖しさに家を飛び出してしまつた。兄弟は故意に父を殺したわけではないから、何時かは母の怒も和ぐに違ひない、若しも我等が數多の馘首をして歸るならば、母も我等の勇氣に感じて罪を許して呉れるに違ひないなど考へてゐた。

かくて山に住居して、日に首狩の練習にばかり沒頭してゐるのであつた。或は坂路に石を轉ばしてその石と迅さを比べ、或は矢を放つては矢よりも捷く驅けようと思ふのであつた。數箇月の後には十分に足を練り腕を鍛へたからとて、いよ〳〵首狩の途に上つた。先づ澤山の鹿を捕へ其の血を膀胱に入れて「カララ」社の南の谷に赴き、そこに羂―「ザガトアドップ」といつて樹の枝を集めて小屋をかけ其の上に石を載せて鹿猪又は熊などを捕へる―を仕掛けた。そして彼の血を盛つた膀胱を携へ、行く〳〵血を零しつゝ「カララ」社に入り、大聲をあげて、「敵が來た、敵が來た、早く出でよ」と叫んだ。社人は聲を聞きつけ、手に手に槍を持つて集つて來たが、見ると地上に血痕斑々とついてゐる。すは敵は負傷したぞとて大勢のものが我れ先きにと追つかけて行つた。兄弟は先に廻り樣子如何にと窺つてゐた。社衆はやがて近づいたが、血痕の夥しく多いのを見て大いに喜び、敵の負傷は重いと見える。も早遠くは遁るまい皆々此の新しい小屋で一休みしようとて、一時にどつと入るや否や、大石忽ち顚落して社衆は悉く壓し殺された。兄弟は雀躍して驅け行き數十の首を斬り取つた。

其の時兄のウナイリキッツはか丶る夥しい首を運ぶのだから堅い棒を選ばねばと、諸所を探し索め漸くに見つけた。その間に弟は少しでもよい首をとて、立派な首ばかりを選りわけ、傍から粗末な木を伐つてそれにかけて運んだ。ところが途中で弟の朸は折れてしまつて用をなさなくなつた。兄のは「タタチュ」鳥の「ラヲラヲ」と鳴いた時に採つた強靱な棒であつたから、やがてそれをも「ラヲラヲ」といつてゐたが、どんなにしても折れない。そこで弟はそれが羨しくて我が取つた美しい首と交換してもよいから一緒に運んで呉れと願ふので、兄弟二人で總ての首を擔ひ意氣揚々と家に歸つて來た。ところが母の怒は如何しても解けないで、やはり親殺しの不幸者と罵るから、兄弟もか程澤山の首を馘つて來ても、母の怒を和げる事の出來ないのは、きつと我等がまだ獨身なので、母の手助けになるものがないからだと思ひ、兄弟は蜜柑を割りその中から婦を得ようとした。かくて兄の割つたものは唯熟したばかりで常の蜜柑であつたが、弟の割つた蜜柑からは年若い美女が現はれた。こんな奇跡を見せた弟は何思つたのか、其の時俄かに刀を帶び、飾をつけ、威儀を正して、「母よ私をよく見て下さい、私は今

から天に昇つて星とならう、あなた方は何時〳〵までも恙なく世を送られよ」、と足踏みすると土は自ら窪み體は次第に地中に隱れ去つた。

其から後で果して天に昇り星となつた。今天空に恰度人が刀を帶びたやうな星がある。それをサラウイリキッツと名付けてゐるが、それは彼の世に在つた時の呼名を記念するものである。

アミ族　奇密社

或る所にソピタイ、サトピウといふ兄弟があつた。或日兄のソピタイが畑に出で丶籾を播いたが、弟のサトピウは後から〳〵その籾をすつかり拾つては食つてしまつた。温厚な兄も腹を立て遂に激しく云ひ爭つた。そこで奸惡なサトピウはそれでは黑白を決せようとて山に行き、兄に向つていふよう、「汝は石を山上から投げよ、俺は麓でそれを受け止めよう、我若し惡ければ必ずその石にうたれて死ぬだらう、そして若しも死なぬ時は汝が麓に下つて我が石をうけてみよ、罪が汝にあるなら汝は必ず死するに

違ひない」。かくて弟は麓に降つたから、兄は山上から弟目がけて大石を投げたが、弟は穴に隠れて之を避けた。そこで兄は麓に降り弟の投げる石を待つてゐると、弟は兄を目がけて石を投げた。兄は穴のある事を知らなかつたから遂に石に中つて死んでしまつた。併しその靈魂は天に昇つて星となつた。

アミ族　馬蘭社

註　同じ馬蘭社でも話者により多少は異つてゐる。

大昔にバマラダワ、リラマイといふ二人兄弟があつた。父はロチといつて附近に知られた獵師であつた。

或る大雨の日に父子三人連れ立つて狩獵に出で、猪を獲らうとてあちこち探したが見當らなかつたから、山上に小屋がけして五六日も住んでゐた。或日父は兄弟に向ひ谷川に行つて水を汲んで來いと命じた。子等は谷に降りて行つたが、その間に父は先き廻りして川を濁しておいた。子等は濁り水で飲めさうにないので、父にその事をいふと、それはきつと誰か上流で濁すものがあるに違ひない、若し人もあらば衝き殺せとて槍を渡した。二人は早速下つて行くと水が澄んでゐたから竹筒に入れて歸つた。翌日は同じく澄んでゐた。三日目に又云ひつかつて川に行くと、恐ろしく濁つて水は赤色に變つてゐる　そこで二人は大いに怒り上流に溯ると一人の大男が頻りに濁してゐるから、早速突き殺して首をあげた。ところが驚いた事にはそれは父だつた。兄弟は悲しみながら家に歸り母に仔細を告げて首を見せた。半面を見た時、まさかと思つてゐたが他の半面を見ると見覺えの黒痣がある、紛れもなく夫ロチの首なので、母は大に怒り罵りながら、蓆を擴げ「この蓆一面に並ぶ程首を馘つて來れば汝等の罪は償へない」といつた。

兄弟はそこで急ぎ山に入り五日間斷食して、先づ鹿を捕り其の膀胱に血を入れ、其れを携へながら山路を辿り、小高い所に小屋を建て屋根に大石を載せて置いた。ところが附近の蕃社のものが、膀胱から漏れた血痕を見て、社友が負傷したのかしらと、それを辿つて行くと山上に瀟洒な小屋があるので、先づ一休みと中に入ると壓し石がおちて、一時に十數人のものが斃れた。兄弟はこれを見て大いに喜び、各々棒を伐り首をかけて運ばうとしたが、弟の棒が折れて役に立たなかつたから、首を手に持ち大急ぎで社に歸つた。婦人等は勇士を見てかけ集り互に手を繋ぎ踊り狂つた　兄は數日の後に漸く歸り着いたが首は腐つて鼻向けならぬ臭氣なので、誰一人近寄るものもなかつた。

兄は耻辱に堪へかね、遂に兄弟不和となり山に行つて勝負を決する事となつた。先づ兄が山上から大石を轉ばして麓にゐる弟を壓し殺さうとすると、弟は穴に隠れて死を免れた。次に弟が代つて大石を落すと兄の方は穴のある事を知らなかつたので、一たまりもなくうち殺された。併しその靈は天に昇り「リラマイ」といふ星となつた。弟は後「アラタウ」山（草の生えぬ山）となつた。

昔カタグリヤン、パクリヤンといふ二人の壯丁が狩獵の歸りに海岸を通ると、渚に漂つてゐる箱があるので、何かしらと思つて携へてゐた槍で引き上げると、中から憎からぬ女が現れたから、そのまゝにするのも本意なく思ひ少し戯れてみると、陰部に恐ろしい齒を持つてゐたから、早速砥石で磨り減らし漸く普通の女とした。ところがお互に自分の妻としようとて爭つてゐる事を聞いた時の頭目シハシハウは、二人を宥め

て己に讓らしめた。

かくてシハシハウは彼女の腹にバサカラ、ルアサヤウ、ラリヘンの三子をあげた。三人の子女は健かに成長して早、妹のラリヘンは溪流に洗濯に出る位となつた。或日の事ラリヘンは兄弟の着物を洗ひに行つたまゝ一向歸つて來ないので、心配して兄弟連立ち探してみると大蛇に呑まれた事がわかつたから、大蛇の穴を探りその現はれるのを待つて、弟は一突きに殺してしまひ、恐るゝ兄を勵ましつゝ刀を以て腹を裂くと、妹の腕環が出たからそれを形見として一旦社に引上げた。併し大蛇を殺したから如何なる祟があるかも知れぬので、先づ吉凶をトはうとて蜥蜴を殺してみたが不明だから、子猿を殺すと、親猿を殺したなら吉であるとの神託を得た。そこで二人は急ざ「スゾル」といふ所にゐた祖母の許に行き、仔細を語り我等は神託を得たがどんな事をすればよいのかと尋ねた、すると祖母は集會所を建てよと敎へた。そこで二人は直ぐ社に歸り社衆に告げていふやう「我等は今から集會所を建てようと思ふから、汝等は今日から五日目にはどんな事があつても屋內から出てはならぬ、若し外出するやうな事があると必

ず殺害せられるから」と堅く戒めて置いた。

さて兄弟は愈々集會所を建てゝ其の五日目に馘首に出かけた。すると遙か彼方から一老人が眞鍮の笠を被つて來る。よき敵と槍を構へて待つてゐたが、よく見ると父である。何故に父がわざ〳〵こんな所に來たのだらう、嗚呼今日は一人の敵さへ逃す事が出來ない日だのに困つた事だ。兄は父だから殺す事は出來ぬといふ。弟は假令父だとて今日は逃すべき日ではない、それは明かに神託違背であると言ひ爭ふうちに、早父が近づいたから弟は矢庭に飛び出して父を殺してしまつたから、兄も今は詮方がないと諦めた。併し現在父を殺したことだから「パリシ」を行はなければならぬとて、再び祖母の許に行き其の術を學ばうとした。ところが祖母は烈火の如く怒り「汝等の如き大不孝、大罪人に何うして其の術を敎へようか」と嚴しく叱られた。

兄弟は今は賴る所もないので、それぢや鳥の聲で吉凶を判じるより仕方がないとて、山に入り「バリット」鳥の啼聲を聽いたが、踊をせよと告げられたから、早速歸社して踊りに踊つて父の靈を慰めた。併しそれからは二人共狂氣となり竊盜ばかりするやう

になつた。

兄弟は或日卑南社に行き甘蔗を盗んだ。社人も最初は山猫の仕業だと思つてゐたが、余り重なるので遂に灰を撒いて警戒したので、弟は捕へられて牢獄に繋がれ日々蟲けらや糞などを食はされてゐた。すると或日天空に爪の唸り聲がする。社人は不思議なものがと大騒ぎをするものだから、弟は我に見せよと乞ひ、外に出る事が出來た。爪は次第に低くなつたから、弟は手を延し其の尾に結び付けられた鈴を取つて撒き散らすと、社人は喜んで其れを拾ふ。かくて三度目に社人等が鈴を拾つてゐる間に、す早く爪の尻尾に取縋り天に昇つた。そして途で爪に結び付けてあつた刀を取つて地上に落すと姙婦の腹を貫いた。

爪は次第に兄の手に手繰られて行つた。そして兄と再會する事が出來たから、腹中から汚物を吐き出しどこか他所に行つて暮さうとすると、兄は「あぢきない世だ、こんな世に長らへる事はつまらない。」とて我と我身に槍をさして自殺した。そこで弟は兄に別れては生甲斐もないとて、早速老母の許に到り暇を乞ひ私は今から東天に昇らうと思ふ、若し東天に雷鳴を聞いたならば降雨である、西空で鳴つたならば旱魃の兆である」、と告げて去つた。それから間もなく「ブルカタワン」といふ星が東天に現はれた。云はずと知れた弟ルアサヤウの化身である。そして我等は今でも此の星を見て陸稲を播くのである。

註 此の話は餘りに屢々擧げた。說話の前後は兎に角、パイワンとアミで多少色彩を異にしてゐるから、やはり有りのまゝに記して見たものの、大體は父殺しの大罪を犯した事から子供が雷電や星や山になるので、何れか一つに纏めて煩を避けた方がよかつたかと思ふ。併し便宜各項を參照されたい。

パイワン族 知本社

粟刈祭は重大な祭の一つなので、この時には遠くへ出歩く事が出來ない掟であつたが、或る時社に六人の若者があつて、其の祭の前から山に行つたまゝ歸つて來なかつた。そのうちに粟刈祭が濟んでしまつたから、彼等は一生涯社に歸ることが出來なくなつた。彼等は今更ながら神罰の恐しさを知り、どうしたものかと板に腰うちかけ考へてゐたが、其の板が自然に高く昇り天に達した。翌日から一種の星が現はれた。それ

を「フクウ」星といふのだが、彼等を天界に運び星としたのはエヤフアヘヲイ神の神業なのである。我々は今此の星の夕方に現はれて朝に隠れる頃ほひに粟播祭を行ふ事になつてゐる。

（ツォ族　阿里山蕃　達邦社）

七　星

昔サンラ、ホガイとて仲睦じい夫婦があつて、ポロといふ男の子さへ擧げ極めて幸福な家庭だつた。ところが夫のサンツはふとした事から病に罹り、ホガイの看護もその效なく黄泉の旅に上つてしまつた。母子二人は悲歎にくれてゐたが心細くも烟を立てる事となつた。初めの間こそ「ミサラシン」(祭)を行ひ泣きぬれてゐたが、去るものは日に疎(うと)しで母は閨(ねや)寂しさにいつしか亡夫の事もうち忘れ、さ迷つて來た牡鹿(をじか)を引き入れ情夫としては一子ポロの目を忍んでゐた。

そのうち母ホガイは懷胎して、遂に人に似て人でない五人の畸形兒を生み落したので、さすがにホガイも世間を憚り、日中は堅く戸を締め夜に入つてから子供等を連れ、畑に耕し川に洗濯をしてゐた。かくて早くも數年が過ぎ去り子供等も大きくなつたから、今は晝でもかまはないとて戸も閉さなかつたから、子等は外に出で丶遊ぶやうになつた。併し鹿の子である事を聞いてから耻しさに堪へかねて、或日六人の兄弟は東を指して出て行つたま丶夕方になつても歸つて來ないので、母は心配して隣家の人に尋ねると、隣人は「その事について報(しら)せようと思つてゐた所だが、實は晝頃汝の子供等が連れ立つて行くから、何處に行くかと聞いて見た。すると彼等は此の世が嫌だから天に昇らうと思ふ、六日の後に天に六星が現れたならば、それが我等兄弟だと知れ、といつて彼等は「ポロポロポロ」と歌ひながら東の方に行つてしまつた」。と語つた。母は此れを聞いて深い悲しみに沈んでゐたが、今は世に頼みもないから子の後を追はうとて、其日鹿の情夫が來たのを幸、「御身の姿をよく見せて下さい」と角を引き我とわが腹を衝(つ)いて斃れた。それからやがて東天に七星が現はれる事になつた。そして今に星の隠れる頃に鹿が頻りと鳴くのはかうした因縁からである。

明星

アミ族　馬蘭社

昔祖先等が北港溪の上流地に住んでゐた頃の事である。ヤバスラーワンといふ女がヤワエグーへといふ壯者(わかもの)と出遭つた　その時女は男を罵つて、「汝はそれでも男か、男なら何故「タウカン」を脊負はないのか、其の姿ではきつと女に違ひない」、と辱しめたので、男は返す言葉もなく顏うち赤らめ、「婦女子にかうも詈られ心外に堪へない。今から天に昇つて星とならう。曉頃東天に現はれて熊を射る者があつたならそれが自分である。我若し眞に女であるならば熊を射止むる事は出來ないだらう。」といつて、何(いづ)れかに立去つた。翌くる朝から天の彼方に一箇の星が現はれ光芒陸離(りくり)として、何物かを射るやうである。曉(あけ)の明星といふのがこれである。女は昨日の暴言を悔い同じく天に昇つて宵(よひ)の明星となつた。そして二星は今に遭ふ事が出來ない。

タイヤル族　北勢蕃

夫婦星

今は昔ヤスといつて高名な獵師があつた。それに兼々美男子だといふ評判さへ高く、極めて幸福な世を送つてゐた。

或時ヤスは山に狩獵に出で終日狩り暮して家に歸つて來たが、顏は恐しく日に燒けてゐた。迎へに出た妻は余りひどい黑さに見わけがつかなくなり、家に歸つてからもとかく我が夫だとは信ぜられずに、遂に同棲する事を拒み、そのまゝ出て行つてしまつた。そこでヤスは「誰でも水を汲んで來て、我が顏を洗ひ清めて吳れるものを改めて妻としよう」といつた。兼て美男子といふ名のあつた男だから多くの婦女は我もわれもと水を汲んで來た。ところが其の中でアマクメルといふ跛者(びつこ)の婦人が麗しい野芋の葉の上に清水を盛つて來たのが何者にも增して殊勝であつた。そして此の清水で顏を洗ふと、さしも黑かつた色が忽ち取れて元の美しい顏となつた。然しながらヤスは彼の女の醜いのを厭ひ、約束を違へて娶らうとはせず、「自分は心の欲するまゝにするばかりだ、もう此の家にも二度と歸るまい。」とて出て行つたから、人々は此の跛女に同情し、

「あれこそおまへの夫だに」といふのでアマクメルは一生懸命にその跡を追つかけた。ヤスは逃れ逃れて遂に天上に昇つた。彼女は追ひに追つたが、跛者の悲しさは夫の足の速さに及ばない、そして今尚絶えず薄情な夫を追つかけてゐるのである。夜に入つて南方に見える二個の星(釣魚翁)は即ちこれで上にあるのが夫、下にあるのが妻である。

平埔蕃　パゼツヘ族

卑南溪

大昔にイマルといふ女があつた。曾て友達から、帶を締めると子を孕む、と聞いてゐたので、竊に帶を締めてゐると果して一男兒を産んだ。その子が成長するに從ひ彌々異彩があつた。或時ラプヤンといふものの家に猛犬がゐる事を聞き、如何にもして其の犬を連れて來たいと思つた。そこで先づ餅を搗いて頭髮にくるみ、それを携へてラプマヤンの家に行き、訪ねて來たから戸を開けよと叫んだ　ところがラプヤンは用事があるなら外で話せ、若し戸をあけて犬に咬まれては氣の毒だと應へた。其の時イマルの子は

ラプヤンを屋外に呼び、彼の側に寄り親しく虱を取りながらいふには、假令犬が咬みついて來ても我に策があるから是非犬を見せて呉れと望まれて、それぢやとて「マダアン」、「ブラアン」、「ラプラプ」の三犬を出した。犬は綱を切られると直ぐイマルの子に咬みつかうとした。そこで彼は早速携へて來た餅を投げたから、犬は其の餅に咬みついた。ところが餅には毛髮が絡んでゐるので齒にからまつて口の自由を失つた。其隙にす早く一匹の子犬を捕へて逃げ一氣に「ブヌ」といふ所まで駈けつけた。

それから家に歸り數日馴して狩獵に連れて行つたが、犬は何處ともなく駈けて行つて、やがて濡れそぼつて歸つて來た。不思議に思つて翌日は犬について行くと「タウ」河の水上に一つの沼があつて鹿が水中を泳いでゐる。そこで犬を放つて追はせたが犬は疲れて及ばなかつたから、種々の厭勝を行つた。すると俄に暴風が起つたから竹紙を飛して占ふと、紙は「ドンボトボル」に落ちた。

イマルの子は竹紙の落ちた處に行き、足でうんと土を踏むと大地が窪んで忽ち水が流れ出た。驚きながら水の後をつけて行くと、初め狩に出る時槍を立てゝ置いた所にい

つて溜つてゐる。そこで彼は社人を集め、此の水を何處に流さうかと尋ねると、社人は皆海に落せといつた。それぢやといひさま槍を引きぬくと水は海に流れ落ちて現今の卑南溪となつた。

パイワン族　呂家社

註　知本社。昔トクビスといふ男があつて「スリヨル」といふ山に行つたが、そこに一匹の犬が居つたのでつれて歸つて飼養した。其後間もなく犬を連れて出獵したが、犬は何處ともなく駈けて行つたと思ふとやがてずぶ濡れとなつて歸つて來た。翌日は犬について行つてみると大きな池があつた。トクビスは池の堤に立ち呪文を唱へて「トントン」と地を踏むと岸が崩れ水が溢れ出た。卑南溪はその水の流れた跡である。

大武山と霧頭山

昔大武山と「チョラパラパラエ」（霧頭山）とは兄弟で、大武山の方が少し低かつた。或時大武山は霧頭山に向ひ、「兄よ少し低くなつてみないか」といふと、彼も餘り高いのは不便だと思つてゐた所なので、弟の言を聞くと、點頭（うなづ）きながらする〳〵と低くなつた。ところが弟はそれを見て喜び、今だ兄より高くなるのはと、又する〳〵と高くなつた。それで今では大武山の方が高いのである。

パイワン族　マシリジ社

山

昔トコとプラルガン夫婦の間にクリリ、プラルヤンといふ二子があつた。ところが母は同じ子供の中でも兄のクリリを嫌ひ常に邪魔ものにしてゐた。或日兄弟は社人と共に狩獵に出たが、母は兄の辨當には頭髮を入れ、弟には肉を入れて置いた。二人は山で辨當を開いたが、兄のものは食べられないものなので、彼は悲痛な面持（おももち）で、「自分はいつまでも母に虐められずに此のまゝ此處にゐたい」とて山となつてしまつた。弟もそれを見て、自分ばかり家に歸れないとて、同じく山となつて止つた。父は子供等が歸らないのを案じ、いろ〳〵探し求めて山に登つたが、風雨烈しくて進む事が出來なかつた。

パイワン族　マカザヤザヤ社

平地

昔は平地がなく山の麓は直ぐ海になつてゐたから、人々は歩行に困難だとて或日海岸に酒を供へ呪文を唱へて巻いた蓆を投げた。するとその蓆が海中に入つてから開いては巻き、巻いては開きしてゐるうちに、次第に斷崖を缺き取つて平地となつた。

パイワン族　カスボカン社

植物に關するもの

靈樹

昔、四人の若者が中央山脈あたりに出草し、首尾よく馘首しての歸途、或る大樹の下に憩うた、この樹は幾千年の星霜を經たものと見え、亭々たる樹幹が雲居につき入るやうであつた。そして其半面は木質であるが半面は堅い石に化つてゐた。やがて一人は血氣にまかせ一刀ひきぬいて其樹に斬りつけたと思ふと、驚いた事にはそこに置いて

あつた首が俄かに唸り出し、爛々とした眼を開きはつたと四人を睨みつけ、「我は汝等を怖るゝ事は毛頭ないが此の大樹が恐ろしいのだ」、といふや否や、忽ち大暴風が吹き起つて二人は其場を去らず死亡し、一人は啞者となり、其時まで一言も發せず落ちつき拂つてゐた一人だけが漸く無事に歸社する事が出來た。大樹の怒りにふれたのである。今に巨木の下を通過する時には無言なのは此に因るのである。

タイヤル族　萬大社

註　霧社の東方に聳える秀麗な二山、北を奇萊主山（一一六九五尺）、南を能高山（一〇七三二尺）といふが、昔この邊りに「パーラォ」といふ山があり、その頂に靈樹があつた。そして何か不淨や無禮な事をすると俄かに大風吹き起り、必ず災妖があつたといひ傳へられる。即ち次の話などもそれである。

サゼク族　霧社蕃

或時夫婦連れで旅をしてゐたが、日が暮れたから或る大木の下に憩うた。その時「フクイル」といふ麻を紡いて巻いたものを側に置いたが、夜中になつて何處にか見失つてしまつた。そこで二人は松明を點して大探ししたがどうしても見當らない。男は大

いに怒り、「きつと此の木の精の仕業に違ひない」とて、刀を拔いて斬りつけた。ところが俄に大風吹き起り天地も鳴動して、恐しとも恐ろしい光景であつた。それ以來此の樹の傍を通るものは聲さへ發するものがない。若しも聲を立てゝ何か木精の怒りにふれると暴風雨のためにひどい目に遭つたといふ事である。そして今に大樹の下を通る時は決してものを言はないのである。

サゼク族　霧社蕃

木精（ひつのすべう）

昔我が社に二人兄弟があつた。或日弟が「スベウ」といふ樹の下で休んでゐたがやがて死んでしまつた。そこで兄は非常に怒つて其の樹を伐りにかゝつたが、恐しい太い樹だから中々容易に伐り倒す事が出來なかつた。併し弟の仇だといふので終日かゝつてせつせと伐つたから、あと一刀ばかりとなつた。そこで大いに勇んで最後の一刀を加へると其の樹は大きな響を立てゝ對岸に飛んで行つた。

今その樹は化石となつてゐるがその所に行くとやはり人のやうな聲が聞えて來る。これは「ヒツノスベウ」（樹靈）の所爲である。

ツォ族　流々柴社

茄苳の血

昔草山の番人が二人づれで狩獵に出で、獲物について言ひ爭つたが、一人は怒りにまかせて他を射殺した。ところがそれを見てゐた女共は怖ぢ恐れて皆茄苳樹（かたん）の中に入つて隱れた。今でも茄苳の樹を伐る（き）と血の出るのはその爲めである。

パイワン族　カスボカン社

榕樹の根

昔、海中に大きな榕樹があつて其の根が四方に蔓（はびこ）つてゐた。或る時プチャジャン、パロブアル、リクリクの三人が他國に行かうとしたが船がなかつた。それでいろ〳〵

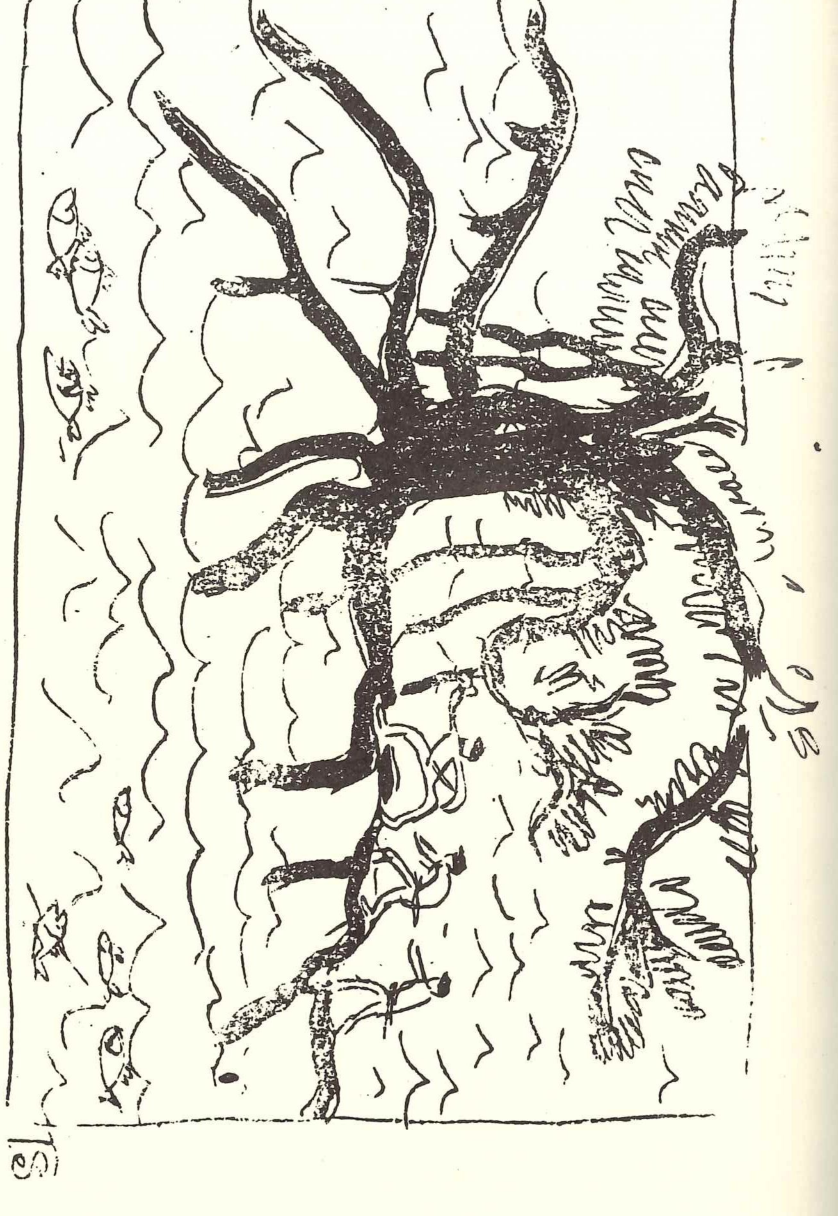
惱んでゐたが、丁度榕樹の根がよい具合に延びてゐるので、それを渡つて目的地に達する事が出來た。ところが間もなく臺東のチャオルンといふものが同じくその根を傳つて他國に渡つたが、そこで一人の女を得たので急いで社に歸り、其の根を伐つてしまつたから、その珍らしい榕樹はなくなつた。

パイワン族　カスボカン社

大樹

太古、人々は地中から穀物を得たものである。或日一人の姙婦がいつものやうに地中に入つて穀物を携へて歸つたが、今や地上に出ようとする時、俄かに土が崩れて下半身を埋めた。そしてどんなに踠いても踠いても出る事が出來なくなつた。それで例へ人が通つても姙婦なので觸れるのを忌み、誰一人として近寄らうはせなかつた。哀れな女は到頭そのまゝ死んでしまつて大きな一本の木となつた。

パイワン族　スパイワン社



檳榔とビラ

アミ族　巫老僧蕃

昔或る所に一人の男の「チカワサイ」があつて、夫のある女「チカワサイ」に「パサエサイ」の秘傳を敎へたのが縁となり互に不義を働くやうになつた。いつも夫が畑に耕作に出てしまふと、女「チカワサイ」は用事にかこつけて外出し、時としては夜に入つても歸らない事もあつた。

初の程は男も氣に留めなかつたが、餘り再々なので不思議に思ひ、或日ふと男「チカワサイ」の家に行つた。すると密通の證據が歴然としてゐたから、夫は烈火の如く怒り、早速二人を庭へ引きずり出し、散々に打擲して腰もたゝぬ位懲した。女「チカワサイ」も悔悟の念が荐りに起り、夫に合せる顏がないとて其の儘檳榔になつてしまつた。男「チカワサイ」も面目なくて「ビラ」になつたが、やはり女が思ひ切れなくて、そのまま檳榔樹にからまつた。

註　南勢蕃社では次のやうである。

或る所に仲の惡い夫婦があつた。日毎夜毎、瑣細な事から喧嘩を始め隣人に迷惑をかけた。こんな家庭だつたから、妻はいつしか夫の目を盜み仇し男を引き入れるやうになつた。ところが或日それが露顯しひどく叱責されたから、今更ながら面目なく、一そ死んでしまひたいとて、或日姦夫と共に自殺して果てた。
其れから間もなく二人の墓場から異樣の植物が二つ生ひ出でた。一は直立して高く天に聳え、時が來ると實を結び、一は蔓草で絕えず其の樹に絡みついて離れる事がない。人々は不思議に思つてゐたが、或物好きな男が、此の樹の實を採り蔓草の葉に包んで嚙んでみると、始めは澁かつたが次第に甘味が出て心地よくなつたから、社人にも勸めると、人々は喜んでこれを嚙む事となつた。これが檳榔と「ビラ」であつた。

昔美しい少女があつた。父母は掌中の玉と晢くの間も側離さず愛育してゐたが、輝く麗容が隱れない事とて、遂にマラタウ神の心を動かしたのか、未だ處女の中から迎へられて天宮に昇つた。
兩親は日夜悲嘆にくれてゐたが二ケ月後に、彼女の遺骸ばかりを斂めておいた墓上から檳榔樹が生え、裾の邊に「ビラ」が生えた。母は珍らしい草が生えたものだとて「ビラ」の葉を取つて嚙んだが少しく辛い味がある。檳榔樹には又澤山の實が成つてゐたから、この實はどうかしらと思つて嚙んでみると、口も歪む位澁かつたから腹立たしくて、何氣なく傍にあつた石を拾つて投げつけた。するとその石が碎けて粉となつたから、不思議に思つて更に三つの物を一緒に固めて再び嚙むと、初のうちは澁かつたが追々澁味がとれて甘くなり、何ともいへぬ爽快を覺えた。そこでこれはよいとて人にも勸めたが、忽ちに其の風習が全社に弘まり、今では唯一の嗜好物となつた。その時の石の粉といふのは今の石灰であつたさうだ。

アミ族　馬太鞍社

註　奇密社、昔至つて仲のよい夫婦があつた。ところが妻はふとした事から病に罹り遂に黃泉の客となつた。その臨終の時「妾の墓から檳榔の木が生えるだらう、其の實を採つて嚼まれよ、憂ひも忘れ果てようから」といひ置いた。つまり夫を慰めるために妻が死後檳榔となつたのである。
彼等はいふ、檳榔樹の結實の初期は其の形宛ら女陰のやうだから女の化身だと思ふのである。又檳榔は女とすると「ビラ」は男であらう、そして石灰は其の淫水だらう。それから糯粟は眉毛の變化したものだと。
パイワン族大竹高社、昔或る所に檳榔樹があつたが、それに葛がぐる〳〵卷き絡んでゐた。不思議だといふので、その實を取り葛の葉にくるんで嚼むと赤い汁が出た。檳榔と葛とは恐らく夫婦なのだらう。

榛榔子

或所に懶惰な少年があつて、少しも父母の言ひつけにも從はず年が年中遊んでばか

りゐた。兩親もそれを憂ひ時々叱つたり訓へたりしてゐたが、馬耳東風と聞き流して、いよ〳〵非行が增長するばかりであつた。そこで村の人々からも憎まれて放逐せられる事となつた。少年は餘儀なく村は出たものゝ今更行くに處もなく、空しく曠野をさ迷つてゐるうちにそこに坐つたまゝ餓死してしまつた。ところが其の死骸の頭上から一株の植物が生えた。それが卽ち榛榔子(ラパラブ)なのである。

平埔蕃　パゼッヘ族

註　檳榔と榛榔とは違ふ。榛榔は同じ棕櫚科でも「アレカ」屬で、ヤミ族などでは「ボアツク」といひ新芽は食用にし實を嗜好品として噛む。榛榔子は「そでつじゆろ」又は「こんろん」といひ、パイワン族では「ハニボン」といつてゐる「コンロン」屬の植物である。果實及び新芽は食用にするが葉と樹幹が違ひ、檳榔の方が草丈が高い。

松

昔一人の少年があつた。天性怜悧だつたが、不幸にも幼時に生母を失ひ繼母の手で養育せられてゐた。ところが繼母は至つて邪見な女で此の子供を愛する事なく、子供が如何に出精して働いても、少しも喜んで呉れぬばかりか、虐待は日に烈しくなつて

來た。そこで子供はも早堪へかねて最後の決心をした。「此のやうに腑甲斐ない生活をしてゐては社衆にも面目がない、どこか他處に行つて立派に自立しよう」とて遂に去つて山中に入り松の木となつた。

そこで今でも松といふ語は「健氣な男」といふ言葉と同じ意味に用ひられてゐる。

平埔蕃　パゼッヘ族

山芭蕉

昔サウラルャンといふ男があつた。妻が男兒を產んだ時は育てるが、女兒の時は悉く殺した。或る時妻は夫の出獵した留守中に一人の女兒を分娩した。そこで夫に隱して竊かに育てゝゐた。かくて娘が成人した時、或日盛裝さして父の許に晝飯を運ばせた。ところがサウラルャンは娘が來たのを見て、水を汲んで來いと命じた。娘は川に降つて行つたが一滴も水がない。仕方がないので其のやうに答へると、父は承知せないで、水は乾度ある筈だ、再び行つて汲んで來いと命ぜられて、娘は又も河に降つて

來たがやはり水はない。このまゝで父の所へ歸ると必ず殺されるに違ひないと思つて遂にそのまま山芭蕉となつた。

いくら待つても娘が歸つて來ないから、母は心配して夫に尋ねると、夫は知らぬと答へた。そこで母は狂氣のやうになつて娘の跡を探し廻り谷間に降つて行くと、一本の芭蕉があつて其の側に紛れもない娘の晴衣があつたから、きつと娘の化身なのだらうと思ひ自分も芭蕉となつて其處に止まつた。さすがのサウラルヤンも妻まで歸つて來ないのが氣になるので、探し〳〵て谷間に行くと二本の芭蕉がある。或は妻と娘の化身でないかと思ひ、刀を揮つて斬ると二本とも「トゥーン」と音して倒れてしまつた。

パイワン族　スクスク社

甘藷

昔人が死んだ時葛の蔓で屍を括つて埋めたが、其の後間もなく異樣な蔓草が生えたから掘つて見ると甘藷が出來てゐた。食べてみると甚だ甘い。それから廣く甘藷を植

ゑるやうになつた。つまり甘藷は葛の根から出來たものである。

ブヌン族　丹大社

祖先等が「タバラン」にゐた頃は、甘藷を木の根の下に植ゑて、其の蔓を木に匍はせたものだから甘藷は殖える事がなかつたが、或年一度木に攀ぢ登つた蔓が再び降つて來て地中に入つたのを見て不思議に思ひ、翌くる年から地上に蔓を匍はせてみると、蔓は地に入り、次第に藷をつけ非常に多くの收穫があつた。それ以來は蔓を地上にばかり匍はせるやうになつた。

パイワン族　パリラヤン社

カツメ草

昔マッロ、カシサ、カツメの三人兄弟があつた。或日いつものやうに三人で遊んでゐたが、兄のマッロは小弟カツメに向ひ「汝は粟になる事が出來るか」と問ふと、弟は

「出來る」といふ。すると兄は、「汝は小柄だから粟となる事はむづかしからう」と云つたが、カシサもその尻から、「さうだ汝は目が小さいから到底駄目だ」とからかつたので、カツメは大いに怒り、要らぬお世話だといひさま兄の足を引つぱつた。今もカツメ草は横へ横へと生え延びて、マツロやカシサのやうにまつ直ぐに成長する草の足を引くのである。

粟の王將

ブヌン族　丹大社

昔、一匹の鼠が粟を携へて來たので、祖先はそれを一尺四方の地に播いたがやがて穗に出で實を結んだ。其頃は一粒でよく數人を養ひ得たといはれてゐる。そんな邈か な時代から今に至るまで、粟畑には必ず王將がある。それを「ヌバコ」といつてゐるが、普通の穗よりか稍々丸味を帶び長い毛の生えた形の大きなものである。出穗の遲い粟にはこの王將が早く出よと命ずる。そして晴天打續き粟の穗が出揃ひ黃熟すると、早く

刈り取り穀倉に入れよと人に告げる。我等の收穫は、一にこの王將の命令によつて定るのである。そして王將を他粟と離すと翌年は不作である。

（蕃社口碑及五穀の由來參照）

註　大昔は粟が熟すると、王將に率ゐられて、粟が一人でに穀倉に納つたのだが、惡戲者のおかげで其事が止んだのである。

タイヤル族　汶水蕃、ガオガン蕃、カラパイ蕃、

粟

ブヌン族　イバホ社

粟を精げるには最初は手で揉んでゐたが、後に木を刳り凹みをつけ臼を拵へてその中で搗く事となつた。昔はたゞ一粒の粟で數人の家族一日の食糧には足りたのだが、或る時零れ粟が石垣に入り鼠となつてから殖えなくなつた。

註　粟搗は妙齡の處女の仕事である。若しか蕃社に一泊して初更の頃ひに「ポコポコポン、ポコポコポコポン、ポコポコポン、ポコポンポコポコポン」と拍子面白く響き渡るのを聞くとどれ位床しい事だらう。それは處女等が粟や籾を搗く杵の音なのである。青年等はそれを合圖に群つて來て、杵の上下するのを見てゐる。若し意に適つた女があると進んで手助けをするのは、丁度京阪地方の片田舍の麥搗き時のやうであ

ろ。併し蕃社では若い男女の交際は淸いもので、假令公衆面前で相擁して踊る程の情人同志でも結婚以前には決して情交はせない。

或る時天から粟が降つて來たが、人々はまだ何か知らなかつたから、それを三粒ほど拾つて炊いてみた。すると俄かに膨れて室内に滿ち溢れて人の居る所さへない位であつた。それからは一粒を半截して煮るやうになつた。たつた一粒、半粒でも、優に數人の家族が一日の量に餘つた位だから、長い旅や狩獵に出る時でも僅か數粒を爪の間に入れて行けばよいのであつた。ところがある時、姙婦がどうした機みか、沸騰した湯の中に一時に多くの粟を入れたものだから、粟は非常な勢で膨脹して彼女は一たまりもなく壓し潰された。併しこの事があつて以來粟は殖えなくなつてしまつた。

パイワン族　牡丹路社、大竹高社
アッダス社、マシリッ社
スパイワン社

註　スパイワン社では一時に多く炊いて粟を怒らしたのはサラムチといふ者だといつてゐる。タイヤル族などの傳へも大體同じ。

動物に關するもの

シレク

昔、海岸に「ピンノフスバヤン」といふ所があつた。そこに苔蒸した一つの巨石があつた。或日鳥と「シレク」鳥とが、其の上に飛んで來て談るには、「若しも我等のうちで此の石を動かすことの出來るものは神通力を得て、如何なる事でも知ることが出來やう」とて、鳥が先づ動かさうとしたが微動さへしなかつた。次に「シレク」が石を蹴るとさしもの大石が輕々と動いたから、邊りに見て居た人々は大いに驚き、きつと神の使に違ひないとて譽め稱へた。その時「シレク」は人々に向つて、「今後汝等は我が啼聲によつて吉凶を判じるやうにせよ。我れ若し汝等の右方で一聲高く啼き、其聲の聞き難いほど遠い距離から再び左で鳴き、更に右に轉つて鳴くやうな時は大吉である。こんな時はその後如何なる聲を聞いても、凡て吉で從つて獲物も多い。右又は左ばかりで啼く時は凶である。そして汝等の道を橫切つた時は、狩獵は勿論どんな事でも思ひ

止らねばならない。強いてそれを犯すやうなものは必ず變死するだらう。決して疑つてはならぬ。」といひ終つてから天空遙かに飛び去つた。「シレク」の靈鳥となつたのはこの時からである。

タイヤル族　マリコワン蕃、ガオガン蕃
大嵙崁蕃

註　南澳蕃、昔「ハプンコーロ」といふ所に一巨巖があつた。チヤーコン（烏）と「シレク」が石中に人の居る事を知つてどうかして石を割らうとした。初め鳥がいろ〳〵試みたが駄目だつた。ところが「シレク」が容易く轉し落すと忽ち石が二つにわれて中から男女二人が現はれ出た。これが我等の祖先である。（蕃社口碑參照）

北勢、白狗、眉原、汶水、パスコワラン、キナジー諸蕃、昔ある所の懸崖に巨石があつた。烏と「シシリー」「チヤチヤス」などが集つて力試しをしたが、烏も「チヤチヤス」も動かす事が出來なかつた。ところが「シシリー」が進み寄り足をかけるかと思ふと、忽ち轟然たる大音響と共にさしもの大石が谿底に轉び落ちた。それから「シシリー」は鳥類の王と崇められ、人々もその啼聲によつて吉凶を判ずる事となつた。以前は「ケウラ」（鷲）の啼聲で吉凶を卜した事もあつたが、ある時「ケウラ」の吉聲を得たのに一時に五人も死亡者が出た。ところが、「シシリー」の啼聲によつてからはこんな事は少しもなくなつた。「シシリー」は未明から美しい聲で囀る鳥である。

溪頭蕃、昔鳥類が或る巨石の前に集つて、此の石をさゝげて太陽に投げつけるものは我等の王とし其聲で吉凶を判ずる事としようと議した。烏や「セツピリ」「チツピチツピ」などが交る〳〵捧げようと焦慮つたが少しも上らなかつた。最後に「シレク」が笑ひながらその石をさし上げ難なく太陽に投げつけたので、鳥類は畏れて其の麾下となつた「シレク」は神通力を得た鳥である。

サゼク族トロク蕃、「ザード」社を距る十町許の所に二箇の大石がある。此の石は昔櫻が峰に在つたので、誰一人此處に運ぶものがなかつたが、或時「テヤコン」といふ鳥が其の石を運ばうとして足をかけて少しは動かしたが、過つて片足を壓し潰されたから斷念した。そこで「ポコピツク」鳥が代つて動かさうとして嘴と足とを潰され、鮮血がぼた〳〵おちて身體は血染となつた。今此の鳥の嘴と足の赤いのはこれがためであるし、「テヤコン」が片足で歩くのも此の時跛者になつたからである。

この時まで默つて見てゐた「シシリー」鳥は、我こそ首尾よく運んで見せようとて足をかけると、さしも重さうな巨石もまるで蜜柑のやうに輕々と今の所に運び去られた。人々は驚いて其名を問ふと、「我は鳥だ」と答へるばかりである。それぢやとて其の鳥を「シシリー」と名づけた。「シシリー」は飛び去らうとする時「汝等獵に出る時は必ず我が聲を聽いてからにせよ、吉聲でない時に出かけても決して獲物はないから」といつた。今に我等はシシリーの吉聲によつて出獵するのである。

ザゼク族、內太魯閣蕃、或所に大きな石があつた。或る時數多の鳥類がその石の上に集つて遊び戲れてゐたところ、或鳥が「若しも此の石を動かすものがあるなら我等の王としよう」といつたので力くらべとなつた。諸鳥は思ひ〳〵に試みたが大抵は動きもしない。偶々「カポジ」鳥と「ボーシ」鳥がほんの少しばかり動かしたばかりである。其の時「シッシリー」はつと側によつて一蹴り蹴ると、さしもの大石が見事谷間に轉げ落ちた。そ

れ以來「シッシリー」は鳥類の王と尊ばれるやうになつた。

「シッシリー」が天に昇らうとした時に、「汝等今後我が啼聲をきいて吉凶を卜へ、必ず効果があらうから」といつた。それからといふものは狩獵や出草は勿論、何事でも先づ此の鳥の啼聲で吉凶を判じて後實行するやうになつた。

外太魯閣蕃では烏と「シッシリ」との二羽が力を比べた事となつてゐる。

ブヌン族巒蕃、昔或る谷間に一つの巨石があつたのを見た、「クンクン」、「モモ」「テクラッ」、「ブナイ」、「リナス」、「アハク」「テーシユ」などの諸鳥が集つて來て力を協せ、それを「アザングトロ」に運びあげようとした。併し石が重いので諸鳥はそれ〴〵「チヨホチヨホ」、「ウウ」、「テクテスア」、「ウムウム」、「ヒチユツクヒチユツク」、「アオアウ」、「テツシユテツシユ」などと叫んで引いた。其の時「モモ」、「クンクン」「テーシユ」の三鳥は尻を土につけて力んだから、尾がぬけてしまつて、今に此等の鳥には尾がないのである。

ブヌン族・干卓萬蕃、昔「カラム」といふ鳥が人々に向つて「汝等は我が聲に注意して出發せよ、若しか凶聲に出發すると獲物はなくて思はぬ負傷者が出るだらう」といつた。併し祖先等は別に氣にもかけなかつたが、或日二人の男が山に行つて俄かに死んでしまつた事があり、それから間もなく又蛇に咬まれて死んだものもあつたから、不思議だといふので調べてみると、何れも皆「カラム」の凶聲を抑して出たのだといふ事がわかつた。

それ以來人々は大いに怖れ「カラム」を靈鳥として尊び、必ずその啼聲によつて吉凶を卜するやうになつた。

サゼク族の話もブヌン族の話も大體はタイヤルと關聯してゐる。

昔人は皆頭で逆立つて歩いてゐた。或時「チヤコンク」(鳥)と「シシレク」が大きな石の上で會した事があつて丁度此の話が出た。「何うだあの人間の不様な歩き振りは、一つ直してやらうではないか」とて鳥が大聲で啼いて見たが、やはり人々は相も變らず逆立である。そこで「シシレク」が更に一聲高く啼き出すと今まで上つてゐた巨巖が自づと轉り出し轟然とした音響を立つた。機みを食つた人々の身體が顚倒するよ見るとしつかと兩脚で立つてゐた。それから人間は足で歩き始めた。今「シシレク」の啼聲で吉凶をトするのは其德と威力とによるのである。

タイヤル族　カラパイ蕃

註　シレクはシシレク、シイレク、シレ、シーレー、シシリ、セーセリ、などと蕃社によつて異つた發音をしてゐる。漢名蕃藭といひ、燕雀目知目鳥科（Timeliie）の小鳥で臺灣特有である。高山の森林に棲み目白のやうな羽毛を持つてゐる。占鳥といふ義は明白である。カラム鳥も同じものらしい。

カイツピチ鳥

昔祖先等が海を渡つて臺灣についた時は、まだ平地といふものがなく、海中には唯、今の山々の頂がぽつり〳〵出てゐたばかりであつた。人々は直ちに山に登り先づ「カイ

ツピチ」鳥を遣して對岸から火を持つて來さした。この鳥はこんな功績があるので今に諸人に愛せられてゐる。

その後祖先等は「カイツルン」樹を採んで發火法を知つたのである。（火の起原條下參照）

プヌン族　干卓萬蕃

註　郡蕃バハフル社、太古洪水のあつた時、蕃人は新高山に逃れたが、俄かの事で火を失つたから、蛙をやつて探さした。すると蛙はどこからか火を得て頭に戴せて歸つたが、今少しといふ所で水に潛つたから折角の火が消えてしまつた。そこで今度は「ハイシップ」鳥を遣すと彼は首尾よく火を喙に含んで來てくれた。今にこの鳥を殺さないのはかうした因縁があるからである。

トウトウノ鳥

「トウトウノ」といふ鳥は他鳥の巣を覘ひ、數多の鶵の中から唯一羽だけを取つて自分の子とするものである。時々蕃社などに來て惡戲を始めると蕃人は直ぐ空腹を覺える。兎に角不思議な鳥である。

ツォ族　阿里山蕃

ピヂツ

古昔粟の小穗があると七八口の家族がよく數箇月を支へ得たもので、旅行くものでも僅かに數粒を耳飾の竹管に入れてさへ置けば食糧に窮するやうな事はなかつた。だから半粒又は一粒でも優に鍋（きやわん）を滿たすに足りたのである。ところが或日一人の怠け者が數日分の飯を炊かうとて多くの粟を入れて煮ると、忽ち「キャワン」は微塵に碎け粟は化して小鳥となつた。そしていふやう「一時に數日の食を得ようとするのは愚（ぐ）の極みである、汝等のやうな痴者は今後終歳耕作せねば一粒の粟も得られない。然もその粟の實る頃には屹度飛んで來て啄んでやらう」とて飛び去つた。ピヂツといふ鳥はこれである。それからは粟を炊いても增える事もなく、折角實つたと思ふとピヂツが散（さん）々に損ね、一年豐作だと、必ず翌年は凶作なのである。

タイヤル族　眉原蕃　ガンガン蕃　マリコワン蕃
北勢蕃　パスコワラン蕃　白狗蕃
渓頭蕃　キナジー蕃　サラマオ蕃

昔或男が一粒の粟を鍋に入れて炊いてゐたが、丁度その所へ一人の惡戲ものが訪ねて來て、澤山の粟を掴んでそつと鍋に入れたから、粟は膨れて鍋を割り、小鳥となつて飛び去つた。それが今のピヂッ鳥である。

タイヤル族　大嵙崁蕃

註　北勢蕃　昔或る老婦が粟を炊ぎ誤つて鍋を取り墮したので、その時零れ出た粟が忽ち「パエット」といふ小鳥となつてしまつた。今粟や陸稻の熟する頃、この鳥が飛んで來て穗を啄むのは祖先が穀物を粗末にしたからである。

タイヤル族　大湖蕃

昔ある所で、枯草の中に人のゐることを知らずに火をかけると、其者は「パゼッ」鳥となり啼きながら飛び去つた。

註　粟が化してなつた鳥の名は、「ピヂッ」「パゼッ」「パリッ」「パエッツ」、「ピシキリオン」、「ケンテクツイ」「コッコ」などと呼ばれるが、大抵同語源であるか同物異名である。今の雀をさしてゐるのは明かだらう。萬大蕃では黍が化したのだとなつてゐる。サゼク族ではポロッといつてゐる。

サゼク族內太魯閣蕃、トロック蕃、太古は多くの粟を植ゑることなく、人々は僅に一本の粟を栽培して、

二三寸に延びた頃莖に繩を結びつけてゆり動かした。すると粟はずん〳〵大きくなつた。かうして熟した粟をとつて來て、一粒、半粒づゝ煮たものである。だから一穗があると數人の家族を樂に一ヶ年は養へた位だから、旅行でも狩獵でも僅かな粟を耳飾の竹管に入れておきさへすればよかつた。

ところが或時五六人のものが集つて粟を煮いてゐたが、やがて粟はピーピーと音して沸騰した。其の時或者は最早煮えたから鍋を下さうといひ、或者はまだだと言ひ爭つたので、一人は飯匙をもつて粟を掻き混ぜたから粟は忽ち變じて小鳥となつて飛び出した。そして「汝等は飯を炊きながら口論するやうな馬鹿者だから、今後は骨折つて耕作して鳥を追はねば粟も黍も與へない」といつた。この鳥をポロッといつてゐる、こんな事があつてから、粟は少しも增えなくなつたし、折角熟したと思ふとこの鳥が群り集つて喰ひ荒すのである。

霧社蕃では「ポルツ」と發音する、そして「ポルツ」の害があまりひどいので、社人は神に祈願して「ポルツ」を逐ふ厭勝の法を授けられたといつてゐる。

それから此の社でも太魯閣でも木瓜蕃でもやはり痴者が一度に多くの粟を煮たからだといふのだが、大體タイヤル族と同じである。

ラリヤバン鳥

昔或る者が粟を一時に多く炊いたから、粟は恐ろしく膨脹して溢れ出たが、それを拾はうと思つてかゞむと急に姿が變つて「ラリヤバン」鳥となつた。今も猶此の鳥は畑

の畦や、家の邊りでせつせとこぼれた粟を拾つてゐるのである。

パイワン族　タラマカウ社

青　鳩

昔或る家に一人の美しい娘があつた。黒い髪、寶石のやうな眸、何一つとして美しくないものはなかつた。まこと山かげの小暗い家内（やぬち）もこの子のためには照り輝くばかりに思はれたので、兩親も二なきものと勞り育てた。それに才さへ勝れて何事も巧みならぬはなく、殊に機を發明して美しい「マーガン」（色織りの縞蕃布）を織り始めては人々を驚かした。そして集つて來た弟子どもは一反の機に十日もかゝつたが、彼の娘は日に二反を樂々と織るのであつた。それでも少しも思ひ上る事もなく常に身邊も麗しく裝ひ、態度も溫雅なので、前途も床しく思ひ頼んでゐたが、或日俄かに青鳩（ワね）となつて昇天してしまつた。親たちは大空を仰いて、悲嘆の涙にくれたが、そこには目もさめるやうな彩雲が搖曳（たなび）いてゐるばかりであつた。今青鳩の美しいのは彼女の化身だからである。

タイヤル族　溪頭蕃

昔ある所に、美しい娘を持つた夫婦が棲んでゐた。或日母は「シミオカガン」といふ獸骨製の立派な首飾を作つた。それを見た娘は出來上ると直ぐ私に下さいと乞ふたが、母も苦心の作でもあり大切なものだから、こればかりは與へられぬといろ／＼宥めすかしたが、なほも乞ふて止まなかつた。ところへ父の姿が見えたから、娘は驚いて立ち上る拍子に五體が俄かに輕くなるのを覺えたが、そのまゝ翼が生え飄々と天に昇つてしまつた。それが今の青鳩である。雲霽れ風靜かな日に、「ワーワオ、ワオ、ワーワオ、ワオ」といふ啼き聲を聞いたならそれは青鳩が母を怨む聲である。

タイヤル族　ガオガン蕃

或時一人の娘が畑に木豆（しぐ）（シーグツ）取りに行くとて、母に向つて、「マタクイワオエ」

（晝頃の意）に來られよ、シグも澤山に取れやうからといつた。かくて娘は案外早く仕事が捗つたので、木豆の莢を積み重ね其中に入つて午睡した。母は約束の如く畑に行つたが、山のやうな木豆の莢を見て先づこれを灰にしようとて點火した。ところが中で「ボンボン」爆せるものがあるから、訝り探る間もなく娘が飛び上り木にのぼつて、「ワーオ、ワーオ、」となき出したが、見る〳〵青い鳥となつて、大空高く飛び去つた。そして後には氣の毒な母親が泣き伏してゐた。

タイヤル族　カラパイ蕃　マリコワン蕃

註　サゼク族　バトラン蕃、昔或る所に母と娘と唯二人で侘しい暮しを立てゝゐたが、娘は至つて怠けもので少しも母の手助けをする事もなく毎日遊び廻つてゐた。ところが或日母子二人で畑に出たが、豆が枯れて倒れてゐたから、先づ二人でその蔓を一所に積み重ねて置いて小屋に歸つてゐる間に、娘はその蔓の下に隱れてしまつた。母はそれとも知らず蔓を燒いて灰としてから耕作しようとて火をかけたから娘は驚き飛び上り、「オアオア」と啼きながら鳩となつて飛び去つた。

プガヲ鳥

昔或所に一人の笛好の男があつた。朝から晩まで何一つする事もなくたゞ笛ばかり

を吹いてゐた。たまさか馘首に行つても、未だ一箇の首さへ獲た事がない。母は見兼ねていつも叱つたり誨へたりしたが更に效果がなかつた。或日母子づれで畑に行つて耕作したが、暫くすると子供は草を集めて其の中に入り例の笛を吹き始めた。そして思ふやう、「かうして家に在つても畑に出ても、日毎に母に叱責せられてばかりゐるよりも寧ろ鳥となつて四方に飛翔しながら、好きな笛を吹く方がいくらよいかしれぬ」と、自分で火をつけ草を燒き、ボンボン〳〵と爆せる音と共に天に昇つて「プアヲ、プアヲと鳴きながら飛び去つた。

サゼク族　トロツク蕃

註　タウダー蕃、プガチになつたのは怠惰な娘が、母にひどく叱られたからである。
　外太魯閣蕃、或家に怠惰な息子があつた。或日落花生を掘らうとて畑に出かけ、蔓を刈り集め、其の下に入つて惰眠を貪つてゐた。そこへやつて來た母が、知らずに火をつけたから蔓は「ボン」と音して彈けた機みに子供が天に跳ね上り「プガゴ」鳥となつて飛び去つた。
　木瓜蕃、或家に兄妹があつた。或日兄が出草して首を獲て歸り、社衆と共に凱の聲を揚げた。妹は大聲に驚いた機みに焚火の煙と共に天空に昇り「プガチ」鳥となつたのである。
　大體青鳩の所に入れてもよいのだが蕃名を一概に譯せないから、假に項を改める。次の「オワアオ」も同じわけである。

オワアオ鳥

或時一人の女が家族と共に耕作に出たが、余り暑かつたから「カリラン」の中に入つて午睡した。そんな事とは知らぬ家族は「カリラン」も乾いたから燒き盡さうとて火をつけたから、「カリラン」は濛々とした黑煙を揚げて燃え出した。火勢が強くて女は出るに出られずその儘煙に卷かれて燒死した。丁度その時女は姙娠してゐたが胎兒は苦しさのあまり「オワァ」と泣きながら腹を破つて跳ね上り鳥となつて飛んで行つた。

ブヌン族　卓社蕃

註　タケバカ蕃、昔一人の孤兒があつて、いつも「コワオ、コワオ」と泣きつゝ、身の不運を嘆いてゐたが、遂に羽毛が生えて飛翔した。我等はそれを「コワオ」鳥といてゐる。

コワォ鳥とタンキロッ鳥

昔一人の孤兒があつて伯母に養はれてゐた。ところが伯母は極めて性急な人で、粟搗けといふかと思ふとすぐ水汲めと命ずるので、孤兒は日がな一日こき使はれて、つく〴〵情なく思ひ泣きながら庭に出たと思ふと、箕を眞二つに切りそれを兩腕に結びつけ箒を尻尾とし飛び上ると、忽ち一羽の鳥となつた。そして「コワオ、コワオ」と啼きながら飛んで行くのを、惘れ果てゝ見送つてゐた伯母は、やがてどつと後に打倒れ角石で頭を切つたが、その頭が飛び上つて又一つの鳥となつた。今「タンキロッ」といふ頭と腹の白い鳥は伯母の化身であつて、「コワオ」鳥は孤兒である。

ブヌン族　干卓萬社

鳥

勞作

昔二人の少女が互に「マラパリワイ」してゐた時、一人の少女は突然大聲で話し出した、「妾の家族のものは皆不親切で少しも妾をよくして呉れない、こんな浮世に長らへるよりも、鳥となつて思ふさま天を翔つたなら、どんなに樂しからう」と。それから三四日續けさまに叢に入つては脱糞して身を輕くしたが、四日目に例の如く大便を終つて叢を出て友に向ひ、「妾はこれから鳥となる、そして飛びながらいつも『アクアク』と鳴くだらう」といつて再び叢に入り、衣服を脱ぎそれを細く引き破つては唾で身體に附

けてゐた。友の少女は面白い事をするものだとて叢に見入つてゐると、彼の女は布切を附け終ると三度手を動したが、忽ち鳥と化し叢を飛び出し栴檀の枝に止つた。そして驚いてゐる友に「どうぞ妾の籠を我が家にことづけて下さい、その籠ばかりが妾の形見だから、そして父母にはよくこの樣を語つて下さい、それぢやお別れします」とて翼を擴げ、「アクァク」と高らかに鳴きながら、何處とも知らず飛び去つた。今に蕃人が鳥を殺さないのは彼の少女を愍んでである。

アミ族　南勢蕃

昔一人の狡猾な男があつたが、いつも生業を厭ひ社内を徘徊して遊び暮してゐた。母はそれを憂へて絶えず訓誨したが一向聽き入れないから遂に勘當した。それでも子供は何とも思はずに出て行かうとするので、母もあきれ果て「汝の如き愚者は鳥となるより外はない」と言つた。流石に子供も耻しく稍暫く首を垂れて、思案するやうだつたが、見る／＼全身に羽毛が生え鳥となつたといふ。それで今でも鳥はあの通り狡猾なのである。

アミ族　奇密社

ブンナイ鳥

或る所に一人の孤兒があつた。兩親や兄弟に別れてから久しくなるが常に身の不運を歎いてゐた。或日あまりの悲しさに「マソマ、マソマ」と泣いたが、忽ち全身に羽毛生えて鳥となつた。その鳥を「ブンナイ」鳥といふのである。

アミ族　奇密社

註　蕃語「マソマ」は懷しいといふ意味である。

鷲

昔カボシといふ娘があつて繼母の手で育てられてゐた。或日父が狩獵に出た後で、繼母はカボシを呼んで水を汲ませた。ところが道が大變に遠いので途中で頻りに空腹を覺え、へと／＼になりながら漸く辿り着いたから母に願つて食事をしようとしたが

鍋には一粒の飯もない。すると母は「汝の水汲みが餘り長いからみんな犬に食はせてしまつたのだ」と情ない返事なので、娘はかうして毎日母の折檻をうけるより大空を自由に翺翔する鳥とならうとて箒を腰に帶び箕(かつぽん)を兩手に持ち大鳥と化して飛揚つた。これが今の「マルスカウ」(鷲)の祖である。

何事も知らぬ父が夕方になつて歸つて來ると娘がゐない。妻に尋ねると冷淡に樹の枝を指した。只一人の愛娘だつたので父は厄氣となり、どうかして元の姿に返さうと思ひ、肉を手にして「カボシカボシ肉をやるぞ歸つてくれ」と叫んだが、娘は更に歸る樣子もない。父は失望して仰向いたまゝ暫く眺めてゐると其の首が自然と落ちて死亡してしまつた。

註　丹大社では、父の首が天に飛び上つて隼となり今にその娘の跡を追つてゐるといふのである。それから鳥になる時は「カッポン」(箕)を二つに截つて手に結びつけ針を口と鼻との間に刺して嘴を造りそれから箒を腰に縫ひつけて尾とした。そして父は「カボシ、ロクタシ、マサユ」と呼んだのだらう。

ブヌン族　タケバカ蕃、卓社蕃

郡蕃東埔(とんぽ)社では、大昔に仲の惡い父子があつて、父は子をこき使ひ、水を汲ませたかと思ふと直く庭を掃かせ、それがすむと又豚に餌を與へさす。そして大體の用事が片付いたら更に罵つて、「汝のやうな怠けものは飯も食はさず水もやらない、家に居る用もないから何處へなり出て行け」といふ。子供も餘りの事に憤慨して鳥となつた。さすがの父も驚いて子の行く方をふり仰いでゐると、どうした機みか首が切れて其の場に斃れた。といふのである。

ツォ族の鷲の話もブヌン族に似てゐる。

昔或る所にトチーエチーヤといふ小兒があつた。或日非常に泣き騷いたが、母は行つても見なかつた。すると彼は泣きながら箒と敷物を携へて外に出たから、母は何氣なく見ると、子供は箒の上に乘り跨り敷物を二つに切つてゐた。その中にばた／＼と大きな羽搏きの音がして飛び出したものがある。それは敷物を翼とし箒を尾とした子供であつた。鷲は其の子孫だといふ事である。（ツォ族　阿里山蕃）

昔「ダルパリン」といふ所に一匹の「ブロン」(蛇)があつたが、ある時皮を脱ぎ更へて鷲(かりす)となつた。そして今でも馘首せないものは決して鷲を殺す事が出來ない。

パイワン族　スクスクス社
タラマカウ社

註　太麻里社では、昔「ラマゼンカチユピン」といふ蛇があつて、その蛇の化したのが「カリス」鷲だといつてゐる。

鷹

昔或る所にイッテヘバカウクといふ娘があつたが、あまり繼母に虐められるので、竹を割いて羽の形としこれを身體の兩脇に挿しはさみ、平素親しく交つてゐた友達の許を訪ね、泣く〳〵事情を語り別れを告げていふには、「妾は思ひ切つて鳥にならうと思ふ、今後若し妾を見ようと思ふならば日中に空を仰いで下さい」とて去らうとするから、友は非常に歎き悲しみ切に留めたが、娘は聽かずに到頭鷹となつた。

平埔蕃　パゼツヘ族

或る所にボアタエンといふ少年があつた。或日兩親の留守を幸に、一枚の珠裙を取り出し井戸に入れてかき混ぜたから、水は濁つてとても飲めさうでなかつた。丁度そこへ兩親が歸つて來てそれを見、非常に嚴しく叱責し手を揚げて今にも毆らんばかりの勢に、子供は驚いて飛び上る機みに「ヤボ」(鷹)となつてその儘飛び去つた。

サイセット族　大隘社

或る所に母と子が住んでゐた。或日母は子に命じて家の周圍(まわり)の不潔物を掃除させた。子供は命せらるゝまゝに掃除して空腹を感じたから、飯を呉れよと乞ふと、食事時でもないにこの怠けものがと叱られたので、再び出でゝ働いたものゝ空腹(ひもじ)さに堪へかねて又もや飯を求めたが、母はやはり叱つて與へなかつたから、詮方なく外に出で多くの羽毛を拾ひ集めその身體に挿した。母はふいと出た子供が餘り歸らないので、どうしたものかと戸口に出ると、全身に羽毛をつけた我が子が「母よ眼を据ゑて私を見て下さい、これが今生の別れです、それぢやお母さん。」といふかと思ふと、扶搖に搏(はう)つ大鳥と化し見る〳〵青雲の彼方に翔り去り、悔めども〳〵追ふよしもなかつた。これこそ鷹の先祖である。

タイヤル族　北勢蕃

昔、二人の娘を持つた夫婦があつた。ところが父は何時の間にか狂氣となり、不意に妹娘を殺してしまひ、我子の頭や手足を布に包んで、今犬を屠つたから食べよと勸

めたが、姉娘はそれを知つたので悲しんで逃げて行つた。そして木に登つて嘴琴(ろほ)を鳴らしてゐたが間もなく鷹となつて飛び去つた。今鷹が我等の物を掠めたり荒したりするのは、殘忍な先祖が妹思ひの鷹になした罪の報いなのである。

タイヤル族　北勢蕃

註　嘴琴は一種簡單な樂器だが、一度彼等が口にすると實に古雅な音を發する。そして切々綿々の情を寄せては戀を語る事も出來る。

鳶

昔、ある所に美しい娘があつた。或日、母は娘を手招いて、水汲み終つたなら庭を掃き、それから薯を掘つて來い、すると「ケンドゥパガン」(玉纏の首飾)を與へようと言つた。娘は小鳥のやうに歌ひながらいそ〳〵と溪川に下つて淸水を汲んで來た。家の内外も綺麗に掃除した。そして畑に行つて薯を掘り重い荷も厭はず運んで來た。やれ〳〵とばかり母の許に行つて褒美をねだると、母は嘲笑(あざわら)ひながらあれは冗談だといつて取り合はないので、娘も餘りの事に腹立しく暫く泣き悲しんでゐたが軈てぶる〳〵と震ふと忽ち鳶となつて翱翔(かけ)り去つた。母は臍を噬んだがせん術もなかつた。

タイヤル族　カラパイ蕃

註　ガオガン蕃　昔、コワレといふ男があつた。家族と畑に出て耕作してゐるうち、晝頃となつたので、一人小屋に入り粟飯を炊いて待つてゐたが、家族等は一向に來ない。痺れを切らして大聲張りあげ、呼んでも呼んでも山彦を騷がすばかりであつた。コワレは餘りのいま〳〵しさに身體を震はせてゐた。すると手足は忽ち翼となり見る〳〵鳥と化してしまつた。それが鳶である。

テイリク社　ユーミンロック

昔カルカランといふ少年があつたが、或日父に向つて弓を造つて下さいと賴むと、父は母に願へといふから、母に拵へて下さいといふと母は又祖母に乞へといふ。仕方がないから祖母に賴むと、それは父にいへと諭した。かうして誰一人快く弓を造つて吳れないので、カルカランは忌々しく思ひ竊に珠裙を盗み出し、木に登つてその下の池にこれを入れて掻き廻し水を濁しながら「ココワオ」と鳴いてゐるうちに、其の身は忽ち鳶となつてしまつた。

サイセツト族　ガラワン社

イシココ鳥

或る所に大變仲の惡い父子があつた。或時又例の喧嘩を始めたが、子は父に向ひ「假令親でも承知はせない、何の老耄に負けてたまるものか」と、あるまじき雜言を吐いた擧句、斧を揮つて父の腦天に斫りつけたから、父は「ウー」と一聲高く唸りそのまゝ斃れた。子はそれを見てせゝら笑ひながら、破れた頭骨の間から腦漿を引きずり出して食つた。

其の後彼は「イシココ」鳥となつたが殘忍强暴な性質は今に改まらないで、絕えず仲間の腦漿を取つては食つてゐる。

ブヌン族　タケバカ蕃

パットス鳥

昔巒大本社に一夫婦があつた。夫は餘り才能のない男であつたが、妻の方は機織が非常に巧者だつたから、つひ增長して常に夫を蔑ろにし風波の絕え間がなかつた。或日妻は夫を殺さうと思ひ東巒大山におびき出し、自分ばかりは麗しく織つた衣十枚を纏ひ、夫には一枚も着せなかつたから夫は遂に凍死した。それを見た妻は喜んで飛び上るとそのまゝ「パットス」鳥となつてしまつた。

ブヌン族　巒蕃

トフルイとガガイ

昔二人の娘を持つた夫婦があつた。或日父が獵に出たあとで、母子三人連れ立つて里芋掘りに出掛けた。ところが畑に着くと妹は非常に泣き出したから、姉は肩に負つたまゝすかしてゐたがどうしても泣き止まない。そこで乳を飲ませて呉れと願つても母は芋を掘つてから飲まさうとて聽かない。姉娘も仕方がないからあちこち歩きながら掘り終るのを待つてゐた。すると母は芋を掘り終り、やがてそれを煮始めた。

娘は側に行つて再び乳を乞うたが、又も暫く待てといつて與へようとはしない。その中里芋が煮えたので、母はそれを持つて木棚の上に登り、甘さうに喰ひながら皮ば

かりを子供に投げ與へた。姉は泣きつゝその皮を拾ひ、僅に皮肌に殘つてゐる芋を妹に食はせて宥めすかした。ところが飽くまで意地の惡い母は子等に知らさずに自分ばかりそつと家に歸つてしまつたから、姉は心を定め、「こんなにつらく當られるよりは、一そ鳥にでもなつてしまはう」と、自分と自分の衣を破りそれを隙間もなく綴ひ、腰卷を切つて二つの翼とし、「トフルイ」といふ鳥となつたから、妹は同じく「ガガイ」鳥となつた。

夕方になつて父が山から歸つて來るので、姉妹の鳥はその側に飛び下り母の無情を告げて其儘何處ともなく飛び去つた。父も今は仕方がないので家に歸つて來ると、丁度妻が湯を沸してゐたから矢庭に其の湯を浴せかけたので、妻は驚き「キシキシ」と啼きつゝ穴に入つて鼠となつてしまつた。そして今からは凡てのものを喰ひ破つて此の恨に報いてやらうといつた。

パイワン族　カラポル社

註　カスボカン社、父の出獵した後で母子三人で畑に行つた。母は弟を兄に負はせ、自分は薯を掘つてゐた、

が、弟が非常に泣くので哺乳を乞うたが、母は與へないばかりか薯を掘り終ると飯を炊き、木に登り梯子を取り外して自分ばかりで食事を始めた。弟は次第に強く泣くが母は到頭乳を吞ませずに薪採ると山に入つて行つたから、兄弟は今更ながら母の無情を怨み、各々衣を截り羽とし紐を結んで尾とし、「チユグルー」と兄が啼くと、弟は「ナガーイナ」と答へながら鳥となつてしまつた。

夕方になり父が歸つて來たが、二子の居らぬを訝りいろ〳〵妻に尋ね、隣人に尋ねたが要領を得ない。そこで若しやと思ひ畑に行くと二羽の鳥が飛び下りて來た。二子の化身とわかつたからどうかして連れて歸らうとしたが、二人はもう元の姿にはなれぬとて飛び去つた。そこで父は妻の所業を憎み不意に湯を浴せかけたから妻は驚いて鼠となつて穴に隱れた。姉妹が兄弟になつてゐるばかりである。

大竹高社　大體同じであるが、兄が「ガガイ」弟は「チユコゴイ」となきつゝ飛び去つたといふので、鳥の名が轉倒してゐる。

牡丹路社　昔、チヨクルイ、ガガイといふ兄弟があつたが、母は末子を憎み乳を與へなかつたから兄弟が鳥となつた。父は母の無慈悲を責めて打擲すると、母はキキと啼きつゝ鼠となつた。

パリラヤン社　父が出獵した留守に母は二子を連れて薯掘りに出かけた。やがて母は掘つた薯を悉く木の上に結びつけて、自分一人家に歸つて行くので、子供は後を追つかけたが、母は河を渡る時放尿したために河水が熱湯となつて渡る事が出來なかつた。そこで兄弟は母の無情を嘆き。鳥となつて蜜柑を探さうとて、兄が「トグローイ」と啼くと弟は「ガガイ」と應へながら飛び去つた。そして蜜柑を見つけると二鳥は必ず呼び交してゐるのである。

アツダス社　此の社のは鳥と獸になるのである。卽ち、昔或る所に親子四人が住んでゐた。母は常に子を憎み食物を與へないで、たゞ飯粒を顏に塗りつけ父を欺いてゐた。子等は母の無情を怨み、或日漂然と畑に出て來たが、そこにあつた芭蕉の實三本半を食べ、互に刺墨して兄は豹となり弟は「ガガイ」鳥となつた。

鵯

大昔は人間は皆獸類のやうに尾を持つてゐた。或時地均しをしてゐたが、巨大な石があつて邪魔だつたから人々は集つて、「何うしたものかしら、昨夜の夢も吉だつたにこんなに石があつては仕方がない、他に場所を更へようか」など呟いてゐた。するとそこへ一人の女が出て來て「かうせよ」とて自分の尾を地につけ、足を石に當て丶、うんとばかり踏んばると、流石の大石も動いてしまつた。人々は大さう喜んで「成程、如何にもよい思ひつきだ」「此所は汝の功名で地均しも出來たのだから汝の住居にせよ」とて家を建て丶女に與へた。女は非常に喜んで其處に住み、やがて蝦蟇を迎へて夫とし仲睦じく暮してゐたが、いつしか孕んで子を產んだ。それは尾のない一羽の鳥だつた。即ち今の鵯なのである。

ブヌン族　郡蕃

リナス鳥

或所に二人の兄弟があつた。或日兄は戲れて「今から山鳥とならうと思ふ」といふと、弟は「若しも兄者人が山鳥となるならば、我は羂を造つてそれを捕へよう」と言つた。ところが兄は重ねて「なにたとへ羂があつても我には目があるから決してかゝらない」といふものだから、弟は早速羂を拵へて草中に張り、兄を招いて見せると餘りに巧なので、兄は心細く思ひぼと〳〵涙をこぼして泣き始めたが、遂にそのまゝ化して鳥となつてしまつた。今「リナス」鳥といふのはこれである。

ブヌン族　タケバカ蕃

ルルピン鳥

昔ある者が羌仔の肉を「タランカシ」に入れて貯へておいたが、暫くして肉は悉く小鳥となつて飛び去つた。その鳥を「ルルピン」といふのである。

ブヌン族　郡蕃東埔社

キキリン鳥

昔或所に母子二人で侘しく暮してゐたが、或日子供は外出したまゝ數日たつても歸つて來ないので、母は狂せんばかりに歎き悲しみ「キリーム、キリーム」と叫びつゝ探し歩いてゐたが、遂に鳥となつた。そして今に至るまで失つた子を探してゐる。我等はそれを「キキリン」鳥といつてゐるのである。

ブヌン族　タケバカ蕃

テクラシ鳥

或る所に母一人子一人のさゝやかな棲居があつた。母は子を愛撫する事限なく殆ど我身の疲勞さへ忘れてゐたから、子供も只管母に事へるので不自由ながらも幸福な世を送つてゐた。ところが或日ふとした事から母が病みつき、到頭それがもとでみまかつた。殘された子供は悲歎にくれ、一緒に連れて行つて欲しい母よ母よ、と後を慕ひ泣き叫びつゝ駈け廻つてゐたが、其儘鳥となつて翔つて行つた。今「テクラシ」鳥と呼ぶ

のは其鳥である。

ブヌン族　タケバカ蕃

カカガン鳥

昔リンナシといふ孤兒があつて、誰一人養つて呉れるものもないので、いつも「カカガン、カカガン」と叫びながら草や虫をあさつては喰つてゐたが、何時の間にか羽毛が生え其の形さへ鳥となつた。カカガン鳥といふのは彼の身のなる果てである。

ブヌン族　タケバカ蕃

比翼鳥

昔テボランといふ男が犬を連れて山に入つたが、いつの間にか犬が見えなくなつたから、木に攀ぢ登り大聲で「エウ、エウ」と呼んでゐるうちに其の儘鳥の姿に變つてしまつた。妻は夫が一向歸つて來ないので心配して「オワオ、オツーオ」と叫びながら山中を

探し歩いてゐたがこれも亦鳥となつた。今でも山中で「オワーオ」と啼くと「ヘェヘェ」と鳴きかへすものがある。これはテボラン夫婦なのである。

プヌン族　干卓萬蕃

註　鳥になつた話は何うしてもブヌン族に多い。昔出獵して犬を見失つた者があつた。尋れあぐんで歸らうとすると樹上で犬の聲がする。見ると顔と尾は犬だが體は羽毛が生えて鳥のやうである。そしていくら呼んでもどうしても歸らなかつたから、犬はその儘鳥となつてしまつたのである。（郡蕃東埔社）

昔ババツロといふ少年があつたが父が折角植えた豆を食つたから、父は非常に怒り竹を削つて串を作りそれを豆の周圍に立てた。すると子供はあまり怖しさに身を震はすと忽ち鳥となつてしまつた。（タケバカ蕃　タマロワン社）

昔セコイシといふものが耕作を怠り、いつも鳥など捕へて遊んでゐたから、兩親ももてあまし、或日嚴しく折檻したが、彼は俄に鳥となつて飛び去つた。（タケバカ蕃　タマロワン社）

鳥の羽毛

昔鳥と穿山甲とは至つて仲のよい友達だつた。或日彼等は茅原で遊んでゐた時、草に火をつけて見ると、火は物凄い勢で燃え廣がつたので、逃場を失つて苦んだが、穿山甲は地に穴を掘つて漸く難を免れた。けれども鳥の方は煙に卷かれてどうする事も

出來ず、其儘黒焦となつて倒れた。やがて火が消えたから穿山甲は穴から出て友を探し出すと此の始末なので、早速水を汲んで飲ませると、やつと氣息が通ひ生命だけはとり留めたが、羽毛の焦げたのは直らなかつた。それから烏の羽毛はあのやうに眞黒となつたのである。

ブヌン族　丹大社

猿

大昔に一人の男があつた。生來の怠けもので碌々働きもせずに、飢ゑたといつては甘藷などを生のまゝ食つたから、そのやうでは獸となるより外はなからうなどといはれてゐた。それでも或日珍らしく耕作に出て地を掘らうとすると鍬の柄が折れた。これではならぬと他の鍬に取り換へたが又それも折れてしまつた。かくて四挺の鍬を折つてしまつたから、いまいましとて、その柄（パハゼ、パエ、パヂエ、パイスなどとも）をもつて尻を打つとそのまゝ刺つて尾となつた。これはと驚いて身慄ひすると、忽ち

全身に毛が生えて淺猿しい姿となつてしまつたから、いよ〳〵周章て騷ぎ山中深く逃げ去つた。そして樹から樹へと果實をあさる事となつたのである。猿の顏は平常は白いのだが、人に遭ふとすぐ赧くなつてかくれるのはさすがに耻しいからである。

註　怠け者の名はキナシー蕃ばかりに「ヨンガイ」さいつてゐる。

タイヤル族　大嵙崁蕃　メバラ蕃
ガオガン蕃　南澳蕃
マリコワン蕃　溪頭蕃
白狗蕃　カラパイ蕃
キナシー蕃　屈尺蕃

昔或所で兄嫁と妹が立ち竝んで畑の草を摘んでゐた。ところが妹の除草器が何囘となく毀れるので、兄嫁も余りの事に腹を立て、嚴しく叱責した。妹は悲しげに「ショーレク」と泣きながら山林に逃げ込んだので、姉も今更大いに驚き心を痛めたが一向に出て來ない。そこで早速家に歸り、餅を搗いて携へ來て、「妹よ一緒に餅を喰べませう、早くお出で」と叫びながら、あてどもなく山中を彷徨ふうち、漸くその聲を聞きつけた妹が走せて來た。其の時兄嫁が何氣なく持つてゐた燒石を餅の傍に置いた。ところが思ひ誤つた妹が其の燒石を握つたから、忽ち火傷し、「熱つ〳〵」といひつゝ手を臀にあてたが、そこまで燒かれて眞赤になつてしまつた。折角の苦心も水の泡であつた。眼を怒らせ、頰を膨らした妹は、山奧深く隱れてしまひ、永久に兄嫁の手には歸らなかつた。これが猿の始祖である。

タイヤル族　北勢蕃

昔或所に一人の怠惰な男があつた。母は常にこれを氣にして戒めてゐたが一向に働かうとはせない。或日の事母子連で畑に出ると、子供は鍬の柄を折つて枕とし薯蔓を集め其の中に入つて寢てしまつた。母はそんな事とは知らないから、火をつけて蔓を燒いたので、子は大いに怒り我を燒き殺さうとするのかと目を剝き頰を脹らしながら、「今後我は大いに畑を荒して屹度仕返しをしてやらう」といひ棄てゝ山に走り入つた。猿の尻の赤いのは火がついて燒けたからである。

サゼク族 トロック蕃

註 霧社蕃 毎日遊んでばかりゐる怠けものを見て、頭目が大いに怒り小鍬（はれは）で尻を撲つたから、彼は怖れて山に逃げ入り猿となつた。

タウダー蕃 怠惰な子が晝寢をして働かなかつたから母が小鍬で其の尻を打つたので、子供が憤つて山に入り遂に猿となつた。

外太魯閣蕃、怠けものが耕作に出てゐたが一向に働かないで、鍬の柄を取つて自分と自分の尻に打ち込む機みに、彈かれて樹上に飛ばされたので、彼は「キキ」と啼きながら猿になつてしまつた。

パトラン蕃、なまくらな娘が母に連れられて耕作に出たが、立ちながら居眠してゐるうち、過つて尻に鍬を刺したので、俄に姿が變つて猿となつた。木瓜蕃も同じである。

内太魯閣蕃、昔は鍬も人間のやうに歩いた。そして若しも社内に怠惰者があつて働かない時は、必ず其の側に行つて尻を突き刺したものである。今の猿は皆鍬の爲めに尻を刺された怠惰者の子孫である。

昔大勢の若者が畑で耕作してゐたが空腹に堪へかねて、誰いふとなく薯を煮いてはどうだとて、一人の男を選んで煮かせる事にした。賴まれた男は三つの石を地上に立て早速竈を造り大鍋をかけ樹の枝を折りくべた。暫くして湯氣が大いに騰つたから、喰しん坊の一人がもうたまらなくなつて鍬をほり投げ駈け寄りさま、「どうだ煮えたか」とて、一つつまみ二つ撮み食べ始めたから、煮いてゐた男は眞赤になつて怒り、「己れかうしてくれる」とて鍬の柄とつて振りかざした。すると彼の若者も、こりや大變と隙を窺ひ鍬をもぎ取り、柄を折り得意げに尻うち下しからからと笑つたが、折れた柄がぐさりとばかり尻にさゝつてどうしても拔けないでそのまゝ尻尾となつた。余り騷しいから人々は何事が起つたのかと集つて來たので、彼の若者は恐しさと耻しさから山に逃げ入つた。これが猿の始祖なのである。

プヌン族 干卓萬社、丹蕃、タケバカ蕃、

註 郡蕃、昔マウトンといふ男が甘藷を盜んで山に入つたが其のまゝ猿となつた。（バハフル社）

郡蕃東埔社、昔巒蕃の者が畑で里芋を煮たが、その時一人の男が鍋に手を入れてまだ煮えない芋を頰張り、餘り辛かつかつたから「ケアケア」と喉を鳴らして立ち上つたがそのまゝ猿となつてしまつた。

タケバカ蕃、昔フトンといふ者が甘藷を作つたが收穫が思はしくないので、山に入つて里芋を食つたが、咽喉を塞めて苦しかつたから「カオカオ」となきながら驅け廻つてゐるうちに到頭猿になつた。プヌン族の喰しん坊が猿になつたのである。

南瓜の種を搗いてそれを煮ると砂糖のやうに甘くなるさうだ。昔或る家に惡戯好きな少年があつて、その事を知つてゐたから、母に向つて頻りとそれをねだつたが、

母は私にはないから祖母に貰へといふ。祖母は父が持つてゐると告げた。子供は父の所へ行つてさう云つたが、父は汝の兄の所へ行け、きつと持つてゐるだらうといふので、今度こそと思つて兄にその事を賴むと、兄は大變迷惑したやうな顔色をしたが、漸くに、それはきつと母に願はねばなるまいと敎へた。そこで子供は再び母の許に行くと母は稍怒氣を含んで、「無いものは何度いつても同じ事だこの愚か者」と叱責したから、子供も忌々しく思ひ「これからは人の所有てゐる物を悉く盗んでくれよう」といひながら腹立ちまぎれに刀を尻に突き刺した。すると俄に姿が變つて猿となつた。今でも猿が盗み食ひする事が烈しいのはこんな事からである。

ツォ族　カナブ蕃

註　阿里山蕃　昔トスクウォグといふ者があつたが、死後猿の頭領となつた。今の猿は皆其の子孫である。

昔一人の惡戯者があつて社人に大さう憎まれてゐたが遂に山に入り猿となつた。そして人が山に行くと必ず木の枝を投げて苦しめたものだ。そこで人々は猿と和解しようとて或日猿を招き「鍋をやるから今後吾等に惡戯するな」といふと、猿はそれを拒み、

「鍋は用がないからカリバを呉れ」といふ。それではといふので「カリバ」をやると、猿は非常に喜び自分の尻につけて飛び跳ねてゐた。暫くして猿は踊りを止め人々に向ひ「自分は耕作の術を知らないから、時に汝等の穀物を食べ荒すやうな事があつても、決して咎めて呉れるな、その代り人には惡戯をせないから」といひ終るとすぐ深林さして走り去つた。

パイワン族　マカザヤザヤ社

昔ルネルルネといふ者があつた。或日瑣細な事で社人のために殺されようとしたから、大急ぎで自分の家に逃げ歸り、戸を堅く閉ぢて中に隱れ木豆を燒いてゐた。所へ社人が追うて來て家の前についたが、戸が嚴しく締められてゐるので、先づ孔から内の樣子を窺はうと覗いた時、ルネルルネは一發大きく放屁したので覗いた者共は皆異臭にうたれて死亡した。元來ルネルルネは厭勝の術に明るい者だつたが、早速外に出ると其等の屍を轉がしながら猿となれと呪ふと悉く猿となり「ババババ」と鳴きつゝ木に登つ

た。

パイワン族　カスポカン社

註　マシリジ社、昔猿は人間だつた。或時友人と喧嘩したが、友人は怒つて稗の莖を取り口に呪文を唱へて投げつけたから彼は忽ち化身して猿となつて山に入つた。其後猿は社にやつて來て腰掛を呉れと云ふたが、人々は與へなかつたから、猿は非常に怒つて社人一人を嚙み殺した。社人も猿の威勢に怖氣づき「カリパ」(貝)二箇をやると、猿も納得（なつとく）して直ぐ「カリパ」を尻につけて去つた。猿の尻の赤いのはその爲である。

太麻里社、昔或者が「カナピー」に行き食糧を求めて歸つたところ、俄に河水氾濫して渡る事が出來ない。携へて來た食物を悉く食ひ盡しても猶減水せなかつたから、止むなく山に入り木の實を取つて食べてゐるうちに化身して猿となつた。

チヤヂヤアプス社、昔或者が出獵して雷雨に遭ひ崖下に避難してゐると俄かに岩が崩れて死亡したが、その屍體が猿となつたのである。猿の顏の赤いのは石に壓されて苦しんだからである。

牡丹路社、昔二人の男が喧嘩したが、負けたものが逃げながら「汝の作物を食ひ荒して返報するぞ」と云ひ罵つて山に入り猿となつた。

卑南社、或所に二人の兄弟があつた。或日「タタパエン」の上に芭蕉の實のあるのを見付け、互にそれを取らうとて喧嘩を始めたが、そのまゝ山に入つて猿となつた。

マカザヤザヤ社、アツダス社。昔或厭勝人が敵の爲めに殺された者の屍體に向つて、「汝猿となりて復讐せよ」と呪つたので、翌日其の屍體が猿となり敵地に到り悉く耕作物を荒し廻つた。

牡丹社、昔「チヨカミカミ」といふ處で澤山の「アミヤ」(アミ族)を殺し其の儘に放棄しておいたが、その屍體が悉く猿となつた

昔或處に姉妹があつた。或日彼等は「サプル」を身に纏ひ「チバン」を尻に挿し「ハタカル」を頭上に載せて森林中を駈け廻つて遊んでゐたが、やがて猿となつてしまつた。

パイワン族　マカザヤザヤ社

昔或る所に十二三を頭に五人の子を持つてゐた夫婦があつた。或日兩親は隣社の酒宴に招かれて行つたのを幸に、庭に積んであつた糯米をとつて餅を搗きさんざ食つた擧句それを鍬の柄に延ばして長くし各々一本づゝ己が臀につけて戯れてゐた。

やがて日も暮れたから兩親も歸つて來るだらうとて、子等は皆外に出で大樹に攀ぢ登つて枝間に隱れてゐた。そこへ兩親は蹣跚（ひよろひよろ）として歸り着いた。見ると屋內は寂として子等の影さへ見えないので、醉も醒めて周章て騷ぎ出した樣が可笑しかつたから、子供等は思はずカラ〳〵と笑つた。兩親が聞きつけて樹上を見上げた時には子供等は早猿となつてゐた。

サイセット族　大隘社

註 ガラワン社、或家に澤山の子供があつたが、或日兩親は老母に子等を賴んで耕作に出た。ところが祖母は偶々乾物をしようとて屋根に登つたが過つて滑り落ちて死んだ。子供等は結局祖母の死を喜び舞ひ踊つてゐたが、やがて臼と杵とを引き出して餅を造り、屋内の孔を塞ぎ、それから機具の「アリマル」を帶に結び臀に垂れて遊んでゐた。夕方になつて兩親が歸つた時は、戶が嚴しく閉てられてひつそりしてゐた、不思議に思つて入口の戶を押し破つて入ると、俄に立ち上つた子は皆猿となり、す早く外に出で樹を傳つて何處ともなく逃げ去つた。その時父はやつと一人を捕へたが、翌日又遁げ出して山に入つた。先きに逃げたのは小猿となり、後に逃げたのは大猿となつた

或所に母一人子一人が侘(わび)しい暮しをしてゐた。或日母は子に命じて薪を採らさうとすると、子供は直ぐに云ひつけをきかずに口答へをしたから、母は怒つて「トピ」をふりあげて子供の尻を打ち据ゑたが「トピ」は尻に刺つたまゝ拔けない。子供は餘りの怖しさに山に逃げ込んだまゝ歸らなくなつた。山に居る猿はその子孫である。

そして猿が山に逃げ込んだ時、澤山の蚊が集つて來て咬みついたから猿は平手で打つと數十の蚊が一時に殺されたので、蚊の頭は大いに怒つて「何故に我等を打ち殺すのか」といひつゝ、數百の部下に命じて一時に咬みつかしたから猿は痛みに堪へかねて「キキ」と泣いた。併し猿は平手をふり上げていふやう、「假令汝等「ラウィラウ」(芋の一種)の葉のやうに群り來るとも只一打に打殺してやらう」とて一擊數十匹を斃すことが出來たが、新手をさしかへ〳〵猛襲する數千萬の蚊軍には遂に勝算がなかつた。それで今でも猿は蚊を嫌つて「キキ、キキ」と鳴いてゐるのである。

アミ族　馬蘭社

註、奇密社、昔或る社に一人の怠惰な娘があつた。父は每日耕作に出たり薪を採つたり一日として休んだ事がないし、母は母で終日家に在つて機織に炊事に忙しかつた。それに娘ばかりは何一つするでなく其の日を送るのであつた。或時娘は例にない粟飯を炊き上げたが、やがて竹篦(へら)で混ぜてゐるうち、飯粒が竹篦に附着するのを甜めた。これを見た母は非常に怒り「汝のやうなものは娘でない、山にでも行つて獸の仲間入せよ」と罵つたから、娘も仕方なく竹篦を尾として身を振ると、見る〳〵總身に毛が生え猿となつた。そして母を睨みつけて山に逃げ込んだが、今に人間には種々の惡戲をする。それに大變な食ひしん坊なのはこんな娘の化身だからである。

同、或家に怠けものの子供がゐた。鳥追ひにやつても鳥は追はぬ。耕作に出しても只遊んでしまふ。どうする事も出來ぬ子供だつたが、ある時「トペ」(粟飯をかき廻す器)を拵へてくれといふから、父がそれを造つてやると、そのまゝ「トペ」を腰に挿し鍋を冠つて戲れてゐるうち猿になつたのである。そして蕃社では今でも怠惰者は屢々猿に化るのだといはれてゐる。

猿飼ひ

昔風姓の者が子猿を捕へて來て、人乳で養育したが、遂に猿は人語を發するやうになつた。

サイセット族　大隘社

犬

犬も最初は人間だつた。昔或家の者が家族全部で耕作に出かけたが、その中に二人の兄妹が、我等は一足先きに歸つて炊事しようとて急ぎ立去つた。家族達は日が暮れたから耕作も終へ、早く夕食にありつかうと歸つて見ると、甘い肴は愚か爐上には鍋もかゝつて居らず、人影さへないので怪んで寢室を見ると、兄妹相犯してゐた。一同烈火の如く憤り棒をもつて毆打すると二人はそのまゝ淺ましい犬となつてしまつた。

ブヌン族　タケバカ蕃

昔「ゴロヂャン」といふ處に澤山の犬が住んでゐたが獰猛で、とても寄りつけなかつた。ところが或男か頭髮を入れた餅を携へて行き犬に食はせると、犬は髮のために口の自由を失ひ苦んでゐる隙に、二匹の子犬を捕へて家に歸り、これを飼ひ馴らしたのである。飼犬はこのやうにして始まつた。

パイワン族　スクスク社

昔社の東方に一つの洞穴があつて、其の内に澤山の犬が住んでゐた。或時二人の男が犬を捕へようと思つて、其の洞穴に近づくと、一匹の親犬が不意に飛びかゝつて一人を咬み殺した。そこで殘る一人は大急ぎて側の木に登つて難を避け機を見て下りようと待つてゐた。五六日經つと偶々東風嫋々と吹いて來た。今だといふので木を下り携へてゐた餅を洞穴の中に投げ込むと、子犬が出て來て餅を嚙んだのをすかさず引捕へ急いて社に歸り着いた。

サイセット族　大隘社

註　ガラワン社、昔犬は山に在つて人さへ見れば飛びついたものである。或時數名の者が團子を拵へて行つて犬に食はせ、齒に粘り着いて藻掻いてゐる隙に乘じて、二匹の子犬を攫つて歸り飼養し始めた。

犬の助言

或者が犬(ぶりん)を屠らうとしたので、「ブリン」はいふやう、「我を殺してしまつて一體何によつて獵をしようと思ふのか、人間は其の智慧は我等に優つてゐるが溪を渉り叢を駈け廻るには到底我等に及ばないではないか」と。そこで其の男は殺す事を止め友人を誘ひ犬を連れて狩に出でたが、忽ち猪を得、又瞬く間に三匹の山羊を獲た。人々は大いに喜び歸らうとすると、犬は「いや〳〵我等は『ケラヲモミン』に行つて鹿を捕らう」とて誘ふので、男等もその氣になつて「ケラヲモミン」に行くと、犬は東奔西走して又忽ちに二匹の鹿を捕へた。そして男に約束して「汝等は行つて一匹の鹿を捕へよ、我はその間に五匹を獲よう」といふので「ブリン」に「ウエガン」(籠)を渡した。

犬は人々と別れてから獨り山に入り羂(わな)を造つて三頭の瘦鹿と、二頭の美事な大鹿とを獲たから、其の場で太つた二頭を燻製とし、籠に入れて人々の前に運んだ。餘り獲物が多いので瘦鹿三頭だけを山に殘し、犬に見張さして人々は引き擧げた。家族は獲物を見て非常に喜び、誰がこんな功名をしたのかと尋ねると、皆々「ブリン」だといふので、それからは大いに犬を愛育するやうになつた。山に居殘つた「ブリン」はそろ〳〵餓を感じだしたので三頭の鹿を悉く平げた。人々は失望して叱責したから、犬は大いに謝し、今後は我等に骨ばかりを呉れ、我等はそれで滿足しようといつた。それから犬には骨ばかりをやる事になつたのである。

サゼク族　トロツク蕃

犬の舌

犬は昔山に住んでゐて人を見ると咬みついたから恐ろしいものになつてゐた。或時二人の壯者が木陰に休んでゐるのを知らずに、親犬が餌をあさりに行つたから、若者はす早く子犬を捕へ一匹づゝ携へ歸つて養つた。これが飼犬の始めである。ところが

人里で育つた犬は、巧に人語を操るばかりか智悪なども優れてゐて役にも立つたが、婦女に戯れたり人前かまはず猥らな事を平氣で言つたりするし、狩獵の時でも獲物が少いと、故ら「大獵だから迎へに來い」などと騙つて笑つてゐたりするので、人々も大いに怒り、「この舌がわるいのだ」とて、鋭利な刀で截つてしまつた。それからは犬も忠實になつたが、言語を發する事は出來なくなつたのである。

タイヤル族　ガオガン蕃　北勢蕃　メバラ蕃　溪頭蕃　屈尺蕃　マリコワン蕃　白狗蕃　南澚蕃　太湖蕃　キナジー蕃

註

サゼク族内太魯閣蕃、昔犬は人のやうに言葉を發したが、常に怠惰で僞り多く、獵の時でも、家族に全く反對の報告をしたり、何人の前でも憚らずに猥褻な事を云つたから、到頭その舌を切つたのである。

同木瓜蕃、或婦人が屈まつて「レポ」してゐるのを見た犬が、「穢い〱」といつたので、その婦人が非常に怒つて、犬を捕へその舌を切つたから言葉を發する事が出來なくなつた。

ブヌン族干卓萬蕃。昔祖先等が或海岸で犬を見付けたから、携へてゐた餅を與へて連れ歸り飼ひならした。其後社人が狩獵に出た時、犬は鹿を見るとすぐ飛びつき咬み斃し、間もなく數頭を獲たから、人々は大いに犬の手柄を讚めながら歸つた。餘り多くの獲物なので家族等は喜び集り功名譚を聞かうとした。すると犬は大得意になり、「これは悉く我が手柄である、假令人間が數百人あつても我一人に及ばない」など、口幅たい事をいふので、側にゐた若者が癪にさわり、不意に犬の舌を摑み出し刀で其の先を切つてしまつた。それまでは「コール、コール」と吠えたが、其の後は「ホ、ホ、ホ、ホ」と吠えるのである。

同族の巒蕃、タケバカ蕃でも、犬の高慢を憎んでその舌を切つた事になつてゐるが、郡蕃ではやはり虚言が多かつたからだといつてゐる。卽ち、昔犬は人と出獵する事を嫌ひ、常に已一人で出かけた。そして必ず美肉を持つて歸るからと人々を悅ばせて行くが、一度だつて持つて來た事がなかつたので、人々も遂に立腹し「このうそつきめ」とて犬の舌を截つた。それから犬は言語を發せないやうになつた。

パイワン族スクスクス社、昔犬は自由自在に言葉を發したのだが、餘り高慢だつたので、或日「プリガオ」に賴んで厭勝して言語を封じてしまつたから、其の後は唯尾を振つて意を表すやうになつたのである。牡丹路社、チヤヂヤアブス社、カスボカン社、大竹高社、などでは狩獵の獲物を自分のものにしたがつたり、高慢だつたり、猥褻な事をいふのを厭つて其の舌を截つたのである。

サイセット族大隘社、昔は犬も巧みに人語を操つたが、或日一人の女が脫糞してゐるのを見付け、其の傍に馳せて行き早速その糞を食つてしまつた。そして家に歸つてから、「今某女の糞を食つて來た」などと高らかに談つたりしたので、人々はうるさくて其の舌を截り取つてしまつたから、それからは何事も饒舌れなくなつた。

猿と穿山甲

昔二人の男があつて、共に山に行つて「カルジジ」の實を取つた。其の時一人は木に攀登り實を取つては下に落し、一人は其れを集める事を約した。ところが下にゐた男

は熟したものはそつと土中に隱して貯へ、未熟のものばかりを集めて置いた。そこで二人は頻りと云ひ爭つてゐたが、下にゐたものは穿山甲となり木に登つた者は猿となつた。

パイワン族　牡丹路社

昔穿山甲と猿が木の實を取らうとて連れ立つて山に行つた。猿は木に登つて實を捥ぎ落し、穿山甲は其れを拾ひ集める約束だつた。ところが穿山甲は熟したうまいものは悉く穴に隱し、未熟な物ばかりを集めて置いた。やがて木から下りて來た猿はそれを見て、こんな筈でなかつたがと大いに訝り責めたが、穿山甲は知らないこの通何處にもないではないかと答へた。

そこで今度は蟹を捕らうとて河に下つて行つたが、穿山甲はよく捕るけれども、猿は一匹も取る事が出來ぬ。そこで「一體どうしたら蟹が取れるのか」と聞いたから、穿山甲は「汝の手をきつく石で打つと蟹がいくらでも出て來るだらう」と敎へた。猿は早

速河中に入り石で自分の手をいやといふ程打つたが蟹が出て來ぬばかりか、たとへ蟹がゐても拾ふ事さへ出來ぬ程痛んだ。謀（たばか）られたと思つたが仕方がないので岸に上り澤山の甘藷を集めて燒いた。ところが穿山甲は遠方から地に穴を穿つて其の甘藷を盜んで食つた。猿は最早燒け頃だらうと石を取り除けて見ると大きな薯は一つもなく小薯ばかりが殘つてゐる。不思議に思つて穿山甲に尋ねたが、知らぬと答へるから、猿も腹を立て「汝の外に誰も盜むものがない、屹度汝の所爲に違ひない。兎に角脱糞して見よ直ぐわかるから」となか〳〵きかない。ところが穿山甲の糞が猿のより餘程量が多かつたから、忌々しくてたまらず、今度こそ懲してやらうとて茅原に誘ひ出し火をつけて燒き殺さうとした。併し穿山甲は容易く穴を掘つて死を免れた。

猿ばどうも不思議なので「どうして汝は火にも燒けないのか」と聞くと、穿山甲は「なに我は只茅原に入つてゐたきりだ」といふから、猿は「面白い我も一つやつてみよう」とて茅原に入つて火を放つたが間もなく焦死してしまつた。穿山甲もさすがに氣の毒に思ひ、先づ猿の睾丸を引き拔いておいて厭勝すると猿は蘇生した。そこで仲直りをし

て社に歸り、夕方から又連れ立つて一人の女の家に遊びに行つたが、女はなれなれしく猿の側に寄り穿山甲を顧みようともせない。猿は見よがしに振舞つてゐた。穿山甲は口惜しくて、「猿よ、哀れな猿よ、汝は到底『キソジュ』する事も出來ないに」と罵つたから、猿と女は眞赤になつて憤り、いろいろ侮辱したので穿山甲も居たゝまらずに逃げ去つた。其れから後で猿は腰掛に腰うちおろして休まうとして、ふと股間を見ると一面に血に染つてあるべきものを落してゐるのに氣付き、大いに耻ぢて山へ逃げ去つた。そして穿山甲も猿もその後は蕃社に近よらぬやうになつた。

註

パイワン族　大竹高社

太麻里社、或時「ヲイヲイル」(猿)と「カカム」(穿山甲)が連れ立つて山に行つたが、途中で「カカム」は猿に向つて、汝はどうして薪を採るのかと尋ねるから、「ヲイヲイル」は笑ひながら葛を二本切り取つて地上に列べよ、すると薪は山からひとりでに轉つて來るだらうと敎へた。「カカム」は葛を取り地上に列べて今か今かと待つてゐたが、何時まで經つても薪が轉つて來ないから、「ヲイヲイル」に詰ると、騙すとは恐れ入つた、これ此の通りにと、葛を列べるかと思ふと、薪は見る間に集つて來た。

それから「ライライル」は網袋を木に吊して少しその口を開けると野菜が飛んで來て忽ち袋に滿ちた。これを見た「カカム」は面白くなり、我もやつてみようとて網袋を吊し口を開けたが、野菜どころか何一つ入らない。重ね重ねの失敗に忌々しくて我にも術がある屹度返報してやらうと思つてゐた。

歸途河邊を通つたのを幸に「カカム」は「ヲイヲイル」に薯を集めさし、それを石の上に載せて燒いた。その中「ライヲイル」は火に暖まつて居睡りを始めたから、其の間に「カカム」は大薯をすつかり食つてしまつて、そ知らぬ顏をしてゐた。やがてヲイヲイルは目を覺(さま)すと大薯はなくて小薯ばかりが殘つてゐる。汝が盜んだに違ひないと責めたが、「カカム」は一向知らぬといふ。それぢやお互に排泄してその量を比べようとて、比べてみたが「カカム」の方が多かつた。併し「カカム」は如何しても盜まぬと云ひ張り、遂に茅原に出て正否を決する事になつた。

其の時正しいものは火に燒けないとて、「カカム」は先づ茅原の中に入り火をつけさせたが、穴を堀つてうまく逃れてしまつた。そこで今度は「ヲイヲイル」を草の中に入れて火をかけると、彼は逃げる道を知らないので忽ち燒死した。「カカム」はそこで「ヲイヲイル」の腹を裂き膽(きも)を取り出し、再び其の腹を縫ひ合せ呪文を唱へて蘇生せしめた。「ヲイライル」は目が醒めると頻りに空腹を覺えたので、すぐに傍にあつた膽を取つて食つた。「カカム」は此れを見て驚き惘れ、「イニアムラヲグテチヤカリ、ウマアントカチヤイ」と囃したから、猿(らいらいる)は大いに腹を立て汝の如きものとは永久交際をせないとて木に登つて別れた。猿が木に登り、穿山甲が地中に入るのは此の時からである。

カテポル社、昔猿と穿山甲は友達であつた。或時河に出て魚を捕へたが、猿は一匹も捕れないので、如何したらそんなに澤山捕れるのかと尋ねるから、小指を石で打つとよいのだと騙つて猿を痛い目にあはせた。それから捕れた魚を燒いたが猿の放尿してゐる間に穿山甲が悉く大魚を喰つたから、喧嘩となつた。併し間もなく仲直りをして、山へ木の實取りに出かけた。今度こそ俺の天下だと猿は大いに喜び、木に登つて「ルドクル」の實をとり、熟したものは皆食つてしまひ、未熟な食べられぬものばかり下に落して穿山甲に拾はせた。それから猿は悠々と下りて來たから、また穿山甲が憤慨して猿を野に連れ出し燒き殺した。併し餘り氣の毒に思つたから猿の腹を裂き心臟を取り出して、再び元のやうに縫ひ合せ呪文を唱へて

蘇生せしめた。ところが蘇生した猿は空腹だつたから、我と我が膽をとつて食つた。それを見た穿山甲が意地悪く囃し立てゝ笑つたから二者の間には永久解け難い怨を結んでしまつた。

タラマカウ社、猿と穿山甲が川岸で遊んでゐた時、山芋を掘つて來て燒石の中に入れて燒いた。穿山甲は川に降りて穴を掘りその下から悉く大きなものを盜んだ。そして却つて猿が一人で食つたのだらうと責めたが、猿は知らぬ事とて種々辯解した。ところが脱糞して見ると、初めて穿山甲の仕業であつた事がわかつた。そこで猿は山に連れて行き木の實の熟したうまいのを食ひ、穿山甲には熟せない食べられぬやうなものばかりを與へて返報した。得意顔の態度に憤慨した穿山甲は、猿智惠が何程の事があらうとて、今度は野原で火遊をしようとて誘ひ出し遂に猿を燒き殺した。そして今でも猿は穿山甲に智惠が劣ると思はれてゐる。

或る所に穿山甲(あるむ)と猿(たぷさつぐ)とが住んでゐた。或日共に河に出でゝ漁し澤山の魚を得て歸り、魚を食べようとて坐つたが、「アルム」は「猿に向ひ水を汲んで來い」といつた。猿は一寸癪に觸つたが屋外に出で、暫くして尿を竹筒に入れて來て、「アルム」に渡し素知らぬ顔して魚を食べようとする。「アルム」は竹筒を受取り口にあてると、臭氣が鼻を衝くので大いに怒り、兎角の口論をしたが、猿智惠にいひくるめられ仕方がないから「アルム」は自分で水汲みに出かけた。その後で猿は燒魚を一つつまみ、二つ撮(つま)み、遂に悉く食つてしまつた上、「アルム」の矢を番へて石を射、鏃をつぶしてしまひ、その儘もとの處に蹲踞(うづくま)つてゐた。そこへ漸く「アルム」が歸つて來たが、猿は大鳥が飛んで來てすつかり魚を攫つて行つたとて、口から出さうな魚を押し込み〳〵物語るので、「アルム」は、「おのれ盜人猛々しいとは汝の事だ」と罵り止まなかつた。併し猿は眞赤な顔をしながら尚も知らぬといひ張つた。それぢやとて「アルム」は竹の杖を持つて身も輕々と跳び上り、其の杖を猿に渡して汝もかうせよといふと、猿は元來負嫌ひの事とて早速跳び上り、手を放して飛び下りた。ところが地に著くや腹に溜つた糞尿が一時にどつと流れ出て、數多の魚骨が出た。證據が餘り歴然たるものだから流石の猿も負けて謝つた。

間もなく「アルム」と猿は山に出かけたが、「アルム」は今こそ仕返ししてやらうとて、「さあ此の茅原を燒かう、そして火の燃える中に入らうぢやないか、汝のやうな臆病者は火を見ては戰慄く事だらう」といふと、猿もなか〳〵負けて居ず「なに汝の出來る事は我にも出來ると答へた。「アルム」はあざ笑ひながら茅原の眞只中に入つた。猿

は火をつけた、火は風に煽られ忽ち大野を燒き盡したが、「アルム」は少しの傷もなく石の上に乘つてゐた。猿は驚いて、「どうしてあの火にも燒けずに平氣なのか」と聞くと、「なに乾いた茅の葉を身に纏うて伏せつてゐさへすればよいのだ」と敎へた。猿は枯草を著けて野に入つた。「アルム」は仕濟したとばかり火をかけると、物凄い黑烟をあげて火は忽ち野を甜めつくし、あはれな猿は黑い塊となつて焦死してしまつた。「アルム」も餘り惡戲が過ぎて氣の毒に思ひ、猿の腹を割き肉をとり再び元の如く縫ひ合せ禁厭すると、猿は息吹き返した。併し餘り空腹だつたので傍にあつた肉を取つて食つたので、「アルム」は呆れて、「自分の肉を食ふ恐しい奴、忌しい奴」と囃しながら逃げ去つた。

猿は何の意味かわからないが、兎に角何處かに行つて氣晴ししようとて河狩に出かけた。ところが餌ばかり奪られて一尾も釣れない。悄然として水上を凝視してゐると、水面に朦朧と現れたものがある。何か知れないが大きな黑い眼が晃々と光つてゐるので、猿は吃驚して竿投げ棄て「キャッ」といつて逃げ去つた。「アルム」は猿の馬鹿者めと笑ひながら身を現し家に歸つて行つた。

「アルム」が歸つたから、猿は「汝は何處から來たか」といふ。「アルム」は可笑しさを抑へて「他社から」と答へた。猿は尙も周章てゝ「實は今河に行つたが水神が現はれて摑み殺さうとした、今日程恐しい思をした事がない」といふから、「アルム」は「それは汝の性質がよくないから水神が怒つたのだ、それはさうと先つきの仲直りに木の實でも取りに行かうぢやないか」と誘つたので又連れ立つて山に行つた。見ると大樹があつて果實が熟しきつてゐる。猿は早速枝に登つてそれを取り、嬉々として賞味してゐるから、「アルム」はたまらなくなり、「おい一つ吳れぬか」といふ。猿は「あゝまだそこに居たのか、よしやるぞ」といひさま、一つを股間に入れてから落してやつた。「アルム」は食べようとしたが、臭氣が甚しいので、臭い〳〵といふのを、上から猿が大聲立てゝ笑つた、こんな事で折角の仲直りも出來ず、猿と「アルム」は今に敵なのである。

ソオ族　四社蕃　パイゼン社

註　阿里山蕃、昔或る山に人の形をした穿山甲と「トッピエイ」があつて平素は至つて仲よく暮してゐたが、

或時ふとした事から喧嘩を始めた。そこで二人は茅野に出で、勝敗を定める事となり、野を燒いてその火の中に立ち燒けないものが優者、燒け死ぬものが劣者と定めた。二人は茅を刈り集め、先づ穿山甲をその中に立て、火をつけた。ところが穿山甲は地中に入つて難を免れ、火の消えた頃這つて出て石の上に乘り、そ知らぬ顏して煙草を吸つてゐた。「トゥピエイ」はどうだつたといふと、火は上に燃えるものだから、枯葉を身に纒うて地に平たく伏せつてゐたのだと濟してゐる。「トゥピエイ」はやはりその眞似をしたが、無慘にも黑焦げとなつてしまつた。穿山甲も餘り不愍なので、谷間に下り水を汲んで何回となく注ぎかけてゐるうち彼も蘇生した。そこで又元のやうに睦じく暮してゐたが、「トゥピエイ」は何時か報復しようと其の機を待つてゐた。

或日二人で蜜蜂の巣を發見した。「トゥピエイ」は此の時とばかり、早速木に攀ぢ登り蜜を取つては甜め、取つては甜めし、やがて尻に當てた一塊を投げつけた。穿山甲は受け取つて食べようとすると、非常に臭い。氣がつくと糞だらけなので心は穩かでないが一策を思ひつき「汝の呉れた蜜は皆糞臭いから、今少し中に入つて良いのを取つてくれ」といつた。「トゥピエイ」は謀られるとは知らずに中に入つたから、時分を計つて穿山甲は下から大石を投げつけて其の穴を塞いだ。そして一人ほゝ笑みながら歸つて行つた。

「トゥピエイ」は閉ぢ籠められて困つてゐたが、丁度人が通りかけたから、大聲たてゝ助を求めた。すると老人の聲で「自分は狩に出て數日、今大きな獲物を負つて身體も疲れ果てゝゐるから、到底木に登る事が出來ない」とて行き過ぎようとする。「トゥピエイ」は悲鳴をあげて哀願し、獲物は屹度自分が運ぶからといふので、老人も哀れに思ひ漸く木に登つて救つてやつた。「トゥピエイ」は再三謝しながら老人の後から獲物を負つて行つた。ところが元來好きな獸肉が鼻先にあるのに堪へきれず、一嚙り二嚙りして一里許の間に悉く食つてしまつた。老人は家についてさて獲物を下すと、肉は食ひつくされて骨ばかりとなつてゐたから、「汝不埓者、恩人の物を盜むとは何事だ」と棒ふりあげ彼の脚を打ちのめした。「トゥピエイ」は痛さをこらへ跛引き／＼逃れ去つた。かくて穿山甲と「トゥピエイ」は永久に人間にかへる事なく、今のやうな形となつてしまつた。

山猫と穿山甲

昔或所に山猫と穿山甲が住んでゐた。或日山に登つて眺めてゐたが、麓にひろ／＼とした茅原を見付けた。穿山甲は「山猫よ汝はあの茅原の中にゐて、四方から火を放たれても燒け死なぬ術を知つてゐるか」と尋ねると、元來負け嫌ひの山猫は「汝に出來る事なら何でも出來る筈だ、併し凡そ世界に有りと有るもので火に燒けないものがあらうか、汝は如何に高慢しても見苦しい遺骸を曝されるのが嫌だからもう歸らうぢやないか」といふのを、穿山甲はおし止め「いや我は決して僞りはいはぬ、論より證據我が術を見よ」とて茅原さして降つて行つた。

やがて原につくと穿山甲は叢の中に入り、山猫が火をかけた。すると黑煙天に沖し火は燎原の勢で燃え廣がつたから、穿山甲は必定死んだ事と思ひ燒跡を見ると、穿山

甲は依然として元の姿であつた。流石の山猫も其の奇術に驚き何うして無事だつたのか」と聞くと、穿山甲は何氣なく「我は茅と茅との間にゐたのである。火は茅は燒くが、其の間は燒くものではない」といふと、負け嫌な山猫は「さうか、中々面白い事だ、物は試しともいふから俺も一つやつてみようか」とて、危い命を茅野の中に運んだ。腹黑な穿山甲は、日頃の高慢に報いるは此の時とばかり火を放つと、山猫は一たまりもなく焰に包まれ齒を剝きながら燒け死んだ。穿山甲は皮肉な笑を殘して何れかに立ち去つてしまつた。

ブヌン族　タケバカ蕃

兎と穿山甲

昔穿山甲と兎が出遭つた事がある。その時兎は穿山甲の麗しい皮を譽めたか、穿山甲は「汝の毛皮に火をつけて見よ、すると我が皮のやうに麗しくなるだらう」と敎へた。それぢや試みようとてつれ立つて森に行き、火を放つた。濛々とした黑煙をあげ

て燃え廣がる火勢に兎は恐れて逃げたが、火が消えてから歸つて來て「カカマーゥ」と呼ぶと穿山甲は「ホー」と答へて出て來た。兎は驚いて「一體あの猛火をどうしたのか」と尋ねると、「何、火は上に燃えるものだから、立つてゐると我が上を飛び越えて行つたのだ」と事もなげにいふので、兎も安心し茅原に入つて穿山甲に火を放たしめた。併し兎は地を穿つ事が出來なかつたから遂に無慘な焦死をとげた。

パイハン族　スクスクス社

猪

昔、父子三人うち連れて耕作に出たが、晝頃になつたので、子供は小屋に歸り粟飯を炊き、やがて食事の用意が出來たから、大聲に父を呼ぶと、「フー」と返事して出て來る姿を見ると大猪である。そして「何故垣を作つて其の上に澤山の飯を具へないのか」と云ふより早くその子に飛びかゝつたから、餘りの無法に兎角の爭ひはしたものゝ猪の勢益々猛々しいので、子供は思ひ返してそれを和め、今後は畑に來て薯を食つてもよ

いからといふと、父なる猪も納得して山に入つた。

タイヤル族　マリコワン蕃、北勢蕃

註　カラパイ蕃、或る所に、母一人、子一人の家族があつた。或日共に畑で耕作を始めたが、間もなく母の姿が掻き消すやうになくなつたので母よ母よと大聲で呼ぶと、叢の中で「ゴホ／＼」と應へるものがある。近づいて見ると探しあぐんだ母なので喜び駈け寄つて甘諸を食べよと侑めたが、手さへ觸れず頭うち振り／＼山中にかけ込み猪となつてしまつた。

ガオガン蕃、昔、社内第一の怠けものがあつた。日がな一日何事もせないで、寢ごろんでばかりゐるので、社衆の侮辱は此の上もなかつた。これでは少年達の感化が恐ろしい、何處なりと立ち去れ此奴と口々に罵られて、さすがの怠情者も耐へかね、この怨み必ず報いればおかぬといふや、山に駈け入り猪となつた。狩獵の時、不意に咬み殺されたり、折角作つた蕃薯を散々食ひ荒されるのは、かうした猪の深い怨みからである。

今から餘程遠い昔、それは猿がまだ人間であつた頃の事だが、若しか粟を炊かうとすると水が自然に湧き出るし、火を燃さうと思ふと薪が自らやつて來て燃え出すのであつた。肉が食べたいといふと猪が何處からか現れて毛を置いて行く、その毛を煮さへすれば鍋一ぱいの美肉となるのであつた。ところが或者が猪を屠らうとしたから猪

は非常に怒り「汝等は恩を仇で返さうとする痴者である。今後は如何に呼んでも決して出て來ないし、折角苦心して作つた作物はすつかり荒してやらう」といひすてゝ山深く入つた。それ以來猪は決して人里には來なくなつたし、他の獸類も悉く山にかくれたから狩獵によらねば獸肉は得られなくなつたのである。（狩獵の起原參照）

サゼク族　トロツク蕃
内タロコ蕃

昔一人の若者があつたが、夜間竊かに人の畑に行つては甘諸を食ひ荒して置き、翌朝は素知らぬ顔して耕作に出てゐた。餘りの面憎さに社人も棄てておき難しとて、或日大勢で彼を捕へて懲したから、彼は恐れて山に入り猪となつた。これが猪の祖である。

ブヌン族、タケバカ蕃

註　太古は鹿も猪も皆人間だつたが、或日彼等は惡事を働き其の儘山に入つて獸となつた。今に人が呼んでも來ないのは其の懲罰を怖れてである。

或る所に一人の少年があつて、いつも畑から歸つて來ると父に迫つて小刀を造らせた。父もあまり度々なので蒼蠅くて、或日大いに怒り、「汝のやうな奴は家に歸つて來ずともよいから常に畑に居れ」と言つたので、少年は早速畑に赴き其儘猪となつて、粟や甘藷の農作物を喰ひ荒した。

サイセット族　大隘社

猪と豚

二人の兄弟があつた。或時兄は弟に向ひ「俺は猪にならうと思ふ」といふと、弟は「それぢや我は豚とならう」といふ。そこで兄は弟の着物を破りそれを火で燒いてみて、「汝の體臭がこれだ」とて嗅がせたから、弟も同じく兄の衣を少しく破り、火に燒いて、これを犬に嗅がせ「汝は山に入る時此の臭ひを嗅ぎわけて猪のありかを知れ」と敎へた。そして二人は言葉の通り豚と猪になつた。

ブヌン族　タケバカ蕃　卡社

註　干卓萬蕃。昔豚と猪とは仲のよい朋友だつた。或日豚は猪に向ひ、「今日は汝に薯の馳走をしよう」といふから、猪は謝していふには、「御厚意は有り難いが、我は人間の股の肉が欲しいのだ、薯は汝一人で食べよ」と。それで今に豚は薯を食べ、猪は常に人の股肉を狙つてゐるのである。

猪の腸

昔猪は澤山な蚯蚓を食つたが、それが悉く腸となつてしまつた。即ち猪のあの長い腸はもと蚯蚓なのである。

ブヌン族　干卓萬蕃

鹿

昔五六人で狩獵に出かけたが、何時の間にか一人が行方不明となつたから、皆々一生懸命に探し廻つたが、どうしても見當らないので、その儘歸つて來た。其の後一年經つて社人が同じ所に出獵すると、去年見失つた男が鹿となつて柵の中に入れられてゐた。人々は憐れに思つて社に連れて歸り、食を與へ再び人間になれよといひつゝ飼つ

てゐたが、鹿は哀れな鳴聲を立てて間もなく死んでしまつた。

サゼク族　木瓜蕃

註　ブヌン族郡蕃、昔數人で出獵したが一匹の獲物もなく携へて來た糧食さへなくなつたから、一先づ歸らうといつたが一人の男が、「我は一人山に止つて草を食べよう」と衆に別れて深山に入つた。そこで他の者は仕方がないので打連れ辛うじて歸着した。其後再びそこに狩をした時、先きに殘つた一人は鹿となつてさ迷つてゐた。

或時五人の兄弟が狩獵に出たが、四人は獲物があつて末子には少しもなかつた。其後又五人で出かけたが、やはり四人は好獵だのに、末子ばかりは例の不獵で悄然と歸つて來たから、その妻はさすがに見兼ねて夫に向ひ、「何時も〳〵空手で歸る意久地なし、少しは兄者人に見習へ」と毒々しく詈つて睨みつけた勢に怖れて、彼は山に逃れ入り鹿となつてしまつた。それから余程して又四人の兄が出獵したから、鹿になつた末弟が懷しさうに寄り傍つて來たが、兄の一人が鹿臭いと叫んで嫌つたので、鹿は「ミチコアン」山に逃げ去つてしまつた。

ブヌン族　丹大社

註　タケバカ蕃、昔或る家に數多の兄弟があつて長兄をポホアルといつた。ところがポホアルは何囘狩に行つても一度だつて獲物を携へて歸つた事がない。そこで或日父が彼を呼んで其の怠慢と怯懦を責めたから、彼は大いに恥ぢ直ぐ山に入つて鹿となつた。

兎と鹿

昔は兎に角があつて鹿にはなかつた。或時二匹が道で遭つたが、兎は鹿に向ひ、「一體汝は男なのか、男ならば角がある筈だが」と辱めたのを憎々しく思ひ、鹿は「それぢや汝の角を暫く貸して呉れ、それを我が頭に載せてみよう」といつた。兎は欺されるとは知らずに角をとつて鹿に貸してやつた。ところが鹿は其の角を奪つて逃げ去つた。兎は驚いて追跡したが到頭及ばなかつた。

其後又二匹が遇うた時互に以前の事を詫びて、すつかり和解が出來たが、兎は「我は今草を食つて活きてゐるのだから角には用がない。それで改めて汝に進呈しよう」といつて讓つてやつたのである。兎に肛門の多いのは鹿に欺かれそれを追つた時、偶々谿谷を飛び越さうとして跳ねた機みに脱糞したから、肛門が破れて塞がらなくなつた

のである。

羌仔と鹿

パイワン族　スクスクス社

昔は羌仔(きやん)の角が大きく、鹿の角は小さかつた。ところが或時兩者途で出會ひ、いろ〳〵話し合つた末、互に角を交換してみやうぢやないかと相談一決して、遂にその角を交換した。それで今は鹿の方は美事な大角を持つてゐるが、羌仔のは小さな見苦しいものとなつたのである。

鹿の巻毛

パイワン族　スクスクス社

昔太陽も月もなく世は常闇であつた時、人々は手探りで匍匐ひながら山に登つて行つたが、途中で小鹿とこひごく衝突した。面食つた鹿が「ケアン」と一聲高く鳴くと、不思議にも一つの光明體が天に現はれた。それが今の太陽だつた。そして小鹿の額を見ると今でも美しい巻毛があるのは衝突した時の痕である。

ブヌン族　巒蕃　カトグラン社

花鹿

アミ族　奇密社

昔スラ、ナカヲの兩人が「ラガサン」に漂着した時、小刀を石に打ちつけて始めて火を得たのだが、其の後ふと火を失つたから、多くの動物を競爭せしめて南方「サナサイ」島から火を求めしめた。最初水鹿が到りついて火を持つて來たが、上陸の時波の爲めに消され、次に山羊が行つたが同じく海岸で火を失ひ、最後に花鹿が行つて首尾よく火を持つて歸つたから、人々は寄り集り兩手で花鹿の體を撫で擦つて譽め囃(はや)した。その爲めに花鹿の毛皮は俄かに滑らかに美しい光澤を出すやうになつたのである。（火の條下參照）

山羊

昔父子二人で畑に出て耕作に從事してゐたが、老父にせつせと働かせて、子供は骨惜みばかりしてゐたから、父は非常に怒つて木鍬で子の頭を打ち据ゑた。子は驚き周章てゝ崖の下に逃げ去つたが、うち込まれた鍬が頭に刺つたまゝ何うしても除れず、遂に角となつたので山に逃げて行つた。これが山羊の始めである。

パイワン族　カテボル社

一人の男が穀物倉の鼠除（ユユル）を「タウカン」に入れ、脊負つて斷崖の上を通つたが、突然紐が切れて谷底に轉り落ちた。すると「ユルカホ」が動き出し山羊となつて山に逃れ去つた。

タイヤル族　カラパイ蕃、マリコワン蕃

豹

昔或る女が私生子を産んだ恥しさに、その兒を「チャラヂャク」（臺灣松）の木に載せ布で緊く結へて棄てゝおいた。ところが兒は「ニャオニャオ」と泣きながら直ぐ木を下り山に入つて豹となつた。今でも豹を殺すやうな事があつても決してその肉は喰べない。そして馘首の時と同じく「パリシ」を行ふのはもと人間だつたからである。

パイワン族　スクスクス社

豹と熊

昔は人も猿も熊も豹も皆同じ祖先から出たものである。或時一人の亂暴な男が畑で耕作してゐたが、瑣細な諍ひから友人を殺してしまつた。その復讐が怖しいので急いで山に逃げ込み獸となつてしまつた。その時着てゐた着物が泥にまみれて黒くなつた。熊の毛皮の黒いのはその爲めである。

豹はもと貪欲な女であつた。毎日家の中で懸命に機を織つてゐても一向肉に飽く事が出來ないといつて、斑紋のある布を身に纒ひ山に入つた。それが豹である。今でも小

獸の肉を貪食しながら飽く事知らぬ豹の殘忍性はかうした女の執念からである。

タイヤル族　白狗蕃

昔二人の兄弟があつた。或日徒然なまゝに二人で話しあつてゐたが、兄はふと思ひついて弟の體を黃と黑の美しい模樣に彩つたから、弟は非常に喜び己れも兄を彩色しようとて、黑い色を手に持つて兄の體を塗り始めた。其の時外で「アダ」（出草人）がやつて來たと叫んだので、弟は急いで其の手で兄を撫で早く逃げよと促した。その爲めに兄の全身は眞黑となつた。後に二人とも山に入り獸となつた。兄が熊で弟が豹である。

アミ族　奇密社

或る所にクレレ、プラルヤンといふ兄弟があつた。兄のクレレは美男だつたので婦女が多く集つて來て譽めはやすが、弟は極めての醜男なので誰一人相手にするものがなかつた。併し母はその弟が可愛くて兄を憎んだ。或時兄弟二人連れ立つて出草した

が、母はクレレの辨當には蠅だとか頭髮などを入れ、弟の方には肉と餅とを入れて置いた。やがて二人は辨當を開いて見ると、クレレの物は食べるべきものでないので、彼は非常に悲しみ母の無情を託つた。弟は見かねていろ〳〵慰めたが、クレレは聽かずに黑い布を體に卷きつけ熊となつた。弟も我一人家に歸れないとて、同じく山に入つて豹となつた。

パイワン族　マカザヤザヤ社

註　チヤヂヤアブス社、昔プヂヤジユアン、クレレの兄弟があつたが、母は常に弟ばかりを愛して、兄を憎んだから、兄は世をはかなみ熊となつて山に入つた。其れを見た弟も亦豹となつて兄の後を追つた。

牡丹路社、或所に二人の兄弟があつたが、弟は兄の美服を羨み或日竊にそれを盜んで逃げ去つたから、兄は怒つて其の跡を追つた。弟は早速その美服を着けて豹となつたので、兄は熊となつた。そして今に熊は豹を追窮してやまぬのである。

卑南社、昔男があつて、いつも或る家の娘に通つてゐたが、或日娘は戲れに男の常に坐る臼を隱したから、その男通はずなつた。娘はそれを悲しい事に思ひあちこち探したが遂に見當らなかつた。後でその男は熊になつた事がわかつた。それを氣の毒に思つた友人が又その跡を追つて山に入り豹となつた。熊の色の黑いのは、其の友が此の男の美貌なのを羨み或日墨で眞黑く彩色したからで、豹の毛の美しいのは熊になつた男が、いつも自分を羨む友人が氣の毒になり丹念を凝して黑と黃の鮮明な色に塗つてやつたからである。

昔或る所に夫婦があつた。或日酒宴に招かれたから、其の席に出る爲め互に彩色しあつた。夫は先づ妻を染めたが美事な出來だつた。そこで妻は夫を染めようとして不器用な手つきで墨を手に塗つたまゝな擦りつけたから、一面に黑々と染つた。夫は非常に怒り妻を捕へて折檻しようとしたから、妻は大いに怖れて山に逃げ入つた。そして「今後は私が肉を贈るから、御身は働かずともよい、今日の失策は許して下さい」といつたので今にその言を守つてゐる。即ち熊は其の時の夫で、豹は其の妻なのである。

ブヌン族　郡蕃　東埔社

太古は熊も豹も共に白色であつた。或日途に遇ひ、互に毛皮の色を染め合はうと約した。そこで熊が先づ豹の全身に黑と白との美しい斑紋を染め出した。余り見事な出來榮えに喜んだ豹は、只もう有頂天になつてゐたので、手に黑々と墨をつけたまゝ熊の全身を擦り廻したから一面に黑くなつてしまつた。熊は不圖頭を上げると、月輪のあたりが白く殘つたきりで、模樣も何もない汚げな色になつてゐるので、火のやうに怒つ

て豹に咬みつかうとした。豹は大いに謝して云ふやう、「決して惡意があつたのではない、全く技術が拙なかつた爲めである。今後鹿を得た時は必ず汝に贈るから、今日の粗忽は許してくれ」と云はれて見れば多少恕すべき點もあり、月の輪がこのために却つて美しく勇しいなどと煽てられると、熊も詮方なく許して別れて行つた。そして豹が鹿肉を地中に埋めて置くのは熊に殘すのださうな。

タイヤル族　ガオガン蕃　マリコワン蕃
北勢蕃　南澳蕃
溪頭蕃　汶水蕃
屈尺蕃

註

カラパイ蕃、シヤカラウ蕃、山に行くと時々、岩窟の中に山羊や鹿や羌仔などの角があるのを見る事がある。これは豹が捨てたものなのである。そしてこんな所へ、きつと熊がやつて來て、豹さへ見れば飛びかゝるのは、昔豹と熊とが互に毛皮を彩り合つた時、熊が丹念に美しく染めてやつたのに、豹はぞんざいに黑々と塗りたくつて逃げてしまつたから、その復讐をするのである。

サゼク族、外タロコ蕃、昔豹と熊とは仲のよい友であつた。或日途に出遭つて暫く話してゐたが、我等はお互に純白では面白くないから染色して身體を飾らうと相談し、熊は豹を黑白の美しい斑に染めたが、豹は煤を兩手につけて眞黑に塗つたから、熊は大いに怒つて飛びかゝつた。それ以來今に豹は熊を怖れて、若しか遇つてもすぐ叢に隱れるのである。

サゼク族木瓜蕃、染色し損じた豹が平謝りにあやまつて、獸類を捕ると必ず贈るからといつた。今日でも豹が肉を土中に埋めて置くのは熊に與へるのである。

ブヌン族巒蕃、丹蕃、タケバカ蕃、昔豹も熊も人間だつた。或時互に染色しようと約して、熊が先づ豹を見事な斑紋に染めた。それから豹が染めようとする時、熊が居睡りを始めたから只黒々と染めてしまつた。あの月の輪の白いのは染め殘りの跡である。熊は非常に怒つたから豹は獸肉を贈る約束で事が濟んだ。

ツォ族カナブ蕃、昔熊と豹が山中で行き遭つた時互に染色をしたが、豹は熊の咽喉を白く殘しただけで、一面に黑く塗つたから、熊が非常に怒つて飛びかゝつて來た。豹はくれぐ\も粗忽をわび鹿の後趾を贈る事で漸く熊を納得せしめた。今でも時々山で鹿の後趾があるのは豹が熊への進物である。

パイワン族カテボル社、太厤里社、豹が熊の居眠る間に例の黑々と塗つたので、熊が怒つて如何しても許さない。仕方がないので豹は隙を見て逃げた。併し逃げおほせなかつたので鹿肉を與へる事を約して和睦した。

パイワン族呂家社、昔「リクラウ」(豹)、と「トマイ」(熊)の二人がつれ立つて芋掘りに出かけたが、やがて芋も掘り終へたので休憩してゐた時、お互にかう白くては面白くないから毛皮を染めて綺麗にならうと相談一決し、先づ「トマイ」が芋掘の棒を筆として「リクラウ」の體に斑紋を染めた。ところが「トマイ」は居睡りをしたので「リクラウ」は咽喉のあたりを白く殘しただけで一面に墨を手でなすりつけた。「トマイ」は目を醒して怒つたので。今後鹿を捕へたならば必ず「トマイ」に呈することを約して和睦した。今でも時々山上で「ウー」と唸る聲のするのは豹が鹿を獲た事を熊に知らすのである。

或時熊と豹が山に行き木に登つて枝を折つたが、熊には太いのが折れて豹は細い枝さへ折れなかつた。そこで熊は「豹の力なし」と言つたから、豹は非常に腹を立て早速木から下りて、「それぢや相撲をとらう、必ず强弱が判明するから」といふので、熊はうち笑ひ、よしとばかりに組付いた。所が熊の大力にはどうしても叶はないので豹は隙を見て森の中へ逃げ込んだ。熊は後を追つて、「おい待て〳〵俺は決して怒つて居ない、よい事があるから」と呼び止めたので、豹も止つた。そこで互に白い毛皮が面白くないとて彩り合つた。熊は先づ手際よく豹を美しい模樣に染めたが、豹は唯黑々と染めたから、熊は今度こそ勘辨ならぬと詰め寄つたから、豹は決して惡氣でしたのではない、唯生來の不器用なのであると大いにあやまり、今後は必ず肉を献ずるからとて兄弟の約を結び、今に至るまで熊の側を離れないといふ事である。

ブヌン族　干卓萬蕃

註　これまでのは大體豹が熊に及ばないといふ話だが、次の說話ばかりが凡てに於て豹が勝れてゐる。美しい斑紋も自分で染めたとなつてゐるのが一寸變つてゐる。

昔、豹と熊とが行き遇つた時互に染色の巧拙を競うた。其時熊は只黑々と染めたが、豹は白い斑點を殘して麗しく彩つたから、熊はこの手ぎはを羨んだ。間もなく又猪を捕へようとした時、熊はしたたか咬みつかれて避易ぐところを、豹が難なく捕へて地中に埋め標をたてゝ去つた。熊はどうしても豹には及ばぬ事を知つた。

タイヤル族　大嵙崁蕃

註　サゼク族タウダー蕃、昔豹と熊とが遭つた時、互に其美を爭つて咬みあつたが勝敗がつかなかつたから、其後鹿や猪を見るとこれを屠り其の優劣を爭ふやうになつた。

熊の骨

昔は人間と獸類と同棲してゐたが、或時熊は人間に向つて云ふやう、「汝等若し我を射るやうな事があつても、肉だけを取つて骨は殘せ、その代り豹を射た時は骨まで取れ」と。こんな事から今でも熊を獲たなら骨を木に吊して置くが、豹を獲ると骨まで殘すことなく取つて來て交換品とするのである。

サゼク族　木瓜蕃

鼠

昔或家にタカーサガルといふ娘があつた。或日家人等は娘一人を殘して畑に出た。やがて日も暮れ一日の仕事も終つたからうち連れ歸つて來たが、娘は非常な怠けもので朝から睡り續けてゐたものと見え、食器なども取り散したまゝである。兩親は驚き呆れたが、若い娘には有りがちの事だとて、別に小言もいはずに搖り起した。流石に娘もきまりわるく跳ね起きると早速、搗いてない粟をその儘鍋に入れて炊き夕食に進めたが、誰一人咽喉に通らないので、兩親も怺へ兼ねて叱ると、娘はこそ〳〵と穴の中に入り一人でその飯を食つてゐたが、間もなく鼠となつてしまつた。

ブヌン族　達啓覔加蕃　卡社

註　同じタケバカ蕃でもタマロワン社では異つた傳へになつてゐる。それはかうなのである。
昔カムテスといふ者があつたが、晝の間はぐつすり寢てゐて、夜になると出歩いて人の穀物を盜んでゐたが遂に鼠となつた。

昔或る所に親子三人が暮してゐた。或日夫は出獵して家には妻子ばかり殘つてゐた

が、やがて食事時になつたとて粟を鍋に入れて煮くと俄かにひどい勢で沸騰したから、母子は驚いて壁の孔に入つた。すると忽ち形が變じて鼠となつてしまつた。こんな事とは知らぬ夫は夕方になつていそ〳〵と歸つて來たが、何時も出迎へる妻子の姿が見えない。不思議に思つて高らかに名を呼ぶと孔の中から二匹の鼠が出て來て、「我等は何うした天罰か知らないがこんな淺ましい姿となつた」と遂一物語り、尙言葉を續けて「假令形は變つても心は同じ昔のまゝだから、何處へでも必ずお伴します」といつた。それで今でも鼠は人家を離れないのである。

ブヌン族　干卓萬蕃

註　ブヌン族丹大社、或所で孕み妻を一人家に殘して家人が悉く耕作に出た。やがて其日も漸く暮近くなつたから、妻は夕食の準備をしようと思ひ粟を炊いたが、あまり俄かに焚いたから、鍋を破り屋內一面に膨れて、婦も居る隙もなくなり遂に壁の側まで退いたが、粟は益々膨れ上り其の姙婦の腹をいやといふ程壓しつけたから遂に腹が破れ中から澤山の鼠が飛び出して粟を食つた。郡蕃では子供が穴に逃げ込んでそのまゝ鼠となつたのだといふ。

昔或る所で社人等が大喧嘩を始めた事がある。其の時仲裁に入つた男を氣の立つてゐた連中が殺してしまつたので、彼は直ちに鼠となり、毎夜人々の穀物を荒して復讐する事となつた。

パイワン族　マカザヤザヤ社

註　パイワン族スクスクス社、昔サリムズといふ男がゐたが、泥で鼠の形を拵へて息を吹きかけ謡ふと其れが動き出して粟を食ひ荒した。
パイワン族の各社に傳へられてゐる父の留守中に子供を虐待して鳥にした母が、熱湯を浴せかけられて鼠になつた話は既出の通りである。次の卑南社のは風變りで振つてゐる。

昔知本社に一婦人があつて、或日庭でせつせと綿を採つてゐると傍で籠を開けるものがある。不思議に思つて見ると籠の中に一個の男根があつた。あつと思ふ間もなくそれが飛んで來て其の女の股の邊に觸れた。すると忽ち孕んで二子を生んだ。子供が大きくなつた頃、或時母が「今父が集會所にゐるから呼んで來て吳れ」と命じた。子等は急いでそこに行つて見ると、人間らしきものは一人も居らないで、唯男根一箇が茅の上に轉つてゐた。子等は歸つて母にその事を話すと、それこそ汝等の父だといは

れ、訝りながら再び行つて「父よ歸れ」と云つた。其時母は頻りと庭に穴を掘つてゐたが、父は歸ると直ぐ急いて其の穴に入つたから、母はこれ幸と上から熱湯を注ぎかけると、それが忽ち變じて鼠となつたといはれてゐる。

パイワン族　卑南社

鼷鼠

昔一人の孤兒があつたが、人々は常に彼を賤しめ、誰一人として語るものさへなかつた。併し或日社人が狩に出る時彼の孤兒も行きたいと願つたから、來るなら跟いて來いと許された。そしてある斷崖の上に來た時、一匹の山羊が出たから一人が首尾よく射止めた。ところが谷深く轉げ落ちたから、皆々集つて孤兒の腰に葛を結びつけ谷に降つて山羊を取らせた。もと〳〵物の數にも入れられぬ孤兒の事とて、よい加減な結び方だつたから、葛が切れて孤兒は谷底に落ちた。それでも社人は救はうとはせずに其の儘歸り去つた。余りに憎らしい仕打なので、孤兒は此の怨晴さずにはおかぬと、

二三度身震ひすると忽ち鼷鼠（むぐら）となり、地に穴を穿ちながら社衆より早く社に歸り著いたから、散々に穀物を食ひ荒して復讐した。

ブヌン族　郡蕃　東埔社

蛇

昔或る家の母親が乳呑兒を抱いて乳を飲ませてゐたが、兒は急に乳首を嚙んだから、母は驚いて放し他の乳首を含ませたが再びひどく嚙みつかれ、母は怒つて其の兒を地上に投げた。すると其の兒は小さな蛇となつてする〳〵と逃げ去つた。今でも乳首を嚙む兒を「エボッチ」（蛇）といふのである。

ブヌン族　タケバカ蕃　タマロワン社

蛇は「バイハリ」といふ草から產れたものである。今も時々其の中に拔殼を見るのはその證據である。

ブヌン族　干卓萬蕃

昔ヴイリヤトッとチャナバスの兩人が卵を産んで其を床下に置いたが、やがて孵化して蛇となつた。ところが成長するに從ひ餘り惡戲者だつたから山に連れて行つて棄てた。これ今の「ブロン」(蛇の一種)の祖先である。

パイワン族　スクスクス社

大蛇

昔「カブルガン」といふ處に、一匹の大蛇が住んでゐて、通行する者は悉く殺されたが、或時一人の勇士が此れを退治たから被害者がなくなつた。

パイワン族　大南社

註　ブヌン族タケバカ番、或家の娘が蛇模樣を織らうとして多數の小蛇を集めて置いたが、親の大蛇がそれを取り返すとて一家族を鏖殺してしまつた。そして「バケヤラン」と「パラバナ」は今に蛇の巣窟である。

青蛇

太古は鳥獸蟲魚の差別がなくて悉く人間の形を具へてゐた。蛇も無論さうであつた。

或る所に物好きな男が一疋の毒蛇の子を飼つてゐるのがあつた。毒蛇の子は極めてよい性質だつたので、社人も皆可愛がつてゐたが、ある日それ等の一人がその蛇の子を呼び入れて酒を飲ませ、其の醉つたのを見て惡戲がしたくなり、蛇の子の袋に油蟲を入れて置いた。蛇の子はやがて醉も醒めたから、袋擔いで家路を急いだが途中で死んでしまつた。其れを見た蛇神が非常に怒つて、酒を飲ませた男を殺さずには措かぬとて、多くの毒蛇を率ゐて社を襲ひ、多數の人を咬み殺し其の首を取つて凱旋した。ところがアルシバといふ男が辛うじて此の難を遁れたが、如何にもして復讐したいものだとて、或日夥多の毒蛇をおびき出し或一軒の家に入れて置いて、竊に火藥を撒き火を點けたから、何うしてたまらう蛇は黑焦となつて寸斷せられた。其の時一疋の青蛇がす早く穴に入つて逃れ、後山に入り先きに焦死した蛇の卵を孵化したから今に蛇の種が盡きない。

ツォ族　四社番

蛇占

或時一匹の小蛇が出て來たが、誰も其の名を知らなかつた。ところが一人の男が珍らしいものだと捕へようとすると、蛇はする〳〵と逃げて行つた。間もなく又同じ蛇が來たから、今度こそはと他の一人が手を出すが早いか、ひどく嚙みつかれたから、驚いて家に歸り早速手當をしたが見る〳〵全身腫れ上り紫色になつて死んだ。この者は社內に人望のない男だつた。今でも社內に紛失物でもあつて、盜人の嫌疑を受けるやうな時には、

マコレク、　取つたか、
エネマコレック、　取らぬか、
ヘートン、　蛇に聞いたら、
モレ、　わかる。

と誓ふのである。

タイヤル族　大嵙崁蕃

螢

或所に一人の美しい娘があつた。とりわけ皮膚の光は包むに余る位であつたが、何うした事か夜となく日となく泣き悲しむので、兩親は夜もろく〳〵眠られないとて、薯など與へては劬り慰めたが、いよ〳〵泣き募るばかりだから困り果てゝゐた。すると或日泣聲が急に止つたと思ふと、忽ち娘の五體が粉な〳〵に碎け、きら〳〵光る無數の細片となつて飛んで行つた。螢はこの美しい娘の後身である。そして昔餘り泣いたから、今は思ひに燃ゆる身となつてゐるのである。

タイヤル族　北勢蕃

或る者が煙草を吸つてゐたところへ、小さな虫が飛んで來て顏に止まつたから、煙管で拂ひ落す機みに其の火が虫の尻についた。今其れを螢といつてゐる。

サイセット族　ガラワン社

蟬

或る所に一人の娘があつた。餘程氣まゝな性質だつたが或日嚴しく母に叱られたのを悔しがつて、屋根に上り「シビシビ」啼いてゐる中、そのまゝ羽が生えて飛んで行つた。今蟬(かたた)といふのはそれである。

タイヤル族　カラパイ蕃

蜂

昔一人の老人があつて頗る長い陽物を持つてゐた。それでいつも其を肩に擔いて歩いてゐたが、或時社人と共に出獵した時、苺の棘が刺つて陽物に負傷した。老人は大に閉口し且憤慨してゐたが、家に歸りつくと早速その棘(いばら)を拔いて酒甕に入れ呪文を唱へて蜂とした。ところへ社人が美酒を飲まうと集つて來たから蓋をとり蜂を放つて苦しめた。社人は非常に怒つて老人を殺さうとしたが、翁は朗々と謠ひ出すと忽ち人間が生れ出たりしたので、薄氣味惡くて殺す事を許して歸り去つた。

パイワン族　アツダス社

密蜂

昔「ダドル」といふ所にハプラルと呼ばれる男があつた。「マテヤサン」のルスルスといふ男の弟だといはれてゐた。或日彼の男「キヌラン」社に行くと、一人の女が機を織つてゐたから、好き心が動いてその傍に寄りそつたが、女は堅く拒んで應せなかつたので、ハプラルは怒つて梭を奪ひ彼女を打ち懲して、そのまゝ叢を通つて大急ぎで逃げ去つた。ところが歸りつくと陽物が殊の外痛いので、褌を脫いでよく檢べると、無數の茨が刺つてゐる。忌々しさに堪へないで、一つ〳〵それを拔き取り甕の中に入れて貯へて置いた。

其後五六日經つて社人が集つた時、其の甕を中央におき前日の失敗談をして蓋を開けると、悉く棘が密蜂となり飛び出して人々を刺した。社人は驚き慌てゝ逃げ出さうとするので、ハプラルは蜂を制し、人を刺してはならぬと戒めたから、今に蜜蜂は人を

螫さないのである。

蚤

パイワン族　大南社

昔或所に美しい娘があつた。嫁にと望むものが多かつたが、母はそれ等の中から良い婿を選んで娘を嫁したところ唯一夜で歸された。そこで他に再緣せしめたが又直ぐ離緣されるので母は不思議に思つて、嫌がる娘の「ハハビシ」を檢べると僅に膨れ上つてゐるばかりで開けてゐない。これぢやならぬと母は刀を揮つて切開すると中から多數の蚤が現れ出た。

註　ブヌン族　郡蕃　東埔社

丹大社　婿が母の許しを得、石盤石の破片で手術して普通の女とした。

タケバカ蕃卡社・女子が自ら柔軟な膨れた所を截り開くと蚤が無數に出た。

千卓萬蕃、一婦人が徒然のあまり「カリラン」で「ポト」を衝くと、血が迸り出で、それが蚤になつたのである。

蝨

ブヌン族　干卓萬蕃

或る時二十九人の若者が寄り集つてゐたが、その中強さうな四人が手を組んで圓形となり、他の者が其れを踏臺とし、各々次第に肩に上り〳〵つて天に達かうとした。所が今少しといふ頃ひに天から塵が落ちて來て人々に降りかゝつたから、吃驚して目的が達しなかつた。その時の天の塵が蝨であつた。上に載つてゐた二十五人の男は無論その塵はうけたが、すぐふり拂つたから頭髮が元のやうに黑かつたが、臺になつた四人はすつかり白髮と變つてしまつた。

蝨買ひ

大昔は蝨や蚤が人を苦しめる事がなかつたから、常に朝寢するやら午睡の夢を結ぶものが多くて、眞面目に働くものがなかつた。此の儘で過して行くうちには食べるに粟なく著るに衣なく、人類は遂に絶滅するかも知れぬと、或日社衆集り協議を凝したが、

別に妙案も浮ばず皆々困惑の眼を瞠るばかりであつた。この時一人の老人が、徐ろに口を開いていふやう「祖先の話によると、こゝから遙か遠い山懷に陰濕不潔な處がある。そこに虱と蚤といふ不思議なものがあつて、人の頭髮や衣類にとまり落ちる事なく、肌を這ひ廻り螫し苦めるとか、つまり我等の懶惰は少しも刺戟がないからだ。其の虱とか蚤とかいふものを購つて來ては如何」と談ると、珍らしい話だ、眠りすぎる者を螫すとは面白いと社衆の贊成に、若者二三人を選んで不思議な虫を求めに遣つた。かくて少からぬ苦辛の結果、二種の小さな虫が將來されたが忽ち恐ろしい勢で繁殖した。それ以來社衆も朝寢しては、チクリと螫されて飛び起きるし、晝は晝でムズ〳〵這はれては眠りもならず、それから夜中に臼を引き出して粟搗きをしたりする呆者はすつかりなくなつた。かうして弛み切つた惰風を一掃する事が出來たが、今ではその繁殖の恐しいのに困る位である。

メイヤル族　白狗蕃　マシトバオ社

註㈠ブヌン族タケバカ蕃、昔祖先等は終日働き續けて休息する暇もなかつた。そこでかうして年を經る中に人々は勢力を消耗して皆斃れるに違ひないとて、或日會議を開いて其の決議の結果、人を遣はし虱を買ひ求め、それを各々に分けて衣物に放たせた。すると虱は俄に繁殖したから、人々は時々休息しては虱を取る事となつたので、疲勞は直ぐ恢復されるやうになつた。

蚤の殺人

昔或所に澤山の蚤が集つて遊んでゐる所へ、うつかり人が通つたから、忽ち蚤に螫されてその人は殺されてしまつた。

ツオ族　阿里山蕃

南京虫

昔トゥトゥウルといふ蕃丁があつた。或時河に出て水を汲まうとしたが、水が濁つて飲めない。翌日も其翌日もやはり濁つてゐるので、不思議に思つてよく〳〵水中を探つてみると一匹の蟹がゐた。あゝこれが原因だとてそれを殺すと、突然一人の美人

が現れた。訝しく思つたが何となく美女が振り棄てがたくて、己れの衣を脱ぎ其の中に包んで我が家に連れて歸り穀倉の中に匿つて置いた。

其れと同じ日、頭目が出獵して鹿を捕へたから、トゥトゥウルを呼んで其の肉を親戚に分配させた。ところが彼はそれを我が家に隱し、素知らぬ顏して立戻つた。頭目は余り早かつたのを怪み、其夜竊に彼の家の外にひそんで樣子を窺つた。すると內で「汝は鹿の心臟が好きか肉がすきか」などと話し聲がする。獨身の男だと思つてゐたのに女の聲がするからいよ〳〵訝しと中に入ると、素敵な美人がゐるので頭目はトゥトゥウルに迫り其の女を側に引き寄せ其儘そこに泊つた。折角連れて來た女を頭目に寢取られるのが如何にも忌々しく、己れもその側に添寢した。すると頭目は唾吐く邪魔になるから他に寢よといふ。仕方がないから足許にねると足が延ばせぬといふ。手の側に寢ると手に觸るなと叱責した。トゥトゥウルは齒切りして憤慨し、よしそれぢや臼の中に入つて眠る事としようとて臼に入ると忽ち南京虫となつたが、直ぐ美女に飛びつき其の血を吸つて殺してしまつた。

パイワン族　カテポル社

昔「シラブク」社にモカイといふ絶世の美人があつた。頭目のクレレがこれを愛し常に「キソジョ」（夜遊）したが蕃丁のチョコラルも亦「キソジョ」してゐた。

或日チョコラルがモカイを訪ねようとして出かけると、途中で彼女が畑に行くのに遭つたから、直ぐモカイを袋に入れて我が家に連れ歸つた。其夜頭目が山から猪を獲て歸つたのでチョコラルは行つて大獵を祝し餅搗きの手傳ひをした。そこで頭目は彼に餅と肉とを親戚に配る事を頼んだから、彼は早速出かけたが、その儘我が家に歸つて桶の中に隱して置いた。かくて夜が更けた時竊にモカイを出し肉と餅を與へたが一向に食べようとせないから、一二言云ひ爭つてゐる所へ、頭目がモカイを尋ねてチョコラルの家までやつて來た。すると喃々と話聲がするから直ぐに押し入らうとしたが、戸が堅く閉されて入れない。烈火の如く怒つた頭目は屋根を破つて闖入しモカイを奪ひ去つた。チョコラルも思ひつめた一念が斷ち難く兩人の側を離れる事なく纏ひつい

てゐる中に到頭南京虫となつて彼等を苦しめるやうになつた。

パイワン族　マカザヤザヤ社

註　パイワン族タラマカウ社、昔モカイといふ美女があつて老人プラルダンと結婚した。ところがモカイには情人プルルガンといふ者があつたので如何かして老人の手を離れたいと考へてゐた。或日老人が狩に出たから直ぐ情人を引き入れて樂んでゐたが、夕方になつたのでモカイは便所に隱れてしまつた。老人はモカイがゐないので萎れてゐる所へプルルガンが訪れて來た。そこで老人は肉を親戚に贈る事を頼んだのを幸、そつと裏に廻り便所に入つて二人で笑ひながら食つた。人聲に氣付いた老人が松明點して檢べると、こんな事なので、老人は大いに怒つて「己れ不義者必ず怨みを晴してやらう」といふかと思ふと、老人の姿は見る〳〵變り兩人に飛びついて苦しめた。それが南京虫であつた。併し兩人はその虫に熱湯を浴せたから、「妻を盜られた」と泣きつゝ死んでしまつた。

スクスク社、サウラルヤン、カタイラといふ兄弟があつて、弟のカタイラが川の滸で見付けた美女を畑小屋に隱しておいたのを兄が奪つてしまつた。そこで弟が南京虫となつて二人を咬むのがうるさいとて抓んで火に投げ入れたら「兄貴の女盜人」といひながら死んだ。

カスボカン社、プザヤザヤンといふ男が年とつた女を嫌つて美しいチヨコと夫婦になつたので、老女が南京虫となつて二人を咬み殺した。

南京虫造り

昔サリムズといふ奇妙な男がゐたが、泥で南京虫を造つた。最初のは拳ほどもあつ

て蛟まれると痛くて堪へられなかつたから、今のやうな小さな形にした。

パイワン族　スクスク社

穿山甲

昔アオムといふ氣儘な少年があつた。或日あまり朝寢をしてゐるから、父が傍に行つて搖り動かすと彼は拗ねて寢床の下に入り込み、穴を掘つて容易に出て來なかつたが、やがて穿山甲となつて逃げ去つた。

サイセット族　ガラワン社

穿山甲は昔神樣の腰掛だつたが、鱗の爲めに臀が痒いとて廢せられた。

サイセット族　ガラワン社

グヂヂヨ

昔「グヂヂョ」が一匹の青虫を捕へて來て泣きながら穴を探してゐたので、人々は可笑しく思ひ「汝は穴を探してどうするのか」と尋ねると、彼は「この青虫を入れて子をつくるのだ」と答へた。

パイワン族　牡丹路社

蚯蚓の糞

太古洪水があつて土砂を悉く流し去り、到る所岩石が磊々(ごろごろ)してゐたが、蚯蚓が出した糞が堆積して再び沃土が出來たのである。

パイワン族　スパイワン社

蜥蜴と蟹

或る時「ガガルイ」（蜥蜴）と「カン」（蟹）とが「カルギ」樹の實を採りに行つた。蜥蜴は木に登つて實をとり、蟹は下でそれを集める事となつた。ところが蟹は落ちた實を悉

く穴に隱したから、蜥蜴が木から下りて食べようとした時には、甘さうなものは一つもなく只僅かに未熟なものが殘つてゐたばかりだから、蜥蜴は腹を立て蟹を殺さうとした。蟹はあはてゝ穴に逃げ込んだから、蜥蜴は自分の尾で衝き殺さうと思つて穴に入れると、蟹は鋏で尾と睾丸とを剪み切つた。蜥蜴は痛くてたまらないので不本意ながら和睦して、其の夜は共に或る女の許に「キソジュ」した。蜥蜴は低い所に腰をかけ、蟹は高い床の上に坐つてゐた。蟹は嬉しさうに歌つて樂しく遊びやがて歸り去つた。そこで蜥蜴は女に寄添はうとして立ち上ると、腰掛が眞赤になつてゐるのを見た。女は驚き怒つて、「妾の腰掛を血で汚すやうな不吉な事はない、もう汝は來てはならぬ」とて交を絶つたから、狡猾な蟹が戀の勝利まで得たのである。

パイワン族　スクスクス社

蜥蜴と蝦

昔蜥蜴と蝦がふとした事から云ひ爭ひ、叢中に入り火を放つて勝敗を決したが、蝦

は負けて黒焦となつてしまつた。そこで蝦の子孫共は此の事を遺憾に思ひ、或時蜥蜴を河に誘き出し殺してしまつた。それ以來蝦は非常な殺伐になり猿を殺し、その首を取ると蜥蜴よりも面白かつたので、更に人間の首を取らうなど〻敦圉いたがそれは駄目だつた。

パイワン族　タラマカウ社

蟹

昔或る家に一人の娘があつたが、年が年中鳥追ひにかこつけて畑にばかり出かけて行つた。然し畑は鳥獸に荒されてゐるし、一向仕事をしてゐる樣子もないので、父も不思議に思ひ、或日そつと後を跟けて行くと丁度大鹿が現れたから、よい獲物とばかり一矢に射殺してしまつた。

すると娘は驚きかけより鹿の死骸を抱いて身も世もあらず歎き悲しんでゐたが、その後間もなく河で麻を洗つてゐる時、ふと麻が流れたのを取らうとして滑り落ち遂に

溺れ死んだ。蟹はこの娘の化身だといはれてゐる。（鹿の情夫參照）

タイヤル族　鹿場蕃

或家に十四五歳の小娘があつて、毎日父の云ひつけで畑に行つて粟番をしてゐた。娘には祖父があつたが孫娘が可愛くて、やはり毎日畑に出かけて行つた。或日娘は祖父に向つて「ヴルヴル」（嘴琴）を作つて下さいといふので、祖父は早速拵へて渡した。翌日又同じ事を賴んだが再び作つて與へた。ところがそれからは毎日同じやうに願ふので不審に思ひながらも愛孫の望なのだから、其都度拵へてやつた。かうして數十日經つてから、或日の事祖父が畑に出ると、一匹の大鹿が雙角に數十箇の「ブルブル」を附けて耕作小屋に入るのを見たから、早速附近にゐた壯丁を呼び集めてその鹿を殺してしまつた。そしてその肉を煮て孫女に食はせたが娘はひた泣きに泣くばかりで一口も食べようとはせない。祖父も弱り果て〻いろ〳〵和めすかしたが、娘は遂に鹿鞭（鹿の陽物）を呉れといひだしたので、笑ひながら與へると彼女は之を簪として頭に挿した。

其後幾日かたつて娘が畑から歸る時、一つの溪流を渉つたが、過つてその簪を取落すと簪は水中に沒してしまつた。娘は周章てゝそれを拾はうとし竹片で突いたが、不思議にも簪が變じて蟹となり砂中深く潛り込んだ。これが蟹の祖先である。そして蟹の脊中に窪みのあるのは娘の爲めに竹片で突かれた痕跡なのである。

サイセット族　ガラワン社

大昔に洪水があつたが、その水が退くと共に山川溪谷が出來たのである。そして其時流れて來た草が腹となり、木の皮が流れ寄つてその上に重り甲羅となり、二本の枝がそれに刺つて鋏を作り、それが溪流に動き出したが、即ち蟹なのである。

ブヌン族　干卓萬蕃

龜

或る男が家を建てようと思ひ、柱だけを組み立てて置いて翌日行つて見ると悉く壞れてゐる。誰が惡戯するのかと憤りながら又柱を立て我が家に歸つたが、その次の朝早く出かけて行くと、又前日の如く倒れてゐた。余り忌々しいので今日こそ捕へて懲してやらうと、其夜は其處に泊つた。すると夜中に一匹の龜が出て來て忽ち柱を倒したから、彼の男は大いに怒り「何うして人の仕事を邪魔するのか」といひさま、扱く手も見せず斬りつけたが、龜は一向平氣で、「そんな鈍刀で斬れるものか」とあざ笑つてゐる。男は火のやうになつて、「何を」と龜を捕へて火の中に投げ入れたが、火は忽ち消えてしまつた。そこで龜は徐ろに口を開いて、「我は刀も火も怖れないが、たゞ水が恐い」といつたから、男はこれはうまいぞと水中目がけてドブンと投げ込んだ。龜は「ハボー」といひつゝ喜んで泳ぎ去つた。

パイワン族　スクスクス社

第五 勇力才藝

太陽征伐

太古は天に二つの太陽があつて、その一つが西に沒すると、他の一つが東から昇るといふやうに、晝夜の差別もなく運行したから、赫灼たる光熱のために、有りと有ゆる溪泉は涸れてしまつて小魚さへ棲まず、山野の草木は枯れ悉して鳥獸の影も見ない。人々は安息する事は勿論、食物さへ得られない位で實に困苦の極に達した。かくては人類も絶滅せられようから、今のうちに太陽を射殺さねばならぬと議し、社人の中から屈竟な若者三人を選んで、この大任に當らしめた。譽れの白珠美しく縫ひつけた「ラッタン」身輕に着裝ひ、强弓手挾み、鋭刀おつ取つた武者振、眞に男の中の男と見えた。彼等は勇みに勇んで出立した。併し太陽への道は容易ではなかつた。行けど行けどそこには唯茫漠とした一望の荒原が際涯もなく續いてゐるばかりなので、さしも勇士もいつしか白髮の老人となつてしまひ、今は手足も痩せ衰へたから、心は彌猛に逸つても一向に捗らぬ。しかもまだ半途にも達せない有樣である。そこで遺憾ながら一名は社に歸り應援を頼み、二人は最後の努力を續ける事とした。

仔細を聞いた社衆は、太陽征伐の容易ならぬ事を知つたから、こゝに余程遠大な計を立てた。卽ち勇壯な青年數名を選び、各々後圖を托すべき嬰兒を脊負はせ、「タウカン」には密柑、(枇杷とも)粟などの糧食を用意して出發せしめた。彼等は行く〳〵粟、密柑を植ゑつゝ、韋陀天走りに急いだから漸く先發隊に追蹤した。見れば二人は齒落ち肉痩せて、足の運びも怪しげに、言葉さへ口籠り、哀れにも老衰してゐる。けれど應援隊の來たのを見てはさすがに嬉しくて、止めらるゝもきかず若者に負けじと、弱足踏んばり立ち上り、暫しは跟いたが、寄る年なみには爭はれず、忽ち眼眩き蹌めくよと思へば早くも息は絶えた。彼等はあはれな勇士の屍を路傍に葬つて暗然としたのである。併し尙も勇を鼓して進んだ。かくて又數十年の日子は流れた。「道は遠い、年はとる、應援隊の面々も次ぎ次ぎに斃れて、殘るは彼の脊負はれて來た三人―今は立派な

若者となつてゐる—ばかりとなつた。三人は漸く目的地に達したから、喜び勇み、弓に矢を番へ力を籠めて射たが、憂となつたばかりで何ともない、太陽は蔑むが如く西に沒した。爲損じたりと、まさかの場合に用意してゐた木鼠の「ウツタシ」(陽物)を矢の先きにつけ、今新たに昇つて來た太陽を狙ひすまして射放すと、美事其の中央を射貫いたと思ふと、天地を搖かす大音響と共に血塊淋漓と滴り落ち一人を打つたから、頭骨碎けて無慘な最期を遂げた。けれど燃えるやうに輝いてゐた太陽も、全く光を失ひ生色なく、唯蒼白の形骸を止める事となつた。射られた太陽は今月と名づけてゐる。そして月中の黑影は矢傷の痕跡であるし、星は其時血汐の天空に飛び散つたものである。かうして世界に始めて晝夜の別が出來た。

かくて二人は勇しく歸途についた。彼等は凱旋將軍のやうな誇らしさで揚々と歩いた。行きの千里は歸りの十里であつた。彼等は先きに植ゑておいた果實の木が今は一抱へにもなつて甘さうな菓果が累々と熟してゐるのを、ちぎつては飢渴を凌ぎつゝ首尾よく歸社したのである。しかし一人として見知つてゐるものもないので、言葉を盡し身振を雜へて委曲を語つたから、社人も漸く合點し、そは三代以前の事と聞いたが、その時の勇士であつたかと、大いにその恩を謝し功を稱へた。此の時二人は白髮瘦軀の老翁で、總々とした髯が胸にまで垂れてゐた。

タイヤル族　眉原蕃　北勢蕃

註　此の話は二太陽の一つを射た爲めに月が出來た。つまり月は太陽の形骸だといふのである。

鹿場蕃、十四歲の少年を太陽征伐に出した。彼は首尾よく太陽に近づき、蜜柑の樹に登つて一太陽を射た。それから十日間は闇黑であつたが十一日目から今の月が現はれた。

南澳蕃及白狗蕃の一部では、父子二代の事になつてゐる。無論父が斃れた後を子が遺志を嗣いで成功したのである。

溪頭蕃、五名の若者が出發したが、太陽を射て首尾よく歸社したのはその中の一人である。これは一代の間に出來てゐる。

サラマオ蕃、選び出された二人の青年が西へ西へと進み、行く〳〵蜜柑及李を植えた。かくて數十年の後、首尾よく一つの太陽に泥を塗つたので光輝を失つた。それを月と呼ぶ。そして一つの太陽はもとのやうに下界を照し、月はその後から出る事となつた。二人の話によれば天界にも山河があつて人も住んでゐたといふ。

昔まだ世界に月といふものがなかつた頃には、唯一つの大きな太陽が大空にかゝつ

たま〻、非常な光度で照りはたいてゐたので、下界では寒暑の差も晝夜の區別もなく、時間の長短もわからなかつた。人々は長い間働き、疲れ切つては休まうとしたが、何といつても炎熱と、雜音と、蒼蠅とに妨げられ、到底安眠は出來なかつた。實に世を擧げて生色もない有樣だつたから、こ〻に人々相謀り勇敢な二人の若者を選んで、太陽征伐の途に上らしめた。彼等は耳飾の竹管に粟を入れ、蜜柑李を「タウカン」につめ弓矢を携へ東に向つて出發したのである。其の時一方の若者は幼兒を背負ひ、私かに熊の「オーゲ」を持つて行つた。かくて十數年の歲月は流れたが、前途はまだ遼遠である。その中一人は老衰して、空しく中道に斃れたが、殘つた親子は少しも屈せず、前進を續け十數年の後漸く太陽の住居に辿りつくことが出來た。二人は聲張りあげて成功の近づいた事を喜んだが、餘りの嬉しさに張りつめた氣が弛んだか、年來の勞苦に精根も竭きたのか、朝日に消ゆる白露のやうに、もろくも父は敢なくなつてしまつた。若者は悲歎にくれたが、氣を取り直し研ぎすました鏃に、かの熊の「オーゲ」を嵌め、太陽が崖の上から出るところを待ち構へ、弓も折れよと引きしぼつて、兵と放つと、

狙ひたがはず中央を射切つたから見る〳〵太陽は二つに割れて晃々とした光を失つた。そして大きな方が晝の間出で〻今迄のやうに照らし、それが西に沈むと小さな塊が代つて出ること〻なつた。それが今の月で、月の出る間が夜といはれる。かうして始めて晝夜の區別が出來たのである。

射られた日は、前に比して形も小さく、光熱も大いに和らぎ、寒温よろしきを得たので、凋れてゐた溪流には、清水滾々と流れ、萎え凋んだ草木は生々とした葉をつけた。そして焦熱の苦に喘いてゐた人類は蘇生の思ひをしたのである。

彼の若者は首尾よく目的を達したので、道々父の植ゑおいた果樹に飢を凌ぎつ〻めでたく歸社した。仔細を聞かされた社人は、此の時旣に老齡に達してゐる人類の保護者に、敦く報いる事を忘れなかつた。そして盛宴を張つて老翁を犒らひ、

ミタワゲ、
ミタクシヤ、
マラハンワゲ、

見よ〳〵天を、
そらにはにこ〳〵お日いさま、
嬉しいなうれしいな、
見よ〳〵土地を、
土地にはちよろ〳〵谷の水、

マラハンクシヤ、　　うれしいなうれしいな、

かうした、卽興の歌を唄つて、踊り狂ふのであつた。

タイヤル族　北勢蕃

註　「ミタ」は見よ。「ワゲ」は太陽、又は天。「クシヤ」は水、又は地。「マラハン」は保護、恩賚、恩惠などゝ。

そしてこの歌は今では天地神明に盟ふ誓詞となつてゐる。

これは一つの大きな太陽を二分して、今日の月日としたのである。

ガオガン蕃、二少年が征途に上つた。二人は數十年の後漸く太陽の傍についたが、一人は暑氣にあたつて斃れた。殘つた一人が美事に太陽を射たが、中から飛出たものがある。それが月であつた。

キナジー蕃、征伐に行つたのは十五歲と十二歲の二少年であつた。彼等は三年後に首尾よく太陽を射て二分し月日を造り、歸りを急いだが年長のものは途中で死に、年少者の方も道を失ひ山野に彷徨する事數十年で歸つた。

カラパイ蕃、二人の男女が相談して征伐に出た。男は十六、女は十五だつたが、途中で二子を產み、老年に至つて太陽に近づき、射はいたが父は太陽の血汐にうたれて斃れた。三人は來路植えておいた柿や蜜柑を食べつゝ歸りを急いだが、途中で又母も死んだ。そして二人の子供が歸社した時はも早彼等も白髮長髯の老翁であつた。

萬大蕃、昔天には太陽があるばかりで、一年は晝で一年は夜だつた。晝の年は光熱熾烈で、有ゆるものが燬(や)き盡される位であつたが、夜の年には冷氣のために凍(こゞ)えんばかりだつたので、人間は生色もなく嘆聲ばかりをもらしてゐた。この時二人の青年が今直ぐ西に赴き太陽をまつ二つに割らんものと出發した。そして數十年の後漸く目的を達したので、日月の運行がよろしく、寒溫の調和がされた。此の時一人は太陽の血汐のために死し、歸つたのは一人だけてあつた。

マリコワン蕃、太陽を射ようとて西方に遠征したのは、一老人と四少年であつた。彼等は首尾よく太陽を射たが、途中で鬚髯の多い男に遭ひ瑣細な事から爭つて四人は殺されてしまひ、漸く一人が歸社した。

白毛社、二人の若者が、粟や、蜜柑を用意し武器を携へて出發した。道路幾千里、數十年の日子を費した間に年長のものは死し、殘る一人も白髮の老人となつたが漸く太陽の住居に達し、翌日太陽の來るのを眞二つに斬つたので日と月が出來た。

「パスコワラン」社、昔太陽が晝夜の差別なく照りつけ暑熱に堪へなかつたから、タクノミン、バツシヤルタラオの父子が大鋸で太陽を中央から眞二つに截り放ち太陽と月とに分けたのである。

世の始めには天に日月なく黯黮として常世ゆく心地した。それで人々は皆松明を點して往來してゐたのである。ところが或る時暴風俄かに起つて、松明を手に持つてゐる二人の男を天に吹き上げてしまつた。そこで彼等はそのまゝ止まつて太陽となり下界を照すことになつた。今まで暗かつた常闇の世に一時に二個の太陽が現れたのだから、餘り眩しくて見ることさへ出來ないし、炎熱は赫々として五體が灼けさうである。しかも晝夜の區別もなく常に燦爛とした金輪の光を仰いでは、さすがに「イナ」に近づく折もなく子孫次第に減少した。嗚呼先きには暗黑のために若しみ、今は却つて光明

のために悲しまねばならなくなつた。すると或日二人の父子が社衆の前に出て、「我等父子が今から西に行き一つの太陽を射殺して來るから安心せられよ」とて强弓を手挾み尖矢を帶び耳の竹管には粟を入れ「タウカン」には蜜柑をつめて出發した。そして行く〱路傍に蜜柑を植ゑて進み、數十年の後に漸く地の西端に達してまんまと太陽を射たが、淋漓とした鮮血が迸つて上に飛んだのは天界幾萬の星となり、下に散つたのは山野無數の石となつた。そして射られた日の形骸は月となつたのである。父子はめでたく凱旋したが、中途に老父は斃れ、子ばかりが彼の蜜柑の今は老樹となつて、累々とした美果をつけてゐるのをむしりつゝ漸く歸社する事が出來た。そしてその時は既に白髮の老人となつてゐた。

サゼク族　タウダー蕃

註　内太曾閣蕃では、昔天に二日があつて交々下界を照し炎熱に堪へかれて、太陽征伐に行く事になつた。老年、青年、少年の三隊が向つたが、目的地に達したのは青年組と少年組とで、首尾よく歸社したのは少年組（既に社人に見忘れられる程の老年となつてゐたが）ばかりであつた、といつてゐる。

外太曾閣蕃人のいふ所も大體同じであるが、此社では二青年となつてゐる。そして一人は太陽の流血に斃れ後の一人だけ歸社した。そして大した事でもないが蜜柑は朱欒といつてゐる。二蕃とも東へ東へ進んだ所がタウダー蕃と少し違ふ。

バトラン蕃、二人の勇士が弓を持ち、粟と朱欒を携へ、進む事幾千里、時を費すこと幾十年漸く地の端に達し、今や太陽の昇らうとするところを射ると、二本の矢は誤たず太陽の中央を射ぬいた。此の時一人は滴り落ちる血に打たれ海におちて死んだ。そして生き殘つた勇士が歸途あちこちで饗應され、余程の時日を經て歸つたといふ。

太古天に日月二つづゝあつた。そして一年は晝ばかりが續き、一年は夜ばかりの世界であつた。晝の年には暑熱酷しく安息する事も出來なかつたが、夜の年になると、月は出てゐるものの薄暗くて屋内では殆ど事物を辨ずる事が出來ない。無論人々の健康は恐しくわるくなるし、不便は實に譬へやうもない位であつた。人々は寄るとそれを託つので、或時一青年がうら若い少年とうちつれて人々の前に出で、「我等はこれから西に行つて日と月を射殺して不便を除かう」とて武器を携へ一穗の粟を耳にた挾み、多くの朱欒を「タウカン」に入れて出發した。

かくて二人は山又山、河又河を越えたが、際涯もない太陽への道は容易に捗らなかつた。隙行く駒の足早く幾度か夜の年晝の年を重ねて、さしも黑かつた青年の鬢髮に

は雪を戴き、腰に梓の弓ひくやうになつた。併し男子一旦誓つた事を未だ中道で廢するは、此の上もない耻辱だといふので、尙も勇み進んだが、あはれ靑年は目的を果さないで衰死した。殘る少年も今は年闌け、丈延び二尺に餘る長髯を胸さかに垂れる位であつたが、或日漸く西の端の或る凹所に達した。そこは卽ち日月の宿りなのである。翌日、日月の入るを見屆け、首尾よく一つづゝを射たから、こゝに始めて日月の運行がよろしくなり、今日のやうな晝夜の別がついたのである。射られてからの太陽は溫熱まことによろしく、月も以前より光輝を增し、美しい光を放つやうになり、人々蘇生の思をなした。

註　同族木瓜蕃ではやはり二太陽二太陰で大體これと同様の傳である。只少し云へば年長者の斃れたのは目的成就後の歸途になつてゐるのと、進んだ方面が反對の東になつてゐるばかりである。

サゼク族　霧社蕃

太古天に二つの太陽があつて代る〲照りはたゝいたから、晝夜の差別もなく人々は暑熱に苦んでゐた。そこで當時勇名のあつた「カリタン」社の「ボアン」家の者を選んで太陽征伐に赴かしめた。數十年の後漸く太陽に近づいた勇士は、弓を滿月の如く引き絞り、首尾よく太陽の目を射とめた。不意の事とてさすがの太陽も狼狽して地上に顚落したから、彼は手を擴げて摑まうとすると、太陽は指の間からするりと遁げてしまつた。苛立つた男は何を小癪なと指先に唾をつけて、まるで蚤かなんどのやうに太陽を頭から押し潰した。

太陽は苦しみながら聲も細々と「云ひたい事があるから一寸待つて吳れ。一體何故に我を此のやうに苦しめるのか、今不意を打たれて敗北するものの、いつか必ず他の太陽と協力して汝等の生命を絕つてやらう。元來汝等の日々生活するのは誰の惠なのか。我等二人あればこそ草木も生育し、水も流れるのだ。それにかゝる大恩をうけながら少しの報恩の念もなく、曾て一度の祭を行つた事さへないではないか。汝等は只自分ばかり食つたり飮んだりして樂しんでをればよいのか。だからさ、天も怒つて人を獸や樹にしたり、このやうに照りつけもするのだ」と諄々と事の道理を諭したから、勇士も始めて人類の罪咎を知り、悔悟の念荐りに動いたから、携へてゐた蕃布をもつ

て流るゝ血汐を拭ひ、此の後は必ず毎月祭を行ふべき事を約束して歸つた。今の月は射られたので光輝を失つた太陽であつて、月中の模樣はその時目を拭つた布である。

ブヌン族　巒蕃

昔二太陽が天にかゝつて晝夜の差別なく照りつけてゐた。或日一人の婦人が乳呑子を抱いて、畑に出で、日蔭をつくつて子供を遊ばせようとて、箒を地上に立てたが、蔭が小さくて子供を蔽ふに足らない。そこで雨合羽を蔽つて其の下に子供を置き耕作に從事してゐたが、暫くたつて餘り靜かなので睡つたのではないかと行つてみると、子供は形もなくなつてしまひ、跡には多くの蜥蜴が這ひ廻つてゐるばかりであつた。母親は嘆き悲しみながら家に歸つて夫にこの事を告げた。驚いた夫はそれはきつと太陽のために殺されたに違ひない、此の上はどうしても憎き太陽を征伐せねばならぬとて、早速旅裝を整へ征途に上つた。

行く事數千里野越え、山越え漸くの事で太陽に近づき、狙ひ定めて射ると過たず命

中した。太陽は痛みに堪へかねて涙を流しながら、「汝の胸當を暫く借して呉れ、血汐を拭ひたいから」といふと、彼は聲荒らげ「汝は我が子を殺した仇だ、どうしてそんな事がいへるのか」と罵るので、太陽は重ねていつた。「汝等はまだ自分の非を識らないのだ、汝の子が死んだのも自分で招いた罪だ。日々の生活はいふまでもなく、有ゆるものの生成發育するのは皆太陽の恩惠だ。汝等は何も知らない、そして一度だつて報恩の祭をした事もない。人が猿となり猪となり、また草木となるのも自業自得である。若しも汝等が子を愛撫する心あらば一日も早く家に歸つて報賽の赤誠を表せ。すると子孫繁榮疑ひなしだ」と。そこで男も張りつめた氣も弛み、自責の念に堪へられず、地上に平伏して只管罪を謝した。そして急いで歸途につかうとすると、太陽は彼を呼び止め、「道が遠いからこれを食べて行け」とて、木玉玻璃玉を授けた。男は有難さに感泣しながら、見上げると太陽は痛ましい矢傷を負ひつゝも優しい顏で見てをられる。彼は今更ながら罪の深い事を感じた。そして恭しく胸當の布を捧げて傷口を蔽ひ奉つた。射られた爲めに光輝を失つた太陽を今、月といふ。月の面に今でも見える

曇は彼の胸當なのである。

彼は急いて社に歸つた。そして社人を集め太陽の御告を傳へ、早速豚を屠り雞をして報恩の祭を行つた。それ以來毎月、滿月の夜には必ず此の傷ついた太陽—月を祭る事を缺さない。祭祀が濟んでから彼は子息を呼び、「お前は我の尻に手を當てゝ糞をうけよ」と命じたから、臭い命令とは思ひながら太陽を射たほどの父の事だから拒みもならず顏をそむけて恐る〳〵受けてゐると、木玉玻璃玉が澤山現れ出た。太陽から授かつた玉—珍らしい寶といふ事が、忽ち社中の評判となつて、我も〳〵と押しかけて來る社人にも讓らねばならなくなつた。玉を一つづゝ貰つた者はこれを首に下げる事となつた。そんな事から頸飾りが起つてゐる。

ブヌン族　郡蕃

註　此の蕃社では子供の焦死した所に植ゑつけておいた蜜柑の樹が、歸りついた時には鬱蒼とした大木となつてゐたといふのだ。それから前項にあげた巒蕃でも郡蕃の此の話とよく似通つてゐるものもある。それは或日母が畑に出て、草を刈り集め子をその中に入れて仕事してゐると、太陽のために子供が焦死した。そこでこの事を父に報らすと、父は大いに怒り、すぐさま息子達を呼び、弓矢を與へて報復を命じた。そこで息子は先づ海岸に赴き、太陽の出るのを待つてゐると、右から昇るかと思ふと左よりし、左よりするかと思ふと右から昇るといふやうに一向狙が定らなかつたが、或日待ち設けた方から昇つたので、射放つとその目に中つた。射られたのは卽ち今の月だが、今毎月、月を祭るのは、再び失つた光熱を放つ事を怖れてである。そして歸りついた息子の白髮は幾年月の經過を示してゐた。

タケバカ蕃、二太陽のために晝夜の判めもなかつた。或日嬰兒を家に殘して皆々耕作に出かけ、やがて歸つてみると、嬰兒は黑焦となつて死んでゐた。そこで父が長男を連れて征途に上る。出發前、庭に蜜柑を植ゑて行く。兵糧は只耳朶に挿した二本の粟、武器は使ひなれた弓矢である。數十年の後漸く太陽の許についたから。彼等は先づ「ポクダウン」といふ矢を番へて射たが逸れて當らない。そこで「ラツポ」といふ矢で射ると美事に太陽の目を貫いた。見る〳〵血汐が素晴しい勢で落ちたぎり、光輝も次第に消え行く有樣に雀躍してゐると、太陽は怒つて二人を捕へようとする。二人はすらりと指間から遁れたが、遂に二本指で撮まれた。父子は觀念の眼を閉ぢてゐると、太陽は「汝等は何故に我を苦しめるか」と詰つたから、「私の大切な蒲團を捧げますから今日の罪を許して下さい」といふ。太陽はうち笑ひ二人を許し蒲團を取つて目を拭つた。今月の中に現はれる陰影は其の蒲團である。それから急いで歸つたが、庭に植ゑておいた蜜柑は既に大木となり、耳に挿した粟は殆ど盡きて、僅に左の耳に五六粒を殘すばかりであつた。

卓社蕃の傳もタケバカ蕃と同樣である。但し嬰兒は畑に連れて行き「カスパン」の葉を被つたが、その葉が燒け、「バイハル」の葉をかけたが又燒けた。これでは子供を置く所がないから、太陽を懲らしてやらうとて父子二人が出發したといふのである。

卓社蕃「カツト」社、二太陽のため幼兒の死ぬものが多く人類が絕滅しさうになつたから、一人の若者が捨て置き難いとて、三股の矢を攜へて征伐に出た。數十年の後に太陽の近くに進みより、岩蔭に隱れて狙つてゐた。それとも知らぬ太陽が赫々とした眼を開いて東天に現はたから、已れとばかり弦を放つと、彼の

尖り矢は太陽の目を射貫いた。餘りの嬉しさに暫く惘然としてゐると、太陽は逸早く彼を捕へ其の衣を奪つて流れる血汐を拭いた。それからはその衣巾に光が遮られて暗晦となつたから、彼は松明を點し道を照して歸らうとすると、不意に一匹の羌仔が飛んで來て足許をすぎたから、携へてゐた松明を其の顏にうちつけた。今でも羌仔の額に毿毛のあるのはその爲めである。其の時太陽は彼に告げて、日々の生活も太陽の恵なら、萬物の生育も我が働きである。それに報恩の祭もせないで、徒に飲酒をして戯れてゐるから、神罰をうけて幼兒が死ぬのである、といつたから彼は始めて已れの非を悟り、無禮を謝し祭祀の方法を學び、雞を貰つて歸つた。そして社衆を集めて逐一物語つたから、それ以來は毎日雞鳴と共に起きて農事を勵み、又月々射られた太陽を祭るのである。

大昔の事或る家に一人の少女があつた。或日河に行つて魚を捕らうとて網を張つたが、どこからか一つの棒が流れて來て網にかゝつた。少女は邪魔な棒だと下流に投げやつたところ、不思議にも棒は逆に流れて再び網に入つた。彼女は何氣なく薪にでもしようとて、其の棒を帶に挾んで置き、漁りが終つて歸つて來ると、挿しておいた筈の棒がない。奇怪な事には思つたが大して氣にも止めずそのまゝ忘れてゐた。すると二夜經て其の少女が孕んだ樣子である。不思議樣だと思ふ程もなく、翌日男の子が産れた。それでナパアラマと名づけて勞り育てゝゐたが、中々穎敏で膽力があつた。

ナパアラマが五六才になつた時、一人で弓を作り矢を番へて小鳥を射たが過る事はなかつた。其後も時々人を驚かすやうな事が多かつた。或日ナパアラマは母や兄弟と共に畑に出てゐたが、晝頃になつたから母は他の子等に水を汲んで來いと言ひつけた。が誰一人母の命に從ふものがないので、彼は代つて汲んで來た。併しその間に他の兄弟が自分の弓矢を見た事を知り大變に心を惱した。母は慰めながら多くの「コアチン」を刈り取つた。何といつてもナパアラマは母の愛子であつた。

其頃は天に二日があつて、晝夜の區別なく照らし人々は暑熱に灼かれる思ひをしてゐた。或日ナパアラマは水を器に入れ、それを長い綱で括り、その一端を持つて母にいふのには、「このやうに二つの太陽があつては人々の嘆きだから、私は今から太陽征伐に行かう。若しも誤つて殺されるやうな事があつたら、水の入つた此の器が動く事なしに中の水が溢れませう。そして死なない時は水が溢れる事なくて容器ばかりが搖れるでせう。其の時は餅を作つて待つてゐて下さい」とて出發した。

ナパアラマは東へ東へと進み途にある獵場に着いた。そこで一體誰の獵場かしら、

獲物はどうかと見廻してゐる所へ、弓を持つた太陽が中央に立つた。ナパアラマは忽ち弓に矢を番へ射ようとしたから、太陽は驚いて逃げ失せてしまつた。程なく太陽は再びその姿を現したが、まだナパアラマがゐるので又姿を隱した。そこでナパアラマは叢にかくれて太陽の狩獵するのを覗つてゐた。すると太陽は意氣揚々と獵場に入り、獲物をあさり四方に馳驅してゐたが、今やナパァラマの隱れた叢を通り過ぎようとする時、弓勢鋭く射るよと思ふと、鏃は深く太陽の體に刺さり、血は雨雫と流れおちて物凄い光景であつた。此時兼ていつて置いたやうに水を入れた器が動搖したから、母は餅を搗いて今や〳〵とその愛子の凱旋の日を待つてゐた。やがて恙なく歸りついた我が子の手を執つて喜んでゐると、今まで六合に普く照り渡つてゐた光が俄に消えて闇夜となつたから、社人は驚き怖れ、きつと神の祟だと縮み上り庭の隅に蹲いてゐた。ところがナパァラマの家では、母が以前に刈つておいた「コアチン」を燃したから、非常に明く人々の目標となつた。かうして夜の世界が數箇月も續いてから、漸く一つの太陽が東に現はれたが、忽ちに隱れた。最初はほんの二三十分ばかり照すだけだつたが、日に日に高さと時間を增して、漸く頭上にかゝるやうになつた。その次の日からはも早東には歸らないで西に入る事となつた。ナパアラマに射られた太陽も其頃から再び天空に現はれるやうになつたが、著しく光明を失つてゐてものやうではなかつた。それを今、月と呼ぶのである。

ツォ族　簡仔霧蕃

昔太陽が二つあつて晝夜間斷なく照りつけてゐた。或時「トナ」社の者兄弟二人で太陽を征伐しようとて出發した。そして先づ平地に降つて行つたが、平地人は彼等の勇姿を見て、汝等は何處に行くかと尋ねるから、我等は今から太陽を征伐に行くのだといふ。平地人は大いに喜びその成功を祈つた。かくて兄弟は進み進んで大地の東端に達したが、海中から人の形したものが現はれて來た。怪しと見つめてゐるうち、搖々として水上に出るとそれが太陽となつた。そこで弟は先づ射ると首尾よく中つたが、不幸にも滴りおちる血汐にうたれて死んだ。社に歸つたのは兄ばかりであつた。

パイワン族　パリラヤン社

註　「マカザヤザヤ」社、二つの太陽のうち、その一つを射て月としたのは我社の祖ルムデといふものである。

昔二つの太陽が交々照りはたゝき、且天が低くて非常に苦しかつたが、或時一人の姙婦が杵で天を衝き上げた。その時一つの太陽が負傷して光を失ひ今の月となつた。

パイワン族　カスボカン社
アツダス社

註　又「カスボカン」社ではその時一つの太陽に熱湯を注いで火傷せしめたのだともいふ。

太古天に二太陽があつて交々下界を照し光熱實に甚しかつた。人々は山羊の皮を被つて避けたが、忽ち焦げて二度と使はれない。箕で蔽ふと身體が腫れ上りひり／＼する位であつた。そこでタロラホライといふ二十歳許りの若者が、意を決して太陽征伐に出發した。行く／＼蜜柑と竹とを植ゑながら東へ東へと進むこと數十年で漸く太陽に近づき、これを射て歸ることが出來た。ところが不思議な事には、歸途もやはり東

へ東へと歩いたのだといはれてゐる。そしてその時から今の月が出る事となつた。

サイセット族　大隘社

註　往復とも東へ／＼と進んだといつてゐるのが面白い。「ガラワン」社では箕が笊になつてゐるのと、太陽征伐の勇士が今の「タノヒラ」家の祖先だといふのが變つてゐるばかり。

太古は天が低くて、太陽（りざは）は地を離れる事少く光熱が非常に烈しかつたから、人々は夜の外は誰も家の外に出る事が出來なかつた。ある時一人の男が其の子供を連れて山へ狩獵に出で、獲物をえたから喜んで歸つて來た。そして家に着いてから檢べてみると、折角とつた鹿の肝臓（はすぶ）を忘れて來た事に氣づいた。大體鹿の肝臓は祭祀の時犧牲として最も必要なものだから、其の子に命じて、直ぐさま山へ取りにやらした。子は急いで狩場に辿り着き父の忘れた「パスブ」を尋ねゐて、今やその家に入らうとして片足跨いたところへ、忽ち天に太陽が現れて晃々とした光をなげた。そこで戸外に殘つてゐた子供の片足は、一たまりもなく燒け焦げ靡爛れてしまつたが、哀れその子はこれが原因（もと）で落命してしまつた。

父はこれを見て恨骨髓に徹したから、太陽征伐に出でようと決心し、弓矢を携へ一頭の愛犬を伴ひ、夜陰に乘じて、太陽の居所に尋ねて行つた。もとより日中は光熱のために歩く事が出來ないから、草の葉を集めては假舍を搆へ其の中に伏し隱れ、夜に入つては進んだ。そして多くの日數と、夥しい努力を拂つたが、なか〱さう容易くは達せない。そこで携へてゐた果物の種を路傍に播きながら、進み進んで漸くの事に太陽の居所に到着した。例により草の庵を結んで其の中に潛み、日の出るのを今やと待つてゐた。かくて太陽が將に出でようとするのを覗ひ、まんまとこれを射殺しその子の讐を報いた。

ところがそれ以來世は全く闇黑となり、實に咫尺も辨せぬ有樣だつたが、幸に連れて行つた犬がもとの道を知つてゐたので踏迷ふ事はなかつた。此の時先きに植ゑておいた路傍の果樹はすでに大木となつて美しい果實をつけてゐたから、それをちぎつて食べながら無事に歸りついた。

社の人々は常闇の世が長く續いては、以前よりも尚困難だといふので、皆々相謀り

盛な祭儀を行ひ太陽の復活を祈つた。そこで日は蘇生して晝が再び出來た。そして太陽は此の時以來、地を距る事遙に高い天上にかゝる事となつたので温熱よろしきを得人々は安らかな生活をする事が出來た。

平埔蕃　パゼッヘ族

月輪征伐

太古は天が非常に近くて、月は日よりも光熱が甚しかつたから、晝夜の差別もなく、人々は喘ぎ喘ぎ暮してゐた。だからひ弱な小兒などは育たないで、死ぬものが日に多く、大人でも外に出る時は薄板を脊負つて日月の光を避けたのである。かくては人類も絶滅しさうだから、白晝人目を避けながらそこゝこで「ボエヒエ」をしたりなどした。

そこでヨイフォといふ者が、或時、月を射殺して萬人の苦難を救はうと思つて、強弓を引きしぼり、矢聲勇しく射放つと、狙ひ違はず月の眞中に命中したから、見る〱

素晴らしい勢で血汐が滴り落ち、地上は一面に眞赤な海となつてしまつた。今でも山に赤い石の多いのは、この時の血汐の塊であるさうだ。それから月は次第に光熱を失ひ中央に黑い血痕を現すやうになつた。元來太陽は女で、月は男であつて光熱も甚しかつたが、射られてからは勢力を失ひ衰へて全く反對の現象になつた。

月が射られた時は數月の間は何物も見えない位闇黑であつたから、ヨイフォは多くの薪を燃して暗夜を照した。ところがいつとはなしに日は東天に現はれ、暫くして東に入つた、それから日一日と高さを加へ頭上にかゝつたが、翌日は少しく頭上より西に傾いたかと思ふと、忽ち降つて西山に隱れた。その後は朝東に出で夕方西に沒するやうになつた。月も亦昔は斷けることがなかつたが、射られてからは一月に唯一度だけ昔の姿を現すばかりとなつた。

——ツォ族　阿里山蕃

註　事實上從來の太陽征伐と同じだが、最初から月―男性で光熱や勢力などが凡て女性たる日に優つてゐた―を射るのが目的なので假りに項を改めたまでである。次の話も同樣だが最後のタイヤル族の話は趣を異にしてゐる。月面の曇りを射取つて光明世界を現出するのだから、此の分こそ分けて置く必要があると云へよう。

昔は月の光が却つて日光より強かつたから、日が沒しても夜とならず、人々の困苦は實に甚しかつた。ところがその頃勇敢な二靑年があつて、どうかして月を殺して人々を救はうと思ひ立つた。そこで長い繩を作つて其の端を柱に結びつけ、他の一端を持つて東へ東へと進んだ。そして天にも達する程となつたから、今日こそ月を射ようと待つてゐた。折しも東の雲間をわけて爛々とした大月が昇つて來たから、狙ひすまして兵と放つと過たず中央に中り、見る見る血汐がたぎり落ちて地上の水は爲めに熱湯となつた。一人は機みを食つて熱湯の中に轉び落ちて死んだから、殘る一人は素早く傍の岩窟に隱れて難を免れた。暫くすると月が西に入つたので外に出でかの長い繩を便りに家に歸る事が出來た。

ところが其後數月の間は日も月も現れないで、世は暗黑として咫尺を辨じない有樣に又々人々は苦しみ出した。燃せるものは悉く燃したから今は住むに家もない位である。こんな世が續くと以前にも增して恐しい事だとて、日每集つては相談した。そのうち太陽を祭る事に氣がつき、人々は早速餅を搗くやら、酒を釀すやう、豚を屠るな

ざ、心からの供物を捧げて、「早く出でまして我等に光を與へ給へ」と祈り續けた。

すると太陽も不愍に思はれたか、八月になつて少しく東に昇りかけた。皆々狂氣のやうに喜んでゐると、日は僅かに微光を投げたばかりで又東に沒した。これではならぬと更に祈ると、日一日と高さを加へ數日後には頭上に仰ぐやうになつた。次の日には稍頭上を西に過ぎたと思ふと、此の日は東に入らないで西に沒した。それ以來朝は東から出で、夕に西に傾く事となつた。月も亦其頃から再び現れて夜の世界を照す事となつたさうだ。併し光力は餘程弱くなつてゐた。

ツォ族　四社蕃

註　昔月が地上に近くて、光熱も強かつたが、「ォアイム」といふ鳥がまだ人間だつた時、ある日、月を射てその光を失はしめた。今でも月に黑點があるのは、其の時の血痕であるといはれる。（ツォ族　流々柴社）

昔天には月ばかりがあつて太陽はなかつた。それで年が年中、常闇の夜ばかりがうち續くといふ恐ろしい世界であつた。何しろ土地は陰濕であるし、草木は育たず、その上物さへ定かに見えないのだから不便此上もない。かくては人間の健康が日に惡くもなれば、有ゆる爭鬪や災妖が起つて此の世が今にも終るのではないかと人々は安き心もなかつた。

そこで或日大集會を開いていろ〳〵協議を凝らしてみたが、別にこれといふ名案も浮ばない、出るものは只吐息ばかりである。併し月は依然朦朧とした光を投げてゐる。その時一人の男がはたと手をうち、「さうだあの月の暈さへ取り除ければよいのだ、」といつたから、早速二人の氣の利いた少年を選んで月を射さす事となつた。

武器も兵糧も整つたので二少年は發足した。彼等は行く〳〵、桃、李、蜜柑を食つてはその種を植ゑつけて進んだ。かくて進み進んで數十年の後、漸く大地の西端に達する事が出來た。そして月の出て來るのを待ちうけ、先づ一人が一矢を放つと過たず中つたが餘り深くはなかつた。そこで次の男がうんと引き絞つて射た第二矢は物の見事に命中したから、さしも堅かつた月の面もうち破れ、肉塊は霰となつて飛び散り、湧き出る血潮は淋漓と落ちたぎつた。逃げ損ねた一人は呀といふまもなく、血塊に壓

されて命を隕してしまつた。そして危い命を助かつた一人は獨り寂しく歸途についた。と見ると月面を覆つてゐた曇は名殘なく晴れて俄かに光を增し、曾て見ない皎々とした姿を見せてゐた。そして歸る道には、先きに植ゑておいた李や桃や蜜柑などが見上げるばかりの大木となり豐かな實を結び、遠征幾歲月なるかを語つてゐるのであつた。めでたく歸社した時には、何人もこの老翁を知らなかつたが、やがてあの光明の世界を現はしてくれた勇士である事がわかつたので、社衆から神のやうに尊ばれながら幸福な餘生を送つたのである。

アヤタメの話

タイヤル族　大料崁蕃

昔「バルヤン」社にアヤタメといふ者があつて「チュイデアン」社に行つて婿となつたが、其の社のものは彼を忌み嫌ひ、いつか虐待してやらうと企てゝゐた。或時アヤタメが獵に行つて獸を捕へたが、社の若者が不意に叢から出て其の獲物を奪ひ去つた。アヤタメは赫と怒つたが其の場は怨を呑んで歸り、爐傍にごつかと坐つてつく〴〵考へた。元來負け嫌ひの男であつたから、假令全社の者を敵としてもどうして恐れようか、と拳を握つて意を決し、やがて徐に起つて肩から袋を取り外し梁に掛けて息んだ。

それから社人を相手に智惠比べをしようとて、老蕃等が集會所に集つて協議する時には、壯丁等と共に山に行つて籐の心を採る事をせず、唯一人河に行つて魚を捕つて老蕃等に呈したから、老蕃等は皆魚が美味いので彼を稱揚した。（現今でも老蕃等が協議する時壯丁が籐心を採つて來て菓子の代りに呈する習慣がある）。又壯丁等が打揃つて漁りに出ると、自分一人は獵に行つて多くの獸を獲て歸るので、老人等は又獸肉の美味を喜ぶのであつた。そして壯丁等が折角捕つて來た魚は誰一人顧るものもなく、目前に腐り果てゝ捨てられるのであつた。壯丁は忌々しさに堪へきれず、さらば我等もと獵に出ると、アヤタメは他社に行つて人知れず首を馘つて歸つたから、全社の老幼婦女子は皆集つてアヤタメの武勇をたゝへその周圍を踊り廻り、山なす獸も誰一人一瞥

さへ與へない。重ね〲の惜き振舞なので全社の壯丁は烈火のやうに憤激し、今は捨て置き難しとて集會所に集り、やがて來る正月の馘首祭の時に彼を殺さうと議決した。

愈々其の日は來た。數十名の壯丁は各々盃をアヤダメにさした。アヤタメも辭するわけに行かず思はず飲み過して、前後不覺の態となつたのを、此の時だと壯丁等は手に手に棒を持ち、寄つてたかつて所嫌はず打据ゑたものだから、あはれなアヤタメは腕は外れ、脚腰は起たず遂に不具者となつた。壯丁等は嘲り笑ひ「おいアヤタメ、よくも今迄我等を侮つた。天罰は覿面だ。今更悔んでも仕方がなからう。生命を取るのは易いが、それだけは助けてやらう。」といひながら、正體もないアヤタメを、二三人して擔いて養家に送り屆け、酒に醉つて家に歸る途中過つて穴に落ちて負傷したのだなどいひぬけておいた。

それから二年間といふもの、アヤタメは身動きもならず日々屋内に起臥してゐた。其間に子供は次第に成長して早水汲みに出るほどになつた。そして每朝かゝさず河に行つた。或日子供はいつものやうに瓢に水を入れ頭に載せて何氣なく集會所の前を通ると、一人の壯丁が彼を呼び止め、水を少し吳れよといひさま、無理に瓢を奪ひとり、水を飲む間に袋から錐を出しそつと底に穴をあけ、そ知らぬ顏で返した。子供は家に着いて瓢を見ると水は一滴も殘つてゐない。アヤタメは樣子を聞いて殘念には思つたが、自由にならぬ身體なので怨を飲んで泣くより外はなかつた。そこで再び水を汲ませると、壯丁は尙嫌らずに追つかけて來て孔をあけてしまつた。かうして三度まで我子を苦しめられては、アヤタメも怺へがたく齒をくひしばつて口惜しがり、いつか仕返しをしようと、只管全治を祈つた甲斐あつて、さしもの病も遂に癒えたのである。

或日彼は木で作つた鹿の足を袋に入れて擔ぎ、犬を連れて山に行き頂上に登つて四方を見渡してゐた。すると麓の河で「バルヤン」、「ビサナアン」兩社のものがしきりと魚を捕つてゐた。アヤタメは心竊に喜び、かの鹿の足を取り出し地面に歷然と足痕をつけ、それから山を下り河の傍に行き連れて來た犬を殺して、す早く河の中に埋めておいた。晝すぎてから、彼は「バルヤン」社に赴き、「自分が今日鹿を見出し其の跡を追つて麓の河まで來ると、貴社の壯丁等は我が犬と鹿を殺して河の中に埋めた。一體こ

れはよい事だらうか」と詰つたので、社人は、「無論惡事である。併しそんな事はない筈だ」と押問答の末、河に行つて檢べてみると、果して犬の屍が河中から出たし、鹿を殺した形跡疑ふ餘地もなかつたから、兩社のものは謀られたとは知らずに皆出て謝罪した。そこでアヤタメは重ねていふには、「我は別に贖物を欲しいので訴へたわけではない。唯貴社の者の行爲かどうかを確めようとしたまでだ。だから別に物を出して謝罪するにも及ばない。」とて今にも歸らうとするので、兩社の者共は彼を引き止め、

「汝の言葉は忝いが社の規則として、惡事を働いた時にはきつと謝罪せなければならぬ。若し今我等が謝罪せなかつたならば祖先の譴責を受けねばならぬ。どんな品でもよいから思ふものをいはれよ。若し直ぐにいはれないならば三日以内に云つてほしい」と切に乞ふたから彼は「それでは仕方がないから我が望を述べてみよう。併し一寸大きな事だからきつと驚くだらう」といつて言葉を切つた。兩社の人々は祖靈の譴責が怖しいので、どんな望でも差支ないといつてしまつた。占めたと思つたアヤタメは徐に口を開き、「我にサエロ（野）を與へよ」と望んだ。「一體何處の野が欲しいのか。」「ウパカラ及びウカラカクの野だ。」社人は大いに狼狽した。それは鹿や猪の最も多い野なのである。併し一旦誓つた事なので已むなくその野を與へる事にした。

アヤタメは喜び勇んで早速自社に歸り、老蕃に其の顛末を話し、數日後には「ウパラカ」、「ウカラカク」の野を燒かうと思ふから、その日は壯丁全部を出して下さいと願つた。老蕃も餘り嬉しいので壯丁等には謀らずに承諾してしまつた。そこで彼は更に郷里「バルヤン」社に行き、同じやうに話して壯丁を出させる事にした。

かくて其の日は來た。アヤタメは早朝から「チュイデアン」社の壯丁を率ゐて野の中央に陣取り、「バルヤン」社の壯丁には野を取り卷かしめ、若し野の中央に煙が上つたなら、其時一時に火をつけよと命じた。そのうち「チュイデアン」社の者が皆集つて來て野の中央に勢揃ひした。ところがアヤタメは頻りに袋の中を探してゐるやうだつたが、壯丁等に向つて「どうも大切なものを家に忘れて來た。それがなくては今日の仕事が出來ない。これから一走り取つて來るから。併し「バルヤン」社の方では野を取り卷き準備も出來てゐるやうだ。餘り遲れても氣の毒だから、兎に角我が野を出た頃に、

汝等は中央に火をつけよ。すると「バルヤン」社のものも勇んで火をつけるだらう。若しか鹿が飛び出しても先を爭ふな。猪に油斷して過するな」と戒めて急ぎ野を出た。後に殘つた社のものは時刻はよしと、草薙き拂ひ中央につみ重ねて火をつけると濛々とした煙が天に昇つた。それを見た「バルヤン」社の方では後れてはならぬと各々燧石を打つて火をつけたから、折しも吹きしきる南風に煽り立てられ、見る〳〵野は一面の火となつた。中央にゐた「チュイデアン」社のものは初めこそ鹿も逐つたが、四方から起る恐ろしい火の手に、しまつたとばかり逃げ出したが際限のない廣野であり、火勢は次第に強くて如何ともする事が出來なかつた。かくて全社の壯丁は無慘な最期を遂げてしまつた。

それからは他社のものまで皆アヤタメを怖れる事神の如く、實に威名遠近に轟いたのであつた。そして社内では他社から入婚があつても輕蔑することなく對等の社人として交際するやうになつたといふ。

アミ族　太巴塱社

イルルン社の英傑

昔、「イルルン」社に一人の英傑があつた。軀幹巨大容貌秀麗、勇力衆に勝れてゐたから年少なのに推されて一社の頭目となり、各社の老蕃まで悉くこれに畏服してゐた。當時我が部族の棲息した平原には强大な敵族「テブラ」が割據して勢威四隣を壓する程だつたが、我社にだけは一指も觸れる事が出來なかつた位である。その中頭目は居を山麓に移し同族二十四名と共にこゝに移つた。其後一婦人を娶つたが、彼の女は殊に美人の名が高かつたから人々は皆その好配を欣羨せぬものがなかつた。

敵族「テブツ」に屬する「パシカオ」社にも一人の偉傑があつて勇武絕倫で、早くも頭目の位置を占め、常に多數の部下を率ゐて異族の地に侵略を企て嚮ふ所敵なき有樣であつたから、夙に吾が族の頭目の武名を聞き、一度はこれと雌雄を決したいといふ心を懷いてゐた。偶々「イルルン」社の頭目が艶麗な佳人を得た事を聞き羨嫉の情に堪へず、終に意を決して進擊を我に加ふる事となつた。

我社の頭目はかゝる事とはつゆ知らず、擧家眠りにつき夢圓かな一夜、犬の吠える聲が餘りに喧しいので、愕き覺めると、戸外に喧擾の聲がする。すは事だと家人を起し外に出ると、敵族「テブラ」が犇々と襲つて來たのである。頭目は直ちに大刀を揮つて手當り次第敵を斬り殺したが然も我族二十餘人は悉く敵刃に斃れてしまひ無慘な敗北に歸した。此の時頭目の妻は自若として屋内に靜坐してゐたが、不幸にして敵に發見せられ終に捕虜の身となつた。そして敵族「テブラ」の「パシカウ」社に連れて行かれた。

そこで彼の「パシカウ」の頭目は有ゆる强迫を加へ遂に己が妻とした。間もなく彼の女は懷姙し期がみちて一男子を生んだから、「パシカウ」の頭目は非常に喜び二なきものと愛育し、殊に母は手鹽にかけ訓育苟くもせなかつたので、幼い時から勇力が群を拔き殊に射術をよくした。十三四才の頃からは、既に首狩の征途に出で、四隣の異族を震慴せしめた。從つて其の勇名は「テブラ」全族を壓し、「テブラ」(卑南族)を總統すべき未來の大頭目として畏敬を拂はるゝのであつた。

母は愛兒の勇名を聞いて喜ばぬではないが、彼が常に我が故郷の地に入り我が一族

の首を馘る事を企てる毎に、流石懷舊の情に堪へず、悲哀の涙に咽ばないわけには行かなかつた、尤も子供は母の出所素性は知る由もないが、自分が勇武を異族に振つても心から喜んで呉れぬばかりか、却つてうち沈む樣なのを見て、内心聊か不平がないでもなかつた。その中に子供は成年の班に入るべき年頃となつたから他の壯丁等を伴ひ、遠からず「イルルン」社方面に首狩の遠征に出ようと企てゝゐた。

この事を探り知つた母は、ある夜父が外出して居らぬを幸、其の子を膝下に呼び寄せ泣く〳〵語り出すのであつた。「汝はまだ何事も聞いて居らぬから、無論吾が身の素性を知るよしもなからうが、現在汝が朝夕に父と仰ぐのは眞實の父ではない。我はもと「ブヌシ」の一頭目の妻であつたが或る夜俄かに此の「パシカオ」社衆の襲擊をうけ、吾が夫は同族二十餘人と共に戰死し、妾ばかりは不幸にも生檎せられ、無理に「パシカオ」の頭目の妻とせられたのである。そして當時既に妾は孕んでゐたが、やがて恙く生み落したのが汝である。つら〳〵汝の面貌を見ると、戰死せられた父に酷似してゐるのが何よりの證據なのである。嗚呼想ひ出せば昔となつた。妾が捕虜の身となり剩

へ忍びがたい辱めを受けながら、耐へ忍んで今日に及んだのは、只汝の身の上を思つたからである。それに汝は今度又々ブヌンの地に出草しようと企てゝゐるさうな、知らぬからだといひながら、この母にとつては身を切られるやうな思ひがする」と嘆かれて、さしも血氣の青年も勇氣挫け果て泣き悲しんだ。やがて湧いてくるのは「テブラ」に對するいひ知れぬ憤懣の情である。「母よ、それぢや直ぐ今の父を殺し眞の父の仇を報いませう。」といふので、母は靜かに制し「いや／＼今になつては父に危害を加へるに忍びないし．第一我等母子の身の上も危いから寧ろ私かに此處を逃れて故山に歸らう。」とて夜に乘じ母子手を携へて山中に逃げ入つた。

夜が明けて「パシカオ」社の頭目は家に歸ると妻も子も居らないのを訝り、多くの部下に命じて百方搜索せしめたが更に手がゝりがないので、或は妻が故鄕忘れがたく子を伴れて逃げたのではあるまいかと疑ひ、悲憤に堪へないで直ちに武裝して其の跡を追つかけた。

さて又身を以て逃れ出でた母子は辛うじて一つの丘と一つの溪を越え漸く山深く進

み入つたが、何しろ長い年月がたつてゐるので方位さへ朧ろげに、故鄕の山河が明かでない。彼方にさ迷ひ、此方に彷徨ひ最早一歩も進めぬ位に疲れ果てた所へ、彼方の木かげから母子を呼びつゝ驅けて來るものがある。紛らう方なき「パシカオ」の頭目なので、母子はどうしてよいかと途方にくれてゐたが、やがて子は心を決して今は詮方もないと、身を叢の中に潜めゕ其の近づくを待ち一矢の下に射殺してしまつた。躍り出でた子は、父の仇、母の敵、思ひ知れと、首を刎ねようとするので、母は周章てゝ驅け出で押し止め「假りにも父と事へ夫と呼んだ者に、かゝる所業はあまりにあさましい事だ」とて傍にあつた柴草を刈り集め屍を蔽ひ置き、更に進んで山中に尋ね入つたが、其の日の夕方に一軒の家屋があるのを見つけ、喜び勇んで音づれると、幸にも我が同族の住居であつた。

其の時主人の物語りによると、『過ぎた年「テブラ」に襲はれて、我が一族が多く敵手に斃れた時、彼の勇敢な頭目は敵中深く斬り入り奮鬪し、敵勢のひるんだ間に、危急を脫して山上に逃れ、生命を全うした。そして更に部落を建て、新に妾を迎へて、今

は平和の日を送つてはゐるが、折に觸れて、先婦が敵に奪はれた事を想ひ、無念の齒切をすることがある』といふので、さては戰死とばかり思つてゐた夫や父は無事であつたかと、母子の喜びは譬へるにものもない位であつた。

其の家の主人は非常に同情を寄せ、一時も早く頭目に知らせねばならぬと山上さして驅けて行つたが、やがて頭目は飛ぶが如くに馳せて來て、手を取り合つては歡喜の淚にくれるのであつた。そして頭目は先婦がその時懷孕中の身だつた事を知つてゐたが、現在立派な丈夫となつてゐる愛子を見て滿足は一方でなかつた。そこで母子は頭目に伴はれて懷しい家に起居する事となつたのである。

かくて其の子は武勇の譽日に高く、父頭目に次ぐ程の勢力者となつたので、先きに「テブラ」のために屈辱を蒙つたのを報復しようとて、多數の壯丁を率ゐ「パシカオ」社に遠征する事となつた。その地の情況はもとより熟知してゐるので、夜に乘じて襲擊を企てたが、不幸敵方に偵知せられ逆襲をうけて、戰利なく退却する事としたが、敵は早くも退路を塞ぎ肉迫して來たから、さしもの勇士も惡戰苦鬪して漸く一方の血路

を開き、身を以て遁れ同じ「テブラ」の部落の卑南社の地に入り、一竹叢に潛伏してゐたが、終に同社の壯丁のために擒となつた、元來卑南社の頭目は義俠心に富んだ男であつたし、又今擒にせられた若者は、往年長く「パシカオ」社頭目の子として養育せられ、幼年の頃から勇名のあつた事を知つてゐるので、むざ〳〵殺すに忍びないで、何とかして彼を救つてやらうと思ひ、いろ〳〵手を盡し「パシカオ」社を宥めたのである。卑南社といふのは「パシカオ」社に對し宗社の關係があつたので「パシカオ」の社衆も澁々承諾するより仕方がなかつた。

そこで卑南社の頭目は百餘の壯丁を率ゐ彼れを護衞し、自ら「イルルン」社に來り擒にせられた若者を父頭目に渡し、丁寧な挨拶を交して歸つて行つた。それから我が族は永く卑南社を德とし異族とは屢々爭鬪を開いたに拘らず、嘗て此の社と和親を破つた事はなかつた。

プヌン族

カラペアトの遠征

昔カタグルアンといふ男があつたが、カラペアト、カルカルといふ二人の兄弟を持つてゐた。共に「カルカラン」社に住んでゐたのである。そしてカルカルは兩腕や胸部に刺墨を施し、且つ銀の枕を所有する程の傑物だつた。

或時「パダカ」(外國人)が船の上から望遠鏡で銀の枕の輝きを發見し、直ぐ船を停めて「カルカラン」社にやつて來て其の枕を望んだ。併し此れは社の寶物であつて他人に讓るべきものでないから、カルカルは伴つて「此れは妹メリクの夫のものだから彼の許しなくては汝等に渡せない」といつて拒んだ。すると「パダカ」は、「それぢや汝等を捕虜としてやらう」とて、カラペアト、カルカルの二人を連れて南下し「マタルン」、恒春方面に向つた。偶々カラペアトは放尿したいから暫く許して呉れと乞うたので「パダカ」も一憩した。その隙にカラペアトは逃れて「マシルシル」へ走つた。そこで「パダカ」はカルカルばかりを連れて行つた。

カラペアトが社に歸り着いて仔細を社人に告げたから、翌年テンブガン、パルフルの二勇士とカラペアトの三人でカルカルを取返すために恒春さして南下した。進み進んで「マタルン」に行つた時「土地に大小二箇の足跡がついてゐるので、誰か附近に居るのだらうと探すとパラン、リパランといふ父子が木の根に腰うちかけて木の實を食つてゐた。そこで汝等は何處の人かと尋ねると、南方をさして彼處だと云はれるまゝ連立つて行くと「リパデン」といふ所であつた。社に近づいた頃パランは小用をたすから一足先きに行けとて、稍後れたが、暫くして「我が領土はこれまでだ」とて道に木を横たへ逃げ去つた。そこで三人はリパランを連れて一旦歸社したが、其の後パランは己が子の後を追つて知本社に來り、前非を謝し、我等父子が先導してカルカルを探さうとてカラペアトと共に出發した。ところがパランは太麻里や「タバアン」をすぎ、「クラリン」に來た時、此の地が大變氣に入つた。我等は此處に定住しようとて動かないので、カラペアトも仕方なく只一人で進んで行つた。併し一人では危險だから、晝は叢中に隱れ夜になつて歩いた。かくて遂に「サカム」(臺南)の地に達した時始めてカルカ

ルに遇つた。そこで今迄の苦辛を述べ歸社を促したが、彼はそれを拒み、我は既に文字を學び爪を長くしたから、社に歸る事は實は嫌なのだと情ない挨拶に、カラペアトも一時は驚き惘れたが、此れも致し方がないとて再び一人で歸る事とした。そして淡水河にさしかゝつた時ドップランといふ女が檳榔子を探してゐるのを見たから、其の側に行くと瑪瑙の首飾があつたので、早速取つて嚥み下した。ドップランは人のけはひに氣づき、首飾はどうかしらと見ると影も形もない。そこでカラペアトを責めたが、彼は知らぬといひつゝ衣を振つて見せた。訝しとは思つたが彼より外に人がゐないのだからドップランは兄弟を呼び集めてカラペアトを一層嚴しく責めたので、今は逃げるに若かずと、携へた弓を手にしたまゝ淡水河に飛び込んだ。ところが弓はよく水を開いて首尾よく河を渡つたから、彼等もそれを見て神だとして追跡を斷念した。

それからカラペアトは「マルバボイ」といふ所で脫糞して首飾を出さうとしたが駄目だつた。そこで「クラドゥ」についた時、再び上厠して首飾を出したから、それを携へて、「クラドゥ」社に入つて行くとダブルといふ女がゐた。彼は一見して心動き婿になりたいと思つたから、急いで「カルカラン」に歸り、檳榔子を山のやうに携へて再びダブルの許に行き緣談を進めた。ところがダブルは、「マヌブルトワンルマアウ」（妾の○○は幽谷のやうに深い）といつて容易に承知せなかつたから、彼も「マヌシアラガンパウドラン」（我が陽物は山のやうに偉大だ）と應へて遂に結婚した。そしてパシブル、ダナウの二子を擧げた。後になつてこの二人成長した時は、隨分苛酷な男で近隣に租税を取り立てる事が烈しかつたから、「アラタラン」の女テママワンは知本社から大頭目エンピルが來たのを幸、二人の苛斂誅求を告げたから、彼は煙管を差出して、若し二人が税を取り立てに來るやうな事があるなら、此の煙管を見せよ、慘い事もすまいからとて置いて行つた。今も「アララン」に其の因緣づきの煙管が殘つてゐるとかいつてゐる。

前に立戻るが、カラペアトは其の後首尾よく社に歸つたので、一伍一什の事を社人に話し、恒春に美地を發見したからとて、カリマラウ、タルタル、バラウルの三人を誘ひ、厭勝の道具を携へて出發した。かくて巴塱衛（パロエ）に行くと、其の地の者共が戰を

挑んだから、カラペァト等は早速呪文を唱へて海水を退かせ、海中の岩かげに隱れ、再び呪文を唱へて雨を降らしたから、巴塱衛の部衆は大いに怖れ一散に逃げのびた。四人は岩礁から出て恒春に向つて進んだ。偶々カリマラウの妻が姙娠したから、暫く巴塱衛の南の地に在つて分娩を待つた。そして健康が囘復するのを見て「トアブダス」に南下し、土地の肥瘦を占つたが、地味よろしくないと現れたから、尚進んで「パワラリラウ」に至り、其處で再び占ひ吉兆を得たから、新に社を建て、先きに馘首した巴塱衛人の首級を据ゑて祭つた。

其の頃附近の「トカシライ」の者が來つて、彼等に告げるには彼處に大蛇があつて害をするから、汝等の力で退治て吳れとて四人を伴れて行くのであつた。行つてみると「トゥトゥ」といふ大蛇である。早速呪文を唱へ大蛇を殺して歸つた所へ、又「トカシライ」の者がやつて來て「狂犬が居つて困つてゐる。どうかして殺して欲しい」といふので、彼等は餅を頭髮に包んで持つて行き、犬を見ると直ぐそれを投げた。すると犬は早速飛びついたが髮の毛のために口の自由を失つてゐる間に子犬を攫つて歸つた。そ

れを見た「トカシライ」の者は怖ぢ恐れたが、尚十分歸服しないから、四人は旱魃の祈禱を行つた。そこで二年間といふものは一滴の雨もなく旱天續きで、五穀草木まで皆枯れ果てた。するとさしもの頑固な「トカシライ」人も、「若し汝等がよく雨を降らすならば末長く配下となり納稅しよう」と願つて來たから、早速降雨の祈禱を行つたものだから、天忽ち曇り大雨が沛然と降つた。そこで「トカシライ」の者も全く歸服したから、四人は更に枋寮方面に進み荒ぶる敵を征服し武威遠近に振つたのである。

パイワン族　知本社

アケエヤムウムア

或家に一人の少女があつた。ある日河に行つて網を張り蝦捕りに餘念もなかつた時、ふと一本の美しい棒が流れて來て網にかゝつた。少女はそれを拾ひ上げて下流に投げやつたが、逆流して來て又網に入る。横樣に投げると復流れて來て網にかゝる。どう

しても流れて行かないので彼女も不思議に思ひ薪にでもしようとて、懐に入れ其の儘家に歸つた。そこで爐傍に蹲つて棒を取り出さうとしたが、どこに行つたか影も形もない。慥かに家まではあつたが、よにも不思議な事があるものだとその日は寢についた。

翌くる朝朝餉の仕度をしようとて未明に起き出で、腰紐を締め直さうとしたが、常よりも腹部の膨れてゐるのに氣づき、驚き惘れてゐるうちに腹痛に堪へきれなくなつた。そして間もなく男の子が生まれたので、家族の者共はまだ定つた夫もないに、如何した事かと騷ぎながらその子を仔細に見ると、これはしたり、顏ばかりは人間だが、身體一面にもじや〱と毛が生えてまるで熊のやうである。あゝ嫌だと手を放すと子供は笑ひながら立つて歩いた。それから五日目には早や成長して大人となつてしまつた。人々はアケエヤムウムア(毛の生えた神)と名づけた。

その頃社内で敵蕃に殺された者があつた。アケエヤムウムアはそれを聞いて社人に言ふには、「我は今から敵蕃に行つて彼等を全滅しようと思ふ、汝等ついて來い」とて

己れ眞先に進んで行くのであつた。進軍中夜になつたが、彼の身體から光が出て、目映い事まるで太陽のやうであつたから、路の隅まで照らされた。敵社に入ると忽ちアケエヤムウムアの身體から火を發しみる〱全社を燒きつくしたのである。かうした靈妙不可思議な働きが多かつたので、社人は神として畏敬してゐた。

併し彼にも命數盡きて、或日遠焉と逝つた。ところがその靈は社に止まり長く子孫の守りとなつた。例へば粟を煮るとて薪を燃しつけ、ふと用事に出る時でも、「アケエヤムウムア様火を守つてゐて下さい」と祈つておきさへすれば、歸るまで少しの危難もなく飯もうまく出來てゐたものである。ところが餘り神恩に狎れて或時祭祀を怠つてからはこんな事はなくなつてしまつた。

ツォ族　阿里山蕃　達邦社

註　此の話は同じ阿里山蕃でも流々柴(ららち)社では「ヤエプク」神として傳はつてゐる。卽ち次のやうである。

昔「ペオンシイ」といふ所に一人の娘があつた。或雨の降つた日に河に出て漁りをしてゐたが、余り濁水で魚の所在もわからないから、唯程よい所に網を張つて待つてゐた。ところが魚は一匹も捕れずに、短い棒が一本かゝつた。忌々しくて下流に投げやつたが、逆流して來て又網にかゝつた。

どうも訝しいので、そのまゝ棒を懐に入れ明日又來ようなどつぶやきながら、網を疊んで歸つて來た。

そして先づ彼の棒を取り出さうとしたが、何處に行つたやら影さへ見えない。不思議とは思つたが別に氣にも止めず其日は其儘過した。ところが翌日になると懷妊してゐる樣子である。餘りの事に家人にも打明けられず、病氣だといつて床についてゐたが、暫くして頻りに腰が痛むので、驚いて庭に出ると早や一人の男子を分娩した。見ると髮が一面に生えかぶさりまるで熊のやうな兒である。暫くして步き出し齒列も大人の如である。そして五日もたゝぬうちに早山に行つて狩し、大熊を雞かなんどのやうに提げて來るのであつた。怒つて叫ぶと山岳も裂ける位だから社人は勿論近隣のものまで慴伏してゐたのであつた。

此の男の死後社人は神として尊敬しヤエプク樣といつてゐた。今でも庭石にゐて社人を守護してゐるといふ事である。いつかも或る處で家を改築しようとして庭石を動かさうとしたが、どうしても動かない。そこで止むなく知母勝社の頭目を賴んで來て祈禱をすると漸く動いたといはれてゐる。

蛇の子

昔「ブラン」社の者が山の中を步いてゐると、不意に嬰兒の泣聲がする。不思議に思つて聲を辿りながら近づくと、一匹の蛇が可隣な乳呑兒を卷いてゐた。そして蛇が時々その子を嘗めると、其の兒は忽ち蛇となるが、甜め止めると又もとの嬰兒となるので、其の男も氣味惡く思つたが、人間の子をみすく蛇に食はすのも不愍だとて、無理に其の兒を抱いて家に歸つた。先づ藷を與へたが食べない、粟をやつても食べない。

仕方がないので米の粉を食べさせると始めて食べ出した。

それから毎日米の粉を食べさせて育てたが、長ずるに從ひ膂力飽くまで強く、十二三歲の頃には社中誰一人彼に敵する者がなかつた。

或時敵蕃が襲つて來て、社の者が水汲に行かうとするのを途中で射殺した。すは事だといふので、社人は皆武裝して驅けて行つたが、蛇の子供は先づ八本の籐で腹を卷いた。これが彼の武裝なのである。そして集會所に登つて下に飛び下りた。ところが籐はぷつりと切れた。そこで更に八本の籐で腹を締め再び飛び下りてみたが、今度は切れなかつた。これでよしといふや、彼は疾風の如く驅け出し、先きに進んだ社人を追ひ越して先鋒となり、勇しく敵に向つた。彼の兇蕃が斬らうとすると、彼は忽ち大蛇となり、敵を斬る時は人となるので、敵はこの神秘力に胴膽をぬかれ、一人として刄向ふものなく、悉くその場に命を隕したので、讐は忽ち報いられた。

ツォ族 阿里山蕃 流々柴社

山幸

昔二人の兄弟があつた。兄は常に山に行つて多くの鹿を獲て歸るが、弟はたゞの一匹さへ獲る事が出來ない。どうして兄ばかりが澤山の獲物があつて、我はかく不獵なのか、きつと秘法があるのだらうとて、或日篤と兄に尋ねた。すると兄は別に秘法といふものはないが、たゞよく氣を落ちつけて狙ひさへすれば鹿を獲る事疑なしと答へた。ところが弟はなか〳〵合點行かず、きつと何かあるに違ひないと思つて、或日兄が水汲みに行つた後で、兄の所有の矢を見ると鏃が皆鐵である。其頃蕃人の使用した矢は骨鏃ばかりで獲物を狙つても容易に刺らないし、たとへ刺つても死ぬ事なく遠く逃げ去つたものである。ところが或時兄は狩に行つて或る山を廻つた時、小さな鐵を得てそれを鏃としたから、射るが最期獸は其の場に斃れるのであつた。

弟は其の矢を見て怪み、「何故に兄は我に秘すのか、兄弟の仲だに忌々しい事だ」と怨み、それから木綿切を手に持ち、「これからは上手な獵夫にばかり鹿を得しめよ、拙

劣なものには一匹の鹿をも得させるな」と祈りながら其の布切に火をつけると、異様な臭氣が漲り鹿は遠く逃げ去つた。それ以來眞に射撃の熟練な者でなくては鹿を獲ることが出來なくなつた。

（ツォ族　四社蕃）

ソオエイの話

昔ソォエィといふ勇壯な男子があつた。或時「ピノヒオン」の山に狩獵に出かけ、一頭の熊を射たが、熊は負傷したまゝ逃げて行くので、彼れは血痕を辿りつゝ、漸く崖地で追ついた。ところが死物狂になつた熊が俄かに反撃して來たので、過まつて斷崖から幾十丈の溪底に顚落して死んだ。それから其の地を「ソォエィ」と呼び勇士の名を記念する事となつた。

（サイセット族）

アウイランゲ

昔アウィラング、シリラングといふ二人兄弟があつた。弟シリラングは温和な小兵であつたが兄は容貌魁偉でよく長刀を使つた。彼の刀は恐ろしい長さで、その鋭利な事は止まつてゐる蠅さへ斬れる位であつた。或日彼は平地の蕃社に行き或家の梁に登つて、敵や來ると待つてゐた。それとも知らず平地蕃はその日の業を終へて家に歸つて見ると、梁上に大の男があつて今にもおちかゝらうとするので、驚きあわて社衆を呼び集め手に〳〵刄を持つて四方から攻撃した。ところが彼は悠々と煙草を喫し、煙管を「タウカン」に納めてやをら衆に向ひ、「汝等我を殺す氣だな、よし斬れるなら見事斬つて見よ。」と睥睨するを、敵は小癪な空巣狙ひめとばかり、抜き連れて斬りかゝつた。ところがアウィの身軀に生えた毛が一時に「ヴーヴー」と唸り、どうしても斬る事が出來ない。そのうちに彼は五十人を斬りすてた。實に水もたまらぬ手練である。そこで年老いた者の首級五箇だけを携へて社に歸り、社衆に向ひ高慢の鼻を高めるので

あつた。

それを見た弟は兄の振舞が餘り傍若無人なので、いつか戒めてやらうと思つてゐた。すると間もなく兄は再び出草するのでシリラングも共について行き、兄弟一本の木に登つて偵察すると、兄は大勢のものが集つてゐるのを見、弟はたゞ一人で耕作してゐる男を見つけた。そこで二人は急いで敵地に侵入し、各々目がけた敵を追つたが、兄の方は悉くちり〳〵に逃げたから手を空しうして歸つたが、弟は最初から一人を目がけ不意を打つたから、見事馘首する事が出來た。それから家に歸りついた時兄に向つて暫く長刀を借してくれと願つたが、兄は一言にこれをトけて、「汝のやうな小男が如何して我が刀を使はれようか」と笑つてゐるので、弟は馘つて來た首級を木の枝に載せて見せたから、兄も大いに恥ぢ、それからは餘り大言も吐かず、弟を愛するやうになつたといはれてゐる。

或時アウイが七脚川社の頭目と出遭つた事がある。頭目はアウィに向ひ、「今から一月後に汝と薄々社の後方で遭はう、どうか」といふ。アウィは諾と答へたから、更に

頭目は「若しも我が薄々社の後ろに來る時は煙をあげて合圖をするから、それを見て來い」といひ捨てゝ去つた。

やがてその日が來たのでアウイは約束の如く、薄々社の後方に行くと煙が騰つてゐる。それを目標に進んで行くと、何時の間にか弟が追ひすがつて、氣がゝりだから如何しても一緒に行かうとて聽かなかつたから、止むなく二人で行つた。すると弟は兄に代つて先づ頭目に會ひ、隙を窺ひ携へてゐた槍でその片腹を衝いたから、頭目は大いに怒つて弟を斬らうとする。アウイはすかさず弟に加勢して遂に頭目を馘した。ところが其の首が、何時までも舌を出して怖しげだつたから途に捨てゝ歸つた。

兄弟二人首尾よく頭目を馘首して歸りつくと屋内に腰掛が二つある。アウイは必ず姦夫が來てゐるのだと思つたから、妻に食事を命じ、その肉を切らうとする所を不意に兩手を切り落してしまつた。そして寢臺の下から姦夫を牽き出して嬲り殺にし、腹も癒えたとて、弟に妻の妹を迎へて來させ強いて己が妻にした。

サゼク族　外太魯閣蕃

ロブゴツの話

昔ロブゴツといふ膂力飽くまで強い者があつた。そして常に社人を苦しめてばかりゐたから、弟のルンパツは其れを見かねて一つ懲してやらうとて、或日強弓を引き絞つて兄の胸を射た。不意を打たれたロブゴツは驚いて飛び上り、やがてどしんと地上に降りると、さしもに堅い大地が掘れ窪み、兄の身體はそのまゝ、地中に埋まつてしまつた。

サイセツト族　大隘社

大凧

昔、ある所にルガド、ムラコといふ仲のよい兄弟があつた。或日ムラコが外出したが、何時まで待つても歸らなかつたから、あちこち探し廻ると、ムラコは「ブノック」社に行つて甘蔗を盜んでゐた。兄もよいことがあるものだと、それからは二人で毎夜

盜みに行つた。

「ブノック」社では多分山猫が惡戲をするのだらう位で、始めは氣にもかけなかつたが、夜になると時々「キキキ」と音するかと思ふと、「ドゥドゥドゥ」と響くのが、如何にも訝しいから、或は人でも來て盜むのではなからうかと氣付いたから、晝の間に社人は畑に灰を播いておいた。翌くる日人々が檢べてみると明かに人間の足跡が印されてゐたから、其の夜は多數の人々が見張りしてゐた。それとも知らぬ兄弟は尙も懲りずにやつて來ると、忽ち社人に包圍せられ、兄は辛うじて逃げおふせたが、弟ばかりは捕はれの身となつてしまつた。

そこで兄はどうかして弟を救ひたいと、いろ〳〵工夫の上、遂に大凧を造りそれを揚げると、凧はうなり〳〵「ブノック」社の方に延びて行く、社人があれよ〳〵と不思議がつてゐる間に、弟はす早くその凧つぽにつかまり、難なく社に歸る事が出來た。今卑南社の「クラルム」といふ所にある大きな石は此の時凧の絲を卷きつけた杭である。

パイワン族　太麻里社

大南社の勢威

昔バサカランといふ勇士が「キントボル」から「パナパナヤン」に來りリヒンといふ佳人を娶つてアルカルマンを產んだ。彼は父にも勝つた傑物であつて長ずるに從ひ益々大志があつた。だから知本、太麻里などの平地蕃を悉く征服して、威令遠近に行はれた。其の後大南社に移つた時には、呂家社、馬蘭社以下多數の分社があり、其外各地から大南社に納税するものが多かつた。

粟祭の時などでも「ラボアン」、「ダドル」、「タマラカオ」、「アデル」、「キノラン」、「ウダイ」、「バルル」、「ウタプガン」、「カバダナ」、「カリムドムド」、「トクボル」、「キナダルワン」、「サラケリ」、「カリシ」、「ヤグアグル」、「キナベリ」、「トゥスパイワン」、「キモル」、「タラバサン」、「ラララウ」、「パリラヤン」などの各社から必ず肉と餅とを献じ、且つ一日中「バリュース」「ドゥマララス」二家の仕事を手傳つたものである。

パイワン族　大南社

第六　怪異奇蹟

雷神キワイ

昔昔、或る家にジワイといつて絶世の美人があつた。雷神キワイは美しい若者となつて天降りこの娘を娶られた。或日キワイは姑に向ひ、「これから山に出て開墾しませう」といつたので、姑は大喜びで我家の山はあすこだよと指しながら、「妾も婿殿に加勢しよう」とて跟いて來た。

山につくと彼は鎌も手にせず、鍬も持たず、林のまつ唯中に突つ立ち踏ん反りかへり、胸も裂けよと氣息を吸ふかと思ふと、やがて山谷に響く大聲を發した。見よ、さしも鬱蒼としてゐた樹木はさながら暴風に吹きあらされたやうに根こぢになつて悉く倒れふしてしまつた。そして二度目の氣息には倒れた樹木がすつかり附近の叢中にはね飛んでしまつた。そこでキワイは驚き惘れてゐる姑を尻目にかけ、徐に籠の中から夕顏、

瓢、胡瓜の種をつぎ〳〵に取り出しては。耕地狹しと播きつけた。餘りの事に姑は、稗か黍ならいざしらず、このやうなものをどれ程播いても役に立たぬに、さて〳〵愚かしと憤つた。婿は莞爾と笑ひながら「母上よ御心痛め給ふな」と慰めながら歸つた。かくて一二度草など取るうちに、早くも收穫時となつたから、婿一人畑に赴き、夕顏、瓢、胡瓜の數々をもぎ取り運び込み、家の前に山と積み重ねた。姑は震ひ戰きながらかやうに多くの夕顏は食ひ盡せないなど愚痴をこぼしてゐたが、キワイは一向耳にもかけず、今に見よとばかりせつせと乾してゐた。

其後數日、干し乾かした夕顏の一つをとつてザクリ截り割くとこは如何に、中には米と粟と稗とが充ち滿ちてゐた。今の今まで小言ばかりいつてゐた姑も後悔して良い婿だつたわいと心竊かに喜んだのも束の間、得意の微笑を漏じてゐた婿が、夕顏の中から粟を掴み出しては生のまゝ食べるのを見て、又もや呆れはて思はず知らず、「待て〳〵婿殿、生で食べずとも炊いては何うか」と腕を捉へおしとゞめ無理に炊かせたが、暫くすると天地も裂けんばかりの大音響を發し鍋は愚か家も人も迹形もなく燒け失せ

てしまひ、そこには青々と茂つた山芭蕉の葉が夕嵐に戰いてゐたといふことである。

タイヤル族　鹿場蕃

ボトンリナマイ神

太古ボトンリナマイといふ神があつた。又の名はイドックと申したが、偶々女神を失はれて侘しく暮してをられた。或日神はふと天降つて奇密社の井の側に立つた。丁度その時ルガチリガリンといふ少女が水を汲まうとて井戸に來ると、美しい男が立つてゐるので思はず瞠めてゐた。すると少女に向つて、「我はもと天上に住んでゐた神だが、下界に降つて妻覓ぎするのである、麗し少女よ」と優しくいはれたから、少女は直ぐ家に歸り父母に詳しく告げた。すると兩親も大いに喜んでリナマイを呼び迎へて婿とした。

其の頃は「マリウマ」の節なので壯丁は悉く畑に行つて木を伐り草を刈り寸時も休む

暇がなかつた。ところがボトンリナマイは一向畑に出ようとはせず毎日家に籠つて絲を綯つてばかりゐた。父母は目に餘つたが暫くする事を見ようとて小言も云はなかつた。すると五六日經つてから、リナマイはかの長い綯り絲を持つて山に行きその麓を廻して結び合せ、一時にうんと引くと鬱蒼と茂つた森林は悉く伐り拂はれた。兩親は驚いて流石に神業だと譽めちぎつた。それから社の壯丁等は又草刈に日も亦足らぬ有樣だつたがリナマイは毎日遊んでばかりゐた。そして五六日してから彼は河に行つて澤山の蝦を捕へて腹も裂けるばかりに食つたが、やがてのそ〳〵畑に出て行つて、稍々腰を屈めて天地に轟く放庇をすると今迄堆く積み重ねてあつた草木は一時に附近に飛び散つた。それから數百の獨樂を作つて廻したから、殘つてゐた木の根草の根は悉く隣の畑に飛び散つた。隣人は腹立しく思つたが、天上人の所爲だからとて恐れて何事もいはずにそれを見てゐた。すると彼は竹、瓢、南瓜を植ゑつけたばかりで米や粟などは少しも蒔かなかつた。かくて數箇月の後作物が黃熟したので社人全部を傭つて、廣々とした畑から無數の南瓜や瓢を運び家の庭に積み重ねた。そこで彼は腰に帶びた

一刀を拔いて竹を切ると、中から豚が現れ、南瓜を截ると米が溢れ出でた。瓢の中からは粟が出たから、その米と粟で酒を釀し飯を爨ぎ人々を饗應して、澤山の米や粟を土産に贈り勞を謝したから社人は悉く滿足したのである。ルガチリアンの父母はかうして忽ち富貴の人となつた。

やがて妻のルガチリアンは姙娠したやうであつたが或日夫ボトンリナマイは妻に向ひ、「俺は俄かに兩親に聞きたい事があるので昇天したい、暫くの間だから留守して下さい」といふと、妻はなか〳〵聽き入れずに、「妾もどうぞ連れて行つて下さい、一人留守せよとはつれない事です」と强ひて夫の後から梯子を登つて行つた。ところが途中で大欠伸する機みに足踏み外して梯子から轉びおち、東の海の眞直中に沈んで敢なくなつた。リナマイは口惜しく思つたが、今更致し方もないので、泣く〳〵父母の神々に對面して始終を話しそこ〳〵に下界に降りて來た。併し心を慰める妻がないので社人相手に氣を紛らさうとした。或時社人が漁りに出で獲物を分配しようとする所へ通りかけたリナマイは、我にもその魚を分けよといふと、働きもせずに虫のよい事を

いふものだと拒んだから、早速呪文を唱へると忽ち魚は炭となつてしまつた。それから間もなく全社の壯丁がすつかり鹿狩に出掛けた時體毛を拔いて氣息を吹きかけると忽ち男となつたから、「ミゴハ」(夜遊)に行けと命ずると、その男達は早速全社の女に「ミゴハ」した。山から歸つた眞の夫たちは餘りの惡戲に憤つたが、神人には如何ともする事が出來なかつた。その外猪になつたり、材木になつたりしては社中の男女にからかつてゐた。今でも姙婦が死んだ時ボトンリナマイを祭るのは、リナマイの妻が姙娠中に梯子から落ちて死んだ事から、姙婦は死後リナマイの「ババヘ」(妻)の仲間に入ると信ずるからである。

イドック神

アミ族　奇密社

天上にイドックといふ神があつて、或時下界を覗いて見られると人類が住まつてゐ

るので、太巴塱社に天降り、ルメといふ美人を妻として通はれた。そのうち、イドックは再び天に昇つて二節の竹と二つの「パパク」とを携へて來た。それからは畑に出る事もなく、常に屋內に潛んで絲ばかりを綯つてゐた。家族はそれを見て不思議に思ひ、隣人はその愚を嘲り笑つた。かくてイドックは千尋ばかりの絲を作つたと思はれる頃、山に行つて諸所に「コアチン」を立てそれに絲を結びつけて麓を卷き、兩端を堅く結び、力をこめて引くと、百雷の一時に落ちるばかりの大音響を立てゝ、たつた今まで欝々蒼々としてゐた樹木は一時に倒れ伏した。それから十數日たつて樹木の枯れた頃に火を放つと、風に吹き煽られて見る／＼全山を燒き悉してしまつた。そこでイドックは獨樂を持つて山に行き絲をかけて廻すと、獨樂は轉々として燒け殘つた樹根を見る間に他人の畑に飛ばしてしまつた。畑主は大いに腹を立て、いかに「カワス(神)」とはいへ人の畑に樹の根を投げる法があるかと憤つたが、彼等はイドックの神術に怖れてゐたから、夜の間にそれを再びイドックの畑に投げ返しておいた。翌朝イドックが畑に行くと此の樣なので、忌々しく思ひ畑の眞中に立つて尿すると樹の根は皆流れて再び他人

の畑に入つた。そこで早速「パパク」(夕顏)の種を蒔き始め忽ちにして畑一面に蒔き終つた。養父はイドックの術に感じてゐたが、米か粟かと思ひの外夕顏ばかり蒔いてゐるので、打擲せんばかりに叱りつけた。併しイドックは只、今に收穫の時を待たれよと兩親を和めて其の場を納めた。かくて夕顏は數日ならずして發芽し、一莖が出る毎に花をつけ實を結んだ。イドックは喜びながら毎日毎日倉を建てゝ其數も兩手の指の數となつた。兩親は其の意を知らずに、何故倉ばかりを建てるのかと叱責したが、今度はどうしても聽かず、稍聲を荒らげながら、「我には我の考がある若しも好かれずは去るばかりだ、それよりも庭に蓆でもしいて我がなす所を見ては如何です」。といふから母は、「白痴者を婿にして耻しい事だ」などいつて何れかに隱れた。併しイドックは家族の不平を物ともせず、自ら蓆を敷いてその上にあがり、身體を振ると體毛が落ちて忽ち人間になつた。そして父母の知らぬ夜の間に、彼等を連れて畑に行き數百の夕顏を運ばした。翌朝山と積んだ夕顏を日に乾し、刀を揮つてそれを切り割ると中から熟した粟が出た。驚く家族を尻目にかけ瞬く間に數多の夕顏を切り盡したから、庭に粟

の山を築いた。そして人々に命じて急いで穀倉に入れると忽ち十箇の倉は滿ち溢れる位であつた。

今の今まで白痴者と言つた兩親も流石にイドックの神術に感じ社人も神と稱へた。然しイドックは私に思ふやう、「我絲を綯つた時は社人皆馬鹿者と譏り、夕顔を蒔いた時は兩親まで言つて止まなかつた。そして今更神でもあるまい、一つ社人をからかつてやらう」とて、或日社衆が河狩の獲物を分配してゐる前を通ると、今迄潑溂としてゐた魚は忽ち黑く堅い物となつた。社人は驚き周章てゝイドックの跡を追ひ、前非を悔いて罪を謝すると忽ちもとの魚となつた。そして此の時黑く堅くなつた物を「アタングイドック」といつた。此れ今の石炭である。又或時疲れたから休まうとて地上に橫はると忽ち材木となつた。耕作から歸つた社人が、これはうまいと擔いて歸り庭に下すと忽ちもとのイドックとなりすまし、呵々と笑ひながら行つてしまふ。時には又流木となつて河岸に橫はつてゐると、社人が蕃刀を揮つて切らうとすると、「おい俺だよ」とそこにニコ／＼笑ひながらイドックが立つてゐる。時としては鹿になつて山

や畑を走り廻ると、人々はそれ鹿だと鍬や刀を投げつけて追つかける。イドックは忽ち姿を隱して、かの鍬や刀はどこかに打ち捨て、素知らぬ顔して社に歸つてゐるやうな事もあつた。併し間もなく彼は再び昇天してしまつた。

イドックのかうした事跡は今に社人には影響を及ぼしてゐる。魚を分配してゐる時に他人が通ると必ずその人にも分けてやる事もさうだし、自分の耕作地を擴げて他人の境界を破つたり、塵芥を人の畑に投げ棄てたりせない事もさうだ。それから粟の刈入れの時は全部を運び終るまで穀倉に入れない。そして其の日は必ず豚を屠つて祖先及イドックを祭る事となつたのである。

（祭祀の條參照）

アミ族 太巴塱社

註 前項と大同小異だが多少色彩を異にする所もあるのでそのまゝあげた。以下の數話も悉く雷神說話なのだが、やはり此の意味に於て列記の煩を敢てした。

イロク神

大昔は天が非常に低くて人々は立つて歩く事も出來ない位であつたから、天に在す

神々はそれをお憐みになり、數多の鳥を集めて天を上げるように命ぜられた。然し一羽として能く天を上げるものはなく、唯翼を廣げて搏くばかりであつた。その時「タッチユ」が飛んで來たが、諸鳥の氣の毒な勤勞には助力する事もなく樹の枝に止つて節面白く歌ひ始めた。するとその聲を聞いた諸鳥は一時に活氣づき、諸共に翼を振つて飛び上る勢がすさまじかつたので、天は次第〳〵に上つて行つて今のやうに高くなつた。

此の時天上から諸鳥の活動を見て居られたイロクといふ神がふと天降つて來てタナヤラワンといふ美しい娘に通ひ始め遂に夫婦となられた。そしていろんな奇蹟をやつては社人を驚かしたり揶揄つたりした。或時社人が三仙臺の岬に出て、豚肉を餌として魚を釣つたが、鉤は度々引かれても一匹も釣り上げる事が出來なかつた。そして空しく餌ばかり取られるから不思議に思つて海中を覗くとイロクが水中に潜つてゐて豚肉を取るのであつた。其後社人が畑に出て除草を行つてゐるのを見てゐたイロクは呵々と笑ひ「汝等のやうにいくら汗を流しても、そんな迂遠な事では何時畑が出來るかわからない、一つ我がする樣を見よ」とて、一本の樹枝の先きに紐を結びつけ地上をうち拂ふと、草木は皆飛び散つて忽ちに畑となつた。人々は呆れ果てゝ這は神だと譽めはやした、其のうちにイロクは瓢の種を蒔いたが、其後數月も經たぬうちに瓢が熟して收獲れた。見ると幾千とも知れぬ瓢で社の隅から隅まで埋れてしまつた。社人は唯呆れに呆れて眼を瞠るばかりであつた。イロクは人々の嘲笑を物ともせず、數日の後に社内を廻り得意の色を現しながら「天人は勞せずして得るもの多く日に榮え行くものだ、下界の人は日夜營々と働いても得る所が少い、これを見よ」とばかり瓢をうち割ると、粟は恰も甕に溢るゝ水のやうにこぼれ出た。社人は雀躍して喜びイロクの德を稱へるのであつた。此の時イロクは衆に向つて戒めていふやう「汝等此の粟を家に運ぶはよいが、すつかり穀倉に納めるまでは決して魚類や龜を食べてはならない、それから決して女に戯れてはならぬ」と。所が一人の愚かな壯丁が、魚を食つてその翌日穀倉を調べても何の變化がなかつたから、イロクの戒めも案外當てにならぬ事だと、更に龜を食ひ倉を開けるとやはり何等の變化もない。そこで物好きにも女に戯れて翌

日穀倉を見るとさしも山と積んだ粟が跡方もなくなつてゐた。それから今に蕃人の粟刈期には嚴に房事を愼むさうだ。

チヤウダイ

アミ族　海岸蕃

大昔の事、ある所にチアウダイといふものがあつた。或る娘の婿となつたが生來至つて怠け者で何一つする事もなく遊んでばかりゐるので、「養母は非常に怒り汝のやうな懶惰な男は離縁するからとく／＼立去れ」とはいつたが、妻との情誼濃かなので、ついそのまゝで年月を過してゐた。或日チヤウダイは獨り小屋に籠つて獨樂を二籠造つた。堅く戸締はしておいたが、何時の間にか父の目に觸れたので、又々怒罵を浴せられ、獨樂は燒き捨てられようとした。そこでチヤウダイはどうぞ暫く待つて下さいといつて鞭を作り麻絲をつけた。父は「たわけ者め蠅でも追ふつもりか」といふのを耳にもかけず、南瓜の種と「バサイ」といふ竹の實と「ベトナイ」といふ大竹の種を持ち妻に向つて畑に行かうと言つた。妻は夫の仕業が腑に落ちないので嫌だといふ。そこで母に頼んだが、「獨樂を持つて畑に行つて何が出來るか、行きたいなら汝一人で行け」と跳ねつけられたから、それでは一人でもよいが一番よく肥えた畑を敎へて呉れとてチアウダイは二籠の獨樂を擔づて出かけて行つた。一時は詈つたが餘り訝しいので母は辨當片手に婿の後を追つて畑に遣つて來た。すると婿は非常に喜び、あなたはそこで暫く休まれよといひつゝ澤山の獨樂をとり出し絲をかけて廻した。「汝等よく働け、決して怠つてはならぬ」と鞭をふると獨樂は懸命に廻り廣い畑を轉々とする間に忽ち畑は耕された。そこでチアウダイは靜に獨樂を集め籠に入れ、自分は携へて來た南瓜と竹の種を播いて歸らうとした。眼の前に奇蹟を見せられた母は一言もなく前非を悔いた。

月を經て畑には幾百とも知れぬ南瓜が美事に成熟した。チアウダイの家族では到底收獲が出來ないので社人の誰彼に依頼すると、「日頃貧乏で米も粟もない家が人を集め

て南瓜の收獲を頼むとはをかしな事もあるものだ」と口々に云ひ罵つてゐるばかりである。するとチアウダイは社中を觸れ廻り「今日の助力の報酬としては多量の粟と酒を與へよう」といふから、社人は臼と杵とを携へて集つて來た。南瓜は見かけより重くて一人で漸く四個位しか運べない。不思議だと云ひ合ひながら晝頃には漸く運び終つた。チアウダイは人々の勞を謝し、「さて今からお約束の馳走をしませう」とて南瓜を眞二つに割ると美しい米がさら／＼と溢れ出た。そして見る／＼米の山をなした。併し物好きな社人が試みても米は一粒も出ないで唯黃色な種がこぼれ落ちるばかりであつた。そこで早速米を搗き飯を炊き、魚鳥を料理して社衆を饗し、米を土産として持たせた。そして山と積んだ米は新築の米倉に納められチアウダイの家は一時に富裕となつた。

翌くる年は筍が生長し南瓜も亦よく實つた。チアウダイは又社中を廻り「ワーピナウラン、アパカダドゥマク、カコ、エタモアン、カシポロルト、カンハワント、アタクダバ、」（人々よ明朝刀と籠とを持つて來て仕事を手傳ひ給へ）と云つた。翌朝社人がチ

アウダイの畑に行くと、素晴しい大竹が生えてゐて二三人でなくては到底切り倒す事が出來ない位であつた。チアウダイは蕃刀を揮つて竹を割ると大竹からは豚が飛び出し、小竹からは瀧のやうに糯米が流れ出た。そこで粟酒を造り餅を拵へ豚を屠つて社人等を饗應したので、彼等はチアウダイを畏敬せなければならなかつた。

それから數年して或日チヤウダイは妻に向ひ、「俺は暫く里に歸つて來る、やがて此處に立戻るから安心して留守せよ」といふと、妻はどうしても一緒に行きたいと肯かないから打ち連れて旅に出た。丁度妻は懷姙してゐたのであつた。西へ西へと進んで或る高山に達したが、山路險峻で姙婦には實に容易ならぬ苦痛であつた。しかしながら夫に勵まされて漸く中腹に着いた時チアウダイは妻にいふやう、『如何なる事があつても決して「ホワイ」（困難）といつてはならぬ』と戒めたから妻も堅く誓つた。ところが次第に行く程に道窮つて、唯見る斷崖絕壁が攀ぢんとして攀ぢられぬさまに、妻は思はず「ホワイ」といつた。すると婦人の腹は俄に裂けて幾多の小蛇が這ひ出で女は立ごころに命を隕した。山間に蛇の多いのはこの爲である。そしてチアウダイの姿も二度と

見られなかつた。

リワイナビラ

アミ族　南勢蕃

昔リワイナビラといふ雷神が天降つて、そこゝ徘徊うてゐると絶世の美人に遭つた。リワイナビラは娘に向ひ、「自分は雷神だ、下界に降つて妻覓ぎをしてゐるのだが我が妻にならないか」といつた。娘は慇懃に「妾は知らない、父母がよく應へませう」といふので、雷神は娘と連れ立つてその家に行き、父の翁にあつて、「娘を下さらぬか、若し幸に婿となる事が出來たなら厚く報いよう」と云つた。老翁も一人娘の事なので、良い婿がねを探してゐた時であり、今若者を見ると容貌から態度からすつかり氣に入つたものだから早速承知して婿とした。

ところが婿は一日として畑に出ようとはせず毎日何する事もなく遊んでばかりゐるので、老翁も惘れ果てゝ或日嚴しく叱つた。すると婿はそれぢや絲を綯つて下さいと

いふので、老翁も不思議に思ひながら一束の絲を綯つて手渡すと、婿は更に刀を結びつけて下さいと願つた。老翁もいよ／＼訝しく思つたが、十ばかりの刀を結びつけたが、まだ足ぬといふから五十の刀をつけてやつた。そこで婿は老父と共に森林に出で、先づ刀を木の幹に刺し、絲で林の周圍を取り卷き、力をこめてそれを引くと忽ち樹々は伐り拂はれて廣々とした畑が出來た。そして其の畑に澤山の瓢を播いて置いたが成熟した時、其の實の中は悉く粟だつた。其後又二人で狩に出た時、翁は一矢に一頭の鹿を射て婿に示すと、婿は笑ひながら一時に四頭を斃した。翁も少し苛立ち「こんなに澤山の鹿を如何するか」と尋ねると「なにわけはない」とて一氣息吹くと五頭の鹿は皆家に飛ばされてしまつた。

何をさしても勝れてゐるから、老翁は今は小言もいはず大切にしてゐたが、その妻はこんな立派な夫を持ちながら、やはり我儘な振舞をする事が多かつた。或日も慵がる夫に迫つて無理に飯を炊かせようとして鍋を渡した。夫はこれだけは困つたといひつゝ鍋に手をかけると天地に轟く大音響を立てゝ、忽ち其の姿が消え失せて跡には一

本の芭蕉が殘つてゐた。

今でも芭蕉を火口とするのは雷神の化身で火を呼び易いからである。

サイセット族　ガラワン社

註　タイヤル族とアミ族の傳說を搗き混ぜたやうなものである。次の嫁が芭蕉になつた話も雷神說話に關聯したものである。それが次第に云いつぎ語り繼ぐうちに多少づゝ趣を異にして行つたのだらう。此の時の話者（ガラワン社のイバンワタン、ユーバイユミンの二人）の如きも、かういつてゐた。昔は月に一回づゝは必ず子供等に昔噺を聞かせたものだが此の頃は次第に廢つてゐる、我等が死ぬと社には古事を知るものが無くなるだらう、歎はしい事ださて老の眼を瞬いてゐた。

芭蕉になつた嫁

或家に嫁を迎へたが、至つて心がけのよい女であつて、毎日身命を忘れてまめ〳〵しく立働いたから、姑も非常に喜び何くれとなく勞はつたので、一家は恰度春風の吹くやうに和樂してゐた。或日姑は嫁をつれて畑に出でゝ耕作に從事したが、嫁は隙く暇にその廣い畑を耕し終り、やがて袋から種を取り出して蒔き始める有樣に姑もほと〳〵感じてゐた。ところが播いた種を見ると。悉く瓢の種ばかりで一粒の粟さへないから、餘りの事に姑も呆れはて、「今の今まで良い嫁女だとばかり思つてゐたのに、畑一面に瓢を播くとは、何とした白痴者だらう」と口汚く罵つたから、嫁は「それぢや種を拾ひ上げませう」とて、二十粒ばかりを殘して悉く拾ひとつた。

それから數日經つと早くも瓢が成熟したから、嫁はそれを庭に運び乾してから鎌で截ると、中から黃色い小さな粒のものが無數に現れ出た。側で見てゐた姑は驚いて近づき、手に取つて見ると紛れもない粟であつた。「あゝ粟だ、妾こそ誠に愚者であつた」と嫁を見やると、嫁は莞爾と笑ひ忽ち消え失せてしまひ、跡には一本の芭蕉が、バサ〳〵と風に吹かれてゐるばかりであつた。

サイセット族　大隘社

註　以上の諸說話は大體似よつてゐる。只雷神の名が違つてゐるのさ。多少趣を異にする所があるので煩を厭はず列擧したまでである。

天少女

昔ある所に一人の男が侘しく暮してゐたが、或る日の事、子を連れた氣高い婦人が現れ瓢を示していふやう、「此の中には粟といつて美味なものが入つてゐる、それに只一粒でも我等三人を養ふには十分なので、これさへあれば永久に餓ゑるやうな事がない、御身は何故日毎山に入つて獸を探す患を續けてゐるのか、若しも妾と同棲して下さるならば此の瓢を捧げよう」と詳しく播種耕作の法まで敎へた。男も一人寂しさを感じてゐた時であり、一粒の粟から千粒を得るなど聞かされては多少の好奇心も動き、遂に入れて妻とした。女は毎日まめ〲しく立働くので、常に夫に滿足を與へ睦じく暮してゐた。併し無論男は妻が天上の人であるとは知らなかつた。或日妻が水汲みに行つた後で子供がしく〲泣き出したから、何故泣くかと叱ると、いよ〲大聲をあげ絶え入るばかりに泣きしきつた 丁度そこへ妻が歸つて來て此の樣を見て非常に悲しみ嘆きながら、「一人よりない可愛い子供をよくもこんなに嚴しく叱る事だ、妾は緣があつて下界に降り御身と妹脊の契を結んだが、か丶る無情な夫に事へんより再び天界に歸り星とならう」とて先きの瓢を携へ子を連れて昇天してしまつた。男は悔んでも〲追ふ由もなかつた。それからといふものは、粟が餘り殖えないやうになつたのである。

ブヌン族　タケバカ蕃　卡社

龍女

昔社の若者等が出獵した時、一日中山を狩り暮し、へと〲になつて小屋に戻つて來ると暖かな飯が炊いてゐる。翌日も亦狩り暮して歸つて來るとやはり小屋にはちやんと飯が具へてある。次の日も次の日もさうだから、一體何者が殊勝な事をするのだらうと、不思議に思ひ或日出獵したやうに見せかけ叢の中に隠れて樣子を窺つてゐた。すると何處からか美しい小女が立現れて例の如く飯を炊き始めたから、若者達は不意

に飛び出して少女を捕へた。少女は驚き耻らひ唯顏を赧めてゐたが、ふと一人の男がその傍で尿したのを見て、思はず笑ひ出した。それが縁となつて少女はその男と妹背の契を結んだ。其の後結婚祝の餅を搗いて親にも贈らうとて、夫は妻に餅を渡した。すると妻はそれを持つて河の中に飛び込んだから夫は驚き慌てゝ大聲を張りあげて妻を呼んだ。妻の姿は漫々と湛へた深淵の間から見える。妻は「妾の家は水中にあるのです、あなたも來て母に會つて下さい」と手招きされても、男はこの深い淵が恐ろしくて飛び込む勇氣もなく、唯水面ばかりを見つめてゐた。すると母親らしい上品な婦人が現れて優しく招くので遂に思ひ切つて水中に飛び込んだ。水底には華麗な家があつて、善美を盡した結構、珍奇を極めた調度、何一つとして此の世のものとも思はれぬ有樣なので、いつしかそこに淹留して一子をあげた。併し年月を經るに從ひ夫は地上が懷くなり、水界を辭して家に歸り別に妻を迎へて暮してゐた。

すると或日水中の妻が突然やつて來たが新妻が出來てゐるのを見て非常に憤り、妻は互に嫉妬の大喧嘩を始め、遂に二人は自分の衣類を竿にかけて其の美醜多少を競ふ

事となつた。ところが後妻の衣類は僅かに二本の竿で十分であつたが、前妻の物は美しい上に數も多く十本の竿にも餘つた位であつた。敗をとつた後妻は悔しまぎれに前妻の衣類に悉く墨を塗り汚し胸ぐらとつて水中に歸れと罵つたから、前妻も止むを得ず水中に歸り去つた。そして別れる時己れの子を二分して其の一を夫に渡し他を自らとり、「二年後に又會ひませう、誰の取つた方が立派な人間になるか、その時初めて妾といふものがわかるでせう」と。さて二年後に前妻は約束の通り一人の子供をつれて來て見せた。併し夫の取つた方は既に腐敗して形もなかつた。夫は前妻を慕つた。併し彼の女はふり切つて水中に歸り、それ以來は復と姿を見せなかつた。

サイセット族　ガラワン社

不思議な棒

ツォ族のルルナナ姓に一人の女があつた。或日河に出て漁をしてゐると、一本の棒

が流れて來たから取つて川下に投げやつたが、逆流して來て再び網に入つた。横に投げると又流れ戻つて網に入る。そこで女は何氣なくその棒を拾ひ上げ懐に入れて歸つたが、間もなく棒は影もなくなつてゐた。不思議に思つてゐるうちに女は孕んで男子を生んだが、長じて異彩があり社人に神の如く敬せられた。（蕃社口碑勇カオ蠻參照）

ブヌン族　郡蕃

タブタベラスの祖先

昔サイカローといふ者があつて、或日河で釣を垂れてゐたが、たゞの一尾も釣れない。どうした事かと苛々（いらく）してゐると、やがて絲を引くものがある。占めたと早速引き揚げて見ると一匹の蛙だつたから、忌々しくて投げ棄てると、忽ちそれが人間に化した。餘り不思議だつたので、暫く養つて見ようとて連れて歸つたが、普通の人と少しも變る事なく成長したから、其後、妻を迎へてやつた。今のタブタベラスは其の子孫なのである。

サイセット族　大隘社

二神の奇遇

太古岩の中から出た一柱の女神があつた。其の頃は未だ地上には食物といふものは何一つとしてなかつたから、或時女神は天に向つて食物を乞うた。すると天に在す神がその聲を聞かれて數多の魚類や獸類や米などを授けられた。女神は米一粒をとりそれを二つに割つて炊ぐと温い飯が釜に滿ちた。

その頃常に河原の砂を食つて生活してゐた男神があつた。或日河原に降らうとすると途中で女神に遭つた。そこで男神は喜んで女神の許に婿入した。ところが男神はまだ米といふものを知らなかつたので、庭に列べた米飯を見ていつた。「こんなに澤山虫の卵を集めて何うするのか。」「いゝえそれは決して虫の卵ではありません、米といふ甘いものです」と答へた。併し男神は一向承知せずに、「斯んな不潔なものは皆捨てよう」とて悉く外に棄て、自ら河原に行つて砂を運んで來て甑に入れたから、女神は夫に逆らうのも本意なき事と思つてその場は其儘にして置き、留守の間に其砂を捨て

再び米飯を入れて置いた。ところが男神が歸つて來て食事をしようとすると、砂がなくて虫の卵が堆く盛りあげてあるので男神は大いに怒り「二度までも虫の卵を食べさうとは不都合である」とて又々笊を携へて外に出ようとするから、女神は押し止めて「それは天の神から授けられたものです、一口召し上れ、そして若しも口に適はなければ棄てゝもよいではありませんか、大體あなたは食はず嫌ひなのです」とて無理に飯を口に入れたが、實に非常な美味だつたので、男神もそれからは米を食べて砂などは見向きもしなくなつた。又女神は薪が不足した時は小さな木を拾つて來て、何か口に呪文を唱へると其の木が忽ち大くなつて庭一面の薪になつた。そして又二三粒の米を甕に入れて蓋をして置くと忽ち美酒が醸されてゐたといはれる。昔は不思議な神々が多かつたものである。

（ツォ族　四社蕃）

エゴフツ神

昔エゴフツといふ神人があつて、いろ〳〵な奇蹟を見せた。若しか河を渡らうとするとエゴフツの許に行つて頼みさへすると彼は直ぐ持つてゐる杖で水面を打つ。すると如何に深い淵でも水が四方に散つて淺くなるから、人々はたやすく渉る事が出來た。ところが或日エゴフツが畑の中を歩いてゐるのを見て、其の地主が非常に怒り、「この白痴め」といひさま棒をとつて彼をうち殺してしまつた。すると俄かに暴風雨が起りエゴフツの持つてゐた杖は水と共に小川に流れ出で、そこに止まり大きな淵が出來た。

それからは社人の水死が多くなり皆必ずこの淵に沈むのである。たとへ下流で死んだものでもやはり逆流して來て淵に入るので人々はこゝを恐ろしいものにしてゐる。今に溺死者がある時は元氣な若者の腰に綱をつけて水底を探さすのである。そして透明な碧潭の底には口の開いた鞄のやうなものを見る事が出來るさうだ。それがエゴフツの杖なのである。

（ツォ族　阿里山蕃　ララチ社）

昇天

太古此の地に天降つた父子の男があつた。併しその頃はまだ耕作の道を知らなかつたので、諸所方々を彷徨つては木の實草の實を探してゐた。ところが或日ふと異様なものに遭つたので不思議に思つて近づくと、耳目鼻口が皆ふさ〳〵とした毛で蔽はれて殆んど形さへ判らないものである。二人は「汝は何者か」といふと、「我は女である、汝等は妾の所へ來ては如何か、五穀が豐富で饑餓を知らない、そして日々汗を流して流浪する事も要らない。」といはれて、父子はその後について行つた。行く〳〵女の指す所は山といはず谷といはず盡く穀類に充ち滿ちてゐた。二人は羨望に堪へないで竊にあちこちの穗を摘んで行つたが、女がふと振向くとこの樣なので、大いに憤り斷りもなく人の物を盜む事があるかと大喝して地上を強く踏むと、忽ち火焔を發し濛々とした黑煙が立ち騰つた。二人は驚いて平伏しやがて頭を擡げて見ると、女の姿はなく唯一本の綱が天から下つて、その行く方を語つてゐるばかりであつた。子供の方がこ

りや不思議と驅け寄つて其の綱を握るとそのまゝ飄々として昇天してしまつた。今蕃社に女が少いのはかうした事―男の貪欲を嫌つて昇天した―からである。

ブヌン族　巒蕃

尾ある人

昔々エクルンとて尾のある人が穴居してゐた。或時地上に出て來て我社を訪ね饗應されたお禮に社人四人を連れて歸つた。四人は山と積んだエクルンの御馳走に飽いて大滿足だつた。ところが不思議な事にはエクルンは只湯氣を吸ふばかりだつた。其後又四人は不意にエクルンを訪うたが、彼は尾を隱す暇なく臼の凹みに入れようとして幾回も打ちつけたから、尾は中程から折れてしまつた。併し以前にも優る饗應をうけて歸つた。三度行つた時は既に入口に石を塞いてあつた。多分尾を折つた事を悔んでゝあらう。

ブヌン族　丹大社

註　ブヌン族イバホ社、昔巒大社の地に穴があつてイコロンといふ者が住んでゐた。尾があつたので常に孔を穿つた腰掛に坐つてゐた。米を常食としてゐたがそれも湯氣を吸ふばかりであつた。或時巒大社の者が數名其の穴の中に降りて行くと彼は大變喜んで米飯を出して饗應した。ところがその飯が非常に甘かつたから何うかしてその種を貰ひ受けようと、いろ／＼に乞うたがイコロンは拒んで與へなかつた。そこで社人は一策を案じイコロンの目を盜み竊に米と柿の種を陰莖の皮の中に隱して持ち歸つた。それから米と柿が蕃社にあるやうになつた。併し其後は穴の入口に石が塞がつてあつて交通は絕えた。

郡蕃東埔社の傳も大抵同じやうである。

卓社蕃カツト社、昔卓社の「ヒーラウ」社に大きな穴があつた。或者が覗いて見ると中で耕作してゐるものがあつた。そして狀貌などは地上の人と異らなかつたさうである。

地中交通

大昔は米も粟もなかつたから人々は腐敗した木や砂を食つたり、鹿や熊などを捕へては食つてゐた。ところが或時一人の男が山芋を發見したから、よいものがあるといふので、其の根を掘つて行くと非常に長くて拔いた跡は數十尋の穴となつた。そこでこの深い穴を窮めたいとて夫婦で鹿の角を集め、それを繩に結びつけて梯子を造りそれを傳つて下りて行つた。すると途中で大便を催したから遠慮なく脫糞したが、地の底から、「誰か穢い事をするのは」と言る聲が聞えるので、二人は驚いたが今更仕方もないので早く下りて謝罪しようと急ぎ下りて行くと、更に大きな穴があつて中では食事をしてゐた。併し別に何物も口に入れるのではなく唯湯氣ばかりを吸つてゐるのである。そこで二人は近寄つて行くと彼等も快く席を與へたから、種々のものを試みた。その中でも白く小さな粒があつたが此の上もなく美味なので、急に慾心を起し男はそれを爪の中に隱し、臍の中には大粒のものを入れ、更に大きなものは頭に載せて笠とした。女は女で種々のものを皆一つの穴から押し入れ腹に隱してしまつた。そこで暇を告げて梯子を攀ぢ地上に出で或る崖の下にさしかゝつた時、ほつと吐息すると崖は崩れて逃げ後れた女は壓死してしまつた。男は唯一人歸りついてかの種物を植ゑると、小粒のものからは粟生ひ、大粒のものからは豆が生え、笠にしたものからは薯が生えた。地中の物語を聞いた者は皆珍らしがつて我も行かうなどいつてゐたが、其後は誰一人其の穴を探つた者を聞かない。そして今でも崖を通る時には「ホー」と息する事を

愼むのである。

註 阿里山蕃の「ララチ」社では米を地中の人から得たので、それも快く袋に入れて貰つて來たことになつてゐる。梯子は籐蔓を用ひてゐる。その外は大體四社蕃に同じである。
今山に「スピイ」といふ草があるが昔米の不足した時に代用したものださうな。

（ツォ族　四社蕃　排剪社）

ラウリヤンの話

昔プラルヤン、モーカイといふ夫婦の間にラウリヤンといふ少年があつた。或日ラウリヤンは球を轉して遊んでゐたが、球は何處にか紛失してしまつたからあちこち探し廻つてゐると一つの穴があつた。或は此の中にでも入つたのではないかと衝いて見ると土が崩れ穴が廣がつた。不思議に思つて其の中を覗くと、地上と同じく人家もあり田野もある。そこでラウリヤンは物好きに降りて行き一軒の家の前に立つた。家の前庭に一人の老母がゐたから、此處はどこかと尋ねるとサラルムガンの家だと答へた。

少年は重ねて、「若しか球が轉んで來なかつたか」と尋ねた。老母は、「球は妾の家にあるが、容易くは返せない、先づ四五年は妾の家で遊んで行け」といふので仕方なくそこに止る事とした。

偶々地下の人々が狩獵に出るといふので、老母はラウリヤンを呼び、「汝も一緒に行け」と勸めたが、少年は獵具がないからと拒んだ。すると老母は「バイダ」を持つて行けばよいではないかと聽かないので、少年も致方なく出獵した。人々はラウリヤンの「バイダ」を見て嘲笑ひ麓に殘して山には入れなかつた。仲間を除かれた少年は憤りながら今に見よと待つてゐた。その所へ二匹の猪が飛び下りて來たから、「バイダ（棒）」を揮つて物の見事に二匹共仕留めてしまつた。そして人々の歸りを待つてゐたが、暮方になつて彼等は何一つも獲ないで下りて來る樣子に元氣づき、早速獲物を示すと、彼等は少年の豪勇に悃れてゐた。其後又河狩に出ようとする時、老母は寢具を持たせて遣つた。すると社人は又々ラウリヤンを侮辱したが、河に着くと早速寢具を淵に投じて無數の魚を捕へたから、皆々其の奇智に悃れ神業だと歎じた。馘首に出ても唯「バ

イダ」一本を持つて行つて平地人二人を馘首するので、社衆も嫉しく如何かしてラウリヤンを殺さうと計つた。ところが早くも覺つた少年は竹に石を挾んで地に立てると、其の竹は忽ち芽を出し根を下し見る〱成長した。地中の人々が集つて來て殺さうとした時には竹を攀ぢて地上に出た後だつた。ラウリヤンは首尾よく家に歸り父母に再會する事が出來た。そして一部始終を物語り馘首二回に及ぶ事などを告げたから、兩親は非常に喜び社人も彼の武勇絕倫なのを見て、遂にラウリヤンを頭目に仰ぐ事となつた。

註　パイワン族　マカザヤザヤ社

昔々サウザヤジユアンといふ男があつた。或日木の輪を造りそれを轉しながら遊んでゐると、不圖穴の中に落ちてしまつた。そこで彼は穴の中に入つて行くと地中に家があつてサプルプルグといふ者が其の輪を拾つて大切に保管してゐた。「それは自分が落したのだから返して呉れ」と願ふと、サプルプルグは、「返してもやるが暫く我家に居れ」といふので、仕方なくて其處に止つた。ところが彼は才物だつたから誰一人敵する者もなく、忽ち地下の社の有力者となつた。併し新米のものが生意氣だといふので社人の憎みをうけて殺されようとした。それを知つたサウザヤジユヤンは櫛を植ゑると、それが見る〱成長して地上に達したから、急ぎ攀ぢて危急を脫した。そして丁度地を踏んだ時唾を吐いたが、地下にゐたサプルプルグの掌中に落ちた。彼はそれでサツザヤジユヤンの恙なく逃げ去つた事を知つて喜んだ。（パイワン族　スクスクス社）

昔バルリアリアウといふ者があつたが、十二三歲の頃銀の環を造つて玩具としてゐた。ところがふと東の方に投げた機みに何處にか見失つてしまつた。そこで每日あちこち尋ね廻つたが一向わからない。畑にゐるもの、木を伐つてゐるもの、人さへ見れば銀の環を尋ねながら東へ〱と進んで行つた。かうして幾日も探し步いた時麻布を織つてゐるものがあつた。それから少しく行くと麻を煮てゐる女があつた。併し彼女等は銀の環の事は知らなかつたが、その近所に物知りの老婆がある事が判つた。そこで老婆に、「若しか銀の環が飛んで來なかつたか」と尋ねたが、やはり知らない。併し非常に疲れてゐたのと、老婆が暫く我子になつてゐるならばそのうち環の在かも知れようと勸めるまゝ其處に止まる事となつた。一體こゝは何といふ處なのかと或日問ひ糺すと老婆は何を隱さう此處は「サライトツコ」といふ地中の社だと答へた。

或日社人が狩獵に出かけようとするので、少年は「我も一緖に行きたいが何を持つて行かうか」といふので、老婆は機具を携へて行けと敎へたから機（はた）の竹を持つて跟いて行つた。社人は可笑しさに堪へかねて彼を山麓に止めておき、各々弓槍の銳器を携へて山に入つた。ところが一日中狩り暮した社人には少しの獲物もなくて却つてバルリアリアウは大獵をした。社人は少年の功名を訝りながら社に歸りついた時、老人ブルブルンが手柄話を聞くので、バルリアリアウが第一等だと云はねばならなかつた。それから次の日は一同で漁に出かけた。其の時少年は又老婆に尋ねて「サオバン」と「イトシ」とを携へて來たから又々社人の物笑ひとなつたが、彼は一向平氣で唯一人下流に赴き「イトシ」を敷いて遊び半分に漁りしてゐた。ところが結果はやはりバルリアリアウが大漁であつた。社人は餘りの悔しさに翌日は出草してバルリアリアウに一泡

ふかせようと敦圖いた。然しながら行裝厳しい社人は機具を携へた一パルリアリアゥには及ばなかつた。

かくて老婆の許に樂しく暮してゐたが、やはり生れ故郷が懐しく、或日「リーガリガリゴアカ、パーリヤワワワワプ、エールワルワルワタン、タイイナ」（いざ梯子高くかけよ、我今天に昇らん）と繰返し〴〵謠つたから、老婆は訝り詰つたが何氣なく裝つてゐた。その夜は首狩の舞踊があつたがパルリアリアゥの手ぶりは圖拔けて見事であつた。社人は何をさせても巧みな彼に憎悪の眼を向けるやうになつた。そして卑怯にも謀り殺さうとしたから彼は大聲をあげて「エーネヤイヂヤリム、スタエトコトエネダルラン」（我汝等（いましら）と共にありしが、汝等我に及ばざりき）と謠ひながら梯子を登つて地上に出でた。

そこで我家に歸つたが、家族は全く見忘れてしまひ賓客として迎へ腰掛と煙管を與へた。ところが皆自分の使用したものでなかつたから拒んで返したので、家族はけげんな顔をしてゐた。すると父は早くも銀の環を見つけ、パルリアリアゥの腰掛と煙管とを渡すと、喜んで受取つたから紛れもない我子である事を知り、父子の名乘りをして喜び合つた。それからパルリアリアゥは地中の「ザライトツコ」社の事から、不思議な老婆に養はれた事まで詳しく物語ると、父は父で、汝が暫く見えなくなつたから屹度死んだに違ひないとてこのやうに「ルプツ」（喪章）までつけてゐたのだ、など話し頼もしく成人した我子を社衆に誇るのであつた。（パイワン族　太麻里社）

鯨に呑まれた男

アミ族　馬蘭社

或時一人の男が漁に出たが過つて河に落ち海に流された。すると鯨が遣つて來て早速男を呑んでしまつた。ところが此の鯨が或島の側を泳いてゐた時排泄したから、男は糞と共に出でゝ其の島に泳ぎ着いた。其れから幾日か經ち男は一人海岸に立つて懐郷の情に堪へなかつた時、一匹の大鯨が現れて、「汝を故郷に送り届けてやるから、我が脊に乘れ、そして若し苦しくなつた時は鰓を引け早速海上に浮び出るから」と約して男を脊に乘せて海中に入り時々水面に出でゝ呼吸をしながら遂に故郷の海岸に着いた。そこで鯨は「我が尾に乘れ」といふので、いふが儘に其の尾に乘ると、鯨は尾を振り男を小山の上に撥ね上げた。別れる時鯨は餅と雞を求めた。そこで男は白雞一羽に餅を添へて海岸に待つてゐると鯨は沖に現れ一振長軀を振ると山のやうな波が起つて岸に在つた禮物（いやじろ）を運び去つた。

イツの話

昔々「アミアン」にイツといふものがあつて、或日竹筏に乘り漁に出た。すると俄に大風が吹き起つて何處ともなく流され、遂に或る孤島に漂着した。島人は皆裸體で恐しげだが、イツを見ると早速集つて來て勞りながら連れ歸り大事に養つてゐた。

かくて十年ばかりも經つたが、或日島人が集つて「明日は豚を屠る事としよう」など と云ひあつてゐた。イツは竊に考へるやう「此の島には一匹の豚もゐないのだから、或は自分を殺すのではなからうか」と心付くと、一刻も猶豫せず夜に乘じてもとの海岸に遁れて來た。併し竹筏は既に朽ち果てゝ役に立たない。如何したものかと案じてゐる所へ、一匹の「チョロ」（龜）が現れ、「汝は何を悲しんでゐるのか、若しも本國に歸りたいならば我が脊に乘れ、若しも水中に潛つて苦しい時は耳を引け」と敎へ、イツを脊に乘せ海上に浮び出でた。かうして首尾よく本國に歸つたイツは龜の好意を非常に喜び、餅を搗き酒を造つて三日目の朝海岸に供へて龜に酬いた。

然しながら折角歸つては來たが、社内には誰一人イツを知るものはない。殘しておいた妻子も何處に去つたか影さへ見えないし、自分の家のあつた所には見も知らぬ人が住んでゐる。殆ど途方にくれてゐたが、ふと昔砥石を地中に埋めて置いた事に氣づき、早速それを掘り出して社人イツである事を明かにした。ほんの十年と思つてゐるうちに長い年月か流れてゐたのである。

パイワン族スクスクス社

女護島

今は昔マチエチエといふ者があつた。或日河に出て漁してゐたが、ふと足踏み外して河に落ちそのまゝ激流に押し流されて海に出た。大聲あげて救を求めたが誰一人も見えないで、唯岸うつ怒濤の應へるばかりであつた。マチエチエは運を天に任せて波のまにまに漂うてゐると水天髣髴とした所に島が見える。どうせ泳いでも及ばないから仰向になつて流れてゐるうちにふと人間の聲がするので頭を上げてみると見も知らぬ小島に着いてゐた。岸には數多の人が群り集つて漂着者を見ながらがや／＼騷いて

ゐる。マチェチェは假令人食ふ島でも空しく魚腹に葬られるよりはましだと思ひ勇を皷して上陸した。ところが不思議な事には此の島には男子は一人もゐない。島人は我先きにとマチェチェの傍に走り寄り、珍らしい男だ我こそ夫にせんなどと手引き足ひき美しい宮殿に連れて行つた。そして山海の珍味を山と積み下にも置かぬ饗應をするのであつた。この島は「バライサン」といふ女護の島なのである。

マチェチェは暫くは歡樂に醉うてゐたが、やがて故鄉の空を眺めては嘆息ばかりするやうになつた。或日海岸に立つて一人思ひに沈んでゐると突然一匹の大鯨が浮び出て「汝の哀しみは尤もである、我が脊に乘れ故鄉に伴はう。」といふので、マチェチェは非常に喜び神を拜して鯨に乘つた。鯨は碧瀾を蹴り一瞬千里忽ち故鄉の岸に着いた。

僅か數年の間に故鄉の山川草木全く變り果て、見るもの聞くもの皆新たである。我家にこそは愛しの妻子が歡び迎へて吳れるだらうと來て見ると、そこには見も知らぬ人が住んでゐたのである。そして親戚故舊誰一人として知るものもないさまに呆れながら、詳に昔を語ると漸くマチェチェの名を想ひ出したものがあつて、恐ろしい昔の

出來事であつたことがわかつた。それは祖父の時代にマチェチェといふ男があつて、或日河狩に出たまゝ歸つて來なかつた。マチェチェの家は今孫の代であの家がそれだと指すのであつた。マチェチェは長い〱夢を見てゐたのだと思つた。

鯨はマチェチェに別れる時に、「五日後に豚五頭、酒五甕、檳榔五房を持つて海岸に出で、我に供へて呉れ、これが自分に對する報酬である」といつておいたから、マチェチェは五日後に約を果した。その時鯨は蕃人に造船の技術を敎へてくれたといはれてゐる。

アミ族　南勢蕃　歸化社

註　奇密社、昔サダバンさいふ者があつて、或日海に出で竹筏に乘つて漁してゐるさ、遙沖合に島が見えるからあの島で食事をしようさ思ひ上陸して火を起し竹筏の魚籠から魚を取り出し燒かうさするさ、竹筏は遙か彼方に流されてゐる。怪しんでよく見るさ島さ思つたのは鱛(えそ)だつた。併し今になつてはどうする事も出來ぬのでそのまゝ鯨背に乘つてゐるさ、鯨は西方に泳ぎ進み、とある島の側を過ぎたから、サダバンはす早くその島に跳り移つた。するさ四方から人が集つて來たが、悉く女ばかりで男の姿は一人も見えない。サダバンは「バリサン」(女護島)に來たのださ思つてゐるさ、多くの女人が彼を慇懃に案內して行くのであつた。そして山のやうに珍味を列べて歡待してくれたから大喜びで空腹を滿した。さころが不思議にも女

達は湯氣ばかり吸つてゐるから、注意して見ると兩門がないのであつた。

翌朝は待遇が俄に變り竹垣を幾重にも圍らした豚小屋に入れられ、木の根草の根を與へられた。よく考へて見ると湯氣を吸はずに食物を貪り食つたからである。然し何時までも、かうしては居られぬので或日草の根に小刀が纒りついてゐたのを幸ひ、垣根から逃れて海岸に走つた。すると恰度鯨が浮び出たので、口早に仔細を語り故郷に伴れ歸つてくれと賴むと、鯨は水中に潛つた時の注意などをしてサダバンを脊に乘せた。かくて五六度鯨の耳を引いたと思ふ頃故郷の山川は髣髴と見え出したのである。そして恙なく歸りついたが、誰一人サダバンを信じない、老蕃に昔を語つてもやはり虚言だといつて取り合つてくれない。ところが自宅の隅に「カキユー」(砥石)を埋めて置いた事が有力な證據となつて、社人の疑ひは解けたが、不思議な事もあるものだと互に顔を見合せて暫しは言葉もなかつた。やがて一人の女がサダバンの頸に縋りつき、我が「マトアサイ」のサダバンだつたかと嬉し涙に咽んだ。社人もあはれに思ひ、サダバンを助けて豚を屠り、餅を搗き箕に入れて海岸に供へ鯨の恩に酬いた。

今でも粟の除草期に社の頭目が鹽水を拵へ豚を屠り餅を搗き河に流して鯨を祭るのはかうした故事なのである。

太巴望社、或男が河で漁してゐたが、過つて水中に轉落し海に流されて、或る孤島に漂著した。それが女護島であつたが、島の女は未だ男といふものを見た事もなかつたから、此の男を豚として飼つた。男は憔悴して或日海岸に出てゐると鯨が浮んで來て我が脊に乘れといふから、故郷に連れて行つてくれと賴んだ。すると間もなく故郷の海岸に揚げられてゐた。社に歸つた男は命拾ひした事を喜び、海岸に蓆を敷き其の上に酒、餅・檳榔子などを載せて鯨を待つてゐると、やがて彼の鯨が現はれ天に沖する巨濤を起して供物を持ち去つた。其の時蓆は波のために卷かれほぐれづしてゐた。今でも岸打つ波の差し引きはこの蓆のせいである。そして火燒島から本島に架けらた橋も此の時の大波の爲めに落ちたのである。

湯氣の國

昔アロブゴといふものがあつた。或時山中深くわけ入つたが、嘗て見た事もない不思議な社があるので何者の棲家かしらと思ひ或家の内に進み入つた。丁度その時は食事時らしく家族のものが集つて鍋を圍んでゐた。そこで彼も饑じさに堪へきれないで少しばかり食物を吳れるやうに賴むと、彼等は快く承知して共に食事することを許した。喜んだアロブゴは早速手を伸して撮み食ひをすると、彼等は餘程驚いたものと見えて暫く目を瞠つてゐたが、やかて「汝は甘藷を渣滓ぐるみ食つて如何するのか」と奇問を發した。アロブゴは不思議に思つて彼等を見ると、悉く肛門を持たぬ人種で、食物の湯氣ばかり吸つて生きてゐるのだといふ事がわかつたから、アロブゴば「自分は

甘藷を食つて生活するものである、そして肛門とて臀部に排泄口があつて、そこから渣滓は出すから腹に溜るやうな事はない、然も我は其の肛門を造るものである。」とて曲つた木の枝に登り脱糞して見せた。社人は手を拍つて只奇妙〳〵とはやすのであつた。アロブゴは可笑しさを怺へて得意氣に木から降りて來ると、社人は脱糞の態が氣に入つたから是非我等にも肛門を造つて呉れと願つた。彼も止むなく鐵を火中に入れ灼熱して社人の臀部に突き立て〳〵忽ち數十人に肛門を造つてしまつた。ところが衝かれたものは呍と唸つたまゝ身動きもしないから、殘つた者共は怪んで死んだのではないかと尋るので「いや何に彼等は一時假睡してゐるので、今に自分が山に登つて彼等の名を呼ぶと屹度目を覺すだらう」といひすてゝ歸つた。

ところが死者の蘇生する筈なく騙された事がわかつたので、殘つた者共は烈火のやうに憤り、手に〳〵槍を持つて追跡した。すると途中に穿山甲の穴があつて周圍は鮮血に染められてゐるのを見て、きつとアロブゴが此の中に隱れてゐるに違ひないと、勢づいて突き刺したが中には一箇の薯榔が轉つてゐるばかりであつた。薯榔の液汁を

撒いておいたアロブゴは呵々と笑ひながら立ち現れ、群る敵を物ともせず「汝等我が『ブス』を甜めよ」と威丈高に言ると、氣壓された社人は殆ど皆「ブス」を甜めて逃げ歸つた。

アロブゴはかうして智もあり腕も利いた男であつたから誰一人彼に手向ふ者もなかつたので、傲慢な彼は益々增長した。人々は憎んではゐたが大鹿を右から左に射拔くやうな膂力なので滅多な事は出來ない。ところが或日アロブゴは社衆に向ひ「誰か我、が腕を射貫く者があるか。」と人を憚らぬ面憎さに、一人の男が、「よし俺が試みよう」とて射たが甲矢を射損じたから、手早く二の矢を番へ胸を狙ひ擊つたが遉のアロブゴも驚いて飛び上り再び地に着いた時に地が凹んで彼の體を埋めてしまつた。これは屹度神慮の致す所だと今に噂してゐる。そしてその跡は大きな穴となつて殘て居り、冬が來る每に其の上には白雲が棚曳いてゐるのである。

サイセット族　ガラワン社

昔或る男が狩りに出て、山中を馳せ廻つたが、どうしたものか少しの獲物もない。その中愛犬まで見失つたので、懸命に探し歩いたが其れさへ尋ねあぐんで途方にくれた。それに日もかげつて恐ろしく空腹を覺えたから歸路を急いだが、知らぬうちに踏み迷つて思ひもかけぬ蕃社に着いた。社人はこの見も知らぬ男を見て、何處の人か知らぬが珍らしい客だ、何はなくとも先づ食事をと、親切に云つてくれる。そのうち飯が出ると、彼等は立ち騰る湯氣を吸ひ始めた。男は昔話の「マカベブユ」といふ變化の國かと、身の毛もよだち怖ろしく思つたが、餘りの空腹に勸められるまゝ思はず飯を撮んだ。彼等は眼を瞠つて惘れてゐたが、やがてそれを口に頰張つたので、口々に豚よ豚よと罵り合ひ、男を捕へて小屋に投げ入れてしまつた。男は忌ま〳〵しくは思つたが、衆寡敵せず涙をのんで時期を待つてゐた。丁度その時大きな鷲が飛んで來て今にも舞ひ下らうとする。人々はあれよ〳〵と騷ぐばかりで、何うする事も出來ない。こゝだと、彼の男は弓に矢番へ狙ひすまして射るかと思ふと、大鷲は地上におちてゐた。「マカベブユ」の人々は其の奇術に驚き、豚ならぬことを識つたので許して歸らせた獵の男はほんの四五日の事だと思つてゐたのに永い年月が經つてゐた。

タイヤル族　眉原蕃

註　サゼク族パトラン蕃、昔二人の男が狩獵のために深山に入つたが、不思議な蕃社があつたから近づいて見ると、人々が食事してゐる所だつた。彼等は二人の珍客を招いて共に食事させた。席につくと彼等は甘藷や肉を盛つた鉢を圍んでその湯氣を吸ふばかりなので、二人は此の社の人はきつと甘藷の美味を知らないのだと、早速肉と甘藷を撮んで食つた。すると彼等は豚だと罵り騷ぎ二人を檻に繋いだ。ところが或日少年が近くで遊んでゐたから、小刀を借りて葛を切り檻を破つて遁れた。社人はそれを知つて追つかけたが、二人は河中に飛び込んだのを見て、水泳を知らない彼等は斷念して引返したから漸く無事歸着する事が出來た。

同外太魯閣蕃、或時十人許りで狩に出たが山中にムカンカルングリ、ムクプガデギヤツクといふ二人の男があつて、獸を澤山獲つたから食べて行かぬかといふ。ところが食事となると彼等は只湯氣ばかりを吸つてゐるから、壯丁等は「我等は肉を食べれば滿腹せない」とて匙を入れて肉を口に運んだ。すると肉を食ひ骨を甜めるものは豚に違ひないとて垣を作つて悉くその中に追ひ込んだ。かくて十日もたつてからムカンカリングリ等は「今日は一つ豚を食べよう」とて一人を引き出し屠り殺してしまつた。殘つた九人は驚いて神に祈請した效驗があつて或日小刀を拾つたから柵を破り逃げ歸つた。

女人社

今は昔、深山に「シューマ」といふ女ばかりの社があつた。麗らかな太陽が照り渡つて涼風膚に快い日には、屹度この社の女達は斷崖の上に跨り思ふ存分風をうける。すると不思議に孕んで子供を産んだ。倂し奇妙な事には生む子も生む子も女ばかりなのである。そして食物は只ものの湯氣さへ吸へばよいのだし、若しか外敵が來ても熊蜂、土蜂、蛇などがわけなく擊退して吳れるのだから實に呑氣至極な社である。

或日獵に出た若者が、ふとその犬を見失つたので、次第に山奥に探ね入つた。と遙か向ふに一人の女が犬を捕へて遊んでゐるから、大急ぎで驅けつけて取り返さうとした。すると女は見かけぬ人間が立ち現はれたので、暫く惘れて物も云はず、見上げ見下してゐたが、不圖股間の異物に氣がついたから、不思議と尋ね寄ると、男はその靈妙な作用を說明した。女は乞うて情〇を遂げたが、門口には澤山の社衆が寄集つて見てゐた。さあ事だ、次から次へと女共が迫る、無體と思つても多勢にけおされて何うする事も出來ない。遂に勢力盡き果てた所へ一老女が來たが、己れ一人取殘されたのを恨み、早速銳鎌を揮つて陽物を根もとよりぷつりとばかり截り取つたから哀れな男は聲も立てずに、殺されてしまつた。老女は乾かした陽物を珍重してゐたか、或日木の枝にかけた所を鳥のために攫はれて社中の物笑ひとなつた。

一方男の方の社では待てど暮せど若者が歸つて來ないので、若しか馘首でもせられたのではないかと、あらこち探したがどうしても見當らない。すると物識りの一老人はきつと「シューマ」にでも迷ひ込んだに違ひないとて、一同山奥さして進發したが、蜂と蛇の猛襲をうけて何うしても目的を達する事が出來なかつた。

大嵙崁蕃　ガオガン蕃
北勢蕃　南勢蕃（白毛社）
白狗蕃　サラマオ蕃
萬大社　眉原蕃
南澳蕃　溪頭蕃

註　この話は同じタイヤル族でも蕃社によつて、多少色彩を異にして傳へられてゐる。女人社の名も「シブラカン」（コーゴツ社）「シンキワイカナイリン」（眉原蕃）、「ショルマ」（萬大社）、「クルビオ」（サラマオ蕃）、

「テピロン」（白狗蕃）、「キルパオガン」（白毛社）、「ダルピオ」（汶水蕃）、「ケワワン」（北勢蕃）、「キヤワン」（溪頭蕃）などさまぐ〳〵である。一寸變つた傳へをあげるさ。

昔大克山の頂近い斷崖に蜜蜂や熊蜂を飼養してゐた一人の女があつた。夕景になるさ必ず崖上に跨り涼風をうけて孕んだ。そして産兒が女であれば育て、男である時は殺してしまつたからやがて女ばかりの社になつたのである。

或時一人の男が道を迷つて此の社に着いた。するさ數多の女ごもが集つて來て、珍らしい男ださ、手を引き足を取つて爭つたから、男は大の字なりに地上に横はつた。その時手足に觸れるこさも出來ないで悔やしんでゐた女が、不意に大石を持つて來て男の頭上目がけて投げつけたから、男は虚空を摑んで悶絶した。女共は驚いたが死んだものは仕方がない。そこでせめてこれだけでもさ、滴り落ちる血潮を木の葉に包み大切に貯へて置いたが、氣でも塞いた時に取り出して嗅ぐさ自ら心氣爽快を覺えたさか。

其後この事が「タイヤル」に聞えたから、復讐しようさ大勢打連れて大克山に赴いたが、數知れぬ蜂軍の逆襲を受けて一歩も進めない。そこで一人の智者が手ん手に炬火うち振り〳〵進めさ下知したから、群る蜂軍を燒き殺し〳〵、遂に女人社をも燒き拂つてしまつた。勝鬨あげた「タイヤル」の社衆は喜んで燒跡を見るさ、そこには夥しい「ヒトシ」（蛇）が黑焦さなつて死んでゐたさうだ。

タイヤル族　北勢蕃　シヤカラウ蕃

昔昔「カラハバワン」といふ女ばかりの社があつた。いつも飯の湯氣ばかりを吸うて生活してゐたから排泄口もなかつた。ある時一人の男が山道を踏み迷つてこの社に來たが、丁度食事最中で米飯を並べてゐた。大分空腹だつたのでこれ幸ひと其側に寄り手摑みにして頰ばると、女ども目を瞠つて驚き、何とて我等の糞を食べるかと詈る。男も不思議な事を聞くものだ、こんな美味い米飯を糞とは何事だ、これ畢竟、肛門のないためだらうと、いひ返したが、豚だとて手足をとつて柵の中に入れられた。その中この男は女共の晝寢するのを窺ひ眞赤に燒いた火箸を一人一人の尻につき刺し逃げ歸つた。そして後から間もなく行つて見たが女共の姿さへ見られなかつた。

タイヤル族　カラパイ蕃
　　　　　大嵙崁蕃
　　　　　溪　頭　蕃
　　　　　サラマオ蕃

註　「カラハパワン」は蕃語「ラハパオ」（輕い）さいふ語から出てゐるやうである。社名は溪頭さ大嵙崁ではやはり「シユーマ」であるし、サラマオでは「ポーマ」さなつてゐる。前の女護の島や湯氣の國さ關聯したものである。他族の話をあげるさ。

サセツ族木瓜蕃、昔獵に出る時帶を纏うて行くさ無事に歸る事が出來たが、若しか帶をせずに行くさ誰

一人歸る者がなかつた。それは山の中に女ばかりの社があつて男と思ふと捕へて歸さないからであつた。そして女人社のものは常に熊蜂を飼つてゐて、之を使つて巧に男を誘はしたので、つひうか〳〵と連れられて行くのであつた。或時二人の男が帶とり裸で狩獵に出てゐると何處からか熊蜂が出て來て彼等を導き不思議な社に着いた。見るとどの家にも女ばかりがゐる。すると男の姿を見た女人社の人々は早速集つて來て二人を捕へ立代り入替り無理に「チメーソツク」したから遂に男は痩せ衰へて斃れてしまつた。かうして生んだ子が男子であると皆食ひ殺し女子ばかり育てゝ行くから少しも人口が減らなかつた。そして女人社ではやはり湯氣を吸つてゐた。

同外太魯閣蕃、深山の中に「テマハーホイ」といふ女人ばかりの社があつた。岩の上に跨つて股間に風を通すと必ず孕んで產れるものは悉く女ばかりであつた。或時社人五人で狩に出て、犬を見失つたからそれを探してゐると此の社に迷ひ込んだ。男共は虜となつて毎日「タマンモフ」を強ひられた。そのうち一人が漸く逃れて社に歸り大勢で復讐に出かけたが、却つて散々に打ち懲され捕へられて大事の「ウツタシ」を悉く斬り取られた。女人と見たのは「ポンゴホル」といふ虫の化物だともいはれてゐる。

ブヌン族干卓萬蕃、昔壯丁が十人許りで狩に出た時「ヘヘパン」といふ女人社に迷つて行つたが、多數の女人に捕へられ抑留せられたから勢力盡き憔悴の餘り斃れてしまつた。其後怖ろしい「ヘヘパン」に行つたものを聞かない。

タケバカ蕃卡社では女人社の名を「ソンカ、ヒブヒブ」といつてゐる。やはり風を孕んで女子ばかりを生んでゐたが、或時一人の男子が生れたから、珍らしがり大切に養育した。そして麗しい若者になつた時、全

社の女に迫られて遂に死亡した。といふのである。

卓社蕃カツト社、或男が船に乘つて海を渡つてゐるうち方向を誤つて或島に着いたが、そこは「アザンカタアツアミノアザ」といつて風を孕んで女ばかり產む珍らしい所だつた。女人等は若しか漂著する男でもあると直ぐ捕へて殺し、其の肉を乾し固めて貯へて置き、少しづゝ取り出しては其香を嗅いで喜ぶ奇習があつたから、其男は捕へられては一大事と早速船を返して逃れ歸つた。

パイワン族では女人社の名を「カルバリバリ」大竹高社、カスポカン社、「シチヤコバリバリ」牡丹路社、「スクラバリ」マシリジ社、「リザヤウ」スクスクス社などゝいつてゐる。風を隱處に通して女子を孕んだことや、たまさか男子が迷ひ込みでもすると、痛い目にあつた事は、大體前のタイヤルやブヌンの話と同樣である。そして大竹高社では今の恒春附近に女人社があつたのだし、スクスクス社では一孤島だといふのである。その他では深山の中にあつた事となつてゐる。

スクスクス社のはブヌン族卓社蕃の話と共にアミ族の女護島の話に餘程近似してゐるからあげて見る。

昔二人の男が竹筏に乘つて一孤島に漂着した。其島は女ばかりで男といふものは一人も見られなかつた。島の名は「リザヤウ」といつて風によつて女の子を孕み次第に女人の數を增してゐたのである。そこへ珍らしい二人の若者が來たのだから、女達は非常に喜んでもてなしたが、男は間もなく憔悴して死んだ。併しあとに一人の男兒が產れたので、成長の後正當の婚姻によつて多くの子孫を殘したさうである。

それから「スクラバリ」といふのは語源的に「風を入れる」義であるといふ。

サイセツト族ガラワン社、社の東方に女ばかりの社があつて常に股間を風に曝して子を生んだが、生れ

ゐものは皆女であつた。偶々他社から男が踏迷つて行くと、直ぐ斬り殺して男の肉を乾しかため徒然な時にはその肉脯を出して香を嗅いださうである。

同ガラワン社、昔「サイパハハン」といふ女人社があつた。そして彼等は肛門がないので湯氣を吸つて生活してゐた。或時ロブゴッといふ男が其處に行き女達を弄んでゐるうち男の子を生んだ。ところが故郷戀しくなり、或日女達に肛門を造つてやらうとて灼熱した鐵を數人の臀に刺して逃げ歸つた。「サイパハハン」の者は誑られたのを知り追撃したが途中「アオム」の穴があるのを見て屹度此處に隱れたのだとて散々竹槍でつくと槍は眞赤に染つたから、穴を調べると一箇の薯榔だつた。ロブゴッは命を全くして歸つた。

多少趣を異にするのは、

昔「シブジョック」と「シューマ」といふ社があつた。社人は夜間ばかり外出して晝は屋內に籠つてゐた。食物は物の湯氣ばかりなので、これを吸つては生活してゐたから肛門や陰部などもなかつた。或日この不思議な人々が迷つて來たから、社人は山や野の滋味をならべて饗應したが、彼等は湯氣や香氣を吸ふばかりで、手さへ觸れようとしない。歡待に力めた社人は大いに怒り、好意を無にする無禮者だとてすつかり縛め捕へて柵の中に閉ぢ込んだが、夜半になつて何れともなく逃げ去つてしまつた。これこそ妖怪變化の類であらう。（タイヤル族　白狗蕃、ガオガン蕃）

イミンマッカツの話

今は昔、「タラナン」社にイミンマッカツといふ者があつた。ある時一人の友人と「ガ

オガン」方面に出獵して鹿三頭を獲たから大いに喜んで其日は溪岸に小屋を掛けて宿つた。ところが夜中頃、路に火の動くのを見たので誰かしらと凝視してゐる中に、その火は小屋の前まで來て消え失せた。すると不思議な事には、イミンマッカツは俄かに苦悶し出したから、連の男は刀を拔いて拂つたが更に手應がない。然しどこからともなく、「彼を助けてはならぬ、若しも助けるとならば汝の睾丸を拔取るぞ」と聞えて來る。恐ろしいとも恐ろしいが、イミンが今にも絶え入らんばかりなので、手を拱いてゐる事もならず、これを抑へ靜めようとすると、忽ち何者かに急處を剜られ死亡した。イミンもその儘何處に連れ去られたのか杳として不明だつた。

三年の後、或る日の事、社人がやはり狩獵に出て、「カンビラン」といふ所に行つたが、一つの小屋があつて、中に瘦せこけたイミンマッカツがゐるのを發見した。「汝はイミンではないか」と尋ねても、一言の應答もせない。不思議に思つて見ると哀れなイミンは舌を出して長々と垂れてゐるのである。そこで其舌を握つて口中に納め、兩唇を合せてやると始めて言ふ事が出來た。彼は談る。三年前出獵した時猪を射留めたが、偶

々不思議な男が出て來てそれは猪ぢやない犬だといふのが癪に觸つて暫くは議論してゐたが、其男は「それでは足跡を見よ、これが猪で、これが犬だ」と示すのを見ると、猪といふのは蛙の足跡である。それは蛙の足跡でないかと反問すると、彼は蛙ぢやない猪だといつて聽かない。餘り癪に觸るので、それが猪なら我家の周圍には日に數百匹も見る事が出來ると叫んだが、其男は固執して少しも譲らないから、益々云ひ募つて進んでゐるうち、不圖眼もさめるやうな麗しい所についた。それは美と光の殿堂なのである。暫く恍惚としてゐると其男は今は何をかくさう、こゝは靈界で自分はその長だといつたので、一先づ我家に歸り此事を社人等にも告げたいと乞うた。すると彼は一年間の猶豫を與へようと許して呉れたから、大急ぎて歸つて來たのであると逐一物語り、尚今後社人等の出獵する時には、我等に多くの犬を與へよと呪れ、決して猪などといつてはならぬと敎へた。

其後一年の歲月が流れた。それてイミンの姿は二度と見られなくなつた。

ダイヤル族　屈尺蕃

註　昔、ルリモツツルといふものが、狩に出たまゝ數日歸らなかつたから、人々は心を痛めて諸所方々を探し廻つたが、漸く彼の持つてゐた火縄銃を見つけたので屹度死亡したに違ひないと諦めて歸社した。ところが其後五六日經つてから、死んだ筈のルリモツツルがひよつこり歸つて來たが、暫しは言葉も出ないやうで眼ばかりぱちくりしてゐた。やがて或者が彼の舌を擦つてやると次第に強ばりがとれて發聲する事が出來た。ルリモツツルは「トーガン」(靈界)に往來したので、そこに着いた時には、肉を呉れといふもの、與へぬといふもの、只淺猿しい爭ひの巷であつたと談つた。其後間もなく彼は再び永久の旅路に上つてしまつた。(ダイヤル族　溪頭蕃)

マックイの話

昔我社の祖先等が百人ばかりで、或川の邊を通つてゐた。すると前方に武器を携へないで耕作する大男があるのを見たから、其傍に行かうとして進み近づいたが、マックイとその友の二人だけがわざと衆に後れ油斷なく眼を配つてゐた。部隊が近よると不思議な男は頭を上げて物凄く笑つた。と思ふと此の時旣に社衆は悉く陷穽に陷つてゐた。危く命拾ひした二人は大急ぎて歸途についたが、近いと思つた河が思ひの外遠

くて、四年の日子を費し漸く歸社したのである。

タイヤル族　白狗蕃

妖怪の手

昔昔、一人の娘があつた。或夜不意に火が消えたので、薪を採らうとして屋外に出たが、闇の中から不意に妖怪の黒い手が現れて何處ともなく連れ去られた。餘りに歸らないから、不思議に思つた家族が外に出て呼べど叫べど應へがない。大騷ぎして四方八方を探し廻ると、娘は遠く隔つた大木の上に掛けられてゐた。見付かつた嬉しさに大急ぎで木から下し連れ歸つたが、娘は遂に生れもつかぬ啞者となつてしまつた。

タイヤル族　白毛社

生首

昔或る男が山に行つて日が暮れたから、とある小屋に宿ることゝした。ところが夜

半にばさ〱と人の來るやうな音がしたので見上げると、體も何もない生首がひよつこり目の前に浮んでゐるではないか。さすがに彼も驚きはしたが、わざと落ちつき聲を勵し「汝怪物何とて現はれたが、俺は馘首百度を越えた勇士だ、汝のやうな者は怖れるに足らない、疾く去れ、こ奴」と怒鳴りつゝ煙草を投げつけると、見る〱其の首は朦朧として消え去つた。

タイヤル族　大嵙崁蕃

燒芋の行方

昔或る男が「ボユボプヌカナ」山に狩に出て鹿を獲た。そのうち夕方になつたから、石の傍で火を起し甘藷を燒きながら鹿の肉を切つてゐた。やがて芋も燒けただらうと見ると、只の一つも殘さず攫はれてゐるので、よし〱惡戯者を懲してやらうと思ひ芋に似た石を燒き素知らぬ顔をしてゐた。すると暫くして後の方で大騷ぎするものがあるが、姿は少しも見えない。屹度變怪の仕業に違ひないと思つたが、その男は大剛

の者で其夜は其處で憩ふ事とした。ところが夜半に恐ろしい音がするから、起き出でると自分の刀は役に立たぬ程圓く刃を磨り減されてゐた。然し男には何事もなかつた。

（ツォ族　阿里山蕃　ララチ社）

獸の怪

昔社に二人の兄弟があつた。或日兄は狩獵に出で、「ウンソアナ」といふ山に行つたが、頂上に淸い泉があつて水邊には鹿の足跡が一面についてゐた。占めたと思つて翌日早くから其の泉の側で覗つてゐると、果して鹿が來ては水を飮むので兄は毎日必ず一頭づゝ鹿を獲て歸るのであつた。ところが或日の事狙を定めた鹿が忽ち雲つくばかりの大鹿となつたから、これは鹿の王だらう射てはならぬとて、其の儘に打ち捨てゝおいた。

其後弟は一人で「ウンソアナ」に行き彼の泉のあたりで待つてゐると、數匹の鹿が水邊に集つて來たから、大いに喜びその中で最も大きなものに狙を定めた。するとその

鹿は見る〳〵大きくなり、尾の長さだけでも數尋もあるかと思はれた。兼て兄に聞いてゐた怪物はこれだなとは思つたが、折角狙つたからは引くに引けない一徹な氣性なので、直ぐさま槍を投げて其の鹿を殺してしまつた。併しさすがに其の肉を切り取る勇氣はなく、大急ぎで家に歸り其の日の顚末を兄に語つた。兄は困つた事をして呉れたと思つたが、今更詮方もないので連立つて彼の山に赴いた。すると鹿を殺したといふ所には血痕夥しく流れてゐるので、兄は身の毛もよ立つばかりに戰慄して進む事が出來ずに引還したが、弟は物ともせず尙も進んで行くと所々に肉塊が落ちてゐる。怪しみながら鹿のありかを尋ねて四方を見渡してゐると、不意に叢の中から大男が立現れた。頭は樹の梢を越え、眼は日月のやうに爛々としてゐる。そして「己れ憎い奴め、よくも痛手を負はせたな」と睥めつけた。さすが剛氣な弟も大いに驚いて逃げようとすると、怪物はむづとばかり弟の頸をひつ摑み、一振り二振り振つておいて大樹の幹を目がけて打つつけたから哀れ五體は微塵となつて碎け死んだといふ事である。

（ツォ族　阿里山蕃　達邦社）

註 昔一人の男が狩に出て一匹の鹿を射たから皮を剝ぎ肉を切り、今や膽を切り取らうとすると內から聲があつて、「我が膽を切つてはいけない」と呼んだ。男は不思議に思つたが、何かまふものかと一刀の下に膽を衝き破つたから聲もなくなつた。そこで男は皮を携へて家に歸り「ゴグボウ」に掛けようとしたが、滑つてかゝらない。いら立つて怒聲を發しながら「ゴグボウ」に投げつけると、皮は飛んで來て彼の男に卷きつき一絞めにしめ殺してしまつたさうだ。（阿里山蕃流々柴社）

太古社人がまだ神を祭る事を知らなかつた頃は不思議な事ばかり多かつた。或時も一人の男が狩獵に出たが「モアテツヌ」（山羊）がさまよつてゐるのを見て、早速槍を投げて殺した上、運搬に便にしようと思ひ肉を細く切つた。そして心臟に刃を當てようとすると、忽ち內で聲があつて、「我が心臟を切るな、痛くて堪らないから」といふので、其の男は薄氣味惡くなり其儘心臟を棄てゝ逃げ歸つたさうだ。（阿里山蕃達邦社）

鹿の骨

昔々プルルガンとパラシチャンといふ二人の男があつた。或時狩獵に出て一匹の大鹿を捕へたので、二人は大喜びで其鹿を屠り、骨を取つて地に植ゑつけると、不思議にも悉く獸となつて走り去つたといはれてゐる。

パイワン族　スクスクス社

サリクの話

或家で二人の子供を殘して兩親が外出した事があつた。ところが其夜サリクといふものが戸を押し破つて無理に入つて來て、馴れ〳〵しく子供の側に寄り、面白い話などして慰めたから二子も心うち解けて眠についた。夜半頃兄がふと目を覺すとバリ〳〵音がするので、「何を食べてゐるのかサリクよ」と尋ねた。すると彼は慌てながら「大角豆を食べてゐるのだ」と答へる樣子が訝しいので、そつと弟の體を探ると胴體は無くて頭ばかり殘つてゐる。兄は驚き起き上り豚の脂を煮たのを持つて外に逃げ出し早速樹に攀ぢ登つた。サリクは事が半で現れたのを怒り兄の後を追つかけて來たが、子供は樹上から熱脂を浴せかけて殺してしまつた。咄嗟の機智で弟の仇も取れたし己も食はれずに濟んだ。

パイワン族　カスボカン社

註 パイワン族スクスクス社、兩親が出て行つたから兄弟二人で留守番をしてゐた。するとテプルプルンといふ者がやつて來て泊めてくれといふ。仕方がないので弟と寢かせた。ところが眞夜中にバリ〳〵音がす

ゐるので、兄は目を覺して何かと聞くと、テブルブルンは「トアミ」（蕃参）を食つてゐるのだと答へた。我にも「トアミ」を呉れと手を延すと弟の片腕を渡されたから兄は吃驚して外に逃げ隱れた。翌晩は兄が唯一人寂しくゐると又彼の怪物が來たから熱湯を注ぎかけて殺してしまつた。

怪物一束

昔ブラルヤン、クリリリの兄弟が、モカイ、カラルといふ妹等とさゝやかな生活をしてゐた。或時二兄が出獵したので二人の妹は寂しい留守をしてゐると、外から「リオオー」と叫びながら來るものがある。二人は恐ろしくて戸を堅く閉し隱れてゐた。ところが其の者は門口に來て是非戸を開けよと叫んで止まない。「今日はパリシだから決して開けないと云ふと、「リオオ」といひつゝ戸の隙から覗き込み「酒が有るではないか、それそこの「ルプナ」の中に、乾芋も木豆も粟も豚も、その通り馳走があるではないか、我は澤山な薪を持つて來たものだ、酒を飲ませよ飯を食はせ、といひながら無理に戸を破つて闖入した。娘達も仕方がないので豚を屠つて食事させた。怪物は大

に滿足して五日後に復來るから今日のやうに饗應してくれといつて歸つて行つた。

夕方になつて二兄が戻つたから有りのまゝに告げると、兄弟は非常に怒り今度來たなら射殺してやらうといつて待つてゐた。すると五日目に彼の怪物は「リオオー」といひながら遣つて來たから、兄弟は戸の隙間から狙を定めて射た。射られた怪物は其の場に仆れたが今まで食ひ飲みしたものが悉く傷口から流れ出た。側にゐた犬は喜んで走り出で、それを殘らず食つた上怪物の屍體まで食ひ盡してしまつた。

パイワン族　マカザヤザヤ社

「カリモアン」社にアランタシカバンといふ者があつた。或日狩に出て木鼠を射ようと思ひ大樹の下で待つてゐると、不意に小犬が出て來たから不思議に思ひ木の枝を投げると、崖から轉げながら逃げてしまつた。すると間もなく雉が一羽飛んで來たので早速捕へて燒いたが、どうしても燒けないでそのまゝ逃げ去つた。アランは急に怯氣づいて逃げ歸つた。多分木精がからかつたのだらう。

ブヌン族　タケバカ蕃

けて來るので、社人は非常に困り彼の姿さへ見ると戸を閉めた。ところが或日かうしてタンカサイを閉め出して隱れたが、偶々斧を外に置き忘れてしまつた。タンカサイは戸口に近づいて、「斧が入口に忘れてあるが人に盜まれはしないか」と大聲で叫ぶものだから、中から少しく戸を開けた。其の間に彼は斧で自分の尻を拭きながら屋內に入つてしまつた。そして例のやうに角力しようと迫つたから、主人の男も煩しくてたまらず、角力ひながら彼をひつ摑んで爐の中に投げ込んだ。すると不思議にも彼の姿は忽ち消え失せてしまつた。恐らく妖怪の類だつたのだらうと今でも社人は怖れてゐる。

昔タンカサイといつて相撲好きな惡戯者があつた。人さへ見れば相撲を挑み追つか

ブヌン族　タケバカ蕃

昔ある山中にバーウンといふ怪物があつた。非常に大きな鼻を持つてゐて、鼻孔は空を仰いてゐたから、降雨の時は雨水が流れ込むのを怖れ草で塞いてゐた。此の怪物

に遭ふものならどんな男でも忽ち食はれてしまふのであつた。併し不思議な事には女は決して捕へなかつた。

サイセット族　ガラワン社

註　同社、昔バライタンさいふ怪物があつて彼に近づくものは誰でも一呑に呑まれてしまつた。

或時二人の兄弟が連れだつて「ヤユガナ」といふ山へ狩に行つた。そのうち黃昏時になつたから、弟は食事の準備をするため一足先きに狩小屋へ戾つて行つた。兄は尙も獲物をあさりながら山道を迂廻して小屋につくと、あたりは一面鮮血に染められてゐる。兇蕃に殺されたのではないかと急いて中に入らうとすると、內には飯を掻き混ぜる音がするから、やれ〳〵弟は無事だつたかと喜んで小屋に入つた。今歸つたぞと弟を見るとこは如何に弟は首のないまゝで立つてゐる。あつと吃驚する間に弟の胴は動き出し、飯匙で頸の切口へ飯をつぎ込むのである。兄は周章て戰き逃げ出さうとして爐側の薪に躓き大きな音を立てた。すると怪物は「待て待て」と呼びつゝ兩手を擴げて

追つかけて來た。兄は一生懸命に走つたが、怪物との間は僅に一歩なので氣が氣でなかつた。ところが幸に大勢の社人が狩獵から歸つて來たから、大聲で救を求めると怪物は忽ち姿を消した。

ツォ族　阿里山蕃タパン社

註　阿里山蕃ララチ社。昔兄弟二人で狩に出たが、兄は弟に向ひ「汝は一足先きに狩小屋に歸つて食事の準備をせよ」と命じて自分ばかりで狩り暮した。やがて狩小屋に歸りつくと、首のない弟が頻りと飯匙を動して胴の中に飯をつぎ込んでゐる。膽を潰して呀と叫んだので、弟の化者は兄を追跡して來た。兄は慌て騷ぎ「ヤユガナ」山から「ナマシン」溪まで一氣に驅け下りた時、多數の社人に遇つて顏色青ざめ悶絕した。社人は驚いて敵蕃でも來たのかと思ひ武器を搆へたが、そのうち彼も正氣づいて弟の化物に襲はれた事がわかつた。今でも時にこんな妖怪が出るので、變死者を忌むこと甚しく、決して其屍を蕃社に入れないのである。

達邦社。或時二人の友達が「ムムヤツ」といふ山に出獵したが、一人は狩小屋に止り他の一人は月光を便りに鹿の集る水邊を探りに出た。小屋に殘つた男はうつ〳〵と交睫んでゐると、夜半頃人のけはひがするから、友が歸つたのかと立出でると、見も知らぬ異形の男が首を斬られそれを細い皮で胴のあたりに垂れたまゝ立つてゐるのであつた。男は冷水を浴びせられたやうに思はず大聲を立てると、怪物は消え失せた。馘首せられた者の幽靈であつた。

サゼク族內タコロ蕃、昔、或男が一人の女を情人としてゐた。ところが女は間もなく耕作小屋で急に亡くなつてしまつた。男は死んだ女が哀れに思はれて或日其の小屋に行つて見た。すると朦朧と現はれるものがある。それは有りし日の女の姿である。男は懷しげに見つめてゐると、忽ち怖しい形相になつた女が摑まうとするので、男は大慌てに慌てゝ逃げ出した。そして何處までも追つかけて來るので男は刀を拔いて斬りつけたが、怪物は消え失せてしまつた。

怪力

昔パジといふものがあつて彼に呪まれる時は如何に大剛のものでも皆死亡した。その頃又パジャギジャギとて大力無双の者があつて百人掛りで相撲しても負かす事が出來なかつた。若しも他社と戰爭する時にはパジとパジャギジャギを先導にして進むとどんな強敵でも破る事が出來た。今諸處の石に殘された大きな凹みは彼等の足跡と手形なのである。

パイワン族　牡丹路社

塔山の白石

今は昔我社に相思の男女があつたが、ふとした事から男は黄泉の客となつてしまつた。女は身も世もあらず泣き沈んでゐたが、遂に氣がふれて「男戀しや、男戀しや」と歌ひ續けるやうになつた。或日も例の如く謠ひ狂つてゐると、あり〳〵と男の姿が現れたから、女は喜んで取り縋り、「死なば諸共と誓つたのに」と嘆いた。男も哀れに思ひ「それぢや今から一緒に行かう。」とて連れ出した。然し男の姿は更に見えないので、人々は唯惘れに惘れて女の振舞を見てゐた。すると男は塔山に着いて此處が俺の家だといふ。見ると立派な家があつて其處には澤山の人もゐた。女は塔山に數月もゐたが、時々自家に歸つて酒などを持つて行つたし、男の家からもよく酒を女の家に贈つた。然しそんな時には家族には娘の姿の外何人も見えない。唯酒器に足が生えて歩いて來るやうであつた。或日娘は愛らしい子供を抱いて來たから、母は喜んで其の兒を抱かうとすると忽ち樹の根と變つた。あつといつて落すと、娘は慘しい事をなさるといひな

がら抱き上げるのを見ると愛嬌溢るゝばかりの兒になつた。このやうに交通してゐたが、或日も娘が里に歸つて「明日は是非酒を塔山に運んで下さい」と賴んで行つた。兩親は多くの人に運ばせた。人々は塔山の麓にさしかゝると槍が竝んでゐる。そこに酒瓶を置くと忽ち數本の手が現れて酒を内に運び入れた。其後又娘が歸つた時「妾が死ぬ時には塔山に白い物を張りますから」といつて立去つたが、果して或日塔山に白いものが鮮かに現れた。それから娘の姿は二度と見られなかつた。女の張つた白い幕は石となつて殘つた。そして流々柴社人は今でも塔山を「ホフチユブ」(妖怪山)と云ひ傳へてゐるのである。

―ツォ族　阿里山蕃流々柴社

妖怪の求婚

昔或夫婦が娘一人を殘して畑に出て行つたが、何處からか「ハニト(妖怪)」が現れて娘を拐

してしまつた。これを知つた兩親は大騒ぎして探しまわり、やつと在處が知れたので連れ歸つた。すると五六日經つてから「ハニト」は酒や肉を携へて來て是非娘を娶りたいと申し込むので、よく〳〵見ると立派な若者で子供を負つてゐる。「ハニト、汝は子を負うてゐるではないか、子供がある位なら妻もあるに違ひない、此の縁談はお拒りだ。」といつて、今一度見直すとかの脊中の子供は木の燼であつたし、肉は木の葉で、酒は眞黒な腐り水であつた。兩親は怖しい事に思ひ嚴しく娘を護つてゐたが、何時の間にかかき消すやうに姿が見えなくなつた。「ハニト」に拐かされたのである。

ブヌン族　郡蕃東埔社

亡者の話

或家で朝食を濟ませ、殘つた食物を其のまゝ庭に置いて畑に出た。夕方になつて家族が打ち連れ歸つて來て食事しようとすると、少しも殘さず食ひ盡してあつた。そこで

翌日は一人が居殘り敷物を冠つて覗いてゐた。すると四邊が靜かになつたから庭に埋めてあつた亡者が、のそ〳〵匐ひ出し食物を探し廻り飯粒など拾ひ食つた後爐邊に進み我と我が足を燒いて食ひ出した。肉墮ち色青ざめた亡者が、とろ〳〵と燃える火に足を燒く樣は、此の世とも思はれぬ怖しさなので、家人は身の毛もよ立ち慄ひ戰きながら後退りして行つた。物音を聞きつけた亡者は、犬でも居るかと再び穴に入つてしまつた。昔はこんな怖しい事が屢々あつたが、此の頃は人が死ぬと「ルイフォ」を呼んで亡靈を祓はせるので、奇怪な事は無くなつた。

ツォ族　阿里山蕃　流々柴社

昔或所で家族うち揃つて畑に出で、夕方になつて歸つて來ると棚に餅が載つてゐる。一體誰か搗いたのかといろ〳〵穿鑿したが、どうしてもわからない。餘り不思議なので、翌日は子供を棚の上に殘して置いて前日のやうに耕作に出た。ところが家族が出拂つた後で、庭がむく〳〵するかと思ふと亡者が立ち現れ、腕を焙り油を出し餅米に

つけては頻りに搗き出した。棚の上で見てゐた子供は怖しさの餘り大聲立てゝ泣き出した。すると驚いた亡者は子供の側に寄り、もう二度と出ないから泣き止めよとて、地下に入つてしまつた。それからはこんな不思議は見なかつた。

――ツォ族　四社蕃　雁爾社

註　サゼク族内太魯閣蕃、昔或家で耕作から歸つて屋内に入ると、亡者が爐傍で粟を炊いてゐたから、家人は驚いて騒ぎ立てたので、亡者は慌てゝ姿を搔き消してしまつた。

靈火

昔母子で畑に出で、耕作してゐたが、何うした惡魔の仕業か、たつた今まで元氣だつた子供が忽ち死亡してしまつた。母は悲しみながら其夜は耕作小屋に宿り、翌朝早く起き谷川で水を汲まうとすると火玉が飛んで行つた。不思議と思つてゐると、それが小屋に衝き當り小屋は見る／＼猛火に包まれてしまつた。母は吃驚して逃げ歸つた。次の日恐々畑に來ると小屋は元のまゝだつた。

――ツォ族　阿里山蕃　流々柴社

昔テブラ社の者が我社の附近で狩獵し夜になつて山の狩小屋に宿つた。其の時我社の者は話でもしようと思つて五六人でその小屋に訪ねて行つた。ところが小屋の軒に大きな火玉がぶら下つてゐるばかりで人のけはひもしない。暫く待つてゐても一向誰も來ないから、不思議に思ひつゝ歸りかけると小屋の中から話聲が聞える。やはりゐたのかと小屋に入つたが姿は見えない。そして火玉ばかりがぶら／＼してゐる。屹度妖怪の惡戯だらうと思ひ、その火の玉を斬つた。すると火玉はころ／＼と轉げながら「我は知母勝の者だが『カナブ』の人は人の斬りやうも知らぬ臆病者だ、火玉が落ちても此の通り無事だ」と高らかに笑ひ何處かへ立ち去つた。そして火玉も消えてしまつた。

――ツォ族　カナブ蕃

或る時、數人の勇者が馘首に出かけ、夜に入つたから寂しい山間の小屋に寐たが、墨を流したやうなまつ闇な空に薄青い光が見える。眸を凝してよく見ると長い尾のやうなものがついてゐて、恐ろしい速さで飛んで來ると思ふと其の小屋の上に落ちた。

流石の勇士も大いに怖れ、きつと神が今度の馘首を禁ずるのだと言ひあつたが、獨り頭目は聽かないばかりか社人の怯懦をせめるので、社衆も止むなく共に出草したが、味方には不思議と多くの死者を出した。

怨靈

タイヤル族　大嵙崁蕃

昔木瓜蕃と不和だつた頃は畑に行くにも槍を携へてゐた。或日親子三人打ち連れて耕作に從事してゐたが、丁度眞夏のことで暑熱が甚しかつたから河で水を浴びる事とした。其の時父は少し遲れて出かけたが、近道を通つて先きに河に着いた。子供等が河についた時には既に一人の巨漢があつて頻りに水を濁してゐる。兄弟は憎い奴とて直ぐ槍を投げて突き殺し首をあげた。見れば父に酷似してゐるが後から來る父が先きに河に着く筈がないので、屹度高山蕃だと思ひ急ぎ家に歸つて母に見せた。父は歸つ

たかと尋ねたが、まだだ、それにその首は父の首ではないか不孝者めといはれ、兄弟はぎくりと胸にこたへ大聲あげて泣き出した。併し或は萬一にも父が生きてゐて呉れるかと、果敢ない頼みをかけて六日を明したが、やはり及ばぬ事だつた。七日目に「パラウマノパイシン」をしようとて畑に出ると一本の朱欒が生えてゐた。家族は耕作の時によい蔭を作つてくれると喜び垣を繞して他人の侵入を防いだ。朱欒は不思議に早く成長し、日に一二寸づゝは伸びて亡父の命日には花一つ咲き出でやがて大きな實が黃熟したから、家族はそれをとり味はうとして皮を剝くと果實が泣き出した。不思議に思つて割ると中に男の子がゐた。そこで喜んで育て上げたが、六ケ月目に立つて步き出した。一二年經つと物心がつき亡父の遺物を見る毎にこれも俺のだ、あれも俺のだといふので、兄弟はうす氣味惡く、母は亡き人の再生ではないかと思ひよく／＼見ると次第に父に酷似して來て今は紛れもない父の姿となつた。

その子は五歳になつた。或日家族と共に畑に出ようとする時自分の所持品を皆持つて行くとて、亡父の遺物をすつかり網袋に入れて脊負つて行つた。そして其の書體を洗

ふといつて網袋を携へたまゝ河に下りたがそのまゝ夕方になつても歸らなかつた。母は非常に悲しみ翌朝厭勝人に卜はせると神憑りして「自分は嘗て子供と共に河で身體を洗はうとした時長子のために突き殺された、その讐を報いんために朱欒の木から再生したのである併し次男は何の罪もないのだから殺すやうな事はない、大切に守護するから安心せよ」といつた。翌年の夏長子が水浴してゐた時過つて踏み滑り溺れ死んだ。數へるとやはり父の命日だつた。そして其の後間もなく朱欒の木は枯れてしまつた。

アミ族　南勢蕃

註　アミ族馬太鞍社、父子三人で耕作に出で、晝頃になつたから兄弟が飲料水を汲みに行くと、上流で頻りに水を濁してゐるものがある。怒つて槍でつき殺すとそれが父だつた。母は親殺しの不孝者と怒つて兄弟を追ひ出すと、二人は狩獵して澤山の獲物をえたからそれを持つて謝罪したが、やはり許して呉れない。そこで計略を以て多數の人を馘首し今度こそと思つて歸つた。途中で弟の得た美事な首と交換して置いたから、母は兄を非常に稱揚する。すると弟は憤慨して實はそれは俺がとつたのだといふ。兄はあれ程交換の時に約束して置いたのに不實な弟だと怒つて忽ち地中に入る。すると弟は兄を怒らせたのは自分の罪だと同じく地に入つたから、母もその態を見て夫に別れ子に先立たれては何の樂しみもないと又々兄弟の後を追つて地中に入つたといふ。此の話は既出の父を殺して雷電や星になつた話と全く同じ筋だが不幸が續くのは父を殺した祟だから便宜こゝにあげたのである。

パイワン族呂家社、大竹高社、昔卑南社に二人の兄弟があつて父を殺した爲めに病に犯された。そこで鳥聲によつて祭の法を知り羌仔を供へ舞踊して贖罪の祈りをしたので漸くに病氣が癒えた。

親子の爭鬪

或る所にサウリバン、ラルモガンといふ夫婦があつてモカイといふ眉目よい娘を持つてゐた。モカイは年頃になつたがクリリといふ男と語らふ事を知つた父はそれを憎み、或日斷崖の上に鞦韆をかけそれに娘を乘せて、十分振つた時綱を切つて深い淵の中に墜してしまつた。母は非常に悲しみ、せめて娘の死顏なりと見たいと尋ね廻つてゐたが、丁度クリリに出遭つたから仔細を話しモカイを救つて呉れと賴んだ。クリリは非常に驚き、早速淵に飛び込んだが水が深くて如何ともする事が出來ない。そこで弓で河底をつき穴を穿ち水を流して愛人を救ふ事が出來た。それからモカイは非常に父

を怨み遂にクリリに父を殺させた。すると父は鷹になつて飛び去つたさうだ。

パイワン族　マカザヤザヤ社

註　パイワン族タラマカゥ社、昔一人の老翁があつて病み臥つたまゝ動く事が出來なかつた。ところが一人の孫が忠實しく劬り事へてゐたが翁は却つて無理ばかりいつた。或日孫が豚を屠つて進めると魚が欲しいといふ。そこで豚の脂を餌として魚を釣つたが餌ばかり取られて少しもかゝらない。すると強く引くものがあるので今度こそはと引き上げると人の手が現れて來た。氣味が惡いので其の儵釣を止めて歸つた。ところが病床に在る筈の祖父はゐないで、先きの豚も旨い所は皆失くなつて頭ばかり殘つてゐる。いよ〳〵訝しく思つてゐる所へ老翁は水に濡れて歸つて來た。孫はこれを見て惘れ果て凡て皆祖父の惡戯だとわかつたから、赫となり燒砥石を老翁の口に投げ込んだから、流石意地惡の祖父も一たまりもなく悶絶してしまつた。

昔或所に母子二人で侘住居をしてゐたが、何うしたものか母は子供を愛せず日毎虐待ばかりしてゐた。或日の事息子は八つの山を越えて畑に行きやがて晝になつたから辨當を使はうとすると、中は粟の籾殼ばかりがつめてあつた。息子は餘りの事に呆れ果て空腹を堪へて家に歸つて來たが母は旣に居らない。一體何處に行つたのかしらとあちこち探し廻ると光るものがある。母かと近づくと螢だつた。すると又向うの方に光が見えるので、あれこそ母に違ひないと近づくと、それは「サロヨ」といふ人肉食ひの鬼であつたから、大急ぎに逃げ歸つた。そして執念く迫つかけて來た「サロヨ」に豚の脂を煮てぶつかけると「サロヨ」は苦悶しつゝ死んでしまつた。

そこで一人寂しく暮してゐると、何處からか寶物が飛んで來て家の中に充滿した。母に捨てられた貧兒は一躍して社中第一の富者となつた。ところがそれを聞いた母が漂然と戾つて來たが、息子も腹立たしくて豚の尿と骨とを食べさした。母は散々怨言をいつて遂に悶死してしまつた。社人は自業自得だといつてゐる。

パイワン族　アツダス社

タナオポノク

或時兄弟で畑に出で除草してゐると、叢の中から「汝等がどんなに草を刈つても直ぐ延びてもとのやうになるだらう」といふものがある。訝しく思つたが別に探らうと

もせず其の日は家に歸つた。ところが翌日畑に出て見ると一面に草が生えて刈つた跡も見えない位である。そこで其日は家に歸らないで畑に留る事となつた。すると夜中にタナオボノクといふものが現れて一面に草を植ゑつけるので、兄弟は大に怒り直ぐ矢を番へて射たが、彼は忽ち石となつたから矢は逸れた。二人は叶はぬと思つて逃げ出したが、弟は石に躓いてそこに在つた芋蒸竈の中に倒れたので、タナオボノクは笑ひながら弟をひつ捕へて山奥に連れ込まうとする。兄は氣が氣でないので勇を鼓して跡を追つた。タナオボノクは「汝は弟を返して欲しければ我に白豚を献じよ、さうすると收穫も豐かにしてやるから」といつた。そこで兄は直ぐと白豚を献じ弟を取戻した。今でも不作の時には「バユ」といふ所に白豚を捧げるのである。

パイワン族　タラマカウ社

カイシナピラ

昔ウマオリワンといふ女があつたが、或時重い眼病を患ひ悩んでゐた。すると何處

からかカイシナピラといふ男が現れ、「汝は何故働かないで家にばかり籠つてゐるのか。」と尋ねるので眼病に悩んでゐる事を應へた。不思議な男はそれを聞いて、「それぢや俺のブスを握つて見よ、眼病は立ろに全癒するだらう」といふので、ウマオは大いに怒り、「女だと思つて馬鹿にすると承知せないぞ、疾く立ち去れ白痴者め」と罵りつゝ爐中の燼を取つて投げつけた。カイシナピラは呵々と笑ひながら大聲で謠ひ多くの薪を擔いて昇天してしまつた。恐らく彼は雷の化身だつたのだらうといひ傳へてゐる。

サイセット族　大隘社

鉢卷の怪

昔二人の婦人が共に髪を洗はうとて、竹筒に水を入れて頭にかけてゐた。するといつのまにか頭に卷いてゐた鉢卷が解けて、それが腸となり一人の婦人の足に纏りついて次第に上の方へ這つて行くので、吃驚して大聲を立てた。他の婦人は慌てゝ取り除

けようとして懸命にその端を引いたが何うしても駄目だつた。そのうちに他の端が不意に「コテ」に觸れてしまつた。折から屋上にゐた鳩が「トトトトル、アキリッル、ナヌアリスライ」と鳴き立てたから女は火のやうになつた。何の因果かその後この腸は決して此の女から離れなかつた。そのうちに女は姙娠して一子を生んだが、その子が大きくなつた時、「暫く母を離れて薪を採つて來て下さい」と餘り賴むので父の腸は已むなく脚から下りて外に出かけた。母は其の機を外さず屋根の上に逃げ登つた。すると腸も執念くついて登らうとしたから上から熱湯を注ぎかけて殺してしまつた。

パイワン族　卑南社

天を射た話

或所にクルルといふ男が娘のモカイと佗住居をしてゐた。或日父は狩獵に出かけたが、その留守中にモカイは「リマウサン」鳥に攫はれて行つた。夕方獵から歸つた父

は娘が居らないので、四方に矢を放つて行方を探した。ところが四方に射た矢は皆そのまゝ歸つて來たが、唯天に向つて射た矢だけ戻つて來なかつたから、モカイが天に昇つた事がわかつた。父のクルルは早速天に昇つて見ると澤山な白い家が立並んでゐた。クルルは諸所方々を尋ね廻つたが誰一人娘を知つてゐるものがない。途方にくれてゐる所へ彼方から美しい天女が嫋々と歩いて來る。よく見るとそれが娘のモカイであつた。父は喜んで驅けより「汝はどうして昇天したのか」と尋ねると、娘は「妾は鳥に攫れて知らぬ間に天界に昇つてゐたのだが、今ではプルルガンの妻となつてゐます」と答へるので、それぢやそのプルルガンに會はうとて案内されて行つた。そこで父はプルルガンに向ひ「若しも汝が我が娘が欲しいのなら正式な結婚をせよ」と勸めたから、彼も一々道理に服し、うち連れて下界に降り改めてクルルの愛婿となつたのである。

パイワン族　タラマカウ社

註　マカザヤザヤ社、昔阿里港の「ダラダライ」社で、或夜一人の女が火を點して粟を搗いてゐたが、何處からか「コラコラウ」といふ鳥が飛んで來て女を掠つて行つて悉くその肉を食つてしまつた。

熊に攫はる

或時一人の娘が薪を採るために山に入つたが、不意に一匹の熊が現れて躍りかゝつた。驚いて暫くは逃げ廻つたものゝ流石に疲れ果てたので、遂に熊の爲めに捕へられ樹上に運び去られた。熊は直ぐに殺さうとはせず、先づ娘の衣を剝ぎ乳を吸ひ始めた。暫くしてから熊は俄かに地に下り大石を携へて來て打ち殺さうとする所を、娘は必死の勇を鼓し「バラカオ」(鎌)を取り直し力をこめて熊の双手を斬り落してしまつた。すると怒つた熊は珠仔を飾つた腰嚢に嚙みついたので、娘はす早く其の紐を解き放つた。獰猛な熊も大地に落ち一たまりもなく死んでしまつた。併し娘は裸體のまゝなので耻しくてたまらず、「親戚の人々よ妾を見て下さるな」と叫び續けてゐる時、幸に父が梯子を持つて來て助け下したから、姑婆芋(ガーヤオ)の廣葉をとつて身を蔽ひ家に歸る事が出來た。

タイヤル族　眉原蕃　汶水蕃
溪頭蕃

註　サゼク族木瓜蕃、昔或家の娘が畑に出てゐたところへ熊が現れて娘を捕へ木に登つて、乳房、耳などを食つて行つて、次に「ピピ」を食べようとしたが臭氣に躊躇してゐた。其時娘の歸りが遲いのを心配して探しに來た父がこれを見て非常に驚き石を拾つて打ちつけた。そして怒つて下りて來た熊を更に斧を揮つて兩趾を斬り腦天を割つて殺してしまつた。負傷した娘は家に運ばれたが間もなく死亡した。

平埔蕃パゼツヘ族、或時一人の男が鹿を狩りつゝ深山に入つたが、ふと牝熊に出遭ひ遂に捕へられて大樹の上に引き上げられた。樹の上には二頭の子熊が待つてゐたから、牝熊は此の男を餌食にする爲めに捕へたのである。そこで樹を下りて大きい石塊を持ち上りそれで打ち殺さうと思つたが逃げられる事を懼れたので子熊に云ひつけた。ところが子熊は力が足りないので、幾度も〳〵小さな石しか運べなかつた。牝熊はそんな石では人を殺す事が出來ないと已むなく自身で取りに下りた。その間に捕はれた男は子熊の眼を掠めて樹から樹と逃げ延び遂に危急を脫する事が出來た。

パイワン族マシリジ社、昔モーカイといふ女があつた。或日一匹の熊が不意に彼女を頭に載せてかつさらつたので、どうなる事かと思つてゐると、「ダチユー」鳥がそれを見て直ぐ熊のところからモーカイを奪ひ嘴に啣へて連れ歸つた。牡丹路社でも大體は同じだが、女がサボチブン(泉)で月經の汚れを洗つてゐるのを見て熊が犯すことゝなつてゐる。

ササウヂャジョイ

サウヂャジユャンの妻をササウヂャジョイといつた。或時夫が出草したから妻のササウヂャジョイは庭を掃いてゐた。すると俄に天から數滴の血潮が落ちて來たので、惡い前徵ではなからうかと思ふ間もなく、一羽の鳥が大空から舞ひ下りて來て夫の殺害せられた事を告げた。そこでササウヂャジョイはその鳥に夫の骨を拾つて來て吳れと賴んだが、鳥は承諾して「ダギヂャン」（男の腰卷）を携へ飛んで行つた。暫くすると其の中に骨を包んで持つて來た。そこで彼女は夫の骨を板の上に列べて謠ひ出すと、骨は立上り、皮肉つき、氣息通じ軈て夫は蘇生した。サウヂャジユャンは復讐しようとて隣人スカボカボンを伴ひ敵地「チャバグリ」に赴き、社人の踊り狂ひ醉ひ倒れたところを悉く馘首して歸つた。

パイワン族　スクスクス社

ヤロボンゴロス

或る所にヤロボンゴロスといつて怪力無双の男であつて人肉を嗜んだ。或時も子供

を捕へて食つてゐたが、それを見た子供の父は火のやうに怒つて拔き打ちに斬りつけた。ところが少しの事でそれてしまつたから、す早く弓引きしぼり射たが、やはり外れてしまつた。するとヤロボンゴロスは呵々と笑ひ、汝等の如きへろ〳〵矢が刺つてたまるものかと兩手をあげて威張り散らすので、矢庭に其の腋下を射た。さすがのヤロボンゴロスも急所の痛手にたまらず其場に斃れた。父は憎い仇をとつたのである。

サイセット族　大隘社

註　パイワン族牡丹路社、或時一人の老婆が何か甘さうにぼり〳〵食つてゐるので、人々は怪んで尋ねると落花生だといつたが、よく見ると嬰兒だつた。昔はこんな人食ひの鬼婆も住んでゐたさうだ。

サウリバンアボラル

昔々「エタノーマ」社にサウリバンアボラルといふ頭目があつた。或日蕃丁を集めて耕作させた謝禮に晝飯を饗した。ところが肴は蛇の肉だつたので誰一人手を出す者も

なく、皆々空腹を忍んで歸つて行つた。するとサウッバンは甕の中に屁を貯へて置いて、今度は美酒を飲ませるからといつて人を集めた。そこで頭目はやをら彼の甕を取り寄せ蓋を除ると中から澤山の蜂が現れて螫し廻つた。餘り惡戲をするので社人等も憤り、殺さうとまで敦圉くものもあつたが、頭目だといふのでその儘に濟した。それでも頭目は少しも行跡を改めずに横暴を極めてゐた。或日も社人に猪を生捕つて來いと命じたから、彼等は漸く猪を捕へて來ると、頭目は大いに怒り、「こんな牝ぢやない、俺の欲しいのは猛々しい牡猪だ」とさんざん叱りつけた。そして尚「キラオラオ」鳥も捕へて來いと重ねて命じたから、蕃丁等も澁々山に行き「キラオラオ」鳥を射て差し出したが、「どうして生きたまゝで持つて來ないのか」とやはり無理な事を云ふので、社人は遂に頭目を殺さうと決議した。そこで或日社人は「パダイシ」社に「キソジョ」に行かうと誘ふと、頭目は大陽物を腹に卷いて山越しに出かけたが、途中で不意に敵が來たといつて蕃丁が皆逃げ出した。剛情な頭目も一人では叶はないと、陽物を地に引き摺りながら慌てゝ逃げたから少なからぬ負傷をした。ところが翌日になつて蕃丁等

は又もや「キソジョ」を勸めて、「敵が來ても我等で擔ぎ歸るやうに箱を拵へて來た」と、言葉巧みに欺いて箱の中に押し込み釘うちつけ崖の上から轉すと數百尋の谷間に落ち、流石の頭目も微塵になつて死んでしまつた。今も其處には一本の「タラプ」（臺灣松）が挺然と聳え、横暴で奇蹟的だつた頭目サウリバンの哀れな最期を語つてゐるやうである。

パイワン族　マシリジ社

靈蛇

昔或家で毎晩爐の灰がなくなるので不思議に思つて數人の人が見張つてゐた。すると夜半に何處からか一匹の大蛇が現れて屋内に入らうとしたから、人々は武器を持ちながら立ち竦んで進む事が出來なかつた。そこで物識りの老婆に其のことを告げると、彼女は早速箱を携へてやつて來たが、非常に容易く大蛇をその中に納れて持ち歸つた。かくて老婆は其の蛇を飼養したが靈驗があらたかで、子等が病んだ時など其の側に連

れて行くと病は忽ち全愈するし、戰爭などの時には籠に入れて天に高くさし揚げると敵が全滅した。ところが或年豪雨があつて河水氾濫した時不幸にも靈蛇を流失したので、社人は口惜しい事をしたと其行方を探してゐると、臺灣人の沈めた筌に異樣の蛇が入つたから見物に集つた者が數百人一時に死亡したといふ風評を聞き、それこそ我社の靈蛇に違ひないとて、人を遣し貰ひ受けて再び老婆の手に返した。老婆はそれからは一層大切に養つてゐたが間もなく蛇が死んでしまつたから其の骨を布に包み棚に納め神と齋き祭つてゐた。

註　サイセツト族ガラワン社、或所にハヤワンといふ者があつたが一匹の不思議な「スロー」(蛇)を飼つてゐた。餌はいつも灰を與へてゐた。戰爭など始まつた時、其の蛇を示すと敵は全滅したり、小兒が病んだ時など其の蛇を側に置くと病は立ろに全快するのであつた。

サイセツト族　大隘社

蛇食ひの話

昔々パカトゥといふ蛇食ひ男があつて、いつも山に行つては蛇を捕へて喰つてゐた。

ところが其の娘は蕃社に稀な美人であつたから、我こそ婿にと云ひ寄る者が數十人もあつた中に、アラサイといふ青年が遂に娘の婿となつた。容貌秀麗で怜悧な男だつたから父のパカトゥも喜んでゐた。或日父は息子と婿を連れて例の蛇狩に出かけた。アラサイは恐る〳〵山に來ると、忽ち大蛇があつてアラサイを呑まうとするので、慄ひ上つて逃げ歸つた。パカトゥ親子は首尾よく大蛇を殺して歸りアラサイの臆病を罵り、そのやうでは我家の婿にはなれぬといふ。そこで再びアラサイを連れて蛇狩に行く事となつた。其時アラサイは父を欺き木陰に隱れてゐて、蛇が殺された頃立出でゝ大獵を祝した。すると父は婿に命じて蛇を運ばし家に歸ると餅を搗き、蛇を肴に酒を酌んだ。其の時父はアラサイに向ひ蛇の旨煮を里の母に持つて行けと命じた。アラサイは今日はどうも樣子が變だと思つたから屋外に立つて親子の密談を聽いた。それとも知らぬパカトゥ父子は「どうもアラサイは臆病者だから鹽漬にして食つてやらう」といふのである。泣き悲しむ娘の願ひも聽かばこそ、忽ち相談一決したのである。アラサイは膽を潰し攜へてゐた蛇料理を河中に投げ込み、母の許に走り歸り仔細を語つて、二

日目の朝には屹度養家に來て救つて下さいと賴んでおいた。

パカトッ父子は翌夜アラサイが臥つた所を捕へ鹽を目や口、鼻につめ込み、無理に瓶の中に押し込めてしまつた。アラサイは苦痛を忍び瓶中に靜坐して靜かに目鼻から鹽を取り出し、母の來るのを待つてゐた。すると翌くる朝「アラサイ、アラサイ」、と呼ぶ聲がするから、瓶も割けよと大聲で返事をしたので母は漸く愛子を救ひ出した。然しそこには養父母の一家の姿は見られなかつた。

アミ族　南勢蕃

蛇に呑まれた少女

昔「スルッド」といふ所に三人の兄妹が住んでゐて或日妹を水汲みに遣つたが暫くたつても歸つて來ないから兄弟二人で探しに出た。すると途に「パクニャッ」(蛇)が匍つた跡があるので、屹度蛇に呑まれたのだらうとて、一先づ家に歸り刀を研ぎ「バッ」樹を燃して焙り、次ぎに杵を截つて見たが、一刀のもとに兩斷したので、二人は勇み立つて水邊に赴き「パクニャッ」を探しあて切り殺し、ずたずたに刻まうとて腹のあたりを切ると「カチリ」と音がするので不思議に思ひ腹を裂くと、妹は未だ死なずに刀尖を腕環で受け止めたのであつた。そこで兄弟は大喜びで妹を連れて歸りその恙なかつた事を祝つた。

パイワン族　呂家社

蛇の子物語

昔或男が山に行つた時、どこからともなく可憐な幼兒の泣聲が聞えて來るので、不思議に思ひ其聲を辿つて行くと、一匹の大蛇が大事さうに人の子をとぐろの中にかばつて時々眞赤な舌を出しては其の兒を嘗めるのであつた。餘りの恐しさに身の毛もよ立つたが、勇を鼓して進み寄り蛇を追ふと、名殘惜しげに蛇が逃げ去つたから、早速

その兒を抱き取り急ぎ我家に連れ歸つた。そこで粟飯を食べさゝうとしたが、少しも食べないで泣き出すから、芭蕉の實を與へると泣き止んで食べた。かうして男は芭蕉實や甘藷などで育て上げたので健かな若者となり今は狩獵にさへ出かけるやうになつた。或日も他の子等と共に鹿狩に行つたが、他の子には一匹の獲物もなかつたが、蛇の子は多くの鹿を獲た。又或時は馘首に出てゝ他の子は一つも馘らないのに、蛇の子だけは太つた逞しい首を二つも得る程武勇に勝れてゐたから、男も大いに愛し實子の如く撫育した。そして蛇の子は親として事へるばかりか、他の子等を勞つたので實の兄弟のやうであつた。

　ところが或日の事兄弟等打集ひ、肉乾し棚に登つて涼んでゐると、どこからか人の呼び聲がする。併し四邊を見廻しても一向人の氣がないので、他の子等は不思議に思ひ、「何處にも人がゐないのに、怪しい事だ、若しか『タム』が來たのではなからうか」など口々に囁つてゐたが、蛇の子は非常に悲しみながら「嗚呼母が呼びに來たのだ、自分は緣あつて汝等とは此の年月兄弟となつて暮したが、今日限り別れなければならな

くなつた。思へば悲しい事だ」と潸然と泣いた。すると大蛇が早傍にやつて來て彼を嘗めると見ると、忽ち姿が變つて蛇となつてしまつた。兄弟等は驚き戰慄いて棚を下りた間に蛇は地中に入つた。然し殘つた兄弟等は、假令蛇の子でも年久しく交つた友情から離別の哀愁に堪へかねて、鼻笛をとり出して吹奏すると心自ら慰んだ。それからは毎日兄弟等が吹き澄してゐたが、或日數多の蛇が一時に現れて彼等の周圍を取り卷いたから、彼等は色を失ひ、思はず携へた笛で大蛇の頭を打つと、忽ち火を發し見る〳〵四方に燃え廣がり草木を悉く燒きつくしたから、蛇は逃路を失ひ悉く焦死した。ところが一匹の青蛇ばかりが尾を燒いたきりで辛うじて穴に逃げ込み、他の蛇の殘して置いた無數の卵を孵化したから今に蛇が絶えずに繁殖するのである。

サゴアナの話

ツォ族　簡仔霧著

昔或家で始終玉蜀黍の殼を一箇所に棄てゝゐたがやがて積み重つて小高い丘となつ

てしまつた。或日二人の男が其の側を通つた時中の方で放屁の音がするので一人は早速立止つて不思議さうにしてゐると、他の男は「何だよいものでも拾はうとするのか。こゝな慾ばりめ」と揶揄つたが、彼の男は大眞面目で中から屁の音が聞えるからだといふので、「馬鹿な、塵捨場に人がゐるものか」と互に云ひ爭つてゐる時、更に大きな勢のよい音がしたので、今は疑ひもなく黍殼を掻き分けて見ると、其の下に端麗な男の子と女の子が伏してゐた。暫くは惘れてゐたがやがて二人の子を伴れ出さうとすると、何處からか鼬鼠が現れて必死と咬みついて來るから、二人は芭蕉の實を與へたが、やはり向つて來るので雞を捕へて釣ると漸く食ひついた。それつといふと一人は早速二人の子供を抱いて逃げた。彼等はその子をサゴアナと名づけて大切に育てた。鼬鼠は二人の子を取り返さうともせずそのまゝ數日間はやつて來て子供の側に添寢してゐたが、次第に成人するのでいつの間にか來なくなつた。鼬鼠の子サゴアナは少しも普通の人と異らぬばかりか、むしろ何事にも優れてゐたから社人にも愛敬されたといふ事である。

註　阿里山蕃のララチ社では、玉蜀黍の殼の堆積した下に「クフォク」といふ獸があつて人の子を育てゝゐたから、其家の人が拾ひ取つて哺育しサゴアナと名づけた。そして今もその子孫が立派に殘つてゐる、といひ傳へてゐる。

大潭

ツォ族　阿里山蕃　達邦社

新竹の近く、トロバクン社のあたりに湖水がある。春は繚亂とした萬花の妍、秋は散り敷く千葉の彩は見られないが、四時翠綠濃かな岸べには幾羽とも知れぬ白鵠を下り立たせ、悠長な水鹿の群を遊ばせる。土人はそれを大潭と呼んで塵寰を離れた幽境としてゐるのである。

昔此の社に美丈夫があつたが、祖法を破つて二妻を娶つた。初めのうちこそは眞に爭ひもなかつたが、日を經るに従つて醜い嫉妬の鬪爭が續くやうになつた。それに二女とも揃ひも揃つた不孝者で只一人の老母にさへ從順に事へなかつた。或る時も二人

の妻は装飾用の瑪瑙の事から口穢く啀み合つて何時果つべくも見えなかつたので、祖先の靈は赫怒して忽ち大地震を起した。すると家の有つた所は俄に陷沒してしまつて漫々とした湖水となり、彼の不倫な夫妻は悉く水底深く沈み果て、只老母一人が殆ど奇蹟的に命を全うしたさうである。そして漣の寄せる大潭は今はかうした遺跡とも思はれぬ靜けさなのである。

平埔蕃　タオカス族

靈池

パイワン族　スパイワン社

「チャリシ」社の地に「サカロカロペリ」といふ處がある。そこに淸澄な池があるが、昔テサラバンといふ神が其のみ子カラロを沐浴せしめた靈跡だといふので今に社人が近寄らない。

蕃王

康熙三十年の事、水社湖(日月潭)の東北隅の水中から一夜のうちに巨大な茄苳樹が生えた。樹幹は周圍二丈に餘り、根は十二尋の水底に蟠り、梢は三百尺の高空に廣がつてゐた。その頃この附近に移住した「ロフト」蕃は神木と稱へて刀斧を加へなかつた。ところが、計らずも樹靈が蕃婦に通ひ遂に一男を擧げたが、長ずるに及んで赭顏多髯で身長九尺に及び膂力飽くまで強く、實に狀貌魁偉な偉丈夫だつたから衆は推して蕃王と呼んでゐた。

此事を聞いた當時の臺灣巡撫は縣丞を遣して其の樣を見させて後、一哨の兵士を派し附近に屯在して日々巨木伐採に從事せしめた。けれども伐つても伐つても刀鋸の痕は少しも幹に殘らない。そこで巡撫は怪んで或日茶菓を供へて天を祭り、謹んで神敎を乞うた。すると其の夜靈夢があつて告げられるやう「茄苳の大木は實に天地日月の精靈を享けてゐるもので、一夕湖中に發生したといつても既に千年の齡を經たもの

である、汝今大兵を派し、鋭斧を以て之を伐つても、何等の效もないであらう、併し大木の忌む所は針、鋸、それに黑犬の血である。だから先づ針を樹皮に刺し、黑犬の血を塗り、その後鋸を加へるならば伐る事意の如くだらう」と。そこで靈夢に遵つて伐るとさしもの大木も忽ち伐り倒されてしまつた。そして彼の蕃王は其日湖水に投じて溺死を遂げたのであつた。

平埔蕃　石印化蕃

田螺の美人

昔五人兄弟が住んでゐた。早く兩親に死なれ賴るものとてなかつたから、彼等はお互に助けあひ仲睦じく耕作に勵んでゐた。或日も五人で例の通り朝早くから田に出てゐたが、末子がふと一つの田螺を見つけたから、拾ひとつて持つて歸り屋內に置いた。翌日も一日働いて夕方になつたので、末弟は炊事の爲めに一足早く歸つて來た。そし

て急いで爐邊に行くと、既に手落ちなく食事が整へられてゐた。不思議に思つて兄弟等に告げたので、皆々訝つて明日は眞相を確めようといふ事になつた。そこで次の日は一人が隱れてゐた。すると一人の美女が立現れていそ〳〵と炊事をし始めたが。すつかり用意が終ると何處かへ立去つた。それを見屆けた男は兄弟に仔細を話しいよ〳〵怪んでゐる所へ一老人が訪ねて來た。老人はそれは「ミリミリガヌ」だらうといつたので、あくる日は兄弟全部で隱れてゐるのを知らずに、美女が遣つて來て例の如く炊事し始めた。兄弟はそれとばかり四方に立塞つた。「お前はどうした女か、そしてどうして每日炊事をしてくれるのか」と問はれて、女は淚を流しながら、「妾は何の因果か兩親に憎まれ虐められて、田螺の殼に入れられてゐたのを、此の家の人に助けられた嬉しさに、每日炊事なりとして上げようと思つたのです。」といふ可憐しさに、兄弟は大いに同情したが、遂に長兄が娶つて夫婦の契を結んだ。

パイワン族　スクスクス社

ルパヘの話

昔或所にルパヘといふ者があつたが、赤貧洗ふが如きさまに誰一人對手にするものもなかつた。海に漁りに行くにも一人なら、山に獵するにも連れはなかつた。ルパヘも仕方がないので草の纖維を練つて網を造り獨り寂しく海に出かけては一日中漁り暮してゐた。ところが或日見た事もない美麗な魚を得た。黄金色の光澤ある細鱗が匂ふばかりなので、評判がぱつと廣つた。

其事を聞し召された清國皇帝が、それ程珍しい魚ならば是非獻せよと仰せられたが、ルパヘは「こればかりはお許しを願ひたい、その代り六百金を奉りませう」と、お答へしたが、清帝はなか〳〵許されず若し一萬兩を出すならば許してやらうと仰言つた。するとルパヘは家に歸つて忙しく紙を切り紙幣を造り一萬兩整へて献上した。日頃貧乏な男だから、まさかと思つて居られたが、案外な事に一時はそのまゝにせられたものゝやはり嚴しく珍魚を責められるのを蒼蠅く思ひルヘパは遂に其魚を逃してやつた。

其後ルパヘは再び珍らしい魚を捕へようとて漁に出たが、魚を得ないで雞を捕へたから、喜んで籠に入れて飼つた。或日ルパヘの母が朝飯を拵へてゐるのを見てゐた雞は、翌朝まだ家族の起き出でない間に籠を出、飯を炊いて具へて置いた。母がいつものやうに起きると、ちやんど朝飯の用意が出來てゐるのに驚き、いろ〳〵穿鑿したがどうしても判らなかつた。あまり訝しいので、その夜は母が眠らずに窺つてゐた。それとも知らぬ雞は羽毛を脱ぎ人となつて炊事に取りかゝつた。そこで朝になり母が起き出でゝ雞籠の前に行き「炊事をしてくれたのはお前だつたか」と、早速籠から出さうとすると、雞は忽ち美しい婦人となつた。

清帝がそれを聞き「雞の化身した婦人を出せ」と仰せられたが、ルパヘは紙にブナ(魚の名)の形を切つて献じたまゝで婦人を出さなかつた。清帝は赫怒せられたがルパヘの魔術を知つて居られたから、「若しも汝が大蛇を目前に現すならば許してやる」との事で、ルパヘは早速紙を切り大蛇と變じたから許された。

ところが五六日經つと又雞の化身を呼べと命ぜられた。ルパへも今は詮方なく恐しい巧みを企てた。それは蜘蛛芝居なので、ルパへが紙を切つて蜘蛛を作ると蜘蛛が面白い演劇を始めるのである。人々はこれを聞いて珍らしがり我も我もと集つて來て清帝の宮庭は人山を築いた。其の時一匹の蜘蛛は火藥を含み、他の蜘蛛は灰を呑んで來て芝居の眞最中に相觸れたから、忽ち一大音響を立てゝ爆發し集つてゐた人々は悉く燒死してしまひ、跡にはルパへと雞とが殘つてゐた。そこでルパへは一躍して清國皇帝となり雞の美人は皇后となつたのである。今でも支那婦人の足の小さいのは雞の化身だからだといはれてゐる。

或少女の話

アミ族　馬蘭社

昔我が社に美人があつた。色あくまで白くて膚の匂が殊にめでたかつたので、全社

の青年の憧れの的であつた。兩親は二なきものに劬り育てゝゐたが、或時腹黑な友達に誘はれて谷川に遊んだ。二人は衣類を脫いで水浴をしてゐるうち、誤つて彼女は溺れてしまつた。友の娘はそれを見棄てゝ岸に上り、早速美女の衣服を纏ひそのまゝ友の家に行つて娘になり濟してゐた。兩親は娘の歸つたものと思ひ、種々の馳走を陳べて食べさせると、何時も少食だつた娘が俄に恐しい大食をするし、美しかつた聲が急に大きなだみ聲になつてゐるのが訝しいので、よく〳〵見ると似てもつかぬ娘なのであつた。兩親は呆れて物もいへなかつたが、屹度妖怪の仕業に違ひないと一刀の下に斬り殺した。そして實の娘の行方を探したが少しの手がゝりもなかつた。

ところが溺れた娘は流れ〳〵て遙か下流に漂つてゐたが、丁度通り會せた內文鹿社の男に救はれ蘇生したから、連れ歸られて恙なく暮す事が出來た。併し日夜故鄕戀しくどうかして父母の許に歸りたいと思つてゐたが、或日「ダラプ」の樹で拵へた櫛を地に投げ捨てると、不思議にも根がつき葉出で次第に成長して、數年の後には其の枝が延び〳〵て故鄕に達したから、娘は喜んで枝を渡つて家に歸り久し振りで嬉しい對

面をした。

註　昔サウラルヤンといふ娘があつたが、或日友達のカリカリを招き「コカイ」(鞦韆)に乘つて遊んだ。ところが、サウラルヤンはよく飛ぶ事が出來たが、カリカリは飛ぶ事が出來なかつたので「汝の體が余り重いからだ」といつて悉くカリカリの著物を剝ぎ取つて再び乘せた。するとカリカリもよく飛べるやうになつたから面白くて何時までも乘つてゐたが、軈て鞦韆が空高く上つた時、サウラヤンは「コカイ」の綱を途中からぷつりと切つたので、カリカリは遙かの海中に飛されてしまつた。そこでサウラルヤンは友達の衣を纏ひすつかりカリカリになり濟して友の家に歸つて行つた。カリカリの母は娘と思つて芭蕉の實を與へると、彼女は早速幾本かを食べ悉してまだ不足を訴へるので、よく〳〵見るとサウラルヤンである。母は娘が何處に行つたのかと每日泣き暮してゐたところへ、或日鹿が溺れてゐたカリカリを救つて連れ歸つた。母はカリカリを抱きながら嬉し淚にくれてゐたが、漸く眞相がわかつたのでサウラルヤンに對する憎惡の念が抑へがたく不意に熱湯を浴せて殺してしまつた。そしてカリカリ母子は何事もなく餘生を樂しんだのである。(パイワン族　スクスクス社)

パイワン族　呂家社

天助

或所にクリリといふ孤兒があつた。食ふに食なく著るに衣もない貧しさに心細い日を過してゐたが、サリパオ、ポアウといふ二人の友ばかりは每日やつて來て、何くれとなく世話をしてゐた。或日クリリは二人の親切がしみ〴〵嬉しいので何とかして酬いようと思ひ「ラポポ」、「シシ」、「ラタラ」、「タプライ」などの諸草を摘み「モイ」と共に羹た。すると「モイ」は脂となり「タプライ」は豚の胎兒に、「ラタラ」は腸、「シシ」は骨、「ラポポ」は肉と皮になり、見る〳〵鍋は豚の甘羹で滿ちた。丁度その時二人が來たが心からの饗應に喜んで歸つて行つた。其夜クリリは「楯で草を拂ふと草が皆粟になる」といふ夢告を得た。そして翌日起き出ると庭に一箇の楯があつた。これこそ靈夢の楯だと喜び勇んで草を拂ふと果して粟となつた。再び拂ふと種々の飾物が出た。かうしてクリリは一躍して社中第一の富者となり、やがて伯母の頭目の後を嗣ぎ大頭目として勢威四隣に震ふやうになつた。

註　アミ族南勢蕃、昔貧しい孤兒の兄弟があつた。社人はいつも侮辱するばかりで、誰一人兄弟に好意を持つものもない哀れな有樣だつた。或年非常な天災が續き、五穀は實らず水は涸れ、人々は草根木皮で漸く露命を繫ぐのであつた。其時一老婆が兄弟の家にやつて來て、「世間が飢饉で困つても汝等は決して心配する

パイワン族　マカザヤザヤ社

に及ばない、近い中に汝の家には井泉が湧き出るし、又鳩が飛んで來て屹度よいやうにしてくれるから、そして假令どんな事があつても決して無情な社人に告げるな」といひ置いて何處かに立去つた。すると二三日して水瓶の下から氷のやうな清水が滾々と湧き出でた。そして又「バソラン」の所で頻りに鳩が鳴くので行つて見ると米がある。孤兒は天助と喜び勇んで米を運び薪を拾つて炊ぐ事が出來た。鳩はかうして毎朝米を持つて來ては兄弟に與へて行つたから、眞先に死ぬ筈の二人は少しも衰へず、却つて顔の艶が増すので社人は不思議に思ひ、どんな祕法があるのかと、日頃の仕打さへ忘れてしまつて聞く者が多かつたが遂に知らさなかつた。ところが飢饉は日益に烈しく餓死するものが相續いたが、哀れな孤兒ばかりは不思議に生き存らへたのであつた。然し凶作が止むと間もなく水も出なくなつたし、鳩も米を持つて來なかつた。ところが其頃には誰一人侮る事の出來ぬ位兄弟は立派に成人してゐた。

小人の話

昔「ピンサバカン」の邊に「シーグッ」（木豆）の枝さへ渡ることの出來る小人があつた。身長に似あはぬ長刀を佩び行動敏速であつた。平常は叢中にかくれてゐて、蕃人が通ると呼ぶ。そしてうつかり近づくと必ず斬り殺されたさうだ。木豆の名を取つて、

怪小人をもシイグッといつて恐れてゐた。

タイヤル族 ガオガン蕃 南澳蕃
シヤカロウ蕃

註 小人の名はショゴチ（南澳蕃コーゴッ社）シンシング（シヤカロウ蕃）ともいふが同語から出てゐるらしい。

パスコワラン溪の兩岸に巨樹があつた。相方から枝が延びて交叉してゐたので、丁度反り橋を架けたやうじあつた。昔其の邊りに一人の小人が住んでゐて、時々此の橋を渡つて蕃社に來ては婦女を姦したから人々は、怒つて橋を截り落してしまつた。其後小人は何處に行つたかわからなかつた。

或説には、その頃死者の靈魂が此の橋を渡つて、東に行つたものだ、といはれてゐる。

タイヤル族 鹿場蕃

昔或所に「ムシングショゴッ」（小人）の群があつた。或時社人が狩に出で小屋を建てゝ寢てゐると、小人は梁の上から刀を投げて社人を殺した。或時社人は怒つて小人を探したが何處に逃げたか皆目わからなかつた。其後もまた狩小屋に泊つてゐると、又梁を外して社人を殺傷したから、社人は非常に怒り復仇せねばならぬと、同じ所に小屋をかけ外に出て戻つて來ると梁を外してあるので小人の來た事を知つたから、皆々蕃布を冠り棒を握つて待つてゐた。すると小人等が入つて來たから悉く打ち殺してしまつた。それにも懲りずに小人等は更に大勢でやつて來て斷崖の下に新に建てた小屋を毀ちかけたので、社人は不意に小屋を潰して彼等を壓殺し盡してからは小人の姿は見えなくなつた。

サゼク族　外太魯閣蕃

昔「タケリット」といふ所に身長二三尺ばかりの小人族が住んでゐた。彼等をサルソといつてゐたがサルソは非常に戰爭巧者で、いつも岩や芭蕉の蔭に潜んでゐては不意に刀槍を突き出したり狙撃したりして人々を苦しめた。祖先等はサルソを憎んでいつか復讐してやらうと思つてゐると、偶々蠻蕃で粟刈してゐる時畑を横切つたから早速小人の首を切つた。すると難を逃れた者が今の「ピシテボアン」に烽火を揚げて味方に合圖したから、忽ち小人族が群れ集り、各々刄を手にして藷の蔓を潜り、木豆の枝を渡り芭蕉の葉に隱れて攻守よく力めたから、流石の蠻蕃も散々に打ちなされ本社に逃げ歸つた。併し小人に敗けては末代までの恥辱だとて頭目は全社數百の壯丁を集め下知して曰く、「芭蕉を見れば葉ぐるみ斬り倒せ、藷の蔓を踏まば搔き上げよ、木豆の枝は打ち拂へ、決して油斷してはならぬ」と。壯丁は弓箭を放ち、刀槍を揮つて奮戰したから、サルソは大敗して遂に海を渡つて逃げ去つた。

ブヌン族　丹大社　イバホ社
タケバカ蕃卡社

註　卓社蕃カツト社、昔タケリツトといふ三尺ばかりの小人があつてよく戰つたが、遂に蕃人に敵せず海を渡つて對岸に逃れた。又同じく「サルソ」といふ小人族もあつたが平地に逃れてしまつた。先年臺北に行つた時停車場の南の方に彼等小人族の群居するのを見た。

タケバカ蕃タバマロワン社、サドツソといふ小人は常に蛙を食し樹枝を渡る事が巧妙で一度叢陸に潜むと容易に探し出せなかつた。

巒蕃カトグラン社、昔郡大溪の右岸にサロソーとて三尺位の小人族があつたが、彼等は叢中に隱れて矢を射たので祖先等は非常に惱された。そこで或時溪に橋を架け、サロソーがやつて來て其の上を渡らうとするのを下から橋を切り落し全滅せしめた。彼等は間口三四尺の家に六十人ばかりは住んでゐたさうである。

サイセット族ガラワン社、太古或る高山の中腹に洞窟があつて其中に小人が住んでゐた。甚だ輕捷で惡戯がひごかつたから、祖先等は詭計を以て誘き出し湖水の上に横はつてゐた山枇杷の樹に登らせた。然も兼て根もとに鋸を入れておいたから忽ち湖底に倒れ込み小人等は悉く溺死してしまつた。

巨人傳說

昔社內に短小な體軀の男があつていつも社人に侮られてゐた。本人は勿論だが兩親もどうかして身長を延してやりたいと思つてゐた。ところが社人が時々豚の睪丸を抜いて體量を增すことがあるのを見て、或日母は彼にその術を施した。するとみる〳〵身長を增し體重を加へ、數月もたゝぬうちに檜の梢よりも高い大男となつてしまつた。それに怪力があつて獸でも探す時は谿に跨りながら兩側の叢を搔き荒し、股間に逃げて來たものを一摑みに捻り潰した。こんな事で五體を入れる家もないから山の洞穴に起臥し母が日々の食物を運んでゐた。ところがこんな生れもつかぬ大男となつたのは全く母の爲(せい)だとて、或日母が來たのを見て頭をひつ摑んだから一たまりもなく窒息した。かうして親殺しの大罪を犯したが、家人は愚か全社の壯丁も如何ともする事が出來なかつた。併し間もなく兇蕃がやつて來て彼の足を射たのを幸に社人が此の時こそ懲してやらうと近づいて行つたが、賴みに思つた兇蕃は忽ち殺されるし、なか〳〵容易に手を下すことは出來なかつた。ところが間もなく彼は病に罹つて稍弱り氣味であつたが、丁度此の時百匹の熊が現れて猛襲したから、流石の大男も遂に喰ひ殺されてしまつた。

ワォ族　阿里山蕃　知母勝社、流々柴社、

註　ブヌン族郡蕃、昔巨人があつて時に人家を訪づれた。そんな時には大鍋に肉を山盛にして饗せないと暴れ廻つたから社人は彼の姿を見ると逃げ隱れた。巨人は其れを快く思はなかつたし、かくも巨軀肥滿するのは、もと〳〵母が睪丸を抜いたからだと恨み或日槍の先きを削り母の來るのを突き殺した。

丹大社では巨人の名をダガヲウソクソクといひ餓ゑると嬰兒を丸呑みにした。小山などは譯もなく一跨ぎとし一物を橋にして人を渡らせたといふ。

卓社蕃ではタンアウといつて足の長さが四間あつて、或時中央山脈から集々に跳れた跡が今に殘つてゐると傳へる。

タケバカ蕃でも、昔タグラウといふ巨人が遣つて來て酒を振舞はれ、首に掛けてゐた瓢を置き忘れて歸つた。今卡社と「パラサゴン」社に大きな穴があるがその足跡である。そして「カーラン」社に石灰となつてゐるのは其の瓢である。

昔ハルスといふ巨人があつて恐ろしい大きな物を持つてゐた。驟雨などで河水が一時に氾濫するやうな時には、社人は彼に賴み、巨大なものを借りて橋とした。ところがハルス中々の曲者で、女だと首尾よく彼岸に渡すが、男が渡ると橋を震はし激流に墜すことなどもあつた。口は口で又偉大なものだつた。山の麓などで大口を開いてゐると、鹿はよい洞穴だと思つて飛び込むのを、その儘ぱり／＼嚙み碎いてしまふ。かうして山中の獸を大方呑みつくしたから、社人もほと／＼弱り果てたので一計を案じ山頂に集つて大石を燒き、鹿だと僞り轉がすと、ハルスは非常に喜び一呑みに呑み込んでしまつたから、さすがの巨人ハルスも燒け死んだ。

タイヤル族　ガオガン蕃

昔ワタンマホンといふ大男があつた。彼の小指は普通の人間の腕ぐらゐもあつたので、實に怪力無双だつた。或日「バトラン」方面に大熊が現れて危害を加へたから社人は大勢で熊を追つた。此の時ワタンマホンは眞先に驅けつけて熊に追つついた。そして熊を呼び止め「角力をしようといふと熊も承知した。ところが難なく熊を投げつけたから熊は非常に怒り、爪をかけ咬みついた。此の時漸くやつて來た社人は長い槍を揮つて熊を突いたのでさしもの大熊も其場に斃れたから一同凱歌をあげて歸つた。怪力者ワタンマホンの子孫は今尚社內に生存してゐるさうである。

サゼク族　外太魯閣蕃

註　巨人の話は大陽物などと合せ見るべきである。

ビッワカの話

昔ビッワカといふものがあつたが三股の矢で人の目を射る事が巧だつた。そして若し人に見られる時は鳥となつて飛び去つた。

ブヌン族　卓社蕃

天地の交戰

大昔に天上には「ブルルン」といふ社があり、地中には「ソァリアリン」といふ社があつた。或時ふとした事から兩社の間に葛藤が生じ互に精鋭な戰士を出して戰つたが、「ソァリアリン」社の軍が利なく唯一人を殘して悉く殺されてしまつた。然も唯一人殘つた者も舌を截つて歸されたのだから、社に歸りついても「ブルルル」といふばかりであつた。かうして戰爭は天人の勝利になつたが、地中の「ソァリアリン」社ではどうかして復讐せなければならぬと思つてゐた。

其後「ブルルン」社の者が又もや「ソァリアリン」に出草したが、先きに舌を切られたものの外悉く耕作に出てしまつた後だつた。舌を切られた男は此の時だと思ひ、豫め叢の中に隱して置いた、蜂、熊、蛇などを戰士とし急に起つて天人軍を包圍してしまつたので、驚き慌てゝゐるのを悉く斬り殺し唯一人殘して「ブルルン」社に歸らせた。併しその後はかうした殘虐な戰はなかつた。

パイワン族　タラマカウ社

註、タイヤル族屈尺蕃、太古から天上にも地中にも人間が棲んでゐるのだが、あの高い大空は地上から立騰る煙のために煤ぼり汚れてしまつて天上界の人は皆色が黑い。ところが大地の中には俗塵が入らないから地中の人々は雪のやうに美しい肌である。

風婆

北方の或る深山に一つの大きな洞窟があつて、此の中に不思議な女が住んでゐた。此の洞窟は底津岩根に通じて風の源だと信ぜられてゐた。平常は大抵この洞口が閉ぢ

られてゐる。併し若しか少しばかりその口を開くと氣持のよい微風が吹いて來るが、大きく開きでもすると恐ろしい暴風が吹き荒むのである。このやうに風を掌つてゐるのでこの女を「アプバレ」(風婆)と呼んでゐた。

ところが或時風婆が頭上に腫物を病んで惱み續けてゐたが、ふと太陽の熱に中ると快癒するといふ事を知つたから、時々洞窟から立出でゝ頭部を曝すことゝした。併しぽか／＼と暖い光を浴びてゐると、つひうと／＼するかと思ふとそのまゝ熟睡してしまひ、二日も三日も洞窟に入らない事もあつた。こんな時は實に大騷ぎで、洞口からは絶えず颶風が吹き續いて人々は非常な苦痛を甜めねばならなかつた。そこで或勇士が弓矢を携へて或日此の洞窟に尋ね着くと、丁度風婆は洞外にたわいもなく寢込んでゐたので、一矢のもとに射殺してしまひ、それから直ぐ洞窟の入口の門戶を悉く打ち碎いて立ち歸つた。それからは絶えず風が吹いて來て、强弱の調和宜しく、從つて颶風のやうなものは少くなつたのである。

平埔蕃　パゼツヘ族

猿の箕

昔々或る所に一人の老翁が住んでゐたが極めて情深い性質なので大變敬愛されてゐた。或日の事野原に出でゝ草を刈つてゐると、俄に大雨が降つて來て非常に困つてゐた。すると何處からか一群の猿がやつて來て「ラベル」(獸皮で作つた外套)を翁に貸し與へて山奧の栖家に誘つて行つた。やがてその家に着くと澤山な猿の家族は、非常に喜んで珍客を迎へ、夜に入つてからは有ゆる珍味を調へ款待至らぬ所もない有樣なので老翁は唯ほく／＼喜んでゐた。ところが此の家の年老いた母親が長の病氣に苦んでゐるといふ事を聞いて老翁は哀れに思ひ、幸に藥を携へてゐたから早速それを取り出し焚火の灰に混ぜて飮ませた。すると靈藥の効驗が忽ち顯れて、さしもの痼疾が一夜の中に快癒したから、猿どもの喜びは譬へようもなかつた。かくて其の夜は此處に過して翌朝辭し歸らうとすると、猿どもは名殘を惜み、餅を搗いて辨當の用意をしたりわざ／＼道普請をしたりなどして遙々送つて來た。そして愈々別れようとする時、穀

類の穂や糠を篩ふ篠製の圓箕(バスラン)を一個呉れて、「翁よ、此箕でいつも米粒を篩ひなさい」と教へた。老翁は猿どもの厚意を謝し新しく出來た坦路を辿つて自家に歸り着いたが、家に殘して置いた幼兒が一夜の間に驚くばかり成長してゐるので、訝り尋ねると最早三年を經過した事を知つた。そこで猿から貰つた圓箕を出して少量の米を入れて篩つて見ると、見る〳〵増えて箕から溢れ出た。かうして穀物は家に充ち滿ちたから、老翁は今後少しも生活に窮するやうな事がなくなつた。

アミ族

註　アミ族の諺に「マウラ、ミアラウ、トルトン」(猿を見ると目出度い)といふのがある。説話との先後は俄に斷ずる事は出來ないが兎に角相關聯したものである。

歩くタウカン

太古は不可思議な事が多かつた。耳飾の竹管に入れた數粒の粟がよく數十日の旅行に足り、鹿や猪の柔毛の一二本が一鍋の美肉となつた事は餘りに廣く言ひ傳へられた。

粟も實れば歩いてひとりでに穀倉に納まるかと思ふと、薪も自ら人家に歩み寄り、機織る婦女の邪魔をしては叱られたりした。「タウカン」でも、「カゲシ」でも、荷物を入れて人手を借らずに運び歩いたものだから非常に便利であつた。ところが或る時重い荷物を入れた「タウカン」が歩いてゐると、途中に待伏せてゐたシーガスといふ愚かものが、不意に出て嚇かしたので、哀れな「タウカン」は腰を脱かしてしまひ、それからは全く歩かなくなつた。今、炎天に汗水たらして「タウカン」を脊負つて羊腸を攀ぢねばならないのは、かうしたシーガスの惡戯の報いなのである。

タイヤル族　マリコワン蕃
北勢蕃
白狗蕃

註　昔「シバジー」社のユヴイヴアイとピリングダラチの持つてゐた「カオワイ」(タイヤル族のタウカン)は自ら歩んだ。ところが社人等がそれを嫉み、或時「カオワイ」が肉を運んで歸るのを叢から不意に飛び出して威したから、「カオワイ」は歩まなくなつた。(サイセット族　大隘社)

「ピンサバカン」の石中から現れた最初の二人は神通力を有つてゐた。裸體で寒さを感じると、「火よ來い」といふと山から薪が燃え出て來る。咽喉が渴くと、「水が欲しい」といひ終らぬ中に、水が來て溜つた。物欲しく思ふと、猪でも鹿でも直ぐ現はれて毛を置いて行く、それを一寸と箕で蓋うて引き出すと甘い肉と化るのであつた。

タイヤル族　南澳蕃

神通の世

太古は鳥獸も人と共に棲んでゐたが、若しか人々が肉の欲しい時は、獸を呼んで、三本の毛を拔き、箕に伏せて置くと肉となつたものである。ところが慾深い男が、一時に澤山の肉を得ようとして斬りつけたから、獸類は怒つて山に入り、人に近づかぬ事となつた。又その頃ミノットンといふ祖先が穀類を授けたのだが、或男がミノットンに綱をつけ引つ張つては、呉れよ〳〵と催促したので、餘りの事に蒼蠅くて、「汝のやうな怠けものは後生の程も思はれる。愚者め」と罵つたのを怨み熱湯をかけて此の恩人を殺してしまつた。それからといふものは何ものも惠まれなくなつた。

タイヤル族　萬大社

昔ブタナワイといふ名頭目があつた。その頃は粟でも黍でも、一粒をとつて炊ぐと數人の家族を養ふに餘りがあつた。それに獸類はいふまでもなく、薪や水の類まで皆ブタナワイの呼聲に應じて、サッサとやつて來たものである。所が後にケネヤタンといふ無法ものがあつて、粟を一時に多く炊いたために粟は悉く「ピヂッ」鳥となつて飛び去つてしまひ、薪が折角一人で歩いて來るのを、待ちかまへて脅したので、其から怖れて步かぬ事となつた。

タイヤル族　パスコワラン蕃
カラパイ蕃

註　ブヌン族丹大社、昔薪が自ら人家に步んで來たが、或日婦女が機を織つてゐる側を通り絲を切つたから大いに怒り白痴者と罵り懲した。それ以來薪は決して步かなくなつた

木材の憤怒

昔或所で家造りの材料を集めて酒宴を開いたが、準備が少し遅れてゐるうちに酒が酸くなつた。すると俄に木材が怒り出し皆穴の中に入らうとするので人々は驚いて力を協せ繩をつけて木材を引つ張つた。ところが却つて木材の力が強くて皆々穴の中に引き込まれてしまつたから、主婦は狂氣の如く驅け寄り共に穴に入らうとすると穴は既に塞つてゐた。哀れな女はそのまゝ石になつてしまつた。

ブヌン族　丹大社

人喰ふ犬

或所で餅を搗いてゐた時、どこからか可愛らしい仔犬が一匹出て來たから勞り育てゝゐた。併し親犬も飼ひたいものだと、或日二人の社人が山中を探してゐる所へ、一時に多くの猛犬が現れて吠えかゝつたから、驚き慄れて木に攀ぢ登つたが、其木も遂に咬み倒され二人とも喰ひ殺された。

タイヤル族　マリコワン蕃

寢臺の杙

或時大勢のものが寢臺に腰かけて、酒宴を開いてゐたが、突然杙が折れて、皆々一度に顚倒した。その時一人の女子が悶絶してゐるので、どうした事かと見ると、倒れる機みに杙で「ピツピ」を衝いたのであつた。

タイヤル族　キナジー蕃

河狩の怪

粟が黃熟して豐かな收穫がすむと、粟祭りと魚藤流しがある。此の頃の蕃社ほど平和で愉快な事は一年の何れの時期にも少なからう。實にこの魚藤流しは重大な年中行

事の一で、河狩そのものゝ面白さはいふまでもなく、隣接各社の交歡や、若い男女の嫁娶には絶好の機會なのである。

或る時かうした河狩があつた。美しく着飾つた婦女子の數ある中で一際眉目よい處女があつたので、若い男の視線は彼女一人に集つてゐた。すると不意に娘は河中に倒れ今にも溺死せんばかりになつたから、一大事と四方八方から駈けつけて救ひ上げるとこは如何に、彼女の「ピッピ」から大鯰の尾が現はれてゐる。人々は驚き惘れ力を合せて引くと、中途からぷつりと切れて女もあへなくなつてしまつた。河狩に必ず腰卷を嚴重に纏ふ事となつたのは此の時からである。

タイヤル族　キナジー蕃

註　魚藤は荳科の蔓性植物である。その根を叩き潰して汁を流すと魚族は悉く浮び上る。それをねらつて長い四つ叉槍でつくのである。溪に沿つて激流を物ともせず、多くの社衆が突き進み突き下るのは眞に壯觀である。蕃界に入つてもよほど運よくでくはさねばこんな所は見られない。無論この事は官では嚴禁してはゐるが彼等は贖科を拂つてもやりたがるらしい。

首　男

昔首ばかりの男があつた。嫁を迎へたが首ばかりの片輪なので女は逃げ歸らうとすると、首男は餘り悔しさに嫁の腰裳に嚙りついたが、女はなか〳〵のしたゝかもので、素知らぬ顏して首をぶら下げたまゝ橋の上に行き、腰裳を解いて河に投げ込んだ。首は「ドードー」と悲しげに泣きながら流れて行つた。そして今にその泣聲は止まないのである。

ブヌン族　丹大社

註　パイワン族パリラヤン社、或所に一人の美男があつて、或女の許に通ひ深い契を結んだ。男はいつも夜ばかり通つてゐたのに、或日晝間來たのを見ると首ばかり見えて更に姿が見えないから、女は屋内に入るのを拒んだ。すると其の首は直ぐに女〇に喰ひついたので、女は吃驚しながら非常に腹を立て毟り取つて叢の中に投げ棄てた。其後は男は通はなくなつた。

或處に絶世の美人を妻にして社衆の羨望の的となつてゐた男があつた。ところがその妻は日中にはどうしても外に出ないで、薄暗い家の隅にばかりゐる。餘り不思議なので夫がよく〳〵見ると胴體がなくて唯首ばかりであつた。これを見た夫は興さめて一そなきものにしようと思ひ、或日嫌がる首を負ひ河に赴き

橋を渡るふりして、その首を河中に投げてしまつた。すると首は浮きつ沈みつ流れて行つたが、今まで見えなかつた胴が次第に現れその中に完全な麗しい女になつたから、夫は非常に悔み聲張りあげて呼び戻したが、其の甲斐もなく流れ去つてしまつた。（ブヌン族　郡蕃　東埔社）

骨人

昔肉が少しもなくて骨ばかりの人があつた。戰爭に出ても矢も通らないから死ぬやうな事はなかつた。併し我等の祖先ではない。

ブヌン族　タケバカ蕃　卡社

畸形

或所にタサカエといつて片手と片足が非常に細い男があつた。その妻も亦畸形で乳房が恐しく大きくて常に肩に擔いて歩いたさうである。又ババンタイガとて大耳を持

つた男がゐた。此の男は恐ろしい人肉喰ひで嬰兒を見るといつもその大きな耳孔に入れて掠め去つたと傳へてゐる。

ブヌン族　卓社蕃

サルムッジの話

昔「ムリ」といふ處にサルムッジといふ女があつたが、既に餘程の老齢なので常に踞つてゐるばかりで更に食物を口にする事がなかつた。或日彼女は『妾は「スルム」へ見物に行かうと思ふ、若し五日經つても歸らなかつたなら「スルム」はよい處だと思へ』といつて地中に入つた。ところが五日經つても歸つて來なかつたから、人々は地中には屹度よい所があるに違ひないとて、其からは老年になると皆地中に入つて休まうとするのである。

パイワン族　マシリツ社

註　これはやはり死の起原に入れるべきである。

蘇生

昔或る者が苟旦の病で死んだので、家人は泣く〲葬りを濟ませた。ところが二日後に死人が蘇生し我と土を除けて地上に出た。併し家族は皆耕作に出て留守だつたから、爐邊に行つて火を焚き始めた。所へ家族が歸つて此の樣を見、膽を潰したが、確に蘇生したのだからその儘一緒に暮してゐた。併し彼は五年後に死ぬのだと口癖に云つてゐたが、果してその通りだつた。

パイワン族　牡丹路社

ピナナゼパン

或時一人の男が谷川で釣を垂れてゐたが、不思議にも小魚一匹かゝらない。今日は駄目だと歸りかける頃に、餘程重いものがかゝつたから、注意して引き上げてみると

人間であつた。それで家に伴ひ歸り養育しピナナゼパンと名づけた。ピナナゼパンは容貌から才藝まで少しも通常の人と異らなかつた。

サイセツト族　ガラワン社

姙婦と韮

昔或る所で姙婦が他人の畑から韮を盜んで來て食べた。これを見た夫は非常に怒つて妻の腹を衝き破つたが、胎兒の口に韮を含んでゐるのを見た。夫は妻が韮を欲しがつたのは胎兒の食慾から來た事を知つて悔んだけれども最早如何ともする事が出來なかつた。それからは誰も姙婦の非行を責めず、欲するものは與へるやうになつた。

パイワン族　マシリツ社

奇人

昔一人の奇人があつた。白髮童顏で餘程の老齡だつたが、或時「カルルサン（壺）」の中に

屁を入れて貯へて置いた。その後間もなく一人の若者がその壺の側に行くと、中から話聲がする。不思議に思つて老人に尋ねると、「あれは太陽を生擒つてあるのだ」といつて呵々と笑つてゐた。

パイワン族　タラマカウ社

不思議なオクラオ

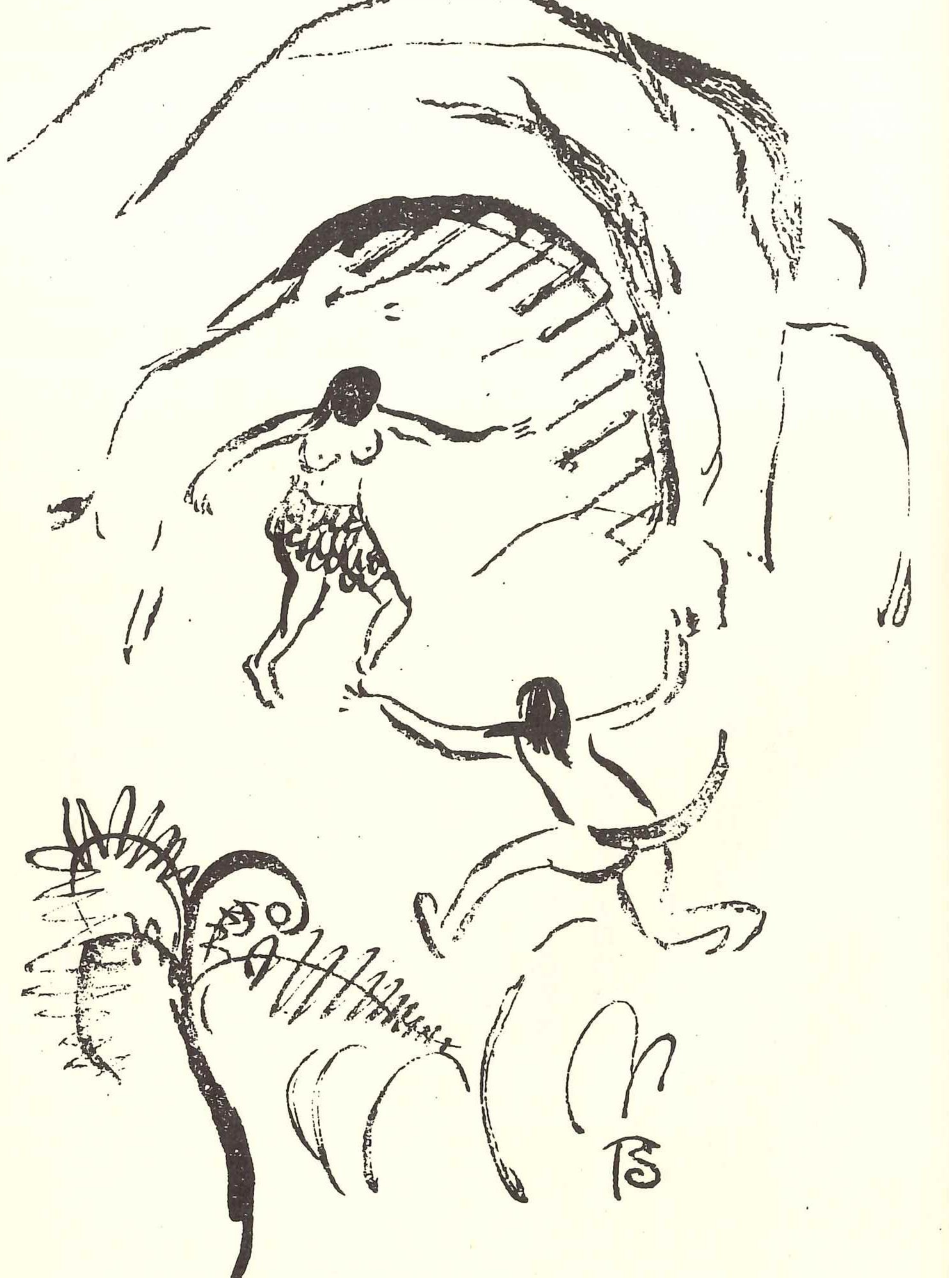
昔テーテオンといふ者が「オクラオ」を大切に飼養してゐたが、食事の時になつて何か食べたいものがあると、「オクラオ」に云ひつける。すると直ぐ命の如くに携へて來たのであつた。こんな事から今でも「テーテオン」姓の者は決して「オクラオ」を食べないさうである。

サイセツト族　ガラワン社

糞食ひ小僧

昔、社人は毎朝大便する習慣であつたが、不思議な事にはその糞便が何時も跡方もなく消え失せてゐるので、或時一人の男が見張りしてゐると、タブタベラスといふ少年がやつて來て悉く人糞を食ひ歩くのであつた。

サイセツト族　ガラワン社



第七　情事情話

兄妹相婚

昔、「シバジャン」といふ所に二人の兄妹が住んでゐた。日がな一日小鳥のやうに唄ひながら、嬉々として睦び暮す二人の境界は、實に幸福と愉悦に充ち滿ちたものであつた。かうした年月がうち續いてゐる中、何時しか妹は春知りそむる頃となつたので、情慾の對象として何ものかを探し出さなければならなかつた。併しそこには唯一の異性として兄より外人類はないのである。悶々の幾日は續いたが、遂に官能の滿足は得られなかつた。

或日妹は兄に向つて言つた。「兄上も最早壯年だから妻を娶られよ、妾は幸ひ此の山の麓の岩窟に美しい女が住んでゐるのを確めました、若しも娶る心があるならば、妾が一足先きに行つて彼女に話しませう、兄上は後から來られよ、何うですか。」兄はこれ

を聞いて、急に愛慾の念が壓へがたくなつたから、「何事もそなたに委せよう」といつたので、妹の眼は輝いた。そしていそ〳〵と降つて行つた。

併し勿論此の山には兄妹の外に人は居らない、たとへ一旦は兄を欺いても、素顏では直ぐに悟られるに定つてゐる、如何したものかと思案にくれたが、やがて一策が浮んだので我れと我が妙案に微笑みながら、煤をとつて顏に塗り心沈めて待つてゐた。かくとも知らぬ兄は、そこゝ探し歩くうち漸く岩窟を見つけて進み寄ると、見知らぬ婦人が立つてゐる。これこそ妹の話した女に違ひないと思つてゐると、女は馴々しく進んで來て男の手をとつた。男はなすがまゝに引き入れられた。そして猛烈な動物慾は少しの疑ひをはさむ餘地もなかつた。

「シバジャン」に歸ると凡てが明かになつた。併し單に性慾といふ事からでなく、廣く生殖といふ上からも、兄妹のこの關係は持續せられなければならなかつた。そして間もなく多數の子女を得たのである。

タイヤル族　ハツク蕃

註

サゼク族バトラン蕃、昔一婦人があつて、或時山の項の岩上に立ちはだかつてゐると風が股を吹いたが、忽ち孕んで翌月一男子を生んだ。ところがその子はずん／＼大きくなり忽ち立派な青年となつた。すると徒然に堪へなかつた母は或日深山に入り顔面を黒く染めて我子の前に歸つて來て、「妾は久しく夫を採してゐたのだが幸に今御身と奇遇した、どうか妾を娶つて下さい」といふので子は欺かれるとは知らず遂に妻とした。「トロコ」蕃の始祖がこれである。併し刺墨は顔一面にしては醜いとて次第に細く美しくなつた。（刺墨の條及霧社蕃口碑參照）

パイワン族呂家社、昔「キントボル」山にピナルピハンといふ女があつた。或時不意に山崩れがあつて崖下に墜落しようとしたが、「タトリン」草に掴まつて危い一命を拾つた。ところが其時から姙娠してやがて一人の男子を生み落した。子は長じて逞しい青年となつたが常に嬰兒のやうに泣いてばかりゐた。ピナルピハンは心を痛めていろ／＼慰めすかしたがどうしても泣き止まない。余りの事に母も苛立しさに堪へきれずに或日、「汝は何故そんなに泣くのだ、うるさくてたまらない、これでも欲しいのか」と○○を示した。すると子は俄に泣き止んだ。それから母子相契り多くの子孫を産み殖したのである。

イワタンの話

大昔にブサイ、タマブルといふ姉弟があつた。弟のタマブルは二人の子供を殘して

妻に先立たれたからその子の養育を姉に頼んだ。ところがブサイは弟の子供等には十分の食物も與へず、何かにつけて自分の子供と隔てをするのであつた。二人の子は無慈悲な伯母の仕打を怨み畑に行つて父に告げたから、タマブルは直ちに家に歸り諸道具を携へて、姉の止めるのをふり切り山に出かけて行つた。

かくて二子は父と共に畑小屋の生活を續けてゐるうち、或日兄弟は深山にわけ入り「トマイ」（熊）といふ獸を捕へて來たから父は非常に喜び「我子ながら健氣だ、かくては妻も娶らねばならぬ、幸ひあの伯母には娘があるから盜んで來い、それに「ルソク」といふ飾りや「カカラス」といふ寶物も」といつた。二子は早速山を降り伯母の家に赴き、闇夜に乘じて「ミゴハ」の窓から忍び込み、不意に「フフフフ」と物凄い笑聲を立てたから家族は驚いて慌て廻つてゐる隙に長女を奪つて逃げてしまつた。それを聞いた社人は彼等親子を「イワタン」といつて輕蔑し一切交際を絶つてしまつた。「イワタン」とは呪はれたる人々―ブヌン族をさすのだが―といふ事である。

今でも奇密社人は人と約束する時、若し破約する時は「プイプソス」（腫物出來ても

よい)とか、「カリグット、イワタン」(異族に殺されてもかまはない)などゝ云つて手に唾をつけるのである。

註　少女誘拐の話をあげる。　　アミ族　奇密社

何時の頃か或る首狩祭の時全社の男女が出でゝ踊つてゐたが、何處からか一人の麗しい男がやつて來て女に近づき馴れ〱しく話しかけた。見も知らぬ男ではあるが眉目秀麗なのに思はず蕩かされて、其女は夢心地について行つた。ところが社人は氣がゝりなので追跡したが叢の所で見失つていくら探しても見當らなかつた。するとやつと夜明頃になつて其の男が茅の上で眠つてゐるのがわかつた。やはり小人の悪戯である。(ツォ族　阿里山蕃)

妻覓ぎ

昔或所に兄弟二人で睦じく暮してゐたが、何時とはなく物淋しさに堪へかねて、あちこち彷徨ひ歩いてゐた。併しどうしても欝悒を晴すことが出來なかつたが、或日兄は途で異樣の人を見た。それが女だつた。そして一種の懷しさにつひ引きつけられて

「タマンモフ」を行ふと欝氣は忽ち雲消霧散してしまつた。そこで兄は喜んで「さうだ弟も屹度妻覓ぎしてゐるのだ」とて、急いで弟を呼んでそこに家を建て一妻を愛して共棲した。

註　サゼク族バトラン蕃、二人の男が獵に出た時一人の女に遭つた。その女は嘗て世界に男といふものがある事を知らなかつたので物珍らしげに寄つて來た。そして始めて遭つた男を放さうとはせなかつたから、一人は遂に斃れてしまひ、生き殘つた方の男が其處に止つて夫となつた。

サゼク族　外太魯閣蕃

樫の木と榛の木

昔郡大本社に一人の男があつて婦女さへ見るとすぐかつ攫つて犯した。社人は憤慨して何時か懲してやらうと思つてゐた時、例の如く一婦人を捉へて狼藉に及ばうとするのを見つけた人々は、大聲で罵り敲き殺さんばかりの見幕だつたので、さすがの淫亂男も遁れようとすると、俄に姿を變へて樫の木となつてしまひ、狼狽へた女も忽ち

榛の木になつた。今でも淫亂な男女を詈つて樫の木、榛の木といふのはこんないはれからである。それに好き者は女を見ればブロッ」を硬くするし、女はなよ〳〵としな垂れかゝる丶事が榛の木のやうだからである。

ブヌン族　郡蕃東埔社

老翁の戀

今は昔或所にボルボルンといふ老人が住んでゐた。何一つとして氣の利いた物は持つてゐなかつたが、唯一頭の肥え太つた豚を飼つてゐた。するとマルラバといふ者の娘がその豚が食べたくてたまらないので、或日老人に向つて「妾の爲に豚を屠つて吳れませんか」といふと、老人は美しい娘に年甲斐もない戀心を起して、「御身のためなら何物も」といつた。そして老人は喜んでその豚を屠つてしまつた。娘は肉を屋内に運び入れ「料理の出來るまで外で待つてゐて下さい、直ぐだから」、とあはれな老人を外に立たせておいて、一人で微笑みながらすつかり肉を平げてしまつた。そして一匹の

虱を取つて、汝の命は助けてやるから老人が尋ねたら「ウン」とお言ひとて庭に放ち、自分は竊に逃げて出た。老人はいら立つて催促すると「ウン」と應へるから急いで入つた。併し娘はゐない、何を訊いても虱が「ウンウン」とばかりいふ。老人は眞赤になつて娘の跡を追うた。娘は川を渡つて逃げようとすると老人が驅けつけたから早速水中に放尿して對岸に飛び上つた。すると河水俄に沸騰し熱湯一時に氾濫して何うする事も出來なくなつた。娘は「こゝまでお出で」と詈つてやまない、老翁は憤激のあまり側の石を〇〇でうんと銜くと忽ち火花を發し白煙をあげそこには大きな穴が穿たれた。然し老人の憤りはなか〳〵止まないで蜂を放つて社人を苦めたさうである。

パイワン族　チチザヤブス社　パリラヤン社
カスボカン社

比翼池

「シカヤウ」警戒所から降る事一里十五町ばかりの所に一つの池がある。周圍には數

多い丘陵が起伏して、滴るばかりの翠綠が澄切つて波一つ立てない水の面に影を蘸し、長くのびた水藻は美しい女のねくたれ髪のやうに見えてゐる。

昔「タボラ」社に一人の若者があつて、この男には二世を契つた美しい女性があつたのである。或時若者は狩に出で一頭の大鹿を追ひつめてこの池まで驅けて來た。絕體絕命の鹿は池を泳ぎ渡らうとする。折角一矢を加へた獲物をみす／＼取逃すことはこの上もない男子の恥辱である。若者はざんぶとばかり飛び込んだ。併し身には多くの獵具をつけてゐる。そして丁度池の半ばに達した頃ひ、氣力も盡き果てゝ水底深く沈んでしまつた。

それから暫くして尋ねあぐんだ女はこの池の汀に立つてゐた。あはれそこには青蘆渡る山嵐に、日頃夫の手馴らした梓の弓が吹き寄せられてゐるではないか。驚きと悲しみで泣きぬれた女は、も早男の後を追ふ事の滿足より外何事も考へなかつた。そして今でも此の池の水を飲むと何か變つた事があると信じられてゐる。

タイヤル族　ハツク蕃

サウラルヤンの話

昔サウラルヤンといふ男があつた。或日外出した時美しい女に遭つたので、早速弟に取らせた檳榔子を携へて女の家を訪うた。すると娘の母が彼を迎へて先づ檳榔子を差出したがサウラルヤンは受取らずにつつ立つてゐた。ところへ娘が現れて同じく檳榔子を差出したから彼はそれを受け初めて腰を下した。美人の名はサチヨコといふのである。さて携へて來た檳榔子をサチヨコに贈らうとすると、「あなたは母の檳榔子を受けずに恥をかゝした人である、折角ですが贈物は受けられません」といはれて仕方がないので、檳榔を「カブルガン」に吊しておいて歸つて來た。五日目にサウラルヤンは又サチヨコを訪ねたが、彼女は麗しく頭髮を飾つてゐた。サウラルヤンは不意に彼女に寄りそひそつと髮に口づけして歸つて來た。

其の頃「サカバルアン」家にサウラルイとて美人があつたが、社人はサチヨコとどちらが美しいだらうなどゝ噂したから、自負心の強いサウラルイは早速器量比べがした

くなり、丁度サウラルヤンが此の頃親しく出入りしてゐるのを幸ひサチヨコを招かしめた。ところがサチヨコは「妾の家を動かす事が出來れば行つてもよい」と答へたから「サカバルアン」家では更に家人を遣はし赤豚をサチヨコの家に結びつけた。すると豚はサチヨコの家ぐるみ引つぱつて來た。そこで二美人を庭に立たせて踊らせたが、さしも善美を盡して飾り立てたサウラルイの裝ひもサチヨコの天成の美には及ぶべくもなかつた。サウラルヤンは思はず知らず進み出でゝサチヨコを捕へた。併し彼女は振り棄てゝ歸つて行つた。サウラルヤンは跡を追つた。「サカバルアン」家の人々は激しい失望と嫉妬を覺えた。

サチヨコはふと笠を忘れて來たのに氣づき、ふり返るとサウラルヤンが走つて來たので、それを賴むと直ぐに取つて來て渡して吳れた。かくて海岸に着いた時サチヨコは不意に海中に飛び込んだ。サウラルヤンはどこまでもと追つたが、次第に水が深くなるので怨を呑んで引き返した。サチヨコは謠ひながら海上を踏み進み、やがて笠を振ると家になつた。それからサウラルヤンの贈つた檳榔子を「コヂママロ」といふ虫に

してしまつた。するとその虫が飛んで來てサウラルヤンの家に止つたから、女の形見だと思ひその虫を大切に鉢卷の房に結へておいた。そのうち房が切れて虫はサチヨコの家に飛び歸つたので彼女は一部始終を聞く事が出來た。そこで再び虫を遣し、最後にはその虫を人間にしてサウラルヤンの家に行かせた。人間に化けた虫は「海から來たのだ」といひながらつく〳〵サウラルヤンの顔を見ると、自分の顔と非常によく似てゐるから、きつとこれが我が父で、海の人は母なのだらうと思ふと懷しくてたまらなくなつたので、一散に海の家に歸り、屋根の茅を拔いて父の側に移轉しようと企てた。そしてサチヨコが訝つてゐるうちに家は悉く毀つて陸上に運ばれてしまつた。サウラルヤンは遂にサチヨコと同棲する事が出來た。

パイワン族　スクスクス社

嫉妬

或所にチデグラグラオとチヨコといふ二人の娘があつて、共にサウヂャジュヤンに

戀慕してゐたが遂にチョコに奪はれてしまつた。そこで敗れたチデグラグラオは瞋恚の炎を燃してゐたが、或日チョコを訪れ井戸の邊に誘つて互に姿を水鏡に寫して見た。そしてチデグラグラオは到底チョコの美に及ばない事を知ると忌々しくてたまらず、直ぐチョコを井戸につき落してしまつた。はつと思つたが、も早仕方がないので其儘チョコの衣を纏ひサウヂャジュヤンの家に待つてゐた。夕方になつて男は獵から歸つて來たが醜い妻の顏を見て如何したかと尋ねると、雨に濡れたからと答へた。

翌日男は又出獵したが、途中で美しい一羽の小鳥を見つけた。馴々しく肩に止つたりするのでそれを捕へて籠に入れ飼養した。するとチデグラグラオは其も亦嫉しくて留守中に打殺し其夜の肴に侑めた。ところが不思議にもチデグラグラオの匙にかゝつたものは骨ばかりだつたから腹立たしくて庭に棄てると、その骨は皆竹となつた。珍らしいから決して此の竹を伐つてはならぬといつて男は出て行つた。その日も狩に疲れて戻つて來ると竹は庭に伐り棄てられてあつた。女が風で折れたのだといひ張るので惜しい事をしたといひつゝそれで竹椅子を拵へた。ところがその椅子に女が坐らうとすると必ず倒れて掛けさせないから、又々嫉しくなりそれも毀つて焚いてゐた。偶々通りかけた老人が椅子の燃える中から火を取らうとすると餠が一つあつたので、喜んで孫の土產にと箱に入れて行つた。そして家に歸り孫を喜ばせながら蓋を取ると餠はなくて美しい女が踞つてゐた。老人は不思議な事もあるものだといろ〳〵劬つてやつた。此の事が評判となつたからサウヂャジュヤンも訪ねて來たが、それは紛れもない妻のチョコであつた。そこで烈火の如く怒つた彼は豚を殺してやるといひさまチデグラグラオを一刀に斬り棄てた。チョコが呼び戻されたのはいふまでもない。

パイワン族　スクスクス社

昔或所に女人ばかりの社があつた。或時一人の若者がこの社に迷ひ込んだのを幸ひ、女共は悉く抱擁の歡樂に醉うたが、只一人醜婦があつて除外せられたのを耻ぢ、美嫉の餘り私かに刄物を持つて來て、物も云はずに局所を斬り取つたから、男はその場に敢なくなつてしまつた。

（女人社の條參照）

大陽物

タイヤル族　マリコワン蕃

昔「ピンサバカン」のあたりにハルスといふ巨人があつて、恐ろしい巨大な陽物を持つてゐた。その長さは二里許りもあつたので、延ばせば優に「シカヤウ」社から「ピアナン」鞍部にとゞいたし、突き立てると合歡山より遙か高かつた。それで家にゐる時は首にかけ、歩く時は兩手で提げてゐた。大水の出たやうな時には、社人に重寶がられたもので、ハルスにそれをかりては橋として渡つたのである。併し彼は大の好きものだつたから、美しい女でも渡ると時々煩惱を起したり、慊な男が渡るとふり落したりした。或時も若い夫婦とその母親の三人が渡つてゐると、急に〇起せしめたから最後に渡つてゐた女が、恐る〳〵攀ぢのぼつて先端に〇〇〇〇〇〇〇〇殺してしまつた。畑にゐる女でも家の中から〇〇めるし、機織る女を見ると窓からその〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。かうして腹を貫かれその場で殺される婦女が多く、ハルスと聞いても戰慄へる位であつた。其上恐ろしい大食で山の獸もすつかり呑んでしまふので始末に終へなかつた。併し非常な大力だから如何ともする事が出來ない。そこで或日社人等はハルスを誘き出し、山頂から大鹿を追ひ下すから捕へよといふと、ハルスは、今日は「ピラックオットフ（吉日）」だなどと、喜色滿面に現し大手を擴げ巨口を開いて待つてゐた。山からは五日間燒き續けて眞赤にしておいた大石を轉した。待ち構へてゐたハルスは一呑みに呑み込んだから忽ち口腹燒け爛れて死んでしまつた。

今「シカヤウ」鞍部附近の楓林中に小高い塚があるのは、社人總出で彼れを埋めた所だと傳へられるし、「シカヤウ」蕃と溪頭蕃との堺に「ハールス」鞍部といふ平らな所がある。これはハルスが怒〇した陽物で打ち凹めた跡だといはれてゐる。

（巨人ハルス參照）

タイヤル族　大嵙崁蕃　ガオガン蕃
マリコワン蕃　北勢蕃
南勢蕃白毛社　白狗蕃

サラマオ蕃　萬大社
眉原蕃　南澳蕃
溪頭蕃　カラパイ蕃
汶水蕃　キナジー蕃
太湖蕃

註　大嵙崁蕃角板山社などではハルスが叢中に横臥してゐる時四方から取圍んで燒き殺したといふ傳へもある。

北勢蕃ロープゴー社では。ハルス（マハル）が殺される時、我死ればきつと地震や惡疫が起るだらうといつたから、惡い種が殘つてゐてはならぬと、その死體を寸斷して棄てたが此の時からマラリヤが流行するうになつたといつてゐる。

太湖蕃ではその陽物で川水を塞きとめ魚を捕つたと傳へてゐる。

名はハルス、ハールスが普通であるが、マハードウス（北勢蕃マビルハオ社）、カラマエ又の名マハル、（北勢蕃ロープゴー社）、タリワ（太湖蕃）、ミビン（大嵙崁蕃）、などともいはれる。

サゼク族トロツク蕃、木瓜蕃では巨大な陽物を持つてゐた男が慾を嗡て丶「チメワック」（戯れ）したといふ。面白いのは外太魯閣蕃で傳へてゐる話だが、その男が妻を娶つたところ唯一夜で腹を貫き喉を塞いで殺してしまつたから、それ以來は〇〇〇に麻糸を卷いて行つたので、後妻は無事だつたといふのである。

又同じ太魯閣の一部やバトラン蕃では、それはデナマイといふ神人であつて好色で婦女を姦した事や、河水氾濫の時一物を橋にした事は大體同じだが、これを洪水傳說に關聯させてゐる。或日機織に餘念もなかつた婦人に窓越しに戯れかゝつて遂に死に至らしめたので、その夫が非常に怒り斧を揮つて局所に斬りつけた。するとデナマイは怒つて、「自分は天に昇り風伯雨師となつて復讐してやらう」といつて何處かに去つたが、間もなく暴風雨が續き大洪水が起つた。此の時デナマイは美男と美女を求めたから、盛裝した美しい男女を海に流すとさしもの大水が退いたといふのである。

ブヌン族卓社蕃、ハラハラエといふ男がいつも一物を擔いで歩いてゐた。郡蕃でも首に卷きつけてゐて、四五間も離れた女を犯した。そんな時根〇に絲を卷いておかぬと女が即死したといふのである。丹大社ではタガラウソクソクと傳へてゐる。巒蕃ではアムノといふ女の夫となつてゐて、或時出獵中「ブラシ」を家に延したのを誤つて梭で打つたから間もなく夫が死んだといふ。干卓萬蕃ではタンアツといつて二丈餘もある大男があつたが、狩獵に出ると鹿などは「ブラシ」で取り卷いて殺したといふのだが、或日弟が誤つてそれを切つたので脆くも死亡した。

ツオ族、達邦社、大陽物を持つた男か或女の許に通つて夜が明けても離れる事が出來なかつた。そこで家族は已むなく梁に掛けたのでさしもの〇〇〇〇半ばから切れて男は死亡した。女も暫く惱んでゐたが〇物の頭が出て快くなつた。知母朥社、昔ピヤツクといふ男が大きな物を肩にして狩に出たが、惡戯な社人が「ポツキ」を敲いたから彼はそれを引き摺つたまゝ逭げたので刺（とげ）だらけになつた。妻は厭勝人を呼んで刺を拔かせたが、此の時庭に延した長さが三間ばかりあつたさうだ。

パイワン族呂家社（リカボン）、大竹高社（チョアチョコ）、惡戯好きな大陽物の男はハブラルと傳つてゐる。常にそれを網袋に入れて步いてゐたが、或時急に敵蕃が來たといつて威かしたから、彼は慌てゝそれを地に引いたまゝ逃げろう

ち刺(とげ)にさゝつた。そこでその刺を蜂に變じて社人に復讐した。（蜂の條參照）

牡丹路社ではカボゥウ、スクスク社ではサカポラルといつてゐるが、話の筋は大同小異である。

サイセット族大隘社、ガラワン社、昔カマラワル（又はマラワル）といふ男があつて增水の時などはそれを橋にして人々を渡らせたが、非常な好色漢でいつも婦女に戯れては死に至らしめたから、女共も橋を渡る時には彼の氣を和らげるやうに餘程注意したものである。或時婦女達が河狩に出て屈んで海老を捕つてゐると、カマラワルは早速例の惡戯を始めたから女は魚叉で俄か衝き刺したので、さすがの彼も斃れてしまつた。

アミ族太巴塱社、昔ウヨドウといふ若者があつて巨大な物を持つてゐて、水汲や洗濯に出てゐる婦女子があると對岸から惡戯した。

小陰部

或る所に容貌の秀麗な娘があつた。年頃になつて婿を迎へたが「ピッピ」が極めて狹窄だつたが、男は蕃刀で刳り廣げ大きくしたので、其後は伉儷睦じく暮したといふ。

タイヤル族　ガオガン蕃、白狗蕃

註　タイヤル族白毛社、或男新妻を娶つたが、「ピッピ」が極めて小だつたので、「リトウ」で刳つたが切り過ぎて嫁は死んだ。

サゼク族外太魯閣蕃、或家で娘が年頃になつたから婿を迎へたが「ピピ」が小さかつたので婿は歸つてしまつた。そこで母はいろ〳〵心配して、或若者に手術を乞うた。若者は思ひ切つて刀で刳つた。そこでその男を二度目の婿にしたといふので、全くガオガン蕃の話と同じといつてよい。

タイヤル族大嵙崁蕃、昔或家に愛らしい少女があつた。或日不圖屋外に出たが、間もなく泣聲が聞えるので、母は驚いて飛び出ると、少女は屈まつた儘頻りに泣いてゐる。如何したかと問うと、尿が出ないと云ふ。成程普通人より小さい。そこで厭勝人を招き神に祈願をかけた靈驗があらはれ、數日後には餘程大きくなつた。所がある時何氣なく娘の玉〇を見ると白いものがある。不思議に思つて檢べると恐ろしい齒である。兩親もほと〳〵心を痛め拔き取らうとしたが、娘は痛さに堪へかね拒み通した。かうしたうちに早くも、娘は美しく成人したから婿をとつたが、その夜花婿は恐ろしい〇〇に咬みつかれ黃泉に旅立つてしまつた。そこで父母は二人の壯者を賴み娘を抑へつけておき器用な老母に棒で一つづゝ齒を拔いて貰つたが、苦痛に堪へきれずに娘は死んでしまつた。（次項參照）

恐ろしいピッピ

或家に絶世の美人があつた。娘は機織る事が巧みなばかりか、美しい聲を持つてゐ

たので、我こそ情人にならうとして、社内の若者どもが傍らず訪ねて來て、「ランマツアベ」(夜遊)して夜を更したり、「モツカル」して日を送る者が多かつた。母は多くの中から凛とした若者を選んだ。三國一の婿がねはまこと社人羨望の的となつたのだらう。併し不思議にも婿はその夜不歸の客となつた。そこで再び良婿を迎へたが、又も一夜のうちに歸らぬ旅に上つたので、母は容赦なく娘のピッピを檢べると恐ろしい齒が竝んでゐたのである。吃驚した母は早速砥石でもつてその齒をすつかり磨り減らしたから、次の婿とは偕老の契を結ぶことが出來た。

タイヤル族 眉原蕃、南澳蕃

註 「ブヨン」社に六十歳の處女があつた。人々は彼女のことを「ピータイポホ」(剃刀婆)といつてゐた。それは〇〇に鋭い齒があつて〇〇を斬るからである。(タイヤル族 北勢蕃 ロープゴー社)

萬大社では、このやうな恐ろしい女が夫に死なれた後、自分も尿がつまつて死んだといつてゐる。

ブヌン族丹蕃、干卓萬蕃、社内に美しい娘があつて若い社人の血を湧かせてゐたが、何時までも一人でおけないから漸つと婿がれを選んだが不思議にも其の夜に死んでしまつた。喪が明けて更に婿を迎へたが亦一夜で敢なくなるので、母も捨ておけずよく〳〵調べると「ポー」に齒があつたから鑢で磨り減した。

パイワン族大南社、昔マテヤサンとラルガといふ夫婦の間にルスルスといふ美しい娘があつたが「アテ」

に恐ろしい齒が生えてゐて、折角迎へた婿は一夜のうちに亡くなつたのを厭ひ、母は娘を「トアコイ」(箱)に入れて海に流した。ところが「ラルクルク」にその箱が漂著して或る男に助けられ齒を缺きとつて夫婦となつた。今社内に傳はつてゐる「ムリムリサン」といふのは其の齒なのである。

同太麻里社、昔卑南社にトコといふ美人があつた。「ウチ」に齒のあつたのを嫌つた兩親が朱塗の箱に入れて流してしまつた。それが「パナパナヤン」の海岸に着いたので、知本社のシガシガオが檳榔子と青玉二箇を供へ鐵屑を海に投じ厭勝してトコを箱から引き出し、いろ〳〵苦心してその齒を磨りとり妻とした。そしてルガド、ムラコ、ブリガイの三子をあけたのである。大竹高社の傳へも大體同じで、卑南社の娘の名はリガグラウとなつてゐるばかりである。

同、タラマカウ社、此の娘は「ダデル」といふ所に居つたのだが、母が齒を拔き取つてしまつたので流されずに濟んだ。

同、パリラヤン社、餘程振つた傳へになつてゐる。それは昔、人々が「ポパラウ」した時は容易に離れる事が出來なかつた。つまり齒があつて嚙むからだ。ところがいろんな不都合から悉く齒を拔き取つて次第に今日のやうになつた、といふのでつまり進化したわけである。サイセット族、大體パイワン族と同じ。

陰部の位置

昔人々の陰部は額にあつたから、年若い男女は行きあふと必ず「ショミポ」し風規を

察したばかりか、性交からの疲弊が甚しかつた。そこで祖先等は粹な會議を開いて、結局今の場所がいけないのだ、今少し目立たぬやうにすればうまく調節がとれるに違ひないとて、胸や、臂や、腹などにつけ直さうと中々一致しない。所へ銀蠅が飛んで來て、或者の股間にとまつた。其れを見た人々はこゝこそ絕好の場所だとて早速そこに移す事となつた。そして今までのやうに露骨でなくても性慾をそゝるものだといふ事がわかつた。

タイヤル族　汶水蕃

註　パイワン族タラマカウ社、やはり昔は額にあつたのを不便だといふので膝につけた。ところが踞まらうとする時物に突き當つて痛んだから踵に移した。すると今度は泥がつくからとて遂に股間に移すこととなつた。パリヤラン社では最初膝にあつたのを股間に移したのだといつてゐる。

プラス交換

太古は兄妹相婚したが後には神罰を畏れて嚴禁せられた。ところが或時鶯が飛んで來て「パフセパフセ」と啼き頻つたのでつひそそのかされて兄妹相犯した。かくとも知らぬ隣人が火種を呉れとて屋內に入つて來たから二人は驚いて離れようとしたが、どうしても駄目だつた　その中醜態を見つけられ二人は非常に耻ぢて自殺した。その時人々は、何うも人間のは不便でいけないとて犬の陽物(ぶらす)と取り換へる事とした。

ブヌン族　丹大社

註　ブヌン族の他社(タケバカ蕃、郡蕃、干卓萬蕃など)でいふのも全く同樣である。その對手は夫婦と情人とを問はず結局醜態を見つけられたのは不便な「プラシ」を持つてゐたからだといふので、迷惑なのは犬である。

タイヤル族にも交換した話があるがあげる程でもない。それから陰部を隱すのは祖先が漸く探しあてた大切な所である上、餘り露はなのは所嫌はず發情するからだといふ。

ダングルの話

昔或男が嫁を迎へたが不思議にも晝間は唯陰核(だんぐる)ばかりとなつて夫の首に卷きついたり、手にからみついたりして片時も離れようとせなかつた。ところが或日夫は首飾も

腕輪も邪魔になるからとて鍋に入れたまゝ出獵した留守に、母は嫁が首飾になつて鍋の中にゐるとは知らず、そのまゝ水を盛つて煮たから「ダングル、ダングル」と泣き出したいふ事である。

註　ブヌン族では婦女を馘首した時、その局部を斬り取つて首飾や腕飾を作る習慣がある。尙怪異奇蹟の條參照

ブヌン族　丹大社

珍しい禁令

昔の人は犬や鳥のやうに人前も憚らないで性慾をみたしたものである。或日祖先の一人は犬の「ウッタス」を切り取り人々に示していふやう、今後晝日中や人前で「マッチョ」するものは此の犬のやうにするのだと嚴しく言ひ渡したから、前のやうな不所存ものはなくなつた。

タイヤル族　白狗蕃

涙川

今は昔社に二人の優雅な男が住んでゐて、夜な〳〵隣社達邦(たはん)社の少女の許に通つてゐた。一日の勤勞に疲れた彼等は夕餉さへすますと相伴つて出かけて行き、優しい少女に慰められるのを何よりの樂しみとしてゐたのであつた。或夜又かうしていそ〳〵と通つて來ると溪流が今日の雨に氾濫して、星影も見えぬ宵闇に淺瀨を探る術もなかつた。二人は暫し岸邊に立つて思ひを焦してゐたが、やがて一人は、「鳥ならば飛んでも行けように、この溪流に塞き止められる苦しさよ、かうして夜毎彼の少女に通ふのは此の上もない樂しみではあるが、思へば幾度つらい思ひをせねばならぬ事か、一そこの美しい懐慕の情感のまゝで死にたい」、といひさま、溪流に突き出た大岩に跨り我と我が〇〇を石にうち當て死んでしまつた、―達邦社の方を向いたまゝで。友は膽を潰しあはれな男を殘して歸り去つた。

ツォ族　阿里山蕃　知母朥社

粟播祭哀話

昔知母勝社の粟播祭には實に奇拔な行事があつたが、それについては哀しい話も傳つてゐる。狩獵に出て多くの獲物を擔つた壯丁等が「デットユヌ」の日に「トットゥンアバ」（公解）に集ると全社の婦女子は皆手に／＼酒と餠とを携へて彼等を犒ふのである。其の時頭目は筋骨の逞しい一人の壯丁を選び「トットゥンアバ」の中央に仰臥し〇〇〇〇〇を天に朝せしめ、別に未婚の美女を選び〇紐を解かしめ手に「フォナ」の純白な花を持つて壯丁に寄り添ひ、彼の一〇に花を載せ、やがて不言の〇でその花を擦り落させる。かくする事五回で行事は終るのである。それは粟の豐饒を祈る厭勝ひなので選ばれたものは何人でも嚴肅に行はねばならなかつた。或時かうした行事があつた。頭目の選んだ少女は、日頃毛虫のやうに嫌つてゐる男に行はねばならなかつた。女は極力拒んだ。併し頭目も許さないし、男は烈火の如く憤り無理に少女を引き寄せ「フォナ」の花を載せたまゝ〇〇してしまつた。元來この行事は唯呪ひの事で載せた花を落す

ばかりだつたが、こんな耻辱をうけた少女は其場に自殺しようとしたが人々に妨げられ家に和め歸された。併し少女の心は納らない泣く／＼姉妹に話すと皆々同情のあまり、姉妹五人打揃つて「マーメシビガナ」といふ懸崖から落ちて死んでしまつた。慘劇を見せられた頭目は悟つた。そして斷然この行事を廢する事にした。

ツォ族　阿里山蕃　知母勝社

男孕む

昔或所に夫婦があつて、屢々「マチオ」してゐる中に不思議にも男の方が孕んでしまつた。ところが胎兒の出る孔がないので、口や肛門と廻り歩いたが狹くてどうしても出られない。大騷ぎしてゐるうちに遂に「ウッタシ」を破つて生れ出はしたが、男は生兒と共に死亡した。

其後この女が他の男と偕老を契つたが何事もなかつた。先きに夫の懷妊したのは神業に違ひない。

註　アミ族南勢蕃、昔パダキといつて幼少の時から女裝してゐた男があつた。言語風姿恰も女子のやうに嫋やかなので社人は女とばかり思つてゐた。パダキに二人の友達があつたが、或日三人で畑に出てゐた時、ふと「プトル」を見つけられ、意地の惡い方の娘にわめき立てられたのが悲しくて泥の中に落ちて自殺してしまつた。

孕んだのではないが女らしい男なのであつた。或は兩性を具へたものかもしれない。

猿の情人

タイヤル族　眉原蕃

或所に猿を情婦とする變りものがあつた。いつも狩獵にかこつけて遭つてゐたのである。毎日狩に出ても只の一度も膽を持つて歸らないのを訝つた妻は「どうして膽ばかりは取り除いて歸るのですか、家で一緒に食べてはどうです」といつても一向取り合はないので、或日そつと夫の跡をつけた。山に入つた夫は「アヌーイヌ、アポー」と聲高に呼んだ。すると一匹の牝猿が嬉々と下りて來て夫の手から膽を取り甘さうに食べてしまつた。そしてやがて淺猿しい抱擁をするので、惘れ果てた妻は一散に家に歸り一本の針を持つて先きの場所に來た。夫は山深く狩りに行つたらしい。喜んで妻は「アヌーイヌ、アポー」と叫んだ。そして男だと思つて下りて來た猿を刺し殺し、其屍を家に運んで置いた。

翌くる日男は惘然と歸つて來た。妻は「今日はお猿さんは居らなかつたでせう、それあなたの情婦はそこにゐますよ」と屍を示した。夫は初めて長夜の夢がさめて懺悔したので夫婦の交情が甦つた。

註　サゼク族バトラン蕃、或時一人の娘が黍畑の鳥追ひに出てゐると、どこからか猿がやつて來て馴れ〲しく手を握つたりするので驚いて側の樹に登ると猿は追ひ縋つて離れない。娘は狂氣の如く泣き叫んだから父が漸く聞きつけて救つてやつた。猿は恨めしさうに逃げて行つた。

犬と契る

ブヌン族　タケバカ蕃

昔或家に一人の醜い娘があつた。娘盛りとなつても誰一人顧みて呉れないので、遂

に犬と戯れたが、何時しか懐妊した模樣なので、今更耻しく鬱々として日を送つてゐたが、月滿ちて產れ落ちたものを見ると、「人の子であつてほしい」と願つた甲斐もなく、全身に毛の生えた犬の兒であつた。

タイヤル族　南澳蕃コーロツ社、カラパイ蕃

註　パイワン族タラマカウ社、昔粟畑に鳥追に行つた女が犬と契つて產み落した子は毛むくぢやらの犬ころだつた。

豚と交情

或男が獨寢の寂しさにつひ豚に戯れたが、その豚遂に孕んで數多の子を產んだ。ところがどの子も皆人の形をした畸形だつたから、さすがに社人の嘲笑が恐ろしくて悉く生きながら埋めてしまつた。

タイヤル族　大嵙崁蕃

註　サゼツク族外太魯閣蕃、或男が妻を娶らうとしたが誰一人嫁になるのがないので、已むなく豚と契つた。そして二子を產んだが、一子は全くの豚で、他は口吻尖り手足の短い畸形兒だつたから直ぐ殺してしまつた。

猪と淫婦

或所に夫婦があつたが妻の方は極めて淫奔だつた。或日夫に向ひ猪の番に行きますとて唯一人で畑小屋に泊る事とした。その後夫が畑を氣づかつて出て行くと意外にも畑は散々に荒され薯の影さへないので、大いに妻を叱り其の夜は夫の方が小屋で見張りする事とした。そして何氣なく女の「タボク」を振るとどこからか猪が出て來たから、好い獲物だと早速槍を投げつけて殺した。夫は何事も判つたので忌々しくてたまらず、早速家に歸り肉を切り膽をとつて刀の尖に刺し「おい此の膽を食はぬか」と差し出した。妻は悲しげに横を向いたので、夫は一つき妻の脾腹を衝くと、腹は破れて四匹の猪の子が生れた。その中二匹は山に逃げてもとの猪となり、家に殘つた方が飼ひ馴されて豚となつた。

ブヌン族　郡蕃、干卓萬蕃、タケバカ蕃

註　アミ族奇密社、或所に年頃の娘を持つた夫婦が住んでゐた。或年粟の豐熟する頃、日毎夫婦で山豚追ひ

に出かけてゐたが、後で娵に代らせた。所が隣人が如何に豐作でもあんなに山豚に荒されては駄目だといふので、不思議に思ひ畑に行つて見ると娵は山豚と「ミゴハ」してゐた。兩親も惘れ果て、不意に大聲をあげると山豚は逃げてしまつた。それ以來畑の周圍には茅を結んで立て布を列べて山豚が來ないやうにした。「ミポロン」といふのはこれである。

ブヌン族丹大社、昔ラオンといふ者が山に入つて猪となつたが、いつも社に來ては婦女を犯した。或時も女一人で畑に出てゐたから、猪が現れて其の女を連れ去つた。夫は妻の遲いのを心配して探しに來ると猪と戯れてゐたから、非常に怒り石垣を五重に繞らし其の中から猪を射た。猪は射られながら飛びかゝり石垣を四重まで崩したが、遂に五重の下で斃れてしまつた。家に歸つた妻は間もなく猪を生み落した。

熊に戯る

或時一艘の船が北走してゐたが、水夫の一人が病氣に罹つたから一時上陸して病を養ふ事となつた。水夫は唯一人小屋の中に臥つてゐたが幸に病が快癒した。ところが或日一匹の牝熊が其の小屋に來て歸らうとせないから、物好きな彼は熊に戯れた。すると熊は遂に孕んで一子を生んだが、いつも山に行つては鳥獸を捕へて來て夫と子とを

養つてゐた。或日もかうして山に鳥獸を狩つてゐた間に以前の船がやつて來て全快した水夫と子供を乘せて出帆した。そこへ歸りあはせた牝熊は健氣にも船を追つたが乘組の水夫等は何事も知らずに撲ち殺してしまつた。

水夫は歸郷したが、彼の熊の子は長ずるに從ひ喧嘩ばかりが好きなので困つた。何事も知らない人でも「熊の子」と嗤つてゐた。そこで子供も自分ながら訝しく思ひ父にいろ〳〵問ひ糺したが、彼の水夫は唯「お前の母は海で果てたのだ」と答へるばかりだつた。そこでその子は其話を頼りに毎日海に出ては母の骨を探した。併し母の骨はかゝらないで魚ばかりがかゝつて來た。かくて彼の撓まない努力は異常なものを發明する事となつた。それが卽ち漁撈網なのである。

アミ族　馬蘭社

註　タイヤル族白毛社、或時女が一人で山に入つて薪を採つてゐると突然熊が現れて女を汚した。

鹿の情婦

昔或家に娘があつて年が年中鳥追ひにかこつけて畑にばかり出かけるが、不思議に畑には鹿の足跡が多いので或日父がそと後をつけて行くと、木陰から美しい鹿が現はれたから「此奴と」一矢のもとに射殺したが、轉り出た娘は鹿の死骸に取りすがりながら、嘆き悲しむさまは、見る目も哀れであつた。娘はせめて記念にもと、鹿の陽物を切り取つて大切に保存してゐた。併し娘は情夫を殺されたので餘程父の無情を怨んでゐたが、或日河に行つて麻を洗つてゐた時、水に落ちて死んでしまつた。

（蟹の條參照）

タイヤル族　鹿場蕃

註　パイワン族カテポル社、昔「ルポアン」にサミリカンといふ娘があつて毎夜畑小屋に寢泊りしてゐた。ところが父が畑に出てみると娘が夜番したとも思はれぬ荒れやうなので驚いて其の夜は父が代つた。すると夜半に頻りに「ケン〳〵」と啼くものがあるので早速射止めると、大きな鹿が首飾を角にかけて仆れてゐた。屹度娘の情夫に違ひないとて首を携へて歸つた。娘は一目見て非常に泣き悲しみ、屋根の上から飛び下り我と腹を角に刺されて死んでしまつた。

太麻里社で傳へるのは伯母がかりの孤兒が畑番にやられたが小娘の事で恐ろしくてたまらなかつた。その時鹿が小屋に訪れて來たから愛情に絆されてつひ許す事となつた。そして畑小屋に行つたまゝ何時まで

も歸らない娘を心配して伯父が劬り連れ歸り、自分で夜番を代つたその夜鹿を殺してしまふのである。娘が情夫の後を追うたのは全くカテポル社と同樣である。

アミ族馬太鞍社、パイワン族のカテポル社の話と大體同じだが寛大な父が娘を愍んで鹿と一緒に葬つてやる事になつてゐる。南勢蕃の傳へも同じ。

パイワン族卑南社、娘が畑小屋で水鹿と通じた。父はそれとも知らずに水鹿を射殺したから、娘が角で腹を破つて死ぬ。水鹿は美しい銀製の首飾や頭飾をかけ腕輪まではめてゐた。父は娘を愍んで一緒に葬つてやつた。

鼠と契る

昔美しい男があつて或女の許に通つてゐた。或日の事、「明日は草刈をしようと思ふが手傳つて呉れないか」といふので女も承知して畑の在處(ありか)など聞いておいた。翌くる日女は早くから出かけたが、一向男がやつて來ない。女は待ちあぐんでゐた所へ一疋の鼠が現れて「コアチン(茅)」の根を咬み倒した。女はこの大鼠めと棒で敲き廻したが、あちこち逃げながらやはり「コアチン」を咬み切つてゐた。女もそのまゝ捨て置いて家に

歸つた。そして憤懣のまだ治らない頃男が訪ねて來たので、散々男の不實を責めると、男は一度ならず二度ならず打ち殺さうとした無情を責めた。そこで女は打ち驚き「それでは汝はあの鼠だつたのか」といつて嘆息した。そしてそれ切り永久に別れてしまつた。

ツォ族　カナブ蕃

註　アミ族馬太鞍社、昔或家の少女が何時も唯一人で畑に行つて、廣い畑を瞬く暇に耕した。あまり不思議なので或日そつと跟けてくると、娘は二三十匹の鼠を相手にせつせと働いてゐるのであつた。やがて娘がふと顏を上げると母が側に立つてゐるから吃驚して鼠と共に叢に逃げ込んだ。此の時度を失つて狼狽へてゐる大鼠をたゝき殺したから、娘は潸々と泣いてゐたがやがて鼠を呑んで死んだ、鼠は情人だつたのであつた。奇密社、馬里勿社、南勢蕃も大體同じ。

鳩を愛する男

昔一人の男が鹿狩とていつも出かけて行く時はきつと鳩を入れた袋を携へる事を忘れなかつた。ところが嘗て一度だつて鹿を捕つて來た事がないから、母は訝つて或日

竊に息子の所作を覗つた。すると若者は狩どころか携へて來た鳩と戯れるのである。呆れ果てた母は今にも大聲を立てるところを素知らぬ顏して家に歸り、其の夜息子の寢に就くのを待つて竊に鳩を殺してしまつた。目を覺した息子は鳩の殺されたのを見て、「あんなに可愛い鳥をどうして慘らしい事をなさるのです」と怨んだり泣いたりしたが、今更詮方もないのでせめて其の骨だけでも下さいとて貰ひうけ、袋に入れて大事に梁に吊しておいた。そして時々取り下しては偲んでゐたが、或日母の留守の間にすつかりその骨を呑んでしまひ梁に下つて夢のやうに死んで行つた。

アミ族　馬太鞍社

鮒の色男

或家に一人の娘があつた。晝は畑に耕し、夜は夜で絲を繰つてゐたが、嘗て一度も勞作を厭ふ事もなくいつも愉快さうであつた。唯一つ不思議なのは一つの「ナヌカ」

（絲入籠）を大事にして片時も側を離さずにゐた事で、「ナヌカ」に犬でも近寄ると大騒ぎして追ふ事であつた。それに耕作してゐる時は美しい若者が助けてゐるといふ噂や、絲を繰つてゐると、不意に「カカカカ」と嬉しさうに笑ふものがあつたりするので、兩親は情人でも有るのかといろ／＼氣をつけたが、一向それらしいものが判らなかつた。ところが或時娘が病に罹つて寢ついたので、何氣なく枕邊にあつた籠の蓋を取つた。すると中には二尺もある大きな鮒がゐたから、母は喜んで炙つて食つてしまひ、骨だけを入れておいた。娘が氣がついて籠を檢べると此の樣なので身も世もあらず泣き伏してゐたが、その骨を呑み情夫の後を追つてしまつた。母は悔んだが及ばなかつた。

註　鳩の話と似通つてゐる事が判る。

アミ族　南勢蕃　奇密社

蛇性の淫

昔或家の娘が年頃になつたので人々に勸められるまゝ他家に緣づいたが、夫といふものは一向姿を見せない。そのうちに夜になつたから心細げに寢につくと、ふと龍門に辷り込むものがある。驚いて取り上げると、それは恐ろしい蛇であつた。其の時養母が立ち現れ、それこそ汝の夫であるといつたから、身慄ひして家に逃げ歸り、「妾は恐しろい蛇の妻になつた」といふかと思ふと早事切れてゐた。

タイヤル族　萬大社

註　ブヌン族干卓萬蕃、或時母娘で麻刈に行つてゐたが、急に娘がゐなくなつた。母はあちこち探し廻つて漸く木かげで蛇に犯されながら泣いてゐる娘を見た。蛇は直ぐ熱湯をかけて殺したが、娘は間もなく數多の蛇を生んだ。

ツォ族阿里山蕃、或家に美しい娘があつた。每夜嘴琴を鳴らして娘に通ふものがあるが誰一人姿を見たものがない。無論娘も名さへ知らないのだが、類稀な美男子なのでつひうか／＼と契つてしまつたと顏を赧らめるばかりであつた。併しこれでは面目ない事と或日情人に伴はれて出て行つた　男はする／＼と山路を辷るやうに進んで行く、娘は只引かれるやうにして半里ばかりも來たと思ふ頃男は此處だといふ。娘は一向家らしいものがないので、「何處に／＼」と寄り添ふと漸くそこに素晴しい大きな家が見えた。すると男は水を汲みに行くと出かけたので、娘は其跡を掃除しようとすると小蛇がする／＼と出て來たから箒で敲いてゐる所へ、男が立戻り亂暴してはならぬと例にない叱り方をする。娘もいよ／＼訝しく思つてゐたが、或日男は出かける時決して此の倉を開けてはならぬといひ置いたのを疑つて扉を開いた。すると

ほんの小さい倉だつたのに中から數知れぬ大蛇小蛇が蜿蜒と這ひ出したから、娘は膽を潰して逃げ出した丁度そこへ歸つて來た男は、烈火の如く憤ると姿も恐ろしい大蛇となつて娘の跡を追つた。眷族の青蛇赤蛇も我先きにと追つかけて來た。娘は悲鳴をあげて逃げ惑つてゐる時、大磐石の上に跨つて篠を削つて居られたケイシボプトツ神が、あはれに思つてひらり地に飛び下り一踏み踏まれると、忽ち一面の猛火が起つて大小の蛇は悉く焼け失せた。その時只一匹の青蛇が賢く穴に避けたので尾を少し焼いたばかりで生き延びた。今の蛇は皆其の子孫である。

パイソン族大南社、昔「マテヤサン」といふ所にバルンといふ娘があつた。或日家族に向つて「今宵妾は夫を迎へたいと思ふから決して松明を點けて呉れるな」といつた。家族は訝しく思ひ故ら夜中に火を點けるとバルンの床に大蛇が横つてゐた。恥を見せたといふのでバルンは翌朝籠に乘つて「ダルパリガン」といふ所の池の中に入つた。其時跡を慕つて來た家人に、「これでお別れです、その石の上に載せておいた妾の笠が無くなる時は妾が水底に沈んだのである。併しまだいふ事が殘つてゐるから暫く待つてゐて下さい」といつて沈んでしまつた。果してその笠は何もせないのになくなつた。するとバルンは再び現れて「マカルルサ」「トウタオタオン」(共に水甕)、「コドルルン」、「モモリサ」(共に首飾)を家族に與へ、「これが妾の形見である、そして若しか獵に來る時には、此處にお出でなさい妾はきつと飯を供へておきますから」といつて沈んでしまつた。それから我等は蛇の形を家々に飾つてバルンの所縁たる表章としてゐる。

大竹高社。チョコチョコといふ娘が毎夜家族が寢靜つてから男を引き入れるやうなので、或日母が松明を點して娘の寢所を檢べると大蛇だつた。娘は間もなく大蛇と海に入つてしまつた。

パリラヤン社、ランガオといふ娘が毎夜蛇と「キソジュ」したが露れたのを恥ぢ「イトアタアップ」といふ淵に沈んでしまつた。その時此の淵に來る時は飯が用意されてゐようが、冷えたものは神のものだから、暖いものを食べよと家人にいひおいた。

マシリジ社「サンテームン」にルグンといふ少女があつて耕作に出た時蛇と戯れて數日のうちに死んだ。

チヤヂヤアプス社、モカイといふ美女が水汲みに行つた時、一人の美男子と契つた。ところが男は名も所も明さないので、或日跡を跟けて行くと廣々とした野原に出たが、不意に芭蕉の中で見失つた。モカイは茫然として自失した。そして蛇男とは永久に絶縁してしまつた。

カスボカン社、サバリヤパラリクといふ娘が、毎夜「キソジュ」するので母が誰かしらと見ると蛇だつた。娘は普通の男だとばかり思つてゐたが、やがて澤山の蛇を生んだ。

アツダス社、内文社にシヤバジといふ娘があつて蛇の子を生んだから行李に秘めておいた。ところが母が訝つて改めると無數の蛇が逃げ出した。娘は恥ぢて海に溺れた。

マカザヤザヤ社、昔「タリラウル」社にモカイ、カヲルの姉妹があつて、或日川に行くと數多の青年が馴々しくいひ寄つた。そして妹のカヲルはクレレレといふ美しい若者と二世を契つたが、若者の踞つた跡には蛇の香が滿ちてゐるから、若しや蛇ではないかと悲しみ出した。或日カヲルはクレレレを送つて行くと途中は全く蛇のやうで　川邊につくと人間となるのである。カヲルは姉に、やはりあの人は蛇ぢやなかつたなどといつて自ら慰めてゐたが、翌日又二人で川に行つた時、不意にカヲルは水中に沈んだから、悲しみながら母に告げたので母は狂せんばかりであつた。其の夜もクレレレは通つて來たが、モカイは幸と「キ

ソジョ」してゐるさ、死んだ筈のカラルは突然現れて、「妾は今日初めてクレレレ」の家に行つて來たさいふ。姉は間の惡い思ひをしたが結局妹に讓らればならなかつた。クレレレさカラルの交情はその後も變らなかつた。

・牡丹路社、海蛇が女の許に通つて來た。女も時々海中に入つて契つたさいはれてゐる・

・我國の傳說に似通つてゐるのが面白くて、思はず多くをあげた。大南社から牡丹路社までは悉くパイワン族の話である。

蛙の化身

或家の娘に毎晩美しい男が通つて來たので、娘はそれが蛙の化身だとも知らずに許してしまつた。すると或夜男に、友達を集めて踊りをしたいから帶を借して吳れないか、といはれて娘は貸してやつた。そして踊りの日を待ち兼ねた娘が示された場所に行つて見ると、只茫漠とした原野に蛙の鳴き聲が聞えるばかりなので、娘は誑かされた悔しさに鉢卷から煙管を取り出しすぱ〳〵煙を吹いてゐた。すると此の時一段と蛙の聲が高くなつたから其の方に目を遣ると澤山の蛙が情人に貸し與へた自分の帶を引つ張りあつて、咽喉も裂けよと鳴き叫びながら踊るやうなので、娘は駈け寄つて帶を摑み蛙を振り離したが、一匹の大蛙だけはどうしても確（しか）と握つたまゝ離れないから力任せに石に叩きつけておいて家に歸つた。其夜又男が來て、今日は慘い目に遭はされた眩暈がしてたまらないといふから、よく見ると頭に負傷してゐる。娘は吃驚して此の蛙めと蹶飛ばすと、男は忽ち元の蛙になり、ぴよん〳〵跳ねながら逃げて行つた。

ツォ族　阿里山蕃　簡仔霧蕃

註　ブヌン族カンタバン蕃、一人の娘が夫もないのに姙娠して「コプラ」（蛙）さ「チョク」を生んだから川に投げこむさ二疋は對岸に泳いて行つた。娘は急に面白くなつて「アベシ、アベシ」さ呼んでみた。するさ「コプラ」は泳ぎ戻つて來て娘の夫さなつた。併し子は產れなかつた。

パイワン族　スクスクス社、昔サウラルヤンが水汲みに行つた時「サコラコラ」（蛙）がやつて來て檳榔子を贈り、「汝の娘を吳れ」さいふから嫌ださ答へるさ、莢を道に橫へて汝を歸さぬさ脅すので、已むなく檳榔を受取つて歸り末女に其の事を告げた。五日後に蛙は「カラカラ」さ音を立て多くの竹さ貨幣を贈つて娘を求めた。サウラルヤンは隙を見て蛙を殺さうさしたが、却つて自分が負傷してひるむ間に娘を奪はれてしまつた。あはれな娘は五日後に死骸さなつて河に浮んでゐた。

蜂の求婚

或時一疋の蜂がサウラルヤンの家に來て「トッング、トゥング」と啼きつゝ長女に檳榔子を贈つたが、長女は受けないで棒で敲かうとするから次女の所へ飛んで行つた。二女も三女も承知しないから、四女の側に寄つて行くと刀で斬り殺されさうになつた。そこで蜂は一策を案じ五女の側に行き先づ檳榔子を差し延べながら、「若し汝が我が檳榔子を受けぬ時は、汝の父は『ブロン（蛇）』に咬み殺されるに違ひない」といつたから、末娘は思はずそれを受けた。かくて五日目に蜂がいそ〳〵とやつて來て五女を迎へた。末娘は一旦檳榔子を受けたのだから拒む事が出來ず蜂につれられて行つた。ところが夫の家に着くと、金銀珠玉を鏤めた大建築が此の世のものとも思はれぬ位だし、たつた今まで蜂だつた男が見違へる程の偉丈夫となつたのである。娘は夢かとばかり喜び兩親にこの事を知らせたから、蜂に欺されたのだとばかり思つてゐた姉は、心穩かならず早速訪ねて來ると、聞いたに優る裕福さに眼眩み遂に妹を殺して妻になり代つてゐ

たが、溺れた筈の妹が爐中から再生したので面皮を剝がれ熱湯を浴せられて殺された。蜂の夫婦は其後睦じく暮してゐたさうである。

パイソン族　スクスクス社

註　前掲の嫉妬の話や、蛙が娘を掠つた話などゝ殆ど同工である。併し兎に角大分錯綜はしてゐるが、最初蜂になつて來るので、此の儘にあげておく。

蚯蚓と娘

昔或家の娘が毎日同じ場所に蹲踞つて恍惚境に入つてゐるから、怪しいと思つて母が檢べると蚯蚓と○つてゐるのであつた。母は忌々しくてその蚯蚓に熱湯を注いで殺してしまつたが、娘は既に妊娠して多數の蚯蚓を生んだ。

ツオ族　阿里山蕃
ブヌン族　タケバカ蕃　郡蕃
丹蕃　カンタバン蕃
卓社蕃
サイセット族　ガラワン社　大隘社

註　パイワン族大竹高社、或時娘が畑で午睡してゐると蚯蚓が「クチ」に入つたので娘は死んでしまつた。タイヤル族南勢蕃の白毛社ではそれが蛇になつてゐる。

ブヌン族タケバカ蕃卡社、丹蕃丹大社、昔「バンカホア」(又はモンカホワ)といふ青虫と契る女があつた。ところが或日その青虫が鍋の縁に上つたのを、子供は父と知らずに殺してしまつた。

ツォ族阿里山蕃達邦社、或家の娘が桑の樹の「ユトサ」虫と契つてゐた。「ユトサ」は眉目よい男になつて通つて來たのであつた。

ツォ族の簡仔霧蕃では虫が人糞になつてゐる。人糞が人に化けて通つてゐたが。やがて正體が現れて絶縁するのである。

ブヌン族郡蕃東埔社では性を異にして傳へられる。卽ち人糞が美女に化けて夜な〱男の所に通つたのである。同じ干卓萬蕃では人糞を踏むのを樂しみとしてゐた娘があつた。兄が見兼ねて嚴責すると漸く止めた。

悩める女

或る所に恐ろしい氣の利かぬ女があつた。社人は「ポットッ〱」と云ひ囃し嘲笑してゐた位だから誰一人婿にならうといふものがない。痴かな女にも性の悩みはあつた。寂しさを佗つてはいつも畑に行つて人知れず胡瓜を弄んでは樂しみ、時としては玉蜀黍や薯などを使つて獨り慰んでゐたがどうしても十分の滿足は得られなかつた。娘は悶々の中に世を早くした。

タイヤル族　キナジー蕃

薯を弄ぶ娘

或時三人の娘が薯を掘つてゐたが、晝休みの時一人の娘が私に薯を削り適宜な型を作つて之を弄してゐた。初めは何事もなかつたが、やがて中程から折れて取れなくなつたのでしく〱泣き出した。連れの娘は吃驚して尋ねると、今蟹がやつて來て「ピッピ」に入つたので痛いのだといふ。一人は早速手探りにその蟹を取り出したが、蟹どころか削りなした薯だつた。餘り馬鹿にしてゐるので頭目に告げたから娘は謝罪せしめられた。

タイヤル族 大嵙崁蕃 マリコワン蕃
カラパイ蕃

註

ブヌン族干卓萬蕃、やはり署を弄した娘があつた。

パイワン族タラマカウ社、大體同樣だが、こゝでは娘が死んだと傳へてゐる。

サイセット族大隘社、茄子になつてゐる。サゼク族內太魯閣蕃、少女が菌を弄んで困つてゐるのを老人が救つてやつた。そして今でも靑年が「菌を取つてやらうか」と若い娘をからかふのである。

芭蕉の幹

昔一人の貧乏な男があつた。妻を娶る資力さへなかつたので、求妻の勸めもすつかり謝つてゐた。そして竊に山に行つて芭蕉の幹に穴を穿ち情慾を洩す事を樂しみとしてゐた。或時社の壯丁が後から來るのも知らずに例の如く獨り佳境に入つてゐた。社人は素知らぬ顏して歸り、細く削り尖げた竹を無數に孔の中に植ゑて置いた。知らぬが佛の男は翌日も芭蕉に通つたが忽ち竹串に刺され命まで落してしまつた。

タイヤル族 大嵙崁蕃

註

サイセット族ガラワン社、ヤウエロスポンといふ男が女を誑かさうとしたが、その手に乘らずに逃げてしまつたから、忌々しさのあまり孔のある石を〇したが、心適かず芭蕉の幹を刳つて片つぱしから行つた。後で見ると畑中の芭蕉は悉く刳られてゐた。

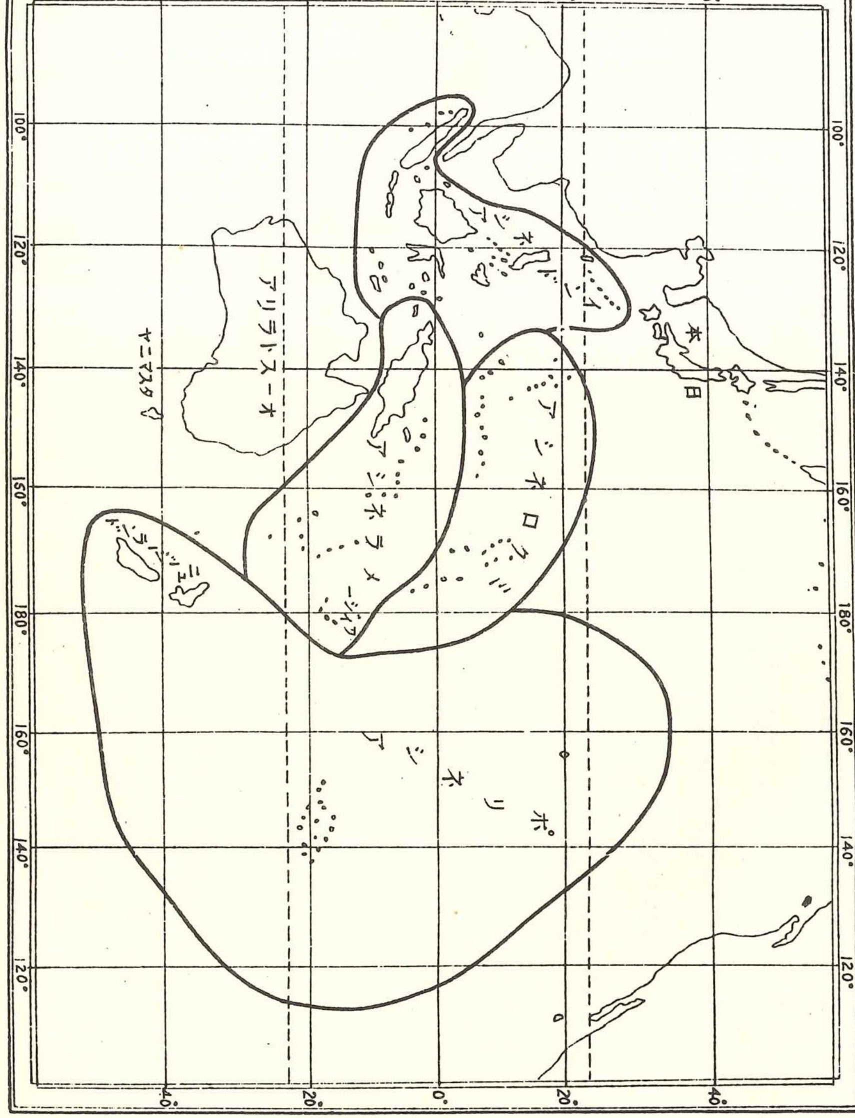
パイワン族アツダス社、或男が「ロネ」(夕顏)に湯を注ぎ軟くしておきそれを愛玩した。

同タラマカウ社、或時娘が外で遊んでゐると、榕樹の根が延びて來て遂に〇してしまつた。

太古男は殆ど自由に犬や水牛、豚などに戲れた。だから動物で人の子を產んだ事が少くなかつた。(パイワン族スクスクス社)

妻のない男は大きな瓢に孔を穿ち湯を注ぎ暖めておいてそれを抱く、殊にいろんな迷信から妻のある男でも自由にならぬ場合はこんな方法を講ずる。

成熟した女が久しく男との語らひをせない時は〇水腹を貫き遂に額を衝くとて、蕃署を「ウツタシ」の形に作り溫めて弄ぶ、かうした事を「ビショカリツン」(殿戀(とのご)ひ)といつてゐる。(サゼク族 トロツク蕃)



大洋洲諸種族分布圖

第八　南洋類話

ポリネシア

創世神話

太古は唯天界ばかりで下界は混沌とした海であつた。そこでタンガロア神は娘を鳥の形で下界に送り住むべき國土を探させた。娘は天降つて永い間あちこち飛び廻つてゐるうち、やつと水上に浮んでゐる小島を見つけたから、父神に其事を復命した。するとその小島が次第に大きくなり美しい國土が現れたので、父神は再び娘を遣し植物を一面に植ゑさせた。ところが間もなく其の中から虫が發生し、やがて虫が化して男女の人間となつた。（サモア）

註　神樣が「サンドパイパー」といふ虫を砂の中から掻き出した。其の虫から人間が化生したのである。（トンガ）

昔々タアロア神の娘ヒナが父に向つて、如何して人間を造つたらいゝでせうかと尋ねると、父は海岸に行つてお前の兄を探して御覽と答へた。ヒナは訝りながら、姿は今まで其處にゐたのですが兄さんは居りませんでしたといふので、父は重ねてそれぢや陸の方にゐるだらうといつて娘を外に出した。其のあとで父は人間の創造といふ事についていろ〳〵考へたが、やつとその方法を思ひついた。すると間もなく娘が戻つて來た、―やつぱり兄さんは居らなかつたと大變不滿さうな顏をして―。そして何氣なく父の顏を見ると、すつかり姿が變つてゐるのでそれと判別する事が出來なかつた。娘は若しか兄ではないかと思つたので、「あなたは誰ですか」と問ふと、父は素知らぬ顏して答へた。「私はトウ、モアラアタイといふ者だ」。娘は喜んで「實はたつた今まであなたを探してゐたのです、やつと見付つた、あゝ嬉しい」といふのであつた。そして夫婦になつて一人の息子を產んだ。それが人間の始祖なのである。（タヒチ）

太陽と月

昔バテア、トンガイテ夫婦の間に一子をあげた。ところが互にその子を自分のもの

にしようと爭つた末、遂に其の子を二つに切つて上部をバテアが取り、トンガイテは下部を取つてそれ〴〵天に投げあげた。するとバテアの投げたものは太陽となり、トンガイテの方は月となつた。(クック)

天地の交會

天神ランギは地神パパトゥアヌクの裸體なのを見て種々の草木や動物で飾つた。そして互に愛しあつて堅く抱擁した。天神の產んだ諸々の神は兩神の間に挾まれ恐ろしい暗黑の中に苦しんだ。それで諸神は何うかして天地二神の抱擁を離し、苦しみから脫れようと相談が決つたので、勇猛なタネマフタ(森林、鳥、昆虫などの神)は地神に頭をつけ兩脚を上にあげ、オーとばかり渾身の勇を皷して踏んばつた。タネマフタの雄叫びを聞いた天地の神は大いに怒り、「汝は何故そんなに大聲を立てゝ我等二神を殺すやうな事をするのか」と叱つたが、タネマフタはどうしても止めなかつた。それでとう〳〵天地を離間する事が出來た。その時以來天地は今日の如く遠く離れてしまつたが兩神の愛は少しも昔と變る事はない。あの森や谷から立ち騰る霧は地神の美しい

息吹が天に通ふのであるし、朝に夕に詠めくらした天神はいつも地神の柔かな胸に愛慕の淚を落してゐるのである。それを人々は露といふのだ。(ニュージランド)

太陽征伐

昔太陽の脚が大さう早くて衣服を乾かす事も出來ないので人々は困つてゐた。そこで英雄マウイが太陽の足を斬らうと決心したが、母もその擧を壯とし強い綱を造つてやり、「先づ汝は盲女の祖母のところへ行つて助力を乞ふがよい」と助言した。マウイが祖母の家に行つた時祖母はバナナを切つてゐた。マウイはこつそりその一片を盜つた。祖母は手探りにさがしたがバナナの足らぬ事に氣づき誰かゐるのか知らと周圍を嗅ぎ始めた。そしてやつとの事で人間の臭氣を嗅ぎつけて、「誰だ、そこにゐるのは」と怒鳴つた。マウイは應へた、「私です、孫のマウイです」と。すると祖母も氣を和げて、何うして來たのかと尋ねるから太陽征伐に出かける事を告げた。祖母は點頭いて「魔法の棒」を與へた。

マウイは東へ東へと進み太陽の昇る處についた。そこで母に貰つた綱で太陽の脚を

しつかと括り其の端を巨木に繫いでおき、棒を以てしたゝか太陽を打つた。すると太陽は非常に苦悶して今後は屹度徐(そ)ろ〳〵歩く事にするから、生命だけは助けて呉れと願つた。その時以來太陽は緩々(ゆる〳〵)歩く事となつたのである。（ハワイ）

火の話

或日マウイが海岸で火を見た。其れは鳥が造つたものだつたが、彼は其の火を得ようと近づくと、鳥は早速火を消して飛び去つた。其後マウイはやつとの事で鳥から火をつくる事を敎はつたが　以前にさん〴〵鳥に欺かれたのが癪に解つてゐたから、別れる時松明で鳥の頭を毆つた。其時から鳥の頭は火に燒けて赤くなつたといはれてゐる。（ハワイ）

ヒクとカウェル

昔深山に母子二人で住んでゐた。無論山から外に出た事がないので彼等の眼界の及ぶ所が世界の凡てであつた。息子はヒクといつたがさすがに他の世界が見たくてたまらなかつた。

そこで魔矢を天に射て、其の矢の落ちる所を探しては歩いて行つた。そして遂に或る村に着いたが、その時射た矢がカウェルといふ美女の足許に落ちた。すると美女は早速その矢を拾つて隱してしまつた。ヒクは暫く躊躇してゐたが、思ひ切つて矢を返して呉れといつた。ところがカウェルは矢を返さうとせず、そのまゝ彼を立派な宮殿に伴つて行つて懇ろに饗した。二人は互に戀におち遂に結婚した。思はず長い年月をカウェルの宮殿に過したヒクは或日母の事を思ふと懷郷の念が壓へ切れなくなつた。それで妻にその事を話すと、妻は非常に悲しみ何うしても歸鄕を許さないので、ヒクは仕方がなくて逃げ出してしまつた。カウェルはやがてそれと知つて落膽し日夜泣き暮してゐるうちに遂に悶死してしまつた。

郷里に母を省したヒクはやがて妻の事が心にかゝつて歸つて來たが、妻は既に此の世の人でなかつた。そして妻の友などは皆ヒクの無情を責め罵つたから彼は何うしても妻の魂魄を呼び返さうと決心した。それから友の助けを得て長い綱を造り、體には臭い油を塗り丁度死屍のやうになつて幽界に降つて行つた。漸と妻を見出して連れ歸

らうとすると、妻は胡蝶となつてひら〱飛び去らうとするから、ココナットの殼に捕へ入れて地上に出た。そして左足の拇指に孔をあけて其處から精靈を吹き込むと妻はウンといつて蘇生した。それから伉儷睦しく暮したのである。（ハワイ）

ミクロネシア

開闢

世界の始に大木があつたが、或時其の木が倒れて根が天に伸び枝が海に擴がつた。するとその枝から一婦人が生れたからエラファジといふ神が「國土を固成れ。」とて砂を與へた。婦人はその砂を海に投げて土地を得たのである。』

始め天神はリゴアブブといふ娘を下界に送つて國見をさせられた。リゴアブブは喉が渇いたから溜り水を飲んだ。無論その中に小さな動物が居る事を知らなかつた。すると間もなく孕んで一人の女子を產んだ。その女子が又更に一女をあげたが、この女が成長して初めて男子を生んだ。此の男、つまりリゴアブブからは曾孫に當るのだが、

成男になつた時肋骨から一男子を生んだ。肋骨から生れた男が祖先のリゴアブブと婚した。此の時から夫婦の道が始つたので、此の二人が卽ち人類の始祖なのである。

註 或所では腕から男子が生れたといひ、或は一眼から男子、一眼から女子が現れた。これが最初の男女だともいつてゐる。

火の話

火の神は鳥を下界に遣して火を送つた。鳥は木から木へ飛び移りつゝ木の中に火の種を置いた。それで人々は今でも木の中から火を取るのである。

メラネシア

世界の始

世の始めは天が甚だ低かつた。或日婦人が穀物を搗かうとすると杵が天に觸れるので、「邪魔になる天だ、高く上がれ」と怒鳴つた。すると天は吃驚して今日のやうに高くなつた。（ニューヘブリデス）

註　此の話はインドネシアの諸所、ミクロネシアなどにもある。パイワン族の話と比べられる。

太古は浩蕩とした大海原ばかりで、その中に一匹の大蛇が泳いてゐた。ところが蛇も疲れるので休み場所が欲しくなり、「岩よ上がれ」と呼ぶと忽ち岩が海中から浮き上つて大きな陸地となつた。

又

昔大海に漂つてゐた男女の二神が漸く浮木を見付けて其上に上つた。其後間もなくさしも漫々たる大水が退いて、あちこちに陸地が現れた。併し地上には何一つなかつたので二神は種々の草木を植ゑつけた。

註　海中から陸を引き揚げたのだともいつてゐる。

或時一羽の鳩が二つのものを産んだ。一つは鳥で他は人であつたが、其の人が母の鳩と契つて多くの人間を産んだ。これが人類の始祖である。（アドミラルテー）

註　昔龜が十箇の卵を産んだが、八つだけはやはり龜であつて二つは男女の人間となつた。此の二人が結婚して人間の祖となつた。

昔一羽の鳥が二つの卵を産んだが、大蛇によつて孵化せられて、一つからは男の兒他から女の兒が現れた。これが最初の男女である。（フィジィ）

昔トゥカビナナとトゥカルブブといふ二人が夜河狩に行つた。ところが甘蔗の莖が網にひつかゝつたから取つて投げ棄てた。すると再び流れ寄つて網にかゝるので又捨てた。併し三度目にかゝつた時は畑に植ゑよとの事だと思つて持つて歸つた。甘蔗は見る〳〵成長して太い莖となつた。

或日その膨れてゐた莖が破れて女が現れ出で、ちやんと食事を調へておいて再びもとの莖に隱れた。男は歸つて來て驚いた。翌日も翌々日も同樣なので男等は不審に思ひ、誰がこんな奇特な事をしてくれるのかしらとて、そつと隱れてゐた。それとも知らずに甘蔗の中から美人が現れたので二人は直ぐ女を捕へた。そして一人の男は遂に

その女を妻とした。これが我等の遠い祖先なのである。（ニューブリテン）

註　甘蔗の二つの節から最初の男女が生れた。（ソロモン）
木から女が出で、地から男が生れた。（英領ニューギネア）
女は子安貝から出た。（ニューヘブリデス）

天地開闢の創めには唯日と月ばかりで、何物もなかつた。そこで日と月が交會して石と鳥が產れた。そして石が男となり、鳥が女となつた。二人は人類の始祖なのである。（ニューブリテン）

月の模樣

月は昔、或る老嫗の爲めに壺中に押し込められてゐた。ところが或時子供等がその壺を見付けて、そつと蓋を開けると月は直ぐ逃げ出した。子供等は慌てゝ追つかけ兩手でしつかり縋りついたが、月はふり離して遁げてしまつた。今月面にある模樣は其の時の手跡だ。（獨領ニューギネア）

日月の話

昔一人の老婦が火を持つてゐた。そしていつも一人で物を煮たり炙いたりして食べるので、息子がその不仁を憎み或日火を盜んで人々に與へた。すると老母は怒つて殘つてゐた火を二分して天に投げた。すると大きな方が太陽となり小さなものが月となつた。（ウツドラーク）

註　或老婦が體內に火を持つてゐて、自分ばかり火を用ひて料理して食べるのを羨み或者がそれを盜んだ。ところが人々は忽ち火を失して恐ろしい大火となつたが、老婦は直ぐ雨を降らして悉く火を消してしまつた。その爲め折角盜んだ火の種がなくならうとしたが、幸に一匹の蛇が尻尾に火をつけたまゝ穴にもぐり込んだので、やがてそれを木に移し漸く火を得る事となつた。今でもその木は我が族の「トーテム」として崇敬してゐる。（マッシム族）（火項參照）

火の話

昔此の世には火がなかつたが、或日海中の孤島から立ち騰る煙を見た。それで種々の動物を遣つて火を取らしたが皆失敗し、最後に犬が持つて來た。（英領ニューギネア）

若返り法

古人は死ぬやうな事がなく、いつも若々しかつた。それは蛇や蟹のやうに古い皮を脫ぎ棄て〻若返るからであつた。或日老婦が河に行つて萎びた皮を剝ぎ去りそれを流れに棄て〻おいて家に歸つて來た。ところが子等は余りに若くなつた母を何うしても信ずる事が出來ないで追ひ出してしまつた。母は惘れ果てこれは却つて不便だとて、再び河邊に戾つて來ると、幸に舊い皮が杙に止まつてゐたからそれを纏つて漸く家に入る事が出來た。併しそれ以來人々は古い皮を脫いて若返る事を廢めてから、壽命も短くなつた。（バンクス）

食人鬼の話

或所に食人鬼が現れて人を取つて食つたので、村人等は姙婦タムスばかりを殘して皆他の島に逭げだ。タムスも實は一緒に逃げようとして船まで行つたが、村人は身重なのを嫌つて何うしても乘せて吳れなかつた。仕方がないので一人心細く殘つてゐるうちに首尾よく男兒を產んだ。子供はめき〳〵成長したが、或日母は其の子を殘したまま外出した。するとその留守に子供は「ドラカエナ」といふ木で人形を造り友として遊んでゐた。母が歸つて來ると內から頻りに話し聲がする。若しか恐ろしい鬼ではないかと覗いて見ると子供は實に嬉しさうに遊んでゐるのであつた。それからは家庭も賑やかになつて少しも寂寥を感じなくなつた。其後間もなく彼等は食人鬼を殺して先きに島を逃れた人々に知らせた。村人は喜んで歸り住まうとするのをタムスの子は拒んだ。併し村人等が前非を悔いて罪を謝したから上陸を許し島內平和に暮す事が出來た。（ニユーブリテン）

羽衣傳說

昔美しい天女の群が天降つて淸らかな池水を浴びてゐた。タガロといふ男がそれを見てそつと一つの羽衣を持ち去り家の柱の下に隱した。そして池の側に來て見ると天女は皆飛び去つてしまひ、羽衣の無い天女ばかりが一人淋しく佇んでゐた。タガロは

天女を叻り連れ歸つて妻とした。

或日タガロは畑の草取を命じた。天女は草を取りながらヤム（芋）の蔓にさはつたので芋が引つぱられて來た。すると側にゐたタガロの兄弟等は「ヤム」がまだ成熟せないのを取るのだと見誤つてひどく天女を叱つた。天女は余りに悲しくて家に歸り柱の所に蹲つて泣いて泣いて、泣き崩れた。すると涙のために土が掘れて羽衣が現れたから、天女はそれを纏つて天上した。

タガロの歸つた時には妻も子も既に居らなかつた。そこで雲の梯を造つて妻の跡を追はうとしてゐると天から「バニアン」の根が下つて來た。タガロはそれを傳つて天に昇り妻子を連れて再び下界に降らうとした。ところが妻は斧で其の根を斬つたので夫は下に落ち、天女と其子は再び天に昇つてしまつた。（ニューヘブリデス）

女護島

或日一人の男が鳩を捕へようとて木に罠をかけた。すると間もなく一羽の鳥がかゝつたから捕へようとすると、鳥は罠を外し海を越えて逃げた。男は小船に乘つて鳥の跡

を追つた。晝夜漕ぎ續けてゐたが翌朝になると不思議な島が横はつてゐるのを見た。

鳥は此の島の木に止つたから男はその側に行つた。すると人の足音がするので急いで木に攀登つた。此の時男は木の下に洌しい泉がある事に氣付いた。木はその上に蔽ひかぶさつて涼しい陰をつくつてゐたのである。やがて一人の娘が泉に來たが水に映つた影から木の上にゐる男を見つけた。それで娘は水汲みに來る友達の近づく事を怖れ、手桶を取つては汲んで渡してやつた。そして全部汲み終つた時、娘は日覆を其處に置き忘れて友達と連れ立つて行つた。暫くすると彼女は「妾は日覆を泉に殘して來たから皆樣一足先きに歸つて下さい」とて引返して來た。娘は初めて男と言ひ交した。そして竊に自分の家に連れ戻つた。島内にはこれまで男といふものはなかつたから、婦人は皆龜と契つてゐたのである。ところがやがて此の女が分娩した事から遂に男のある事が判つた。すると他の女等も皆一人の男に性交を迫つたので、男はどうしても逃げ出さなければならぬと決心し、遂に首尾よく船に乘つて故郷に歸つた。ところが永らく空閨を守つてゐた妻は既に亡き人と思つて墓まで造つてゐたのに夫は多くの女と

契つてゐた事を知ると、一時に赫として遂に夫を打殺してしまつた。（ニューブリテン）

鼠と水雞

或日鼠と水雞が「カリガ」樹の實が甘さうに熟してゐるのを見つけた。そこで鼠が攀ぢて實を取り水雞がそれを拾ふ事とした。ところが鼠はうまいものを皆食つてしまひ下には石を落した。水雞は「おい一つ呉れんか」と怒鳴つた。鼠は「それやるぞ」といひさま水雞の頭を目がけて投げつけた。水雞はさすがに腹を立て鼠の下りて來た時、「ドラカエナ」の葉を臀にぶつつけた。それがくつついて尾となつた。そして水雞の頭の赤いのは「カリガ」の實が潰れてついた爲めである。（バンクス）

タガロとメラグブト

或時タガロはメラグブトを殺さうと企てた。そこでメラグブトに「サア御互に家を建てようではないか。」といつた。家は建てられた。併しタガロは計畫があつたので床下に深い穴を掘り、其上を葉と土とで蔽つておいた。それからメラクブトを呼びかけて「サア來い、俺の家に火をつけて見い、俺も妻子も皆燒け死んでしまつたら汝は島

の王樣だぞ。」メラグブトは直ぐ火をつけた。家は恐ろしい火勢に燒けて行くのであつた。タガロは妻子を連れて穴の中に入つた。やがて火の靜つた時に出て灰の中に蹲つてゐた。メラグブトは「ドリヤ料理が既に出來たゞらう、アハヽ」といひながら燒跡に行つて見た。するとタガロの家族は平氣で坐つてゐる。不思議でたまらないから、「何うして逃れたのか」と尋ねると「ナニ火は上方にばかり燃えてちつとも我等を害せなかつた」と笑つてゐた。そこで今度はメラグブトの家に火をつけた。メラグブトは燒け死なうとして「どうか許して呉れ、俺には耐へられない」といつたが、タガロは「ナニ少し辛抱しろ、今に火は消えるよ、今暫くだ。」といつて救はなかつた。あはれなメラグブトは遂に燒け死んでしまつた。（バンクス）

オーストラリア

人類の始祖

最初に現はれた人間は女であつた。男は人の形か他の動物の姿で地中から生れ出

た。そして婦人と婚つて子孫を殘したのである。

太陽の話

昔太陽は晝夜の區別なく運行して少しの間も沒する事がなかつたので、人々は疲れ果て働く元氣もなくなつた。造化の神はこれを見て憐れに思ひ、日の半は沒するやうに命じた。それから夜といふ安息の時が出來たのである。

月の話

昔或男が楯の中に月を入れて運び洞穴の中にそつと隱しておいた。或夜他の男が來て見ると地上に大きな光があるのを發見し、「不思議〳〵」、と叫びつゝ其楯を拾ひ上げて逃げ出した。後から追かけたが恐しい捷い男で及ばなかつた。それで、「月よ天に昇れ」と大聲に叫んだから月は高く天に昇つて今に大空に麗つてゐる。

月は男であつてもと地中から生れ出た。或時あちこち彷徨つてゐたが女の足跡を見つけたから、それを跟けて行くと美しい女に會つた。そこで睦じく語らつてゐた時、

鷹が火を失したので、二人は忽ち猛火に取卷かれ、女は燒け死んだ。すると月男は自分の血脈を切開いて血を出し女の上に注ぐと女は蘇生した。今、月の中に見えるのはその情人なのである。

火の話

雷が落ちて枯草を燒きカンガローを焦したので、或婦人は燒木を得べく遣された。ところが過つて其の火を消したから、更に火を見付けるために送られた。併し何處を歩いても火は見つからないので腹立たしさの餘り持つてゐた二本の棒を強く擦つた。すると火が出たので、始めて發火の秘密を知つた。

註　火はもと蛇の體中にあつたともいふ。

死の話

或夜月が出てゐると五六人が流を渉つてゐるのを見た。そこで月は彼等に犬を持ち運べと命じた。犬といふのは實は恐ろしい蛇だつたので人々は驚いていやだと應へた。

月は「若し汝等が俺の言ふ事を守つたなら、人々は丁度木片が水上に浮ぶ如くに死の

海に沈む事はないが、何うしても拒むなら永久に死んでしまひ、恰も水中に石を投げたやうに再び浮び出る事は出來なくなるぞ」と敎へた。併し人々は尙も拒んで云つた。「我等はいやだ、汝の犬が怖い」と。月はそれを聞いて大いに怒り「よし、此の石のやうになれ」とて石を水に投げ込んで去つた。この事があつてから人間は死亡して二度と歸らぬやうになつた。（ニユーサウスウエールス）

七少女

昔一人の男が餘り友達に虐められるので、到頭村を逃げだして何處ともなく彷徨つた。そして或處に行くと七人の少女が居つたから、男はその中の二人を妻として其處に住んだ。或日妻に松の皮を採つて來いと命じたが妻は拒んだ。併し夫は尙も無理に云ひつけるので妻は已むなく斧を松に加へた。すると松樹は急に大きくなつて天に達した。二人の妻は先きの五人の少女と共にその松を傳つて天に昇り星となつた。（ニユーサウスウエールス）

熊の孤兒

熊が小さな時に孤兒となつたので或人に養はれる事となつた。ところが養育を賴まれた人は一向に熊の面倒を見てやらなかつた。狩に出る時でも一滴の水さへ與へておかないので、熊もほと〱弱つてゐた。或日もかうして狩に出たのだが、水道具を片づける事を忘れておいた。熊は今日こそ復讐してやらうと思ひ、水道具をすつかり木の枝にかけ、淸らかな流を汲み悉して木に登つてゐた。すると木は急に伸びて高くなつた。人々は狩獵に疲れて歸り、早速渴を醫さうとすると水道具はない、川に出かけると水は涸れて一滴もない。不思議に思つて四方を見渡すと、熊が高い木の上で甘さうに水を飲んでゐる。下りて來いといつても水を吳れといつても一向取合はないから、二人の男が木に攀ぢ登つて行くと熊は水をかけて殺してしまつた。そこでブンゼルの子で勇敢な兄弟が大いに怒り、猿の如くす早く攀ぢるかと見ると忽ち熊を打つて骨を碎いてしまつた。併し熊は死なないで他の木に逃げ登つた。二勇士はする〱と降りてくると直ぐ水道具を隱した木を伐り倒したので、水は洌しい流れとなつて川に流れた。かくて水は再び人々の自由になつた。

ブンゼルの子は人々に戒めた、「決して熊の骨を砕いたり、熊の肉を炙る前に皮を剝いてはならぬ」と。そして此の戒めは今日まで堅く守られてゐる。若しかそれを破ると又熊に水を運ばれて苦まなければならぬと信じてゐるのである。（ピクトリア）

食人鬼

昔二人の伯父と甥とが旅行した。ところが伯父は世にも怖しい食人鬼であつて、隙を見ては食はうとした。そしていろ／＼欺いては殺さうと計つたが、甥は敏くもそれを知つて却つて兩伯父を殺してしまつた。すると彼等は天に昇つて星となつた。（ピクトリア）

或村で次第に人の數が減つて行くので不思議な事に思つてゐた。偶々一獵師が妻と共に道に迷つて歸る事が出來ずそのまゝ山に棲む事となつた。其中に村人は悉く消滅して唯此の一家族を殘すばかりとなつた。獵師は長い山住みの間に故郷が如何なつたかと思ふと懷しくてたまらなかつた。そこで屈竟な子供等が父母の村へ出發した。途中で筒を持つた老人に出遭つた。不思議な老人は若者を呼び止め「筒の中から仕

事着を取り出して呉れないか」と願つた。若者は欺かれるのを懼れて拒んだが、試みに棒を入れて見た。すると中から恐ろしい毒を持つた兩頭の蛇が現れたので、彼等若者は烈火の如く怒り、直ぐ蛇を二つに斬り、老人を殺した。少しく進むと老人のらしい小屋があつて、中には人骨が累々と積まれてあつた。恐ろしさに思はず避易ぐと優しい聲で呼ぶものがある。清澄鏡のやうな湖水の畔に蓊欝とした大木があつて、その木の洞の中に嬋妍かな美人が媚びるやうに招いてゐるのであつた。併し若者等はよくよく見ると、湖水の中には人の屍が無數に輾つてゐるので、やはり食人鬼である事を知り、容易に近付かうとはせず皆々木に登つてしまつた。そして隙を見て女を湖水に突き落したから彼女も溺死してしまつた。村人の次第に減少した事が漸く判つたのである。

インドネシア

創世話

太古此の世は洋々とした海ばかりであつた。そして其の海の眞直中に小さな岩があつていつも海水に洗はれてゐた。或時その岩から一羽の鶴が生れたが、生れ出ようとしてかいた鶴の汗から化生した神がある。ルミムウトといふ女神である。鶴は女神に世界を造る事を勸めた。そこで女神は本土(發祥の地)から二握りの土を取つて來て岩の上に擴げると世界が出來た。そこで更に本土から木や草の種を持つて來て植ゑつけた。國土が出來たので女神は山に登り、喜んで國原を眺めてゐると涼風が肌を吹いた。すると女神は孕んで男子を生んだ。男の子が成長した時妻を娶るやうに勸めたから、子は四方に妻覓ぎしたが誰一人見當らなかつた。そこで女神は自分の身長と同じ長さの棒を子供に與へ、「この棒より少しく低い女を探せ、それが汝の妻だ。」といつて左右に別れた。

再び邂逅ふまでには隨分諸所を歩いた。そして男は先づ婦人の側に棒を樹てゝみた。棒はその女の丈よりも稍高かつた。それは棒が知らぬ間に延びてゐたからである。男は姿の變つた母を無論それとは知らない、そして身長まで母の告げた通りなので、これこそ自分の妻だと信じて結婚した。そして間もなく多數の子女を擧げた。』

混沌の初めには只海と天ばかりであつた。或時天から大きな岩が海に落ちたが、その岩に太陽の光線が當ると中から蟲が匍ひ出た。それから漸次岩の上に土が出來て來た。すると太陽から木製の劍の柄が落ち、其の柄から根が生えて忽ち大樹となつた。ところへ月から蔓が落ちて來て樹に絡まつた。かくて木と蔓との接合の結果男女が生れた。この二人がカヤン族の祖先となつたのである。(中央ボルネオ)

註 大昔の事、風が海上を吹いてゐると忽ち大浪が起つて岸を打つた。その時出來た泡沫に太陽の暖かい光が當ると中から男兒が現れた。此の男がやがて成年となり海岸を徘徊してゐた時一人の女が岩の上に踞つてゐるのを見た。女は岩の中から產れたのである。二人は人類最初の夫婦となつた。(セレベス)

昔ウィニアといふ女が木から生れた。偶々何處からか一人の男が現はれて漁りの爲めに衣を脫いだ。女は可笑しくて笑ひ出した。氣がついて見上げると木の上に女がゐた。二人は直ぐ結婚して夥多の子女を產んだ。(ゴロム)

人は木の實から生れ出た。(ウエタール)

昔二本の竹が流れて來たのを烏がつゝいた。すると一本の方から男が出で、他の方からは女が生れた。(タガログ)

昔或鳥が小川の上流と下流に卵を生んでおいた。するとその卵から女と男とが現れた。下流に生れた男が或日沐浴してゐると長い髮の毛が流れて來て脚にからまつた。漸く岸に上つた男はその毛髮を取り除き持主を探す爲めに溯り途に女を見出して婚つた。（フイリツピン）

羽翼のない鳥のやうなものが空から落ちて來たが、そのものから男が生れた。（スマトラ）

昔三人の兄弟と二人の姉妹が天界に棲んでゐた。或日末子のパルパラが漁に出かけて釣針を失つた。それは兄ヒアから無理に賴んで借りたものであつたから、兄は非常に怒つて是非見つけて返せといつて聽かない。弟はあちこち懸命に探したが何うしても見當らなかつた。當惑して濱邊をさ迷つてゐると一匹の魚に出遇つたが、其魚は事情を聞いて大さう同情し屹度針を探してやらうと親切にいつて呉れた。魚は海中を泳ぎ廻つてゐる中に、何か咽喉にひつかけて苦んでゐる魚のあるのを見て早速パルパラに知らせた。見ると失つた針だつたので、喜んでそれを取り兄に返した。併し弟は餘りに兄の無情なのを憎み復讐してやらうと決心した。そこで酒を竹筒に入れて兄の床の上に吊しておいた。すると兄は起き上る時頭を觸れてすつかり酒をこぼしてしまつた。弟はさあ大事の酒を返して下さいと迫つたから、兄も仕方なくこぼれた酒を掻き

集めてゐると天界に穴が出來た。不思議に思つて其穴から覗くと下界に何かあるらしい。そこで兄弟等は長い綱に犬を結びつけて下ろして見たが、暫くして引き上げると足に白い砂がついてゐた。そこで下界に降らうと謀つたが多くの人々は拒んだから、結局彼等の兄弟ばかりが四匹の犬を連れて綱を傳はり下る事となつた。末の妹も同じく綱を傳つてゐたのだが、早く下り立つた兄が上を仰いたのが耻しくて頻りと綱を振つた。天界の人々は綱を上げる合圖と思ひたぐり上げたから、下界に達したものは兄弟三人と一人の妹である。此の男女こそ世界人類の始祖なのであつた。（ケイ）

太陽と月は夫婦であつて多くの子を産んだが、其後夫婦喧嘩して月は夫の太陽から逃げた。すると子供等は死んでしまつたので、月は其の屍體を集めて細斷して水中に投げると皆魚となつて泳ぎ出した。そして陸に落ちたものは蛇と獸となり上に跳ねたものは星となつた。（ミンダナオ）

昔天女と人間との間に産れた子を二つに斬つて天女は其の半分を持つて天に歸つた。夫は他の半分を持つて地に止まつたが、とても二分した子供を活かす事が出來ず

に腐らしてしまつた。それを聞いた天女は再び降つて來て土地から種々の草木や鳥獸を造つた。（フイリツピン）

昔天地は接近してゐたが、或時一婦人が米を搗かうとして杵をふり上げる機みに天を強く打つた。すると天は高く昇つた。（ミンダナオ）

註　昔天は非常に低くて地上に蔽ひかぶさつてゐた。そして太陽は七つもあつて灼けさうだつたので六つの太陽は殺されてしまつた。（北ボルネオ）　同島内には此の話が廣く傳つてゐる。

月中の黑影

昔獵師が美しい白猫を飼つてゐた。或日ココナツトの殼で食物をやると猫は孕んで美しい少女を産んだ。そこで獵師は自分の子として愛育した。丁度その娘が七つになつた時獵師は妻を迎へた。ところが妻は非常に少女を惡み虐待するので獵師は山に出かける時には、必ず娘と猫を可愛がつて呉れといつて行くのであつた。併し妻は少しも勞つてやらないで、灰を入れた飯を食べさせるから、とう〳〵猫と少女は家出して

しまつた。

獵師は心配して探しに行くと小川のほとりで猫の歌を聽いた。

うーまい〳〵ノエノツクの實。ノエノツクの木の實、繼母の呉れる飯（まゝ）よか、よつぽど美味い。繼母のお飯は、灰だらけの不味い飯。

娘は猫を膝に載せたまゝ高い木の頂に登つてゐる。父は聲かぎり呼んだが娘は降りて來ない。そこで獵師はその木を攀ぢた。すると木は次第に伸びて、遂に月にとゞく位になつた。その時お月樣から金の梯子が下つて來たので、少女と猫とは月の中に入つた。追ひ縋つた父も共にと思つたが梯子に屆かないで地に落ちて死んでしまつた。其時から滿月の夜には紡車の側に踞つてゐる娘と猫を見るやうになつた。

洪水の話

昔カビガトといふ男があつた。ウイガンの息子で天界に住んでゐたのだが、或時犬を連れて下界に降り狩をした。其の頃下界は山岳もなく全く平坦なものであつた。カビガトは天から持つて來た長い布で河口を塞き止め、雨の神に賴んで三日三夜大雨を降

らした。すると下界はみる〳〵大洪水を起したから、雨の神は先に水の落口を塞いた栓を除らせた。それで水は一時にドット流れ落ちたから、今日のやうな山谷が出來た。

それからボンガボン神がムンブダンといふ神を呼び土地を乾かさせた。（キヤンガン）

註　昔大洪水があつたので二人の男女ウイガン、ブガンは互に高山に逃れた。男はアムヤオ山に、女はカラウイタン山に逃げて危い命を助かつたのだが、こんな咄嗟の場合にブガンは火を持つて行く事を忘れなかつた。そこで夜になるとカラウイタンの峯に燃える火を見てウイガンは自分以外にも人が生き殘つてゐる事を知つた。陸が乾くとウイガンはカラウイタン山をさして旅立つた。そして兩人は非常な喜びを以て結婚した。

昔大洪水があつて一人の婦人の外悉く死んでしまつた。ところが天女が後に一男子を生み、彼の女に配して人間を生み殖さした。（マンダヤ）

火の話

洪水の頃、兄妹二人ばかりがボキス山に生存してゐた。その時ルマウイグ神が天降つて來られたから、彼等は火がない爲めに凍え死なうとしてゐる事を訴へた。神はあはれに思ひ犬と鹿とを「カラウイタン」に送つた。犬と鹿とは其處に泳ぎついて火を持

つて來たから神は犬の火を取つて兄妹を暖めてやつた。（イゴロト族）

火は最初神樣から授けられたが、其後過つて消してしまつた。そこでタンボエジヤといふ者を天にやつて火を貰せた。天の人々は「火はやるが、我等の火を造る間は目を蔽つてゐて決して見てはならぬ」といつた。併し下界の人々には腋の下にも目があつたので首尾よく其術を會得する事が出來た。そして彼が下界に歸つた時、燧石と鐵とを強くうちつけて發火する法を傳へた。（中央セレベス）

註　或日一人の男が犬を連れて森に入つたが、驟雨に濡れて慄へてゐた。ところが犬は籐蔓に體を擦りつけて温を取るのを見て、自分も一本の棒を籐蔓に擦りつけると發火して燃え出した。偶々食物が火の側に落ちて燒けたのを食べたが嘗てない美味だつた。それ以來人々は火食の法を知つた。（ダヤク）

猿と鱶

或時猿が溺れようとする時鱶が現れて食べようとした。猿は驚いて「俺には肉も臟腑もないぞ」というた。何處に置いたのかと聞くと、「海岸に置き忘れて來た、若し岸まで運んで吳れるなら取つて來てやらう。」そこで鱶は猿を脊に載せて對岸に連れて行

つた。猿は飛び下りて、「暫く待つてゐよ、やがて取つて來るから」とい捨ひてゝさつさと逃げてしまつた。恰度その時潮が退いたので哀れな鱶は死んでしまつた。（サンガー）

猿と青鷺

昔猿と青鷺とは友達だつた。或時お互に虱を取らうとて、先青鷺が猿のを取り猿が次に青鷺のを取る時になつて、狡猾な猿は羽を一本づゝ拔き取つた。青鷺が變に思つて、何うしてゐるのだと問うても、いくら取つても取つても虱がゐると應へながら、遂にすつかり拔き取つてしまひ、さあ鷺よ飛んで見よといつてさつさと逃げてしまつた。途中で別の青鷺に遭つたが、猿の惡戯の報復をしてやらうと思ひ、猿を欺いて海の向うに甘い苺があるから取りに行かうと勸めた、そして木の葉を集めて舟を造りそれに乘つて出かけた。丁度陸も見えない程離れた時、青鷺は舟に穴をあけたから猿は海に溺れ死んだ。青鷺は空を翔りながら友の仇をとつた事を喜んだ。

猿と龜

昔猿と龜とが互にバナナを植ゐた。猿は海岸を選び龜は陸を選んだ、ところが猿の

植ゐた方は鹽水のために枯れたが、龜の植ゐたのは次第に成長して見事なバナナをつけた。丁度その熟した頃に猿がやつて來てバナナを取つてやらうとて早速攀ぢ登つた。ところが猿は自分ばかり食つて皮一つ龜に落してやらないので、龜は怒つて竹を尖らしてバナナの樹の下に立てゝおいた。すると十分慾ばつて食つた猿が飛び下りた時グサリと竹串に刺つて死んでしまつた。

註　此の話はインドネシヤの各地に廣く傳へられてゐるメラネシアにもある。龜の方のアクティヴな話は次のやうである。

或日龜が猿を欺して殺してしまひ、其の髮を拔き取つて煙草を造り、骨からは石灰を取つて檳榔子を咬む時の料とし、肉は乾肉に血は酒とした。間もなく猿の仲間が友を探しに來たから、龜は猿共の問には答へないで家に招いて檳榔や酒を饗した。「この酒は少し赤いね」、「いや何に一寸染料が混つたのだ」。こんな問答が交されて猿の仲間は檳榔子まで咬んで歸つて行かうとする時、獨言に、「汝等は友達の血を飲み骨を咬ん

だのだね」といふのを聞き咎めたから、龜は「何でもないこちらの事だ、雨が降りさうだから早く歸つたがいゝよ、本當に滑稽だ、あつはつは。」と笑つた。猿は非常に怒つて龜を追つかけた。そして潰さうとすると、龜はわざ笑ひ「いつか兩親が自分を潰さうとしたが潰れなかつた」といふので、「それぢや燒き殺さうか」と威すと、龜は又落付いて「よせ〳〵燒けるものか、俺の兩親がやはりそんな恐をやつたが駄目だつた」。焦慮つた猿共は「よしそれぢや海の中に投げ込んでやれ」といふと龜はしく〳〵泣き出した。そして龜は撮み上げられて海に投げられた。浮び上つた龜は笑ひながら「こゝが俺の故郷だ、さようならお猿さん」といつて泳ぎ去つた。猿共は癪に觸つてたまらないので水牛を賴んで海の水を飲み乾さしたが、龜は蟹に向つて「ココナット」の熟した實をやるから水牛の腹を嚙んで吳れんか」と賴んだので、蟹は首尾よく水牛の腹を嚙み破つた。すると水が一時に出たので木に登つてゐた一匹の猿を除いて悉く溺死した。今の猿は生き殘つた者の子孫である。

註 或男が猿を欺いていふやう、「自分は此の竹筒の中に這入るからその上を葉で包んで火に炙つて見よ」するさ猿は面白がつて竹筒を蔽ふ葉を取りに行つた間に其の男は側の木に攀ぢ登つてしまつた。猿は頻りに竹筒を火に炙つた。そして人間の料理が出來たさ喜んでそれを載せる爲めの葉を取つてゐる暇に又こつそり筒の中に入つた。猿が歸つて來て筒を傾けるさ中から笑ひながら出て來た。猿は吃驚しゐたがやがて自分で竹筒の中に入つた。男は早速口を堅く塞めて火にのせた。そして悲鳴を上げて救を求めてゐるのを外で笑つてゐた。さう〳〵猿の蒸燒が出來たのである。』

或日猿が海岸に出かけた時、大きな貝を見つけたから肉を取らうさして手をさし入れるさ、貝は忽ち閉ぢて猿の手はち切れた。

首狩の話

或日卵、蛇、百足、蟻、糞共が首狩に出かけた。敵の家に着いた時先づ卵が仲間の者を配置した。―百足は床の下に、蟻は水瓶に、糞は梯子の頂に、蛇は戶の側に、そして卵は料理壺の中に―。夜中になつて百足が敵を咬んだ。すると敵は驚いて火を點けるために炊事場に行くと、壺の中から卵が顔に飛びついた。目が見えなくなつた敵はいよ〳〵慌てゝ水瓶の中で顔を洗はうとすると蟻がチクリと螫した。そこで叶はぬと梯子の所に逃げて行くと糞に辷つて轉げた。其の時蛇が現れて遂に敵を咬み殺してし

まつた。

註　猿蟹合戰と比べて欲しい。

蟹の話

或時一婦人が七匹の蟹を生んだので川に投げ捨てた。ところが蟹は岸に上つて家を建てゝ棲んだ。或日彼等が水浴するために皆殼を脱いで人の形となつた。丁度その時七人の男がやつて來て其殼を盜んでしまつたから、蟹はもとの姿には還れなかつた。そこで男等は美しい女だと思つて結婚した。（中央セレベス、トラジヤ）

天女

或日一人の寡婦が木の下で嬰兒を拾つて育てると、成長の後弓の名人となつた。或日も鳥を追うて森の中に入ると、其處に美しい池があつて天女が沐浴してゐるのを見た。そこで羽衣を隱して一人の天女を止め遂に婚した。天女の妻は僅かの材料から有ゆる珍味を整へて夫に侑めるから、或日夫はそつと飯櫃を覗いた。併し中には只少しばかりの米と湯があつて、何の不思議もなかつた。天女の妻が歸つて來てそれと氣付いたが、その時から魔力を失つて米も增えず珍味も出なくなつた。それから間もなく夫の隱した羽衣が見つかつたから、天女は「若しも子供が泣く時は藁をお焚きなさい、きつと天降つて來て乳を飲ましますから」といふのを名殘に昇天した。子供は後に天女の如く麗しい人となつた。（ジヤバ）

猪と契る

或所で猪が畑を荒すので番をしてゐると、夜半頃一匹の猪がやつて來たから早速槍を投げた。猪は傷きながら逃げて行くので番人は何處までもと追つて行くうちに或大岩の裂目に這入つた。そこは猪の住居だつたが餘り苦しむのを憐み殺す事はせず、そのまゝ地中に止つてしまつた。そして暫く牝猪に戯れてゐたがやはり地上が戀しくて歸つて來た。それつきり猪は姿を見せなくなつた。（ガレラ）

地中の王

昔或所に七人兄弟が住んでゐた。或時猪の肉を乾してゐると、不意に一人の男がや

つて來てそれを盜んだ。兄弟は非常に怒つて盜人の跡を追ふと地中の穴に這入つてしまつた。暗いとて六人の兄は戻つて來たが、末弟が一人入つて行つた。すると次第に明くなつて美しい都がある。そしてよく見ると王樣が槍に傷ついて苦しんでゐる。それがさつきの肉泥棒なので、男は其の王を殺して地上に出ようとすると、美しい七少女に遇つた。そこでその美人を招き地上に連れて來て兄弟等の妻とした。（セレベス）

註　昔一人の男が闇夜に螢に導かれて七人目の娘と婚つた。（セルンガル）
或家に七人の娘があつたが、蜥蜴が其末女と婚したので姉等に嫉まれた。

蜂の美女

或男が山に行つて蜜蜂の巢を取つて來た。その翌くる日仕事から歸つて來ると、食事の準備が整つてゐる。不思議だ、誰がやつて吳れたのかしらとて、次の日はそつと窺つてゐた。すると蜂が巢をぬけ出で美女となつて炊事してゐる。男は嬉しくて其女と婚した。併し決して蜂だと云つて下さるなと願つた。夫は堅く誓つたのだが或日村の宴會で醉うたまぎれにつひ口を辷らした。妻はやがて何處にか去つてしまつた。（ボルネオ）

食人鬼

或日兄弟等が漁に出た後で妹が唯一人機を織つてゐた。そこへ食人鬼が現れて女を掠つて行かうとするから、妹は足の指に絲を結びつけて長く引いて行つた。兄弟が歸つて來た時には妹が居らなかつたが、絲をつけて行くとバケの家に着いた。幸ひ鬼のバケが居らなかつたから監禁されてゐた妹を救ひ出しておき、再びバケの家に引返した。其の時バケの娘のギナバイが戻つてゐたので、早速斬り殺し其の肉でいろ〳〵の料理をし、髮の毛から虱を取り出し、若しバケが歸つて來たらギナバイの代りに返事してくれと賴んでおいた。

　バケの家族が歸つて來て御馳走を食べたが指の切端が出たので、ギナバイが殺されたのかしらと思つた。すると屋根の上の鳥が「イナグイバケは自分の娘を食つた」と頻りに啼く。ギナバイの兄弟等は妹を呼んだ。返答はするが一向出て來ないから、よく

探すと虱が頻りに返事してゐるのであつた。そこで虱を細斷してしまひ、屹度さつきの娘の兄弟の仕業に違ひないとて、鬼の家族は大急ぎで追跡した。そして丁度橋を渡らうとすると、橋の柱を斬つて落ちるやうにしてあつたから鬼共は皆溺れて死んでしまつた。

孤兒の話

或所に三人姉妹の孤兒があつて心細い生活を續けてゐたが、或日畑で「ケケホ」といふ鳥を捕へて來た。するとその鳥が頻りに籠から出して吳れと啼くので出してやると、姉妹で食べきれぬ程の食物を陳べて吳れた。姉妹等は食べ殘すのが勿體ないとて、「鳥さん〳〵どうぞお米で下さい」といつた。鳥はそれから毎日米を出してやつたから孤兒たちは數年の中に大變な富裕となつた。それを聞いた叔父がその珍らしい鳥を借りた。併し一向米を出さぬのを怒つて其鳥を殺して食つてしまつた。そこで孤兒達はせめて骨でもとて家の側に埋めた。ところが間もなく不思議な樹が生えた。葉は絹で花は耳環で、其の實は琴のやうに美音を發した。姉妹は何不自由なく愉快に暮す事が出來た。

印度支那

壽命の話

或所にアパンキトロクといふ翁があつた。彼は九回老いて九回若返るといふ所謂不老の者であつた。尤もその頃は彼に限らず誰でもさうであつた。或日河狩に行くと栗鼠や猿が水に溺れてゐる。それは木の上で居睡つたから水中に落ちたのである。これを見た翁は惡戲せずには居られなかつた。そこで栗鼠や猿を拾ひ上げ竹籠の中に入れ布を被せて恰度自分が死んだやうに裝つて置いた。隣の人はそれを見て、慥にアパンキトロクが死んだ事と思ひ、集つて葬式をしようとした。それを聞いた太陽は「アパンキトロクは本當に死んだのかしら、未だ亡靈が此所に飛んで來ないが」といひながら生命の綱を調べて見たが、やはり彼の綱はまだ切れて居らぬ。怪しんで使者を遣して調べると彼の惡戲だといふ事が判つた。そこで太陽は大いに怒りこんな惡戲者を生してはおけないとて生命の綱を「プツリ」と切つてしまつた。其の時から人の壽命が短く

なつたのである。（印度支那）

昔は人々の死といふ事を聞かなかつたので此世はさながら樂園のやうであつた。ところが或時籾のない米を食べたから、食慾が俄に進んで身體が重くなつてしまひ、一度眠るとそれつきり覺めないで、永久に樂園に歸る事が出來なくなつた。（緬甸）

龍女傳説

昔ナウングプトといふ湖の畔に老夫婦が住んでゐた。其の子はクンァイといふ血氣盛りの男だつた。或日牧場に出て家畜を見張つてゐると湖の中から美しい女が現れて馴々しく話しかけたのでクンァイは遂に女と契つた。かくて數月の後美女が孕んだが、或日夫に向ひ「妾は最早此所に止る事が出來なくなつた。本國に歸る時が來たのです」といつたので、男も悲しく思ひ「どうぞ何時までもゐて呉れ」と願つた。併し女は一箇の卵を夫に渡して「これが妾共の子です、きつと男の子ですから大切に護つて下さい、そして若しか危險な事があると手で地上を三度打つて下さい、きつとお助け申します」とて名殘を惜む夫を殘して本國に立去つた。

其後間もなく卵から美しい男子が現れたのでタン、トゥンカムと名づけて可愛がつた。子供が十五六歳になつた時、其國の皇女パッパッデがも早十五歳になつて婿君を探された。皇女は名高い美人だつたので需めに應ずる者が多かつた。そこで父王は布令を出された。「皇女の宮殿は湖水の眞中にある、それで橋も舟も筏も用ひず、しかも靴を濡さずに渡るものに姫を許さう」と。クントゥンカムは喜んで我こそ姫を得ようとて勇んで都をさして出發した。着いて見ると數百の若者が空しく湖邊に群つてゐた。丁度夕嵐が湖面を吹いて美しい姫の宮殿は百千の龍燈をつけた龍宮城のやうに見えた。クントゥンカムは出發の時父に敎へられた通り手で三度地面を打つた。その時早く母のナガは現れて己が身を長く伸した若者は感謝しながらその橋を渡つた。そして合圖の鐘を鳴らして皇女に遇つた。彼は首尾よく國王の婿君となつた。

蛇の卵

或男が蛇と交つた。蛇は三個の卵を産んだが、その一つはブハモに流れて或園丁に拾はれ、一つはパガンに流れて洗濯人に拾はれた。洗濯人は其卵を金の壺に入れてし

まつて置いた。すると間もなく孵化して一人の男の兒となつた。そして成長の後パガンの王となつた。他の卵は壞れて種々の珍らしい石となつた。

註　龍蛇傳說、洪水傳說を初めとし、創世神話や、動植物に關する說話に至るまで、生蕃國は勿論、我國の神話傳說に比較すべきものが多い。若し系統を辿り類似を趁ふならば、閩粵雲貴地方、後漢書の所謂南蠻西南夷にまで入らればならないが、本年二月人類學誌上で鳥居博士が大いに學者硏究家の注意を促された如く、それ等はやがて闡明さるべきを信じて玆に筆を擱く。

生蕃傳說集

終

大正十二年十一月十七日印刷
大正十二年十一月二十日發行

生蕃傳說集

上製定價　金五圓五十錢
並製定價　金三圓五十錢
送料　金十四錢

著者　佐山融吉
著者　大西吉壽
發行者　臺北市榮町三丁目九番地　杉田重藏
印刷者　臺北市本町二丁目十九番地　中村誠道
印刷所　臺北市榮町一丁目二十七 二十八番地　松浦屋印刷部

發行所　臺北市榮町三丁目九番地　杉田重藏書店
電話臺北九六八番
振替臺灣四七九九番

一九二三年十一月台北初版発行
一九九六年 六 月台北二刷発行

定價新台幣一〇〇〇元正

生蕃伝説集

著者　佐山融吉・大西吉寿
發行人　魏　德　文
出版者　南天書局有限公司
登記證字號：局版台業字一四三六號
發行所　南天書局有限公司
中華民國・台北市羅斯福路3段283巷14弄14號
電話(TEL)：(〇二)三六二〇一九〇
電傳(FAX)：(〇二)三六二三八三四
郵政劃撥：〇一〇八〇五三—八號
印刷者　國順印刷有限公司
板橋市中正路216巷2弄13號
電話(TEL)：(〇二)九六七七二二六

ISBN 957-638-303-X